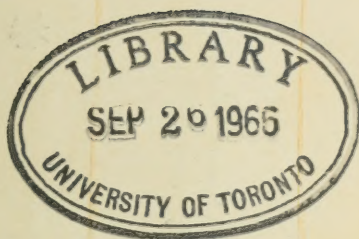
日本戲曲全集
第一卷

中古江戸狂言集

東京
春陽堂版

日本戲曲全集第一卷目次

中古江戶狂言集

傾城片岡山

市川海老蔵の左甚五郎（勝川春章筆）

傾城片岡山

三立目　堺住吉の段

役名　――穴穂部皇子。富士左京之進行俊。菅の郡領豐古。娘みそぎ。奴筆助。富士左近之助。淺間左衛門照政。奴伊達平。虫賣實は乳守の傾城藤が枝。

本舞臺、三間のうち橋掛りへかけて、一面に堺住吉の境内。松の並木の中に反橋を見せ、此處彼處に望みの石燈籠澤山に釣り附け、幕の内より穴穂部皇子、黑仕立の忍びの形にて、熊の百日の上へ頭巾を着て、口に藁人形をくはへ、神主を執り殺して居る。神主白丁の形にて烏帽子をかぶり、願書を持ちながら、皇子に執られて居る。神樂にて幕明ける。

ト思ひの儘に執り殺して、死骸を片附け、藁人形を戴き、四邊りを見て

穴穂　當社住吉の神社は、祭る所の神四社、□□□中筒、をうわつゝを神宮皇后にて渡らせ給ふ。既に忠孝を以て智慧とすと託宣ありしと聞き傳ふ。今人皇の三十二代、用明天皇の御宇に當つて、麿、皇子とは生れながら、弟宮として南面の德を修め得ず、口惜しき月日を送る事、偏へに甥の聖德太子仁義を守る、愈々麿は無きが如し。この無念やむ事なく思ひ立つたる大望、兄宮用明天皇を弑し奉り、聖德太子を調伏なして、一天の君と仰がれん事、須臾の間を期すべきや。アラ〱、心よやなア。

呼び　富士左京之進行俊參詣。

ト呼ぶ。本神樂になり、穴穂部皇子屹と思ひ入れして、藁人形を白木の箱の中へ入れ、顏を隱して忍ぶ。花道より若い衆、箱提灯に大の字（演者友右衛門が替紋）を付け持つて、後より左京之進、白髮の散髮にて法眼袴を穿き、八德を着て大小差し出て來り、花道の中にて皇子を見附け、キツと思ひ入れして、それよりツカツカと本舞臺へ來て、皇子を押返へし、立廻りありて

侍　動くな。

脇差の鐺をきつととめる。

左京　ハテ、合點の行かぬ立振舞。怪しき箱を携へて、御

階の下に窺ひ寄る曲者、詮議があるぞ動くな。斯ういふ某は、物部の家臣、富士左京之進行俊、其分には捨て置かれぬ。「□やうに身の上を白狀せい。

穴穗　白狀とは身に覺えある者の事。拙者は御覽の通り、田夫野人の卑しき者、御詮議に遭ひますやうな、怪しき者ではござりませぬ。

左京　おのれが口から、怪しき者で無いとは、それが則ち曲者の證據、なにゝもせよ、某が目に止まつたる其上は一寸改めて見せて行け。

穴穗　なんの仔細もない此箱、御覽に入り易けれども、間取りましてはなりはひの邪魔、御用捨にあづかりませう。

左京　見せともながるその箱、家來ども詮議せい。

皆々　ハッ。

ト立ち懸り、

動くな。

ト兩方より穴穗部皇子を取り卷く、皇子立廻りにて大勢を投げ退ける。そのうちに左京之進、皇子の脾腹を當てる。ウンとたじろぐ内、箱を取り上げ見ようとする左京之進を留める、左京之進、皇子が頭巾へ手を掛けて顏を見てビックリして

左京　ヤ、あなたは穴穗部の皇子さま。

侍　イザ、お明りを。

ト提灯を差し出す。左京之進、直ぐに提灯を叩き落す。

左京　要らざる小さし出た、たはけ奴めが。思ひも寄らぬ皇子さま。○コリヤ家來ども、用事あらば呼び出さう。社務方へ參り、控へて居れ。

侍　ハア。

ト本神樂になり、皆々はいる、左京之進、皇子を引き立て、埃りを拂ひ上へ直す。皇子悠々と上へ直り、松が根に腰を掛ける。左京之進遙かさがつて、

左京　君は正しく、當今用明天皇の御弟宮、穴穗部の皇子さま。

穴穗　コレ、滅多にその名をいふまいぞ。

左京　少しも苦しうござりませぬ。拙者儀は、豫て御企てに與み仕りましたる、物部守屋が家來、富士左京之進行俊めでござりまする。存じ寄らざるこの所へ臨幸、憚りながら、その仔細を仰せ聞けられ下さりませうならば、有難う存じまする。

穴穗　スリヤ、その方が、聞き及ぶ守屋が家來、富士左京之進か。よい所で會うた、近う〳〵。
左京　ハア。
穴穗　先づ今日この所へ來る事、一方ならぬ願ひの趣き、聞きたいと願ふ行後、守屋へも告ぐるやう申し聞かせん。去りながら、事の洩れ易きは災の中立ち、他言せまいと云ふ金打。
左京　ハア〇斯くの通りでござりまする。
穴穗　出來した左京之進、ソレ、その器の內を見い。
左京　この箱の內を。
穴穗　早う〳〵。
左京　ハア。
ト蓋を開けて人形を出して、ビックリして
ヤ、、この藁人形は、聖德太子を調伏の形。
穴穗　願主は則ち、穴穗部の皇子。當社住吉の神前へ納め數日を經ずして亡き者にせんと、心を籠めたる今日の參詣、人目を忍ぶこの姿、斯くと守屋へ物語れ。
左京　委細畏まりましてござりまする。
ト花道より、菅の郡領豊古參詣と呼ぶ。
左京　ナニ、郡領豊古參詣とや。
穴穗　目に掛つては大望の妨げ。
左京　暫らくあれへ、お忍びあつて然るべう存じまする。
穴穗　ソレ。
ト左京之進、皇子を賽錢箱へ隱す。花道にて菅の郡領豊古參詣と呼ぶ。大鼓小謠にて花道より、豊古白髮散髮、八德、法眼袴にて出で來る、後よりみそぎ、衣裳補襠にて三寶に稻の初穗を載せ持つて出で來る。後より奴筆助、續き出る。
豊古　西の海、青きが原の汐路より顯はれ出でし住吉の御神、今も今とて、その靈驗著じるく、寶祚長久を守り給ふ御社。斯くいふ菅の郡領豊古、恐れ多く主人馬子大臣より仰せを承はつて今日御代參。同道なしたる娘のみそぎ、ソレ〳〵、珍らしうおぢやらうの。
みそ　アイ、父さんの仰せの通り、常に見馴れぬ淡路島山、跳めに飽かぬホンに景色でござりまするわいなア。
豊古　ソレ〳〵、時に改め申す事ではなけれども、馬子大臣よりの初穗の稻、隨分大切に神前まで持つておぢゃ。
ハイ。
豊古　方々、供せい。
ハア。

ト神樂になり本舞臺へ來る。左京之進、豊古を見て

左京　そこ許は、菅の郡領豊古どのではござらぬか。

豊古　左樣仰せらるゝそこ許は、富士左京之進行俊どのではござらぬか。

左京　左樣々々。

豊古　コレハ〳〵、行俊どの、お早い御參詣でございまするな。

左京　拙者儀は、今日主人守屋より用事につき、當社へ參詣致したので、貴殿にも馬子どのより御用などと申す事はござりまするか。

豊古　御推量の通り、主人馬子大臣より、當年の初穗奉納の爲、參詣仕りました。

左京　コレハ〳〵、お年寄の御苦勞千萬、見ますれば若い女中を御同道でござるが、貴殿の御息女でござりまするか。

豊古　左樣でござりまする、菅の次郎豊勝と申す忰は一人ござつたれども、武骨短慮なる生ひ立ち故、堂上方の奉公思ひもよらぬ事と存じ、勘當致してござれども、豫て飛騨の國より貰ひ置きましたる娘小女郎、只今の名はみそぎ、幸ひぢや、行俊どのへお近づきになりや〳〵。

みそ　ハイ、あなたさまが、承はり及びました富士左京之進行俊さまでござりまするか。私事はみそぎと申しまして、なんにも存じませぬ不調法者、お見知りなされて下されませうならば、有難う存じまする。

左京　コレハ〳〵、御器量といひ御挨拶といひ、あつぱれな御息女でござる。斯く申す富士左京なぞも、忰左近めに持たせまする嫁なども、みそぎどのゝやうなる人を、ア、、貰ひましたら存じまする。

豊古　左樣ならば、貴殿の御子息左近どのには、未だ嫁御の御相談はござりませぬな。

左京　左樣でござります。貴殿にも菅の次郎どの故に御苦勞なされたが、拙者めも一人の忰左近之助が身持ち、乳守の傾城梅ケ枝とやらに馴れ染め、主親の事をも思ひ居らぬ放埒ゆゑ、ほんにやれ、年寄の夜の目も合はぬほど苦勞になつて〇親ばか子たわけとよう申したものでござるてな。

豊古　左樣々々。子を持つて泣きをすると、不甲斐ない忰を持ち、嫁女までに苦勞を懸ける、ハ、、、、年が寄れば愚痴になり、役にも立たぬ事を申すものでござるこさ。

左京　左様々々。去りながら、拙者が心に引き比べて見ますれば、貴殿の御苦勞も。

豊古　悴の事を存ずれば、左近之助どのゝ身の上も。

左京　郡領どの。

豊古　行俊どの。

兩人　御推量下されい。

みそ　お二人さまのお心根、憚りながら御苦勞に思召すは御尤もさま。又左様ではござりますまい。左近之助さまも、豊勝さまにも、おしつけ御孝行にならるゝやうに、お心もなりますものでござりまするわいなア。それはさうと郡領さま、御下向が遲なはりましては、御前のお首尾も如何でござりまする程に、この初穂は御神前へ、納めまするでござりませう。

豊古　いかさま。時刻延引いたしては氣の毒。そなた、その品を持參なして、先づ／＼先きへ。

みそ　畏まりましてござりまする。左京之進さま。これにお出でなされませい。

トみそぎ行かうとする。薄ドロ／＼にて少し後へ寄る。思ひ入れにて、三寶の稻をはらはらとこぼす。豊古驚ろき。

豊古　ヤヽ、聖徳太子の御弟宮、豊明親王の御壽き長久の爲め、主人馬子の大臣より當社住吉へ納め給ふ、大和の國斑鳩の初穂を。みそぎ、こりやマアどうした事ぢや、どうした事おや。

トみそぎ、こぼれたる稻を取り上げて。

みそ　此のやうな事もあるものかいなア。大事に大事と身を愼み、御階の下へ立寄りし所に、俄かに足も立ち兼て思はず知らず取り落したる初穂の稻。コリヤマア、どうした事であらう。もしやは豊明親王さまお身の上に、凶事あらんとの告げなるか、但しはまた、我が身の上に難儀の掛らんとの知らせなるか。なにゝもせよ、お大切なる初穂を、此やうにせしはこの身の麁相。オヽ／＼オヽ、ハア。

ト泣き落す、左京之進すぐにみそぎを引寄せ、扇にて打擲する。

豊古　コリヤ、左京之進、拙者が娘をなんとおしやる。

左京　なんとするとは狼狽へた一言、これにて聞けば豊明親王の御壽命長久のため、御奉納なさるゝ所の初穂の稻、まつこの如くこぼせしは、取りも直さず朝敵同前。打擲したが誤りか。このよし守屋公へ申し上げ、科の

輕重は追つての事。斯様なる粗忽者、大切なる用事を申しつけられたる馬子大臣どのが、さし當つてのうつそり。言語に絶せし不屆者めが。

トみそぎを突き放す、みそぎ思ひ入れあつて、豊古が刀に手を掛けて自害せうとする。筆助つか／＼と寄つて、みそぎの手を留めて、

筆助　先づ／＼、お待ちなされませい。

みそ　イヤ／＼、永らへては言譯たたぬこの身の上。離して殺してたもいの／＼。

筆助　おせきなされまするな、みそぎさま。血をあやしては神前の汚れ、御自害なされては後々までも、郡領さまのお身の上に禁庭よりお咎めが掛りませうか、かゝりますまいか。とく／＼とつくりと御思案なされませい。

みそ　サア、それは。

筆助　死は一旦にして遂げ易し、生は全くして難し。マアマア、お控へなされませう。

みそ　ぢやというても此の儘に永らへては、郡領さまのお爲めにならぬ此のみそぎ、筆助、殺してたもいの。

筆助　イヤ／＼、どうござりましても、お留め申さにやなりませぬ。

みそ　離してたも／＼。

トいひながら、方々に血のしたひたるを、フツと見つけて、思ひ入れして、

ハテ、合點の行かぬ。清めに清めしこの神垣、怪しき血潮の滴たりしは、何者の仕業なるか。ハテ、訝しき有樣ぢやなア。

豊古　筆助、あたりを詮議せい。

筆助　畏まりました。

ト方々探し、舞臺先きの池より、幕明きの神主の死骸を引出す。この死骸の手に願書を持つて居る。筆助、取り上げて開き見る。

さては、聖德太子を調伏の願書。願主の無きこそ詮議の一つ。いざ／＼、御覽なされませい。

豊古　ドレ、疑ふ所もなき聖德太子を調伏の願書。

ト左京之進、立ちかゝり、

左京　ヤ、、まことに聖德太子の御壽きを縮つ呪詛の文言。何者の仕業なるか。ハテさて、恐ろしい企みぢやな。この分に捨て置かれぬ一大事。斯く申す富士左京之進、預かり置いて後日の詮議。

豊古　そんなら貴殿が、その願書を。

左京　預かりました。

三人　サア、それは。

左京　守屋公の御家來行俊が預かつた。さし當つて身に科のある豐古親子、某が引つ立てる。神主方までいざおきやれ。

ト宮神樂になり、左京之進、みそぎを手籠めにする。筆助、寄らうとする、突きのけて左京之進、兩人を引立て、筆助ともに皆々はいる。この神樂を借りて、花道より雲助四ツ手駕籠をかついで出る、この駕籠に富士左近之助、羽織衣裳にて大小を差して、汗手拭にて額を巻き、居眠りて乘つて出る。後より、同じ雲助、四ツ手駕籠をかついで出る。この駕籠には淺間左衞門照政、羽織衣裳、大小のなりにて、汗手拭にて額を巻き、居眠つて乘つて居る。後より奴、伊達平、提げ重と野風呂と毛氈を、天秤棒にて擔いで出て來る。すぐに本舞臺へ來て駕籠をおろす。

伊達　ヤレ／＼、駕籠の衆、御大儀々々々。思ひのほか早く來ました。サア／＼、汗でも拭かつしやい。

ム　奴さん、自慢ぢやござんせぬが、この堺筋に駕籠も澤山にあるが、わしらのやうな達者な肩といふは、またとあるものぢやござんせぬぞ。

□　ソレ／＼、言はれて乘地を語るぢやアござんせぬが、茶碗へ水一杯入れて、載せて擔いで駈けても、こぼすやうな肩ぢやござんせぬて。

○　ソレ／＼、世間でいふ通り、この住吉の街道の駕籠は、乘らねば損といふ所でござんす。その代りには酒手はちつと心あるべし／＼。

△　時に、奴どの。この旦那衆は今日はどこへござりまするの。

伊達　されば、聞いて下され。先の駕籠に乘つてござるが、物部守屋さまの御家來、富士左京之進の若旦那、富士左近之助さま。後に乘つてござるが、聖德太子さま付きの淺間左衞門照政さま、どういふ事にや、御兄弟といつても大事ないほどな御中のよさ、樂の稽古に秦の川勝さまの所へお出でなされるにも二人御一所、神道の講釋を聞きにお出なされるのにも二人、難波の豆茶屋へござるにもお二人、めくりを引きにござるにも、女郎買にも、隨を食ひにも、外へ出るにも、内にござるにも、明けても暮れても、野郎同士の鴛鴦を見るやうに御二人連れ、今日はこの間からの御趣向で、この住吉から阿部野へかけ

て、松虫を聽きにござるのさ。さしてもない松虫を、辨當で聽きにござるとは、よい衆といふものは、とんだものぢやアないか。

へ　成程、ソリヤ氣の替つたお樂みでござりまする。

○　わしらはどこが松虫の名所だやら。

皆々　知らない事でごんすわいの。

伊達　知らないといへば、これはしたり、旦那衆はたわいもなく寐てござるさうな。ドレ／＼、モシ／＼、旦那さま／＼。とう／＼お目を覺まされ候へ／＼。

左衛　富士。

左近　淺間。

ト兩方一度に伸びをする。

左衛　ヤレ／＼、よく寐たさうな。

伊達　お二人ながら、お目が覺めましたか／＼。

左近　覺めたとも／＼。ちつと目の覺めるやうに、おりやれ／＼。

左衛　おぬしが降りらばわれらも降りずばなるまいかえ。

伊達　サア／＼、先づ／＼、火繩の火けむしなさいませなさいませ。

左近　これはやの字、氣がついたわいの。ドレ／＼煙草にせう／＼。

左衛　ドリヤ／＼、われらも一服いたさうか。時にこゝは住吉の境內ぢやさうな。南無三、今日はこの住吉へ主人守屋公の代參に、おらが親仁が來る筈ぢやと聞いたが、大方いま時分は來て居るであらう。ひよつと逢ふては、提げ重も野風呂も毛氈と一つに被らねばならぬによつて、どうぞ親仁に會はぬやうにしたいものぢやが、マの字、なんとよい了簡があるまいか／＼。

伊達　その了簡くらゐな奴でなくつて、色事師についてあるかれるものでござりまするか、かうひんぞろから氣遣ひなしに、この鳥居の內へはいつて、南の門から拔けて淺澤の方へ廻つてお出でなされまするが、なんと上分別でござりませうがな。

左近　上分別々々々。サア、淺間、親仁に會はぬうちに、南の門へ拔けてくりやれ／＼。

左衛　コレ／＼、おぬし達は二人寄つて、なぜそのやうに智慧がない。ちつと惡い事も稽古しや／＼。

左近　なぜ／＼。

左衛　なぜといふ事があるものか。今日の趣向はこの住吉から、阿部野へかけて松虫を聽きに行かうといふ思ひつ

きではないか。

伊達　左樣々々。

左衞　まだ見やれ、此のやうに日が高いではないか。歌をよむにも虫の音を聽くといはゞ、夜分にもならうではないか。こゝで日を暮らして行かいで、どうして早う行かるゝものぢや。そのやうに急く事はない。酒でも飮んで、マア〳〵落着いて居や〳〵。

左近　おれも落着きは落着きたいものぢやが、乳守に七日居續けといふもので、親仁にちつと逢ひにくいわいの。それぢやによつて急くのぢや。サア〳〵あよびやれ、あよびやれ。

伊達　左樣々々。この奴めも同じやうに、七日と申すものお屋敷へ歸りませぬによつて、ひよつと此處で大旦那にお目に掛りますると、とんだ事でござります。そればかりでもござりませぬ。今日の御代參も若旦那のお出でなさるゝ筈を、居續けで流しておしまひなさつたによつて、お目に掛るが最後の助、どんな目に遭ひませうやら、知れませぬによつて、マア〳〵、早うお出なされませいなされませい。

左衞　ソレ〳〵、それが智慧のない始まり、七日といふもの乳守に居續けいたしたによつて、そこで親仁に會ふやうに、わざと此處に居やれといふ事よ。

左近　どうして親仁に會はれるものだ。今日の代參もおれが來る所を來ぬによつて、會つて見やれ、どのやうに言はれうも知れもせぬものを。

左衞　ソレ、それがおぬしが、まだ惡業がいかぬといふものぢや。親仁が腹を立つて居る所を合點で、こゝに居るといふには、よい分別が無くつても居られるものか。コレ、こゝにさへ居れば、親仁の機嫌も直つて、直ぐにここから親仁と一所に屋敷へも歸られて、女房にしたいと思ふつもりの梅ヶ枝も、おぬしが女房になるわいの。

左近　コレ、淺間。そりやほんの事か〳〵。

左衞　ほんの事で無うては、おぬしとおれが中で、どうして嘘がいはれるものだ。おぬしがすきになる程に、こゝに居や〳〵。

左近　まだ上々があるわいの。コレ、やの字、いま淺間がいやつた事をそなたも聞いたであらう。こゝに居さへすれば、この富士が思ふやうになるといやい。

伊達　そりや飛んだ事でござりまするが、もし淺間さま、そのやうなうまい事は、いかさまぢやござりませぬか

え。

左衛　サア、それはどうでしらな事では行かぬによつて、マア此處におぬし達もおれも酒でも呑んで樂んで居て、日の暮までに親仁が來ずば、ずつと阿部野へ虫の音を聽きに行かうではないか。又そのうちに親仁がわせたなら、この淺間がむきになつて、そなた主従が詰らぬ事があつて、但馬の方へ駈落をする所を、この淺間がいろ〳〵にいうて留めて置いたと、思ひつきをいふ程に、そこで、そなたは身の上の詰らぬ盡しを、イヤ、そなたも身持の不埒盡しをいつて、随分親仁が苦勞になるやうに、言ひやうは幾らでも捨てゼリフ〳〵。

左近　どうでも淺間ほどあつて、よい狂言を出すわいの。たかが、そこさへ行けば氣に掛る事はちつともない。サア、酒にせう〳〵。

伊達　それさへ承はつて置けば、占めたものでござりまする。ドレ〳〵、毛氈をだすべし〳〵。

左衛　サア、駕籠の者も、こゝへ來て一つ呑め〳〵。

皆々　ハイ〳〵。

ト伊達平、毛氈を敷き、提げ重を出して並べる。

左近　ア、、どうぞ、こんな所へ、親仁が早く來ればよいかなア。會ひたいわい〳〵。

左衛　モウ、味噌をあげるやつさ。

伊達　サア〳〵、燗が出來た〳〵。サア、上がりませ上がりませ。

トこれより酒盛りになると、風の音する。日覆より二つ目の文を吹き落す。左衛門文を取つて、

左衛　あれ、見や〳〵。今の風でどこから吹き飛んで來たやら、面白さうな色ぶみ。なんとよい酒の肴ではないか。

左近　どうもいへぬ〳〵。たが文かは知れもせぬものを、讀んで見るは可笑しいものぢやが、淺間、なんとそこで讀むまいか〳〵。

伊達　いかさま、こりやようござりませう。高がよそから飛んで來たその文、ちよつと讀んで御覽じませい。

左衛　成程々々、かう酒を引受けて居て、さらば讀みかけうか。

左近　さらば文句を聞きませうか。

左衛　いや増す思ひより薄紅葉の色も出でんとや、悲しくまた〳〵文してお便り致し、せめてはあるべくも無き身を永らへとりて。殺せ〳〵。

左近　して／＼、どうぢや。
左衛　いかなる御緣にて候や、わらはの爲めに獨りの兄さま。
　ト左近之助、その文引つたくつて、後ろへ隱し、
左近　サア／＼、酒にせう／＼。なんの此のやうな分らぬ人の文を長々と聞いて居やうより、一ツ呑みや／＼。
左衛　アヽ。これ、後が面白さうな事であつたが、
　トいふうち、伊達平、後ろより文を覗いて、
伊達　我が身心底お疑ひなされ候はゞ萬秋樂傳授。
左近　なんのこつた。油斷も隙もなるものぢやない。
　ト懷中する。
左衛　隱すとは何うだ／＼。おぬしとおれが仲に、なんの遠慮があるものだ。サア、今の文をこゝへ出しや／＼。
伊達　左樣でござりまする。どうやら譯のありさうな文、
　そんなら私にばかりお見せなされませ、
左近　この文はおれが心覺えのある文、ちつと人には見せにくいによつて、隱すものを見たがるとは、どういふ事か。知れもせぬものを。サア／＼、酒にせう／＼。
左衛　イヤ／＼、隱されては氣が濟まぬ。ドレ／＼、今の文をこゝへ出しや／＼。

伊達　ソレ／＼、面白さうな魂膽の文。とても物事に、みんな開きたうござります。しわいこと仰しやらず、お出しなされませ／＼。
左近　そなたまでが其のやうにいふかいの。どうしても此の文はちつと此處へは出しにくいぢや。こればつかりは御免々々。
左衛　さういやれば尙ほ見たい。其のやうに隱しやると、手を突つ込んでも出して見るぞや。
左近　これはまた迷惑な事ぢやぞ。
左衛　ソレ、そつちから合點か。
伊達　サア、今の文をお出しなさい／＼。
左近　イヤ／＼、どうあつても出されぬわい。
左衛　出されぬといやれば、そなたの懷ろへ手を入れて、引き出して文を見るぞや。
左近　サア、それは。
伊達　サア。
左近　サア。
左衛　サア。
左近　サア。
左伊　サア／＼／＼／＼、サア。

ト伊達平右手、左衞門左の手を持つて、をかしみにて詰め寄る。花道にて

梅枝　待つた。

皆々　ヤア。

梅枝　秋の名だてに鳴く蟲を、商なふ女子が留めやんした、皆さん待つておくれいなア。

ト誂への出の唄になり、花道より梅ケ枝、廣袖のやつし、着流しにて頬冠りをかふり、兩掛けの蟲賣の荷を擔ぎ、團扇を持ちて出で來る。

伊達　シタリ。ま一つシタリ。さても美しい蟲賣がこゝへ飛んで出たわ。おらが旦那の色事の文を、無理やりに見ようといふ所へ、待つてくれろと、久しいものだが嬉しいものよ。

梅枝　召しませい〳〵。お求めなされて下されませい。蟲は數々多けれども、人の松蟲戀してふ、忍ぶ夜ごとは火取蟲、身を焦すなる螢蟲、火影ちからに馬追ひ蟲、その轡蟲かしがまし、聞ば咎めんかまきりの、こわい姿も何のその、玉蟲故に蓑蟲の、雨の降る夜もきり〳〵す、合圖の綱の鈴蟲や、引手あまたの機織蟲、千草の花に色添へて、つらねましたる蟲盡し、どなたも買うて下さんせいなア。

○　見れば見るほど美しい姿で此處へ黃金蟲。

□　おいらになびいて呉れうなら、イヤにはあらぬいなご蟲の。

△　よくばつたではなけれども、尺取蟲で抓まうなら、

▲　指でもモヽでも髮きり蟲、

皆々　あきんどさん

伊達　ホヽ、うやまつて申す。

梅枝　ヲヽ、をかし。

伊達　をかしくば、オカマのまへてわしやこつちにチツと取込みな事がある、脇へ行つて商ひをしろ〳〵〇ヤア、お前は。

梅枝　梅が枝ぢやわいなア。

伊達　長谷川町のデンブださうだ。

梅枝　富士さん今日の趣向を聞いたさかいに、思ひついた蟲賣、花車も子供も、新家の三文字やに待たせて置いて來ましたわいなア。

伊達　モシ、淺間さま、おかづけの色事が參りました、とんだこつちや。

左衛　コリヤ、面白うなつて來たわいの。サア〳〵、梅が

梅枝　枝、こゝへおじやく〳〵。
左近　アイ〳〵。
梅枝　ひよんな所へ來た事ではあるぞ。
左衛　富士さん、わたしやひよんな所へ來たわいなア。
梅枝　むつとしたぞ〳〵。
左近　ひよんな所へ參じまして、お氣の毒ぢやわいなア。
左近　よも〳〵と思つたが、さりとは〳〵よく來てくれたぞ。サア〳〵、寄り掛けろ〳〵。
梅枝　知らぬわいな。
左衛　コレ〳〵、知らぬといつては、懷にある文の事が濟まぬぞ。そなたに隱して面白い色事の、頁つ畫間詮議ぢや〳〵。
伊達　あんまりコウじぬ内に、灸を据ゑたがよささうなものだ。油斷はなるまい〳〵。
左近　ヤイ〳〵、おのれは〳〵〳〵、主のおれが隱すものを、そばで同じやうに留めようとはせいで、氣もつきもせぬものまで搖ぎ出して、どういふ事おぢや〳〵。その分に捨て置かれぬ。それへ出をれ〳〵。
ト立懸り反りを打つ、伊達平氣味わるさうにソロ〳〵逃げる。

梅枝　富士さん。その手で行くやうな梅ケ枝ぢやないわいな。其のやうな手の古い事は置きにして、その懷ろのその文を、サアありやうに此處へ出さんせいなア。
左近　そんなら、梅ケ枝。わが身も富士が懷中の文が見たいぢやまで。
梅枝　アイ、見たうなうてかいな。ない事さへも悋氣するが女ごの癖、まして譯ある女中の文、確かな事と聞いてから、底の底まで念入れて、糺さにや心が濟みやんせぬ。見せにくからうがその文、富士さん、見せて下さんせ。
左近　いかに心が廻ればとて、アノ淺間にさへ隱す文を、是非に見ようといふ事なら、たつた今出して見せう。さりながら、讀んでしまうたその後で、富士左近之助行家が、身の一分立たぬやうに、この場でなつたその時は、梅ケ枝、そなたマア、どうせうと思ふ心おぢやぞ。
梅枝　ソリヤ知れた事、言ひ替したわたしや女房、その女房にも隱さんす、その文なら何ぼ氣懸り、お前の立たぬ事ならわたしも一分捨てやんせう。どのやうな事でも見せて下んせ。見せて下んせ。サ、見にや置かぬ。見にや置かぬ。

ト左近之助に取付く。

左近　その覺悟ならせう事がない。そんならその文讀んで見い。

ト文を渡す。

梅枝　讀まいでわいな、あたいやらしい此のやうな文。

ト開き

いや增す思ひより薄紅葉の色に出でんとや、悲しく文して便りいたし、せめてあるべくもなき身にしを永らへら〵。如何なる御緣にて候や、わらはが兄淺間左衞門さま、御そもじさまと〇〇〳〵御仲よろしく、まことにまことに御嬉しく存じら〵。また〳〵、こなた心底御疑ひなされて、かね〳〵お心を掛けられ候萬秋樂の傳授の一卷。

ト讀む。左衞門取つて寸々に引裂いて、丸めて池の中へ捨てる。

三人　これは。

左衞　何者の文かは知らねども、高が女のいたづらにて書いたる事なりや反古同前。ひよつと奧まで讀みおほせ、宛名それぞと知るゝならば、富士も淺間へ義理立たず、淺間も富士へ義理立たず。立つも立たぬも富士淺間、燃ゆる思ひのそれならで、親しき仲の甲斐やなからん。左近之助、後に逢はう。

ト唄になり、左衞門奧へはいる。

伊達　若旦那、今の淺間さまの仰しやりやう、ぬしの妹御の文と知つて、引き裂いてお捨てなされたなされかた、なんと粹なお方ではござりませぬか。

左近　粹とも〳〵。大通の淺間左衞門、能く〳〵おれが事を思うてくれねば、大切なる萬秋樂の傳授の事を書いたる文を、丸めてしまはれるものか。あゝした事ぢやに依つて見せまいといふたものを、滅多無上に見たがつたもの、腹は立たいでをかしいわいの。

梅枝　これといふも、お前があんまり女子に孝行ぢやによつて、人とも愛憎が盡きるわいな。これに懲りたがよいぞえ、あた、阿房らしい。

ト奧にて「富士左京之進さまの御下向」と呼ぶ。

お聞きなされましたか、大旦那の御下向との先觸れ、とんだ事ではござりませぬか。

左近　サア〳〵、こゝで會つては詰らぬわいの。どうぞ隱れ所はあるまいか、どうぞ親仁に會はぬやうにしたいものぢやが、コレ〳〵、どこぞへ遣つてくれまいか。

梅枝　ひよんな所へござんすわいな。わたしもどこぞへ遣つて下さんせいなア。

伊達　奉公人の肝入だ。そうさ、もうちつと淺間さまがお出でなされて下さればよいに。若旦那よりおれが先へ隱れたくなつた。

ト無上にうろたへて居る。また「富士左京之進さま御下向」と呼ぶ。宮神樂になり　奥より左京之進、以前のなりにて出で來る。それを知らずに、伊達平、左京之進に衝き當る。顔を見てビックリして逃げようとする。それを知らずに左近之助、梅ヶ枝の手を引いてソロ〳〵左京之進の前を通り、顔を見合せて梅ヶ枝が後ろへ隱れて行かうとする。

左京　富士左近之助の畜生め、待て。

左近　ハイ。

左京　惰弱なる悴ゆゑ、人がましい心もあるやつと思ひの外、共々にたはけを盡くす下部の伊達平、用がある動くまいぞ。

伊達　ねい。

左京　左近之助、それへ出い。母親の無き獨りの悴、不便に不便を加へたれども、今日よりしては赤の他人、七生までの勘當ぢや。

左近　エヽ。

左京　今更驚くは未練であらうぞ、きり〳〵立つて失せ居らう。

左近　段々のお腹立ち申譯の致しやうも無き拙者が不行跡、色故に主親を忘れ、乳守の里へ身を委ね、傾城に魂を奪はれましたる誤まりゆゑ、御勘當なされまするか。

左京　イヽヤ、まだ弱輩な左近之助、君傾城にも迷はいでは。左程に好いたものならば、たつた一人の悴、添はせて遣らいでなんとせう。わしが爲めにも嫁御寮、身受けの金子もくれてやる。

梅枝　さほど粹なお心で、なぜ御勘當なされまするぞ。

左京　勘當せねば忠義が立たぬ。

左近　合點が參りませぬ親仁さま。放埓なる身持ちゆゑ、御勘當受けまするは、コリヤ世間の慣ひ、その儀はなにも仰しやらいで、御勘當とはどう致した儀でござりまする。

左京　淺間左衞門を何者ぢやと思うて居る。

左近　淺間左衞門照政は、聖德太子につき奉りし、大和の斑鳩の樂人、天下の樂官、秦の川勝が門人にて、拙者

とは弟子兄弟、いんいつと申さうか、入魂と申さうか水魚の交はりを仕りまして、あの者の志はよつく存じて居ります。

左京　然らば太子へも、忠臣の道は忘れまいな。

左近　義を心頭にさし挿み奉公に二念はござりませぬ。

左京　シテ、神道を尊むか、但し佛道に歸依するか。

左近　ソリヤ仰しやらいでも日本は神國。淺間左衛門照政、よもや佛法へは傾きますまい。

左京　默らう。聖德太子佛法に歸依し、百濟國より渡りし佛像經論をたふとみ、五畿內へより／＼佛閣を造立せんと、蘇我の江藤五郎と申す者へ內勅ありしとの風聞。太子へ無二の淺間左衛門、よもや佛法ないがしろに、君命に違ふやうはない。さすれば主君守屋公とは敵と敵。それと知らざる悴ゆゑ、勘當せねば主人へ立たぬ。七生までの勘當ぢや。

左近　サア、それは。

左京　但し、淺間左衛門佛法を歸依せぬといふ證據があるか。

左近　サア、それは。

左京　なんと。

左近　ハイ。

左京　そこ立つて失せう。

伊達　イヤ／＼、旦那さま。暫くお待ち下されませう。御懇ろになされまする淺間左衛門さま、いよ／＼佛法に歸依なさらば、守屋公とはかたき同志、また神道をお守りなさらば、さのみ一人の若旦那、御勘當には及びますまい。照政どのゝ御心も、神道とも佛道ともいづれの道とも分りまするまで、左近之助さまの御勘當、拙者へお預け下されませい。

左京　なにがなんと。

伊達　イヤサ、左近之助さまもあなたの御子息、よもや守屋公へ忠臣も仇になされうお心はない筈。若旦那、親御さまに見換へても、淺間左衛門さまに御懇ろなされませうやうはござりますまいがな。

左近　ソリヤその方がいふまでもない。淺間左衛門、親に換へて忠臣の道を忘れうか。

伊達　アレ、あの通りでござりまする。

左京　スリヤ、佛道に歸依すれば。

左近　守屋公への申譯に。

左京　義絶するか。

左近　畏まりました。
左京　また神道をたふとまば。
左近　元の通りの。
左京　矢つ張親子。
左伊　忝けない。
左京　勘當した親になんの禮、そこ立つて失せう。
ト唄になり、左近之助、伊達平、梢ヶ枝、奥へはいる。合方になり、左京之進、賽錢箱より穴穗部皇子を出し、
最前からの樣子。
穴穗　あれにて殘らず聞き屆けた。
左京　淺間左衞門照政が心底、佛道に入らば國の仇、神道を守らば皇子へ忠臣。善とも惡とも左近之助が挨拶次第、生死の境追つての儀、何にも致せ人々の胸中、安堵致さぬ世の中でござりまする。
穴穗　身がこのかみの用明天皇、病ひに冒されて命危し。この時ならで多年の本懷達せずしてあるべからず。いよいよ甥の聖德太子、南階に立つその心や、また豐明親王を東宮に立つるその心や、この兄弟の心ざし、かた〲以て量り難し。淺間左衞門が胸中を開き、神道に任かす所存ならば、麿が味方に招き入れん。又佛法を信ずるならば、只今一刀に打つて捨てい。行後、そちに申しつけたぞ。
左京　委細畏まりました。
穴穗　差當つて調伏の修法、人目にそれと掛らぬうち。
左京　神前近う居らせられませ。
穴穗　ソレ。
トうなづき合ひて、皇子、左京之進忍ぶと、淺間左衞門、ソロ〱と松の影より出で來る、後より豐古、みそぎ、續いて出で來て後ろに窺ひ居る。
左衞　いよ〱守屋の大臣、穴穗部の皇子に荷擔して、用明天皇第一の宮、聖德太子第二の宮豐明親皇この御兩君を亡き者にせんとの企て、安からぬ一大事、このよし馬子大臣へ申し上げるが忠義の一つ。それ。
ト行かうとする。
豐古　淺間左衞門照政どの。
みそ　暫らくお控へ下されませう。
左衞　そこ元は當の郡領豐古どの。
豐古　そこ元へ、折入つて聖德太子の思召し立ち、御內勅の旨申入れん。先づ〱これへ。

左衛　合點が行かぬ、豐古どの。聖德太子の御內勅とは。
豐古　委細委しく申さずとも、みそぎ申しつけたる品を、照政どのへお渡し申せ。
みそ　畏まりました。
　ト うや／＼しく頭陀袋より、袱紗に包みたる卷物を出して、三寶に載せて正面に据ゑ、遙かさがつてうやまふ。
左衛　これは。
みそ　この一卷こそ廐戶の皇子、豫て佛法に歸依し給ひ、八軸一卷の法華經にて、あなたへの御宸翰、今この界にみこの宮とは生れさせ給へども、その前生は隋國の衡山般若臺の念禪法師にて渡らせ給ふ。過去六生までヘンサあつて凡人ならぬ聖德太子、自らかゝされし御經を勅書に添へて照政に下し賜はるこの二品。取次ぐみそぎは取敢へず內侍の役に、おほけなき神と君との二柱、こゝ住吉にて會ひましたは、われ／＼親子が今日の喜び。ハヽ、ハヽ、御推量なされて下されませい。
左衛　スリヤ、聖德太子の御宸翰、八軸一卷の法華經に勅書を添へて、かくいふ淺間左衛門へ、下し賜はる二品とや。
みそ　いかにも。
左衛　先づさし當つて勅書の趣き、この所にて拜見し奉らん。
　ト 靜かなる宮神樂になり、淺間左衛門うや／＼しく戴く。
みそ　早う／＼。
左衛　先帝欽明天皇の御宇、大和の國高市の郡に建て給ひたる佛閣、最初のこうこん寺を守屋が爲めに燒亡せし處、再び佛法を廢めんが爲め、飛驒の國の工、甚五郞と申す者を語らひ、五畿內へ寺院を建てんとの御企て、身不肖なる某へ、斯かる勅書を賜はる事、家の面目、世の譽れ。エヽ、有難いなア。
豐古　何事も是まで。淺間左衛門、介錯賴み申す。
　ト 切腹せうとする。
みそ　マア／＼、お待ちなされませい。
左衛　コリヤ、逸興千萬な、郡領どの。何ゆゑ自殺は召さるゝぞ。はやまり召さるゝな。
豐古　言ひ譯するも君への不忠。今日馬子大臣より仰せつけられたる斑鳩の初穗、豐明親皇の御壽長久の爲め當社へ納め奉らんと、われ／＼親子持參なしたる所に、誤

まつて取り落し、散亂なせし身の科に、豐古切腹仕る。照政留め召さるな。

みそ　その科ならば此のみそぎ、あなたの業ではござりませぬ。申譯にはわたしが自害。刃物をお渡しなされませい。

豐古　イヤ／＼、そなたは殺さぬ／＼。

みそ　イヤ／＼、あなたは殺さぬ／＼。

豐古　放した／＼。

みそ　お放しなされて下さりませい。

ト互に死なうとする、左衞門、みそぎを引き退け、豐古をしつかりと留めて、

左衞　必らず逸まり召さるゝな、この住吉の岸に於て、初穗の稻を取り落し、又散らしても大事ない。

豐古　大切なるその稻を、この住吉の岸に於て。

左衞　蒔き散らしても大事ない。

兩人　大事ないとは。

左衞　住吉の淺澤水のたえ／＼に、岸のあら田は種蒔きにけり。

兩人　なんと。

左衞　種蒔き初めて貢ぎの初め。コリヤ親王を祝したる儀自害に及ばぬ。お控へなされい。

兩人　スリヤ、自害には。

左衞　及ばぬ／＼。さほど忠臣を思はれなば、聖德太子の御大事、御子息の菅の次郎豐勝どの、勘當を許し召されて味方につけられい。

豐古　とは存ずれども其の行方を。

みそ　尋ねまするはわたしが役目、親御の爲なり夫の爲め、姿を替へてそのありかを、求めまするも忠と孝、忠と忠とのその中居、茶屋奉公は人なれて噂さを聞き出す一つのたより。これより直ぐに參りませうわいな。

左衞　出來た／＼。

トいふ内より、奥にて、

左近　淺間左衞門／＼。

豐古　ヤ、あの聲は。

左衞　富士左近之助。

豐古　然らばお別れ申さうか。

左衞　勅答よろしく賴み存ずる。

みそ　淺間左衞門照政どの。

左衞　御兩所、お行きやれ。

兩人　おさらば。

ト三重になり、みそぎは花道、豊吉は奥へ別れはいる。左近之助、錦の幣袋三寳に載せ持ち出る。

左近　淺間左衛門〳〵。ヤレ〳〵、こゝに居たさうな。

左衛　富士、なぜ其のやうに呼び立てるのだ。名も何も堪るものではない。

左近　聞いてくりやれ〳〵。おぬしがあつち行つた後で、おらが親仁にこゝで會つてな。

左衛　會つたか〳〵。

左近　會つた段か、何が乳守に居續けに居た事をやかましくいつて、傾城狂ひさせること罷りならぬと、目を剝き出して、理窟ばるやら叱るやら亂騷ぎ、とんだ天井を拜見いたしたて。

左衛　そうであらう〳〵。時におぬしが持つて居る、その不思議の袋はなんだ。

左近　これか、聞いてくりやれ。親仁がこの住吉の本社へ連れて行つて、わがやうな未熟な者を、中々守屋公の御家來にならぬ、今日よりしてこの住吉の樂人にする程に、これを大切にせいと、無理やりにこの袋をおれに渡したが、こりや神道の幣袋々々。

左衛　そんならおぬしは、この住吉の抱へに今日からなるか。

左近　また半分は守屋公の御家來、また半分は住吉の樂人鰻山の芋といふ男だ。

左衛　それもまし〳〵。

左近　なんとおぬしも神道を守つて、この住吉の樂人になる氣はないか〳〵。

左衛　サア、おれもありやうは、おぬしとこんなに仲が善いによつて、互に主君は變るとも、末々までも懇ろに變へまいと思ふによつて、富士が住吉の樂人にならば、この淺間も聖德太子さまといふ旦那どのがあつて、どうも自由にならぬてさ。なんとおぬしが氣を換へて、斑鳩の樂人になる氣はなしか〳〵。

左近　そりや許して呉りやれ、どうも聖德太子へつかへる事はならぬてさ。

左衛　なぜ〳〵。

左近　先帝欽明天皇の御宇に、始めてこの日本へ佛法といふもの渡る。それからこの佛法が味に弘がりかゝつて、今ではどうも留め度がなく、又しても〳〵天下の騷動。おらが旦那の守屋公は知つての通り神學者ゆゑ、きつい佛法が嫌ひ、それがちつと差つかへるから、外へは身體

が振りにくい。淺間、おぬしがその前にある、三寶に載せた木綿の袋はなんだ。

左衛　サア、こりやア。

左近　何もおぬしはおれに隱す事はあるまい。そりや何だ何だ

左衛　サア、こりやア、頭陀袋といふものだ。

左近　なんだ、頭陀袋。ついぞ今まで見た事もない袋のなり。おぬしは變つたものを持つて居るの。

左衛　サア、この袋の内には言ふに言はれぬ大切なものがあるて。

左近　ちつとおれに見せやらぬか。

左衛　どうもおぬしに見せにくい。

左近　そんならおれに見せにくいか。

左衛　腹は立たうが、見せられぬて。

左近　今日の今まで、富士淺間と斷琴の交はり、その親しみにかへても見せられぬといふ頭陀袋の内、どうやら、おれは見たくなつた。

左衛　見せまいといふ此内を、左近之助はどうして見る。

左近　この行家がその見やうは、則ち當社住吉の託宣に□□□われに形なし、正直を以て形とし、我に智慧なし、忠孝を以て智慧として、せう／＼堅固の劍を以てその内を改めて見るわ。してまたおぬし、どうして見せない。

左衛　せつかい三界、一切有情、ふたあくしゆ、と佛の教へを能く守つて、金輪奈落の底までも、袋の内は見せまいわ。

左近　スリヤ、佛法にはや入つて、神道を守る住吉の富士が相手になるか。

左衛　おんでもない事。佛法最初の聖德太子、主君と仰ぎ奉る、淺間左衛門照政、親みを絶つて相手になる。

左近　面白い、相手になれよ。

左衛　ならうわ。

左近　なれよ。

左衛　ならうわ。

兩人　どつこい。

ト　これより誂への合ひ方になり、互に拔き合せ切り結ぶ。このうちに左近之助、わざと左衛門に刀を打落されて、押直つて切られようとする。左衛門直ぐに刀を持たせて立廻りあり、とゞ、左衛門刀を取り落し、左近之助に切れといふ思ひ入れ。左近之助刀を振上げると、ドロ／＼にて頭陀袋より光明さして、左近之助

の刀三ツに折れる。
左近　ヤ、淺間左衛門を討たんと、振り上げしこの刀、段々に折れたるは、ハテ合點が行かぬわ。あの頭陀袋の内にこそ、聖德太子轉法輪の佛の敎へをみのりの文月、なき玉に向ふ富士が手の内。
ト頭陀袋へ幣袋を重ねて
命があらば重ねて會はう。さらば、
ト唄になり、左近之助奥へはいる。
左衛　世の中の義理ほど是非もないものはないなア。我々が樂の師と頼みたるは秦の始皇の後裔秦の川勝、その門人に富士淺間、兄弟の如くに親みしに、神道を守る守屋の大臣。佛法歸依の聖德太子、主君に從ふ臣下の役。今より後は矛盾となつて、変はる事も今日限り、なにはともあれ、心ありげなこの袋。ドレ。
ト幣袋を開けて、中より菊明きの藁人形を出して、
ヤ、これこそ、聖德太子を調伏の人がた、安からぬ一大事。かくいふ淺間へ手の内とて殘し置きしは、ハテ、奥床しき富士が胸中。何者の仕業なるや。油斷ならざる世の中ぢやなア。
トいふうち、後ろへ左京之進出で、三寶の上の頭陀袋を持つて、ツカ／＼と行かうとする。左衛門驚いて。
富士左京之進行俊、こりやその袋をどこへお持ちやる。
左京　どこへと云ふたら、穴穗部の皇子さまへ。まつた物部の守屋公へ注進するのぢや。淺間左衛門速かに身共へ渡せ。
左衛　スリヤ、最前からの樣子は。
左京　殘らず後ろで見屆けた。
左衛　南無三。
左京　最早逃がれぬ淺間左衛門。尋常に繩に掛るか、但し皇子へ味方するか。二つに一つの返答聞かう。なんとぢや。
左衛　淺間左衛門、苟くも用明天皇第一の皇子、聖德太子にかしづき奉り、忠心も私なく、正道を守る魂、一つ惡事に凝し守屋どのへ、組み致すべき所存はない。
左京　スリヤ、穴穗部の皇子どのへ。
左衛　荷擔致さぬ、お味方いやだ。
左京　その一言を聞くからは、汚はしきこの佛經を、目の前で引裂き捨つる。ソレ。
ト破らうとする。左衛門留めて、
左衛　待つた、行俊。聖德太子の用ひ給ふ佛の敎へは、忝

なくも畏くも、智者はぜんしやう觀念□□□に依つて三世を悟り、愚者は讀誦戒開法のきやうに依つて菩提に入る。かいじやうゑのさんがく。畏くは三千世界一切衆生に渡り、略しては一身に歸す。かほどに尊き佛道を拒む心の守屋主從、冥罰を知らぬ左京之進。一巻を破らんとは淺ましや〳〵。速かに置いて行け。さなきに於ては許さぬぞ。

左京　無佛世界に生れたる神國の有難さ。御裳川の流れ久しく、天津兒屋根の命より人臣となはりし守屋主從が、義に徹したる刀の手の內。淺間左衞門、こたへて見よ。

ト思ひ懸けなく、胸打に左衞門を叩く。左衞門無念なるコナシあつて、利き腕取つてキッと思ひ入れして、

左衞　富士左京之進行俊、淺間左衞門照政ほどの侍をなまくらものゝ胸打に、ぶゝゝぶつたぞよ。

左京　なんと、また此の上にこの佛經、我が目の前で引裂き捨てる。

左衞　どつこい。

ト佛經を左衞門破らせまいと支へる。その內に勅書を左京之進開き見て。

左京　さてこそ世の風聞に違ひなく、五畿內へ佛閣を造立せんと、事を計る太子の墨附。

左衞　サア、それは。

左京　手向ひひろぐと引裂からうか。

左衞　サア、それは。

左京　守屋公へお味方するか。

左衞　サア、それは。

左京　この墨附を引裂らうか。

左衞　サア。

左京　サア、この趣きを注進せうか、

左衞　サア。

左京　味方につくか。サア〳〵〳〵〳〵、なんと。

左衞　ハイ。

左京　挨拶に及ばぬ。淺間左衞門、この行俊が存分にする皇子へ與みせぬ不屆き者。思ひ知つたか〳〵。

トこれより左衞門を散々に打擲して、突き放して、墨附を破らうとする。大ドロ〳〵にて左京之進苦しみ聖德太子の墨附を、破らんとすれば目くるめき、五體をすくめる有樣。何にもせよ、この墨附。

ト又破らうとする。大ドロ〳〵にて又苦しむ。このうち懷中より、以前の願書を取り落す。左衞門取り上げ

左衛　これこそ、聖徳太子を調伏の願書。
左京　そりやこそ。
　ト掛る、見事に取つて投打に、
左衛　チエヽ、是非に及ばぬ。
　ト一太刀切る。これより富士太鼓の樂になる。左京之進苦しきコナシにて、左衛門にしがみつき、
左京　淺間左衛門、能く殺せ。たとひ此の身はズタ〳〵になるとても、其の願書は渡さぬ〳〵。
左衛　左近之助に親み深ければ、其方が命取るまじとは思ひしに、國騷亂近きにあり、安からぬ調伏の願書、いかさま思ひ合はすれば、最前のこの人がた、それぞと告げたる守屋が惡事、さてはこの由。
左京　願書を渡せ。
左衛　かねてよりかくあるべきと思ひたば〳〵、周公が手を出し、はんいうが涙にてもとむべきものを、今さらに神ならぬ身を、怨みかこち嘆くぞ哀れなる、嘆くぞ哀れなりける。
　ト此の謠ひを謠ひながら、方々へ氣をつけて左京之進を仕留める。ト忍び三重になる。法華經、人形、願書、硯箱を袱紗に包み懷中して、石筆を出し、鼻紙へ委しく書きつけ、小指を切つて血判を押し、左京之進が袴の紐へ結ひつけ、死骸を片付ける所へ、花道より大勢、三つ銀杏の紋のついたる提灯を持ち、バタ〳〵と出て來て、
皆々　殿のお迎ひ。
左衛　大儀々々。
皆々　ハツ。
　ト靜かに花道の角まで行き、左京之進へ向ひ、同向して、三重にて左衛門悠々と向ふへはいる。バタ〳〵にて伊達平、奧より提灯を提げて出て來る。後より左近之助、梅ヶ枝、續いて出で來る。伊達平血にすべつて轉ぶ。
伊達　なんだ、西瓜の皮があるさうな。
梅枝　どこも痛みはせぬかや。
左近　危ない事の。ヤヽ、待ちや。大分のりがしたうて居るが。
伊達　ほんに左樣でござりまする。扨々きついのりの。
　ト方々探し、左京之進の死骸を見つけ。
　マア、コリヤア。大旦那富士左京之進さま。こゝに切られて死んでござります。
左近　ナニ、親人がお果てなされてござるとや。ドレ〳〵。

梅枝　いろ／＼な事いはんすわいな。
ト伊達平が提灯にて、左京之進が死骸をよく／＼改め
て、俄かに驚き、
左近　ヤ、、コリヤ親人、左京之進さま。
梅枝　ほんに行俊どの。
伊達　大旦那さまでござりまする。
左近　親人さま／＼。
梅枝　行俊どの／＼。
伊達　大旦那さま／＼。
左近　サ、、、、コリヤ、氣がつかぬわいの／＼。
梅枝　なんぞ藥はないかいなア。
伊達　どうぞ、こゝらに醫者はあるまいか。とんだ事だ、
とんだ事だ。藥があるか／＼。エ、いま／＼しい。
ト左近之助、梅ケ枝、伊達平花道へ駈けたり、東へ駈
けたり、無上にうろたへて、トヾ、三人死骸に取付き、
顏見合せ、ワツと大泣き。
左近　親仁さま。親人、左近之助めでござりまする。物お
つしやれて下されませいの。かうした事と存じましたな
らば、なにしに御側を離れませう。是まで不孝に致しま
したが、口惜うござります。殘念にござりまする。さぞ
御最期のみぎりは、仰せ置かれたい義もござりましたで
ござりませう。サア、何者がお前を斯樣に致しました。
姓名を仰しやつて下されませい。かたきは是と、サア御
意なされませい。もし、物おつしやつて下されませ。コ
リヤモウ、いらへも答へもないか。ハアイ。
梅枝　舅御さま。さつきに初めてお目にかゝりし時、それ
ぞと申しは致しませねども、わしが爲めには嫁御寮と、
たつた一言おつしやつたが、耳へ殘つて有難く、親御の
お慈悲と思ひの外、かういふ別れをする事も、前世の業
か約束か、よく／＼淺い親子の緣。今更思へば一日も嫁
甲斐もないこの梅ケ枝、殘念でござりまするわいなア
ト泣く。
伊達　エ、、忌々しい今日のお供。こんな事だと思つたら
大旦那の腰にくつついて、かう、ふみじやう見まいもの。
申し、伊達平でござります。お前は常々仰しやつた御意
見、ヤレ博奕を打つとても、[illegible]を打つな、賭酒も借
りて呑むな、[illegible]やたら[illegible]をぶつて、[illegible]で、かくな
と仰つしやつたが、みんな[illegible]たなりました。思へば生
きてお出でなされた時、お[illegible]先で[illegible]ず、お屋
敷へ早く歸ればよかつた、運[illegible]された、口惜い

わえ〳〵。
ト泣き、
それ〳〵からして居る事でもない。かたきがなくつちやならない。それ、大旦那のかたき、いづくまでも。
ト無上に花道へ駈けて行く。
左近　伊達平、そちはどこへ行く。
伊達　富士左京之進どのゝ、かたきを討ちに參りまする。
左近　シテ、そのかたきは何者ぢや。
伊達　サ、それは。
左近　そのかたきの名も知らず、證據もなくてかたき討とは。伊達平のうろたへ者めが。
伊達　エ、、忌々しい。
左近　マア〳〵、こゝへ來て、かたきの手懸りがあるか、改めて見い。
伊達　成程、左樣でござりまする。
ト舞臺へ立戻つて提灯を持ち、
何者の仕業か。こゝらになんぞ落してありさうなものだ。よもや、かたきが裸では來まいし、なんぞありさうなものだ。
左近　いかなる意趣意恨で、此のやうに手に懸けしか。かたきの手懸りが、何かしらありさうなものぢや。
ト伊達平、左近之助、方々尋ねる。此のうち梅ケ枝、袴の紐の書付を見つけて、
梅枝　モシ〳〵、なんぢややら書付があるわいな。
左近　ドレ〳〵、懷中の物へも手をつけずに、つか扇子の類ひまで取り揃へてあるその中に、書付がふんにあらう筈がない。
トいひながら、梅ケ枝が書付を取つて見て、
ヤ、、神道を守る守屋公の御家來、富士左京之進行俊どの儀、この所に於て手に掛け申し候に相違無御座候。意趣は心に覺え御座候。いつなりとも名乘合せ、敵討の勝負仕るべく候。月日、左近之助どのへ、淺間左衛門照政。血判まで据ゑて添へ置きしは、疑ふ所もなき親人のかたきは淺間左衛門照政。
梅枝　ナニ、かたきは淺間とや。
左近　やかましい。
ト梅ケ枝を引廻し、下に置く途端に、
伊達　ソレ。
ト尻を端折る。　ひやうし。幕引く。

大詰　淺間屋形身替の段

役名——豐明親王。みのりの前の妹、うてな。腰元、萩乃。淺間次郎照時。ほうどん和尙 實ハ伊達平。淺間の妾紅葉 實ハ傾城梅ケ枝。淺間の妻みのりの前。聖德太子。淺間左衞門照政。富士左近之助行家。穴穗部の皇子。檢非違使勝船。弓削の小連。馬子大臣。奴筆助。縣主武晃。大和之助。据平。

本舞臺。三間の間、橋掛りへかけて、淺間左衞門館の體。正面に塗骨緞張障子、亭屋體に『夢殿』といふ額を打ち、東の方へ寄せて管絃太鼓を結構に仕立て飾りつけて、西の方に寄せて綺麗なる枝折門。幕の內より豐明親王、二疊臺の上に白木の經机に經文を載せ、これを讀んで居る。その側にうてな、裲襠衣裳。萩乃外一人の腰元△。その側に淺間次郎照時四立目の形にて控へ居る。祭唄にて幕明く。

うて　豐明親王さまへ申上げまする。この間のお氣詰まりことに毎日々々そのやうに、御法の文を御覽遊ばしてお入り遊ばされまするに依つて、御わづらひでも出ませうかと、それのみお案じ申上げまするわいなア。

萩乃　いゝ、うてなさまの仰しやる通り、いとしなげに、あのやうに大人しやかにして、お入りなさるゝを、見るさへ辛氣でなりませぬわいなア。

△　萩乃どののいふての通り、惡い事なさるゝ皇子さまや、守屋大臣さまが憎うて／＼ならぬわいな。

次郎　イヤ、コレ／＼、滅多な事いふまいぞ、もしや左樣な噂などあるやうに、外々へ聞えては、第一兄の淺間左衞門、却つて人の讒りを受くる。ことに今日豐明親王のお身の上の儀につき、穴穗部の皇子さま、この屋形へ臨幸とのこと、何事も控へて居らうぞ。イヤ親王さまへ申し上げます。今日は豫て御最期の定日、照政が心は存じませねども、同苗次郎照時、お側に罷りありますれば、いかやうな儀がござつても、玉體に恙なう供奉し奉り、國遠致す所存でござりまする。何とぞあなたにも、お心安くいらせられまするやうに、憚りながら願ひ上げ奉ります。

豐明　淺間次郎がこの程の心遣ひ、淺からねども、とても

とても覺悟の圓が命、たゞ經々をたよりとして、彌陀の御國へ急ぐばかり、この上のもてなしには、佛の教へを說く智識の、膝へ引導をよきに願うてくれいやい。う、聞かしやんしてか、次郎さま。何を申してもあの事ばかり、せめてものお心晴らし、善い御出家をこの所へお呼び申す、どうぞ仕樣はないかいな。

次郎　その御出家の事は、先達て申しつけ置いたれば、拙つけ此の處へ見える筈。それとても禁庭へ遠慮なれば、隨分內分にほう國法師の御弟子ほうどん和尙、御出家僧を承はり、申上ぐるでござらうわいのう。

　トいふ所へ、花道より、足輕走り出で、花道の中にて

足輕　申上げまする。ほう國法師の御弟子ほうどん和尙、お次へ通られましてござりまする。この處へ通しませうか、いかゞ仕りませう。

次郎　幸ひ〳〵。早うこの處へお供申してよからう。

足輕　畏まりました。

　トはいると、花道にて、

和尙　これは〳〵、足輕衆、いかいお世話でござりまする。然らば斯う參りまするかな。

　トいふ。管絃になると、花道より、ほうどん和尙、高座の上へ打敷を掛けて鈴、拍子木、本一册乘せて、衣に僧帽子、辻談義のなりにて出で來る。後より足輕八人つき出づる、直ぐに本舞臺へ來て控へる。

次郎　これは〳〵、ほうどん和尙。いざ、是へお通り下されい。

伴造　然らば罷り通りませう。

　ト和尙、正面に高座を控へると、親王備へ、淺間次郎うてな、萩乃、いま一人の腰元も寄る。下の方にて足輕殘らず控へると、和尙仔細らしく咳拂ひなして珠數を揉み、口元ばかり動かして拜んで、鈴を打ち、拍子を一つ打つて、

和尙　さて、いづれも御奇特でござりまする。とかく世の中は佛法でなければ參らぬ。拙僧なぞもこの七月は大分取込みました。今年取込んだので、一生樂々と暮らしますから、モウ、病人か無ければようござる。あんまりの事で弔ひが嫌になつて、どうぞ在家へ參つて、米搗の株か、ゴミ船の株でもあらば買はうと存じまする。

　ト高座を叩く。

皆々　南無阿彌陀佛。

和尙　たゞ念佛を申さつしやい。拙僧の師匠ほう國法師、

聖徳太子へ段々佛法を說かれても、いまだ世上へ弘まらぬに依つて、此のやうに高座をしつらひ、鍋鑄掛を見るやうに、持つて歩いて談義の切賣を致す。今日はこの處に置きまして、南無阿彌陀佛と申す、この念佛の謂れを詳しう各々がたの耳へ入るやうに申すでござらう。

ト高座を叩く。

皆々　南無阿彌陀佛。

和尚　先づ南無阿彌陀佛と申す六字は、物に譬へて申さうならば、丁半ちよぼ一の賽でござる。一二三四五六、これ南無阿彌陀佛六字をかたどり、生死の二つは白もく黑もく、迷へば長く下馬ばかりで鳥屋づけになり、覺れば錢金をかつて湯水の如く捨て、これを極樂といひ、佛といひ、勝負と掛けるにぐり錢は、六道四生の境、うければ蓮の臺に到り、取られ目なればはつと思つて、南無阿彌陀佛に思はず知らず自然と申すが佛法の不思議。むざいじくもくかいるまたつけがわいどもくのびさなだもんきれ、とお說きなされた。

皆々　南無阿彌陀佛。

和尚　冥加錢々々々。有難いお談義でござる。隨分と信心して、冥加錢々々々。

ト云ふ所に奥より、梅ヶ枝、褊襠衣裳にて出で、

和尚　兎角この世は假の宿り、嫁は舅へ孝行がよし、舅は嫁を隨分と我が子の如くいたはるがよし、女房は亭主を大切にかけ、亭主は女房を可愛がり、好きなものを食はし、何くらからずたんのうさせるが、身代の。

足輕　反魂丹齒磨き御用ならば、この間にお買ひなされませ。

和尚　左樣々々。

トいひながら梅ヶ枝と顏見合せて、和尚ビックリする

梅枝　ヤア、そなたは。

和尚　コレ〱、滅多な事をいふまいぞ。拙者はう國法師の弟子、ほうどん和尚でござるぞ。豐明親王の御信心によつて、談義を說きに參つた、生き如來も同然な、尊とい出家でござるぞ。

梅枝　テモさても、思ひもよらぬほうどん和尚さま。何はともあれ、豐明親王さま申し上げまする。奥より淺間左衞門、申し越しましたるは、おしつけ皇子さまのお入りなさるゝでもござりませう程に、暫らく別間へお移り遊ばされませいと、申しつけましてござりまするわいなア。

親王　淺間左衞門が申す事もあらば、照時、次ぎへ行から

わいのう。
次郎　然らば別殿へ渡御なりませい。ほうどん和尚、大儀。
親王のお入り。
親王　かた〳〵、こなたへ。
ト下りはになり、親王、次郎、うてな、萩乃等はいる。足輕、花道へはいる。
梅枝　そなたは伊達平ではないか、そなたは〳〵、どうして此處へおぢやつたぞいのう。
和尚　どうしてこゝへ來たえ。コレ、どうして此處へ來るものでござりまする。下に居さつしやい。下にござい。こなたのやうな女での分らない女はない。富士左近之助さまの爲めには、淺間左衛門照政は親御のかたき、そのかたきの內へ奉公に來るやうな、途方もない事があるものか。サ、どういふ事でこゝへ來たのだ。言譯さつしやい〳〵。サ、言譯が立たないければ、こなたを伊達平が免しやアしない。サ、どうだ。サ、どうだ。
梅枝　尤もぢや〳〵。これには段々言譯があるわいな。淺間左衛門照政は、豐明親王を我が屋敷へ供奉し奉り、御首を打たねば、穴穗部の皇子のいひつけを反くとて、切腹せねば濟まぬわいの。

和尚　然らば、親王の首打ち奉らねば、かたきの淺間は切腹を致すとな。
梅枝　サ、ぢやによつて此の屋形へ梅ケ枝が奉公、いよいよ切腹に極まらば、それと夫の左近之助さまへ知らす心で、入り込んで居るのぢやわいな。
伊達　いかさま、さう聞けば御尤でござりまするわいの。
梅枝　必らず惡う思うてたもらぬがよいぞや。
伊達　それは言譯が立つたやうでござりまするが、まだ言譯が立たぬ事がござりまする。
梅枝　何が言譯が立たぬぞいの。
和尚　お前のこゝへござつたのは奉公でござらうがの。なんぼ淺間左衛門どのが、心の堅い侍だといつて、側へお前を寢かして置いて、三晩や四晩はこたへても居ようが、モウ、ござつても二十日餘り、そのうちに一度か二度は、言譯の立たぬ事もなくつてどうするものだ。なぜ、奉公こそ多けれ、妾奉公にはござりました。
梅枝　サ、それは。
和尚　どうだ〳〵。言ひ譯がござるかな〳〵。
梅枝　それにも言譯があるわいな。たとへ、淺間左衛門の側へ寢ようと、この身は儘、わしと是まで懇ろにして居

やしやんした照政どの、どうして其のやうな、譯の悪い事をさしやんすやうな、また侍でもないわいな。

和尙　ソレ〳〵、そのやうに敵の淺間を閣はつしやれば、なほ合點が參りませぬ。

梅枝　いゝやいの、この梅ヶ枝が心のたけを、くはしう明して來たものを、どうして其のやうな未熟な事があらうぞいな。

和尙　成程。富士左近之助が女房の梅ヶ枝と知つてゞなければ、この屋形へも置かぬ筈。さりながら言葉ばかりぢやア、お前も旦那へ言譯がござるまい。ようござりまする。斯うなされませ。淺間左衞門が屋形へ切腹の善惡をたゞしに來たその爲めの妾奉公と、言譯の立つその仕樣は。

梅枝　どうすればよい事ぢやぞいの。

和尙　淺間左衞門が家の重寶、聖德太子より賜つたる都見ずの笛に萬秋樂の傳授の一卷、この二品のその一つ、どちらなりとも盜み出し、この伊達平へ渡さつしやりませ。それでお前の心ざしが、旦那へ立つといふものぢやアござりませぬか。

梅枝　成程、夫への言譯に、都見ずの笛、萬秋樂の傳授の一卷。

和尙　二品の內、その一つ。

梅枝　わしが盜んでそなたへ渡さう。

和尙　お出來しなされた。

梅枝　コレ。

和尙　ございませい。

梅枝　ソレ。

ト唄になり。梅ヶ枝奧へはいる。和尙あたりを見て。

和尙　聖德太子の祕藏ありし都見ずの笛、萬秋樂傳授の一卷、この二品のうち一いろさへ盜み出す梅ヶ枝どのゝ心なら、妾奉公に來たも實定。この上は淺間左衞門が切腹の實否を聞き、旦那へ注進するがこの上の奉公。ソレ。

ト和尙奧へはいると、このうち、足輕、樣子を聞き、一度々々にビックリする事あり、俄かに鉢卷をして股立を取り、六尺棒を振廻して、

足輕　サア〳〵、とんだ事だ〳〵。聞けば聞くほど、ビクビクする事ばつかり。斯うしては居られぬわい。旦那淺間左衞門照政さまのお家の重寶、ア、、なんとやらいつたわへ。ソレ〳〵、よう〳〵思ひ出した。なんとやらのなんとやら、そしてなんとやらのなんとやら、この二品

のなんとやらをなんとやらすると云つた。あの新參のお姿になんとやらされてはお家が立たぬ。これから直ぐに旦那淺間左衞門さまへ、このなんとやらの譯を言はうか。イヤ〳〵、表門裏門をしめて、今の伊達平和尙を搦め取らうか。イヤ〳〵、旦那へ言はう。イヤ〳〵、門をしめよう。イヤ〳〵、旦那へ。イヤ〳〵、門を。イヤ〳〵、門を。イヤ〳〵、旦那をしめようか。イヤ〳〵、門へいふがよい。心は一つ身は二つ。進退こゝに極まつたか。ハテ、なんとせう。

トいふうち、バッタリと物音する。足輕驚くうちに井筒の内より、みのりの前、四立目の形にて出で來る。足輕みのりの前を見て、ビックリする。直ぐに後ろから棒で打つて掛る。みのりの前、その棒を打ち落す。取りに行かうとして、みのりの前が顏を見て、

足輕　ヤア、お前はお奧さま、みのりの前樣ではござりませぬか。

みの　コレ〳〵、此のやうなりで、こゝへ來た事を必ず人にいふまいぞ。

足輕　その儀はちつともお氣遣ひなされまするな。たつた今聞いた事さへ、さつぱりと忘れて仕舞ふやうな、物覺えのよい男。嗜んで言はぬでは無くつて、忘れる方でござりまするから、ちつともお氣遣ひなされまするな。

ト立派にいふと、

左衞　誰も居ぬか。小姓どもは居らぬか。

みの　ヤア、あの聲は淺間左衞門照政どの。

足輕　マヽヽ、お前は外へお出でなされませい。

みの　外へ行くにも内へはいるにも、このやうなりでは詰らぬものぢやわいな。

足輕　マア〳〵、お出でなされませい。旦那がこゝへお出なされまするわいの。

ト無理やりにみのりの前を枝折の外へ突き出すと、管絃になり、正面の障子を引上ると、この内に聖德太子白練の壺折衣裳にて中啓を持ち、立つてゐる。その側に淺間左衞門照政、上下衣裳にて聖德太子を留めて居る。

左衞　憚りながら淺間左衞門照政が、申し上ぐる儀を御取上げもなく、コリヤ、いづかたへ渡御なりまするぞ。

太子　そちが諫めは去る事なれど、今日この所へは穴穗部の皇子のお入りの由、さすれば、聖德太子これにありと聞えなば、照政がこの上の心遣ひ、そこを思ふていづ

くへなりとも立越えんと思ふ心ぢやわいのう。

左衛　君、天が下を知ろし召せば、この日本の森羅萬象、只眼前にあるが如し。また穴穗部の皇子、王位につかるるものならば、普天の下率土の濱、則ち皇子のものならずや。たとへ、いづかたへ渡御なりませうとも、御在所を求め、御身に害なすものならば、某を佛敵に致せ、頂きを撫づるより易きこと、某がこの庵を石城鐵桶と思し召し、忍びあつて、先づ〳〵これに入らせられませう。

太子　さほどまで照政が、申すこと聞入れぬも本意ならず、この上ともに善きに計らうてたも。

左衛　ハア。

太子　これにつけても案じらるゝは、豐明親王。今日こそ彼れが最期の定日、太刀取するは淺間左衛門、愈々そちが手に懸けて、宮が首打つ心かや。

左衛　一旦皇子の御前にて、畏まり奉つたと、左衛門領掌致せしは、物部の守屋、穴穗部の皇子、そのほか徒黨の悪公家ばら、聖德太子を無き者にし、一天下を彼等が治めんと重ねて計りし佛敵のきざし。これによつて左衛門照政、馬子の大臣と閑談なし、とくより豐明親王の御身替り、倅調子丸を立てんと存じて、諸人の心つかざるやうに、先だつて女房みのりの前へ倅を預け、片岡山へ捨て置きましてござりまする。

太子　さてこそ思ひ合はすれば、この間、片岡山のほとりにて、それと知つたるふたりの非人。

左衛　照政が妻みのりの前、倅調子丸、まさかの時の御身替り。

太子　そんなら弟が身替りに。

左衛　コレ、滅多な事を、御意なされまするな。

ト　あたりへ氣をつける。枝折戸の外のみのりの前を見て、

何者ぢや。それに居るは何者ぢや〳〵。

みの　ハイ。

左衛　合點の行かぬ、挨拶に及ばぬは何者ぢや。

ト　左衛門が立つて、枝折門を開ける。みのりの前顔見合せて、見苦しきなりゆゑ袖にて蔽ふと。

その方はみのりの前か。

みの　ハイ。

左衛　豫て一首を添へ遣はしたる、歌の心を酌み合せて、倅調子丸が首打つたか。

みの　ハイ。

左衛　出來した〳〵。それでこそ身が女房なれ。元の通りの夫婦ぢやぞ。幸ひ〳〵、あれに聖德太子の御入りなさるゝ程に、お目見得も願うて吳れう。サ、みのり、こちへはいれ〳〵。

ト左衛門は調子丸が首を打つて來たと思ひ、無上に喜んで、みのりの前を內へ入れようとする。みのりの前は身に誤まりあるゆゑ、內へはいりかねる。左衛門それを知らずに、

ハテサテ、其のやうなりでも少しも苦しうないわいやい。ハテサテ、忠臣のためには非人ともなり、乞食ともなり、粉骨碎身するが家來の役目。その襤褸こそ、君の爲めには錦も同然。サ、、、これへ〳〵。

ト無理やりにみのりの前を內へ連れてはいる。左衛門太子の前へ行き、兩手を突いて、

聖德太子へ申上げまする。拙者が女房みのりの前、只今豐明親王の御身替りに、忰調子丸が首打つて、只今是へ參りましてござりまする。何とぞお言葉を下されませうならば、有難うござりまする。

太子　何が、さて〳〵、豐明が爲めに、我が子を打つたと聞くからは、挨拶せいでなんとせう。早うこれへ呼んでたも。

左衛　ハ、ア、サア〳〵、太子にも殊の外お喜び。有難い事ぢやと思ひ、早う、お目見得〳〵。

みの　ハイ。

左衛　ハテサテ、何を其のやうに愚圖々々する事はないわい。サ、、、、いそ〳〵として。所詮調子丸が命はこれまでの約束、忰を持たぬと思へば、そなたやわしも濟むわいの。サ、、、、くよ〳〵と思はずとも、早う早うお目見得〳〵。

みの　ハイ。

左衛　どうぢや〳〵。

みの　ハイ。調子丸が首は私が持つて參りました。

左衛　さうであろ〳〵。サ、、穴穗部の皇子、この處へお入りなされぬ前に、改めて見るがよい。サ、早う出しや〳〵。

みの　ハイ。

左衛　サ、その首は。

みの　サア、その首は。

左衛　サア。

みの　サア。

左衞　サア〳〵。淺間左衞門へ渡せ。
みの　ハヽア。
ト大泣き落し。左衞門合點の行かぬ思ひ入れにて、あたりに氣をつけて首を探す。どこにも無きゆゑ、みのりの前を引寄せて、
左衞　ヤイ、おのれは忰調子丸が首は持つて來ぬな。聞こえた。短册に書きし一首の心を覺り、未練が起つてお身替りの御用に立てまいと、忰を匿ふか。但しまた淺間左衞門照政が胸中を、かたきの方へ告げ知らせ、調子丸ともに虜となせしか。サ、ありやうに拔かさう〳〵。
ト左衞門せく。みのりの前やう〳〵顏を上げ、
みの　こつちの人、この身に言譯はござんせぬ。二人が中の一人の忰、調子丸は犬死も同然。首を人手へ渡したわいのう。
トいふうちに左衞門せき上ぼせ、
左衞　ヤア〳〵〳〵、忰調子丸が首を人手に渡せしとや。
みの　ハイ。
左衞　ソリヤ、何者に〳〵。
ト立ち懸り、反りを打つと花道にて、

左近　物部の守屋が家臣、富士左京之進行俊が忰、富士左近之助行家、淺間左衞門照政どのへ見參。
ト本神樂になり、花道より、左近之助、上下衣裳にて首桶を抱へ、その上に御衣を疊んで載せ、花道の中まで出で來る。
左衞　珍らしや、富士左近之助。淺間左衞門に今の對面、何故なるぞ。その仔細を。
左近　それへ參つて逐一にお話し申さう。御免なされい。
トまた神樂になり、本舞臺へ來る。
みの　ヤア、お前は左近之助行家どの。
左近　コレ〳〵〳〵、賤しい非人に挨拶はないぞ。
みの　ぢやといふても、忰調子丸が首を、
左近　コレ〳〵。調子丸が首とは、豫てこの屋形へは豐明親王を供奉し奉り、今日御首打つて穴穗部の皇子へ渡さいでは、淺間左衞門照政の切腹は必定。何とぞ斯くいふ左近之助、照政どのゝお命を助けたく、片岡山にて短册の一首、いかるがや富の小川の絕えばこそ、我が大君の御名は忘れめ。その上の句の五文字にいけるといふ字の一字より、富と云ふ字の留めるを案じ、小川の文字のお替りと書きつらねたるその內に、お替りを立つて生を留

むると、心を込めたるその謎を、解いて打つたる親王の首、我が大君のみなは忘れず、今日只今持参致せし富士左近、浅間どのへの寸志でござる。

左衛　スリヤ、いかるがの上の句を、讀みおほせたる謎の身替り、左近之助が打ち召されたか。

左近　貴殿の切腹を留めうため。

左衛　行家の心ざし、忘れは置かぬ、忝ない。

左近　イザ、照政どの、受取り召されい。

ト舞臺に在合せたる經机の上にて、首桶を開ける仕掛けにて、調子丸が本の首を出す。左近之助それより花道へ控へ居る。みのりの前泣き伏して、その首を見ようと立懸る。左衛門それを隔てる。このうち合ひ方あつらへあり。聖徳太子、左衛門の顔を見てホロリとする。左衛門、調子丸が顔を見て、胸に涙を持つて笑うて居る。暫らくためらうて、

左衛　富士左近之助、悴調子丸、まだ幼少でござれば、最期の砌は、さぞ未練な體でござつたらう。

左近　切腹致した。

左衛　エ。

左近　調子丸は、親王の御身替りと聞いて、見事に切腹致した。

左衛　イヤ／＼、それはそのもとの御挨拶でござらう。まだ幼少ゆゑ、腹を切りまするすべは存じますまい。

左近　左の脇腹より右へ引廻し、キリ／＼／＼と、それは見事に。

左衛　あの僅か五寸か六寸の、幼なき腹を。

左近　おとなも及ばず。

左衛　それは能う致した。

ト笑うて、みのりの前を突きのけ、扇子にて叩き

ヤイ、幼少な調子丸でさへ、主君の爲めには腹切つて死んだではないか。それに引換へ、女なればとて、掛けたる謎を解き居らず、うか／＼とアダに悴を養育して、首打つ事もならぬ性根で、武士の女房、淺間が妻といはるるものか、いはれうか。言句に絶せし不所存者めが。

みの　ソレ。

ト左衛門が刀へ手を掛け、自害せうとする。左衛門の刀を引つたくり放して、

左衛　自害するは義に迫つて、人間のする事、淺間左衛門が屋形へその儘でうせて、言譯もなきおのれ、どういふ心底か詮義がある。自害さする事はならぬ。それに控へ

て居らう。太子へ申し上げまする。親王の御首、イザ叡
覽。
太子　凡そ人の身の上に八苦の中に忍び難きは愛別離苦の
悲しみ、權者實者も共に是を悲しむものを、況んや流轉
冥執底下の凡夫、親子の別れはさこそ〳〵。不憫の者の
有樣ぢやなア。麿、世運を開くならば、當國斑鳩のあた
りへ、一ト木の松を植ゑ、舍人調子丸が塚として、永く
供養をし取らせん。南無阿彌陀佛、々々々々々々。
ト合掌すると、左近花道よりツカ〳〵と來て、左衞門
に詰め寄り、
左近　淺間左衞門照政、首實驗過ぎたる後は。
左衞　その方が申すまでもない。某は富士左京之進行俊を
討つたる、左近之助が親のかたき。
左近　名乘り合せて。
左衞　勝負をせう。
左近　しかと左樣か。
左衞　おんでもない事。
左近　それまでは淺間。
左衞　富士。
左近　待つて居るぞよ。

左衞　君には先づ入らせられませう。
ト唄になり、太子、左衞門、首桶を持ち、左近詰め寄
せ、奧へはいる。みのりの前ひとり殘り居る所へ、奧
よりほうどん和尙以前のなりにて出て來て
和尙　ヤレ〳〵、こゝの屋敷はあたじけない屋敷だ。否だ
といふのに、一文もお布施もくれず、米を一つかみ報謝に
入れないといふもきつい者だ。此のやうな所に久しく居
たならば、どんな目に遭はうも知れない。いざさらば寺
へ參つて、くちのこでもかすらうか。
ト云ひながら、みのりの前に行き當り、みのりの前を
見て、
和尙　誰だ〳〵、つがもない所に寢て居たものだ。こいつ
は美しいものだ。ドレ、ちつと氣味やつて見べい。〇コ
レ、見れば貴樣はきたないなりで、こゝに居るが、なん
だ。
みの　サア、自らは。
和尙　ナニ、自ら。
みの　いくやいの見ず知らずのわたしを、何者ぢやと聞か
しやんすお前は、マア誰ぢやえ。
和尙　おらア伊達平。

みの　エヽ、御出家の名に伊達平とは。
和尚　いんにや、伊達平ぢやアない。愚僧はほう國法師の弟子ほうどん和尚。
みの　それでも、いま伊達平と。
和尚　サア、伊達平といつたは。サア、伊達平蝨も好き好き、わしやア好きました。
みの　何を好かんしたえ。
和尚　貴様をたつた今こゝへ來て見ると、なんだか物案じ姿、心は濟むまいが、なんとわしを、貴様の亭主に持つちやア下さるまいか。
みの　何を阿房らしい。御出家を男に持つ事がどうしてならうぞいのう。そしてわたしは。
和尚　賤しい乞食といふ事は、隨分合點でえす。貴様は非人、おらあ坊主。還俗すると足を洗ふと、上と下を直せば相應な夫婦仲。いやではあらうが。どうぞ嗅になつてくれなさいよやよ。
ト抱きつく。振放して、
みの　あたイヤらしい、下らぬか。なんぼ此のやうなさもしいなりで居ればとて、かたじけなくとも聖德太子の隨身、淺間左衛門照政が妻みのりの前に向うて、不義いたづらを言ひ掛かるその方は何者ぢや。
和尚　わしやア知れたほうどん和尚、裏店でこそあれ、今井まちの二丁目、見たおし屋の裏に月に二百五十で、奥行九尺に間口一間のたなを借りて居る。瘠せても枯れてもその內の主でえす。貴様はなんだ。淺間左衛門どのの女房だの、奥方だのと、なんぼ味噌を上げても、この屋敷を叩き出されて片岡山で乞食をして居たれば、今ぢやアぬしのあるからだぢやアない。その上に此の屋敷の淺間さまは、貴様の替りに紅葉といふ妾を置いて、朝も晩も樂みころして、ほんのちん／＼紅葉どの。そんならば貴様はぬしのない身、女房になつても大切ない。不義でもいたづらでもごんせぬよ。サア／＼、返事をしてくんなんし。
みの　なんといやる、そんなら淺間左衛門どのは、アノ紅葉といふ。
和尚　貴様の替りに妾狂ひ。
みの　エヽ、聞えぬわいなアこちの人。それ、其やうな事があるに依つて、このわしを脇へいなして、ようも／＼妾狂ひをさんすの、それを聞いて愈々こつちから緣を切らねばならぬわいの。コレ、そなたを賴む程に去狀取つ

てたも、離縁状を取つてたも。わしも秦の川勝といふれつきとした樂官の娘。可愛いと思ふ子には別れ、この屋形にて何を樂みに苦勞せう。サア、去狀取つてたも。
和尚　そんなら淺間左衛門どのゝ妄狂ひが腹が立つに依つて、去狀取つてくれろと、わしを賴まつしやるのかえ。
みの　いかにも去狀さへ取つてたもつたならば、そなたの女房にならうわいの。
和尚　お前そりやアマア、ちゝらくぢやないかへ。
みの　この段になつて、どうして嘘を云ふ者ぢやぞいの。
和尚　それさへ聞けばようごんす。去り狀取つてやりませう。
みの　忝ない〱。コレ、その去狀を取る時に、萬秋樂の傳授の一巻、この屋敷へ祝言して來るその折柄、父さん秦の川勝さまより、淺間左衛門照政どのへ、土産につけて贈られし家の祕書、その一巻も縁切るからは、こちへ受取つて貰ひたいわいの。
和尚　そんなら秦の川勝どのより、貴樣につけてよこされた、萬秋樂の傳授の一巻を、去狀と一緒に取つて吳れろといはつしやるか。
みの　人の心のありたけを云はせて置いて、こなさん、わしを欺すのぢやないかえ。
トいふうち、ほうどん和尚、衣の下より脇差を出して小指を切つて、頭巾を脫いで、きつと思ひ入れ。
和尚　身體髮膚を父母に受け、敢て毀ひ傷らざるを孝の始めとす。伊達平といふ色奴が、こなさん故にこの指を斯うは誰がした四本牛、心ざしでごんす、取つて置いて貰ひませう。
みの　思ひ掛けもないこの指、此のやうな堅いかための心中見ては、心のたけを打明けて。
和尚　言ふ事もあり。
みの　聞く事も。
和尚　ありの思ひの。
みの　天幸さん。
伊達　崎さん、先へござりませう。
ト唄になり、みのり小指を持ち、和尚の伊達平と連れ立ち奥へはいると、この唄を借りてバタ〱にて、左近之助、梅ケ枝出でて來る。
左近　ヤレ〱、梅ケ枝、能い所で逢うた。くはしう文で知らせてたもつたに、落着いては居たれども、なにをいうても、遙か隔つて居るに依つて、かたきの實否も聞き

たし、又そなたにも逢ひたさに、はる〴〵此處へ來たわいの。

梅枝　それは能う來て下さんした。のう、わたしもお前が懷しさ、ア、今日はどうして居さんする、後月の今頃は氣の揉めた最中、早うわたしの身の上の事が片づいて、一つにならるゝ事あらうか、イヤ〳〵、なんぼいうてもわたしは浮れ女、淺間さんのお妹御は、御器量といひ、お家柄といひ、大方ぬしの方へ、入札が落ちるであらうと、心も心ならず、願掛けやら鹽絶ちやら、ほんに今思へば、憂しと見し世ぞ戀しいわいなア。

左近　戀しい競べなら、おれもちつと言はせてくりや。この左近之助は親仁どのを淺間に討たれ、御主人守屋公より、仇を討たずば主從の緣を切るとの嚴しい云ひつけ。どうせうか斯うせうかと、堺の屋敷に居るうちは、おれはたつた一人、百ケ日までの精進で、食ひ物は食はれず、琴か三味線は世間への遠慮、淋しい餘りに、そなたによこす文ばつかり書いて居たに依つて、明けても戀しく暮れても戀しく、廿六日の文に、大和へ來る事は暫らく待てと書いてあつたに依つて、待てといふなら何年までも、柳せんばの枯るゝまでも待たうと思うて居たけれども、淺間左衞門が身の上に、もしや凶事もあらうかと、心ならず來たわいの。

梅枝　マア、ゆるりと一ツあがれ。〇ヤレ〳〵、マア、能うまめで居て下さんした。何より言はねばならぬ事は、淺間左衞門が身の上、お前と名乘り合うて勝負する氣でござんすぞえ。

左近　いかさま、それは其うありさうなもの。日頃から心ざしの正しい照政、親仁さまを手に掛けたに相違なければ、勝負せまいとはよもや言ひそもないものぢやわいの。

梅枝　まだ〳〵言はねばならぬ事があるわいなア。コレコレ、この袱紗に包みし御笛は、聖德太子御祕藏ありし都見ずの笛、この屋のあるじ淺間左衞門照政へ下し給はりしとて、大切に祕め置きしをこの梅ケ枝が、この屋形へ身のいたづらに來ぬといふ妾奉公の言譯に、人目を忍んで盜んだわいなア。道ならぬ事とは思へども、伊達平が其うせいといふたに依つて、コレ、此處へ富士さん、持つて來たわいなア。

ト袱紗に包みし笛を左近へ渡す。左近、笛を取つて戴き、

左近　エヽ、有難い。この笛こそ、聖德太子自ら製し給ふ所の都見ずの笛、先いつ頃、淺間左衞門へ下し置かれしとは聞き傳へたれど手に取り上ぐるは今が始めて。然りながら、かりそめに我々が取扱ふものならず、たとへ伊達平が申しつけうとも、淺間左衞門が家の重器、盜み取つて來るなどは、女に似合はぬ不屆き千萬、殊にかたきのこの屋形、紙一枚、左近之助が爲めに失せたといふては、この行家が武士が立たぬ。淺間左衞門照政は、住吉に於て親仁さまを手に懸けし折柄、懷中の品提げ物まで取揃へて置いたるも、侍の名を惜み、後の聲を思うての事。その淺間左衞門が家の重寶をどうして奪ひ取らるゝものぢや。サヽヽヽ、早う元の所へ置いてたも〳〵。

梅枝　そんなら都見ずの笛を。

左近　元の處へ納めて置きや。

　　トいふ所へ、奥より伊達平バタ〳〵にて出て來て、

伊達　若旦那、左近の助さま、是にお出でなされますか。

左近　ヤア、その方は。

伊達　お草履つかみの伊達平でござりまする。

左近　ヤレ〳〵、久しや〳〵。そなたもまめであつたか。

伊達　あなたにも御機嫌ようとは申すものゝ、大旦那を淺間左衞門に討たれ、是までのお心遣ひ、さりながらお喜びなされませい。今宵中に手引して、かたき淺間を討たせてやらうと、この伊達平によい荷擔人が出來ましてござりまする。

左近　それは何よりの喜び、いよ〳〵今宵手引して。

梅枝　淺間左衞門照政を。

伊達　念ならお討ちなされませ。

左近　エヽ、忝けない。

伊達　コレ。

　　ト囁き、左近之助思ひ入れして隱れる。

梅枝　コレ〳〵、そなたの云ひつけで盜み取りは取つたれども、戻して來いと富士さんが言はんした、都見ずのコレ此の笛。

伊達　ドレ〳〵、これが聖德太子のお造りなされた都見ずの笛でござりますか。ヤレ〳〵、結構なお笛でござりまするのう。

　　ト戴き懷中する。

梅枝　コレ〳〵、そなたはその笛を。

伊達　おれがぼつぼへ納めたものさ。

梅枝　そんならそなたは。
伊達　富士左近が家來伊達平。梅ヶ枝どの、こなたを生けて置いては主人の足手纒ひ、くたばつてしまはつしやい。
ト梅ヶ枝を引寄せて、膝へ上げて締殺さうとする。
梅枝　待つてたも〱。
伊達　この段になつて待つてくれろとは甘口な。夫のいとしい可愛いも跡でよいやうに云つてやるべい。ト思ひに死んで仕舞へ。
ト梅ヶ枝を無理やり締殺し、死骸を椋の木のうろに隠して居る所へ、みのりの前、衣裳補襠にて出て來る。伊達平に行當り、顔を見合せて互にビックリする。
みの　そなたは伊達平。
伊達　お前はとんだ處へござりましたの。
みの　來いでわいの。早う去狀取つてたもいのう。
伊達　取つて上げませう〱。
みの　サア、そんならわしと一所に、淺間左衛門へ早う會うてたもいの。
伊達　成程、會ひは會ひませうが、わしはおまへの何だといつて會つたものであらう。
みの　そりやよいやうにいうたが能いわいの。
伊達　よいやうにいつて、店うけとはいはれまいし、人ぬしとは云はれまいし、こいつにちつと困つた村の三左衛門だわへ。
トいうて居る處へ、管絃になり、奥より、左衛門、次郎照時、うてな出て來る、みのりの前見つけて伊達平に囁く、伊達平呑込んで左衛門の側へ行き、
伊達　淺間左衛門照政どの。わしがちつと會ひたうござんす。
次郎　つひに見馴れぬ者ぢやが、その方は何者ぢや。
伊達　わしやア、みのりの前の里から來ました。
左衛　その方は富士左近が家來、伊達平ではないか。
伊達　サ、それは。〇成程、伊達平は伊達平でごんすが、今は伊達平をころんで富士左近が家來ぢやアごんせぬよ。
左衛　シテ、何者ぢや。
伊達　秦の川勝が爲めには現在の甥、みのりの前のためには從兄妹同士。一家のよしみに、淺間どの、わざ〱貴樣に會ひに來ましたて。
左衛　みのりの前は、今まで斯くいふ照政が妻女たれども、今日まで、その方こと一族と云ふ事を聞かなんだ

が、ハテサテ、従兄妹同士であつたよな。
伊達　親は泣きより、ロクでもない事が出來たによつて、そこで名乘つて來たものさ。早速いひませうが、淺間どの、みのりの前を出す心なら、去狀を貰ひませう。
左衞　なんと。
伊達　イヤサ、三くだり半の一札、去狀を書いて貰ひませう。
左衞　スリヤ、秦の川勝の娘、みのりの前を不緣するについて、一札をくれいとか。
伊達　それを貰ひに來ました。
左衞　返す／＼も不屆きなみのりの前、何者か知れぬ者を拵へ、離緣狀を取らんとは憎つくい奴の。
伊達　コレ／＼、其のやうに何も惡びれた事をいふ事はごんせぬ。わしだといつても、お身さまの前だが、尻宮について味にからんで物をいふやうな利のわるい者でもごんせぬよ。去つた者なら去つたやうに、男らしく御定目の通り、去狀書いて寄越したがようごんす。
うて　コレイナア、姉さん、お前はマア、どういふ心でござんすぞ。愛憎の盡きたお前の方から、詫び事はさんせいで、去狀を取らうなどとは、ほんにあきれて物が云はれぬわいな。サ、どうした事でござんす。譯をいうて下だんせいな。
みの　譯ぢやというて、これが斯うぢやと何にもいふ事はない。そなたも知つていやる通り、淺間左衞門どのゝ妾狂ひ、あの紅葉といふ女を內へ入れうとて、科もない此のわしを、外聞の惡い、片岡山へ捨てさんした、その胴慾さ、心つよさ、淺間しい非人とまでなり下つたは、みんなぬしの手前勝手、めかけ手かけが入れたさに、わしをこの屋を逐出して仕舞うて、跡で樂しやんす心ぢやもの、去狀取らいで何とせう。嫌にならいで何うせうぞいの。サ、そなたもわしも一所に、父さまの處へあゆびやいの／＼。
うて　姉さん、それがお前が惡いわいな。あの女ごを內へ入れさんしたにも、段々譯があるわいの。どうして子仲まであつたお前を、眞實ぬしが其うしやんすものかいの。
みの　そなたまで其のやうにいふかいの。好きこのまぬものが、わしをいなして跡へ妾を入れさんすものかいの。
うて　それがお前の廻り氣ぢやわいな。
みの　廻り氣ならば廻り氣にして、サ、わしと一所にあゆ

びや。
うて　お前と一つには行かれぬわいの。
みの　どうして一つに行かれぬぞ。
うて　照政さんに何にも悪い事はないものを、どうして一つにいなれうぞいの。たとひお前と姉妹の縁は切つても、わたしやほんの兄さんぢやと思うて居るによつて、無理な事いはしやんすと、わたしやお前には構はぬわいなア。
みの　そんなら、わしと姉妹の縁は切つても。
うて　ほんに兄さんぢやと思うて居るわいな。
　トつんとする。
みの　そんならそなたの勝手にしや。サ、照政どの、さつぱりと縁を切つて、去狀書いて下さんせ。
左衞　スリヤ、去狀がほしいぢやまで。
みの　ほしうて〳〵、ほんにぞく〳〵してほしいわいの。
左衞　伜を失ひ、せめて跡の回向をして取らせんと思ひ居らいで、離緣狀を望む不所存者、未練は殘らぬ、去狀くれう。
　ト合方になり、硯箱を引寄せ去狀を書いて、
持つて失せう。

みの　失せいでは。サア、去狀取つたからは、わしが三昧、どこへ緣づかうとも好きぢやわいの。ヤレ〳〵、嬉しやの〳〵。これから、お前もてかけを百人も二百人も置いたがよい。わしも又、これから男妾を三百人も四百人も、五百人も六百人も、千人も萬人も持つて樂まうわいの。
伊達　去狀取つたれば、マア、それでざつと手は切れたと云ふものだ。これからは土產に持つて來た萬秋樂の傳授の一卷、たつた今持つて行くべい。去狀へつけて此處へ出しやれ〳〵。
左衞　なんといふ。師匠秦の川勝どのより、みのりの前につけて贈られたる、萬秋樂の傳授の一卷、離緣狀に添へて戾してくれいとか。
伊達　返して下され〳〵。
左衞　女子の一圖の心から、去狀を取らんと申すは聞えたが、萬秋樂の傳授の一卷を、去狀と共にくれいと望むには、コリヤ、仔細が無けりやならぬわい。
伊達　仔細があれば、その一卷は返されぬか。コレ、淺間左衞門、女房につけて貰つた傳授の一卷が、女房を去つても返されぬか。

左衛　サ、それは。
伊達　どうするのだ／＼／＼。
　ト左衛門が側へ行き、足にて突き廻す。淺間次郎、ツカ／＼と寄つて、伊達平を突きのけ、
次郎　最前よりこれに控へ、樣子を窺ひ居る所に、兄淺間左衛門照政へ對し法外なる挨拶、あまつさへ土足を以つて斯かる慮外、無禮とや云はん、緩怠とや云はん。この上に雜言をぬかさば、舌の根切つて切下げるが、サ、みのりの前の一家と申すが、この方に覺えのない親類、そのあともとふもとも知れぬ萬秋樂の傳授の一卷、大切なる祕書は渡されぬ。この方より先方へ直き／＼に遣はさう。それまでは兄照政が渡してくれうとお言やつても、斯くいふ次郎照時がならない。離緣状取つてキリ／＼歸らう。その上にも一卷を受け取らんと申さば手は見せぬぞ。
左衛　イヤ／＼、次郎照時、控へい。是非受取らうと申さば渡してくれう。みのりの前も立寄つて、家探しをして持つて失せう。
伊達　家探しとは面白い。どこをせうどに尋ねやうより、貴樣の懷中から先きへ、ドレ、家探しをして見べい。

　ト伊達平立掛り、左衛門が懷ろを尋ねて、袱紗に包みし卷物を引出し、
さてこそ此の一卷。萬秋樂の祕書、コレ、これに違ひはあるまいがな。
左衛　ヤ、、、それこそ秦の川勝より、贈られし所の傳授の祕書、某が懷中に入れ置きし覺えはなきに、この所へ出づるとは、ハテ、いぶかしい。
伊達　去状と此の一卷を取つてしまつたからは、モウ、こつちに用はない。
みの　これでわたしが本望ぢやわいな。
伊達　さうであらう／＼。これで惡魔を拂つたといふものだ。
左衛　につくい奴の。
　トきめると「穴穗部の皇子さま臨幸」と呼ぶ。伊達平これを聞いて、みのりの前を連れ奧へはいると、花道より又呼ぶと、穴穗部の皇子、四立目のなりにて、沓を穿き出る。檢非違使勝船、上下衣裳にて股立を取り日傘をさしかけ出て來る。後より馬子大臣、冠裝束にて出る。◎――これも四立目のなりにて出る。後に仕丁大勢つき出る。左衛門、次郎、うな、出迎ふ。

直ぐに上座へ穴穗部の皇子通り、二重舞臺へかゝり、各々並みよくならぶ。

勝船　それに控へたるは淺間左衞門照政兄弟よな。今日豐明親王の御首討つて渡さんとの定日、すなはち檢視として、馬子の大臣、皇子のお連れなされたは、コリヤア、過意。

◎　それのみならず、この所への臨幸は、佛法に歸依する聖德太子へ仕へる淺間左衞門ゆゑ、心底のほど君にも頓に思召して、善惡を正さん爲め。

小連　見たか、斯くいふ弓側の小連が献げし所の眞筆は、穴穗部の皇子さまのお直筆にて、なされし所の神道の起請、神々の名を書き入れて、野心なきといふ趣きを認められ、淺間左衞門兄弟が、血判を取れとの勅諚。

左衞　委細畏まりました。さりながら、篤と宸翰の拜し、その上にて淺間左衞門照政、同苗次郎照時、御前に於て速かに血判仕りませう。

次郎　コレ〳〵、兄者人、穴穗部の皇子さまへ隨ひ奉れとの神文へ、只今血判なされては、聖德太子さまへ、何と仰せ譯をなさるゝぞ。

左衞　ハテサテ、そりや大事ない。

次郎　ぢやといふても、太子さまのお身の上。

左衞　ハテサテ、太子さまが皇子さまに換へられうか。小癪な事をいはずと、先づ〳〵控へて居やうぞ。淺間左衞門、お直き筆の神文へ、いかにも血判仕りませう。

勝船　淺間左衞門、血判せうとは神妙〳〵。

小連　その穴穗部の皇子さまの、自らなされしその文言、謹んで拜いたせ。

左衞　ハヽア。宸翰有難く拜し、恐れ多くもお直筆へ、斯くの如く血判。

穴穗　出來した〳〵。とてもの事に申しつけたる豐明親王の首、早う持て。

左衞　ハッ。今日討ち奉る定日、綸命もだし難く。先刻御最期を勸め奉り、親王の則ち御徵を申し下し、器へ移し奉り、御檢視を相待ち罷り在りましてござりまする。

馬子　スリヤ、豐明親王の御首を、淺間左衞門、そりや討つたか。

左衞　王命を背きませぬ照政が忠心。

次郎　コレ、兄者人、よもや〳〵と存じたが、スリヤ、親王の御首を。

左衞　討ち奉つたが何とした。
次郎　こなたは〳〵、人でなし、人外、畜生、十惡人、勿體ないといふ事も、恐れ多いといふ事も、こなたは知らつしやらぬかいのう。情ない。
左衞　穴穗部の皇子さまは、この日本を知ろしめす、人皇三十二代の天子、綸言は汗の如し、出でて再び返らぬ親王の御命、是非なく討つた。
次郎　エ、情ない。
うて　これいなア、照政さま。お前は〳〵、氣ばし違ひはせぬかいなア。おいとしなげに親王さまの御ぐしを申し下せしとは、エヽ、胴慾な心ぢやな。
左衞　役にも立たぬよまひごと、皇子の御前を憚らず、差出た事をぬかすまいぞ、イザ、親王の御首を叡覽に具へ奉らん。ドリヤ。
ト三保の神樂になり、左衞門、首桶をもつて舞臺の眞中へ置き、蓋を取る。
勝船　用明天皇第二のみこ、豐明親王の御首を討ち奉りし淺間左衞門照政、御褒美は追つての御沙汰、出來し召された。ナニ、馬子の大臣さま。イザ。
馬子　さても討つたわ。忠臣の照政、討つまじきと思ひしに、みごと彼れが御壽きを縮ちしは、すなはち君の定業歎くまじ〳〵。さりながら、斯かる尊顏を拜する事、國のけいはいと言はうか、諸佛薩陀の示し給ふぜんしよ得乘の爲めといはうか。ハテサテ、健氣に討つたなア。
穴穗　馬子の大臣。スリヤ、この首が麿が甥、第二の宮の豐明親王の首か。
馬子　ハ、ア。
トいふうち勝船、その首を踏みにじる。左衞門の足を取つて屹度思ひ入れ。
左衞　コリヤ、檢非違使勝船、何とする。
勝船　淺間左衞門のいけがたりめ。一人ならず、五人、十人、百人、萬人の目を掠め、僞せ首を渡すべいとは不屆きなやつの。穴穗部の皇子を蔑ろにする汝が振舞、まんまと食はせたと、うぬに駄味噌を上げられるが、この勝船はむやくしさに、そこで一番して見せるか、某が誤りか。
左衞　スリヤ、この首を僞せ物と。
勝船　睨んだまなこに掛つたる、この死顏の目の下の黑子、俗にいふ涙がかり、こくいを打つた眞つ赤いな僞せ物、

足にかけても大事ない。これにも淺間、返答があるか。
左衛　サ、それは。
勝船　なんと。
左衛　僞せ物でない正眞の豐明親王の御首。
勝船　何がなんと。
左衛　用明天皇第二の皇子、豐明親王と穴穗部の皇子さま
よりのお墨附があるわ。
勝船　ナニ、穴穗部の王子より、僞せ首をまことの首とい
ふ。
左衛　確かな證據はお墨付。
ト三方の藁人形についたる調伏の願書を出して勝船
に見せる。
勝船　そりやア。
ト取らうとする所を、勝船を左衛門見事に取つて投げ
る。あがる所を押へて、
左衛　この墨付があるからは、何と遁ひはあるまいがな。
穴穗　待て、淺間左衛門照政。斯くいふ穴穗部の皇子、豐
明親王の首へ添狀出した覺えはない。
左衛　スリヤ、先いつ頃、攝州堺、住吉の境內に於て、聖
德太子を調伏なされんこの願書。

穴穗　それは。
左衛　なんと覺えはござりませぬか。
穴穗　イヤ、覺えがない。得知れぬ物を取り出して、穴
穗部の皇子へ過言をぬかす不屆者。證據と吐かすが、そ
の願書に何の某と姓名があるか。イヤサ、調伏の願主が
あるか。
左衛　皇子さま、まだこの中を讀み上げもせぬうちに、願
主の姓名のない事を、どうしてあなたは御存じでござり
ますな。
穴穗　サ、それは。
左衛　なんと。
穴穗　穴穗部の皇子、聖德太子調伏の願書を書いた覺えは
ない。それにも確かな證據があるか。
左衛　サ、それは。
◎　證據がないと科人だぞ。
左衛　サ、それは。
勝船　サア、證據があるか。
穴穗　サア、覺えはないぞ。
左衛　サア。
皆々　サア／＼／＼、どうだ。

左衛　願主も無き墨付を。豊明親王の御首なりと、この所へ出したる淺間左衛門、腹切つて相果つる。イザ、介錯を頼み存ずる。
勝船　ドレ。
左衛　と云つたらばよからうが、其うまく行く照政でない。それと言はせまい爲めに、血判したる最前の神文。コレ、これが確かに皇子の直筆。
穴穂　サ、それは。
左衛　この直筆の神文と、この調伏の願書の手蹟と、墨色も筆法も、まことに毫厘も違はぬ。石に極印の確かな證據、僞もの首でない、まこと豊明親王の御首なりと、皇子さまのなされたる、御添へ状にはなりますまいかな。
穴穂　サァ、それは。
左衛　但し、太子を調伏の願主を詮議致さうか。
穴穂　サ、それは。
左衛　サア〱〱〱。なんと。
穴穂　豊明親王の首に違ひない。
左衛　スリヤ、この首が豊明親王の御首に相違ござりませぬかな。
穴穂　現在の叔父さまのいふ事に違ひがあるものか。

左衛　サア、あの通りだが、どいつなりとも言ひ分があるか。
穴皆　サア、それは。
左衛　なんと。
皆々　そんならいゝわさ。
左衛　つがもない。
馬子　豊明親王の御首に相違なくば、還幸あつてしかるべう存じまする。
穴穂　よしない所へ調伏の願書、言ひ分もあれども、折悪ければその分にさし置く。命冥加な淺間左衛門。方々、供の用意をせい。
皆々　ハヽア。
勝船　穴穂部の皇子の還幸。
トさがりはになり、穴穂部皇子、勝船、馬子大臣、ほか皆々、首桶を勝船抱へ、左衛門へ突きつけ、見せ散らかして向ふへはいると、奥より左近之助、以前のなりにて出で詰め寄り
左近　サア、淺間左衛門照政、豊明親王を助け參らせ、聖徳太子へ忠臣立つたるその上は、播州住吉にて手に懸け、左京之進がかたきと名乘り合して、勝負々々。

左衛　今は何をか期すべきぞ。佛法の仇たる守屋が家來、佛道に入りし淺間左衛門、國家の爲めに討つて捨てた。この所にて勝負を決し、互に討つとも討たるゝとも、運を天に任せて、潔く立合へ〳〵。

左近　百日が間に本意を遂げんと、心願こめし甲斐あつて、斯く出で合しは、まだも左近之助が孝道に叶ひし所淺間左衛門、覺悟せい。

左衛　返り討ちぢや、覺悟せい。

左近　われ覺悟。

左衛　われ覺悟。

兩人　どつこい。

ト是より立廻りあり、きつと止まると、向ひにて音樂を奏して、五色の花、舞臺一面に降り掛る。この音樂を聞いて左衛門、左近之助、思ひ入れ。

左衛　ハテ、心得ぬ雲井遥かに音樂の聞ゆるは、聖衆來迎す落日の前。

左近　五雲靉靆して六律整ひ、それかあらぬか、その内に、アレ〳〵、自然と具はる黃鐘調。

左衛　何事も漢土は賤しく疎くなれども、我々が學ぶ舞樂のみ、唐土に恥ぢずとは秦の川勝の申されしも。

左近　斯かる調子を聞き覺え、それと察するものやらん。

左衛　今こそ太子のおゝん時、斯かる妙音の聞ゆるは。

左近　おしつけ佛法世に弘まり、佛敵亡びん前表か。

左衛　本覺の佛は形なし。

左近　法性の神に姿なし。

左衛　姿形の見えざるに。

左近　おくおうぜんたるアノ色音。

左衛　アラ、奇相の。

兩人　有樣ぢやなア。

ト思ひ入れして、是より左衛門聞きつける。

左衛　ヤ、、淺間左衛門照政が家の重寶、聖德太子の製し給ふ、都見ずの笛に心を掛くるものありと、教へ給はる聲するは、まことに凡人ならぬ聖德太子の、名笛を惜ませ給ふものやらん。有難きお知らせよなア。

左近　ヤ、、川勝が家の祕書、萬秋樂の傳授の一卷、曲者あつて奪ひ取らんと計る由。アレ、物いふ如く聞ゆるは。

左衛　淺間左衛門へ仇なすものか。

左近　富士左近之助へ怨みあるものか。

左衛　都見ずの笛。

左近　傳授の祕書。
左衛　心を掛くる。
左近　曲者ありと。
左衛　不思議の知らせを。
兩人　聞く事ぢやなア。
　ト思ひ入れ。
左近　何にもせよ、親のかたきの淺間左衛門、觀念。
　ト切りつける。見事なる立廻りありて、左衛門、左近之助が振上ぐる刀の下へ大小投げ出して、
左衛　淺間左衛門、手向ひはせぬ。富士左近、マア〱、おまちやれ、逸まるまいぞ。
左近　逸まるなとは後れたるか。卑怯であらうぞ。サア〱立上つて勝負〱。
左衛　淺間左衛門、おくれもせぬ、卑怯でない。
左近　卑怯でなくば立ち上つて。
左衛　今は勝負はどうもならぬ。
左近　なぜ〱。
　ト詰め寄る。
左衛　今聞く通り家の大事、聖德太子より賜はつたる、都見ずの笛、萬秋樂の傳授の一卷、この二品の重寶を、もし我れ死したるその後は、行方も無う奪ひ取られ、世の嘲りを後世へ、殘すは樂官たるべき身の恥辱。人はこの世の名こそ惜けれ。マア〱逸まり召されるな。
左近　ソリヤ、樂器に事よせ勝負を延ばすは、未練の左衛。どこがどこまで親の敵、淺間、觀念。
　ト切りかける。是を左衛門あしらうて逃げ廻る。とゞ左近之助へ當て、左衛門奥へはいる。左近之助方々尋ねるうちに、伊達平バタ〱にて走り出で、左近を見つけて
伊達　左近之助さまか。
左近　伊達平か。
伊達　御主人の敵。
左近　親の敵。
伊達　淺間左衛門はこの内に。
左近　スリヤ、照政はこの内に。
伊達　豫ての合圖。
左近　左右へ列んで。
兩人　淺間、觀念。
　ト左近之助、伊達平、左右より槍を以つて、亭の内へ突きかけると、障子を上げる。この内にみのりの前、

白無垢の裲襠、衣裳にて、左近、伊達平の槍先にて、手を負うたる體にて出で來る。直に本舞臺へツカ／＼と出て、左近が槍のしほ首を取つて苦しき思ひ入れ。

左近　ヤヽ、淺間左衞門と思ひの外、コリヤ、こなたはみのりの前。

伊達　合圖をそれと言ひ合せ、手引をしたる敵の妻。淺間に替つてこの體は。

みの　豫て覺悟のわらはが命。

兩人　なんと。

みの　豐明親王の御身替りに、調子丸を立つる心も恩愛ゆゑ、ひかれ／＼て廻り來る、因果も車のわが身をば、せめて夫の身替りと、さてこそみのりが此の有樣、富士左近之助行家どの、みのりの前を手に掛けて、夫の命を助けて給べ。コレ、この苦しみも夫の爲め。これがいまはの願ひぢやわいなア。

ト泣き伏して苦しむこなし。

左近　ハテ、是非もなきこの深傷。とても助からぬそこもとの命。スリヤ、照政になり替り、富士に討たれて怨みを晴らさせ、淺間が命を助くる心か。ハテ、貞節なる女子の情。轉輪說法の道理を考ふれば、この場で仇を報ずる道理。みのりの前の心ざし、富士左近之助感心いたした。

伊達　エヽ、忌々しい。なんでも淺間左衞門をぶつ殺さうと思つた壺を取つ違へて、ごせ業腹な目に遭つた。この上は富士左近、われでもくたばつて仕舞へ。

ト左近之助に切りつける。その脇差を叩き落す。直ぐに立廻りあり。

左近　伊達平、コリヤア、もちりやうを顯はしたな。

伊達　知れた事だ。どうしてうぬらが爲めに、よい事をするものだ。生かして置いちや工面が惡い。

ト槍を取つて突つ掛ける。その内にエイと矢聲して、伊達平が胸板へ矢を射つける。伊達平すぐに倒れる。

左近　思ひ掛けなく射つけし矢は。

左衞　聖德太子渡御。

ト早さがりはにて障子を上げる。聖德太子、柄香爐を持ち立つて居る。その側に左衞門、弓矢を持ち守護して居る。

左近　思ひも寄らぬ太子のお入り、淺間左衞門この體は。

太子　神妙なりとよ、富士左近。みのりの前を討つて親の敵をなす心ざし、あつぱれ／＼。

左衛　サア、匹夫め。おのれこそ曲者。今某が射つけたるその鏑矢こそ、佛法護持の四天王の放し給ふ所の降伏自在の六つ目の鏑矢、胸板を射たからは、最早遁れぬ汝が命。この處へ入り來るより、聖德太子の明察に怪しき者と見拔いて置いた。有りやうに白狀せい。なんとなんと。

伊達　白狀するも悔やしけれど、斯く胸板を射られたれば、工みを明して名を殘さん。我れこそ守屋が弟に物部の次官小坂とはおれが事だ。

皆々　扨こそなア。

左近　合點の行かぬ物部の小坂、伊達平と名を替へて、富士が家來となつたるは。

伊達　折を見合せ、富士と淺間を打つちめて、その上に秦の川勝を無き者として、馬子の大臣をおつ殺し、攝政の官に到らんと、奴となつて草履を摑んだは、日本六十餘州の土を摑むと心の樂しみ。さてこそまんまと窺ひ寄り淺間左衛門が家の重寶、都見ずの笛も、傳授の一卷も某が奪ひ取つたわえ。

左衛　待て。某が家の重寶、聖德太子の製し給ふ都見ずの笛も、萬秋樂の祕書も、人知れず奪ひ取つたとは。

伊達　これを見ろ、最前梅ケ枝をおつ殺し、引つたくつたる都見ずの笛、おれが懷中に持つて居るわえ。

左近　ヤヽ、ナニ、梅ケ枝を手に懸けしかや。

伊達　ねぢ殺して仕舞つたわ。

左近　エヽ殘念な、妻の敵覺悟。

ト詰め寄る所へ、梅ケ枝奧より出で、

梅枝　ヤア、富士さん、こゝにかいな。

左近　そなたは梅ケ枝、そんならまめで居たかいの。

梅枝　舅御さんの敵、淺間を討たうと、奧に待つて居たわいな。

伊達　最前ねぢ殺した梅ケ枝の死骸は、あの椋の木の空胴の內へ隱し置いたに違ひはない。

左近　合點の行かぬ梅ケ枝が死骸、椋の木の空胴にありとは、ドレ。

ト左近、空胴の內より御影を持つて出て、

ヤヽ、これこそ聖德太子の幼時の御影。

梅枝　そんなら梅ケ枝が命を救うて賜はりしか。

皆々　エヽ、有難いなア。

伊達　そんならおれが懷中のこの笛。

ト懷ろより名號の卷物を出して、

ヤア〳〵、これこそ六字のばんしやうの名號。

皆々　エ、有難いなア。

伊達　エ、忌々しい。さりながら、みのりの前が手より引つたくつて置いた萬秋樂の傳授の一卷。

左衛　ナニ、萬秋樂の一卷とや。

伊達　コレ、これを見ろ。

ト出すと法華經の卷物ゆゑ、びつくりして

ヤア〳〵、コリヤア、なんだ。

左衛　これこそ君の眞筆にて、八軸一卷の法華經。最前傳授の一卷とあやしみしが、斯かる奇特のありけるか。エ、、有難いなア。

伊達　モウ、斯うなつちやア破れかぶれ。聖德太子、觀念。

ト拔身を振上げると、大ドロ〳〵になり苦むこなし。このうち左衛門、卷物の名號、御影を取上げて、

左衛　サア斯くまで佛敵を誡め給ふ聖德太子の明德に、おのれら如きが、イヤ、叶ふものか。

みの　こちの人、お前の命を助けたく、みのりの前は死にまするわいなア。未來は變らぬ女夫ぢやと、一言いうて下さんせ。

左衛　その貞節を見るからは、半座を分けて待つて居い。

みの　エ、、忝なうござんす。せめて敵の物部の小坂、淺間が女房みのりの前が、あの世の供にまつこの如く。

トよろぼい立つて、伊達平に切りつける。伊達平すぐにその刀を取つてわが腹へかけ、二人一緒に抉ると、みのりの前苦しむ。

伊達　生々世々がその間、佛敵となつて思ひ知らさん。思ひ知れ。

みの　こちの人、おさらば。

伊達　思ひ知れ。

みの　未來で待つて居ますぞえ。

伊達　思ひ知れ〳〵。

ト刀を廻すと、兩人一度に苦しみ、一時に轉ける。

左衛　不便の者の最期ぢやなア。

左近　みのりの前が最期の體、聖德太子の明德を見て、何事も勝負はこれまで。コレ、この烏兜を結び添へて、みのりの前の首を淺間左衛門、父の敵を討つたるも同然。梅ケ枝、來い。

トみのり前の首を切り、烏兜をもつてその首を包み、抱へて、花道へ梅ケ枝を連れて行く。

〽暇申してさらばとて、伶人の姿烏兜。

左衞　富士左近之助、待て。

左近　なんと。

左衞　敵に後ろを見せて、やみ〳〵歸るか。行家、觀念。

ト卷物を手裏劍に打つ。梅ケ枝それを取上げる。

梅枝　これこそ萬秋樂の祕書。

左衞　敵の淺間が形見の一品。

左近　忝ない。

皆々　さらば。

ト時の太鼓、三重になると、左近は梅ケ枝を連れ花道へはいる。左衞門、太子、殘るとどん〳〵になる。奥より、豐明親王を連れて照時出て來る。花道より筆助三寶に稻を積んで走り出て來る。

左衞　その方は筆介と名を改め、豐古方へ宮仕へせしから、丸ではなきか。

筆助　淺間左衞門の仰せの通り、只今この所へ參る事、餘の儀ではござりませぬ。アレ、あの如く聞こえまする寄せ太鼓こそ、守屋の大臣、本國河内の國稻村の城へ立籠り、聖德太子を討ち亡さんとの企て、則ち住吉の神前に於て稻のこぼれしも、斯る前表。急ぎ佛敵御追伐あつて然るべう存じ奉りまする。

左衞　スリヤ、守屋の大臣稻村の城に立籠り、聖德太子と一戰に及ばんとや。

筆助　アレ、あの如く味方を集むる寄せ太鼓。

次郎　我が君、お聞きなされましたか。

太子　天命を知らぬ佛敵の守屋、その儘に差置かば、我朝の衆生、罪障の重くして煩惱の怨敵、退治せずしてあるべからず。見よ〳〵方々。コレ、麿の信ずる所の須彌の四天王、多門、持國、增長、廣目、豫て赤檮に申しつけぬる其の木を切つて彫刻する所の尊像。この度の佛敵を亡ぼすに於ては、津の國、玉造りの岸に四天王寺を造立せん。深く願ひを籠めたれば、勝利を得るは案のうち、とく〳〵出陣の用意々々。

左衞　畏まつては候へども、官軍いまだ整はざれば、御出發の儀は先づ〳〵お控へあられませう。この上は次郎照時、親王を供奉し奉り、一刻も早く吉野のあたりへ立ち越えよ。

次郎　畏まつてござる、

左衞　アレ、間近く聞こゆるあの太鼓、かたきの寄せんも計られず。先づ〳〵こなたへ。

このどん〳〵のうち、太子、左衞門、筆助はいると、次郎、親王を連れて行かうとする。井戸の内より縣主武見、甲斐々々しきなりにて出て、直ぐに次郎を突きのけ、親王を手籠めにする。

次郎　コリヤ、匹夫、親王を何とする。

武見　匹夫とは何のたは言。我れこそ物部の守屋公の身内、縣主武見といふもの。淺間左衞門照政、豐明親王の首なりと惟澗子丸が首討つて渡したこと隱れなく、某へ仰せつけられ、御即位の邪魔になるこの餓鬼を搔つさらうべいと、こゝへ來た。そこ押つ開いて武見を通せ。

次郎　小癪や、淺間次郎照時、わいらにやみ〳〵渡さうか。支へだてせば命がないぞ。

武見　命を惜む士性骨で、この親王が盜みに來られるものか。覺悟の上で擧げに來た。渡せ。

次郎　ならぬ。

武見　渡せ。

次郎　ならぬ。

兩人　どつこい。

　ト これより誂への合方にて、武見、次郎、親王をカセにたてあり、とゞ武見を切り散らし、親王を連れて行かうとする所へ、軍兵の形にて大勢、次郎を取卷かうとするうち、椋の木へ親王を隱し、

皆々　淺間次郎、動くな。

次郎　イデ、物見せんといふまゝに、

　ト 早笛になり、大勢を花道へ追込むと、花道より穴穗部の皇子、松明をとぼ、鼓一聲にて出て來る。ト 後より馬子大臣、雪洞を袖にて覆ひ、鼓一聲にて出で來る。ト 花道にて留まる。こい、やい。

穴穗　淺間左衞門が計らひにて、一旦僞首を受取つたる豐明親王、助けて置いちや、穴穗部の皇子が即位の妨げ、窺ひ寄つて、それ。

　ト 本舞臺に來て、あたりを見廻し。

さし當つて、豐明親王の隱れ棲むべき處は椋の木の空胴。それ、

　ト 立寄ると、大ドロ〳〵になり、皇子苦しみ、又立ち掛らうとすると、馬子大臣、皇子を留めて

馬子　君には先づ〳〵お控へなされませう。

穴穗　そちは馬子の大臣。何用あつて皇子を留むる。

馬子　君子は危ふきに近づかず。斯かる天下の騷亂に、警衞の武士、供奉の面々召し連れられずに、この所へ行幸

ありしは御身の大事、先づ／＼僥幸なりませう。

穴穂　スリヤ、最前からの様子、皇子が後から引つ付いて、その方は殘らず見たか。サ、それならば是非に及ばぬ、豐明親王のそのありかを、馬子大臣、詮議せい。

馬子　スリヤ、豐明親王の御ありかを。

穴穂　その方に申しつくる。早う／＼。

馬子　畏まり奉りしと、勅答は申上げたれども、皇子さま、叔父御さまにも甥御さまにも、聖德太子さま、豐明親王さま、穴穂部の皇子さま、この御三人ならで御親族この世にましまさず、その御方を敢て一命を斷んなぞとは、ソリヤ、御聖君の御血筋には似合ひませぬ。いかやうなる勅なりとも、馬子の大臣は親王の御行方は尋ね奉りませぬぞ。

穴穂　ヤア、案外なる諫言だて。汝共に命を斷つ、觀念。

ト切りつくる刀を叩き落して、直ぐに馬子、穴穂部の皇子を一太刀切る。このうち早舞になり、馬子思ひ入れ、皇子を殺す。

馬子の大臣、穴穂部の皇子を手に懸けたな。

馬子　臣として君を弑し奉ること、恐れ多くはさむらへども、萬民の爲め根元罪業のしんいんと思召して、神去り給へ。南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト执り殺す。どん／＼になると、花道より、次郎、大和之助、筆助、出て來る。

筆助　馬子の大臣へ申し上げまする。聖德太子の御行方、いづくへ落ちさせ給ひしか、方々と尋ね探し奉れども、相知れませぬやうに存じ奉りまする。

大和　その上に豐明親王、御身の大事と存じ、供奉たてまつらんと存ずれども、早や十重は二十重に取卷きましたれば、逃がるゝかたはござりませぬ。

馬子　豐明親王は、シテ、いづくにましますぞ。

次郎　淺間次郎照時が、その椋の空胴へ隱し奉つてござりまする。

馬子　ドレ、親王はこの空胴にましますとや。

トどろ／＼にて、親王を空胴より出だし、

玉體に恙が無う入らせられまするか。

親王　聖德太子のお側に居は居たわいのう。

馬子　さてこそ、聖德太子の仁德にてましますか。危き難を救ひしはこの椋の木、心なしとは申せども、神妙なる椋の木ゆゑ、今よりしんひら椋の木と名をつけ、永く榮えを末世に殘さん、聖德太子の御身の上氣遣はしきぞ。

かた〴〵、詮議おしやれ。
三人　ハ、ア。
トどん〳〵になり、次郎、親王、馬子、下座へはいる
ト、以前の梶平、バタ〳〵にて刀箱を抱へ出てくる。
三人これを詰め寄せて、
筆助　待て。これこそ聖德太子の所持なされし所の、豹文くわいりんの御劍。盗人め、どこへ持つてかつぱしる。
梶平　どこへとは知れた事、物部守屋公へ引つ拂つて行く神藤梶平。福井の店へも伊勢太へも曲げずにくらはす卑劣な男ぢやァないぞ。そこ押つ開いて通すまいか。
大和　通せと、たとへ拔かしても、安穩で通さうか。大磐石の大和之助、これこそは渡さじ、置いて行け。
梶平　いて行けとは甘口なやつらだ。鮒ぢやァあるまいし、キリ〳〵そこをのくまいか。
兩人　ならない、渡せ。
梶平　そこを通せ、
兩人　ならぬ。
三人　どつこい。
トこれより誂へのタテの合方にて、きつと三人見得になり、タテ納まる。後ろから、次郎出でて、名劍を引つたくる。
皆々　どつこい。
次郎　豹文くわいりんの太子の御劍、淺間次郎が受取つた。
皆々　どつこい。
トどん〳〵になる。花道より弓削の小連と◎、軍兵大勢つれて出て來て、馬子、皇子を取卷く。
小連　ヤレ、豐明親王を遣るな。
皆々　やらぬわ。
◎　待てやい。

第二番目　生玉の段

役名――大野林右衞門　實ハ檢非違使勝船。料理番八公。善八。仲居、およし。同おつな。女衒舍利ほつの傳八。岩井風呂のゟ　實ハ物部守屋の娘しらゆふ。提婆の仁兵衞　實ハ菅の次郎豐勝。仲居おさよ　實ハ左甚五郎妹小女郎。左甚五郎。
本舞臺。三間の間、生玉の蓮池。水船の上へ掛けて

三方伊豫簾の亭屋體。正面の床の間、つり花活けに萩の花を折入れ、西の方へ寄せ、やまと葺の枝折門これに額を打ち、西の柱、桐の立木。井筒井戸屋形を仕掛け、一體舞臺先きより水船へ掛けて蓮の盛り。幕の内より大野林右衛門、帷子のなり、薄羽織を着て、汗手拭にて額を卷き、刀を側に置いて、杯臺と扇子を持つて居る。その側に仲居およし、帷子のなりにて前垂かけ、團扇をもち居る。その側に料理番八公と善八兩人とも帷子にて片肌脱ぎ、仲居おつな帷子、前垂好みあり。いづれも三味線の拍子に乘つて、硯蓋、銚子、吸物の膳取散らし、手を叩いて酒盛りの體にて幕明く。

ト林右衛門、杯臺をつむりに置き、扇を笏に構へて、

林右　ちよきりちよつと、これを斯う持つて〳〵。○渡唐の天神どうぢやいの。

ト杯臺と扇子をおよしへ渡す。

よし　さつてもえらい。こりやえらい。ちよつきりちよつと、これを斯う持つて〳〵。

ト杯臺を下へ置き、逆手に扇子を取つて、くる〳〵廻し。

挽臼なんどはどうぢやいな。

ト八公へ渡す。

八公　さつてもえらい、こりやえらい。ちよきりちよつと是を斯う持つて〳〵。

ト杯臺を左へ持ち、右の手に扇子を持つて口へ當て、

ちやるめらなんどは何うぢやいの。

ト善八へ渡す。

善八　さつてもえらい、こりやえらい。ちよきりちよつと是を斯う持つて〳〵。

ト杯臺を下に置き、扇子をお齒黑筆にして、

お齒黑なんどは何うぢやいの。

ト善八へ渡す。

つな　さつてもえらい、こりやえらい。ちよつきりちよつと、是を斯う持つて〳〵。

ト杯臺を下に置き、扇を開き、杯臺へかけ、

鏡臺なんぞはどうぢやいな。

八公　出來た〳〵。こゝらで一ツ打ちませう。

皆々　よい〳〵。

ト手を打つ。

八公　も一つせい。

皆々　よい〳〵。
八公　きまつてせい。
皆々　アリヤ〳〵よい。
林右　サア〳〵、酒にせう〳〵。どうも言へたものではない。名にし負ふこの大阪の生玉の蓮の盛り、この曙が見たいとて、首つたけ惚れて居る今島の内で、たれ肩をならぶるものもない、岩井風呂の藝子かしく、勤めといふも今日一日、明日の晩には身請の金、殘らず渡して斯くいふ大野の林右衛門が御新造、沙汰なしで大和の國飛鳥井の里へ御歸國。わいらも今日ぎりで、箔のついた駄駄羅大盡の見納め。金が欲しくば勤めろ〳〵。
つる　アノ、仰つしやる事はいな、金のほしうない者があらうかいな。阿彌陀の光りも錢ほど、地獄の沙汰も金次第、替につくのが當世風、勤めいでかいなア。その替りには林かうさん、わたしにばつかりは、ぶんに、アノ五分銀とやらでも、二朱銀とやらでもたんとお呉れ。
林右　慾氣は微塵もない。
つる　それでもわたしが母さんが、鑓さんの道具に持つといつて。
林右　持つて居ろと言へば、身共が所持なしたる、コレ、この書付。そちたちも能く聞いて置いたがよい。
ト懐中より書付を出して。
一つ、聖德太子、神國に生れ西域の佛法を尊み、よりより山城。大和、和泉、河内、當國五ケ國のうちへ、佛閣を造立せんと、飛驒の工み甚五郎と申す者を語らひ候由。右甚五郎と申す者、召連れ來るに於ては御褒美として修理の職に叙せらるゝものなり。物部守屋これを承はる。何と見たか、まつこの如く、守屋公より甚五郎と言へるものを御尋ね。この所へ貼りつけ置く。その手筋もあらば詮議いたし、御褒美に預かつたがよい。
八公　畏まりました、
林右　時にこのもこはなぜ來ぬ事か知らぬ。こりやア、例の小宿ばいりだな。いつまで待つて居たとて、小駒の惡い蓮見物。この林右衛門、モウ歸らうわえ。駕籠をいひつけてくれろ〳〵。
又　いかさま、然う仰つしやるは旦那の御尤も。コリヤ、かしくさま、なされやうが惡い。おかなどの、林右衛門さまがおかへりなされうと仰つしやる。あんまり御機嫌のよい方ぢやアねい。働かつしやい〳〵。
つな　このおつなに働けとわえ。

日本戯曲全集

歌舞伎篇

追加十八冊

大方諸賢の熱烈な御援助のお庇を以て「日本戯曲全集」歌舞伎篇も、いよ〳〵終りに近づきました。世界無比の我が歌舞伎劇の特色ある内容を明かにするに、少しくお役に立つたかと思ひます。併し、流石に、三百年の歴史あり、その複雑さに於て無類であり、その變遷が烈しかつただけに、三十二卷だけで御紹介した脚本ですら、數にしては勿論九牛の一毛であり、劇史の上から見ても重要な、興味ある脚本が山のやうに殘つて居ります。折角これだけの大出版を完行しながら、見す〳〵大切な物を洩してしまふにも忍びませんし、讀者諸賢の盛んな御希望もあり、それに、今日これを完成してしまはないと再び機會も來ないと思ひますので、爰に續刊十八冊の追加を企劃し、斯界空前の一大文獻の上梓を斷行する事に致しました。國劇を愛する皆樣に、引續き御援助御購讀を願ふ次第であります。

追加篇は經費の關係から、殘念ながら一冊一圓五十錢に改めます。その代り頁數を增し、且、口繪に數十度刷の美麗な木版錦繪を加へます。

昭和までの日本花道史

善八　こなたに働けといつて、小盜みをしろといふ筈ぢやアねい。今朝から首を長くしたり短かくしたり、こけがかつさ丁半を合せるやうに、待つてござる林右衞門さま上げ詰のとゝさまが、よもや仕度の出來ない事はあるまい。こなたの働きで見てござい〳〵。

つな　アイ〳〵。働きは仲居の役、見て來る事は見て來るが。○アイタヽヽ。

よし　おつなどの、どうさんしたえ〳〵。

つな　およしさん、聞いて下さんせ。夕のおよなにな、三文油揚を十一、醬油をかけて食べたその後で、白い西瓜のうつちやるのを。勿體ないと思うて丸つかぶりに食べてな、それから今朝までが酒、俄かにお腹が痛うなつたわいな。林右衞門さんへ、なんぞ藥をおくれいなア。

林右　人を餘り待たしやがるアノとゝ、そびいても連れて來てくれる事ならば、ドレ、藥を遣らう。

ト金入れより小粒を出しておつなにやる。

つな　この藥はなんぢやえ。

林右　痛みのなほる萬金丹。

つな　コリヤ、結構な藥ぢやわいな。

林右　早く行つてくれろ〳〵。

つな　アイ〳〵。

ト甲斐々々しく仕度をする。

善八　どうで、こなたぢやア埒が明くまい。ドレ、この蓮の實の善八が飛ぶが如くに、かしくさまの迎へに行くべい。痛いな〳〵。

ト俄かにうなつて苦しむ。

八公　どうした〳〵。

善八　若し旦那。とゝさまの迎へに、おのれやれ行かうと思ひましたが、さきおとゝし二階から落ちた時、脾腹を打つたその打身で、足をつめて歩かれましねい。なんぞ林右衞門さまから、よい藥を貰つて下さいませ。アヽ苦しい〳〵。

八公　ドレ〳〵、打身が起つたなら、林右衞門さまのお藥より、その痛む處を踏みのめして療治をしてやるべい。こたへて居ろ〳〵。

ト料理番八公、滅多無上に善八を踏のめす。ト林右衞門くしの二上りの唄になる。花道より駕籠かき×△單へ物の形にて雪駄を穿き、傘をさして四つ手駕籠を舁いで出る。後より舍利ほつの傳八。縮みの帷子、引きずり下駄、一本差しにて腕まくりをして、傘を持ち出

て來る。花道の中にて、

傳八　オツト、駕籠の衆、待つて貰はうかえ。どうやら降りさうにあつたが降らぬさうぢや。傘をつけて貰はう、生玉まではつい向ふぢや。モウ一息ぢや。急がうぞや。

×　合點でござります。その代りには一杯。ナア、棒組。

△　ヲ、サ。それは此つちから言はずとも、旦那の方に如才はない。花屋へ參りましたならば、定めて酒を食べませうな。

傳八　ハテサテ、それは知れた事。こつちのもの丶要るではなし、みんな林右衛門どの丶もてなしぢや。どうなりとも〳〵。

×　それを聞けば急ぐに力があるでごんす。サア、棒組。

△　遣りませう。

傳八　ソレ〳〵、急いだり〳〵。

×　えいさつさ。

△　さ丶まめこ、

×　えい〳〵〳〵。

△　枝豆こ。

ト本舞臺へ來て駕籠をおろすと、傳八、駕籠の垂れを引上げて。

傳八　サア、花德ぢや。早う出や〳〵。

かし　傳八さん。モウ、こ丶かえ。

傳八　おいの。

かし　わたしや持病のつかへが差込んで、眠るともなう寐たさうなが。さつきの間は降らなんだかえ。

傳八　はら〳〵と來たやうなが、そばいてあつたさうな。降りやせぬほどに早う出や〳〵。

トいふうち、おとし、綸帷子、しごきの抱へ帶、白人の形にて女扇子を持ち、駕籠より下りると、林右衛門、おとしを見て思ひ入れあるべし。

傳八　林右衛門さん〳〵。どうでござりますぞ。

林右　ヤア、これはしたり、舍利はつの傳八、只今お出でか〳〵。

傳八　まつとわたしも急ぎましてござりますが、この人の拵へが出來いで煙草の呑飽き、それから駕籠に乘つて出るか出ぬに、又どこへとやら寄り處。

トいふうち、おとし、傳八が袖を引き、跡をいはせぬやうにする。傳八呑込んで、

成程、寄りは寄つたれども、そこぢやといふてもちつとの間。ヲ丶、それ〳〵、どうやら降りさうにあつたによ

つて、大降りでも來ようかと、それを見合すうちに、遲うなつたぢやのう。

かし　それいなア。わたしやモウ雷鳴さん嫌ひぢやによつて、ひよつと道でなどなられうかと思うて、見合はすうちに遲うなつたわいな。林右衞門さん、さぞ待遠ほにあつたかえ。

トいひながら、林右衞門が側へ坐り、寄り掛る。林右衞門嬉しき思ひ入れあつて、ひんとしてかしくを突き倒し、

林右　置いてくりや。この生玉の蓮の曙、夜の明けぬうちから行きたいものぢやと、昨日からいひつけた今日の見物。おのれの方から言つて置いて、今時分になつてうしやがつて、ヤレ、雷鳴が鳴るであらうの、大降りがするであらうのと、つかまへ處もない空の事を引つ掛けて、定めて今までいつもの通り、アノ惡者の提婆の仁兵衞と泣いたり笑つたり、樂んで居けつかりくさりやがつて、それで遲くなつたのを、いけぬく／＼と空々しい、空のせいとはきついいてんぢやら。來て貰つても面白くない。サア、あの駕籠に乘つて歸つた／＼。

かし　何のこつちやいな。また腹立てさんす。今までは島の内の藝子、岩井風呂のかしく、あすからは誰の女房ぢやえ。

トかしく林右衞門が膝をわが方へ向ける。

林右　そりや知れた事、道樂者の提婆の仁兵衞が女房さ。

かし　イヽエ、わたしや大野の林右衞門が女房。

トいふうち、林右衞門嬉しがる思ひ入れあつて、又かしくを突き倒し、

林右　これやい、われがおれを御亭さまだと思ふくらゐならば、何しに今まで是程に氣を持たせるのだ。いはゞ語らば腹が立つて／＼、これ。

ト鼻紙袋より、手紙を出して、

コレ、これを見ろ。身請金三百兩のうち、百五十兩の請取。親方の直筆に蓮つ葉ほどの判が押してあれば、モウ、半分はおれがからだ。宛名はそこに居る舍利ほつの傳八。ひとり他人を仲へ入れたは、まさかの時におれが名を出すまいと思つて拵へた仕事、又一ツには、二世と連れ添ふ女房を、金で買つたと思つちやア、どうやら心が水臭い。可愛いが五つ、提婆の仁兵衞が忌々しいが五ツ。十が十ながら底の底を潜つて請出さうといふこの林右衞門。あしたの朝、跡金の百五十兩と買掛り二十五兩を致

せば、直ぐに手活の宿の花。傳ば、身共に僞はりはあるまいがな。

傳八　左様々々、どうしてお前にちゝいつぽうがござりませう。跡月から上げ詰め、そのくせ唯の一度抱いて寐ませぬものを。よく〳〵ぬしの情のあるのか、但しは阿房かサア、なんぢやあらうと讀出すは、大抵な思ひ入れぢやないぞえ。それに一體ぬしもわるい。なんぼ隱しやつても、みんな筒抜けに知れて居る、けんかいいぢやの、あかつけつぢやのと噂のある、道樂者の提婆の仁兵衛といふ蟲がついて居るうちは、ぬしが喧ましう言はるゝも皆尤も、高津新地の八丁目、はつち坊主と合借家借りて居る食ふや食はずの男めを、アタしつから思ふて居やうより、ぬしの處へ行けばあつぱれの奥さま。浮み上ることを知らぬとは、どうした事ぢや〳〵。

八公　ソレ〳〵、舎利ほつさまの仰しやる通り、先づ第一林右衛門さまを粗末にするはきつい損。小判といふものが潤澤、世間の女郎買は歴々で候とて、株ばつかり仰山で、茶屋の拂ひにまさかなると、手代に家の仕送りから來ぬのと、拂はぬを恥とも思はぬが當世の女郎買。この旦那ばつかりは、金といふものゝきれ際が綺麗で、座敷でもけちな事のない御の字のついたお客さま。

善八　ソレ〳〵、人の目顔を忍んでも、會ひたがる男は得て金銀の貸手もなく、不實ばつかりで、生意氣好きで、滅多無上にしやれて〳〵、そのくせ銀煙管でもある事か十服つぎのとば煙管、やに上りの横つ倒し上すべりのしたニ才野郎。色だの戀だのとはぬしさま、お前でもござりますまいぞえ。

つな　ソレ〳〵、岩井風呂のぬしは、色なしといふ事は、つきぬけて知れてあれど、惡い蟲のあるといふ事も通り居るさかいに、とんと信仰が覺めるわいな。美しいなりに似合はぬぬしさん。ヲヽ、うたて。

よし　ぬしさん。聞かしやんしたか。思ひやりのないといふは野暮な骨頂。女子の惚れたせうがには、高い低いの隔てはない。色事に相應な人ぢやと見立てゝ、それがならうかいなア。

かし　イエ〳〵、そうぢやござんせん。眞實思うて下さんす林右衛門さんを、仇に思ふたわしが誤まり。この後あの仁兵衛づらが事を、どのやうに人がいうたとて、たわいもないと、思はれやう爲めに、身受の得心疑はれて一生添はうより、ぬしを欺さんといふ證據に、皆さんの見

さんす前で、心中に髮を切つて見せやんせう。
ト騷々しく、かしく、林右衞門が脇差へ手を懸ける。林右衞門驚いて脇差をもぎ放す。かしくワザと仰山に脇差を振廻す。皆々慌てゝ留める。

皆々　コレサ、〳〵。

かし　放さんせ〳〵。

林右　コレ〳〵、心中見えた。あした詰出すといふに、髮を切られては詰らぬものだ。マア、待ちや〳〵。

かし　イエ〳〵、疑はしやんすによつて、こちや髮を切りやんす。髮を切るなと留めさんすと、私や死ぬ。林右衞門さんゆゑなら死ぬる〳〵、死にたい〳〵。
ト騷々しく泣落す。林右衞門嬉しき身振あつて、脊中を撫で、

林右　コレサ、短氣の事を言はぬものだ、身共ぢやといふて、そなたを疑がふまいものでもない。アノ、提婆の仁兵衞は幸四郎に似たよい男。おれを見物にしても見換へさうなものだと思ふによつて、それからおふなやつたものよ。林右衞門ゆゑなら死なうとまでいうてくりやるものを、どうして、これから嘘と思ふものだ。氣の廻つたは男の癖。堪忍しや〳〵。

かし　なんのお前に詫び事させうとて、髮切らうの、死なうといひやんせう。覺えもない事いはしやんすによつて、それゆゑ生きて居ぬ心。サア〳〵、殺して下さんせ。いつそ死にたい、死にたいわいなア。
ト泣く。傳八側へ寄つて、

傳八　侍はでもの。見事かういふ心が見えねば、大野の林右衞門といふ侍はでもの。死なうとは出來た〳〵。泣く事はないわいの。サア、ちやつと目を拭いて、早う顏を直したがよい。ドレ〳〵、傳八が涙を拭いて遣りませう。この涙一雫が米ならば七十五つぶ。勿體なや〳〵。
トいひながら紙入より鼻紙を出してかしくが涙を拭いてやる。その折紙入より手紙を傳八落す。かしく此の手紙を見つけて思はず知らず讀む。

かし　ナニ〳〵。急に御入用お望み候由にて、碎骨の佛舍利をお越しなされ候へども、二百兩の儀は勿論一向かやうな品は私方にては、質物に。
トうか〳〵と讀まれて傳八びつくりして、かしくが持つて居る手紙を引つたくりて、俄かに紙入へしまふ。かしく後を讀みたがり、取らうとして立上る。

傳八　惡い事ばつかりするわいの。何の役にも立たぬもの

を見たものぢや。人にびつくりさせるわいの。あた滅相かいな。あた阿呆らしい。あた鈍臭い。

ト無上に腹を立てる。

かし　ヲヽ、可笑し。腹が立つなら堪忍さんせ。傳八さん、今の手紙の中に書いてあつた佛舎利とは、アリヤ何の事ぢやえ。見せさんせいな〳〵。

傳八　いろ〳〵の事いふわいの。どこに佛舎利と書いてあつた。

かし　デモ、佛舎利と。

傳八　まだ言ふかいの、アリヤ、佛舎利ではない、ヲヽ、舎利ほつ。舎利ほつとはこの傳八が異名。佛舎利は一番目からお尋ねもの。どうしてわしらが知るものぢや。滅多な事いふまいぞ。傳八が手紙ぢやによつて舎利ほつと書いてあつたのぢや。それを佛舎利なんどとは、いかに女ごぢやというて、粗相な人ではあるわいの。

かし　ハテなア。

林右　どうやら座敷がおぢになつて面白くない。なんとまた見立を始めて、酒にせうではあるまいか。

つな　コリヤ、よからうわいな。座敷をかへて騒がうかいな。これ鶴籠の楽。迎へには及ばぬほどに、酒でも呑んでいなんせ〳〵。

よし　林右衛門さんと[illegible]さまとの仲直りは、しつぽりと奥の小座敷。皆さん一所にござんせいな。

傳八　さらばお供を致さうか。

林右　皆の者ども、斯う参れ。

善八　途方もない大盡がお入り。

林右　テン〳〵〳〵。テン〳〵テン。

ト天王立を口にて言ひ、嫌がるかしくを無理やりに手を取つて、林右衛門、かしく、およし、おつな、奥へはいると、跡に傳八、善八残り、あたりを見て、

善八　今のさまは何うしたものでごんす。お尋ねもの丶佛舎利を質に取らぬといふ手紙を、女に目つかるといふやうな、埒もない事があるものでごんすか。嗜まつしやりませ〳〵。

傳八　あぶない事をしたわいの。すんでの事にこの手紙を上げられうとしたが、早う見つけて、マア、杢の割れる氣遣ひはない。これにつけても心憎いは、アノ提婆の仁兵衛。粋法はして世はかたれど、きやつこそ正しく我々が爲めには仇、聖德太子の身内に何の某、それと疾うから睨んで置いた。しかとした事が知れねば詮義もならず

ハテ、どうしたものであらう。

善八　この善八も感づいてござれども、さしてつかまへた事もござらぬゆゑ、その分にして置きますが、どうでこいつも近々の内にやア、それと確な身の上の證據を取つ摑へて、お目に掛けますべい。

傳八　隨分と働け／＼。時に困るはこの佛舍利、なんぞというとドロ／＼／＼。家鳴りのするにはほつとする。とはいへ、何處へも置くやうはなし、又やつぱり舍利ほつが懷ろへ、佛舍利とはこれが凄まじい。

善八　成程、これは隱し處に困らつしやりさうなものでごんすわいの。どうした事でまたこの佛舍利は、こつちの國へは渡りましたえ。

傳八　どうした事とは。此の寶塔の佛舍利は百濟國の聖明王より、この日本へ贈りたる釋迦如來さいこつの佛舍利聖德太子よいのふた間にし、深く秘め置く、その處をわれら密かに忍び入つて奪ひ取つたも、守屋公への大忠臣。それよりこの由主人へ申し上げ、片岡山を立退いて世を忍ぶ名はかしくが兄、新屋敷の市兵衞を、今は改め舍利寺傳八、なんと膽のえらい男であらうがな。

善八　その器量ある人と見て、目を掛けて貰ふこの善八。

わしらもなんぞ守屋の方へ。

傳八　コリヤ、御奉公になる事は、身の上の知れぬアノ仁兵衞。

善八　打つてしめれば、こつちの勝手に。

傳八　なるとも／＼。かしくが身の上、林右衞門どのへもよい働き。噂をすれば影さすと。

善八　ドレ。

ト向ふを見る。

傳八　ぬかるな。

善八　合點だ。

ト善八尻をからげると、踊の合方になる。傳八善八忍ぶ。この合方の内に花道より、提婆の仁兵衞、縮の帷子に單帶、緋縮緬の下帶のなりにて、鮫鞘の一本差、白い晒の手拭を頰冠りにして、せいたる思ひ入れに出て來る。仲居おさよ、帷子のなり、横に帶を結び、前垂かけ、綺麗なる團扇を持ち、引きずり下駄を穿いて、合方になつて花道の中にて、

さよ　待つた。

仁兵　退いた。

ト立廻り、

さよ　待つた。
仁兵　退いた。
　ト立廻り、
さよ　これいな。
仁兵　面倒な、退いた。
さよ　待つた〳〵、なんぼでも遣らぬ〳〵。
仁兵　かしくと言替したる提婆の仁兵衛、川まさの客へ請出されちやア男が立たない。闇雲になつて切りに行くのだ、退きやれ〳〵。
さよ　聞分けのない仁兵衛さん。たとへお前がかしくさんに言分があつて行かしやんしたというて、それその血相では、わたしを人にして見ても、お前に誰があはせうぞいな。せかんすも事による。マア〳〵、待つて下さんせ。仁兵衛さん。
仁兵　あはせうが、あはせまいが、魂を定めて會ひに行くのだ。短氣が疵といはゞいへ、アノかしくめに騙されては提婆の仁兵衛が男が廢る。コウ駈出して來るからは、生きて歸らぬ心で出た。一番男を立てゝ見せべい。
さの　それではお前は立たうがな、これまでたんと世話やいた、川まさのこの仲居、お前に怨みられまいと、告げ知らせたこの身の誤まり、よしない事に難義が出來ておさのはどこで立ちやんす。ぢやによつてわたしが遣らぬ。どこがどこまでも留めねばならぬ。
仁兵　行かにやア仁兵衛が男が立たぬ。
さの　待たんせいな。
仁兵　面倒な、退いた〳〵。
　ト踊の合方になり、いろ〳〵立廻りありて本舞臺へ來ると、奥よりかしく以前のなりにて、煙草盆を提げて仁兵衛が居るとも知らず奥より出て來る。仁兵衛は奥を目がけて行かうとする。おさの、踊の合方になつて留める。その内にふつとかしくを見つけて側へ寄り、おさの留める。振切つて直ぐにかしくを引留める。おさのこれを支へる。とゞ、かしくを引据ゑてせいたる思ひ入れにて脇差を抜かうとする。おさのこの中へはいる。かしく、おさのを掻退けて側へ寄る。
さの　マア〳〵、待つて下さんせ。
かし　だんないわいな〳〵。
　ト寄る處を引寄せて、無上に摑みついて、かしくを引据ゑて、とゞおさの立懸り留める。
仁兵　うぬは〳〵〳〵。いけ畜生のよくも今まで、提婆の

仁兵衛を色だの戀だのといつてなきかけておきやアがつたな。われがやうな奴にだまされたといつちや男が立たない。サア、林右衞門が所へいよ〳〵請出されて失しやアがるか、それを拔かせ。それを言へ〳〵。

トこづき廻す。

かし　阿房らしい、何のこつちやいな。誰が其のやうな事いうて腹立さんす。お前を棄て、このかしくが誰と一生添はうぞいな。コリヤ聞えた。おさのどの、こなさんがいうたのぢやな。

さの　いはいでわいな。提婆の仁兵衛さんといふ。レツキとした男が立たぬによつて、いうたわいな。

かし　醉狂らしい、なんの事ぢやいな。仁兵衛さんはわしが男、立てようとも立てまいとも覺悟の上にてする事なりや、わきから構うて下さんすな。

さの　かしくさん、そりや愛憎盡しといふものぢやぞえ。なんぼわたしが川まさの仲居こそして居れ、大阪に久しう居れば男だての達引も見ンごと知つてゐるわいな。身請の金は三百兩、百五十兩といふ金が半金濟んだれば、モウ、お前は林右衞門さまの御新造さま、それぢやに依つて仁兵衛さんが立たぬと思うていうたわたしが無理かいな。かしくさん、サア、三つ金輪で言譯さんせ。

仁兵　ナニ、言譯があるものだ、その根性とは知らねえで今までほんの事かと思つて居たのが、くやしいわい、馬鹿らしいわえ、恥かしいわえ。

ト仁兵衛、無上にせいてかしくを踏みのめす。このうちに櫛も簪も踏折る。

かし　これにはだん〳〵言譯があるわいな。

仁兵　畜生の口から人間の耳へ、言譯が聞かるゝものか、聞かるゝものか。

ト又踏のめす。

さの　せかんすは尤ぢやが、マア〳〵、待つたがよいわいな。

かし　言譯を聞かんせいな〳〵。

仁兵　聞く事もなんにもない、踏殺して仕舞ふ。覺悟をしろ〳〵。

さの　待たしやんせいな。

かし　マア言譯を聞かしやんせいな。

仁兵　聞かない〳〵。

さの　待たしやんせ〳〵。

ト仁兵衛はかしくを引据ゑようとする。かしく言譯せ

うとする。この中へおさのはいり、兩方とめる。いろいろ立廻りあつて、とゞ、かしくを隔てゝ、おさの花道へ逃げる。仁兵衛追つかけて行かうとする。また大黄入りの踊の唄になると、花道より左り甚五郎、淺黄の頭巾、單物着流し、袖無し羽織のなりにて脚絆草鞋藁苞に荒神の繪馬をつけて、手斧の先へ結ひつけ、擔いで出て來て、かしくを後へ圍ひ、仁兵衛とおさのを後へ押返し、木舞臺へ來る。

かし　よい所へ田舍のお方、よう來て下さんした。こなさんを頼んだ程に、よいやうに挨拶して下さんせ。

甚五　呑込みました。

さの　コレ／＼、滅多に譯も知らいで、挨拶して、跡で迷惑さしやんすな。

甚五　呑込みました。

仁兵　男の一分立たぬといふ色事の出入り、脇から口をききだてをして、飛ばつちりの掛らぬやうにしたがまし。

甚五　呑込みました。

仁兵　ハテ、馬鹿らしい。何をいつても呑込みましたと、この提婆の仁兵衛がいふ事を呑込んだのか。

さの　但しは仲居のさのがいふ事を、呑込んだと言はしやんすか。

かし　わたしが事はどうおやいな。

甚五　斯ういふ所へ出かゝつたが盆狂言の役廻り、どなたの事でも、誰が事でも、呑込まねばならぬでごんす。

三人　そりや又なんで。

甚五　わしは田舍の職人でえす。ちよつと大坂へ出るにも脇差の替りがこの手斧、人の挨拶もつい呑込むが鑿細工生れついて曲りがねの、曲つた事がきつい嫌ひ。唯物事を正直に、心で磨いてやりかんな、四ツ目錐ではごんせんが、四角に角のある男、挨拶づくで墨壺なら、兩方のよい鋸り商ひ、頼んだ事を金槌と、叶はぬまでも貰ひませう。サア、返答は道具箱でごんすぞ。

かし　さつても奥を聞かうより口を開けと、大膽な粹さんではないわいな。わたしが身の上はいふに云はれぬ願ひのある身。ぬしの滅多に腹立てさんせぬやうに挨拶して下さんせ。

甚五　必ず氣遣ひさつしやりまするな、わしが呑込んだからは氣遣ひな事はごんせん。いかだに乘つたと思つて落着いて居なさい／＼。

仁兵　コレ、お身さまはどこの牛の骨か馬の骨か知らねえ

か、あんまり呑込んでくりやるな。對手が惡いぞ、誰だと思ふ。阿波座、曾根崎、木津、難波、道頓堀から島の內網島かけて天滿まで、男の中の男と言はるゝ提婆の仁兵衞。開かねえと云つちやア金輪際、八萬奈落の底までも堪忍がならねえぞ。義理の惡いあのかしく、きり〱こゝへ出すまいか。

甚五　待たつしやりませ。提婆の仁兵衞さまとは、貴さまかへ。

仁兵　おれが事だが、それがどうした。

甚五　モシ〱、貴さまが提婆の仁兵衞どのなら、わしとはきつい近い緣者でごんす。

仁兵　ナニ、この提婆の仁兵衞と緣者とは。

甚五　モシ、わしは貴さまの親御と約束をして、たつた一人の妹を貴さまの嫁にやる筈で、賴みの印まで取つた、飛驒の國の甚五郎でござんすわいの。

仁兵　ヤ、、、成程、聞き及んだ甚五郎どのゝ妹小女郎を親達の約束で貰はうといつたこの仁兵衞。そんなら貴さまが甚五郎どのでござつたか。

甚五　左樣々々。こなたに會ひにわざ〱と、今度このたび上りました。

仁兵　ヤレ〱、思ひも寄らぬ甚五郎どのでござつたか。

甚五　提婆の仁兵衞どのでござつたか。

仁兵　舅は親なり。

甚五　聟は子よ。

仁兵　親子も寄れば。

兩人　寄るものぢやなア。

　トこれを聞いて、おさの。思ひ當ることなしあつて、花道の方を拜む。

甚五　このやうに好い都合な事もあるものか。先づ何から話しませうか。こゝで會うたが甚五郎が幸ひ。ドレドレ先づ〱、折角持つて來たわしが土產。

　ト藁苞をあけ、鋸の屑を杯の上に載せ、その上へお札を載せて仁兵衞が前に置く。

甚五　このお札は飛驒の國のしやぐし明神のお札、はやり病の除けのお札。この鋸ぎりの挽屑は差當つてよい蚊いぶし。何がなと存じたが、山中は物事不自由、心ざしは松の葉、甚五郎が土產でえす。受けさつしやれて下されい。

仁兵　コレハ〱、しやぐしのお札、鋸ぎりの挽屑。

甚五　職人の手前ものさ。

仁兵　近頃忝ない。甚五郎どの、戴きます。
さの　合點の行かぬこのお札は、このさのが守のうちにも
納めてあるお札。モシ〳〵ちよつとこの書付を讀んで見
て下さんせ。
甚五　ドレ〳〵。飛驒の國益田郡松森村、甚五郎娘小女郎
息災延命の爲め。ヤ、、、この書付は親仁さまの直筆。
そんなら、そなたは。
さの　アイ、飛驒の國松森村の甚五郎が娘の小女郎ぢやわ
いな。
甚五　アノ、そなたが幼少にて別れたる、小女郎であつた
か。
さの　アイ、小女郎ぢやわいな。
甚五　コレ〳〵、そんならわしが妹ぢや。そなたの兄の
甚五郎ぢやはやい。
さの　エ、、そんならお前がわたしが兄さん、甚五郎さま
かいな。
甚五　いかにもそなたを提婆の仁兵衞どのに、添はして呉
れいとくれ〳〵の遺言ゆゑ、いつぞは尋ねう〳〵と思う
て居た。
さの　會ひたかつたわいな、兄さん。

甚五　小女郎であつたか。
さの　甚五郎さまかいな。
兩人　これはしたり。
ト手を打つ
かし　ひよんな事になつたわいな。このやうな處に長居を
して、どのやうな事が出來ようも知れぬ。サア、仁兵衞
さん、奧へござんせ。
ト仁兵衞の手を取つて連れて行うとする。甚五郎、仁
兵衞が裾を捕へて、
甚五　これはどうでえす。こつちにたつた今、汲立ての言
ひなづけの女房が出來た處へ、面白をかしい燒餅ぶり、
置いて貰ひませう〳〵。
さの　ソレ〳〵、今まではわたしが夫と知らなんだゆゑ、
かしくさんと仁兵衞さんの仲取持つて、世話燒いたりし
たが可笑しいわいな。かしくさん、今日から仁兵衞さん
はわたしが男、手もつけて下さんすな。
かし　何のこつちやアいな、たとへ言ひなづけでもあらう
が、大屋さんのお觸れであらうが、ゆふべまで抱かれて
寐た仁兵衞さん。かしくが夫。アイ、慮外ながら仁兵衞
さんのお內儀さん、仁兵衞どのゝお內がた、仁兵衞が女

房、そう思うて下さんせ。外々から物でも言はせる事はならぬ。ぬの字もぬの字も縫箔屋のぬの字ぢやわいな。

さの　兄さん。アレ、あのやうな事いうてぢやわいな。

甚五　大事ないて〳〵。そつちがさう云へば、こつちも其うならぬでえす。そつちのぬの字は縫箔屋のぬの字、色氣もあるが、こつちのぬの字はぬつぺつぽうのぬの字でごんす。早くのきやれ。のきやうが遲いと、この手斧で、その美しい横つ小鬢をぶつ缺いてくれべい。

ト手斧をもつて立懸る。おさの、甚五郎を留める、かしくを後ろへ圍ふ。

さの　マア〳〵、待たしやんせいな〳〵。

仁兵　甚五郎どの、どうでえす〳〵。

甚五　妹が祝言の邪魔になるその女、鼻柱をはつてくれべえと思つた。

仁三　ハテサテ、埒もない。○甚五郎どの、こなさんは右の腕も利きますかへ。

甚五　ハテ、埒もない、てんぼうだと思はつしやるか、こちらの腕も、こちらの腕も、コレ此やうにすのない腕。指も十本、この通りに揃つて居ますわいの。

仁三　成程、見れば違ひもない腕の働き。そんなら人のいふ左り甚五郎とは、何の事でござんすの。

甚五　わしが左りといふは、腕の事ではごんせぬわいの。

仁三　ハテナ、そして左りといふは何の事でごんす。

甚五　わしが生國は飛騨の國、益田の里人、飛騨の里の甚五郎、里といふ字をりの字に讀んで左り甚五郎〳〵と、つひ人がいふやうになつたでごんす。飛騨の里を左りとは、しやれた世の中ではごんせぬか。

仁三　サア、今は何でも世間がしやれて、藥研堀の不動をやげふ、鰯のぬたをいわぬ、めりやすをめり、屋根ぶ、茶つりのとばぬきの山しやれなどと、半分いふが當世風。飛騨の里を左りも面白うごんすわ。

甚五　そのくせ、わしは右勝手、ちよつと物事をすればとても、コレ、このやうなものさ。

ト四つ手駕籠の息杖を手斧にてはつり、爪形にて阿彌陀の像を刻む。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山の煙立ち去らで、生死の往來いつといふ事を定めず。さいつ頃より聖德太子法の御歸依なさるゝ天竺の佛法、信心すればするほど有難い佛の敎へ、ちつと貴樣も後生を願つたがようごんすとかく今は佛法の世の中。この甚五郎なんぞも、その佛

道にはいつて、ちよつとした事にもコレ、阿彌陀如來の御かたち、なんと有難い事ではごんせぬか。

仁兵　いかさま、これは阿彌陀如來の尊像。甚五郎どのゝ細工なり、有難い事だと有難がりさうな處を、提婆の仁兵衛は斯うするわ。

甚五　ヤ、、、、勿體ない彌陀如來の尊體、土足に掛くるとは何事。身の程知らぬ惡人だな。

仁兵　彌陀にもやつぱり提婆の仁兵衛。天神七代地神五代より、人皇へ押移り、神武天皇より連綿と神の御末、そのしろしめす日本へ、天竺にてとりはやす佛像なぞとは汚らはしい。まだ／＼こんな事ぢやない。アレアノ蚊遣火へさつくべて、神國に生れた人間の生得正直に止まる守屋公への忠臣に、煙となしてくれべいか。ドリヤ。

甚五　待て。

仁兵　提婆の仁兵衛をなぜ留める。

甚五　情なきとよ、眼前の佛敵。必ず未來は墮獄して、うかぶ世なしとは知らざるや。

仁兵　丹霞こたへて曰く木佛を焚いて佛舍利を求めん。喩はゞ甚五郎が彫りたる木像にせよ、その魂のあるならば、草を分けて詮議ある、かの佛舍利を尋ね求むる手懸りに飽までも敵になる提婆の仁兵衛煙となしても大事ない。

ト甚五郎を突きのけ、彌陀の像を蚊やりの火鉢へくべる。焰硝の火ぱつと立つ、甚五郎口惜しき思ひ入れあるべし、仁兵衛團扇にて煽ぎ、

仁兵　燃ゆるは／＼。

甚五　これにつけても御痛はしきは聖德太子にて渡らせ給ふ。守屋が爲に襲はれ給ひ、たふとみ給ふ佛道も斯くなり果て、やみ／＼と、叡慮にも叶はぬかえ。思へば思へば口惜いなア。

ト思ひ入れする、どろ／＼になり、かしく苦しみ煙に恐るゝ事、いろ／＼あるべし、

かし　エ、、淺ましき我が身の上。佛敵の末は冥罰にて、アレ／＼／＼、今立昇るアノ煙に、三世の佛ましまして因果の道理を說き給ひ、それと我身を苦め給ふか。情なや、お免しなされて下されませい／＼。

トどろ／＼にていろ／＼苦しみ、

恐ろしや／＼。

仁兵　思ひも寄らぬかしくが有樣。斯かる不思議もある事か。ハテ、けしからぬこの場の體。

さの　樣子あらいで叶はぬ事。これいなア、かしくさん、

お前の心は確かえ。これいな〳〵。
ト介抱せうと立懸る。また苦しむ。このうち燒酎火燃
ゆる。
女子同志と思ひやり、介抱せんと立寄れば手もさへられ
ぬ身の猛火。コリヤマア、どうした事ぢやぞいな。
甚五　合點の行かぬこの有樣。佛敵の血筋とあるからは、
樣子ある女。なんにもせよ。
ト甚五郎、火鉢へ立懸り、水鉢の水を引つくりかへし
煙を消すと、どろ〳〵やむ。
仁兵　かしく、心はついたか。
かし　仁兵衞さん、面目ない〳〵。
さの　サア、仁兵衞さん、ごんせいな。
ト立ちかゝる。
かし　コリヤ、小女郎さんとやら、わたしが夫をどうさん
す。
さの　イヽエ、わたしや小女郎ぢやござんせん。島の內の
仲居、川まさのおさのぢやわいな。たとへこなさんが仁
兵衞さんのおかもじさんにもせい、今は藝子の勤めの身
三百兩の身請金、百五十兩濟んだれば、わきへ根引の主
あるかしく。仁兵衞さんの女房と世間へぱつと言はれて
も無い事ぢやぞえ。但しは外に、林右衞門さんの處へ請
出されて行かしやんす、かしくさんといふ藝子があるか
いな。
かし　サ、それは。
さの　サア、かしくさんが二人あるかいな。
かし　サ、それは。
さの　サア〳〵〳〵。
ト詰め寄せ、直ぐに仁兵衞が手を取つて、
サア、仁兵衞さん、ござんせいな。
ト行うとする。仁兵衞、おさのを突き退けて、かしく
を圍ひ、奥へ行かうとする。
待つた、この小女郎をどうさんす。
仁兵　一旦いひなづけの飛驒の小女郎、提婆の仁兵衞が女
房に持つまいものでもなけれども、かしくといふ藝子に
欺されて一分立たぬこの男、どういふ事が今出來て、く
たばるものでもない。さうした時には足手纏ひ、仁兵衞
が事を思ひ切つて、外へ緣組するがよい。添つて思ひを
せうよりも、添はぬをせめての思ひ出に、兄貴と一所に
歸つてくりやれ。
さの　そんならわたしを。

仁兵　女房にやア持たねえ。
さの　アノ、この小女郎を。
仁兵　嬶にやアいやだ。
さの　エ。
仁兵　是非といへば亭主が去るわ。去つて〳〵去りこくる男の一徹離緣したぞ。離別したぞ。
甚五　たとへ男の威光にもしろ、科もない妹を、甚五郎は受取らぬぞ。
仁兵　科がある。
甚五　科があるとは。
仁兵　兄が氣に入らぬわ。
甚五　何がなんと。
仁兵　提婆の仁兵衞が甚五郎を好かぬ。妹を連れて行きやれ。後日の爲だ去狀をやるべい。
　トあたりを見て以前の書付を取つて、しやんとしておさのにつけて、甚五郎へ投げて渡す。甚五郎開き見る。
甚五　この書付は。
仁兵　聖德太子神國に生れ、西域の佛法をたふとみ、より五畿內へ佛閣を造立せんと、飛騨の工み甚五郎と申す者を語らひ候由、右甚五郎と申す者を召連れ來たるに於ては、御褒美として修理の職に叙せられんとの守屋公の仰せ渡され。それが小女郞へ仁兵衞が去狀。
甚五　スリヤ、この甚五郎が書付を。
仁兵　甚五郎どのへ。
甚五　聟どのからの。
仁兵　離緣狀。
さの　スリヤ、又あんまり。
甚五　コレ。
仁兵　かしく。
甚五　小女郎。
兩人　こつちへ來い。
　ト唄になり、甚五郎はおさのを引つ立て、仁兵衞はかしくを引つ立て、下座と奧に別れてはいる。奧よりおつな、布團を枕を持つて出る。續いて林右衞門、銚子杯を持ち出る。直に帶を前へ廻して衣紋をつくる。
つな　林からさん。かしくさんとお前が仲、直らんして枕二つ、布團までわたしが働いて持つて參じたわいな。幸ひ幸ひ、屛風はあそこにあるさうな。ドレ〳〵、お寢間を拵へて上げやんせう。
　ト亭の內へ寢間をこしらへるうち、林右衞門嬉しがる

こなしあつて、

林右　ゆうべまでも慳貪にしたアノかしく、今日といふ今日、一所に寢るやうになつたは、おれが男のよい加減か鼻に見所でもあるのか。どうやら小つ恥しくなつて來た。ドレ〳〵、嗜みの金粒丸、口中涼しく致さう。

ト金粒丸を滅多無上に飲むうち、おつな惚れたろこなしあつて。

つな　林かうさん、わたしが心ざしは、とうから知つて居やしやんせう。いつぞやの起き番にわたしの方から仕掛けた色事、こゝで叶へて下さんせいな。

林右　エヽ、忌々しい。たつた今、鱈の蒲鉾を食ふに、鹽まぐろのせんばが食はれるものか。置きやがれ。

つな　拜むわいな〳〵。

ト無理やりに抱きつく。振放す所へ奥より傳八出て來る。うろたへておつな、傳八が口を吸ふ。傳八びつくりする。

傳八　林右衛門さま。この傳八はお前を一遍尋ねて奥に居りました。

林右　ソリヤ、また何で。急に用事でも出來て、またかまたか。

傳八　さうとも〳〵。林右衛門さま、かしくが身請のあの金の百五十兩の金が。

林右　おぬしが働きで定めて。

傳八　一文も出けぬぢや。

林右　ヤヽヽヽ、ソリヤ、なぜ〳〵。

傳八　なぜといふ事はないわいの。ゆうべ、お前にも話して置いた佛舍利の寶塔、二百兩の事はさて置いて。

林右　五十兩も質屋ぢや借さないか。

傳八　コレ、この手紙の文言の通り、かやうな物は質物には取り申さず候間、お返し申し上げ候、傳八さまへ、疊屋淡路屋吉兵衛。コレ、この通りで、とんとあかぬぢや。この上はどうせうとお前は思はつしやりまするぞ。

林右　どうといふたら、そなたに仕樣のない金の才覺、旅かけの林右衛門、仕樣もやうもないわいの。金が出來ねばかしくはおれが女房には持たれまいし、こりやマア、どうせう、なんとせう。傳八、よい了簡はあるまいかえ。金がほしい〳〵。

傳八　エヽ、お前も甘口な。食はせもの、色事師を見るやうな事をいはつしやりまするわいな。百五十兩の金が出來ずば、どうするものでござりまする。半金濟んだを言

譯にして、かしくを連れて逃げしやつしやりませ。

林右　いかさま、これはよい了簡。かしくを連れて逃げるがよい。ソレ〳〵、傳八、重ねて逢はう。さらば。

傳八　ア、コレ〳〵、林右衞門さま。お前ばつかりが連れて逃げる氣でも、肝腎のかしくがお前と一所ににぎやるかの。

林右　いかさま、そこもあるわいの。

傳八　お前ばつかりがうぬ惚れで、かしくを連れて逃げる氣でも、あつちに提婆の仁兵衞といふ、きつとした色男があるによつて、林右衞門さま、お前の方はきついテレ坊でござりまするぞへ。

林右　エ、忌々しい。そんならこれは何うすべえ。

傳八　なんの事はない、金さへ出來ればようござりますわいの。

林右　サア、その金の出來やうは。

傳八　お尋ね者の飛騨の工甚五郎が、この處へ今日入り込んで來て居るぢや。

林右　ヤア。

傳八　なんとよい金でござりませうがな。

林右　聖德太子に荷擔して、佛閣を造立せんと受合つたるお尋ね者。繩打つて出せば直ぐに□□たく。

傳八　コレ、壁に耳、滅多な事を○ナ□ござりませう。

ト唄になり、林右衞門、傳八、うなづいて下座へはいると、およし以前の形にて鏡臺を持出る。後よりかしく湯上りの形、浴衣の儘にて團扇持つて來る。

よし　かしくさん。鏡臺はこゝへ直して置いたぞえ。

かし　ソリヤ、ようしておくれだな。サア、お前もちやつと勝手へいて、行水をさんせぬかいな。此のやうな暑い時には、湯を使ふとサッパリとするわいな。

よし　それいな。かしくさん、この引出しに白粉もあるぞえ、大方ぎん出しや鬢つけも要らうな。今は油がかへるさかつて困るわえ。

トいひながら、かしくを團扇で煽ぐ。

かし　イエ〳〵、モウ、ようござんす。そのやうに煽いで下さんしては、氣が凝つてならぬ程に、モウ、よいわいな。

よし　ちつとも大事ないわいな。湯上りといふものは暑いものぢやわいな。遠慮さんせずとも、かうして置いて下さんせ。

かし　何のこつちやいな。モウ、置いて下さんせ。

よし　イエ〳〵、ちつとの間なりとも、斯うして居るかせめてもの、お姫さまの御奉公でござりまするわいな。

ト泣く。

かし　ヲヽ、辛氣。其のやうな事があるものかいな。わしさへつひに思ひ出した事もない事を。お姫さまぢやの、御奉公ぢやのと、エヽ、何のこつちやいな。

ト笑ふ。

よし　ソレ、其のやうに仰つしやる程、昔が思ひ出されまして、お痛しくござりまする。あなたさまこそ誰あらう、聖徳太子と一戰に及ばれ、御利運ありし御大將、物部の大連守屋公の姫君さま。

トつか〳〵いふを、人に聞かせまいと手を叩いて、

かし　コレ〳〵〳〵、何のこつちやいな。人にづゝながらすやうな事をいふたものぢやわいな。たとひ以前は主從であらうとも、今は藝子とこの家の娘御、表向きのつきやひとなり、色ゆゑこの身を捨小船、とても繋がぬ親子の緣。わしや提婆の仁兵衞さんゆゑぢやと、ようあきらめて居るわいな。

ト泣くと、奧にて、

料理　かしくさん〳〵。

かし　アレ〳〵、あの聲は確に料理番、かういふ所を見つけられては爲めにならぬ程に、早う奧へ行きやいの。〇早う行かしやんせいな。

よし　アイ、そんなら後にへ。

トおよしが奧へはいると、後へ料理番八公、銚子と杯を持出る。かしくを見つけて、

八公　かしくさん。お前はこゝにかえ。方々一遍尋ねました。

かし　わたしや、さつきからこゝに居たわいな。

八公　かしくさん、どうやらお前の目は泣き腫らしたやうな、へヽヽヽ、目でござりまするな。

かし　何の、こりや、なんぢやわいな。ヲヽ、何やらであつたわいな。ソレ〳〵、たつた今、これ、こちらの目へ蚊がはいつたわいな。

八公　そんならお前の蚊へ目がはいりましたかえ。

かし　なんのこつちやいな。

八公　わしといふものは、よく言ひ損ひをする奴さ。大阪でもこの生玉は蚊の名代所で、日が暮れるか暮れぬに、モウ、アレ〇アレ、口のはたへ、アレ、とんだ蚊だ。しかも縞の股引を穿いて居る奴さ。

かし　サア、此のやうな時は、早う蚊帳をつつて、はいつてゐるがよいわいな。

八公　そんならお前は愈々こゝで、林右衞門さまとしつぽりと、抱かれておよる心かえ。

かし　ソリヤ、知れた事いな。あれ程に思ふて下さんす林右衞門さん。どうしていやであらうぞいな。これいな、お前を頼む程に、早うこゝへぬしをつれまして來て下さんせ。

八公　そう聞いちやアとんだ事だ。ドレ／＼、林右衞門さまを連れだつて、こゝへ來ようか。

　トいふうち奥より、

林右　イヤ／＼、連立つて來るには及ばぬ。林右衞門、最前より君の御左右を待つて、この處に罷り在るぢや。

　ト前帶にして、ぼんぼりを持出る。

八公　マア、コリヤ、林右衞門さま。そんならお前さま、さつきから其處に忍んでお出でなされましたか。

林右　恥しながら忍び姿。此のやうなこと人に必ず話してくりやるな。その替りには何かの禮にそれ一兩。

　ト懷中より出して遣る。

八公　マア、正の物を正で一兩。これこそほんに途方もない事でござります。有難山の。

林右　ほとゝぎすなら一兩は返して貰はう。

八公　そんなら、ほとゝぎすを拔いて。

林右　ありがた山の。

八公　きり／＼す。これでモウ二分下さりませぬか。

林右　置きやがれ。時にかしく坊。今日といふ今日こそ、われらが心中が顯はれて、一ッに抱かれて寢てくれうとは、ほんの事か／＼。

かし　まだわたしを疑はしやんすか。林右衞門さん、これまでお前に心強い事をいうたは、お前の心を試めさう爲めであつたわいな。

林右　そんなら、なんと言やるぞ。これまであた慳貪に林右衞門を振つけたも、おれが心を引かうためか。

かし　アイ、さうぢやわいな。

林右　さう言やれば聞えぬぞや。擧げ詰めにして置く程なこの林右衞門。そなたは嘘ぢやと思ふのか。

かし　ソリヤ、嘘ぢやとは思はねども、わたしが方からお前に惚れて居たわいな。

林右　ほんの事か／＼。

かし　ひよつと一度でも逢うてから、突出されては恥ぢや

と思うて、心でばつかりお前の事を、明暮思うて居たわいな。
　トかしく、林右衛門に抱きつく。
林右　ほんの事か〳〵。
八公　エヽ、殺せ〳〵。
林右　サア、早う寐じるしとせうではないか。
かし　サア、わたしも早う寐たいけれど、アレ。
林右　コレ、八公、お主も野暮な者ぢやアないか。お向ひに幟を立つて待つて居るに、何をきよろりつとして居る事があるものだ。サア、早くどつこへなりと行つたり行つたり。
八公　これがどうして只行かれるものでござりまする。おいらはつひぞ冗談にも抱きついた事のないかしくさん。あつちから抱きつかれる。羨ましくつて、好ましくつて、どこもかしこも立ちづくみになつて、これが何うして一足も歩かれるものでござりまするぞ。やつぱり此處へ置いて下さりませい。
林右　エヽ、忌々しい。また金をくれろといふ事か。コレコレ、早く行くやうに、それ又一分。
八公　またこれなれば了簡もの、一部始終呑込んだ。さらばこれから先づ五百の單物を一つ受けて、四百が勤め、百が蕎麥、跡の二百は酒肴。こいつはよいわえ。
　ト唄を唄ひながら八公樂屋へはいる。ト林右衛門が傍へかしく寄添うて、
かし　モシ、林右衛門さん〳〵。
林右　マア〳〵。
かし　これまでお前に、わたしが氣を揉ませた程、またわたしにもそれだけは氣を揉せたがよいわいな。サア、この杯、ほん〳〵の女夫の盃。一つ上がつておくれ。
林右　今日は今朝じれ酒に呑んだれ、サ、こればつかりは呑まずばなるまい。ドレ、一つ注いでおくれ。
かし　サア、一つ上がつておくれ。
　ト奥より、仁兵衛、以前のなりにてせいて出て來る。かしくと顔見合せ、かしく、林右衛門に見せまいと雪洞の火を吹き消す。林右衛門茫然として、
林右　コレ、かしく。そなたは何で雪洞の火は消したのだ。
かし　サア、これはわたしが粗相を聞いて下さんせ。蠟燭の火先を取らうと思うて、ついあかりを消したわいな。
林右　ハテサテ、粗相な。誰ぞ來いよ〳〵。

ト手を打つ。

かし　これいいな。誰も來いでもよいわいな。押つつけ月代も上がるわいな。から暗いのが戀の闇。サア、斯うして置いて、一つ上つてお呉れ。

林右　また呑ませるか。これはとんだ事だ。蚊めが酒の匂ひを嗅いで、アレ、ぶん〳〵とつがもない蚊ぢや。コレ、かしく。此のやうにして居ようより、なんと寐じるしにせまいか。どうだ。

ト林右衛門、かしくが側へ寄り、仁兵衛、そろ〳〵と探りながら、かしくが側へ行き、襟を取つて引据ゑる。

かし　尤もぢや〳〵。

林右　かしく、何が尤もだ〳〵。

かし　サア、尤もぢやといふのは、何やらが尤もぢやわいな。ヲヽ、それ〳〵、尤もぢやというたのは、お前の事ぢやわいな。

林右　藪から棒を突出したやうに、なぜおれが尤もだ。

かし　サア、尤もぢやというたわな、わたしがこれまで、唯の一度もお前の心にも從はぬものぢやによつて、斯ういふ首尾に寢よう〳〵と言はしやんすが、尤もぢやといふ事いな。

林右　其のやうにおれが心を尤もだと聞いてくりやれば、林右衛門は死んでも本望。サア、又もや御意の變らぬうち、寢印とでようではないか。これをこらへて居ると、林右衛門になるものだ。

かし　マア〳〵、おまへは早う先へござんせいな。わたしや跡から行く程に、マア早うござんせいな。

林右　そんなら、おれに先へ行け。

かし　早うござんせいな〳〵。

林右　エヽ、有難い、手付けにちよつと抱きついて參らう。

ト探りながら、かしくに抱きつく。仁兵衛、林右衛門を取つて投げる。林右衛門びつくりして、

かし　暗うて何やら知れぬわいな。

林右　かしく。そなたは何處も痛みはせぬか。ヤレ〳〵あぶないめにあつた。さらばお先きへ參り、寢印と致さうか。

ト合方になり、林右衛門奥へはいる。

かし　林右衛門さん〳〵。跡からわたしや行くぞえ。お前は寢て居て下さんせい。〇エ〇わたしや跡でいま行くぞ

え。□□仁兵衞さん腹立てさんすは尤ぢや〳〵。
仁兵　ヤイ、おれを尤もだと思やァがるものが、アノ林右衞門とどうしてこゝで抱かれて寢られるものだ。コレヤイ、身請の事もうぬが得心もせぬものを、親方だといつてその相談を決めるものか。うぬが好き好んで林右衞門が處へうしやアがるに違ひはない。ようも〳〵提婆の仁兵衞といふ、人に知られる男の立たぬやうにはしやアがつたな〳〵。犬め、猫め、はつつけあまめが。エヽ、忌忌しい土性骨だな。
かし　サア、尤もぢやわいな。腹は立たうが其のやうにいはんすと、アノ小座敷へ聞こえるわいな。低ういうて下さんせ。言譯があるわいな〳〵。
仁兵　サア、その言譯をぬかしやアがれ〳〵。
かし　その言譯は、仁兵衞さん、お前の日ごろ尋ねさんす、佛舍利の手懸りがあるわいな。
仁兵　ヤア、なんと〳〵、アノ、さいこつの佛舍利の手懸りがあるか。
かし　あるわいな。さつきに舍利ほつの傳八が懷中に落した手紙に委しく書いてあつたわいな。
仁兵　スリヤ、傳八が懷中の手紙に、アノ、佛舍利の事が書いてあつたか。
かし　確に書いてあつたわいな。
仁兵　エヽ、有難い。
かし　低ういうて下さんせ。さうした事がある故に、お前の爲めにもならうかと、身請の事にはマア得心。私ぢやというて、お前と一旦言替した仲、一通りでもある事か。苦勞しようたその仲を、アノ林右衞門づらが處へどうして行かるゝものぢやぞいな。あのやうにいうた今の佛舍利の手懸り聞き出す事もあらうかと請だされうというたが一つ、また一つには林右衞門に請出さるれば、この身は儘、それから直ぐにお前の處へ行かるゝ事もあらうかと思うた智慧が害になり、お前に怨みを聞くわいな。腹が立つなら、サア、切らんせ。心が濟まずば殺さんせ。仁兵衞さん、おまへのからだぢやわいな。どうなりとさんせさんせ。
　ト身體を仁兵衞に突きつけて泣く。
仁兵　おれもこんな目に二三年も合はなんだによつて、大分心が鈍になつた。おぬしを疑つた。腹が立つなら堪忍しろ〳〵。
かし　なんの夕までもあかぬものか何ぞのやうに、せいて

せいてせき上せて、刃物三昧さんすくらゐなら、詫びさんせぬがよいわいな。わけも聞かいで腹立てさんすが、聞こえぬわいな〳〵。

仁兵　聞こえ、サア、林右衛門が耳へはいるやうに、提婆の仁兵衛が誤つたと、聲を高くいふべいか。

かし　何のこつちやいな。

仁兵　そんなら早く堪忍をしやがれ。

かし　堪忍せいと言はんすは、誤つたといはんすのかえ。

仁兵　とうからおらあ誤つて居るわ。

かし　そんならほんに誤まらしやんしたかえ。

仁兵　誤つたにきつながつけられるものか。

かし　さう言はしやんすがほんまなら、もつとこつちへ寄らしやんせいな。

ト仁兵衛を引寄せる。

仁兵　なんだ寄れ、ソレ、側へ寄つたがこれがどうした。

かし　アイタ、、、。癪が痛うてならぬ程に、力に任せて押へて下さんせ。

仁兵　能くこんな時に癪という奴は起る奴よ。ドレ、押してやるべい。腹をこつちへ持つて來い。○どこだ〳〵。こゝいらか〳〵。

ト仁兵衛が胸に手を入れて癪を押す思ひ入れ。かしくその手を取つて、

かし　イ、エ、そこぢやないわいな。□□□□ぢやわいな。

仁兵　合點だ。そんなら此處か〳〵。

かし　イ、エ、□□□□ぢやわいな。

仁兵　まだ□か。

かし　つんとモウそこぢやないわいな。□□□□ぢやわいな。

仁兵　まだ□か。

かし　まだ□。

仁兵　こゝより□に腹はないが。

かし　エ、、つんとモウ、なんのこつちやいな。

ト□□□□□□□□□、□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□、□□□□□□□、奥よりそろ〳〵林右衛門尋ねてくる。下座より傳八、雪洞を持ち、袖に隠して出る。

林右　かしく〳〵。コレ、マア、かしく。エ、、何をして居る事だ知らぬ、此のやうにあしくしては可笑しくもなんともない。かしく〳〵。

ト いふうち、傳八、屏風の側へ來てあかりを差出す。
ヤア、かしくはこゝに居たな。
傳八　提婆の仁兵衞の大ぬす人め。動きやアがるな。
林右　盜人を押へたぞ。どいつもこいつもみんな來い〳〵。
皆々　動きやがるな〳〵。
　ト振上げる。
傳八　滅多な事せまいぞ〳〵。
林右　エヽ、腹の立つ。うぬらは先つきから此處にうしやアがつた。斯うとは知らないで、今來るか〳〵と待つて居た間も餘つ程な間。エヽ、忌々しいわえ〳〵。
傳八　モウ、かうなつては騷ぐ事もせく事もないわいの。林右衞門さまの立つやうには、この傳八が膽でするぢや、とつと脇へいて見物してござりませい。貴樣達も、この舍利ほつが、それと聲を懸けるまでは、その棒の先を振廻す事はならぬ。
皆々　合點でごんす。
傳八　川まさの仲居は誰も居ぬかいの。仲居衆や〳〵。
つな　アイ〳〵。
　ト奥より出て來て、
ヤア、かしくさん。仁兵衞さん。コリヤ、えらい壺かぶらんしたなア。ヲヽ、笑止。
傳八　百五十兩といふ身の代のすんだ岩井風呂のかしく。そなたにきつと預けたぞや。
つな　アイ〳〵。
傳八　サア、こゝに居ても仁兵衞が爲めにもならぬによつて、早うかしくを座敷へ連れて行きや〳〵。
つな　アイ、かしくさん、奥へござんせいな。
かし　イエ〳〵、矢つ張こゝに置いて下さんせ。どうならうとも覺悟の前。行く事はいやぢやわいな。
つな　それでも仁兵衞さんの爲めに惡いわいな。サア〳〵ござんせいな〳〵。
かし　いやぢや〳〵、いやぢやわいな。
つな　ハテサテ、ござんせいな〳〵。
　ト無理やりにかしくを引つ立て、おつな奥へはいると傳八、仁兵衞が帶を取り上げて、
傳八　提婆の仁兵衞。マア、帶ひろどけで見苦しい。サアサア、帶しや〳〵。
　ト渡す。仁兵衞帶をする。
かしくは奥へやる。外に心懸りもあるまい。ナニ、提婆の仁兵衞、舍利ほつの傳八が會ひたい程に、大儀ながら

ちよつと此處へ出て貰はうわえ。
仁兵　會ひたいとあらば何處までも、からだを荷ない出して會ふまいものでもないが、マア、亭主方のお身さまから其處へ出やれ。
傳八　先づ、そなたから其處へ出やれ。
仁兵　お身さまから。
傳八　おぬしから。
兩人　ドリヤ、そこへフン出べいか。
ト思ひ入れすると、踊りの合方になる。仁兵衛、傳八、舞臺先へ一所に出る。
仁兵　舍利ほつ傳八。こゝへ出たが何の用だ。
傳八　ちよつと下に居て貰ひませうかえ。
仁兵　この仁兵衛に、下に居ろと。
傳八　大儀ながら。
仁兵　おぬしから下に居やれ。
傳八　マア、おぬしから。
仁兵　おぬしから。
兩人　ドリヤ。
ト兩人下に居る。
仁兵　下に居たが何の用だ。

傳八　外の事でもないが、岩井風呂のかしくは、三百兩といふ身の代を出して、勤めを引かせた客人は、この傳八が爲めには旦那筋。今のやうな見苦しい事があつては林右衛門さまは御腹々、その分にも濟まさつしやらうが、世話しかゝつたこの傳八が、大阪中にこのつらが、マア立たぬやうなものぢやによつて、押へられたが不肖ぢやと思うて、生きるとも死ぬるとも相手になつて勝負してたも。會ひたいとはこの事ぢやて。
仁兵　何の事かと思つたれば、神代から知れてある、燒餅出入りの貰ひ引き、あつちのものとも、こつちのものとも片をつけやうと言ひかけられて、提婆の仁兵衛も男、五分でも跡へ寄りやアせない。お身さまが所望ならこの場で相手になるべいわ。
傳八　コリヤ、さうありさうなものぢや。さりながら、お身さまも若い身の上。よもや義理の惡いアノかしくと、今までは格別、今日に限つて色がましい事は無かつたであらうが、言ひ掛けられて引くに引かれず、無かつた事をあるにして、醉狂になる相手なら、役には立たぬ事ぢや。置きにしや〳〵。
仁兵　コレ〇コレ、傳八。おぬしも男に似合はぬ卑怯な事

をいふものぢやアないか。現在こゝで見つけられたが確な證據。この段になつてさういふ事ぢやないと、たとひ無い事でも無いといふやうなうろたへた男ぢやアない。おぬしが切り掛けざア、おれの方から切り掛けべいか。サア拔け〳〵〳〵。舍利ほつの傳八、相手にならうわ。

傳八　スリヤ。どこがどこまでもお身さま。

仁兵　かしくが色さ。

傳八　そんならそれに違ひはないか。

仁兵　かしくとおれが二つの命を、まさかの時は、犬の餌食とはぐりに投げて懇ろをした。

林右　エヽ、厚かましい。ようも〳〵そんないや味な事が人なかで言はれるな〳〵。

傳八　それさへ聞けば提婆の仁兵衞、モウなんにも言ふ事はない、仕度はよいか。

仁兵　覺悟はよいか。

傳八　相手になれよ。

仁兵　なつて見せうか。

傳八　ソリヤ、またどうして。

仁兵　男と男が相手になるにやア、ちよつとした處がこんなものだ。

ト懷ろへ手を入れうとする、その手を傳八取つて思ひ入れあるべし。

傳八　コリヤ、提婆の仁兵衞ともいはれるものが、喧嘩の中で、なぜ懷ろへ手を入れる。

仁兵　サア、これは。

トまた手を入れうとする。立廻りありて、

傳八　モウ、了簡が。

兩人　ならぬわえ。

ト一度に尻をからげると、踊の合方になり、いろ〳〵面白きたてあるべし。とゞ傳八取つて投げて踏まうとすると、大どろ〳〵にて仁兵衞立ち竦みになる。そのうちに林右衞門刀を拔いて切つける。その刀を下駄にて叩き落し、直ぐに林右衞門が眉間を叩き割る。ウンと下に居ろうちに、傳八また〳〵立廻りありて、傳八と林右衞門を胸打に叩きのけ。

林右　ソレ、遣るな。

皆々　動きやアがるな〳〵。

ト皆々仁兵衞を棒伏せにしようと叩きにかゝる。これより大勢を相手に仁兵衞、切散らして花道へ追込む。

そのうちに奥より甚五郎出で、林右衛門が落したる書き物と、傳八が書き物を拾ふ。直ぐに仁兵衛を見つけて後ろから抱き留める。

甚五　待つた〱。

仁兵　放した〱。

ト立廻りあるべし。

甚五　おれだが待つまいか〱。

仁兵　ヤア、貴さまは。

甚五　マア〱、靜まつたがよい〱。

仁兵　留めさつしやるな、了簡がならぬ〱。

甚五　どうとも斯うとも、一分の立つやうに、わしがしてやらう。マア〱、あつちの挨拶も聞いて仕様があらう。マア〱待つたがよい〱。

ト無理やりに仁兵衛を下に置く。これより揉手をして林右衛門が側へ行く。

ハイ〱、御免なされて下されませい。わたくしはアノ仁兵衛とは免がれませぬ者でござりまする。斯やうな事を承はりまして驚きました故、あなた方へお詫に参りましてござりまする。幾重にも御了簡なされて下さりませい。

林右　了簡する事はならない。物部の守屋公の家來、大野の林右衛門といふ武士が、素町人に出合ひ、眉間へこの如く傷をつけられたといつちやア、刀差す身のマア大法が濟まない。どこがどこまでも相手にする。提婆の仁兵衛をこゝへ出せ。

甚五　左樣ではござりませうが、どう致しまして仁兵衛風情が、お歴々のお侍さま方のお顏へ傷をつけませう。これは大方間違ひでござりませう。左樣でござりませうござりませう。

林右　これ、やい〱。武士がしやつ額へ傷をつけられて間違ひだといつて濟むものか。たつた今、アノ野郎が下駄で食はしたに違ひはない。武士が立たない、相手にする。仁兵衛をこゝへ早く出せ。

甚五　左樣ではござりませうが、物をつもつて御覽じませ。お武家方は町人とは違ひまして、傷のつき處によつてついお身の上に障りまする事もあるものだとやら承はりましたが、お前さまのお眉間へ町人が下駄で傷をつけたといふ事が、ひよつとお屋敷へ知れましたならば、お侍さま、大方お前も扶持の食ひ上げでござりませうがえ。

林右　何とした。

甚五　武士が町人に額へ傷をつけられたといふ事が、お前のお屋敷へ知れましたならば、大方お前は身上を棒に振つてあはゝの三太郎でござりませうぞえ。

林右　そんなら武士が町人に傷をつけられちやア臺座後光をしまふ詮議か。

甚五　知れた事さ。それをお前が御存じでありながら、どうして町人に其のやうな目にお會ひなさるゝものでござりまする。間違ひさ〳〵。

林右　成程、間違ひ〳〵。

甚五　間違ひならば、お侍さま、どうぞ御料簡なされて下さりませう。

林右　そりやアならない。この林右衛門が額の傷は間違ひにもしてやらうが、コレ、これを見ろ。此のやうに血が流れて、この形ぢやアどうも屋敷へは歸られぬ。どこがどこまでも仁兵衛は、喧嘩の相手だ。

甚五　成程其のやうに血が流れましては、お屋敷へお歸りなさるゝ事もなりますまい。ドレ、その血を留めて上げませう。幸ひ〳〵。

　ト鋸ぎりの挽屑を掴んで、林右衛門が傷へかける。

ソレ、その藥でサツパリと流れる血は留まります。ちつとの間ぢつとしてお出でなさい〳〵。

林右　コリヤア、なんだ。抹香ぢやアないか。おれを猫だと思ふさうな。コリヤア何だ〳〵。

甚五　それは鋸ぎりの挽屑、濡れたものを乾かせる大妙藥ソレ、血が留まつたでござりませう。

林右　コリヤア、奇妙だ。サツパリと血が乾いたわ。

甚五　血が乾いたら歸らつしやりませ。

　ト林右衛門を引立てゝ、下の方へ突き放す。

林右　さりとは弱い商賣だ。

甚五　サア、これからは傳八さまとやら、提婆の仁兵衛が代りにわたくしが誤まりませう。どうぞ御了簡なされてお歸りなさい。

傳八　この舍利ほつにも歸つてくれいか。

甚五　左樣。お侍さまさへ御了簡なされた程の事。そこもとさまにも、サア、どうぞ御了簡なされてお歸りなさい〳〵。

傳八　いけ盜人の提婆の仁兵衛、その分ぢやア濟されない。重ねての爲めにも爲らぬ。存分せにやおかぬ。この傳八は挨拶聞いて歸るまいわえ。

甚五　そんなら。アノ仁兵衛は盜人でござりますかえ。

傳八　盗人も／＼、身受けの金の濟んで居る藝子のかしくをぶつたくつたれば、大盗人どろ坊の仁兵衛を、早うこゝへ出せ。

甚五　さう聞いちやア、こつちからもその分にはなりませぬわいの。サア、藝子のかしくは賣り物、金さへ出せばこつちの買ひ物。どういふ事で身請けの金が濟んで居ますぞ。その確な事を見た上で存分にしたがようごんす。證據を見せさつしやりませ／＼。可哀さうに仁兵衛も男、ぬす人と言はれちやア立ちませぬぞ。

傳八　いうないやい／＼。證據のない事をいふものか。コリヤ舍利ほつの傳八さまぢやわ。百五十兩といふ金を濟し、その受取、この傳八が宛名にして、取つて置いたわいやい／＼。

甚五　それならそれが確た證據。その百五十兩の受取を見ませうか。

傳八　見まいというても、こつちから見せねば置かぬ。サア、林右衛門さま。その受取證文を出さつしやりませ、出さつしやりませ。

林右　合點だ／＼。ドレ／＼。たつた今證文を出して、提婆の仁兵衛をぬす人にしてくれべい。

傳八　サア、早くこゝへ出さつしやりませ／＼。

林右　ヤ、、、いろ／＼にして見ても百五十兩の受取、かしくが身請證文がおれが紙入には見えないが、コリヤどうだ／＼。

　トいふ、傳八驚いていろ／＼探す事あるべし。甚五郎拾うたる書付をひら／＼させる。

傳八　その書付がなければ闇ぢやわいの。早う出したり、早う出したり。

林右　サア、それは探して見ても／＼。

傳八　どうぢやえ。早う出さんせぬかいの／＼。

甚五　モシ、その書付はこれぢやアごんせぬか。

傳八　ドレ／＼。

甚五　二百兩の義は勿論、かやうなる品は、一向質物には取り申さず候。

　ト出して見せる。

傳八　ヤ、、、その書付を取られてはこつちの身の上。此のやうなものは、舍利ほつの傳八が。

　ト甚五郎が持つてゐる書付を引つたくる。その時、甚五郎書付を引換へて渡す。傳八それと知らずに寸々に引裂く。甚五郎わざと驚いて見せる。

こう〳〵。引裂いて反古にするわ。

甚五　傳八どの。傳八。お身さまは今の書付を引裂いて仕舞つたな。

傳八　あのやうならつちもない書付は、反古にしても大事ない。

甚五　そんなら提婆の仁兵衛は、ぬす人だといふに、これからは證據はないでごんす。

傳八　その盗人だといふには證據はある。何より確かな百五十兩の受取がこつちにあるわえ。

甚五　その百五十兩の受取はたつた今、貴さまの手で反古にして破つて仕舞つたぢやアないか。

傳八　いろ〳〵な事をいふ和郎ぢやわいな。この書付がどうしてかしくが身請の證文であらう。とつけもない事いふわいの。

トいひながら、書付を拾ひ上げ、合せて見てびつくりする。

ヤ、、、コリヤ、どうぢや〳〵。質屋から來た手紙ぢやと思うたりや、かしくが身請の身の代證文。ヲ、〳〵ヲ、、あた忌々しい。

甚五　江戸の水で育つた者でごんす。お身さま達に揚足を取られるやうな事をして堪るものか、何とこれも凄まじいか。

傳八　イヤ、親玉ほどあるわいの。

林右　おきやがれ、書付を引換へられて、面白さうに何のこつた。これにつけても言分のあるアノ仁兵衛め。許しちやア置かれない。傳八、ぬかるな。

傳八　合點ぢや。ござりませい。

ト兩人立懸る。

甚五　また熱が浮いて來たな。ジタバタすると、二百兩の金を借りて呉れろと書いてある、目算の手紙を高い聲で讀むべいか。

林傳　サア、それは。

甚五　但しは歸るか。

林傳　サア、それは。

甚五　この手紙を讀むべいか。

林傳　サア、それは。

甚五　サア〳〵〳〵、言分があるか。

林傳　ない。

甚五　きり〳〵早く、歸つた〳〵。

林右　エ、、忌々しい。おれがしまひは何うでこんな目に

逢ふべいと思つて居た。始めよしの後わるし。先づ第一かしくとおれは相性が悪い。かしくは杜若で、かきつばたの水性、おれはてれ坊の火性、火と水では、どうしてこれが行くものだ。あた阿房らしい。サア、傳八、何と歸らうではないか。

傳八　歸らいでわいの。歸りは歸るが、提婆の仁兵衛、必ずわれが强うて勝つたと思はぬがよいぞよ。われが强いのではない、おれが弱いのぢや。挨拶に出た田舍者。見れば見るほど最前の。〇勝つところで勝つて見せう。林右衛門さま。サア、ござりませう。

ト唄になり、林右衛門、傳八、下座にはいるとすぐに仁兵衛立寄り、

仁兵　あの分に棄て置いちやア、提婆の仁兵衛がいよ〳〵名折れ。どこがどこまでも舍利ほつ傳八、ぶつ放して一分を立てる。ソレ。

ト行かうとする。甚五郎これを抱き留めて、

甚五　ハテ、聞分けの悪い。今のやうな目にあはせた上に、まだ一分を立てうとはらつちもない。奥へ遣る事は甚五郎はさせぬ。待つた〳〵。

仁兵　斯う言ひ掛つた男の意地。かしくにけちをつけられては、提婆の仁兵衛、生きて居ても面白くない。とさてをおしやると、貴様だといはせない。手向ひをしてなりとも振切つて奥へ行くよ。サア〳〵、きり〳〵と此處を離した〳〵。

ト行かうとする。立廻りありて、

甚五　どつこい、留め掛つた甚五郎。イヤでもオウでも留めにやアならぬ。お身さまの爲めだ。奥へ遣る事はならない。留めた。

仁兵　さういへば、提婆の仁兵衛が、力に任せて行つて見せう。

甚五　この甚五郎が腕にまかせて、お身さまを留めて見せう。

仁兵　腕に任せて留めて見やれ。

甚五　力に任せて行つて見やれ。

仁兵　放せ。

甚五　ならない。

仁兵　放せ。

甚五　ならない。

兩人　どつこい。

ト是より立廻りになり、甚五郎、仁兵衛を見事に取つ

て投げる。仁兵衛投げられてせいて摑みつく。甚五郎仁兵衛を突き倒す。とゞ仁兵衛脇差を拔かうとする。手斧にて右の二の腕を留めて、

甚五　何とこれぢやア、拔く事も突く事も、提婆の仁兵衛なるまいが。

仁兵　サア、それは。

甚五　下に居やれ。〇最前の兩人は、提婆の仁兵衛が手にもたらぬと、高を括つて大勢の中へわれ獨り、先きにどのやうな強い奴があるか、または人數を以て取卷かば、多勢に無勢、搦めらるゝは必定。さればこそ眼前の證據。この甚五郎に提婆の仁兵衛が勝つたるか。つがもない、まだどのやうな目に逢はせうも知れないよ。お身さま達の一人や二人、相手にしかねる甚五郎ぢやアない。提婆の仁兵衛といふは一ッの功を立つるまでの假の名、本名を名乘る時は秦の川勝が末葉、菅の次郎豐勝、かりそめの事に命を失ひ、それで太子へ忠臣が立つか。いかに若いとて、たゝゝたはけ者めが。たとひ菅の次郎豐勝といふ名を、提婆の仁兵衛と替へたればとて、男の立つの立たぬのと、なぜ其のやうに短氣な心を出しては忠臣を棄るのだ。心に願ひのある者は、叩かれうが踏まれうがぢつとこたへて堪忍せねば、天下に名を爲す大功は立てられぬ。斯ういはれても追つ駈けて行く心なら、なまなか他人の手に掛けうより、親子のよしみにこの甚五郎が相手にならう。サア、立上つて勝負々々。

ト立廻る。

仁兵　必らず早まり召さるゝな。提婆の仁兵衛惡者なれども、親に對して刃向ひは致さぬ。目指す相手は舍利ほつの傳八。いづくまでも。

甚五　待て。甚五郎が意見を聞き入れず、またも駈出す心があらば、どこまでも相手になるぞ。

仁兵　サ、、、一通りに聞かれたら、かしくが事に身を委ね、いたづらに命を捨つると、提婆の仁兵衛を思されうが、まつたく以つて左樣でござらぬ。かしくが事にことよせて、日ごろ尋ね奉る碎骨の佛舍利、その手懸りの舍利ほつの傳八、提婆の仁兵衛が喧嘩の相手。必ず留めておくりやるな、

甚五　スリヤ、かしくが事にことよせて、佛舍利の詮議とな。

仁兵　いかにも。

甚五　出來しめされた。然らばお行きやれ。

仁兵　ソレ。
ト行かうとする。
甚五　鬪勝のうろたへ者待て。
仁兵　何がなんと。
甚五　うろたへ者であるまいか、人の意見を聞入れなく、奥を目掛けて駈出すか、佛舍利を隱し置くといふ傳八に何で確かな證據があるか。
仁兵　サア、その證據は。
甚五　證據も無くて詮議とは、うろたへ者であるまいか。
仁兵　ホイ
甚五　その手懸りのこの一通。
ト以前の手紙を出して渡す。
仁兵　ドレ。
甚五　ソレ。
仁兵　急に御入用の由にて佛舍利をおこしなされ候へども、二百兩の儀は勿論、斯やうなる品は、一向に質物に取り申さず候。傳八さまへ。淡路屋吉兵衞。
甚五　やかましい。
ト仁兵衞の口を押へると唄になり、囁き合つて奥へはいると、跡へ傳八、かしくを引摺つて、バタ〳〵にて出て來る。直ぐに投げつけて、
傳八　サア、どういうても、林右衞門どのゝ處へは行かぬな。
かし　堪忍して下さんせ。心底惚れた仁兵衞さん。ぬしより外にどのやうな事があらうとも、仁兵衞さんをば捨てぬ心。外に此身は汚さぬ〳〵。どうぞわしが心根を思ひやつて下さんせ。外へは行かぬ。いやぢやわいな。
傳八　こいつが〳〵〳〵。押しを重たう出をつたな。コリヤヤイ、われはマアこの傳八を何ぢやと思うて居るぞいやい、それぬかさう〳〵。
かし　ソリヤ知れた事ぢやわいな。傳八といふはこの頃の變へ名、新屋敷の茂兵衞さんというて、わたしが爲めには兄さんぢやわいな。
傳八　ソレ、口では兄んごと兄といふ事は知つて居れど、臍の下には覺えては居をるまい。いかにもわれがいうた通り、新屋敷の茂兵衞というて、中つぎ女衒、代判つき。世間の竅を買うて歩くがわれらが商賣。この夏の始めに平野口で近付きになつた時、わたしをどうぞ妹にして嶋の内へ奉公させてくれいと、おのれがおれを頼んだによつて、ア、あしないしはイヤなものぢやと思うたが、マ

ア、當分金になる事ぢやと思うて、岩井風呂へ三年四十兩、十五匁つめの證文して世話燒いてやつたは、みんなおのれが爲めぢやぞよ。どこの牛の骨か馬の骨やら知れもせぬ者を、身に引受けて兄の判を押したこの茂兵衞、血を分けた兄弟よりまだ〳〵緣が深いぞや。それに兄のいふ事を聞かいで、林右衞門どのゝ處へは行くまいのなんのかのと、ようも〳〵其のやうな思ひ付きな事がいはれるな〳〵。どのやうに言うてもならぬが、よう了簡してそれぬかせ。

かし　段々いはしやんすれば、お前の皆尤も、わたしによい事はござんせぬ。さりながら、兄さん、こゝをよう聞いて下さんせ。いつぞや平野口で初てお前に近づきになつた時、尋ねゝばならぬ人がござんすによつて、どこへなりとも奉公のお世話なされて下さりませと、打明けていうたお人は仁兵衞さん、そんならお前もぬしの事は、エ、得心の上で今のかしくぢやないかいな。たとへ林右衞門さんの處へいてよい事があればとて、言ひ替したその仲を、どうマア別れて行かれうぞいなア。背くまいと思へども、これぱつかりはこれぎりにして、モウ、兄さん、必ずいうてく下さんすな。

傳八　それぢや〳〵。奉公に出たいというたのも、提婆の仁兵衞を尋ねう爲め。そんならわしがいふが無駄、頓と忘れてのけたわいの。堪忍しや〳〵。

かし　そんなら思ひ出さんして、仁兵衞さんの事はお前も許して下さんすか。

傳八　總體勤めの奉公は、樂みなうてはならぬものと、重ね井筒にある通り、藝子のかしくが身の上も、提婆の仁兵衞といふ色事もなうてわいの。大事ない〳〵。これからはこの茂兵衞も見ぬ顏ぢや。どうなりとしや〳〵。

かし　さつても粹な兄さんぢやぞ。其のやうにいうて下さんすりや、今更どうやら恥かしいわいな。

傳八　なんの〳〵。時に、かしく。そなたへ拜ませる物があるわいの。こゝへ來や〳〵。

かし　わたしに拜ます物があるとはえ。

傳八　必ず人にいふまいぞ。大切なる釋迦如來、碎骨の佛舍利。コレ、おれが疾うから持つて居るわいの。

ト。袱紗包みを出して、寶塔を見せる。

かし　エ、

ト驚いて段々ほしくなるこなしあるべし。

傳八　何を其のやうに、膽を潰す事があるものぢやぞいの

有難い物ぢや。近う寄つて拜みや〳〵。
かし　アイ〳〵。
　ト手を出して見て、傳八に遠慮する。
傳八　サア〳〵、そなたの手へ渡しませう。とつくりと拜むがよい。サア〳〵、手を出しや〳〵。
かし　アイ〳〵。
　ト傳八渡す。かしく受取つて戴き。
コリヤ、マア、兄さん。どうして持つてゐやんすぞえ。
傳八　聞いてたも、この佛舍利は、この傳八が物部の守屋どのに頼まれて、斑鳩の御所へ忍び入つて、まんまと盜み取つたわいの。
かし　エヽ。
　ト下に居る。
傳八　ハテサテ、きつい膽の潰しやうな。こゝぢやて。盜みは盜み取つたが、今までは詮議が嚴しいゆゑ、出す事もならず、隱して置く事もならず、どうも仕樣がないわいの。物は何と相談ぢやが、これ、そなたの可愛がりやる提婆の仁兵衞が爲めにもなりさうな物ならば、そなたに遣らうか。なんと貰やる心はないか。
かし　そんなら、わたしに下さんすか。

傳八　ヲヽ、妹婿の爲めになる事ならば、遣らいでは。
かし　エヽ、有難うござりまする。これいな、兄さん、ありやうは斯うぢやわいな。この佛舍利を方々と尋ねて、不斷居やしやんしたわいな。
傳八　そんなら、アノ提婆の仁兵衞が、
かし　アイ〳〵。
傳八　さうであらう〳〵。この佛舍利を求めう爲め。
かし　提婆の仁兵衞といはしやんすれど。
傳八　ありようは官軍の味方。
かし　それいな。本名は。
傳八　その本名は何といふぞ。
かし　サア、それは。
傳八　提婆の仁兵衞が本名聞かう。
かし　サア、それは。
傳八　サア。
かし　サア。
　サア〳〵〳〵本名ぬかせ。
　トかしくを押詰め、寶塔を傳八取返へして詰寄せる。
　かしく俄かに笑ひ出して手を打ち、傳八が肩を叩き、
かし　何のこつちやいな。兄さん、又してもむつかし

う物をいはんすわいな。わたしも大切なる佛舍利をお前に貰ふ事ぢやによつて、提婆の仁兵衞とばかりいうては信仰があるまいと思うて、芝居の狂言を思ひ出して、本名があるわいなというたのぢやわいな。

傳八　そんなら本名はないか。

かし　どうして、ぬしにあるものぢやぞいな。

傳八　本名がなくば遣られぬ、この寳塔。たゞ一思ひに打割つて仕舞うてくれう。

かし　サア、それは。

傳八　ほしか本名をありやうに言や。

かし　ぬしに本名がないわいな。

傳八　そんならいつそ。

かし　コレ、申し。

傳八　ほしいか。

かし　サア、それは。

傳八　本名をありやうにぬかすまいか。

　トかしくを手ごめにする。

かし　どのやうに言はんしても、本名はないわいな。本名はなけれども、その佛舍利は貰うたぞ。

　ト手を掛けて一散に行かうとする。傳八驚いて引留め、いろ／＼せり合ふ。立廻りあつて、とゞ、傳八、わざと池へ取落して入れる。かしく是を見て、

ヤ、、、菅の次郎豐勝さんの尋ねしやんす佛舍利を、アノ、水中へ、ヲ、／＼／＼、ハア。

　ト泣落す。

傳八　さてこそ、提婆の仁兵衞といふは菅の次郎豐勝、繩打つて詮議する。ソレ。

　ト行かうとする。立廻りあり。

かし　兄さん。免して下さんせ。

　・ト一ト太刀切る。是より踊の合方になり、傳八を殺す事いろ／＼仕草あるべし。とゞ思ひの儘にふぐり、死骸をこかして方々血を拭いて居る處へ、甚五郎、おさの出て來る。かしく、これを知らずに血を拭いて居る。

さの　兄さん。奥でもお前にいうた通り、提婆の仁兵衞さんは、いひなづけのわたしが夫。早う固めの杯なとして落着きたいわいな。

甚五　さうであらう／＼。コリヤ、甚五郎とても同じ事。何にもせい、早う仁兵衞へ逢ひたいものぢやわいな。

　トいひながら、かしくと顔見合せ、かしく、びつくりして、うろたへて、在合せたる布團を傳八が死骸へか

ける。これよりかしくうろ〳〵する。貴様はかしくどのでござらぬか。

かし　イエ〳〵、わたしやそんな者ではないわいな。

甚五　何を其のやうにうろたへさつしやるぞいの。かしくどのとは貴様の事でえすわいの。

かし　エ、誰がかしくぢやえ〳〵。

甚五　氣が違つたさうな。貴様がかしくどのぢやわいの。

かし　ほんに、わたしがかしくであつたわいな。

甚五　きつい臈の潰しやうな。よい處で逢ひました。かしくどのにには折入つて頼まねばならぬ事もごんすわいの。ドレ〳〵、それへ參らうか。ヤレ〳〵、よい處で逢ひましたなア。

かし　何のこれがよい處で逢うたかいな。惡い處も惡い處、近年のじゆつない處ぢやわいな。

甚五　コレ、小女郎。よい處でかしくどのがござつた程に、サア〳〵、そこへ我が身も出て、挨拶ぢや〳〵。

さの　アイ〳〵。ほんにお前はかしくさん。ハテ、よい處で逢うたわいな。モシエ、近頃さしつけがましい事でござんすが、かしくさん、わたしに何うぞ下さんせいな。

かし　何のこつちやいな。跡も先きも言ひもせで、このかしくに呉れいと云はんすは何かえ。ホヽでもいから過ぎさんして、藥でもくれいと言はんすのかえ。

さの　イ、エ、藥ではないわいな。

かし　そんなら大方、兄さんのおみやに珍らしい、更紗の煙草入のやうなものかいな。

さの　イ、エ。

かし　そんなら聞こえた、代筆に文を書いてくれいといふやうな事かいな。

さの　イ、エ。かしくさん、わたしがお前に下さんせ、貰ひたいといふは、今日の今までお前と懇ろして居やんしだ、アノ、提婆の仁兵衛、アイ、アノ仁兵衛さんをわたしが男に下んせいな。

かし　エ、何といはしやんす。

さの　さいな。かしくさんの今まで懇ろして居やしやんした、アノ提婆の仁兵衛さんを、わたしが夫に、アイ、連合に貰ひたいといふ事ぢやわいな。

かし　そんなら何といはしやんす。アノわたしが深う言ひ交した男の仁兵衛さんを。

さの　どうぞわたしに。

かし　ならぬわいな。

さの　エ。
かし　ソリヤ、金輪際ならぬ事でござんすわいな。。小女郎さん。思ひ切つて下さんせ。
さの　アノ、わたしが貰ひたいといふ、仁兵衞さんの事を。
かし　いやでござんすわいな。
さの　其のやうにつとめでさんすりや、またこつちからも横に車と出にやならぬわいな。
かし　どうなりとも出やしやんせ。たとへお前が横に車と出やしやんせうが、新地へ船で出やしやんせうが、こつちにちつとも構ふ事はないわいな。
さの　コリヤ、面白いわいな。そつちから構はんせぬ事なら、こつちから構はうわいな。いひなづけの仁兵衞さん、外に女中と添はせては、一分が立たぬによつて、帶でもしつかと締直して、ちよつとお前に逢はうわいな。
ト甲斐々々しく支度をして、かしくが側へ寄らうとする。甚五郎立掛り、留めて、
甚五　待て。
さの　イエ／＼、退いて下んせ。仁兵衞さんはわたしが言ひなづけの夫、どこがどこまでも貰はねばならぬさかいに、わたしに言はせて下さんせ。
甚五　ハテサテ、マア／＼兄さまに任せておきや／＼。
さの　そんならお前、この譯いうて、アノ仁兵衞さんを貰うて下さんすか。
甚五　サア、どうなりともするわいの。待ちや／＼。
さの　いから今まで懇ろにして居やんしたというて、あんまりぢやわいな／＼。
甚五　ハテサテ、よいわいの。其のやうに言はぬものぢやわいの／＼。默つて居や／＼。
トおさのを納め、かしくが側へ行き、
今言はつしやりました事を、こゝでわしも聞いて居ましてござりますが、男も色戀をするくらゐならば、こなさんのやうな情のある、氣どりの面白い女中とするがようごんすわいの。誓文々々、何にも知らぬわたしらでさへ惚れた奴さ。モウ色氣より食氣と、ものに構はぬわしらでさへ味な心になるものを、まして男盛りの仁兵衞どの、こつちからも思つたり、あつちからも思つたり、兩方相惚れで、ざつと博奕は出來たといふもの。羨ましいわえ／＼。あはれ、この甚五郎が年十五だに若くんば仕樣もやうもあるけれど、今は色男の年の寄つたのと、金

龍山の米饅頭は誰も食はぬでごんす。何と物は相談だが、なんと貸しては下さるまいか。

かし　甚五郎さんとやら、このかしくに、何が借りたいと言はんすのぢやぞいな。

甚五　わしが借りたいといつても、錢金の無心でなし、下駄傘の類でもごんせぬ。わしが貴樣に借りたいといふは、提婆の仁兵衞をたつた三月か四月、なんとこの甚五郎に借しちや、貴樣、下さるまいか。

かし　ヲヽ、可笑し。手道具かなんぞのやうに、アノ、男の貸しいらひ、コリヤ、はやらうわいな。甚五郎さんとやら、何より易い事でござんすが、こつちにも當分入用な男、お氣の毒ながら、マア、貸されぬわいな。

甚五　それはさうでごんせうが、隨分と跡の減らぬやうに、大事に使ひませう程に、どうぞ貸して下さるまいか。

かし　モウ、いうて下さんすな。どのやうに言はしやんしても、仁兵衞さんに於ては、どうも貸されぬ譯があるわいな。ぢやによつて、貸す事はならぬわいな。思ひ切つて下さんせ。

甚五　それはあんまり氣強いといふもの、三月が成らずば二月貸して下さるまいか。

かし　いやぢやわいな。

甚五　二月がいやなら、一ト月。

かし　きかぬ〳〵。

甚五　一ト月がならずば半月。

かし　拜むわいな。

甚五　半月がいやなら十日。

かし　ヲヽ、しつこ。

甚五　十日がいやなら五日。サア、五日がいやなら二日。二日がならずば一日。一日がならずば今夜ばかり。どうぞ貸しては下さるまいか。

かし　默らんせ。

甚五　おつと默つた。

トロを押へる。

かし　あた聞きともない。ならぬ事をいつまでも其のやうにいはんす程にの。コリヤ、わたしを女子ぢやと思うて、阿房にさんすのぢやな。此のやうな處に居たら、どのやうな事を聞かうも知れぬ。長居は恐れ。甚五郎さんとやら、ゆるりとこれに居やしやんせ。

トかしく立つて行かうとする。おさの布團の中を見つ

けて、
さの　ソレ、布團の中に居やしやんすは、てつきりと仁兵衞さん。ソレ〳〵。
ト寄らうとする。かしくビツクリして取つて返し、おさのを突きのけ、布團の上へすわり。
かし　イヽエ、コリヤ、仁兵衞■んぢやござんせぬぞ。
さの　隱さしやんな。サア、こゝへ出して下さんせ。言ひなづけの女房なりや、半分はわたしの男。かしくさんと三ッ□な□□□いふ事があるわいな。サア、早う、仁兵衞さんを出さんせいな。
かし　どのやうに言はしやんしても、仁兵衞さんではないものを。マア、そつちへいて下さんせ。
さの　イヽエ、退くまいわいな。仁兵衞さんに逢うて、たとへ嫌はれてもわたしや本望。サア、ちよつと逢はせて下さんせ〳〵。
かし　さりとは惡い合點ぢやわいな。
さの　そんなら何のやうにいうても、その布團の中に居やしやんすは、仁兵衞さんぢやないかえ。
かて　アイ、仁兵衞さんぢやないわいな。
さの　ようござんす。仁兵衞さんでなくば、仁兵衞さんでないにして、寢て居やしやんすその客衆に、仲居のさのが逢はうかいな。
かし　サア、それは。
さの　サア、こつちへ退かしやんせ。
かし　サア、それは。
さの　サア〳〵〳〵。かしくさん。こつちへ退いて布團の中を見せさんせ。
ト かしくを退けて布團をあける。傳八の死骸を見つけて驚く、と甚五郎、おさのをのけて布團を死骸へ掛けて、おさのを隔てる。その内にそろ〳〵、林右衞門、大勢捕手を連れて窺ひ出る。
甚五　提婆の仁兵衞を預りましたぞ。
かし　エヽ、。
ト驚く。
甚五　イヤサ、この仁兵衞を預かりましたぞ。
さの　いゝえ、コリヤ、仁兵衞さんぢやござんせぬ。舍利ほつの傳八さんの。
甚五　ハテサテ、何をいふ。傳八は傳八。よもや仁兵衞どのが、この布團のうちから外へは傳八出まいと思うたに、傳八とはハテ思ひも寄らぬ仁兵衞どのでござつた

の。何にもしろ小女郎はいひなづけ、妹婿のこの仁兵衞、預けさつしやい〳〵。

ト表へかけてかしくにいふ。

さの　兄さん。それではお前、濟むまいぞえ。

甚五　ハテサテ、なにが濟まぬ事があるものだ。この仁兵衞を預かつたら、かしくどのは粋の骨頂ぢや。小女郎の爲めにも悪い事もあるまい。ぢやによつて此の仁兵衞は預かりました。

かし　近頃預けにくい仁兵衞さんを預かつて下さんす頼もしい心を見て、預けたいものなれど、夕に變る人心、かかる大事を明しては。

甚五　氣遣ひに思はつしやるなら、わしも男、誓言を立つて預からう。その誓言にはコレ此の手斧。人皇三十二代の帝、用明天皇第一の皇子、聖德太子より下し置かれし大唐の器物。左り甚五郎が爲めには武夫の太刀かたな、手斧を取つて金打なし、約を變ぜぬ職人の固め。

ト手斧を出してかしくが簪と合せて金打すると、どろどろにて、かしくが簪、舞臺へ落ちて煙硝火立つ。またもや苦む思ひ入れ。

さてこそ、今かしくが簪と此の手斧を金打せんと打合せしに、散亂して忽ち一箇の煙となりしは、疑ふ處もなき佛敵の末、聖德太子へ刃向ひたる守屋が血筋と、ありやうに懺悔々々。

かし　恐ろしや〳〵。親子の緣は切つたれども、凡人ならぬ太子さまへ敵對したる守屋が血筋は、諸佛薩陀の咎めにて、またもこの身を苦しめ給ふ。恐ろしや恐ろしや。

甚五　さてこそ佛敵の守屋が息女にてありけるか。淺ましや〳〵。罰を滅する甚五郎が手斧、拄杖一卓を下す、罪障消滅、々々々々、々々々々。

ト手斧にてかしくを叩く。大どろ〳〵になりて日覆ひより一番目のまばらの鳩、夥しく群り居りて水船の上に舞ふ。甚五郎きつと見て、

ハテ、心得ぬ。數多の鳩水面さして舞ひ下るは何事ぞや。われ聞く、斑鳩の文字は則ちまだらの事、まだらの鳩と書いて、いかるがと讀む。斑鳩の御所は聖德太子の御座所。さてはこの水中に寶祚長久を守り給ふ天下の至寶ましますの由、斯くと告ぐるの鳩の教へか。何にもせよ、奇隨な事を見る事ぢやなア。

ト思ひ入れする。

林右　ソリヤ。

喜八　捕つた。

ト懸る。立廻りありて、手斧にて見事に切る。中返りにて水船へはいると、大どろ〳〵にて一面の吹き水にて佛舍利の寶塔を吹き上げる。唐樂になる。甚五郎きつと見て、

甚五　さてこそ、水中より出現ありしは、碎骨の佛舍利甚五郎が手に入る事、アラ〳〵、有難やなア。

林右　その寶塔を勝船へ渡せ。

ト寄る處へ仁兵衛出て、林右衛門を思ひの儘にゑぐり殺す。

甚五　菅の次郎與勝が尋ねし處のさいこつの佛舍利、立寄つて受取り召されい。

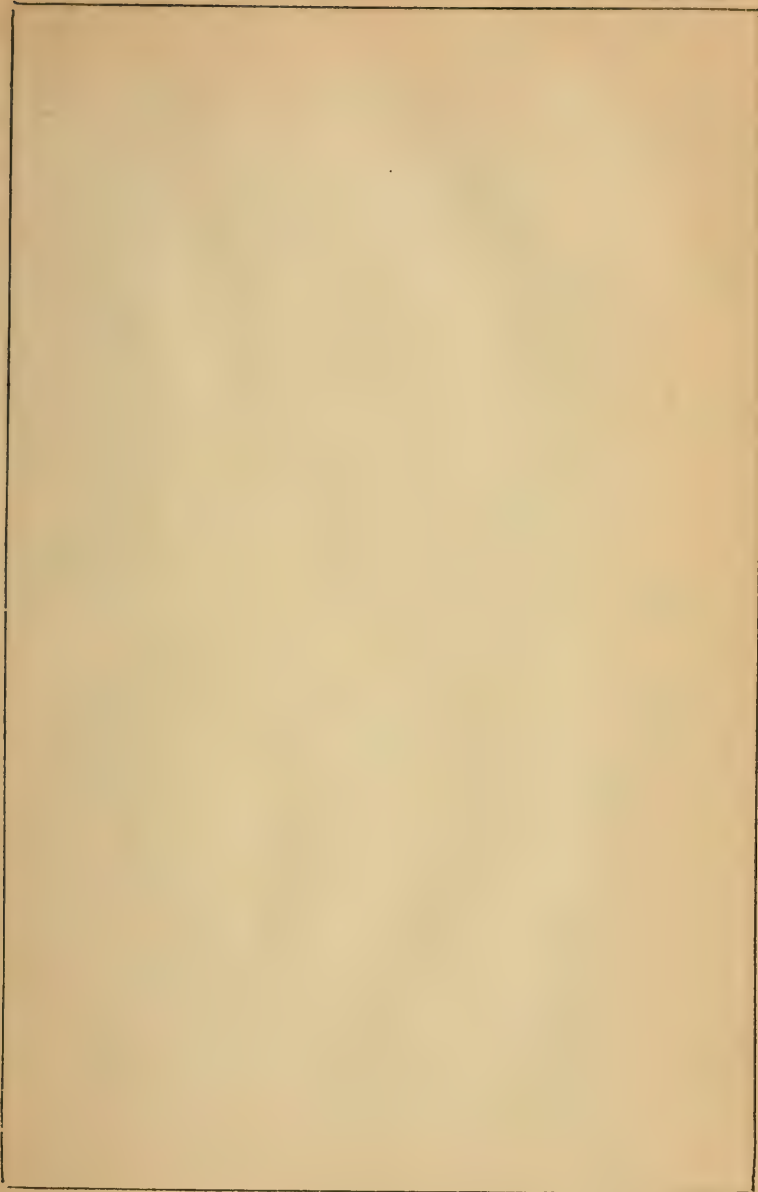
仁兵　エヽ、有難いなア。

甚五　先づ今日はこれぎり。

打出し

傾城片岡山（終り）

助六曲輪名取草（すけろくくるわのなとりぐさ）

大詰の場面（勝川春旭筆）

助六曲輪名取草

江戸半太夫連中

役名――三浦屋の傾城揚巻。同白玉。助六母曾我の滿江。髭の意休 實ハ伊賀の平内左衞門。くわんぺら門兵衞。朝顔千平。白酒屋七兵衞 實ハ曾我の十郎祐成。花川戸の助六 實ハ曾我の五郎時致。

本舞臺三間の間、女郎屋、大格子、簾掛け。東の方へ寄せて、三浦屋と染めたる大暖簾。西の方へ寄せて、辻行燈仕掛けあり。天水桶、その上に、手桶大分重ねあり。兩棧敷、中の町茶屋の家名の書付けし暖簾、行燈一軒々々掛け、その前に作り物、櫻、家毎に立ち、揚幕に大門口を飾付け、すべて中の町の體。長床几五脚、毛氈を掛け、煙草盆を載せ、男達四人、この床几に腰を掛け、煙草を呑んで居る。すがゝきにて幕明く。

ト西東の方より、女郎買の仕出し、商人、按摩、茶屋の提灯をとぼして出る。玉子賣、鮓賣、客、いろ／＼仕出し。囃子方、表方、打まぢり三方へ入り亂れる。このうちへ曾我の滿江、紙子の衣裳、頭巾、手提灯を提げ、提灯の紋をいろ／＼に見る思ひ入れ。賑かに仕出しはいると、花道より白玉、自分の紋つきたる提灯をとぼさせ、これに禿二人、遣手お辰、三浦屋息子長吉付き出る。滿江、この提灯を見て、長吉が袖を扣へ、

滿江　モシ／＼、疎忽ながらその提灯の紋を、どうぞ見せて下されませい。

長吉　この婆さまとした事が、道中の跡や先になつて、こなさまは何を尋ねるのぢや。

お辰　ほんにイヤらしい婆さんではあるわいな。女郎さん方の紋所をいろ／＼見て、合點の行かぬ顏をして居さんすが、何ぞ面白い事がござんすか。

禿一　この婆さんは、何をうろ／＼さんすぞいなア。

禿二　ほんに可笑しい婆さんぢやわいなア。

滿江　イヤ、私が尋ぬる紋所がござりますに依つて、不し

つけながら尋ねまする。

白玉　是は變つた事ぢや、男ではあるまいし、わたしらが紋を何しに尋ねさんすぞ。お前の尋ねさんすは、マア、どのやうな紋所ぢやぞいなア。

滿江　丸に三ツ扇子と、ぎよよう牡丹との二色の紋を付けてござる女郎衆を尋ねまする。

白玉　ハテなア、その二色の紋所は、揚卷さんの紋所ぢやな。

トいひながら、上の方の床几に腰を掛ける。

長吉　コレ婆さま。その揚卷さんは三浦屋の太夫さんでざんすが、何ぞ用があるのでござんすか。

滿江　アイ、ちとお目に掛りたい用がござります。

男一　何と皆見たか。あの婆アが揚卷に逢ひたいとよ。コウ見た所が遣手にしては勿體がよし、

男二　成程、花賣婆アにしては器量がよし、

男三　糊賣婆アにしては綺羅がよし、

男四　後ろの風呂敷包みを見ては、針賣婆アとも見えず、

男一　取上げ婆アともつかず、

四人　つんと讀めぬ婆アだわえ。

男一　ほんに婆アといへば、お辰や、今日は淺草へ參つたげなが、早い歸りぢやな。

お辰　さいなア、今日はわつちも駄目ぢやによつて、早う歸らうと思ひやしたが、あの子供らがな、ヤレ輕業の、豆藏のと、方々見て歩きやした。それからの、あの豆屋の手拭を買うて來やした。アノ松茸はいつ見ても心地よいものぢやわいなア。

長吉　イヤ、皆さん聞いて下さりませい。砂利場で今日お辰を譽めました。

お辰　ほんにこつちを譽めたいわいなア。

四人　何といつて譽めた〳〵。

長吉　イヨ、鮫ケ橋と譽めました。

お辰　ほんに鮫ケ橋といふ所には、いかなる美人があるかして。ホヽヽヽヽヽ。

男二　置きやアがれ。悉皆つらが累のやうだ。

男一　鮫の横飛びめ、あんまり動くな。ほしかの匂ひがするわい。

お辰　何ぢやの、姫御前をとらまへて、鮫ぢやの、ほしかぢやのと、モウ、了簡がならぬわいの。

男二　ならぬというて、どうしやアがる。

お辰　わしが相手にならうわいなア。

四人　イヤ、こいつが〳〵。
ト皆々立騒ぐ。長吉兩方留めていろ〳〵可笑みの内、すがゝきになり、くわんぺら門兵衞出て來る。後より朝顏千平、奴の形にて出で、兩人直ぐに本舞臺へ來て、皆々の中へ割つてはいろ。皆々捨ぜりふのうち
門兵　よいさ〳〵、默れ〳〵。遣手も騒ぐ事はないわい。若い女の身持の、いつ見てもうまいつらだぞ。
お辰　うま〳〵と振舞はうかえ。
門兵　エ、忌々しい。
お辰　すかや。
長吉　コレ〳〵〳〵、お辰。かんぺらさまは何だか、きつう腹を立つてござるやうだ。滅多な事いつて叱られまいぞ。
白玉　イヤ、くわんぺらさんの腹立てさんすは、色事ぢやわいなア。ほんに門兵衞さんは痛はしや、何ぼ惚れても口說いても、先きはしみ〴〵好かんといふ。鮑の貝の片思ひ。もしかに掛りうか〳〵と、うつかりくわんぺら門兵衞さん、きつい通り者ぢやなア。
ト笑ふ。
門兵　ハテ、よく喋舌る女郎だ。こいつは何といふ。
お辰　忝なくも三浦屋の太夫さん、白玉さんでござんすわいなア。
門兵　成程、聞及んだお名でえす。したが貴さま達が、綿帽子で眉毛を隱して、淺草へ參つたり、芝居を見物したり、後ろ帶で藪入りと化けて、人をちよろまかすとは違つて、この門兵衞は骨が太い、食はれないぞ。置かつしやい。揚卷といふ揚貴妃櫻に迷ふ煩惱の犬櫻。どうで叶はぬ戀ならば、思ひ切つて身を墨染櫻とやつし、諸國修行の西行さまと、出かけべいと思うても、流石畜生の悲しさは、もしかに引かれて今日もまた、花車を轟かしたのさ。コリヤあまめ。
お辰　あまとはわつちかえ。
門兵　うぬが事だ。
お辰　こは馬鹿らしいの。
門兵　何と門兵衞が金ぢやア、吉原の女郎は賣らないか。二才め、賣らないのか〳〵。
長吉　モシ〳〵、門兵衞さま、野暮らしい。そりや何の事でござりまする。
千平　何の事とは知れた事だ。門兵衞どのが腹を立たつしやるは揚卷が事だ。いかさま、あの揚卷といふ賣ためは、

餘つぽど味噌な奴だ。關白どのゝ落し子ぢやアあるまいし、勿體を付けやアがらずと、くわんぺらどのに逢つたがよい。この朝顔千平が、この戀の取持にかゝつて、毎日毎晩廓通ひ、誓文、この朝顔か布子の裾も萎れ果てるわえ。

門兵　今夜は揚卷に逢はねば男が立たぬ。抱いて寢るぞ。

白玉　モシ〳〵、そりやお前出來ないぞえ。揚卷さんは全盛な女郎衆。今夜というて、今夜逢はれるものぢやないわいなア。

お辰　ほんに揚卷さんの暇というては、師走の大晦日ばかり。

白玉　ほんに今年も三月、師走になるに間もござんせぬ。それまでは氣を長う待たしやんせいなア。

門兵　何を。

長吉　モシ〳〵、門兵衞さん、揚卷さんに色身で逢はうとは、よい思ひつきの惡い思案。あの揚卷さんには深い。

白玉　コレ〳〵、長吉どん。役にも立たぬ事をいはぬものぢやぞ。

門兵　イヤ〳〵それも合點だ。揚卷にやア蟲がある。しかもしらみに貧といふ蟲だ。その蟲に身代を食ひ倒され、內證は、火の車だげな。業さらしめ。

白玉　門兵衞さん。お前が逢はうといはしやんす揚卷さんには、お前の親分とやらの髭の意休さんも、揚卷さんに惚れて居さんすのに、又お前が惚れるとは、こりや意氣地が惡いぢやないかえ。

門兵　なる程、意休さんの事はあれども、あの人の曲輪通ひは當座の慰み。それに頓着はない。とかく胸の惡いは助六めだ。何處ぞであいつに逢つたらば、やめろといふ。おれがいふ事を背いて、揚卷にくつ付いて居れば、あの助六をばらして仕舞ふ。

滿江　エ、。

ト滿江びつくりする思ひ入れ。

門兵　この婆アは、先つき二丁目で見掛けた。杏葉牡丹の紋所をつける女郎を尋ねるは、揚卷に用でもあるか。

滿江　ハイ、逢ひたうござりまする。

門兵　ハア、なるほど、逢ひたくば逢はして遣らう。

滿江　それは忝なうござりまする。

門兵　その替りに、こなたに賴みたい事があるが、賴まれてくれるか。

滿江　私が身に相應なるならば。

門兵　先づは承知忝けない、おれが頼みは、何うぞこなたの〇どうも小つ恥かしくつていひにくい。朝顔、この婆アさんによいやうに呑込ましてくれろ。

千平　合點だ。皆までのたまふな。呑込み〳〵。

ト滿江が側へ來て、

コレ、婆さん。女は氏なうて玉の輿。こなたは有卦に入つたであらう。これほど美しい女郎がある中に、どうした緣か、くわんぺらどのが、お身さまに戀慕れゝつの筋だ。オゝといひなさい〳〵。

門兵　コレ、置きやアがれ。そんな事ぢやないわえ。

千平　そして何だ。

門兵　ハテ、粗相な。揚卷が母であらうから、揚卷が事を婆アに呑込まして、頼むのだわやい。

千平　おれはまた、あの婆アに親方が色事だと思ふた。

門兵　忌々しい。

千平　それは大きな間違ひだ。ときに婆アさん、お身は宜い娘をもつて浮み上がる。揚卷は今では曲輪一番の女郎、したが疵には慾を知らない、くわんぺらどのゝやうな、いんつう滿々たる大盡をいやがつて、助六といふ貧乏神を深まにもつて、身代をすつきり助六に入り上げる。コレ、こなさん、揚卷に逢つて、助六を長棹にして、おらがくわんぺらどのに乘換へるやうに異見して下さい。くわんぺらどの方へ靡くと、一家一門浮み上がるわえ。

滿江　イゝエ。わたしは揚卷どのゝ母ではござらぬわいのう。

千平　揚卷が母ぢやアないか。

滿江　ハイ、左樣でござりまする。

千平　また間違ひかい。たわけの。

門兵　待て〳〵。先つきには揚卷の母のやうにいつて、今おれが頼む事をいふと、母でにござりませぬとは、こいつは聞えた、女郎の紋所を見て歩く振りをして、櫛笄をしてやる、こいつは婆アの巾着切りだな。

滿江　ア、コレ〳〵、粗相いふまい。

門兵　默りやアがれ。おれもたび〳〵鼻紙入れや、印籠を切られたが、うぬだな〳〵。

滿江　わつけもない。わしや其のやうな大膽なものぢやござらぬわいのう。

千平　そんなら揚卷が母とぬかして、親方を取持つか。

滿江　サ、それは。

門兵　そんならわりやア巾着切りか。
湍江　全く以て。
千平　揚卷が母か。
湍江　サア。
門兵　サア〳〵〳〵。どうだ。面倒な。會所へ引摺つて行くべいか。
　ト湍江を手籠めにする。白玉中へはいつて、
白玉　待たんせ、門兵衞さん。いとしたげに婆さんを相手にこの手は仰山な。何の事ぢやぞいなア。揚卷さんとは仲のよいこの白玉。いふ事があるならば、あの婆さんに云はずと、わしに云はんせい。やかましい聲ではあるぞ。
門兵　面白い。われが婆アが腰を押すか。
白玉　アイ、強う物をいはんすりや、何處までも腰押し、又美しう頼まんしたならば。
門兵　揚卷に逢はしてくれるか。
白玉　それは逢せまいものでもないわいなア。
皆々　親分。何だか氣が知れないわえ。
門兵　白玉さん。頼みやす。
白玉　さう美しういはしやんすりや、わたしが拵へて見まいものでもござんせぬが、マア、お前が爰に居さんしては惡いほどに、逢ひたがらしやんす揚卷さんには、わたしが後に逢はせう程に、ちやつと早うござんせい。
　ト湍江にかけていふ。湍江うなづき下座へそつとはいる。
それが宜い〳〵。なア、門兵衞さん。何處ぞ、ぞめいてござんせいなア。
門兵　エヽ、有難い、そもじが其う呑込んでくれゝば、おれはマア行つて來よう。
　トあたりを見て、
婆アはどうした〳〵。
白玉　ハテ、婆アさんに用はない筈。わしに頼んで置いて、婆アさんを頼む心かえ。
門兵　何さ、お前をひとへに結ぶの神。
白玉　そんなら、早う往てござんせい。
門兵　合點〳〵。時に若い者ども、押付け意休どのが見えやう。こゝに待つて居ろ。いま白玉さんに頼んだ事、わいらも側から氣を付けてくれ。千平、來い。
千平　白玉さん。
白玉　門兵衞さん。

両人　さはへ。
　トすがゝきになり、門兵衛、千平、長吉、暖簾口へはいる。
男一　ヤレ／＼、いつもながら門兵衛どのゝ色事。やかましい色事ぢやアないか。
男三　おいらは色氣より食氣。どうやら口淋しくなつたぢやアないか。
男二　成程、なんぞ呑むか食ふかしたいものだ。
男四　ほんに、酒でも呑まうぢやアあるまいか。
お辰　モシ／＼、酒の噂の影さすと、向ふから何時もの白酒さんが。
四人　ドレ、オ、イ／＼。
　ト揚幕にて、
七兵　白酒／＼々々。
　トてんつゝになり、花道より七兵衛、白酒の荷をかたげ出て來る。花道の中程に留まる。
お辰　こりやいつもの白酒どの。早うござんしたの。
男四　いつもの通り、白酒の言ひ立てが。
男三　所望ぢや／＼。
白酒　そも／＼富士の白酒といつぱ、昔駿州三保の浦に、白龍といふ漁夫、天人の夫婦になり、その天人の乳房より流れて落ちる色を見て、造り初めし酒なれば、第一壽命の藥なり、されば厄拂ひの親方東方朔も、この白酒を八杯呑んで八千才、浦島太郎は三杯呑んで三千年、三浦の大介下戸なれば一寸てうつけしたばかりでさへ百六つまで生延びたり。先づ正月は屠蘇の酒、彌生は雛の白酒に、女中の顔もうるはしく、もゝの媚ある桃の酒、端午の節句は菖蒲酒、七夕は一夜酒、重陽は菊の酒、佛法に至つては、さけむに如來のたまはく、によろやくおでんを肴にして呑む時は、一升は夢の如し、上戸菩提と解かれたり。されば酒の上のこれ呑みが歌に、上の字付きし上戸をば、下々の下の字の下戸が誹りて、コレ大和歌にも載せられたり。さればわれらが白酒は、事も恐かや、ホヽ、恭まつてか白酒／＼。
　ト本舞臺へ來る。
皆々　やんや／＼。
白玉　七兵衛どの、ござんしたかえ。
白酒　是は／＼とばかり鼻の先きに如意輪觀音の御來臨。見つけぬ所が大俗凡夫の白酒賣。御免なされて下されませい。

白玉　何ぢや〻ら、人を嬉しがらすやうな事がきつい好き。マア、こゝへ來て話さんせい。
白酒　エ、有難い。さらば內陣へ通らうか。
男三　待ちやアがれ〳〵。うぬらが腰を掛けると、床几が汚れるわえ。
男一　白玉さん。白酒賣と役にも立たぬ話させようより、先つき門兵衞どの〻頼んだ事はどうさんす。埒があけて貰ひたい。
男二　野暮な奴ぢやアないか。人の事より手前の得手勝手、白酒を呑みたさうな顔付き、いけない女郎だ。
男四　女は女とも思ふが。
白酒　白酒賣りはさりとは千枚張と思召さうが、其處が又いたりませぬぞえ。滅多に强い事ばかりいつて、女郎が可愛いがるものでないです。ちつと可愛がられうと思ふには、ちと工夫がなけりやアならぬてさ。
男一　こいつは面白い事をいふ。その又可愛がられる工夫を習ひたい。
男二　おれも工夫を習ふべい、敎へやうが惡いと免さぬぞ。
男四　まなこ玉を押つ開いて見ろ。安い野郎ぢやアないぞ。

白酒　いかさま、〆て三百くらゐ、四百とはモウ出されぬわえ。
男四　置きやアがれ。うなア人を馬鹿にするな。
白酒　何の馬鹿に致しませう。お前方のやうな通り者がなければ、商ひがござりませぬ。ハテ、一日擔いで歩いたとて、さう白酒が賣れるものぢやアござりませぬ。お前方の側に居ると、三百や四百が白酒は、つい賣れると申す事でござりまする。ナア、太夫さん。どなたも〳〵、可愛らしい旦那さまぢやござりませぬか。
男一　うぬはおれをなぶるな。
白酒　ナニ、勿體ない商ひ、旦那をなぶつて宜いものでござりまするか。
白玉　成程〳〵。何の白酒賣さんが、お前方をなぶるもんぢやぞいなア。そんな事いはずとも機嫌直して、こゝへ來て遊ばんせいなア。
男一　エ、有難い。生れて初めて可愛らしいお言葉に預かつたわいなア。
男二　ソレ〳〵、時に白酒。どうすれば女郎に可愛いがられるぞ。
白酒　女郎衆に可愛がられる元はといへば、この白酒でご

ざりまする。
男三　何だ、あの白酒が可愛がられる元とは。
白酒　奇妙な事の、これを一口上ると女の惚れる事、あたかも世之助はだし、業平なぞは其處のけで通らつしやいといふ妙があるでえす。正月の三日には、毎年わしが店で女郎買が呑み初めまするぢや。
皆々　ハテなア。
白酒　親碗、膳、摺鉢、何でも大きなもので呑む程、戀が叶ふのぢや。
お辰　モシ〳〵七兵衛さん。男に惚れたにも、その白酒が利きやすかえ。
白酒　男は愚か、若衆でも、坊主でも、撫付けでも、ござれ〳〵ぢや。
お辰　そりやモウ嬉しいわいのう。呑まぬ先きから身内が燃えるやうな。ア、好ましい酒ぢやなア。
男一　物は試しだ、一杯呑んで見ようか。
皆々　それがよから〳〵。一杯くれろ〳〵。
ト皆々口々にいふ。
白酒　おつと待つたり。時に申さぬ事は後で悪い。この白酒現金掛値なし。一升に就き代金百疋。それとも惚れられたくなくば、お呑みなさるな。
男三　マア〳〵試みだ。一杯賣やれさ。
ト茶碗を出して七兵衛つぐ。男達の三、呑んで思ひ入れ。
皆々　どうだ〳〵。
男三　いかさま常の酒とは違つたやうだわえ。
男一　ドリヤ、おれにもくれろ。前錢〳〵だ。
ト懐中より錢出してやる。七兵衛茶碗について出す。男達の一、呑んで思ひ入れ。
ヤアどうやら身内が、ぞく〳〵するやうだわえ。
白酒　其處が戀のしみ渡る所ぢや。鳥渡立つたり。
男一　斯うか。
ト立つ。七兵衛、その背中をあちこち撫で廻す。
男一　ア、こそぐつたい〳〵、何をする〳〵。
白酒　斯うせねば白酒が思ふ所へ落着かぬぢや。
男一　そんなら白酒が落着くと。
白酒　惚れられるのが一時ぢや。
男三　コレ、おれにもちつとさすつてくれろ。
ト男達の三、腹を出す。七兵衛撫でゝ見て、
白酒　ア、是は餘つ程喧嘩で腹が揉めてあるわえ。

男三　明日から喧嘩を控へませう。
男二　おれも一分切りが呑まう。
男四　おれにも呑ませろ。
ト皆々呑む。七兵衛ついで廻る。このうちお辰、白酒の荷の中から、德利に入りし白酒を出し、下の方へ來て茶碗で呑んで居る。皆々、酔うたるこなし。衣紋をつくろ。捨ぜりふあつて、
白玉　アレ見さんせ。成程七兵衛さんの白酒は奇妙ぢやわいなア。皆さんの男振が、どうやら可愛いらしくなつたわいなア。
男一　七兵衛や、おし事はならぬものだ。一兩が呑まうぞ。
皆々　それが宜い〱。
白酒　随分、心を取つて呑まつしやい〱。
トお辰を見付けて、
どこい〱。コリヤ、大切なる白酒を盗んで呑むとは、どうしたものぢや。こつちへ寄こした〱。
お辰　マア〱待つて下さんせいなア。惚れられると聞いて、是が呑まずに居られうかいなア。七兵衛さん、ソレ一分。
ト巾着から金を出してやる。

白酒　金さへ取れば言分なし。呑みなさい〱。
お辰　七兵衛さん、どうやらわたしや、皆さんが可愛うなつた。
白酒　エヘン〱。
お辰　オヽ、コレ、誰ぞよい男が惚れよかし。大分からだに暖まりが來たかな。ア、知らぬ事ならしよ事がなし。
男二　斯う呑んでは、助六でも色男でも續きやアしまい。モウ、惚れる時分だがな。
男四　まだ〱呑みやうが足らぬさうな。腹を振り〱呑みやれさ。
白酒　イヤ、助六といへば、白玉さま。助六と揚巻さまは、今に仲よう樂まれますか。
白玉　イヤモウ、きついものでござんす。あんまり仲が宜い故に、皆さんが法界悋氣とやらで、かけ構はぬわしらまで、取持つて呉れいの、口説いてくれいのと、頼まれるのに困るわいなア。
白酒　ハテ困つた男だ。コレ、どうぞ助六に逢ひたいものぢや、
男二　待て〱。助六に逢ひたいといふは聞き所だわえ。
男一　成程、助六に逢ひたいといやア、うなア助六が爲め

にやア何だ。
男三　ハテ、味な男だわえ。うなアマァ助六が爲めにやア
皆々　何だよ。
白酒　イエ、何でもござりませぬ。
男四　それに逢うと吐かしたはなぜよ。
白酒　サ、逢ひたいと申したは。
皆々　何で逢ひたいよ。
白酒　サア白酒の貸しがござりまする。その貸しが取りたさに、逢ひたいといつたのさ。モシ、其のやうに仰山に物を仰しやると、腹の內で白酒が憎みまするぞ。唯一向一心に酒を上がれ。ナア、太夫さん。左樣ぢやござりませぬか。
白玉　ほんに七兵衞さんのお蔭で、よい樂みであつたわいな。モシ、わしが逢ひたがらしやんすお人に逢はせう程に、こゝに待つて居さんせえ。
白酒　それは、有難うござりまする。そんなら行き廻つて參りませう。
トこのうち、お辰、白酒に醉ふたる思ひ入れ、かたがた震ひながら、延べ鏡を出し髮を直し、無上に白酒を顏へ塗る。七兵衞荷をかたげ行かうとする。

男一　怪しい白酒屋、持ちやアがれ。
ト七兵衞を小突く。お辰後ろより『オ、嬉し』と男達の一に抱付く
コリヤ、何の眞似だ。
お辰　いつそはわたしがこなさんに、いはう〳〵と思ふて居た。一夜ばかりは抱いて寢て下さんせ。オ、恥かし。
男二　味な處へ白酒が開いたわえ。
白酒　何と奇妙か〳〵。
男一　置きやアがれ。河童め。放しやアがれ。
トお辰を突倒す。
お辰　何ぢやの。姬御前を河童とは、モウ、女子の一分が廢つた。立たぬわいな〳〵。モシ、わたしや立てゝ貰はにやならぬわいな。
ト無上に抱付く。
男三　氣が違つたか、木兎め、退きやアがれ。
お辰　そんなら、こなさん。
ト男達の二に抱付く。
男三　鳶凧め。うるさいわ。
ト突きのける。お辰、男達の四に抱付く。
男四　牡丹餠め。のきやアがれ。

ト是よりお辰、皆々に抱付く。とゞ皆寄つて裸かにする。お辰これより皆々を追廻す。

白酒　のぶすまのいけどり。錢は戻り〳〵。

ト お辰を皆々踏みのめし、逃げて花道へはいる。小袖を抱へて立上がり、

男　畜生。情けを知らぬかいやい。オ、イ〳〵。

ト向ふへ追つかけはいる。見送つて、

白酒　ハ、、、いかいたわけの。白玉さま、そんならどうぞ助六が參りましたら、お逢はせなされて下さりませい。

白玉　そりや、わたしが合點ぢやわいな。

トいふうち、若い衆花道より、提灯提げ駈出て來て、

若者　白玉さま〳〵。意休さまが何やらお前を呼びましてくれいとの事。一寸お出でなされませい。

白玉　アイ〳〵。モシ、七兵衞さん。わしやちよつと往て來る程に、待つて居さんせや。

白酒　畏まりました。白玉さま。

白玉　七兵衞さん。

若者　サア、お出でなされませい。

白玉　せわしない、子供、來や。

禿　アイ〳〵。

ト白玉、禿二人に、若い衆、すがゝきにて花道へはいる。

白酒　扨々優しい女郎衆ぢや。ア、コレ、早く助六に逢ひたいものぢや。

ト荷を肩へ上げて

ほんに何とも思ひもせぬ助六ゆゑに、此のやうに苦勞をする。是が正眞の白酒ではなうて、黒酒々々。

トすがゝきになり、七兵衞臆病口へはいる。このうち座附あつて、淨瑠璃の口上濟むと前彈きになる。

〽時鳥啼くは何處、ぞみよし野の山口三浦うら〳〵と、曙いづる日のはじめ、寢ぬに目覺めず稚舟は、乘初めよしと乘りそめる。船は名に負ふ寶舟、長き夜のとうの眠りのみな目ざめ、なみ乘り船の音ぞよき。

トこの文句にて東より傾城五人、これに一人々々に銘銘の紋付いたる箱提灯をとぼし、若い衆付き出る。花道より傾城四人出る。是もめい〳〵の紋付いたる箱提灯を持ち、若衆付き出づる。

〽はつすがゝきの響くより、初夜は上野か淺草か、遠寺の鐘の聲、つれて瀟瀟の夜の雨。何ぞと問はん都鳥、橋

場庵崎待乳山。

ト この文句一杯に、左右の傾城本舞臺へ見事に並ぶ。

傾一　何と、皆さん見やしやんしたか。中の町の櫻の盛り見事ぢやござんせんかいなア。

傾三　さいなア、又今年から植初めし、この吉原の花見月、又來る春が待たるゝわいなア。

傾四　さうぢやわいなア。わたしらまでが珍らしうて、早う中の町へ出たうなつたわいなア。

傾二　ソレ〳〵、早いといへば揚巻さん。なぜに遅い事ぢやぞいなア。

傾三　さういはしやんすりや、揚巻さんはほんにまだ、ござんせぬわいなア。

傾一　ソレ〳〵、今日は早う出やしやんす筈が、此やうに遅い事は。

ト 向ふを見て、

アレ〳〵、あの提灯は、杏葉牡丹。確かに揚巻さんであらうわいなア。

皆々　ほんに揚巻さんぢやわいなア。

ト 揺鉢入りの賑かなる出の唄になる。若い者、治郎吉揚巻にぎよえふ牡丹の比翼紋の付いたる大提灯を持ち出づる。遣手お辰、以前の形にて出る。この肩へ三浦屋の揚巻が、生酔ひのこなしにて出て來る。後より禿の一、煙管、煙草入れ持出づる。禿の二、茶臺に綺麗なる茶碗を載せ持出づる。若い衆長柄を差つけ出づる。花道中茶屋の息子、箱提灯を提げ、藥鍋を持出づる。花道中程に留まる。

傾四　見さんせ。揚巻さんの道中は、どうやら舟に揺らるゝやうなぞえ。

傾三　ほんになア、こりや餘つぽど過ぎたさうぢやぞえ。

傾一　先つきに松屋で逢つた時から、餘つぽどめれんに見えたぞえ。

傾二　お前に逢うた時はまだな事、先つきに一寸逢ふた時は、大抵心遣ひをしたわいなア。

傾四　ほんにわたしらまで、無理やりに呑ませられて、餘つぽど醉うたが、その時より餘つぽどな千鳥足。揚巻さん、何處でマア其のやうに。

皆々　醉はんしたぞいなア。

揚巻　是は〳〵お歴々、お揃ひなされて揚巻を、お待ち設けとは有難いぢや。私がこの生醉は、何處で其のやうに醉うたと思召すも恥かしながら、中の町の門なみ、あそ

こからも、此處からも、呼びかけられて杯の數々。松屋の客衆の男振、惡洒落な侍が持合せた杯揚卷さんといけぬ口合ひ、憎さも憎し、押へて三つ呑ましたでござんす。こつちも一つ四つ目屋で借りられて、一寸お近づきにと差した杯、三つ元結の憎てらしい男つき、その上にもち上戸、その上にもぢやうと思はんせ。あんまり憎さにとう／＼あつちをねぢ倒し、ついには其處に大生醉ひ。いかなる上戸もわしを見て御免々々と逃げて行くぢや。ホヽヽヽ、それ程の酒にも、慮外ながら憚りながら、三浦屋の揚卷醉はぬぢやて。

禿一　太夫さん、危ならござんす／＼。

揚卷　是は大きなやつこさんの御意見。近頃有難いぢや。誓文醉はぬぞえ。

茶屋　雨も止んだ。その傘をあつちへ遣らつしやい。

　ト若い衆、長柄をすぼめる。

子供や。この醉の醒める藥を進ぜや。

　ト藥をついで出す。

禿一　サア、酒の醒める藥。

禿二　袖の梅を呑まんせいなア。

揚卷　何ぢや、袖の梅ぢや。誰が袖ふれし袖の梅とは、よう詠んだ歌ぢやわいの。

禿二　イエ／＼、いつも呑まんす酒のさめる藥。

禿一　袖の梅ぢやぞいなア。

揚卷　袖の梅ぢやとは面白い／＼。

　ト茶碗を取つて佇む。すかゝきになり、臆病口より滿江出て、一人々々に提灯の紋所を見て歩き、花道へ來て揚卷が提灯の紋所を見て悦ぶこなし。

滿江　是ぢやわいの／＼。

治郎　コレ／＼婆アさん、のかつしやい／＼。

滿江　いかにもこの紋所ぢや。

お辰　ハテ、この婆アさまは氣味の惡い人ぢや。あんまり側へ寄らつしやるな。

治郎　モシ／＼婆アさん。こなさんは先つきにも逢つた婆アさま。何ぞ尋ねる者でもあるかな。

滿江　あるとも／＼、是ぢや。この提灯の紋所は杏葉牡丹に揚卷、これぢや／＼。

禿二　何ぢや、ついに見た事もない婆アさんが、太夫さんの紋所を見て、あれぢやの是ぢやのと、オヽこわ。

禿一　わしらが太夫さんの紋所を、めつけ繪ぢやと思はしやんすか。

お辰　ほんに氣味の惡い婆アさん。粗相な事をいはしやんすな。

禿雨　わアい〳〵〳〵。

揚卷　コレ〳〵子供や。其のやうにいはぬものぢやぞ。ほんにこの婆さんは能う夜見世見にござんしたの。お辰どん。また袖の梅を下さんせい。

お辰　アイ〳〵。

トすがゝきになり、皆々本舞臺へ來る。滿江、揚卷が袖を控へ、

滿江　モシ、粗忽ながらその許さまは、揚卷さまとは申しませぬか。

揚卷　エ。わたしが名を知つてさ、

滿江　そんならいよ〳〵揚卷さまか。ヤレ嬉しや、揚卷さまに逢ふたぞ〳〵。

ト嬉しきこなし。

揚卷　モシ〳〵、ついにお目に掛つた事もないお方。揚卷はわたしでござんすが、あなたは何處からお出でなさんしたえ。

滿江　サア、私事は助六が。

揚卷　モシ〳〵。

ト思ひ入れ。

滿江　ほんに粗相申しました。わしも粗相があつたわいなア。

揚卷　粗相といへば、

お辰　太夫さん。

皆々　醉が醒めやんしたかえ。

揚卷　ほんに袖の梅は奇妙な藥ぢや。酒の醉がさつぱりと醒めた。ヤ、コレ、治郎吉どの。苦勞ながら烏渡松屋へ往て下さんせ。

治郎　お前も癖の惡い、たつた今、門を立つて參りましたのに。

揚卷　ハテ、それぢやによつて粗相ぢやといふわいなア。往ていはうには、意休さんは愈々今夜お出でなさんすかと、聞いて來て下んせ。

治郎　意休さんの事なら、捨てゝ置かつしやいませい。

揚卷　ハテ、早う往て下さんせ。往きは早う、戻りは隨分遲うてもよい程に、酒でも呑んでゆるりと戻らんせ。

治郎　ハテ、往きは早う、戻りは遲くてもよいとは、合點の行かぬ。

揚卷　コレ〳〵、治郎吉どの。こなた煙草入れが欲しいといふたではないか。

治郎　アノ、お願ひ申しました。
揚卷　ソレ。
ト揚卷、煙草入を遣る。治郎吉とつて捨てぜりふにて中を見て、
治郎　こりや、お金。
揚卷　早うござんせ。
治郎　アイ〳〵。
ト花道へはいる、滿江が側へ寄らうとして思ひ入れ、
揚卷　オヽイ〳〵、まだ頼む事があつたのに。コレお辰どん。こなた、大儀ながら子供を連れて、わしが座敷の違ひ棚に、封じた文がある程に、取つて來て下さんせ。
お辰　畏まりました。子供や、わしと一所におぢや。
ト禿を連れてお辰暖簾口へはいる。揚卷、滿江が側へ寄らうとして思ひ入れ、
傾一　何やら揚卷さんにあの婆アさんが、話でもあるさうぢやわいなア。
傾六　此のやうな處に居ては邪魔。何と皆さん、氣を通さうぢやないかいなア。
傾三　それが宜うござんす。
皆々　揚卷さん。これにえ。
傾二　サア、お出でなさんせいなア。
トすがゝきになり。皆々はいる。滿江、揚卷殘る。
揚卷　サア、モウ宜うござりまする。是へお出でなされませい。
滿江　往ても大事ござらぬか。
揚卷　大事ない段ぢやござりませぬ。そんならお前は、助六さんのお母さんかいなア。
滿江　ハイ〳〵、母でござりまする。そんならこなさまはいよ〳〵揚卷さまぢやな。
揚卷　アイ、揚卷でござんす。能うお出でなさんした。マア〳〵此處へお出でなさんせ。
ト床几へ腰を掛ける。滿江も一所に掛ける。
滿江　モシ〳〵、其處に盆があるなら貸して下され。
揚卷　此處はかどなかぢやに依つて。
滿江　よし〳〵、そんならこれ〳〵。
ト腰の扇を廣げ、腰の風呂敷の茶一斤を出し、
ホヽヽヽ。是は可笑しいものでござりまするが、この里の女郎衆は、お客があると煮ばなを出して、御馳走申さつしやると聞きました故、ほんの手土産、松の葉ぢやと思うて下され。

揚卷　是は〳〵、何よりのもの、戴き申しますぞえ。

滿江　何の〳〵。マア何から御禮を申しませうやら、あの身貧な助六を可愛がつて下さる。今日は小袖を貰うた、羽織着た、何から何まで、印籠、巾着、草履、鼻紙、小遣ひまで、忝けなうござりまする。人の噂にも傾城といふものは、人を騙すの何のと申しまするが、こなさんのやうな實氣な人はあるまい。逢うてから禮もいひたし、又頼みたい事もあつて來ました。ほんにお傾城とは思はぬ。わしやよい嫁を持つたと思うて居ます。ホヽヽヽ。

揚卷　是は〳〵有難いお言葉。アノ助六さんが毎夜々々廓へござんすは、元の起りはあの女郎めと、お叱りもありさうな處を。嫁ぢやと思ふとは、あんまりお言葉が結構で、御挨拶に困りやんすぞいなア。

滿江　優しい人ぢやの。揚卷どの。今日わざ〳〵母が來たは、ちと言ひにくい無心があつて來ました。

揚卷　何の他人がましい。わたしやお前の嫁ぢやござんせぬか。何なりと御遠慮なう仰つしやつたが宜いわいなア。

滿江　サア其のやうに眞實にいはつしやる程、どうも言ひにくいが、わしが無心といふは。

揚卷　お前の御用は。

滿江　そなたへ頼みは助六を。

揚卷　アノ助六さんを。

滿江　廓へ呼んで下さんすなといふの。

揚卷　エヽ。

滿江　サア、成程、體が潰れうが、こなたに恨みはなけれども、あの助六は大切な親の敵。サア、願ひのある身の上。その願ひある身の上で、毎夜々々、この廓で喧嘩ばつかりしますげな。その噂を聞いて、毎夜案じて寢た事もござらぬ。それも何ゆゑ、この廓へ來るゆゑ、喧嘩する氣にもなる。廓へさへ入込まずば、自然と喧嘩も止むであらうと、思ひついたるこなたへ願ひ。こなさんが助六へ來るなとさへいうてならば、廓通ひも止むであらう。ひよつと意氣張ついて、若しもの事があつた時には、助六が願ひも叶はず、母の歎きを思ひ遣り、どうぞ呼んで下さるな。こなさんの眞實はわしが合點ぢやが、助六の喧嘩ゆゑぢやと思うて、暫く遠ざかつて下され。拜みます〳〵。

揚卷　成程、御尤もでござりまする。どうしてマア、おとなしい助六さんを、いつのほど喧嘩好きにならしやんしたやら。土手で切つたは助六、中の町でぶつたは誰ぢや、

助六と、相手替れど主替らず。わしもその事ばつかり。
コレ、御らうじて下さりませ。
ト滿江が手を取り、懐へ入れる。
滿江　こりや、きつい癪でござるの。
揚卷　サア、是程までに案じる助六さん。一ト夜は愚か、
一時逢はねば戀しいとは、因果な事でござりまする。
滿江　宜うござる、助六をよこしませう。
揚卷　そりや、ほんの事かえ。
滿江　母が請合ふて寄こす。呼ばつしやれ。おやが喧嘩を
止めるやうに異見して下され。こなたのこれ程の眞實を
感心して母が許す程に、揚卷どの、喧嘩の止む仕様はご
ざらぬかいの。
揚卷　そんなら助六さんを、呼びましても大事ないかえ。
滿江　母が許したく。
揚卷　エヽ、忝なうござんす。又助六さんの喧嘩事は、異
見の仕様もござりませう。
ト滿江に囁く。暖簾口より、禿、お辰、出て來る。花
道よりも治郎吉歸つて來る。
お辰　太夫さん。何處を探しても、文はないわいなア。
治郎　揚卷さん。いま意休さまがお出でなされまする。

揚卷　何ぢや、意休さんがござんす。そんなら、こなた、
このお婆さんをわしが座敷へ連れまして往て、御馳走申
して下さんせ。
治郎　畏まりました。婆アさん、こつちへお出でなされま
せい。
滿江　そんなら往ても、大切ござりませぬか。
揚卷　アイ。遠慮なしにお出でなされませい。
滿江　そんなら揚卷どの。後程。
治郎　サア、斯うござりませ。
トすがゝきになり、治郎吉、滿江を連れて奥へはいる。
揚卷　アヽ、おいとしやなア。なのお袋さまは助六さま故
に子故の闇、わしは又戀路の闇。何かにつけ女子ほどは
かないものはないわいのう。
ト是より淨瑠璃になると、初手の女郎、暖簾口より出
て來て、床几へ並ぶ。向うより白玉が紋の付いたる箱提
灯を持ち、若い衆出て來る。後より意休、白玉が肩へ凭
れ出て來る。白玉以前の形にて出て來る。後より男達
の三、曲彔を持ち出る。是に續いて男達の一、褥を持
ち付出る。後より男達の二、誂への香爐臺を持ち出づ
る。男達の四、結構なる香道具を持ち付き出る。後よ

り舟宿、提灯を提げ付き出ろ。浄瑠璃一杯に花道に並ぶ。

意休　若い者。あそこに並んで居る二人が、話のあつた突出しか。

皆々　ハイ、地もの同然でござりまする。

意休　そりや耳よりだ。一回出ずばなるまい。

白玉　モシ／＼、意休さん。お前が其のやうに心が多いによつて、揚巻さんが嫌がらしやんす。氣の多いお方ではあるぞ。

意休　おつと誤まり。不心中ぢやといふも尤も。こゝな心中者め。

白玉　心中者とはえ。

意休　ハテ、五丁町に名高い白玉どの。いつも／＼揚詰めなれど、その客の顔を見知つた者はない。人目を忍んでお逢ひなさるゝによつて、心中者といふ事よ。

白玉　意休さんの何の世話にもならぬ、人の客衆の詮議までせずとよござんす。そんな事いはんすと、わたしに頼んだ事はイヤぢやぞえ。

意休　おつと誤まり。頼んだぞや。

白玉　ちと嗜ましやんせい。

意休　さらばあそこへ往て、お近付きにならうか。

皆々　サア、お出でなされませい。

トすがゝきになり、皆々本舞臺へ來ろ。上の方の床几に褥を敷く。意休これに腰を掛ける。皆々後へ並ぶ。

傾皆　意休さん。ござんしたかえ。

意休　これは有難い。われらが名を御存じか。

傾六　なんぼ突出しのわたしらでも、今の世の意休さんを知らいで何としようぞいなア。

意休　是は耳寄りだわえ。ゆるりつと御出合ひ申す事もなりませうかな。

傾一　今夜はお馴染が障つてかえ。

意休　意休が馴染とは。

傾二　ハテ、能う知つて居るわいなア。

意休　ア、、揚巻が事か。

揚巻　エ。

傾皆　意休さんがござんしたわいなア。

揚巻　仰山な。意休さんのござんすを、先つきにから待つて居たわいなア。

意休　待つて居たとは、助六と間違ひではないか。

白玉　コレ、意休さん。又しても其のやうな、憎まれ口を

聞かんすか。其のやうに意地悪らいはんすと、構はぬぞえ。

意休　今になつてさういふては、佛作つて魂入れず。拜むわ〳〵。

白玉　さう、おとなしう言はんすりや、わたしも合點。モシ、揚卷さん。日頃から心易いわたしが頼み、意休さんに逢うて下さんせ。定めてお前の思はしやんす、お方に立たぬといふやうな事もあらうが、ハテ、意休さんは高がお客、お前の思ふお人とは譯の違ふ事。寝る事がイヤなら座敷ばかり勤めて下さんせ。白玉が頼みぢやぞえ。

揚卷　成程、日頃から中のよいお前のいはしやんす事、座敷ばかりは勤めまいものでもないが、モシ、それではな。

意休　心中が立たないか、助六へ。

揚卷　助六とはえ。

意休　知るまいと思ふか、この意休が目を拔いて、助六にくつついて居る事は、能く〳〵知つて居るわえ。

揚卷　デモ、先度助六さんに逢うて居たを、お前が見付けさんして、口舌の上の詰開きで、許す、逢へといはんしたぞえ。

意休　成程、さういつた。

揚卷　それにマア、何故にせかんす。

意休　その時はさういつたが、よく〳〵思へば嫌だ。マア、わりやアあの助六を、何だと思ふ。あいつは盗人だ。

揚卷　エヽ。

意休　あれがマア喧嘩の仕様を見ろ、喧嘩とさへいへば、人の腰の物へ手を懸けるが巾着切りのしるし、その泥坊といつまでも樂む心か。それが聞きたい。

揚卷　樂みにする身の上ではなけれども、どうした事やら助六さんが。

意休　可愛いか。

揚卷　因果なこつちやわいなア。

意休　イヽヤ、因果ぢやアない。魔王に魅入られたといふものだ。あのやうな者と心易うすると、遂にはわれも眞つ裸。それが不憫さにいふのだわえ。

揚卷　爲めになる客を餘所にして、間夫に逢ふのは浮氣とも阿房とも、わしが事なら言はんせぢやが、助六は盗人ぢや。助六さんが盗みするであらうとは。意休さん、あんまりぢやあらうぞえ。

意休　何があんまりだ。併しあのやうな貧乏人、盗みでもせずばなるまい。その泥坊と懇ろにすると、われもいつ

ぞは盗み氣がついて、客の鼻紙袋を探すやうになる。とどは二人が宿無し同然、其のやうな身になつても、わりやア助六に逢ひ通す心か。

揚巻　こりや意休さんでもない、くどい事云はんす。お前の目を忍んでな、助六さんに逢ふからは、客さん方の眞中で、惡態口はまだな事、叩かれうが踏まれうが、手に懸けて殺されうが、それが怖うて間夫狂ひがなるものかいなア。慮外ながら揚巻でござんす。男を立てる助六が深間、鬼の女房にや鬼神ぢや。今からが揚巻が惡態の初音。お前と助六さんを並べて見た所が、こちらは立派な男振、こちらは意地の惡さうな男つき。たとへて言はゞ雪と墨、硯の海も鳴戸の海も、海といふ名は一つでも、深いと淺いは客と間夫、間夫が無ければ女郎は闇、暗がりで見ても助六さんとお前、取違へて宜いものかいなア。たとへ茶屋舟宿が異見でも、親方さんの詫事でも、小刀針でもやめぬ揚巻が間夫狂ひ。サア、切らしやんせ。たとへ殺されても、助六さんの事は思ひ切られぬ。意休さん。わしに斯ういはれたら、よもや助けては置かんすまいがな。

意休　ムウ。

ト切らうとする。ト意休思案して、つか／＼と寄つて揚巻を引立て、

揚巻　サア、切らんせ。

意休　うせう。

揚巻　何處へ。

意休　助六が所へ。

揚巻　言分はないな。

意休　うしやアがれ。

ト花道へ行く。

白玉　コレ／＼、揚巻さん。お前が其のやうに腹立てさんしては、兩方ながら張やひづくになつて、お前の思はしやんすお人の、どのやうな難儀にならうも知れぬぞえ、サア、ぢやによつて、マア、奧へござんせ。意休さん。お前も其のやうに腹立てずと、機嫌直したが宜いわいなア。揚巻さん。マアわたしと一處に奧へござんせ。中のよいわしが頼みぢやわいなア。

揚巻　可愛い男の所へ行くのは、わしや嬉しいけれど、中のよいお前のお言葉、つぶされもしやすまい。

ト舞臺へ戻り、

意休さん。この後はお前の顏見る事は嫌ぢやぞえ。白玉

さん。
白玉　サア、ござんせい。
揚巻　子供、來や。
禿　アイ〳〵。
トすがゝきになり、揚巻、白玉、禿ついてはいる。
向う揚巻の内にて尺八の音する。
傾六　アレ、虚無僧が來やんしたわいな。
傾七　何を、ありや虚無僧ぢやない。地廻りの若い衆ぢやわいの。
傾二　ドレ〳〵。
皆々　ほんになあ。
ト前弾きになり、助六花道へ留まる。
〽人目の關の許しなく、笠の雫にしよぼ濡れて、雨の蓑輪のさえかへる。
傾六　助六さん、その。
皆々　鉢巻わえ。
助六　この鉢巻の御不審か。
〽この鉢巻は過ぎし頃、由縁の藤の紫の、初元結の巻きそめし、初冠の若松の、松のはけさき透き額、堤八丁風そよぐ、くさに音せぬ塗り鼻緒、一つ印籠一つ前、二つ廻りの雲の帶、富士を筑波の山あひに、袖なりゆかし君ゆかし。
君なら〳〵。
〽しんぞ命を揚巻の、これ助六がまいわたり、風情なりける次第なり。
ト段切り。淨瑠璃切れる。
皆々　やんや〳〵。
傾七　助六さん、ちやつと此處へござんせいなア。
傾二　誰やら、待兼ねてゞあらうぞえ。
皆々　早う此處へ、ござんせいなア。
助六　どうです〳〵。いつ見ても美しいお顔、そんなら不しつけながら、割込みませうか。
皆々　サア、ござんせいなア。
助六　冷えものでござる。お許されませう。
ト長床几へ腰を掛ける。女郎てんでに煙管を出だす。
皆々　サア、煙草のまんせ。
ト一人々々に取つて、めい〳〵助六に煙管をやる。助六迷惑なる思ひ入れして、
助六　此のやうにめい〳〵御馳走に預かりましては、しんぞ火の用心が惡うござんせうぞえ。

(繪草紙より)

（繪草紙より）

皆々　何を。
意休　君たち、吸付け煙草を一服たべたい。
傾六　お易い事でござんすが、煙管がござんせぬ。
意休　それ程ある煙管を。
傾一　アイ、この煙管にはぬしがあるわいなア。
意休　そのぬしは誰だ。
助六　わしでごんす。何ときついものか。大門へぬつとつらを出すと、中の町の兩側から、近付きの女郎の吸付け煙草、雨の降るやうな。夕べも松屋の店先きへちよつと腰を掛けると、五丁町の女郎の吸付け煙草で、誓文、店先きへ煙管を蒸籠のやうに積んで置いた。女郎づかを握るものは、是でなければ嬉しくない。大盡だなぞと味噌を上げても、大きなつらをしても、斯らいふ事は金づくぢやならないだて。撫付けどの。誰だか知らぬが、煙管が用なら一本貸して進ぜませう。
意休　それは忝ない、然らばその味噌な煙管を一本借りませうか。
助六　貸して進ぜませう。
　ト煙管を足にはさみ突出し。
サア、持つてござらぬか。どうです〳〵。

意休　ハヽヽヽヽ、立派な男だが、可哀やてんぼうさうな。足のよく働らく麩屋の男か、其のやうな事をして男達で候のと人を脅すか、總じて男達といふものは、第一正統を守り、不義をせず、無禮をなさず、不理窟をいはず、意氣地によつて心を磨くをまことの男達といふ。理非を辨へず慮外を働らく奴をば氣負ひといふ。兎角廓に絶えぬが地廻りのぶう〳〵、耳のはたの蚊も同然。手の平でぶつつぶすぞ。したが蟲の事、何をいつても馬の耳へ風。儘よ、蚊遣りに伽羅でも焚かうか。
助六　變道常ならず、敵によつて轉化すとは三略の詞、相手によつてあいしらひやうが違ふ。來つて是非を說く人はこれ是非の人。大きなつらをひろぐやつは足であいしらふ。不禮咎めをひろぐと、下駄でぶつぶたかれて、ぎしやばると引こ拔いて切る。これが男達の極意。誰だと思ふ、つがもない。
意休　ドリヤ、一つ食べうか。
　ト男達の一に酌をさせて、酒を呑んで居る。
助六　女郎衆、この頃、この吉原へ蛇が出るぞや。
皆々　オヽ。こわ。
助六　イヤ、怖い蛇ぢやアない。つらはりきんで惣白髮、

髭があつて……に似た蛇だ。變つた事の、毎晩〳〵、女郎に振らるれど、恥を恥とも思はず通ひつめる執着の蛇だ。こいつが時をりふし伽羅を焚くだ。何の爲めに焚くと思へば、そいつが髭に虱がたかる。伽羅は虱の大禁物、人目に到りと見せうとは、イヤきやら臭い奴だ。

ト奥にて、

門兵　いやだ〳〵。

ト門兵衛、湯上りの形りにて出て來る。これに長吉茶屋の息子ついて出る。お辰も取さへる。

置きやアがれ〳〵。くわんぺらさまが怒つちやア、矢も楯も只は置かない。女郎めらを出せ〳〵。

長吉　モシ〳〵、くわんぺらさま。どうしたものだ。野暮らしい。お靜まりなされませい。

茶屋　成程、靜かに仰つしやりませ。

門兵　いやだ〳〵〳〵。

意休　くわんぺら。何を小言をいふ。

門兵　こりや親分でごんすか。聞いて下さんせ。憎いやつは遣手めだ。此處へうしやアがれ。うなア女郎の二重賣りをしやアがるか。太い奴だ。これぢやア濟まない濟まない。

お辰　モシ〳〵、何の事でござんす。太いの細いのと。オオこわ。

門兵　うなア人を馬鹿にしやアがる。コレヤイ、このくわんぺら法皇さまが御酒宴の餘りに、風呂に召さうとの御託宣。おれが思ひ付きは女郎を一所に入れて、脊中を流させうと思ふ心。あつとお請けを申した故に、先つきにから風呂におれ只つた一人、待てど暮らせど女郎めらが、ひつとりもうしやアがらない。おらア湯の中で半分とけた。惣仕舞した大盡を斯うしても宜いか。ふんばりめらを此處へ出せ。殘らず湯壺へ叩き込んで、女郎の白湯漬けを攫つ込むぞ。

傾六　モシ〳〵、わんぺらさん。お前ひとりが客の始まりではあるまいし、ふんばり呼はり置いて下さんせ。

傾一　そりや、腹は立てうとも横にせうとも、お前の腹ぢやによつて構ひはせぬが、ふんばり呼はり止めて貰はうぞえ。

傾三　やめさんせぬと、お前の口へ大戸を立てるぞえ。

傾六　あの憎らしい顏はいなア。

傾一　ほんに可愛らしい處は微塵もない、アレあの顏はいなア。

皆々　オヽ笑止。
門兵　默りやアがれ、ふんばりめら。おれが口へ大戸を立てると、鼻の穴の潛りから、自由に出はいりするぞ。
傾三　みな聞かんしたか。あの惡態わいのう。
傾一　ほんにあのやうに毒な事いはねば、强う見えぬと思うて居るかいなア。
傾三　そんな事いはしやんす程、うわかぶきがして、障つたら向うへのめりさうな男ぢやわいのう。
傾六　あの下作な顏はいのう。
皆々　しみ〴〵、オヽ好かや。
門兵　業腹な奴等だ。亭主め、ふんばりめらをみんな此處へ連れて來い。胴腹へ細紐を通して、五丁町の眞中で、女郎の百萬遍を繰るぞ。
傾三　ほんに自由さうに、女郎が珠數繋ぎになるものかいなア。アノ腹へ細引きを通すといなア。
傾六　あの愛嬌のない事を見て、笑はんせ。
皆々　ワアイ〳〵。
門兵　うぬらは笑つたな。イヤ笑ひ清め奉つたな。モウ免されぬ。
ト滅多無上に騷ぐ。皆々取りさへる。この騷ぎの中へ、溫飩屋のかつぎ、箱をかつぎ出で門兵衞に突當る。
オヽ痛いな〳〵。野郎め、待ちやアがれ。
擔ぎ　アイ〳〵、お免されませ〳〵。
門兵　何だ、お免されませう。うなア、けんどん箱をぶつつけて、御免なさい。こな蕎麥かす野郎の、たれ味噌野郎の、だしがら野郎め。うなア、おれが目の玉へいらないか。うなア〳〵〳〵。
トこづき廻す。
擔ぎ　御免なされませ。女郎さま方、お詫びなされて下さりませい〳〵。
皆々　門兵衞さん。堪忍して遣らしやんせいなア〳〵。
門兵　ならない〳〵。
皆々　助六さん、詫事して遣らしやんせ〳〵。
ト口々にいふ。助六、門兵衞が手を捩上げる。
門兵　オヽ、痛い〳〵〳〵。
助六　大事ない。早く行け〳〵。
擔ぎ　アイ。
ト花道へ行かうとする。
門兵　待ちやアがれ〳〵。
助六　ハテ、宜うごんす〳〵。馬鹿な奴だ。早く行け早く

行け。

ト饂飩屋立たうとする。

門兵　動きやアがると叩き殺すぞ。

助六　ハテ、宜うごんす、堪忍して遣るものだよ。

門兵　遣るものだよ。

助六　ハテさて、堪忍して遣りなさいよ。

門兵　何だ。遣りなさいよ。遣りなさいがイヤだ。やりなさるまいが何うする。

助六　ハテさて、高が手に足りるものぢやアない。大人氣ない、堪忍しなさい。

門兵　先つきにから、大分しやれるやつだ。うなア、おれを知らないな。

助六　是はどうしたものでえす。こなたを知らぬものがあるものか。この吉原はいふに及ばず、この江戸にも隠れはない。

門兵　知つて居るか。

助六　誰だか知らない。

門兵　置きやアがれ。こいつは人を上げたり下したりするな。

助六　うぬがやうな安い野郎を、誰が知るものだ。

門兵　こいつが、恐れ多い事をぬかすわえ。おれを知らぬとぬかすからは、ムウ、聞えた。今日が吉原の宮參りか。こりや赤つ子に知らせると疱瘡のまじなひになる。耳の穴をほじつて能く聞け。是にござるがおれが親分、通俗三國志の利きもの、關羽字は雲長、髭から思ひ付いて髭の意休どの。その烏帽子兒に關羽の關を取つて、くわんぺら門兵衞、ぜゞもちだも。尊い寺は門から見える。門兵衞さまといふ腹つぷくれ。うぬが其の笠を取れ。イヤサ、そのあたまの紫の鉢卷を引つたくつて、三度らい拜をひろげよ。

助六　ハ、、、緣起を聞けば有難い。しかし貴樣の長ぜりふのうちに、氣の毒な溫飩が伸びるわ。馬鹿な奴だ。早く行け〳〵。

門兵　遣らない〳〵。

助六　先つきにから詫をしても、遣らない〳〵と。〇ハ、ア、聞えた。貴樣はひだるいの。丁度よい時分に擔ぎめが來たによつて、どさくさ紛れに溫飩をして遣らうとな。ハテ、遠慮深い男。そんなら其うと云つたがよい。つい濟む事を。おれが振舞ひませう。

ト溫飩箱より溫飩を出して、

錢はおれが遣る。こりや精進か。
擔ぎ　イエ、生臭うござりまする。
助六　不精進かは知らねども、わしが給仕ぢや、一杯上がれ。
門兵　いやだわ。
助六　ハテ、力まんものでごんす。胡椒を入れて。
ト門兵衞が鼻の先きへ胡椒を入れる。門兵衞くさめをする。
サア、一つ上がれ。わしがくゝめて進ぜう。
門兵　何だ、わしだ。
助六　ムウ、わしさ。
門兵　うぬが鷲なら、おらア熊鷹だ。
助六　ムウ熊鷹だ。熊鷹の長範。貴さまは手が長いの。
門兵　置きやアがれ。おらアいやだわえ。
助六　そんなら、是ほどにいつてもイヤか。
門兵　イヤだ〳〵、イヤだわやい。
助六　好きにしやアがれ。
ト溫飩を門兵衞に浴せる。
門兵　斬つた〳〵〳〵。
ト是にて擔ぎは花道へ逃げてはいる。若衆大勢の中へ白酒賣七兵衞、棒を持つて出る。朝顏千平、帶と脇差とを持ち、駈けて出て來る。
千平　親分〳〵。せんべいが來ました〳〵。先づ帶をさつしやい〳〵。
ト帶を締め、脇差をさゝせる。
門兵　せんべいか。口惜しい。不意を打たれた。疵は深いか淺いか、見てくれろ〳〵。
千平　コレ〳〵、親分。疵は何處にもござらぬぞや。
門兵　何だ。疵はない。騷ぐな〳〵。
ト頭の溫飩を取つて見て、
斬られたと思つたら、こりや溫飩だ。
千平　置かつしやい。
門兵　ぶちのめせ。
ト若い衆大勢、棒を振上げる。
助六　何だ、その棒を振上げてどうする。丁稚上がりめら。その棒がちつとでも障ると、死人の山をつくぞ。
皆々　ヤア。
助六　棒を引きやアがらないか。
皆々　アイ〳〵。
ト靜まる。

千平　ヤイ、二才野郎め。三才野郎め。仔細らしい奴だ。凡そおらが親分の門兵衞どのに刄向ふ奴は覺えがない。それにマア、親分の頭へ能く温飩をぶつかけたな。せめて三十二文盛りなら不精もせうが、親分を見くびつて、能く二八をぶつかけたな。この上はこの奴が了簡ならぬ。おれが名を聞いて、閻魔の小遣ひ帳につ付け。事も愚かや、この糸鬢は砂糖煎餅が孫、薄雪煎餅はおれが姉、木の葉煎餅は行逢ひ兄弟、鹽煎餅が親分に、朝顏せんべいといふ色奴だぞ。野郎め、うぬを斯う。

トかゝる。助六尺八にて叩く。千平見事に投げられる。

門兵　千平、どうした〳〵。

千平　是なる木の根にけし飛んで、思はぬ負を致したり。

門兵　相撲の勝負は知らねども、木の根は正しく。

千平　オイ。

門兵　此處にあり。

ト淨瑠璃をかたる。

皆々　置きやアがれ。

門兵　野郎め。重ね〳〵の曲手鞠。うなアマア何といふ。

皆々　野郎だ。

助六　いかさま、この五丁へ脛を踏ン込む野郎めらは、おれが名を聞いて置くがよい。先づ第一におこりが落ちる。まだよい事がある。大門をすつと潜ると、おれが名を手の平へ三遍書いて甞めろ、一生女郎に振られるといふ事がない。見かけは小さな野郎だが膽が大きい。遠くは八王子の炭燒、賣炭の齒つ缺けぢゝい。近くは三谷の古やりて、梅干婆ァに至るまで、茶呑み話の喧嘩沙汰、男達の無盡のかけ捨て、つひに引けを取つた事のない男だ。江戸紫の鉢卷に、髮は生締め、はけの先きの間から覗いて見ろ。安房上總が浮繪のやうに見える。相手が殖えれば龍に水、金龍山の客殿から、目黒のめんぞうまで御存じの江戸八百八町に隱れのない、杏葉牡丹の紋付きも櫻に匂ふ中の町、花川戸の助六とも、揚卷の助六ともいふ若い者だ。間近く寄つてしやつつらを拜み奉れやい。

皆々　イヤア。

トふろへろ。

助六　ホヽ、ドブ板野郎め。たれ味噌野郎め。出し殼野郎め。そばかす野郎め。引込みやアがれ。

門千　モウ、免さぬ。

ト門兵衞、千平、切つて掛る。立廻りにて助六、この

刀を寸を取る事あり、拔身をはふり出し、兩人を尺八に叩き、しやんと見得。

女皆　助六さん、大當り。やんや〳〵。

ト兩人を下へ投げ、意休が脇へ助六腰を掛ける。

助六　サア、親仁どの。こなたの子分だ。何のかのといつた野郎は、みんなあの通り。定めて貴さまは堪忍なるまい。切らつしやい。拔かつしやい。どうだな〳〵。なぜ物を云はぬ。啞か。聾か。拔きやれな〳〵。ハテ張合のないやつだ。猫に追はれた鼠のやうに、ちうの音も出さないな。可愛や、こいつは死んださうだ。よい〳〵、おれが引導渡して遣らう。

ト下駄を脱ぎ、意休が頭へ載せ

如是畜生菩提心、往生安樂、こくとんくわんちん。ハ、ハヽヽヽ、乞食の閻魔さまめ。

ト意休、頭の下駄を取つてきつとする。

こりやア、面白くなつて來たわえ。

ト意休下駄を捨て、刀を拔かうとする。

助六　サア拔け〳〵〳〵、拔かないか。

ト詰寄る。

意休　いんにや拔くまい。

ト納める。

門兵　コレ〳〵親分、こなたがさう弱くつては、おいらが大分心細い。

千平　日ごろ自慢の兵法は、いつの役に立つのだ。

門千　エヽ、みじめな人だ。

意休　大象とけいに遊ばず、鷄を割くに何ぞ牛の刀を用ひんや。意休が相手にする奴ぢやアない。くわんぺら。朝顏。鼻紙袋の用心しろ。エヽ、うぬ。

ト思ひ入れ。助六、脇差を拔き曲彔を切る。しやんと納め、

助六　マア、ざつとこのくらゐなものさ。

意休　ぶつちめろ。

ト是よりすがゝきになり、大勢棒を以つて助六にかゝる。これを切拂ふ。このうちに意休、門兵衞、千平、先きに女形そのほか皆々はいる。若い衆大勢、棒を持ち、助六が後について來る。この中に白酒賣も同じやうに、天秤棒を持ち、ついて來る。

皆々　遣らぬ。

ト棒を振上げる。助六脇差を拔く。揚幕へ皆々逃げてこの事二三あつて、このうち助六より惡態、捨てぜり

ふあるべし。皆々はいる。トゞ白酒賣ばかり留場の口に立つて居る。

助六　さて弱い奴等だ。ドリヤ、揚卷が布團の上で一杯呑まうか。

ト肌を入れ、暖簾口へかへる。このうち、白酒賣そろそろと花道の中程へ來て、

白酒　兄さま〳〵。ちよつと來な。待つて貰はう。

助六　何だ、兄さんだ、しやれた奴ぢやわえ。今の野郎か何の用がある。

ト花道へ來る。七兵衞逃げて中の間の歩みへ來て、かがんで居る。

誰も居ない。太い奴だ。おれを呼んだは誰だ。此處へ出やアがれ。誰だと思ふ。江戸男達の惣本寺、揚卷の助六だぞ。つがもない事だ。

ト舞臺へ來る。花道にて

白酒　モシ〳〵、江戸男達の惣本寺さま。ちよつとお目に掛りませう。

助六　又呼びやアがつた。何だ。

トつか〳〵と花道へ來る。白酒賣花道へべつたりと腹這ひとなる。

どいつだ。こりやアおれを馬鹿にするな。わるくそばへやがると、大ドブへさらひ込むぞ。鼻の穴へ屋形船をはふり込むぞ。口を引裂くぞ。何のこつた。

ト舞臺へ來る。白酒賣起上がり、

白酒　モシ〳〵、待つてくれなさい〳〵。

助六　しやれた奴だ。うなア、何の用がある。

白酒　わしでござんすよ。

助六　何だ、わしだ。マア、うぬがしやつ面を見て遣らう。

ト白酒賣が胸盡しを取り、顔を見てびつくりする。

白酒　わしでござんすよ。

助六　こりやア兄者人、祐成どの。

白酒　お前の目にも、祐成どのと見えますか。

助六　兄者人ぢやものを。どうして此處へはござりました。

白酒　お前、わしは此處へ來ないものかえ。この祐成はこの廓は札留めか〳〵。

助六　イヤ全く其ういふ事ではないが、思ひ懸けなう何うして此處へござりました。

白酒　わしかえ。わしは大ドブへさらへ込まれに來ました。口を引裂かれに來ました。鼻の穴へ屋形舟を蹴込まれに來ました。鼻の穴は右かえ。左かえ。お望み次第、サア

サア〳〵、なげ込んで貰ひたい。
ト是をいひながら、天秤棒を舞臺へ置き、懐ろより錢と金を出し、助六が前へ置き
忝なうござる。返しましたぞ〳〵。
助六　モシ〳〵返したとは。こりやマア何うしたものでござる。
白酒　ハテナア。人に物を貸して忘れるとは。ハテ、よい御身代でえすの。
助六　ア、そんなら何時やら。
白酒　上田縞に萌黄の裏を附けて拵へる時、金が足らいで貴さまに借りた二分二百、返しました〳〵。
助六　モシ〳〵、他人がましい。何の返したの返へさぬのといふ事があるものでござりまするか。マア〳〵〳〵そつちへお仕舞ひなされませ。
白酒　イヽエ〳〵、人の物を借りて居ては、いふ事がいはれませぬ。アイ、口が利かれませぬわいな。
助六　是はどうでござりまする。現在弟の物はこなさまの物、わしが物はこなさまの物。
白酒　何といはつしやる。こなたとわしは兄弟ぢやといふのか。
助六　ハテ知れた事、兄者人でござりまする。
白酒　成程、貴さまは箱根山で、學問をさしつて能く知つてござらう。おいらがやうなものは、また天下のお情けで、その位の事は辨へて居ます。こなたは天下の御制札を見たであらう。先づ第一が親孝行、二番目には兄を敬ひ、兄は弟を憐れめと、誰にも分るやうに、平假名を以て書いてある。わしはそれを守つて、弟を憐れむ心はあるが、いかう役に立たぬ兄ぢやというて、大ドブへさらへ込むとは情けない。
助六　コレ〳〵、あれはあなたと存じませぬ故の事。
白酒　そんなら、わしと知らずに言はつしやれたか。
助六　あなたと知つて、どうして申しませう。
白酒　コレ、闇の夜の礫、親の顔へ當らうも知れぬぞや。時宗。そなたはマア、何う心得て居る。父上の敵が討ちたいと箱根を下山なし、母人の勘氣を受けてさへ、この祐成と立ち並んで、本望遂げうといふたぢやないか。鬼王夫婦が情けにて、母人の御機嫌も直り、今こそ兄弟睦じう、五月下旬を待つではないか。それに、この程よりこの廓へ入込み、毎日々々喧嘩ばつかりしやるげな。先つきも先つき、人の頭へ温飩をかけたり、下駄を載せ

たり、無法といはうか。コレ、母人はの、そなたのこと、祐成、時致はどうした事ぢや、喧嘩ばつかり。竹町で竹割にしたは誰ぢや、助六。砂利場で砂利の中へぶち込んだは誰ぢや、助六。馬道で跳ね倒したは誰ぢや、助六。餘りの事に、そりやア雷門で臍を拔いたは誰ぢや、助六ぢや。ほんにヤレ、烏の啼かぬ日はあれど、そなたの喧嘩の噂を聞かん日はない。わしが心推量してくれ、時致。どうして天魔が入り替つて、そんな心になつて呉れたぞ。そなたが身に覺えのある喧嘩でもあらうが、又そなたより強いやつがあつて、命にかゝはる事ならば、この兄と言替した十八年の願ひは仇事。聞えぬぞや、助六。モウ、この上は兄弟の緣は切つたぞ。見下げ果てたといはうか。兄持つたと思ふな。弟を持つたとは思はぬぞ。あんまりぢやわい。兄の罰ぢやというて、當るまいものでもないわい。

助六　疊み掛けての御意見は、喧嘩の事かな。この助六が喧嘩ははゞでします。

白酒　きついはゞさ。親兄弟に歎きをかけ、苦勞をさせる喧嘩はゞとは、きつい事ぢやの。

助六　モシ〱勿體ない。何しに親兄弟に苦勞させる喧嘩を致しませうぞ。その喧嘩は義理ある祐信さま。滿江さま、未來にござる河津さまの孝行の爲めの喧嘩でござる。

白酒　何を。おれにいはれ、しよう事なしに孝行とは。喧嘩をすれば何が孝行ぢや。

助六　いつぞや箱根に於て友切丸紛失、祐信さまの御難儀、百日の日延べなれども、今に於て行方が知れましたか。

白酒　それが知れぬゆゑ、苦勞をして居るわえ。

助六　さればさ、その友切丸ない時には、祐信さまのお命の程、まつた敵の祐經を討つには、友切丸にて討てよと、箱根權現の靈夢。どうぞ友切丸詮議し出し、祐信さまの御難儀をお救ひ申し、敵左衞門祐經を討たんと、千々に心は碎けども、それぞといふ手掛りもなし、幸ひ思ひ付いたるこの喧嘩、廓は人の入込む所、無理に喧嘩を仕掛け、拔かねばならぬやうに仕掛け、拔き放せばそれか是かと、白刃を握つて心を盡すこの助六が心、どのやうであらうと思うて下されますぞ。成程、一通りにお聞きなされては、お腹立ち御異見もありさうな事、成程兄者人の志、有難いと存じませうが、譯をお聞きなさらず、只一圖に見下げ果てたの、兄持つたと思ふな、弟持つたと思はぬとは、胴慾なこと仰やりましたな。宜うござり

ますする。此のやうに千變萬化に苦勞致しても、親兄弟へ不孝になりまするからは、この上は喧嘩をやめまするでござりませう。私が喧嘩をやめましたら、大かた早速友切丸も出、祐信さまも御難儀を、お遁れ遊ばすでござりませう。親兄弟に見限られた私、いつそ敵も討たれまい。皆さまへの申譯には坊主になりまする。お免しなされて下されい。ア、いややの喧嘩、今までの喧嘩は免させ給へ。諸佛薩陀、南無阿彌陀佛々々々々々々。

白酒　おれが其うであらうと思うた。日頃から發明なそなた、無法喧嘩はせまい、これは定めて友切丸詮議ゆゑぢやと思うて居た。おれがなぜ今のやうな事をいうたの。ハ、ア。この口ぢや。ヤイ、口よ。なぜに今のやうな事をいふた。嗜め、あやまつたか。あやまりました。アレ〳〵、あやまつたといふ。モウ堪忍して遣りやれ。コレ、そなたが其ういふ志ならば。

ト助六、下の方へ來て、

助六　モシ〳〵、やめまする。お免しなされませい。南無阿彌陀佛々々々々々々。

白酒　コレサ、こちら向きやれ。おれとした事が他人がましい。この二分二百、イヤ返したの返さぬのと、氣が違つたさうな。そなたのいやる通り、そなたの物はおれが物、おれが物は矢つ張わしが物ぢや。

ト錢と金を仕舞ひ。

コレ、機嫌直しやいの。

ト助六、こちらへ來て、

助六　南無阿彌陀佛々々々々々。

白酒　是はどうぢや。田圃から拜む觀音さま。後ろ向きとは曲がない。コレ、時致、そなたが其ういふ心を知つて愛憎づかしをいひませう。氣に當つたら堪忍しや。兄弟なればこそ異見をいふ。あやまつた、あやまつたわい。

助六　左樣ならば、最前から申しました譯を、お聞き屆けなされて、喧嘩を致しましても、大事ござりませぬか。

白酒　大事ないとも〳〵。喧嘩を小紋に染めて着たが宜い。

助六　そんなら喧嘩を致しまするぞ。

白酒　さつしやい〳〵。喧嘩は似合つて居る。喧嘩をば茶漬けにして食はつしやい。

助六　いよ〳〵喧嘩をしますぞえ。

白酒　ま一杯替へて召上りませい。

助六　是で落着いたわいの。

白酒　おれも落着いたわいの。時に何と友切丸の手掛りで

も知れたか。

助六　未だそれぞとは知れませねども、最前の意休が刀、抜かうとして抜き兼ねましたは、心憎うござる。

白酒　成程、あいつが面魂。怪しい、もしや尋ぬる所の刀を帶したも知れぬ。

助六　コウと、今宵は待つて、あすの。

白酒　と思はゞ、今夜は一所に歸らつしやらぬか。

助六　また喧嘩の腰を折らつしやる。

白酒　おつと誤まり。さりながら、此のやうにいふもそなたを案じるから。斯うしませう。今宵はわしも此處に居てそなたと一所に詮議の爲め、喧嘩をしようではあるまいか。

助六　其のやうななまけた事では。

白酒　コレ〳〵、おればかりでは心元ないが、そなたといふ後楯があれば、そなたの息休め、是非一杯力んで見よう。

助六　それなら、先づ喧嘩の仕様は、先づ足を斯う踏ん張つて、野郎め、なぜ突當つた、鼻の穴へ屋形船を蹴込むぞ、こりや又何の事だ。と斯うせねば、先きの奴は怖がりませぬ。

白酒　成程、違つたものだ。斯うか。

ト　いろ〳〵可笑しき身振りあつて、

宜い〳〵遣るものではない。男達は足が肝心だな。呑込んだ〳〵。

助六　アレ〳〵といふうちに、かざ吹きからすの客めらが來るわ〳〵。

白酒　こやりまた何の事だ。

とすがゝきになり、白酒賣足をいかにして、いろ〳〵可笑しみ。臆病口より客一人づつ四五人出る。この客一人々々に刀を改むる事、股をくゞれといふこと、宜しく仕組あるべし。とゞ白酒賣、客の頭を股へ挾み、ぐる〳〵廻り突飛ばさる。客向うへはいる。始終すがゞき、白酒賣下座の方を見て、

白酒　アレ〳〵、揚卷が來る〳〵。

助六　あの女郎は身揚りで居るから、來いといつて寄こしたが、見れば客を送る體は、こいつは言はざアなるまい。

白酒　さうだ〳〵、言つて遣れ〳〵。

ト　無上に騒ぐ。臆病口より滿江、小一文字の編笠、羽織大小の形りにて、揚卷その手を肩へ掛けて出て來る

揚卷　お前、モウ歸らしやんすかえ。お前と別れるが、名

残り惜しいわいなア。

ト滿江領づく。舞臺の中程にて、助六、揚巻を引きのける。白酒賣同じく天秤棒を腰に差し、揚巻を引のけ、滅多に力んで居る。助六、滿江の前へ立塞がる。滿江通り違ひにワザと助六が足を踏む。助六、滿江が刀の鐺を取つて、

助六　侍、待ちやれ。

白酒　留めろ〱、おつ留めろ。

揚巻　助六さん、粗相さんすな。

助六　置きやアがれ、賣ため。

揚巻　惡態いはんすな。

助六　いつたら何うする。いつたら大事か。

白酒　さうだ、いつたら大事か。いつたら大事の與吉が女房、毛がない〱と、ホ、これだ。

助六　侍、この廣い往還、なぜ足を踏んだ、足袋が汚れた、鼻紙を出して拭いて行きやれ。

白酒　拭かせろ〱。今拭かざアふき得まい。

揚巻　コレ、粗相いうて跡であやまらしやんすなえ。

助六　うぬが知つた事ぢやアない。默つて居やアがれ。

揚巻　あの憎らしい顏はいなア。

助六　ヘ、、、、、うぬにやア構はぬ。おさぶ、なぜ物をいはない。拭きやれな。但し啞か。

白酒　ぬつぺらぼうか、物を云へ。

助六　コレ物をいへ。第一人の前へ慮外だ、この蓮つ葉をドレ。

白酒　與次郎兵衞をぬがして、つばきを嘗めさろやい。

助六　おれが前で慮外だ。われ脫がざア、おれがして遣らう。この蓮つ葉を取れやい。

ト編笠を取り、滿江と顏見合せ驚く。

揚巻　サア、助六さん。笠を取つてお顏を見やんしたら、存分にさんせ。ひよつとお顏へ疵でも付いたら、どうしようと思はんすぞ。

ト是よりヂリ〱としをれる。

白酒　どうだな〱。祭が聞へたな。おれが出よう。ドリヤ〱。

ト白酒賣、助六と入り替る。助六、白酒賣が袖を引き止せといふ思ひ入れ。白酒賣心付かず。

弱いな〱。打つ捨つて置かつしやい〱。いゝわな、いいわな。コレこの足を見ろ。事も愚かや、この男は揚巻の助六が兄分に、襟巻の拔け六といふ者だ。コリヤ、こ

つちの足が住吉の反り足だ。こちらの足が難波の蘆。あしが思ひは仙臺河岸の。ア、男達といふものは、股の痛いものぢや。痛い所を辛抱して見たが、抜けば玉散る天秤棒、坊さま山道破れた衣、ころも愚かや揚卷の前立ち、白酒の粕兵衛といふもの。家に傳はる握り拳の榮螺殼、汝が目鼻の間を。

ト滿江が顏を見て、オヽとうろたへ、いろ／＼あつて花道の角にて。

白酒　ムヽ、死んだ。

ト轉げて居る。

滿江　揚卷の助六どのとやら、よい身持ちでござるの。此處へござれ、此處へ來い。

ト助六を下へ引据ゑ。

サア、存分にさつしやれ。母が存分になりまする。サアぶたんか。踏まんか。エヽ情けない。是程ではあるまいと思うたが、あんまりの事で腹も立たれぬわいの。そなたはのう。

助六　モシ／＼、是には段々、エヽ聞えた。母者人を今のやうに拵へたは、こりやアわれだな。

揚卷　何のわたしが知らうぞいなア。

助六　シテ、誰が思ひ付き。

揚卷　お袋さまが、お前の喧嘩の噂をお聞きなされて、おいとしや、夜の目もお休みなされぬといなア。どうして其のやうな心になつて下さんしたなア。

滿江　コリヤ／＼、揚卷どの、何もいうて下さるな。わしも何もいひませぬ。大切な願ひのある者が、此のやうな身持ち。この編笠を何と蓮つ葉ぢや。それが武士の伜の言葉か。大方そなたばかりの心からではあるまい。勸め手があらう。朱に交はれば赤くなると、白酒の粕兵衛どのとやら、能う大事の伜を此やうな惡者にして下された。禮をいひませう。

ト滿江立掛る。このせりふのうち、白酒賣、頭巾をすつぽり冠り、そろ／＼花道へ這つて逃げる。この足を滿江とらへ。

何處へ御座る。此處へござれ。

ト本舞臺へ連れて來る。白酒賣、跡しざりにてしざる。

何の事ぢや。猫の眞似をさつしやるか。この頭巾を取らつしやい。

ト無理に頭巾を取り、顏を見て

祐成ぢやないか。
白酒　祐成やら、雷鳴やら、知れませぬ。
満江　そなたわの。
白酒　穴へもはいりたうござりまする。
満江　兄弟ともに打揃うてこの有様。ハア。
ト泣落して、
モシ、河津さま。お免しなされて下されませ。お前の無念の御最期。おのれやれ兄弟〇子どもを成人させ、敵を討たさうと女子の身の恥かしい、貞女を破つて祐信どのへ縁組み、その甲斐もなく兄弟がこの狼藉。所詮このなりでは敵は討たれますまい。というて今更祐信どのに何といはう。此やうに兄弟を育て上げたは満江が因果。この世の祐信どの、未來の河津どのへ言譯は、これより河津どのゝ墓の前で自害して死ぬる。さうぢや。
ト行かうとする。白酒賣、助六、揚卷、三人ながら留める。
放せ〳〵、死ぬる〳〵。
白酒　マア〳〵、お待ちなされて下されませ。私ぢやと申して、何しに今のやうな心でござりませう。コレ、時致、早う今の譯をお話し申しやいの。

助六　母人さま。この時致が喧嘩、定めて不所存とも思召しませうが、全く以て左様ではござりませぬ。當春、箱根に於て友切丸紛失、それゆゑ養父祐信どのゝ御難儀、あなたの御難儀を見捨ては敵を討たれず、何とぞ友切丸詮議の爲めと此の廓へ入込み、喧嘩も拔かねばならぬやうに仕掛けまするも、皆友切丸詮議の爲め、全く榮耀に致す喧嘩ではござりませぬ。お疑ひをお晴らしなされて下さりませう。
白酒　エヽ〳〵〳〵。
ト兩人あやまる。満江思ひ入れ。
満江　スリヤ、喧嘩するのは慰さみではない、友切丸詮議ゆゑぢやとか。
白酒　左様でござりまする。
助六　御機嫌をお直しなされて下されませい。
満江　いかさま、義理ある祐信どのゝ難儀を見捨て、よもや敵も討たれまい。友切丸詮議の爲めとは、成程尤もぢや。疑ひ晴れたが、もしやその身にひよつとした事があつては願ひは叶はぬ程に、身を大事に詮議しや。
白酒　左様ならばお疑ひは晴れましたか。有難い。
満江　揚卷どの、モウこなたのお世話で、喧嘩の様子を聞

いて落付きましたが、時致、友切丸詮議の爲め、そなたにけざしのない守りを遣りませう。
ト着て居る紙子を脱いで、
コレ、この紙子をそなたに遣らう。手荒うすると破れるぞ。どのやうな口惜しい事も、ぢつと堪忍すれば紙子は破れぬが、短氣を起せば紙子は破れる。これを破ると母が身體へ疵を付けるも同然ぢやぞ。
ト紙子を遣る。
白酒　いかさま。是は宜い堪忍の守り。サア、早速着替へや。
ト是より助六、上着を脱ぎ紙子を着る。このうち白酒賣、滿江が先のせりふを繰返し、捨ぜりふにていうて居る。助六帶を締めると、
能う似合ふたわい。
助六　早速にお志の紙子、着致しましてござりまする。
滿江　若い身では恥かしく思はうが、母ぢやと思うて大事にしや。祐成これで落着いた。モウ歸らうではあるまいか。
白酒　左樣ならば私がお供致しませう。助六もおぢや。
滿江　ア、イヤ〳〵。揚卷どの。先程より段々とのお世話。そのお禮、今宵は助六はこなたへ預けまする。夜が明けたならば、早う返して下されい。
助六　成程、私は後に殘り、ちと心當りがござりまする。詮議致し、後より歸りまするでござりませう。
滿江　そんなら祐成、おぢや。
ト行かうとする。白酒賣、草履を直し、杖を持つて居る。揚卷裲襠を脱ぎ、滿江を留めて、
揚卷　いから夜寒にござりまする。お風でも召しましては。〇是はむさうはござりまするか、わたしがのでござりまする。夜風を凌ぐ爲め、お召しなされて下されませい。
ト滿江、白酒賣と顔見合せ思ひ入れ。
揚卷　忝なうござる。
ト小袖を持ち、
そんなら、揚卷どの。
白酒　助六。
皆々　さらば。
ト三重にて揚卷先きへ、白酒賣「早く歸りやれよ」といひながら向うへはいる。直ぐに合方になる。揚卷見送り、

揚巻　必ずお氣遣ひなされまするな。喧嘩させます事ぢやござりませぬ程に、今夜はゆつくりと、お休みなされませい。いかい御苦勞なさるわいなア。○助六さん嗜まんせ。現在のおかゝさんを見違へるといふ事があるものかいなア。
助六　馬鹿いへ。お袋に編笠を着せて大小を差させて出たものを、古かね買ひに見せても、母者人とどう見えるものだ。揚巻、能く天井を見せたな。
揚巻　お前になんぼ喧嘩をやめさんせと、わたしがいうても聞かんせぬ故、お袋さまのお出でなされたを幸ひに、あのやうに拵へたれば、侍、待て、蓮つ葉を取れとは、ワアイ、助六さん。ちつと其うもござんすまい。
助六　何だ、ござんすまい。こちら向きやアがれ。
揚巻　こりや、どうさんす。
助六　どうするものだ。ア、、聞えた。母人をあのやうに拵へたは、この助六に困らして、この曲輪へ來られないやうにしたのか。こゝな嘘つき女郎め。
揚巻　何ぢや、嘘付きぢや。何が嘘ぢや。
助六　コレヤイ、知るまいと思ふか、うなアあの髭の意休と寢たな。あの親仁が襟元に付いて、それでおれが足留めをせうと思つて今のやうにしたな。こな狐女郎。狸女郎。畜生め。
揚巻　何ぢや。わしが意休と寢たえ。こりや可笑しいぞ。ほんに寢耳に水でござんすわいの。
助六　能う寢耳に水であらう。あの髭親仁がむしやくしやとした所が、うぬが寢た何んな處へはいつたかも知れぬわえ。
揚巻　イヤ、いはして置けばあんまりぢやわいの。わしが意休と寢たといふ事、誰に聞かんした。いひ人があらう。誰に聞かんした。
助六　何處でゝも聞いたわい。
揚巻　イヤ〳〵、何處で聞いたのぢや。
助六　サア、耳で聞いたわえ。
揚巻　耳で聞いた。耳で聞いたら、いひ人があらう。いひ人を玆へ出しや。
助六　いひ人があるわ。
揚巻　そのいひ人は。
助六　サア、いひ人は。
揚巻　そのいひ人は。
助六　無い。

揚卷　ソレ見さんせな。何の證據もない事を。聞えぬぞえ、助六さん。先度も二人寢て話すには、たとへ裾を肩へ結んでなりと、お袋さま養ひませうといふたれば、ほんにそなたのやうな眞實な者はない。一生忘れぬ、忝ないといやつたぢやないか。

助六　さういつた。

揚卷　さういうたのが嘘かいな〳〵。コレ、わしぢやとて腹からの女郎でもないわいなア。ほんにマア神さん掛けて、意休はイヤでならぬものを、それに今のやうな疑ひ、あんまりぢや。〇ア、、聞えた、お前、わしに飽きさんしたな。今更切れるのに切られれず、せう事なしに意休が事をいはんすは。わしと緣を切らう爲かえ。コレ助六さん。そんなら其うと、なぜに物事を綺麗にさんせぬぞえ。又わたしも飽きられてから、さうして居る事もござんせぬ。お前がイヤなら、私もイヤでござんすが、助六さん、さうはせぬものぢや。そりやお前、きたない仕樣ぢや〳〵。

助六　さう聞けばあんまり無理でもない。疑ひ晴らした。こちらへ向け。

ト揚卷、煙草盆を下へ持來る。

揚卷　畜生めにお構ひなされて下されまするな。

助六　コレ、おれが斯ういふからは、そんなに腹を立つ事はない。意休と譯ない事ならば。

ト又このセリフのうち、揚卷こちらへ來て、

揚卷　嘘つき女郎に、お構ひなされまするな。

助六　是はどうだ。おれも人に何のかのといはれたに依つて、意休が事をいつたものだ。いゝ加減に勘忍しろ。ならないか。置きやアがれ。おれが先つきにから甘口にいやア付け上がりがして。モウ歸るぞ、留めるな、歸る歸る。

ト思ひ入れ。

ほんに歸るぞ、留めないか、留めるな〳〵。何の事だ。さらば歸りませう。

ト思ひ入れにて歸らうとする。揚卷ちよつと留める。

留めるな〳〵。

揚卷　何ぢやゝら、ほんにこんな事をいへば、未練らしうて惡いけれど、是ればかりは言はにやアならぬ。下に居や。

助六　下に居らア。

揚卷　コレ、今日こなさんが差してござんした杏葉牡丹の

紋の付いた傘は、何處の女郎から貰やつた。
助六　あれか。あれは茅場町で誂へた。
揚巻　默りや。
助六　おつと默つた。
揚巻　人が知るまいと思つて、能う知つてゐるわいなア。
助六　おぬしはなぜ、そんな野暮な事をいふえ。
揚巻　アイわたしや野暮さ〳〵。野暮ぢやによつてお前に騙されたわいなア。
助六　其のやうに何もいふ事はない。そんならみんなおれが惡かつた。あやまつた〳〵。
揚巻　そんなら先つきにからの事は、惡いと思うてあやまらんしたか。
助六　大あやまり〳〵。
揚巻　ほんにあやまつたのか。
助六　大誓文。
揚巻　あやまつたが定ならば、もそつとこつちへ寄りや。
助六　寄らないで何うするものだ。寄るわ。斯う寄つたが何うする。
揚巻　オヽ、能う寄りやつた。あんまり憎いによつて斯うするわいの。

ト膝へ乘る。
助六　おれは又、かうするわえ。
ト引寄せる。
揚巻　先つきにから何のかのと。エヽ、憎らしい。
助六　エヽ、可愛いらしい。
揚巻　何のこつちやいなア。
ト抱付く。
助六　可愛の者やの〳〵。
ト奥にて、
意休　揚巻や〳〵。
助六　ありや、意休が聲。
揚巻　コレ、紙子を忘れまいぞ。
ト助六を無理に裲襠の下へ忍ばせ、床几に腰を掛けて居る。「揚巻々々」と云ひながら意休出て來る。禿二人香爐臺を持出る。
意休　揚巻、こゝに居たか。
揚巻　アイ、意休さんでござんすか。
意休　そなたを先つきにから尋ねて居た。こりや先つきに奥でいつた通り、日頃の事を水にして、この意休と抱かれて寢ようといふたが、ほんの事か。

揚卷　何の寢るものぢやぞいなア。
意休　寢ぬものとは。
揚卷　サア、お前と寢るといふたは、嘘ぢやござんせぬわいなア。
意休　そんなら寢よう。サアおぢや。
揚卷　行きやせぬ。
意休　行かれぬとは。
揚卷　サア、わたしやな、あんまり醉ふたによつて、風に吹かれて行きやんす。意休さん。お前こそお年寄りの、夜風はきつい身の毒。早う往て寢て居さんせんかえ。
意休　いんにや。そなたが此處に風に吹かれるなら、おれも此處に寢よう。コウ並んだ處を、あの助六め、貧乏野郎が見たら、さぞ氣を揉むであらうのう。揚卷。
ト揚卷に寄添ふ。下から助六、意休が足の毛を拔く。
オヽ、痛い／＼。誰かおれが足の毛を拔いた。
揚卷　何ぢや、お前の足の毛を拔いた。ほんに惡い事ばつかり。又子供か。惡じやれしやんな。
禿一　イエ／＼、わたしぢやござんせぬ。たつた今お前の裾から。
揚卷　また言譯か。言譯しやんな。

禿二　言譯ぢやござんせぬ。たつた今お前の裾から。
揚卷　默らぬか。意休さん、見やしやんせい。子供といふものは言譯ばつかりするわいなア。
意休　ほんに言譯ばつかりして小憎い奴だ。おれが肩でも揉んでくれろ。
禿兩　アイ／＼。
意休　時に揚卷や。いよ／＼助六が事はやめにするか、どうか。おれは欺されたやうで氣味が惡い。
ト助六出ようとする。
揚卷　出まいぞ／＼。
意休　何が出まいぞ。
揚卷　サア、お前ではござんせぬ。出たといふ事。
意休　何が出たといふのだ。
揚卷　アレ／＼、お月さんが出たといふ事いなア。
意休　何を、今夜は闇だ。
揚卷　イエ／＼、それでも確か、ほんに折角よう晴れた月を、雲が隱したぞいなア。
意休　成程、あの雲が。
揚卷　月を。
兩人　隱して、ヘヽヽヽハヽヽヽヽ。

意休　雲めは月を隱したな。月に村雲、花に風。
ト煙草呑まうとする。煙草盆を助六引つたくり、煙草呑んで居る。
アレ、煙草盆があつちへ歩いて行つた。
揚卷　是はしたり、又子供が。奥へおぢや。
禿兩　アイ〱。
ト禿、奥へはいる。
意休　いんにや、今のは子供ぢやアないぞよ。確かに。
ト寄らうとする。
揚卷　是はしたり、アレ〱、意休さん。何とマア、たんとあるお星さんぢやないかいなア。
意休　珍らしさうに、毎晩出る星がどうした。
揚卷　イヽエ、あんまりたんとあるさかい、あのお星さんを幾つあるか、お前、數へて見さんせぬかえ。
意休　何だ、おれに星を數へろか。
揚卷　アイ。
意休　おれが星を數へるうちに、おぬしやアおれが鼻毛を數へるか。數へよう〱。アレ、こちらの方に能く光るのが夜中の明星、こゝの上にあるのが七耀はんけだ。アレ〱、今飛んだ星を知つて居るか。

揚卷　イヽエ。
意休　あれがの、夜這星だ。人の揚げて置く女郎を盜みに來るが、夜這星ともてれん星ともいふ。なんぼ七夕めが逢はうと思うても、意休といふ天の川がどつかと坐つて居ちやア逢ふ事はなるまい。のう、揚卷。
ト助六、また足の毛を拔く。
オヽ痛々。また足の毛を拔きやアがつた。どいつだ、どいつだ。
揚卷　また子供かいなア。
意休　何をいふ、子供は此處にやア居もしねい。確かわが裾から。
揚卷　滅相な。どうしてわたしが裾から。大かた子供でなくば、オヽ、ソレ〱、鼠ぢやわいなア。
意休　何だ、鼠ぢや。
揚卷　アイ。
意休　なる程、鼠だ〱。溝を走る溝鼠か。揚卷。ソレソレ〱。
揚卷　エヽ、氣味の惡い。何處になア。
意休　其處によ、此處に居るわえ。
ト助六を引出す。揚卷、中へはいり

助六　意休か。
意休　助六か。
揚巻　コレ、紙子を忘れまいぞえ。
意休　揚巻といふ辻傾城の裾に、助六といふ溝鼠がしやつかゞんで居る事を、意休といふ逸物の猫が髭松明で睨んで置いた。助六、なぜ盗みをする。そんな根性で大望成就するものか。こな時致の腰抜けめ。
助六　待て、意休。わが本名を知り、腰抜けとは。時致が何が腰抜けだ。
意休　腰抜けではあるまいか。父祐安が無念の最期、その仇を報はん心もなく、傾城に本心を亂せしうつけもの。スリヤ、敵左衛門祐經は鎌倉山に礎固く時めく大名。アア聞えた。所詮叶はぬと思ひ、色と酒とに身を崩すか。たとへ其の身は不器量たりとも、など念力の屆きなば、大望なに空しからんや。兄弟離れ〳〵にして敵が討たれるものか。敵を討たねば腰抜け武士。意休が情けの教訓の扇、魂を入れ直せ。武士になれ。時致の卑怯者めが。
　ト扇にて散々に叩く。その手を取つて、
助六　意休、わりやアヤかりものぢや。汝が今申す通り、われ〳〵兄弟十八年つけ狙へども、今以て敵も討たれず。それに引替へこの助六は、そちが爲めには戀の敵、その敵を眼前に扇にて打ち、敵を討つとは羨ましい。肖かりたい。われが教訓の扇といひ、母の紙子に手向ひならぬこの時致。ぶて、叩け。ぶつて腹だにいるならば、いくらもぶてよ、髭の意休、やい。
揚巻　よう了簡して下さんした。
意休　ムウ、母の紙子を母と思ひ、大切になすからは、孝行の志がないでもない。そちには何ぞたとへて。〇幸ひ幸ひ。
　ト合方になり、香爐臺を出して
コリヤ、時致。大望あるものは人の恨みを受けず、人の情けを受けねば願ひは叶はぬ。この遊所に入込み喧嘩口論、まさかの時に何の益。たとへて云はゞこの香爐臺、この三ツ足は曾我兄弟、祐俊、祐成、時致と三人兄弟、合體してまつこの如く力を合すものならば、祐經は愚か大祖父伊藤が敵たる、頼朝どのも討たれるぞ。そちたちが心頼朝どのを恨むる所存もあるならば、年寄りたれどもこの意休、まさかの時はとも〳〵に力になつて得させまいものでもない。この香臺の如く兄弟心を合體なさ

ば、百斤の鼎を置くとても倒れず、崩れず。また兄弟心も離れ〳〵になる時は、まつこの如く、

ト刀を拔いて香爐臺を二つに切る。助六手ばしこう刀を見る。意休振放して刀をしやんと納め、

倒れるぞよ。曲輪通ひをやめにして、人になれ〳〵。

ト扇にて叩く。揚卷、中へはいつて思ひ入れ。

人多き人の中にも人ぞなき、人になれ人ひとになせ人、人目を忍んで時節を待て。助六、さらば。

ト唄になり、意休はいる。揚卷いろ〳〵あつて助六を見て、

揚卷　助六さん、紙子が破れたわいなア。

助六　ナニ、紙子が破れた。ホヽヽ。ホイ。この紙子を破るまいと、ぢつと無念を堪へたが、この紙子が破れてはモウ、堪忍がならぬわえ。

揚卷　コレ、短氣を出すまいぞ。

助六　揚卷、今この時宗へ教訓の折柄、思はず香爐臺を切割つたる意休が一腰こそ、まさに尋ぬる。

揚卷　友切丸かえ。

助六　こりや聲が高い。

ト揚卷を引寄せ囁く。

揚卷　そんなら今宵。

助六　コリヤ。

揚卷　ござんせ。

ト助六、花道へ逸散にはいる。揚卷暖簾口へはいる。

ト時の鐘になり、暖簾を立つて大戸を閉てる。このくぐりより客の仕出し歸る。遣手お辰、若い者治郎吉送つて出る。この間、助六拵への出來るまで、捨ぜりふにて向うへはいる。舞臺、砂舞臺になる。向うより助六、甲斐々々しき形りにて窺ひ出で、本舞臺へ來て蔭をすると、くゞりより朝顏千平、提灯をとぼし出る。意休、深編笠にて出る。これに傾城の六、同三、同七同二、同九、送つて出る。お辰、治郎吉、出て來て

治郎　意休さん、今宵はお早いお歸りでござりまする。

お辰　毎夜々々ござんしても、いつも名代でお氣の毒でござんす。

皆々　又この頃にござんせ。

意休　夜が明けると直きに來るわえ。みな歸れ〳〵。

治郎　土手まで送り申しませう。

意休　それには及ばぬ。歸れ〳〵。

治郎　デモ、餘り夜深に。

意休　不用心なといふ事か。そりやア氣遣ひはない。お側に朝顏千平といふ强者が控へて居る。氣遣ひなしに休みやれ〳〵。

傾皆　そんなら、意休さん。翌日ござんせえ。さばえ。

ト皆々くゞりへはいる。

意休　千平。何時であらう。

千平　モウ、八ツ半でもござりませう。

意休　急げ。

ト行かうとする。助六、提灯を切落す。意休が編笠切れる仕掛け、意休身構へする。三人きつと見得になる。

意休　何者だ。聲をもかけず切付けしは。ムウ、わりやア盜人だな。

助六　盜賊ではないぞ。

意休　さういふは助六。卑怯な、待伏せひろいだな。

助六　イヽや卑怯ではない。最前われへ敎訓の折柄、香爐臺を切割りし一腰こそ、曾我殿が難儀となつたる友切丸、その一腰を詮議の爲め、廓へ入込みしこの時致、友切丸に心を掛けるからは、本名なくて叶はぬ。姓名明かし、尋常に友切丸を渡せ。

意休　最前情けを以て敎訓のせし、この意休へ刄向ふ人外、豫ては汝等兄弟を、我が味方となし賴朝を亡ぼし、われ平家の弔ひとなさんと思ひしに此の有さま。成程、意休とは假の名、まことは伊賀の平内左衞門。

助六　さてこそな。

意休　大望成就のその爲めに、盜み隱せし友切丸、たつて渡せとぬかせば命はないぞ。

助六　小癪な。友切丸を渡せ。

意休　千平、ぬかるな。

千平　心得ました。

三人　どつこい。

ト忍び三重、蛙の聲にて、三人たていろ〳〵あり、何れも手を負ふ。千平を助六しとめる。後ろより意休、助六を一太刀斬る。これよりいろ〳〵あつて、意休を仕止め、友切丸を改める事あつて、どつかりと尻持をつき、助六息をついて居る。臆病口より三浦屋息子長吉、提灯とぼし鼻唄を歌ひながら、意休が死骸に躓づき、

長吉　こりや、意休さまぢや。

ト提灯を差出す。助六この提灯を切る。長吉逃げなが

ち
斬つた〳〵。
ト向ふへはいる。是より、西、東、本舞臺にて、拍子木を打ち、アリヤ〳〵の聲。助六、東西へ行かうとして人聲に恐れ、天水桶を見て手桶をおろし、天水桶へはいる。手桶の底を抜き是をかぶり下に居る。水こぼる〻。花道、東の下、舞臺、弓張提灯、皆々棒を持ち、三浦屋息子長吉、茶屋の息子、そのほか皆々出で、

茶屋　人殺しは何處へ逃げた〳〵。

皆々　何處を探しても見えませない。

長吉　それなら屋根へ逃げはせぬか。梯子を持つて來い持つて來い。

皆々　合點だ。

ト大勢、竹の梯子を東の棧敷へ掛ける。これへ若衆上つて尋ねる思ひ入れ。下へ降りて

若者　屋根にも居ませぬ。

長吉　これから角町川岸を尋ねろ。

茶屋　おれは揚屋町を尋ねやう。

ト皆々捨ぜりふにて三方へ入り替る。始終時の鐘、アリヤ〳〵、助六、天水桶より額を出す。アリヤ〳〵。

この事一二度あつて靜まる。助六窺ひ出で、着るものを絞り、よろめきながら花道へ行く。アリヤ〳〵。是より三方へ行き、とゞ氣を失なふ。三方より皆々取つて返し、前の通りに出て來て、助六を見付け

皆々　こゝに居る。ぶち殺せ〳〵。

ト棒を振上げる。揚巻走り出で、助六を裾へ隠し、

揚巻　わしぢや〳〵。粗相しやるな。揚巻ぢやぞ。

茶屋　こりや、太夫さん。危なうござりまする。

皆々　のかつしやいませい〳〵。

揚巻　コレ〳〵、わしや先つきにから此處に居た。その人を斬つたのは、あつちへ往つたわいのう。

治郎　イエ〳〵、お前の裾に居りまする。

皆々　お出しなさい〳〵。

揚巻　イヤ〳〵、此處には居ぬわいの。

皆々　それでも只つた今見付けた。のかつしやい〳〵。

揚巻　待ちや〳〵。そんならこの揚巻が嘘つくと思やるか。嘘つくやうな女郎ぢやないぞ。そりや何ぢや。棒振上げてわしをどうしやる。わるう棒三昧して、その棒の端がわしが身へ鳥渡でも障ると五丁町は暗闇ぢやぞ。

皆々　イヤア。

揚卷　サア、わしが相手にならう。この揚卷を相手にしや。
長吉　コレ〳〵、皆の衆。揚卷さんのア、いはんしやるに違ひもあるまい。是から方々手分けをして尋ねやう。
皆々　それが宜からう。サア、ござれ〳〵。
ト皆々三方へはいる。揚卷跡を見送りいろ〳〵あつて、助六へ氣を付けに、天水桶の水を掬ひ、口移しに呑ませ、肌と肌を合せ、ぢつと抱き締める。助六心付き、
揚卷　助六さん。心か付きましたか。
助六　揚卷か。少しのかすりで、水に浸つた故か、氣を失うた。口惜しい。
揚卷　モシ、お前の願ひのものは手に入りましたか。
助六　喜べ。友切丸は手に入つた。
揚卷　忝ない。
助六　この上は、一時も早く立退かう。ソレ。
揚卷　モシ〳〵、この廓に大勢が圍んで居れば、落ちさんす道はないわいの。
助六　幸ひのこの梯子。屋根傳ひに。
揚卷　あぶない〳〵、怪我さんすな。
ト助六、梯子の中程へ上がる。モシ、そんなら、わしや西川岸の方へ廻つて居る。田甫の方へ降りさんせ。助六さん。
助六　揚卷。
兩人　さらば。
ひやうし幕

助六曲輪名取草（終り）

千代始音頭瀬渡（ちよのはじめおんどのせと）

(繪草紙より(二))

千代始音頭瀬渡

三立目

博多浦八幡祭禮の殿
道具替り　三笠繩手の段

役名――くすねの權兵衞。あげ壺の長藏。傾城玉波。仲居おみよ。揚屋亭主傳四郎。岩倉典膳。奴文字助。今川巳之助。小松屋惣七。荒川藏人妻しがらみ　實は才藏女房松が枝。勅使牟禮一學　實は笹野才藏。都築監物。荒川主膳。

本舞臺。三間の間、正面、石の大鳥居、後へ一面の黑幕、左右の柱は紅葉の大樹、下の方に葭簀のさしかけして、長床几二脚ならべてあり、すべて博多浦鎭守祭禮市の體。幕の內よりくすれの權兵衞、廣袖木綿やつし、丸ぐけ帶の形りにて、錢財布を擔ぎ居る。上げ壺の長藏、同じ形りにて盆莫蓙を卷いて擔いで居る。白丁、かす烏帽子の宜禰、三人立つて居る。辻打にて幕明く。

權兵　なんと禰宜さん達、毎年このお宮のお祭り、三日の市中のざらちよぼ一、こゝの鳥居先が書入れの場所、また今年も賴みやすぞえ。

長藏　今年は又幸ひ天氣よく、夜晝かけて六日の市、椋鳥のかゝるやうに、お前方は鼻つ張に、四つ丸文づつ張りな。

□　權兵衞どのや長藏どのが、いつもの通りちよぼの出ばり、鳥居先は言ひ込みも多いけれども、お馴染だけにのけて置きました。

○　大坂からも、輕業やら猿の狂言が來るのと、場所の込み合は、みんな奧山の方へ割出して、こゝは手も着けさせませぬ。

△　わし共もこの祭が一年中の書入れ。三日三夜さは賽錢のいがみ取り、四ツ割四分で引摺り込めば、倘更割がよく廻るつもりだ。必ず賴みますぞや。

權兵　ソリヤア、合點でごんす。いつも書入れのお前方のくすね溜に、割をよくつけませう。わしも長藏も胴しきぢやア、如才な事はないのさ。

長藏　ソレ〳〵、とかく地の者は、おいらが盆にやア乘ら

ないから、市中に近在の錢を引上ぐる目算博奕。まだお湯立て前から店も張られまい。この間に烏渡明神さまへもつき合つて置くべい。
權兵　ソレ〳〵、兎角よい鳥の引掛かるやうに、神をすゝめ奉らう。
○　わしも湯立ての釜の下でも焚きつけませう。
長藏　そんなら場所は、此處に定めて置いて。
△　サア〳〵、ござりませい〳〵。
ト皆々下座へはいると、出の唄になり、向うより岩倉典膳、羽織、衣裳、大小の形りにて、紅麻の手拭を頭へ卷き出て來る。跡より玉波、傾城の他所行きの形りにて、扇使ひして出て來る。跡よりおみよ他一人、傳四郎、同じく亭主の形り、後より駕籠舁き四ッ手を舁ぎ出て來る。若い者、毛氈を肩に懸けて提重を持つて出る。こゝ人數花道の中程に止まり。
傳四　モシ、旦那。なんとよい見晴しぢやアござりませぬか。音に聞えた博多の浦。湊々のかゝり船から、沖の方を一目に眺めた所は、どうもいへませぬ。なんぼ都のお客さまでも、この景色には申分はござりますまい。
みよ　それいなア。高麗居士の方まで見え渡りたるこの風景。殊に又明神さまのお祭り、御逗留のうち、お祭禮にお遭ひなさるゝは願うてもない事。太夫さんも日頃から願うて居さんした今日の他所行き、さぞ嬉しうござんせうの。
玉波　アイナア、この明神さまには、たんとお禮申さにゃならぬ御願もあり、幸ひ今日の祭りゆゑ、岩倉さんにいうて見たれば連れて行かうと此の趣向、モウ、大抵嬉しい事ぢやアないわいなア。
典膳　いつにない玉波が笑顏。此のうちからの長逗留。つひに一度の笑ひ顏を見ぬが、今日の他所行きで百日の戀が叶うたやうだ。サア〳〵、アノ、鳥居先で、持せの酒肴を酌み替さうか。
傳四　それがようござりませう。サア〳〵、お出でなされませい。
ト唄の切れにて皆々舞臺へ來る。床几に毛氈を敷き、腰を掛ける。
典膳　時に傳四郎もおみよも聞いて呉れ。自體、上方でもわれらがやうな粹はないぢや。なぜといやれ。先づ第一が心よし、その上に女のいふ事を何でもいやといつた事がない。歌はもとより冷泉家の詠み手、手蹟は世尊寺流

のはしり書、琴、三味線は勿論、十種香、茶の湯、碁、双六、博奕は好きなり酒は呑まず、女子を殺すに於ては、眼前玉波太夫が笑ひ顔。何よりかよりきついのは、たんと所持した金丹圓、こうばつ〳〵とはずみかけるは、何ときついものか。

玉波　なんと、おみよさん、聞かしやんしたか。京のお方ぢやゆゑ、粋なお人であらうと思うたに、大きな壁ではないかいなア。

典膳　なんだ。この粋を壁とは。

　トむつとする。

みよ　モシ、なんぢやぞいなア。いま壁と言はしやんしたはな。

典膳　壁と言つたは、

みよ　幸添ひたいといふ事でござりますわいなア。

典膳　こいつは何より有難い。そんなら壁も壁、土藏作りの鼠壁だ。

玉波　アレ、またあのやうな事、いうてぢやわいなア。

みよ　ハテ、そこが京都のお客さん。申し、玉波さま。岩倉さんが仰しやつたには、冷泉家の歌よみぢやといな。お前さんもきつう歌がお好きで、どうぞよいお客さまがあらば、習うてほしいというてぢやに依つて、幸ひ會うたり、叶うたり、岩さんに歌の傳授をお受けなされませいなア。

玉波　ほんにおみよさんの言はしやんす通り、幸ひな歌の傳授。わたしがやうな不束者でも、出來るものなら何うぞ戀歌の一首も詠まるゝやうに、敎へて下さんせいなア。

典膳　なんだ、おれに、アノ、歌を敎へてくれとか。

　ト迷惑な思ひ入れ。

傳四　成程、これはようござりまする。モシ、旦那、戀歌の傳授と玉波さまが、さしつけての小夜衣。

みよ　わが妻ならで仇人は、習ふ心はないといふ、詞の花の裏表、きつと御傳授なされずばなりますまい。

典膳　コレサ〳〵、どうしておれがそんな事を。

　ト玉波思ひ入れして、

玉波　成程、博多の傾城、流れの身の上、賤しいわたしが歌の傳授と云ふによつて、敎へて下さんせぬ筈ぢや。コリヤ、わたしが悪かつた。モウ〳〵、習やんすまい。その替りに今宵から、お前の揚げには出ぬわいなア。

　トつんとする。

典膳　ソリヤア、なぜ〳〵。
みよ　ハテ、太夫さんが歌の傳授を受けたいといふのは、アリヤ裏の裏、お前さんのお心が知れぬ故。
玉波　それいたア、わたしを不束な者ぢやとさげすましやんすが恥かしさに、今日からお前の側には居ぬわいなア。
典膳　コレサ〳〵、それぢやアとんだ迷惑だ。なんでそもじをさげすむものだ。
玉波　それでも教へて下さんせぬぢやアないかえ。
典膳　サア、それだといつて。
　ト困る思ひ入れ。
みよ　外に教へて上げさんす、お方があらうわいなア。
典膳　コレサ〳〵、おみよ。手前までが同じやうに、そんな事をいふ事はない。
傳四　イヤ〳〵、これは旦那の出ぞこない。しつかりとあやまつて、歌の傳授をなされずば濟みますまいぞえ。
典膳　是はまた迷惑な。
玉波　どうでもならぬかえ。
典膳　教へようとも〳〵。教へは教へようが、マア、その傳授には何がよからう。
傳四　さしづめ戀歌の御傳授がようござりませう。
みよ　わたし共も、承はりたうござりますわいなア。
　ト典膳もぢ〳〵して、
典膳　先づ戀歌の傳授ならば、先づ斯うと。
　ト思案して、
ヲヽ、ある〳〵。先づ戀といふやつは、一體がちの藥、聲のよいのは松永忠五郎、逢ふ戀、待つ戀、忍ぶ戀、テモ、さうぢやいな。
　トうたひ、
こんな事であらうかな。
玉波　エヽ、なんぢやいな。そんな傳授があるものかいなア。お前の詠ましやんすお歌が聞きたいわいなア。
典膳　フム、おれが詠んだ歌か。おれが詠んだ歌は何よ。ヲヽ、ソレ〳〵、秋の田の刈穗のいほのとまをあらみ。
　ト皆々ふき出し、
玉み　シテ、下の句はえ。
典膳　なにとて松はつれなかるらん。どうだ、きついものか〳〵。
玉波　ほんにきつい歌よみぢやわいなア。
　ト笑ひ、

あんまり可笑くて、笑はれもせぬわいなア。
みよ　そして、マア、自體、赤い顔にびつしよりと汗を掻いて、悉皆朝參りの提灯に、雨の懸つたやうぢやわいなア。
典膳　イヤ、こいつ、武士に向つて。
　ト腹を立つ。
傳四　ア、モシ〳〵、そこをお腹をお立てなされぬが粹の所、おみよが朝參りの提灯と申したは、下には置かぬ上方の粹さま。
みよ　それいなア、雨に逢うたとは、濡がよいといふ事ぢやわいなア。
典膳　さういふ事なら、ナニ、腹が立つものか。濡がよいとは忝い〳〵。
傳四　その御機嫌の胴ぶくらへ、持せの酒をおつ取つて、
　ト提重を出し、吸筒、肴を出す。
みよ　所は山路の菊の酒。
玉波　神の妹背の鳥居先き。
典膳　さらば一獻酌み替さうか。
　ト典膳杯を引受ける。おみよ注ぐ。酒盛りになる。大拍子の神樂になり、向うより奴文字助、角鬢、江戸褄模樣の形り、一本差しにて風呂敷包を抱へて出て來る。後より今川巴之助、深編笠、上下衣裳、大小にて出る。文字助は直ぐに下座の方へ行かうとして、思はず典膳が刀の柄へ當る。
典膳　下郎め、待て。
　ト文字助振返へり
文字　この方でござりますか。
　ト是にて巴之助、下座の方に窺ふ。
典膳　知れた事だ。マア、待て。
文字　お侍さま。何の用でござりまするな。
典膳　わりやア眼が見えぬか。武士たるもの〻刀へ足を踏んかけて、物言はずに行過る。こ〻な慮外者めが。
　ト文字助思ひ入れして
文字　これは〳〵、思ひよりませぬ儀。主人の用事、急ぎの道筋、御遊興の場所とも見受けませず、さはりましたは下郎めが不調法、眞つ平、御免下されませい。
典膳　いんにや了簡ならねい。見た所が赤鰯でも一腰を差したれば、われも武士の家來であらう。夏は日當り冬は日陰と、よけて通るが道の作法。身は京家の侍岩倉典膳といふもの。今日今川家へ勅使のお入りにつき、先だつて

罷り下り、相待ち居る身が役目。逗留中は當所に於て慮外いたすやつは今川までの落度。それを知りつゝ斯かる慮外。但しは身に意趣遺恨ばしあつてか。何にもせよ、そこ一寸も動くまいぞ。

みよ　アヽ、モシ〱。お前さんのお腹立ちは御尤ながら、見た所が心に工みのありさうなお人でもござりませぬ。御了簡なされてお上げなされませい。

玉波　ソレ〱、急ぎの道ゆゑ。つい粗相でござんせう。可愛らしいアノお方、何のお前へ意趣遺恨があらうぞいなア。お若衆さん。

ト玉波、文字助に見惚れたるこなし。

文字　左樣々々。全く以て、存じまして斯やうな事を致しませう。道の作法も存じませぬ下郎め。何分にも御了簡なされて下さりませ。

玉波　アレ、あのやうにいうてぢや程に、お前も粹なお方ぢやないかえ。モウ、堪忍して上げさんせいなア。

傳四　モシ、旦那。玉波さまはじめわれ〱もお詫申しまする。遊びの中の口論は理に入つて、さりとは野暮ぢや。お許しなされて遣はされませい。

典膳　エヽ、コレ、了簡ならぬやつなれども、おぬし達が詫事といひ、玉波が手前、聞き分けぬも無得心。了簡して遣はさうが、以後の爲めだ、その方が主人の名を聞いて置く。主人の名をぬかせ。なんと。

文字　成程、御尤な事ながら、下郎めが不調法ゆゑ、主人の名目を出しましては、申譯もござりませぬ。此のたびは幾重にも御用捨にあづかりたうござりまする。

典膳　默りやアがれ。了簡するさへあるに、主人の名をもぬかすまいとか。コレ、エヽ、岩倉典膳京都の御用相濟むまでは、どいつどなたの差別はない、うぬが主人の名を聞いて、きつと申しつけやうがあるわえ。

文字　左樣存じて何處までも、主人の名目は申されませぬ。只下郎めが慮外のお詫び。

典膳　ならねいわ。慮外ひろいだ下司下郎め。主人の名字をぬかさにやア、後日の證據にそのしやつつらへ、コウ。

ト煙草盆にて文字助をぶつ。皆々驚く。文字助額に手を當て、思ひ入れ。

皆々　ヤア。

典膳　それで了簡して呉れうわ。

文字　イヤ、了簡して貰ひますまい。最前から詫事訴訟。

一合取つても武士の家來。しやつ額へ疵がついちやア屋敷へは歸られない。斯うなるからは絶體絶命。ねのなつたやつこが命。御不肖ながら、お侍。相手になつて貰ひませう。

典膳　ハヽヽヽ、流石は武士の家來ほどあつて、しをらしい事をぬかしたな。おれが手に懸ける事は有難いと思つて、閻魔の廳の下馬先きで、鬼ころしでもまくらやアがれ。

ト切つける。立廻り。煙草盆にてしやんと受け、

文字　どつこい。なんぼお侍の手の內でも、腕に覺えのやつこらさ、滅多にころりといくやうな、二合半ぢやアござりませぬ。

典膳　ところを斯うして。

と切懸ける。立廻り。文字助、典膳が刀を打落し、その刀を取つて典膳を背打にして、

文字　いつその事に。

ト刀を振上げる。後ろより巴之助、文字助が刀を打落して笠を取る。

ヤア、お旦那。なぜ下郎めをお留めなされました。

巴之　こゝな慮外者め。扣へて居らうぞ。

文字　ぢやと申して。

巴之　最前よりの樣子は、殘らず後ろで立ち聞いた。勅使御下向の折からといひ、京家のお侍に慮外があつては身の落度。そこへ心のつかぬといふは、たはけものめ。

ト文字助扣へると、巴之助思ひ入れして、

只今あれにて承はれば、下郎めが不調法、都方のお侍とも存ぜず、下々のがさつと御用捨なされて下されい。拙者めに免じられ、マア／＼、お刀をお納めなされませい。

ト拔身をとつて典膳に渡す。典膳物をも言はず、不承不承に取つて鞘に納める。

段々のお腹立ちは御尤ながら、取る所もない下々の儀、彼めに代つて拙者がお詫び。

ト典膳知らぬ顏をして居る。

スリヤ、斯やうに申しても御了簡はなりませぬか。拙者も侍。家來が面に疵を受け、その儘に差置いては武士の恥辱。この方も了簡が。

ト思ひ入れ。

何もかも拙者が斯やうに申す事もない。何分にも御用捨なされて下さりませう。斯やうに申しても御了簡がなり

ませぬか。然らば拙者も下郎めが科をこの身に引受け、
お相手になりませうか。
典膳　ヲヽ、コレ〳〵。これは御挨拶。了簡致さいでどう
致さう。
巴之　スリヤ、御了簡下されまするか。但し、この方から
打つ掛けませうか。
典膳　ナニサ、それには及びませぬ。
巴之　先づは拙者がお詫び、お聞き屆け下されまして、千
萬忝なうござりまする。
典膳　これは恐入つた御挨拶。これを御縁に致しお出合ひ
申したけれど、他國者の儀なり遊び先き、御縁もござら
ば重ねてゆるりとお目にかゝりませう。コリヤ、傳四郎、
これから別當方の座敷を借りて、理に入つた酒を呑み直
さう。玉波を連れて來やれ。
玉波　サア、わたしも行きたけれど。
　　トおみよに囁く。
みよ　成程、玉波さまはまだ行かれぬというてぢやわいな
ア。マア、岩さん、先きへお出でなされませい。
典膳　ソリヤ、なぜ、何の用で。
みよ　サイナ、太夫さんの遊び先きで、今のやうな口論す
んだらよいとて捨ても置かれず。
傳四　お侍さまにお禮もあり、マア、旦那は私がお供いた
しませう。
典膳　そんなら片つけて跡から來やれ。
傳四　サア、お出でなされませい。
　　ト文字助へ思ひ入れ、巴之助隔て、
典膳　とはいふものゝ。
巴之　お相手になりませう。
典膳　これでお別れ申しませう。
　　ト唄になり、典膳思ひ入れして、傳四郎ついて下座へ
　　はいる。皆々顏見合せて、
みよ　巴之助さん。出來ましたわいなア。
巴之　イヤ、モウ、あのやうな大束な奴に智慧のあるやつ
は無いものぢや。おれはまた、おぬし達がいつものやう
に心易い顏をしようかと思つて、大抵心遣ひをして居た
事ではない。
玉波　ほんに、モウ、どうなる事ぢやと案じたゆゑ、お前
を知らぬ顏で居たわいなア。
みよ　後ろからつつと出て刀を引つたくり、お相手になり
ませうかと言はしやんした所といふものは、氣味のよい。

イヨ、高麗さま、有難い。

皆々　ハヽヽヽヽ。

文字　若殿さまより仰せつけられました御用につき、取急ぐ道といひ、思はず知らず只今の災難、拙者が不調法より御用の間もかけまして、何とも申し譯もござりませぬ。

巴之　モウ、よい〳〵。高が遊び事の用事、暇がいつても大事ない。さりとはおぬしも正直なものだぞ。

みよ　そしてマア、殿さまの今日の出立ち。その折目高に立派な所を。

玉波　どこやらのお方に見せたなら、大抵嬉しい事ぢやアあらうぞえ。

巴之　おれが斯ういふ形りで出掛けたは、内を出よう魂膽、今ではおれも少しかぶりの筋ぢで屋敷へは歸られず、平生は一つ椀のぶつかけを食ひ合ふ中の友達も、斯うなると寢所さへ借さないに、アノ、小松屋惣七といふ眞實者の賴もしい言葉について、今ではおれもアノ文字助も小松屋の居候。なんぼさし合のない惣七でも、さう〳〵は出歩きにくい。そこで神參りとかこつけ、斯ういふ出立ち。モウ、大名も居候になつては飼猫にも機嫌を取らにやアならぬ。モウ、是からは上下を脱ぎ捨て、いつもの巴之助になる。どうだ文字助、その包みをこれへ。

ト文字助、風呂敷をほどく。内より着換の八丈の小袖を出し、上下を脱いで着換へる。

どうだこの形りになつては、話が出來ようがな。

文字　イヤ、若殿さま。御幼少の時より御側につき添ひ成人致し、今に忘れぬお主の御恩。御出國のその後も、お側につき添ふこの文字助、御諫言ではござりませねども、いまだ御家督も定まりませぬ今川のお家、いかなる凶事が出來致すまいものでもござりませぬ。何とぞお心を定められ、御歸國あるやうに偏へに願ひ上げまする。

巴之　アレ、アノ言ふ事を聞いてくれ。顏に似合はぬアノ堅い事は、さりとは困つたものだぞ。一體大名といふものが碌といかぬものぢや。あたり近所に家老の用人のとしかつべらしく、明けても暮れても、恐悦だのお目見得だのと、マア、是ばかりでもうるさくつてなるものぢやアない。これから見ると居候といふ者は、また身がふりいゝの。朝むつくりと起きると、寢卷の儘で楊枝を遣ひながら湯へいつて、歸りに床の鬢鏡で額際を直し、それから先きは寢ようが起きようが勝手次第。マア、第一

世話が少ない。これほどイキな事をやめにして、心を直せの、改めろのと、さりとは野暮なものぢやアないか。おぬしもちつとは小めくりでも打ち習つて、間の合ふ話をしたがよい。おれよりは、マア、おぬしの心を改めたがいゝ。

みよ　成程、殿さんの仰しやる通り、角のあるのが殿たちでもない。アノ、文字さんとやらも、たが見ても只は通さぬお若衆さん。折々廓へもお出でなさんして、女郎さん方に可愛がられて、ついどこぞは和らぐもの。アノ、實體な惣七さんさへ、こちの內の小女郎さんとは、女房になれ、ならう、といふ仲、幸ひまた此處に玉波さんといふ、年頃な、どうやら可愛らしいお方もあり、なんと相談する氣はないかえ。

巴之　成程、さう云へば先つきから、玉波太夫が味なそぶり、文字助だというて、萬更の黄八丈でもない。善は急げだ。おみよ、おぬしの計らひで幕を切りやれ〳〵。

みよ　それはわたしが合點なれども、どうも仕樣が、

ト巴之助に囁く。巴之助呑込んで。

巴之　コリヤ、文字助、近う參れ。

文字　ハツ、御用でござりまするかな。

巴之　用が無うて呼ぶものか。サテ〳〵、その方は不屆きな者ぢやな。

文字　エ。

ト驚く。

巴之　ナニ、驚く事があるものか。最前その方に申しつけたる用事、急ぎの儀を申しつけたに、今以て返事も致さぬは、出國致した巴之助を、今の身分と侮つての致し方。その分には差置かぬぞ。

文之　イヤ、その儀は最前。

巴之　默らう。返答するは某を侮つての事か。

文之　イヤ、全く以て。

巴之　イヤ〳〵、さうであらう。身が詞を用ひぬからは、今日から勘當ぢや。主從でないぞ。

文字　エヽ、ソリヤ又、あまりお情けない。たとへ如何やうな儀がござらうとも、お主人の仰付られ背きませうやうござりませねども、最前の儀は不慮の災難、遲刻致せしは幾重にも御高免下されませう。是より直ぐさま參上致し、御口上の趣き。

ト思ひ入れして、下座の方へ行かうとする。

巴之　文字助、待て。

文字　ハッ。
ト控へる。巴之助思ひ入れして、
巴之　左程その方が某が事を思ふならば、今日申しつくる
仔細があるが、何事によらず違背はあるまい。
文字　たとへ命を召さるゝとも。
巴之　しかと左様か。
文字　ハッ。
巴之　出來した。その方に申しつくる仔細は。
文字　その御用は。
巴之　抱いて寐ろ。
文字　エヽ、ソリヤ、誰をな。
巴之　外でもない、アノ、玉波を。
文字　エ。
巴之　なんと違背はあるまいがな。
文字　何御用かと存じましたれば、役にも立たぬ傾城事。
さうとは知らいでびつくり致しました。
みよ　何のびつくりさしやんす事があらう。先つきにから
玉波さんが、お前にどうぞ逢ひたいとて、殿さんへの壁
訴訟。大概お前も目顔でも知れさうなもの。仰山にびつ
くりせずと、玉波さんのたんのうさしやんすやうに、可
愛というて上げさんせいなア。
文字　こなたまでが同じやうに慰さんで。わしは生れつい
て女はきつい嫌ひ、そんな事をいうて下さんな。
巴之　コリヤ、文字助。スリヤ、その方は身がいふ事を用
ひぬか。
文字　ぢやと申して、是が。
巴之　そんならまことに勘當せうか。
文字　サア、それは。
巴之　抱いて寢るか。
文字　サア。
みよ　いやといはんすと、殿さまの御機嫌が損ねるぞえ。
文字　サア。
三人　サア／＼／＼／＼。
巴之　どうぢや。
文字　ヘイ。
ト思ひ入れ。合方。
巴之　フム、得心か。得心ならば今そこへやるぞ。おみよ
合點か。
みよ　サア、玉波さん。
ト突き遣る。このうち巴之助聞えぬ振をして居る。

玉波　エヽ、嬉しうござんす。〇申し、文字助さん。先つき此處へござんした時から、いとしらしいお方ぢやと、思ひ込んだわたしが因果。殿さんやおみよどのゝお蔭で、斯うお側へ寄つて、こちや大抵嬉しい事ぢやないけれど、今のやうにびつくりさせたはわたしが仕業。何事も堪忍して、可愛がつて下さんせえ。
文字　コレサ、其のやうに言はつしやつては、挨拶の仕樣がござりませぬ。もつとそつちへ寄らつしやりませ。
　　ト迷惑する思ひ入れ。
巴之　コレ〳〵、文字助。それはどうぢや、ちつと挨拶せい〳〵。
文字　どうもそれでは、なんと申してようござりませうやら。
巴之　ハテサテ、おぬしも色事には薄いものぢやな。コレ、斯ういやれ、それ程に思うて下さるは忝けないとさ。
文字　サア、それ程に思うて下さるは忝ない。
巴之　斯うなるからは、二世も三世も變るまいといやれ。
文字　どうも其のやうな事が。
巴之　またいふ事を聞かぬか。
　　ト文字助、巴之助思ひ入れ。
文字　二世も三世も變りますまいとさ。
玉波　エヽ、嬉うござんす。
文字　モウ、これでようござりますか。
巴之　まだ〳〵、これからが肝腎ぢや。仲人おみよ、床を納める工面ぢや。
みよ　合點でござんす。幸ひお宮の脇の水茶屋、月に叢雲、寸善尺魔、花に嵐の障らぬ間に。
巴之　ちやつと二人を連れて行きやれ。
みよ　サア〳〵、お二人ながら、是から堅めの床。
玉波　何から何まで殿さんのお蔭。
巴之　禮には及ばぬ。マア、行きやれ。
みよ　文字さん。ちやつとござんせいなア。
文字　それでも殿さまばかり置きましては。
巴之　ハテ、大事ない、行きやれ。
玉波　サア、ござんせいなア。
　　ト唄になり、玉波、文字助が手を取り、おみよ附いて下座へはいる。
巴之　ヤレ〳〵、骨を折らせ居つた。〇それはさうと、七右衞門はモウ來さうなものぢやが。

ト思ひ入れ、下座にて、

權兵　サア、來やれ〳〵。

トくすれの權兵衛、上げ壺の長藏、以前の形で出て來て巴之助を見つけ。

ヤア、わりやア巴之助ぢやアないか。よい所で出つくはしたなア。

巴之　權兵衛。長藏。仰山な、お主達は何の事だ。

權兵　コレヤイ、おらが親分の土場で切りを切つた百五十兩。それからこつちへ面出しもしないが、アリヤア、マア、どうするのだ〳〵。

長藏　大名だの、みのだのと、口先きばかり大束でも、僅か二朱の金も出來ないのか。とつくり子や椋鳥を相手にするとは違ふぞよ。こゝであつたが百年目だ。きり〳〵おいらに渡しやアがれ。

權兵　今日は是非々々取らにやア置かぬ、四の五のぬかしやアふんばいてから、恥を晒させるぞ。

長藏　片づけやれ〳〵。

巴之　コレ〳〵、おぬし達もそんなにぎみがま言ふ事はない。おれも今ぢやア大名の株を上げて、小松屋の惣七が部屋子になつて居るものだから、さう〳〵急に工面も出來ず、それにこの頃の工面の惡さといふものが、先度からとやについて、やう〳〵今日出掛けて來たは、その金の工面。ゆうべ城下の質屋七右衞門を頼んで、二百兩借りる約束で、質を下げて置いたが今に來ない。來さへしたなら直ぐに返す。ちつとのうち待つて吳りやれ〳〵。

權兵　長藏、聞いたか。うまい事をいふぢやアないか。おいらをばおびんづるだと思やアがるか。無上に撫で轉ばすが、われがやうな尻の輕いやつは、大名でも當てにならねい。隨德寺を食はされてはならねい。ちつとも待たれないぞ。いま片づけやれ〳〵。

長藏　そして二百兩が質だ。富の札なら知らず、居候の身でさういふ代物があるものだ。そんな甘い酢で行くやうな手合ぢやアないぞ。誰だと思やアがるえ。くすねの權に、上げ壺の長藏だぞ。邪が非でも取らにやアならねい。渡さないと盆莫蓙へ引つくるんで、精靈棚の引越しと一緒に博多沖へさらへ込むぞよ。

巴之　ハテ、聞き分けのない男だ。なんぼ小松屋の部屋子になつても元は大名。家に傳はる大切な品を、持つて出たこそ幸ひ、金子二百兩の約束で渡してやつたれば、モウ、今に持つて來るわいの。

トこのうち典膳後ろへ出掛り、樣子を立聞いて居る。

權兵　まだぬかしやがるか。そんな言譯は聞かない。まだまだとして居ようよりは、ナア、長藏。

長藏　いつその事にふん剝いでしまふべい。

ト巴之助を剝ぎにかゝる。典膳後ろより兩人を見事に投げ退け、

巴之　ヤア、貴さまは最前のお侍。

典膳　今承はれば、今川の御子息巴之助さま。

巴之　面目次第もござりませぬ。

ト後の方へ寄る。兩人痛がる思ひ入れ。

權兵　ア、、痛い〳〵。柔劍術で見知らせたな。

長藏　なんぼ投げても仕馴れた商賣。この位な事ぢやアいかない。

兩人　この返報に。

ト兩方より手を上げ、典膳を見て、

イヤア。

トびつくりする。

典膳　素町人めら。探題の御嫡子、今川巴之助樣へ慮外をなすと、二言と云はず打ち放すぞ。

權兵　コレヤイ、そんなに睨めるなえ〳〵。探題か難題か知らないが、貸したぞよ。〇ヲ、、纒まつた金を貸したのだ。

長藏　その金も返さねえで投げてもよいか。はふつても濟むかえ。これぢやア尙以つて、骨が舍利でも取らにやアならない。

權兵　サア、投げたは金を返す氣であらう。百五十兩返して貰はう。

兩人　サア、返しやれ〳〵。

ト典膳懷中より財布を出し、

典膳　ソレ。

ト投出す。取上げて、

兩人　コリヤ、お金。

典膳　樣子は知らねど金子づく。それ取つたなら、言分はあるまいがな。

巴之　イヤ、それでは。

典膳　ハテ、大事ござりませぬ。持合せましたこそ幸ひ、御用立てまする。ヤイ、わいらが催促するその金子、いはずと知れたわるずの金、詮議をなすは國の政道、其分には差置かれぬが、巴之助さまのお身の上を思ふゆゑ、その儘に差許す。きり〳〵持つて失せい。

權兵　ハイ〳〵、金さへ取れば言分はござりませぬ。
長藏　足もとの明るいうち、モウ、お暇申しませう。
ト財布を持つて兩人足早に下座へはいる。
巴之　思ひ懸けない貴殿のお情。忝う存じまする。
典膳　是は〳〵、何のお禮に及びませう。彼等ごときが何程の事あればとて、お大切のお身の上、些細な事にお心を痛められまするな。さりながら、只今後ろにて承はれば、お家の重寶、大切の品を質物にお預けなされたとの儀、愈々左樣でござりまするか。
巴之　聞かれた上は、お隱し申さうやうもござりませぬ。某が放埒ゆゑ出國するあまり、家の重寶ひそかに所持致したれど、寶は身のさしあい、この身になれば何かせんと、夜前萬屋七右衞門と申す質屋を賴み遣したれば、押つけ金子を持參致すでござらう。參り次第きつと返濟。急の爲めにそれまで一札を入れませうか。
典膳　イヤ、それには及びませぬ事ながら、斯やうに申すもお心ゆかせ。〇左樣ならば、一筆お書きなされて下されますか。
巴之　いかにも。
典膳　幸ひ拙者が。
ト懷中より矢立を出し、巴之助に渡す。巴之助鼻紙を出し證文を書く。
文言は拙者が好みませう。〇借用申す金子の事。一つ金百五十兩也。右は途中に於て難儀の處、貴殿の持合せとして立替へ下され忝く候。返濟心當ての儀は今川家傳來の重寶、貴殿方へ進じ申すべく候。
ト巴之助筆を止め、
巴之　イヤ、その品は質屋方へ遣はしたれば。
典膳　サア、そこでござる。只今拙者が立替へまして、濟まして遣はしましたれば、最早金子の御用もない。その町人が參り次第請戾し、その一品を拙者方へ預かりまする。大切の御重寶外々へ預けましては如何。それゆゑ斯やうに致しまするのさ。
巴之　いかさま、金子さへ相濟みなばいつなりとも。
典膳　きつと差上げまする一品。マ、、、證文をお認め下さりませ。
巴之　いかにも。
ト巴之助、また書く。
典膳　後日の爲め依つて件の如し。年號月日。岩倉典膳どのへ。今川巴之助。

ト巴之助、證文を書いて典膳に渡す。
是はほんの念の爲め、これで宜うござりまする。
ト向うにて、
庄や　サア／＼、ござれ／＼。
トてんつゝになり。庄屋、漁師四人、戸板に死骸を載せ、連れて出る。直ぐに皆々舞臺へ來る。
岩倉典膳さま。これにお出でなされまするか、珍事ちうよう、言語道斷が起りました。
典膳　早う樣子を申せ。何事だ／＼。
庄屋　その樣子は、この死骸でござりまする。
○今朝あさ船を乘り出さうとした所に、湊口にこの死骸がござりましてござりまする。
▲見ますれば破船の人でもなし、又身投げでもなし、むごたらしう殺しましてござりまする。
□早速濱手の番所へ訴へまして、死骸を改めの上、京都よりお出でなされましたる御目付役、典膳さまへもお屆け申せとござりまする故、これへ參りましてござりまする。
皆々　御檢分なされて下さりませ。
典膳　打捨て置かれぬ儀。先づ死骸を改め。

ト菰を取る。典膳改め見る。巴之助びつくりして、
巴之　ヤ、、、、コリヤ、ゆうべ約束した萬屋七右衞門が死骸。何者が手に懸けた。
典膳　何と仰せらるゝ。スリヤ、この死骸は萬屋七右衞門とな。
巴之　いかにも。
典膳　ハテナア。○コリヤ、漁師ども。死骸の樣子篤と改めた。評定致してくれう。神事の庭先き血潮の汚れ。早う歸れ／＼。
四人　ハア、畏まりました。
庄屋　左樣なら、お屆け申しましてござります。サア／＼、ござれ／＼。
ト死骸をつゝて向うへはいる。巴之助思ひ入れして、
巴之　ハテ、思ひも寄らぬ七右衞門が死骸。大切なる一品といゝ。コリヤ、マア、どういふ事であらう。
ト典膳思ひ入れして。
典膳　巴之助さま。氣の毒には存じまするが、只今の金子御返濟なされて下されい。
巴之　サア、その儀は。
典膳　ハテサテ、返濟の心當てと證文に書入れた一品、持

參致したる質屋の七右衞門が、只今の如く死人なれば、心當りの儀も詮ない事ぢやによつて、只今の金子は返濟なされい。

巴之　成程、御尤も、此のやうな事とは存ぜず、證文に書入れたは某が不念。さりながら此の心當てがなくとも、返濟致す右の金子。

典膳　それだによつて只今うけ取りませう。お返しなされい。

巴之　サア今というては。

典膳　出來ませぬか。

巴之　何ともはや。

典膳　ハヽヽヽ、色々な事を聞くわえ。誰あらう探題の惣領、今川巴之助ともあらうものが、僅な金ゆゑ素町人に手籠めにさせるが笑止さに、用立てた今の金、あてなしの高ふけり、何ともはやでは濟みますまい。ア、聞えた。コリヤ、今の兩人と談合して、この典膳を騙つたのだな。

巴之　待て。いはれざるその一言。何を以て騙りとは。

典膳　知るまいと思ふか、今の二人の町人は、博奕仲間の友達、家出して仕樣がなさに、仕組んで來た狂言か。但しはまた質屋から金を取り、跡からつけておつ殺し、その一品も引つたくつたのか。ヤレ／＼、おつかない根生だの。この典膳まで百五十兩騙られたわえ。イヤ、大騙りめ。

ト扇子にてくらはせる。

巴之　あまりといへば推參な。

ト無念の思ひ入れ。

典膳　推參もすさまじい。非常をたゞす典膳の役目、打捨て置かれぬ大盜人。引立て糺明する。失せう。

ト巴之助を引立て、花道へ掛ると辻打になり、花道より小松屋惣七、單羽織、小さき脇差一本差しの町人の形にて出て來り、

惣七　巴之助どの。

巴之　惣七かいの。

惣六　何事かは存じませぬが、お侍さま、マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

典膳　なんの待つ事はない。某が金子を騙り取つたる大盜人、引つ立てる所を、なぜ留めるのだ。

惣七　サア、いかやうな樣子かは存じませぬが、巴之助さまのお身の上につきましては、いかやうな事でもわたく

しお引請け御世話仕りますから、一通り承はりまして、筋道のたちますやうに計らひませう。マア〳〵、お腹立ちをおをさめなされて、あれへお越しなされて下されませい。

ト典膳、巴之助を引立て舞臺へ戻る。惣七跡よりついて來る。

典膳　來い。

惣七　思ひかけない此の場の樣子。巴之助さま、コリヤ、いかゞの事でござりまする。

典膳　その譯はおれが言つて聞かさう。身は京家の侍岩倉典膳といふもの。只今この所で金子百五十兩の儀につき、町人共にせこめられ、難儀いたすが氣の毒さに、持合せの金子を用立て、一旦難儀を救ひしは武士の情け、證文に書入れた一品といふも眞赤な僞はり、騙りと見たゆゑ、引立てるのだわやい。

惣七　成程、承はつた樣子が百五十兩の金子の事で難儀致されたとはこの方にも存じの儀。所をあなたさまがお立替下されましたとな。〇ようござります。つまる所は皆金づく。いかにもその金子は私がお返し申しませう。シテ、一札でもお取りなされましたかな。

典膳　さればよ。一札に書入れた一品を失うたといふが騙りの證據。

巴之　サア、それはそなたへもいうて遣つた通り、ゆうべ萬屋の七右衞門に。

惣七　サア、呑込みました。金子お返し申しませう。イヤ、お侍さま。借用致された金子さへ返濟致したならば、仰やり分はござりますまい。

典膳　いかにも、用立てた金子さへ受取れば、言分はない。

ト惣七、懷中の財布より百五十兩出し、典膳に渡し、

惣七　則ち是に金百五十兩。お改めなされてお受取りなさいまし。

ト典膳受取り改めて、

典膳　いかにも百五十兩、確かに受取つた。

惣七　左樣ならば、この方より入れ置きました一札をお返しなされい。

典膳　ソレ。

ト一札を出して惣七に渡す。

惣七　この證文に書入れしは、今川家傳來の一品とばかりござりまするが、お聞きなされて證文に書入れなされし

とは、大まかな儀でござりまするな。
典膳　エ。
惣六　今川の家に傳はる物を、證文に書入れさせて。京家のお侍さま。
典膳　なんと。
惣六　ハテ、御親切な儀でござりまする。
典膳　なんのかのと七面倒な詮索。情けで貸した百五十兩すでの事に騙られやうとした。とかく不案内な所で武士だてをするはきつい無駄だ。神事の始まるまで別當方で呑みかけべい。ヤイ、惣七とやら。
惣六　お侍さま。
典膳　縁があらば重ねて逢はう。
　　ト唄になり、典膳下座へはいる。合方。
巴之　惣七。よい所へよう來て呉れたなア。
惣七　巴之助さま。若殿さま。いかに御放埒なさればとて、あらう事かあるまい事か。大名の若殿さまが、下々の町人を相手にして博奕勝負。お惡いとは申しながら、お心に逆らふまいと是まで上げたる多くの金子。上げれば失くし〳〵、負けてお仕舞ひなされた揚句の果が出奔。御家老の荒川主膳さまは私の爲めには實の親、藏人どのは現在の兄弟なれども、襁褓のうちから志州の船頭五郎兵衛方へ養子となり、母の情け、お主の御恩で、この城下に町人となり、御用を利く小松屋惣七、兄藏人と申し合せ、お前さまの御介抱申し上げるも切めてもの御恩報じ。私どもが心底を少しは思召されませうならば、お心を改め下されませい。エヽ、お情けないお心ぢやなア。
巴之　サア、そなたの言やるは皆尤も。是まで心遣ひといひ、今日は百兩、明日は五十兩といふたび毎に、いやとも言はずに、貸してくりやるその金、つひ慰みに、たつた一晩に失くして仕舞ふもの。いかなそなたでも愛想が盡きるであらうと思へば、又斯うといふのも氣の毒、せめてそなたの工面しやるまでと思うて、菅家の御正筆を萬屋七右衛門に。
惣七　お渡しなされましたか。
　　ト　びつくりする。巴之助思ひ入れして。
巴之　イヤ、案じやんな。渡しはせぬ〳〵。
惣七　左樣ならようござりまする。私も昨夜のお手紙拜見致しますると、そのまゝお家の重寶人手へ渡してはなりませぬゆゑ、金子才覺致して參りました所が今の御難

儀。これ幸ひに渡しましてござりまするが、シテ、その一軸はござりますか。

巴之　サア、二百兩借る筈で、ゆうべ七右衞門に渡して遣つたが、今日その金を持つて來る約束であつた所が、今朝淺口で何者やら、その七右衞門を殺したとて、最前こゝへ死骸を持つて來たゆゑ、それで今のやうな難儀に逢うたのぢや。

惣七　スリヤ、七右衞門は人手にかゝつて。

巴之　一軸を渡して遣つたが、困つた事をしたわいのう。

ト困り切つたる思ひ入れ。惣七驚き、

惣七　ヤヽヽ、その一軸の事については、今宵京家の御用、中宮御産御祈りの爲、差上げよとの勅諚。無き時はお家の滅亡。ヲヽヽヽ、ホイ。

ト思ひ入れ。

巴之　なんぼ其のやうに思うても、行衞が知れねばせう事がない。かやうな事を思うては、命も根も續くものぢやない。幸ひ奧の水茶屋に、玉波太夫も來て居れば、奧へいて氣を晴さう。そなたも跡から來やれ。

惣七　ソリヤ、これ程の事を打捨てゝも。

巴之　ハテ、一勝負で埋めようわい。

ト唄になり、巴之助刀を擔いで下座に入る。

惣七　何をいうてもアノ放埒。御孃さまには生さぬ仲の義理を思召して、どうぞ心の直るやうに、この惣七風情に直々にお頼み、金輪際と思ふに甲斐ない今日のしだら、いかなる天魔が魅入りたるか。お家の浮沈か先祖の罰か。大名の若殿が博奕好きとは、何とした因果であらうぞ。

ト思ひ入れ

ヲヽ、さうぢや／＼。最前岩倉典膳が證文に書入れたといふその一品、御正筆に心を懸けるからは詮議の手懸り。○さりながら、今宵に詰まる京都の御用。ハテナア。

ト思案して居ると、唄になり、下座より文字助、玉波、おみよ、傳四郎出て。

文字　玉波さん。モウ、放して下されいのう。

玉波　これいなア。まだ話したい事があるわいなア。

ト惣七を見て、

文字　ヤア、惣七どのか。

惣七　文字助どのか。

玉波　惣七さん。なぜ此の頃はお出なさんせんぞいなア。

惣七　玉波太夫。おみよ坊。傳四郎も見えられたな。アア、これもまた、若殿がお呼びなされたか。

傳四　イエ〳〵、今日は都方のお侍の揚げて、玉波さんを連れて參りました。

惣七　シテ、文字助どのゝ一所に見えたは。

文字　サア、これはな。

みよ　惣七さん、ソリヤ、斯うぢやわいなア。

ト囁く。文字助迷惑の科。

惣七　さつきに此處で殿さまにお目にかゝつた時から、玉波さんが、それは〳〵きつい惚れやう。

玉波　殿さんに賴んで、文字さんと嬉しい逢瀨。

惣七　イヤア。

みよ　萬屋が軒端を暫し假枕、その別れ路でござんすわいなア。

惣七　ハテ、ソリヤ、素早い事の。

文字　面目次第もござりませぬ。

惣七　その面目次第は構はぬが、コレ。

ト囁く。

文字　エヽ。〇シテ、その樣子は〳〵。

惣七　マア〳〵、樣子は追つての事、若殿のお身の上が氣遣はしい。直ぐさま駕籠でお供の用意。

文字　心得ました。

傳四　なんぢややらそは〳〵とお二人の樣子。揚のお客の暇があいたら、早く廓へ歸るがよい。

惣七　ソレ〳〵、なにやかや話したい事もあるが、ちつと心懸りな事もあり、小女郎にもよく賴むぞや。

玉波　小女郎さんも待つてぢや程に、文字さん連れて來て下さんせ。

みよ　文字さん。惣さん。

惣七　傳四郎どん。氣をつけてござりませ。

ト唄になり、皆々向うへはいる。

文字　惣七さん。その樣子は。

惣七　コリヤ。

ト囁く。

文字　心得ました。早う〳〵。

ト早神樂になり、文字助急いで下座へはいる。惣七向うへはいる。典膳、權兵衞、長藏出て。

權長　岩倉さま。

典膳　豫て賴み置いたる兩人。最前の働き、出來した出來

した。

權兵　シテ、巴之助はいかゞなされましたな。

典膳　小松屋惣七が失せて、その場を濟まして、一旦は遁したれども、どう思つても生けて置いては始終の妨げ。歸りを待受け、兩人して。

長藏　物いはず打つ殺すに、手間ひまは要りませぬ。

權兵　殺した後は鱶の餌食、博多の沖へ水葬禮、跡腹病まぬ仕樣はさま〴〵。

兩人　お氣遣ひなされまするな。

典膳　出來した。この上の心懸りは彼の一軸、家中の奴等が手に入つては、彈正どのゝ望みの妨げ。この樣子を知らす爲め、某は是より直ぐに三笠繩手へ。兩人とも必らずぬかるな。

兩人　合點でござります。

ト暮六つの鐘鳴る。

典膳　最早暮六ツ。

兩人　ござりませい。

典膳　忍べ。

兩人　ハツ。

ト捨てがれになり、典膳走つて向うへはいる、忍び三重になり、下座より二人の駕籠かき四つ手駕籠を擔ぎ出て來る。この音にて權兵衞、長藏、小隱れする。後より文字助、駕籠について出て來る。權兵衞、長藏兩人に駕籠を中へ扶み。

兩人　動くな。

文字　合點の行かぬ。何者なればこの駕籠を留めるのだ。

權兵　知れた事だ。駕籠の內なは巴之助。生けて置いちやア邪魔になるゆゑ、ばらして仕舞へと、歸りをこゝにつけて居た。

長藏　支へ立てすりやうぬも共に、この世の暇くれにやアならぬ。巴之助めを引摺り出し、きり〳〵渡して行け。

文字　ハヽヽヽ、小賢しい野郎め。この文字助がお供した若旦那。わいらに渡してつまるものか。邪魔をすりやアうぬらが命がないぞ。きり〳〵そこを退くまいか。

權兵　面倒な。ソリヤ。

長藏　合點だや。

ト兩人、ちよつと立廻り、文字助兩人なねぢ上げ。

文字　こゝ構まずと、その駕籠を、小松まで早う〳〵。

駕舁　心得ました。

ト駕籠一散に向うへはいる。

兩人　その駕籠を遣つちやア。

ト跡追つ駈け行かうとする。文字助引戻し、早神樂になり、三人立廻りあつて、とゞ、よき見得になると、ちよん／＼のきつかけにて、この道具をぶん廻す。

本舞臺。三間の間、後ろ黒幕にて、正面一面の松並木、時の鐘にて道具納まる。

ト時の鐘に冠せて行列の合方になり、花道より、しがらみ、御殿模樣の着流し衣裳にて出る。是に奴一人、箱提灯を持出る。跡同じく奴一人、油單がけの挾箱を擔ぎ出て來る。しがらみ、花道の中程にて

しが　御勅使さまのお通りは、三笠繩手のこの道筋。アレ
アレ、確かにアノ提灯。

ト伸び上り見る思ひ入れ。

お目見得の用意しや。

奴兩　ハア。

ト舞臺に來て、挾箱より補襠を出し着る。矢張行列の合方にて、向うより對の箱提灯を、二人の奴持出る。跡より六尺四人、乘物を擔ぎ、是に△と○麻上下にてつき出る。跡より二人、挾箱と草履持出る。舞臺より

しがらみ出迎ひ、

しが　暫らくお乘物、お待ちなされて下されませい。

○　見れば武家方の女中、お乘物を何用あつてお留めなされた。

しが　イヤ、率爾ながら、御勅使さまと見受けまして、お願ひでござりまする。

△　いかにも當國の領主、今川家へお入りなさるゝ管領の御勅使、牟禮の一學さまだ。お願ひあらば御旅宿へお越しなされい。

しが　則ち、その今川家へお入りなさるゝ御用の儀につきまして、お目見得が致したう存じまする。

ト○乘物へ向ひ。

○　お聞きあられましたか。

ト乘物の内にて、

一學　聞いた／＼。乘物立てい、

侍　ハツ。

ト乘物を立てる。牟禮一學、長上下、大小にて居る。侍、乘物の戸を明け。

一學　今川家の屋形へ急ぐ折柄、途中に於て願ひとは。先づその方は何者ぢや。

しが　ハッ、私事は則ち今川の執權、荒川藏人が妻しがらみと申す者でござります。

一學　ナニ、藏人が妻女とな。シテ、この所まで出迎ひしは。

しが　主人今川家は、未だ家督も定まりませぬうち、禁庭の御用につき、菅家正筆の一軸差上ぐるやうにとの御勅使、遙々のお疲れをいとひまして、奥方より指圖を受け御旅宿へ持參致しまする道筋で、お乘物を見受けましたる故、憚りながらこの所で、一軸を差上げたうござりまする。

一學　このたび勅諚によつて、今川家より受取る菅家の一軸は、女院の御所に於て、若宮御誕生の御祈願に用ひる和護の墨蹟、大切なる一軸を差上ぐる御褒美として、今川家相續の者を侍從の位となし下さるゝ御綸旨、並びに黃金百枚を下し置かるゝ。

しが　是は〱有難い御意。この方の主人もさぞ悅びでござりませう。左樣ならば途中ながら此の一軸を、差上げたう存じまする。

ト挾箱より白木の箱を出し、三寶に載せ、一學が前へ持つて行く。一學取つて一軸をあけ、

まことに菅家の一軸、渡唐の神像。若宮誕生の守りにもなるべき御正筆。

ト恭々しく納めて、

黃金を是へ持て。

侍　ハア。

ト挾箱より白木の臺に載せ、持つて出て

侍從の位に叙せらるゝ御綸旨、頂戴致してよからう。

しが　ハア、有難うござりまする。

トこのうち、松の蔭より、都築監物、深編笠、野袴、羽織の形りにて出で、窺ひ居る。

尙も奥方より使者を以てお禮を申し上げませう。私は是より八幡宮へ直ぐに代參いたし、立ち歸つてこの樣子申し聞かせまするでござりませう。御勅使さまにはお心靜かに。

一學　その方も大儀〱。乘物立てい。

皆々　ハア。

ト向うにて、

主膳　御勅使さまには、暫らくお待ち下されませう。

ト大小の合方になり、向うより荒川主膳、上下衣裳、大小にて、三寶に袱紗を敷き、一軸の箱を載せ持つて

△ 出て來る。

主人一學を留め召された其許は何人ぢや。

主膳 只今あれにて見ますれば、御勅使には今川家より菅家の一輪を差上げし女に、任官の下されしその儀につき、申し上げたき仔細ござれば、暫らくお控へ下されませう。

一學 何にもせよ、仔細ありげな老人の願ひ。暫らく控へい。

皆々 ハア。

主膳 女中。其許は今川家の御家中とあるが、いづれの御内證でござるな。

しが ハイ、自らは荒川藏人が妻女しがらみと申しますわいなア。

主膳 スリヤ、お身が藏人の妻女とな。

しが 左樣でござりまする。

主膳 三寸繩にくゝし上げる。腕廻せ。

ト主膳、刀の下緒を取つて、繩捌きして、

しが エヽ。

トびつくりする。

主膳 こゝな大騙りめ。尋常に繩掛れ。

しが 申し〳〵、滅多な事を仰やりまするな。藏人が妻女しがらみを、なぜ騙りとは仰やりまするぞ。

主膳 ぬかすな、女め。今川の執權荒川藏人は、まだ無妻。女房はないわえ。

しが エヽ。

主膳 身は則ち藏人が親荒川主膳。最前より篤と樣子を聞いたれど、わざと控へて居つたが、高位に對ひ金子を騙る女の盜賊。同類を詮議する。繩かゝれ。

しが コリヤモウ、どうも。

ト逃げんとする。主膳引戻し。

主膳 動くな。

ト引きつける。このうち、しがらみが供の二人は逃げてはいる。一學つく〴〵と見て。

一學 ハテ、女に似合はぬ不敵の曲者。無官なれども勅使の役目。仰せを受けし年禮の一學。よう騙らうと致したな。

しが どうぞ、お免しなされて下さりまし。

主膳 おのれ、城下には見なれぬ奴。いづくより入り込んだ。眞つ直に白狀し居らう。

しが ハイ〳〵。イヤ、モウ、ふつとした出來心でござり

ます。お免しなされて下さりまし。

主膳　身動きひろぐと、ぶち放すぞ。

しが　ハイ〳〵。

主膳　家來、その箱これへ。

侍　ハッ。

ト一軸の箱を持つて來る。

主膳　今川家に傳はるまことの一軸。イザ、お受取り下さ
れませう。

ト一學の前へ持つて行く。一學兩方を見くらべ、

一學　成程、墨色筆勢の相違はあれど、文字の恰好、かほ
どまで似せも似せたり、ハテ、合點の行かぬ女ぢやな
ア。

主膳　おのれ一人の業でもあるまい。同類があらう。眞つ
直にぬかせ〳〵。

ト峯打にする。

しが　ア、申しまする〳〵。

主膳　サ、、きり〳〵ぬかせ〳〵。

しが　私はお國境に賃仕事を致して、親子暮らしまするで
ござりまする。一人の母の大病、人參を入れねばならぬ
と、醫者どのゝ言はれますけれども、永々の煩ひに家内
の道具も賣しろなしまして、人參の才覺になりました。
現在親を見殺しにする事かと、泣いてばつかり居りまし
たが、この一軸の事を承はりましたゆゑ、惡い事とは知
りながら、親への孝行ぢやと思うての騙り事、この身の
廻りも皆借物。ありやうに申しますからは、どうぞお免
しなされて下されませい。

ト泣き落す。一學思ひ入れして、

一學　大切なる品を似せ、騙り取らんとしたる不屆者なれ
ども、若宮御誕生の御祈願といひ、親に孝心の騙りとあ
れば、糺明に及ばず、免してよからう。

主膳　エ、、うぬ。助け置かれぬ奴なれども、御勅使のお
詞が重いゆゑ、免してくれるぞ。きり〳〵失せう。

ト突き放す。

しが　エ、、有難うござりまする。

トしを〳〵と足早に逃げてはいる。

一學　ナニ、主膳とやら。大切なる一軸途中に於て輕々し
く受取るゆゑ、かゝる禍ひ、某は是より八幡宮へ參詣な
し、直ぐさま濱屋敷へ立越えん。罷り歸つて用意いたさ
う。

主膳　ハッ。兎も角もお指圖次第に仕るでござりませう。

一學　主膳にも先づ歸宅致してよからう。
主膳　然らばお暇仕りませう。
ト合方になり、主膳、侍等、向うへはいろ。下座より
典膳、上下衣裳にて出て來る。
典膳　御勅使さまへ申し上げまする。京家の侍岩倉典膳
當國の領主今川家の濱屋敷へ相詰めまするやうにと仰渡
され し故、これまでお迎ひに罷り出ました。
一學　禁庭よりの御用につき、大切なる天滿宮の御正筆、
受取り渡しの場所なれば、參り合せし京家の侍、急ぎ濱
屋敷へ立越えてよからう。
典膳　委細畏まりました。
一學　乘物立てい。
皆々　ハア。
ト行列の合方になり、典膳下座へはいろ。直ぐに時の
鐘鳴ると、乘物の戸を明け、一學實は笹野才藏古き小
袖の形にて大小を差して出ろ。方々窺ひ、供廻りの侍
に囁く。皆々頷づき思ひ入れして向うへはいろ。一學
ほつと溜息を吐く。後ろより最前のしがらみ實は才藏
女房しがらみ、伺ひ出て、
しが　こちの人。

一學　女房ども。
しが　まんまと首尾よう。
一學　摺替へ取つた。
ト戴く。後ろより典膳出て窺ふ。上の方に都築監物、
以前の形りにて出て伺つて居る。
しが　一時も早う。
一學　おぢや。
ト兩人行かうとする。典膳後ろより、
典膳　樣子は聞いた。
ト立廻り、若い衆二人走り出て是を支へろ。一學脇差
をしがらみに渡し、二人してこの兩人を兩花道へ追つ
て行く。典膳行かうとする。
監物　岩倉典膳。
典膳　コリヤ、監物どの。
監物　コレ。○女に稀な今の働き。勅使といつたも騙りの
合點。今川の重寶を奪ひ取つたるは、家國に心を掛ける
家中の仕業か、但し又。
典膳　今川の爲めには現在の伯父御。大切な一軸を騙り取
られては、年來の望みも。
監物　サア、それこそよい手懸り。是を落度に申し立て、

主膳親子に切腹させる。勅使の目通り、貴殿も直ぐに濱屋敷へ。

典膳　彈正どの。

監物　コレサ、早う。

ト典膳向うへはいる。一學、典膳を除けて通し、そつと舞臺へ戻る。しがらみも東のあゆみより探り戻つて來る。彈正眞中に立つて居る。兩方より窺ひ寄つて小聲になり、

一學　女房ども。

しが　こちの人。

ト彈正、兩方へ突き退ける。直ぐに兩方より拔掛けんとする。彈正兩方を留める。振放し又切りつける。彈正、編笠を取つて前へ投げる。兩人兩方より考へ、編笠を彈正と思ひ、刀を刺し通す。思ひ入れ、びつくりして拵へる。彈正拔打に眞ん中へ切込む。是より立廻り少しあつて、彈正眞ン中に、兩人左右に別れ、三人一度に拔身を構へる。

トちよん〳〵〳〵〳〵〳〵ト　　ひやうし幕

四立目の切

黑崎の段
元船の段

役名━━岩倉典膳。笹野才藏。小松屋惣七。才藏女房松ケ枝。海賊玄海灘右衞門。手下梶右衞門。同沖右衞門。小松屋惣七。手下三藏。同權六。

本舞臺。三間の間、正面黑幕、下の柱は松の大樹、舞臺一面茂りたる蘆原。上の方に苫葺の小船つないであり。時の鐘にて幕明く。

ト花道より才藏、以前の形りにて、頰冠りして一本差して走り出る。跡より典膳、同じく着流し、一本差しの形りにて尻をからげ、跡より大勢の捕手ついて出る。直に舞臺へ來て、

典膳　ソレ。

捕手　動くな。

ト才藏を取卷く。

才藏　何やつなれば途中の狼藉。寄りやアがつたら撫切だぞ。

典膳　荒川主膳切腹といひ、合點の行かぬ藏人が計らひ。

うぬも確かに騙りの同類。生捕つて拷問する。覺悟なせ。
才藏　うぬらが手に合ふ笹野才藏ぢやアない。ならば手柄に搦めて見よ。
典膳　こまごといはずと腕廻せ。合點か。
皆々　腕廻せ。
才藏　小癪な。
皆々　どつこい。
ト留まると賑かなる誂の合方になり。花々しきタテあり、とゞ皆々を花道へ追つてはいると、東のあゆみより小松屋惣七、羽織、衣裳、着流しにて小提灯を提げ出て來る。花道よりは松が枝、引違つて出て來る。惣七、松が枝、舞臺にて行合ひ、
惣七　松ケ枝どのか。
松枝　惣七さんでござりますかえ。
惣七　委細の樣子は奥さまより、お文を持つて詳しうお知らせ。
松枝　そんなら、主膳さまの御切腹の事を。
惣七　親人は切腹、兄者人は改易と聞いて、取るものも取敢へず、お屋敷へと來る道筋。こなたはどこへ行くのぢや。
松枝　藏人さまのお指圖ゆゑ、伊勢路の方へ立越えまする。御正筆の在所を詮議の爲め、湊口まで船を頼みに參りましたのでござります。惣七さま。若殿さまはどう遊ばしましたぞいなア。
惣七　巴之助さまはたつた今、人をつけて御下屋敷へ遣り申したからは氣遣ひはない。さりながら兄者人は御浪人、親父さまの御最期さへ、逢ふ事ならぬ不孝者。おれが心を推量して下されいのう。
松枝　お道理でござりまする。併し藏人さまの御浪人は、一軸を御詮議の爲め、お指圖受けてわたしら女夫共、上方へ參りますれば、尋ね出さぬと申す事はござりますまい。
惣七　おやというて手懸りはなし。
松枝　イエ〳〵、詮議の心當りは、かの御正筆の威德には風波の難を凌ぐものゆゑ、異國渡海の海賊を捕へて湊々を詮議致せとお指圖でござります。
惣七　スリヤ、一軸を奪ひ取りしは異國渡海の海賊とな。
ト揚幕の内にて、ばた〳〵と人音する。
松枝　合點のいかぬ都築監物が家來、人目に掛からぬやう

に。
ト両人思ひ入れあつて、上の方の小船へ惣七を隠すと、花道より岩倉典膳走り出て、松が枝を見つけ
典膳　うなア、確かに騙りの女だ。よい所で見つけた。縄掛れ。
松枝　滅多な事をなされまするな。左樣なものぢやァござりませぬぞ。
典膳　ぬかすな。うぬが此處に失せるからは、まだ／＼外に。
トあたりを見て。
合點のいかぬアノ苫船。
松枝　滅多な事をなされまするな。
典膳　邪魔をひろぐと、うぬから先きへ。
ト立廻りいろ／＼ありて、典膳、もやひ綱を引張る。松が枝取りつき立廻りある所へ、向うより佐野才藏走り出て來る。
松枝　ヤア、よい所へこちの人、たつた今惣七さまが。
才藏　ナニ、惣七さまに逢ふたとか。
松枝　アイ、アノ苫船に。
典膳　その惣七めを。

ト船へ行かうとする。
才藏　何を。
ト引戻し、才藏もやひ綱を切ると、惣七、船の内より顔を出し、大きに慌てるこなし。このうち船は下座の方へ流れてはいる。
典膳　ヤイ、三才野郎め。詮議のあるアノ小松屋惣七、もやひ綱を切つてなぜ遁した。
才藏　さゝへこさいが面倒さに、切つて放したかゝり船、黒川の落合を湊口までたつた一時。
典膳　風に任せて荒海へ、吹流されたら底の藻屑。
松枝　思へばほんにあぶないアノ船。もしもの事があるまいか。
才藏　コリヤ、モウ、斯うしちやァ居られぬわえ。
ト行かうとする。
典膳　待て、野郎。うぬを逃がしてつまるものか。
才藏　邪魔をひろぐとぶつ放すぞ。
典膳　彈正どのゝ御前へ引く。失しやがれ。
才藏　面倒な。
ト振切る。立廻り。
松枝　そんなわたしが。

才蔵　早く行け。
松枝　合點ぢや。
典膳　うぬを遣つちやア。
　ト掛る。才蔵さゝへる。
松枝　それは。
才蔵　こゝ構はずと先きへ行け。
松枝　早うごんせや。
　ト三重になり、松が枝一散に向うへはいる。是より兩人抜合せ、立廻りありて、とゞ才蔵、典膳を殺す。と時の鐘になり、才蔵、典膳が死骸を荒海へ蹴込み刀を納める。思ひ入れ宜しく三重になり、向うへ一散に走りはいるを切つかけに、ちよん／＼／＼と、舞臺一面の波幕を引くと、雨車、大雷鳴、波の音激しくありて、誂への大薩摩の淨瑠璃、一くさりありて合方になると、この波幕をちよん／＼の切つかけにて引いて取る。
　本舞臺、一面の波。花道まで波幕になる。正面眞ん中に元船、これに苫を葺き並べあり、大薩摩淨瑠璃また一くさりあつて、この苫を取ると、玄海灘右衛門、誂への形りの上へ錦の掻巻を引懸け、煙草を呑んで居る。雨の音激しくあるべし。
灘右　ハテ　強い雷雨ぢやなア。ヲヽ、幸ひ／＼。今川家の重寶菅家の御正筆、風波の難を凌ぐと聞傳へしゆゑ、多年心懸け、やう／＼手に入れしが、試めし見るのは今この時。
　ト懐中より一軸を出し、開くと忽ち雷雨の音止む。灘右衛門思ひ入れあつて。
ハテ、爭はれぬ。この一軸を開くや否、忽ち海上穏かに雷雨の止みしはまことに神德のしるし、エヽ。
　ト思ひ入れ。花道の切り穴より梶右衛門、まつ裸にて菰を冠り、泳いで舞臺へ。上の方の切穴より沖右衛門、同じく裸にて泳いで元船の側へ來る。
兩人　親方々々。
灘右　今戻つたか。
　ト小べりにたぐりつき、船へ乘り、
梶右　るい船につきの廻らぬうち、汐水を呑んで岡から此處まで
沖右　しけを幸ひへいかしを纒つて、お餘りといふ身で流れて來ました。

ト言ひ〳〵身體を拭き、大嶋の布子を着る。
灘右　シテ、瀬戸内の便りはどうだ。
梶右　幸ひ今夜の雨風で。
沖右　仕事は確り出來ましたらう。
灘右　荷づもりが濟んだら、直ぐに下の關へ。
沖右　帆綱もつけて碇も上げて置きました。
梶右　吹き込んだ東風日和。出汐からは西になるでごんせう。
灘右　確り積んだ船の脚、登りになつたら直ぐに大金。
沖右　ソレ〳〵、頭、祝ひに一つ呑みませうか。
梶右　ちつとは祝つてもいゝのさ。
灘右　草臥れ休めに燗を附けろ。
梶右　合點でごんす〳〵。
ト棚の間より、ふらそこ、こつぷ、鉢、肴を持つて出る。又雨風の音する。船は酒盛りになる。ト花道より惣七、以前の船に搖られ〳〵、短かき竹を持つて出る。だん〳〵花道にかゝり、中程にて船とまる。
惣七　さても〳〵、大きな雷鳴であつた。やう〳〵雨が上つたか。どこぞへ吹きつけられたいものだ。
ト元船を見つけ、

ヤア、よい處へ親船がかゝつて居るわえ。どうぞ、あの船へ乘せて貰ひたいものぢや。
ト　だん〳〵舞臺へ流れ寄る。
申し〳〵、お頼み申しまする。
梶沖　誰だ〳〵。
惣七　ちつとお頼み申したうござりまする。
梶右　頼みたいとは何でごんす。
惣七　わたくし、出船に遲れました者でござります。どうぞ便船を貰ひ申したうござります。
梶右　モシ、氣の毒な事ながら、この船は人を乘せるのぢやアない。
沖右　いつ出さうも知れない船だ、人を乘せる事はならねい〳〵。
惣七　どうぞさう仰しやらずと、お乘せなされて下さりませ。
梶右　そしてマア、どこまで乘るのでごんす。
惣七　ハイ、どこと申して行先きはござりませぬ。
梶右　ハテ、滅法界な事をいふ男だ。
惣七　ハイ、成程、私は。
兩人　どこへござる〳〵。

惣七　サア、私はちと詮議があつて上方へ。
兩人　なんだ詮議がある。
惣七　イエサ、ちと詮議に合はぬうち、急に參りたうござりまする。私はちつと色事の仕落で、親方の金を引負ひして、その詮議に逢ひまするゆゑ、上方へ駈落ちするのでござりまする。
灘右　ハテ、よい／＼、色事のしくじりなら高の知れた事。さぞ雨風で難儀であらう。早く乘せて遣れ／＼。
惣七　ハイ／＼、それは有難うござりまする。
沖右　親方の呑込みなら、サア、乘らつしやい／＼。
惣七　ハイ／＼。
梶右　ハテ、仕合せな男だ。
ト船の内より梯子を出し、惣七が乘つて居る小船へかけると、惣七梯子を登り、元船へ乘る。惣七は船に醉ふたるこなし、兩人介抱する。
灘右　サア／＼、是へござい／＼。
惣七　ハイ／＼。
灘右　モウ、こはい事はない。喩へにさへ、親船に乘つたと思へといふぢやアないか。こはい事も恐ろしい事もない。落着いてござい／＼。

惣七　ハイ／＼、有難うござりまする。
沖右　見やれ。成程色事ぢやアかぶりさうな恰好ぢや。ほんに面ざしが門之助といふ男だ。
惣七　これは何かは存じませぬが、いかいお世話でござります。
灘右　サア／＼、こつちへ寄らつしやい／＼、どうで一つ船に乘るからは、皆も隨分心易く話したがよい／＼。
梶沖　サア／＼、ろく（樂）にござい／＼。
惣七　ハイ／＼、私はこれが勝手でござりまする。
梶沖　ハテ、遠慮せずと、ろくにござれな。
惣七　ハイ／＼。
灘右　アレ、見ろ。商人といふものは、おいらと違つて行儀なものだ。割り膝に三ツ指。時にこなさんの色事とは大方柳町での事でごんせうの。
沖右　頭の推量の通り。入る菱屋の玉の井か、紅葉屋の浮霜でごんせうの。
惣七　ハテ、よく御存じでござりまするの。
梶右　但し、角丸の幾千代か。よし本の染千代ぢやアごんせぬか。
惣七　これは詳しい事でござりまするな。

灘右　船がかゝつて居るうちは、若い者どもが憂さ晴らし、満更知らぬのでもごんせん。サア〳〵、色事の話が聞きたい〳〵。

惣七　それだと申して、どうまあ。

ト嫌がる思ひ入れ。

梶沖　大事ない。話さつしやい〳〵。

惣七　どうも、これは御免なされい。どうしてまあ。

灘右　ハテ、大事ない〳〵。

惣七　そんなら私が馴染を、お話し申しませう。

三人　こいつはよからう〳〵。

惣七　マア、お聞きなされませ。私がその柳町を通りました所が、女郎が一人茶屋に腰を掛けて、〇斯ういふ身で煙草を呑んで居りましたが、私をどうか味な眼で見るやうでござりますから、私も向うの茶屋へ寄つて、そいつを張つて居りましたら、お聞きなされませ、禿に文を持せて寄こしました。

灘右　まだ近づきでもない女郎が。

惣七　左様さ。今夜身上りをして居るから、來いというて參りました。

灘右　ソリヤア、嘘だ〳〵。近づきでもない女郎が身上りをするとは。

三人　嘘だ〳〵。

惣七　イエサ、ほんの事さ。それからその女郎屋へ參りましたら、座敷が三間、腰ばりは紺の色にて鯉の瀧登りを金泥で描きましたが、みんな生きて居るやうさ。

ト灘右衛門考へて、

灘右　成程、アノ、鯉はよく描いた。アリヤア、唐繪の寫しだ。沖右衛門。アノ鯉は餘つ程よく描いたなア。

惣七　それから見た所が、座敷に屏風が立つてあるから覗いて見たれば、奥の方にその女郎が煙草を呑んで、つんとして居やした。

灘右　それからどうした〳〵。

惣七　わたしを見たけれども、何とも言ひやせん。

三人　なぜ物を言はぬか。

惣七　わたしもあんまりつきが無さに、只今參りやしたと言つたら、ようお出でなさんしたとばかりさ。

灘右　ハテナ。

惣七　さういふ事だから滅多な話もならず、仕方なさに方方見渡した所が、床、違ひ棚に歌書などがあり、掛物も唐繪が掛けてござりやしたが、その脇に〇この位な太さ

で、○この位な高さの枝珊瑚樹がござりやした。

ト仕方で話す。

灘右　成程、あの珊瑚樹は誰が見ても膽を潰すよ。

惣七　わたしが勘定した所が、三百三十三ござりました。

灘右　あんなやつは、モウ、無いなア。

梶右　それさ。あいつは珍らしいもんでござりやす。

惣七　それからわたしが褒めやしたら、その女郎が言ふ事にやア、お前、氣に入つたかえと言ひやしたから、アイと言つたら、お前に上げやせうと言ひやした。

灘右　なぜ遣らうと言つたの。

ト不審を打つ。

惣七　貰やア貰つたが、仕方がないから油箪を借りて包みやした。それでも何とも言はないから、いつそ珊瑚樹を貰つたのを得にして歸らうと思つて、ずつと立つたら、わたしが裾を取つて。

ト梶右衛門をとらへ、いやらしき思ひ入れ。梶右衛門困つたる思ひ入れ。

待たしやんせとわたしを引つとらへ、膝の上へ抱きやした。それからわたしも抱きついて、組んづほぐれつ大騒ぎ。

灘右　シテ、その女郎屋は何屋だ。

惣七　福岡屋でござります。

ト灘右衛門、少しせいて、

灘右　何だ、福岡屋だ。シテ、その女郎の名は何といふ、何といふ。

惣七　女郎は言はずと知れて居りまする。

梶沖　誰だよ〱。

惣七　ハテ、柳町一番の全盛の女郎さ。

灘右　それぢやア知れねえ。名は何といふ。言つて聞かせろ〱。

惣七　大概知れたものでござりまする。

三人　名を言やれ〱。

惣七　ハテ、博多一番の全盛、福岡屋の小女郎でござります。

梶沖　ヤア。

トびつくりする。

灘右　何だ、小女郎だ。

ト灘右衛門むつとする。惣七なんの氣もつかず。

惣七　左様でござります。その小女郎が毎晩々々身上りで私を呼びに寄こしまして、參ると直ぐに。

灘右　やかましいわえ〳〵。
惣七　これからが肝腎でござります。
灘右　聞きたくない。置け、置きやアがれ。
惣七　それでも色事の話をしろと、仰やつたぢやアござりませぬか。
灘右　聞きたくない。胸が悪い。この船に乘せる事はならねえ。コレ、エヽ、こいつをどこぞへはふり上げて仕舞へ。
沖右　申し、頭。そんなに言ふ事はごんしない。ハテ、こなさんの恩はくの小女郎が話が胸が悪くば、この船に乘せてこそ幸ひ。ナア、梶右衞門。
　ト海へ投げ込まうと仕方でする。
梶右　ソレ〳〵、どこぞ小深い處へ便船をやるがようごんす。
灘右　そんなら、わいらに任せたぞ。
沖右　ハテ。ようごんす。呑込んで居ますよ。
灘右　エヽ、忌々しいしやつつらだ。
惣七　それは又、きついお腹立ちでござりまするな。
梶右　コレサ、何も氣に掛ける事はごんせん。あんなに腹を立つても跡がごんしない。

沖右　しかし、それでも顔と顔とを突き合せても、氣が置かれて悪からう。どこへぞ置いて進ぜたいものだが。
梶右　表の間には荷が多し。
沖右　胴の間には狹からうし。〇ヲヽ、よい所がある。上げ板の下へ置いてやらう。
惣七　ハイ〳〵、どこでもようござります。
　ト板子をあけて、
梶沖　マア〳〵、此處へはいつてござれ〳〵。
　ト惣七、捨てぜりふにて板子の下へはいる。又波の音して、下座より、三藏、權六、苫を葺きたるちやん塗の小船を元船の側へ漕ぎ寄せ、櫂にて叩く。
灘右　三藏、權六か。
三權　お頭。
灘右　首尾は。
三藏　金と引替へに荷物を受取り、またこのたびの船切手まで受取つて來ました。
灘右　シテ、船のつきは。
權六　しけを幸ひ乘込みました。
灘右　出來した。荷物を上げてくれ。
沖右　手形に合はして受取るがようごんす。

灘右　銀子七こり、繻子五十本。
　ト皆々捨てぜりふにて船へ積込む。
虎の皮百五十枚、人參三箱で六十斤、枝珊瑚樹八十本、
鮫二かうり、羅紗五十本、猩々緋百枚、どうだ荷數は揃
つたか。
三樞　注文の通り違ひございませぬ。
灘右　首尾よく積んだ代りに、一つ呑め／＼。
三樞　ドレ、一杯呑むべいか。
　トこのうち惣七そつと覗いて見て、
惣七　スリヤ、この船は。
　トびつくりする。灘右衞門きつと思ひ入れ。
灘右　コレ、若いの。此處へ／＼。
惣七　ハイ、何ぞ御用でござりまするか。
灘右　なんぞ見たか。
惣七　イヽエ。
灘右　ハテ、何事もこはい事はない。見たなら見たと言つ
たがよい。
惣七　ハイ、
　ト思ひ入れ。
何やらいかい事の荷物。

沖右　それを見たなら免されない。
　ト皆々櫂を振上げる。
惣七　アヽ、モシ／＼。便船致した私を、何科あつて。
梶右　荷物を見たによつて。
沖右　生けちやア置かれぬ。
惣七　スリヤ、どうあつても。
灘右　引負ひろいだ駈落者。大事の船へ乘せられねえ。
惣七　スリヤ、大事な荷物ぢやによつて。
四人　生けちや置かれぬ。
惣七　そんならどうでも。
四人　ぶち殺して仕舞ふわ。
惣七　るい船なき此の船に、夜中積んだは殘らず唐物。ス
リヤ、この船は長崎通路の海賊に極はまつた。
灘右　片づけて仕舞へ。
四人　合點でごんす。
　ト四人にて惣七を叩く。惣七悶絶する。
脆い奴だ。モウ、くたばつた。
灘右　太い奴だ。空死をして居やアがる。そんな手を食ふ
ものか。
　ト足にて息づかへを考へ。

とう／＼くたばつた。なんだ忌々しい面ぢやアないか。
海へ叩き込め。
四人　合點だ。
　ト皆々寄つて惣七を海へ打込み、
灘右　可哀や／＼、とう／＼鱶の餌食。
沖右　餘つ程、骨を折らし居つた。
梶右　しかし、あいつを斯うして仕舞へば。
灘右　跡腹病まぬ小女郎は女房。
三權　めでたく一つしめやせう。
皆々　しやん／＼／＼。
灘右　シイ。
　ちよん／＼／＼／＼／＼と。　拍子幕
　ト波幕を引く。花道の切穴より惣七、心づいてびつしよりになり浮び上る。これを一所に以前の船、花道へ流れて來る。惣七思はずこの船へ乘り、
惣七　流れ寄つたるこの船は、天の助けか、エヽ、忝ない。
　ト櫓を押て逸散に向うへはいる。

五　立　目

博多揚屋の段
引返し鐵砲の段

役名――傾城玉波。同波の戸。同繁浦。仲居おみよ。同おさん。座頭德市。禿なぎさ。亭主傳四郎。小松屋惣七。傾城小女郎。海賊玄海灘右衞門。手下三藏。同權六。同沖右衞門。同梶右衞門。龍田五郎。荒川藏人。

本舞臺。三間の間、一面の惣二階造り、塗骨の障子を立て、前に勾欄つきの緣側。下、座敷。正面赤壁、納戸口に暖簾を掛け、門口据ゑ物、これに奥田屋と書いたる行燈を懸け、西の方、羅漢へ掛け隣の二階、これに伊豫簾を懸け、入口に倉田屋と書いたる行燈を懸けてあり。すべて博多女郎屋の體。幕の内より此處に傾城玉波、波の戸、繁浦、仲居おみよ、同おさん、下の方に德市、幇間の座頭の形にて、三味線を彈いて居る。禿なぎさ、踊りを踊つて居る。賑かなる所作の切れにて幕明く。

皆々　徳市さん。置かしやんせいなア。
徳市　何が可笑しうて其のやうに笑ふのぢや。
皆々　これが可笑しうならうてわいなア。
　ト笑ふ。
徳市　なぜ〳〵。
皆々　今の彈きやうはなんぢやぞいなア。
渚　あのやうな彈きやうで踊られるものかいなア。
徳市　なんの小癪な。サア〳〵、踊つた〳〵〳〵。
渚　イエ〳〵、お前のやうなうろ覺えな三味線で、覺えた所も違ふやうで踊られぬわいなア。
徳市　エヽ、ほんによく口を聞くぞ。なんぞにかづけて遊ばうと思つて。そんな事で晩の踊が出來るか。サア〳〵、もう一遍遣つて見た〳〵。
繁浦　ほんに徳市さん。其のやうに彈かうより、三味線に繩をつけて彈かしやんせ。
さん　お前に似合うたやうに、跛でも彈かしやんせ。
徳市　ナニ、跛をえ。アイ、彈きやせう。なんぼ目が見えぬと云うても、どこの國に弟子の方から、師匠を虐めると云ふ事があるものか、あた忌々しい。
　ト煙管で疊を叩き、腹を立つ。

皆々　モウ、よいわいなア〳〵。
徳市　あんまりでござります。一體太夫さん方が叱つては下さらいで、笑つてばかりお出でなされるから、新造、禿はじめ馬鹿にさつしやる上に、手が廻らないというてぢやが、この大勢をわし一人で彈くのぢやもの、ちつとは手の廻らぬ事もありうち。江戸の芝居では、一人か二人で踊るにも、唄も三味線も大勢かゝりますわいのう。
波戸　成程、さう聞けばお前のが尤もぢやわいのう。したが今の彈きやうでは、みんなが嫌がるも尤もぢやわいのう。
徳市　そりやアなぜでござります。
みよ　なぜといふ事があるものかいなア。夕べの座敷で酒が過ぎたやら、お前、居眠りばつかりして居さんすから、みんなが嫌がつてぢや。弟子廻りする氣なら、ちつと座敷も切上げて、酒も控へたがよいわいなア。
玉波　お前の言はんす事は、なんぢややらしやうが分らぬわいなア。夜晝精出してお客の座敷を勤めたり、稽古しようとしたり、いかい御苦勞な事ぢやわいなア。
波戸　いつそお前の名を替へさんせいなア。
徳市　なんと替へませう。

波戸　徳市さんをやめにして。
徳市　徳市をやめにして。
波戸　徳市さんと替へさんせ。
さん　コリヤア。よい名ぢや。夜晝稼ぐは。
皆々　徳市さん〳〵。
　ト手を叩いて囃す。
徳市　お前方までがわしを馬鹿になさるゝか。とらまへる
と只は置きませぬぞ。ドリヤ。
　ト大手を擴げて、
皆々　手の鳴る方へ〳〵。
　トこれより胸どりの合ひ方になり、手拍子にて逃げる。
これを徳市探り廻つて追駈ける。奥より亭主傳四郎、
出て來る。徳市、傳四郎を捕へ、
徳市　サア〳〵、つかまへた〳〵。今まで馬鹿にされた腹
癒せに斯う〳〵。
　ト酷く小突く。
傳四　オヽ、痛い〳〵。徳市、どうする〳〵。
徳市　さういふ聲は旦那ぢやアないか。
さん　旦那さんぢやわいなア。
　ト徳市、傳四郎を撫廻し

徳市　コリヤ、粗相いたしました。御免〳〵。
傳四　われは目も見えぬくせに、何を騒ぐのだ。
徳市　マア、聞いて下さりませ。晩の踊をさらつて遣らう
と思つて、新造衆や子供を呼んで、さらうて遣れば、イ
ヤ、間が惡いの何のと、太夫さん方を始め、私をなぶつ
てゞござります。それだによつて、よい事にして弟子の
方から師匠にこみづをついて稽古致しませぬ。
傳四　それはみんなが惡い。弟子が師匠を馬鹿にするとい
ふ事があるものか。徳市、おれが詫ぢや、堪忍しや〳〵。
徳市　イエ〳〵、斯う言ひ出しては旦那でもどなたでも聞
きませぬ。稽古致しませぬ。
傳四　それだといつて、このごろ中、骨を折つて稽古した
踊狂言、今日になつておぬしが腹を立つては、晩の狂
言は出來ぬといふものだ。
徳市　ちつとさうもあるまい。
　ト傳四郎道理をつけると、徳市膝に乗り、
傳四　モウ、おしつけ惣揚げの大盡さまがお出でゞあらう。
サア、機嫌直しに酒にしよう〳〵。おぬしも一つ呑め呑
め。
徳市　イエ〳〵、酒は食べませぬ〳〵。

傳四　さうすねる事があるものか。日ごろ身に替へても呑みたがるものが、食べませんも凄まじい。

さん　その筈でございます。さつきに太夫さん方に、酒の事を言はれさんしたから、それでの事でござんせう。

傳四　ハア、それでは酒でしくじりがあつたと見えたゆゑ。

波戸　さつきに稽古しながら居眠つてばつかり、思ひ出したやうにおりおり目を覺まして三味線を彈いてぢや故、座敷でさゝが過ぎるといふたれば、腹立てゝぢやわいなア。

みよ　座敷を勤むる者が、あのやうに不粹で濟むものかいなア。

玉波　わたしの座敷へは徳さんは御免ぢやぞえ。

波戸　それいなア、ひよつと客人の言ふ事を氣にとめては迷惑ぢやわいなア。

玉波　ソレソレ、お前方もさう思うてなら、幸ひこゝに奧田屋のお亭さんも居てぢや程に、二階をとめて貰ふたがよいわいのう。

徳市　エヽ。

さん　いかさま、お前方の氣に入らぬ太鼓は、不自由らしい。呼ぶ事はございませぬ。いくらもある太鼓、どれなとお呼びなされませ。

徳市　アヽ、モシモシ。そりやア惡い相談。私は自體、氣の長いものでございます。

傳四　イヤイヤ、おれが挨拶さへ腹を立つて聞かぬ徳市、モウモウ、こちに用はない。三味線仕舞うて歸つたがよいよい。

徳市　モシモシ、今のやうに申したのは嘘でございます。

傳四　今のやうに腹を立つたは嘘か。

徳市　左樣でございます。アハヽヽヽヽ。

ト無上に輕薄笑ひをする。

皆々　そんなら、どのやうになぶられても。

徳市　なんのお前方に嘘を申しませう。それでも心元ないと思し召さば、マア、ナア、頭をはつて御覽じませ。

傳四　その氣なら、モウ、了簡して遣つたがよい。

徳市　ヘヽヽヽ、奧田屋の旦那も、アヽ仰しやてゞござりますから、どうぞ御了簡なされて、稽古なされて下さりませ。

波戸　皆さん。聞かしやんしたか。アノやうにあやまつてぢやわいなア。堪忍して習うて遣つたがよいわいなア。

紫浦　波の戸さんも、アノやうに言うておや。堪忍して習うて遣らうわいなア。

德市　ハイ〳〵、有り難うございます。又もや御意の變らぬうち。

ト方々探り、

そこらに三味線はございませぬか。

さん　こりやア、斯うするがよいわいなア。モウ、大盡さまのお出でに間もあるまい程に、稽古は奥の十二疊がよからうわいなア。

傳四　それがよい〳〵。

さん　そんなら德市さん。わたしと一所にござんせいなア。

ト手を取る。

德市　コリヤア、德市に御案内とは、まことに盲目で候へける。

ト萬歳を踊る。

傳四　どうも言へない〳〵。

さん　サア〳〵、皆さん。奥へお出でなさんせいなア。

ト唄になり、皆々捨てぜりふにて奥へはいる。直ぐにこの唄を借りて向うより、惣七、着流し、小袖の形にて編笠をかぶり、みすぼらしく出て來る。この途端に奥より、

渚　アイ〳〵。

トなぎさ出て、向うへ行かうとして、惣七に行違ひ、花道へかゝる。

惣七　コリヤ、なぎさ〳〵。

渚　誰ぢや〳〵。

ト顔を覗いて

惣七　コリヤ、大きな聲ぢや。〇シテ、小女郎は此處へ來て居るか。

渚　アイ、奥にぢやわいなア。

惣七　大かた客があるであらうな。

渚　アイ、晩の狂言の稽古しておやわいなア。

惣七　そんなら側に大勢居るであらうな。

渚　波の戸さんも、しげ浦さんも、囃方の衆も來てぢやわいなア。

惣七　それでは今は會はれまい。ドリヤ〳〵、歸りませう歸りませう。

渚　コレ、待たしやんせ。太夫さんは夢見が悪いというて、お前の事を案じてぢや程に、顔を見せて落着かせて

あげさんせいなア。
惣七　そんなら太夫は夢見が惡いというて、おれが事を案じて居たか。
渚　一寸呼出してあげやう程に、待つて居さんせえ。
惣七　ほんに馴染みとて、しをらしい事をよう言うてくれた。そんならどうぞ、鳥渡呼出してくれまいか。
渚　アイ〳〵、待つて居さんせえ。
惣七　必ずおれとは言はずに。
渚　アイ〳〵、合點でござんす。
トなぎさ、走つて奥へはいる。惣七そろ〳〵と門口へ來て、
惣七　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。ドリヤ、待たうか。
ト唄になり、奥より小女郎、しごき、打かけ衣裳、傾城の形にて出で來り、あたりを見廻し、そつと門口をあけて、
小女　惣七さん。
惣七　小女郎。
小女　逢ひたかつた〳〵〳〵わいなア。
ト抱きついて泣く。惣七抱きしめ、
惣七　オヽ、尤もぢや、道理ぢや。このごろ中から鳥渡逢つて話さねばならぬ事があれど、何をいうてもこの風體。
小女　ほんにマア、なぜに此のやうな姿にならしやんしたぞいなア。
惣七　サア、是につけても思ひ出せば、いふにいはれぬ身の難儀。神佛の控へ綱でまだも命のあるのが不思議といふ譯は。
ト奥にて、
德市　太夫さん。小女郎さん〳〵〳〵。
ト呼ぶ。
惣七　アレ〳〵、誰れやらそなたを呼ぶぞや。
小女　大事ないわいなア。
德市　太夫さん〳〵。
ト呼びながら、鬢鬘をかけて探り〳〵出る。
モシ〳〵、太夫さん、わたしが鬘が出來やした。サアサア、稽古一遍やつておくんなんし。
小女　アイ〳〵、わたしやよう覺えて居るによつて、讀んでなりとやつておくれ。
德市　サア、お前が覺えてゞあらうが、わたしがねつから覺えやせぬから、鳥渡お出で〳〵。

小女　それでも、わたしはちつと此處に。

德市　なんだ、ちつと此處に。〇ハ、ア誰か居るさうな。

ト聞耳を立て、

ヤア、こいつは誰か居るわえ。エ、、コリヤア、ちよんの間だな〳〵。

小女　そんな事ぢやアないわいなア。

德市　そんな事でなくて何んな事だ。

小女　サア、こゝへ來て居さんすは、わたしが父さまぢやわいなア。

德市　ヤレ〳〵、さうとは知らないで、わたしとした事が、ちよんの間のなんのと、とんだ差合ひを申しやした。サア〳〵、そんなら內へ入れ申して、ゆるりとお話しなされませ。

小女　アイ〳〵、わたしが父さんがちつと用があつて。

ト內へ入れようとする。

德市　コレ〳〵、滅相な。

小女　ハテ、大事ないわいなア。

德市　ハテ、お前が遠慮深い。外のお方ではなし、どこへなりとお連れ申して、御馳走なされませ。

ト惣七、花道へ逃げようとする。

小女　ア、コレ〳〵、だんないわいなア。

ト目へ思ひ入れする。

惣七　そんなら見えないか。そりやア有難い。

德市　ナニ、見えない。そりやア誰だい。

小女　サア、父さんが。アイ、わたしが父さんも、目が不自由ぢやわいなア。

德市　お前のおとつさんも目が不自由かえ。そりやアわたしとねぶ一丁だ。サア〳〵、こちらへお通りなされませ〳〵。

ト探り〳〵惣七が手を取り、內へ入れる。惣七落着いたる思ひ入れ。

惣七　左樣なら免さつしやれて下さりませ。

ト親仁のせりふを言ひながら、內へはいり、眞ん中にアグラをかいて坐る。小女郞、煙草盆を持つて來て惣七が側へ坐る。德市上の方へ律義に畏まり、

德市　ヤレ〳〵、お年寄のお目が御不自由なに、ようお出でなされました。私は小女郞さまには取分けてお世話になりまするものでござりまする。サア〳〵、御遠慮なしにおくつろぎなされませ。

惣七　イヤ、モウ、構うて下されますな。わしがには是が

勝手でござります。

ト徳市が鼻の先きへ足を投出して居る。

徳市　ハテ、お草臥れなされましたらうに、其のやうに遠慮なされずとも、おくつろぎなされませ。

惣七　□□其やうにいたいけに仰しやつて下されまする□□年寄りましては、子が懐かしくつて／＼、逢ひたくつて逢ひたくつて／＼／＼、恥かしい事、恐い事も打忘れて、

ト小女郎に濡模様あつて、

それでわざ／＼、参りましてござりまする。

ト親仁のせりふをいふ。小女郎、惣七の髪を撫でつける。

徳市　さうでござりませう。今晩は是にお泊りなされて、御休息なされませ。しかも晩には踊もござります。幸ひぢや、御見物なされてお歸りなされませ。

惣七　ハイ／＼、それは忝ないが、私は目がナア、不自由でござりまする。

徳市　ほんにさうでござりました。そんなら音でも聞いてお歸りなされませ。

惣七　シテ、晩の狂言はなんでござります。

徳市　極彩色娘扇。私が役は小女郎さまと出會ひの所がござりまする。

惣七　ハア、お前も狂言をなされますかえ。目が見えいでもなされますかえ。

徳市　サア、お聞きなされませ。作者といふものは如才のないものでござりまする。私が目の見えぬ所を幸ひに、かの極彩色の兵助でござります。小女郎さまはおまき。アヽ、どうぞお前の目をよくして、私が色事をお目にかけたいなア。

惣七　ハヽヽヽヽ、こいつが面で兵助とは。アノ、この面で色事師とは。ハヽヽヽヽ、こいつは可笑しい。

ト徳市が顏を見て無上に笑ふ。

徳市　こいつが面と仰しやるは、そんならお目は見えますかえ。

小惣　ヤア。

徳市　目が見えますか。

惣七　サア、それは何さ。

ト困つたる思ひ入れ。小女郎も氣の毒なるこなし。

オヽ、ソレ／＼。私は見えは致しませぬが、それ、お前も覺えがあらう。總體器量の善い惡いは大概聲でも知れ

ます。

徳市　成程、仰しやれば左樣なものでござります。しかし、どうも合點が參りませぬは、お前の聲でござります。

惣七　エ、。

徳市　ハテ、お前のお聲柄を聞いては、まだ／＼小女郎さまと色事でもしてござるやうな艷悔に聞えますが、親御だと仰しやれば大きな間違ひ。シテ、見れば滅多に聲にもよらぬものでござります。

惣七　成程、可愛らしい聲で大あばたもあり、いゝどさ聲なやつに美しいのがあるから、得て聲で欺されるものでござります。

徳市　ソレサ、私なども年中欺されて居りまする。又此のやうに見えましても、くつと白粉でも致して舞臺へ出た所といふものは、門之助といふ男振でごんすよ。

ト奥にて、

さん　徳市さん／＼。

小女　アレ／＼、誰やら呼んでおや。大かた酒が始まつたでござんせう。わたしも話を仕舞うたら、直ぐに行くほどに、どうなといふて此處へは誰も寄こさぬやうにして下さんせ。お前を頼んだぞえ。

徳市　そりやア、私が狂言を書いて、外の者は寄こしませぬ。心置きなくとつくりと御相談なされませ。左樣なら私はお先きへ參ります。

惣七　そんなら徳市さん。

徳市　老人、後に逢はう。

ト唄になり、一杯に見得をする拍子に鬢髪を落す。慌てゝ拾ひながら奥へはいる。直ぐに合方。

小女　ほんにまあ、粹が身を食ふとやら。お前を父さんだやと欺したれば、ほんまに思うて、奥へいたわいなア。

徳市　いかさま、よい思ひつきであつたわいのう。

ト小女郎、門口をしめ、惣七の側へ寄つて

小女　エ、、惣七さん。どうした譯で此のやうな形にならしやんした。サア、早う譯を聞かせて下さんせいなア。

惣七　サア、おれが此のやうな形になつたといふ譯は。

小女　親御に勘當でも受けさんしたかえ。

惣七　イヤ／＼、さうした譯ではない。思ひ出してさへ恐ろしい。命のあるのが不思議ぢやわいのう。

小女　エ、、そんならお前は、喧嘩でもさんしたかえ。

惣七　なんのまあ、おれが。

小女　日頃お前の氣質といひ、よもやさうではあるまいが、

というてこの形といひ、顏の色も惡し、どうも心が濟まぬわいのう。
惣七　サア、その譯といふは。イヤ〳〵、どうも言はれぬ。是ればかりは何うも言はれぬわいのう。
ト俯向いて居る。小女郎、惣七が顏を見て、思ひ入れして、惣七の胸づくしを取つて、
小女　惣七さん。お前はわたしが心を疑うて居やしやんすが、心賤しい勤めはして居ても、わたしが心で操を立て、とうからお前の女房ぢやと思うて暮らすこのわしを、なぜ隱して下さんす。そりや聞こえぬわいなア〳〵。〇たとへ肩を裾へ結びつけ、人の袖褄に縋つても、お前ゆゑぢやとお前をば思うて居るわいなア。是れほどまでに思うて居るものを、なぜに隱して下さんす。そりや胴慾ぢや胴慾じや〳〵わいなア。
トいろ〳〵こなしあつて、
惣七　成程、末の末まで約束した二人が仲、隱すと思うては腹の立つも尤もぢや。けれど、どうもこの譯ばかりはどうも。
小女　言はれぬかえ。
惣七　この惣七が口から人に言うては、どうも道が立たぬわいのう。
ト小女郎、惣七が顏をぢつと見て、はつと泣き出し、
小女　ようござんす。それ程までに隱しやんす事なら、聞かいでも大事ござんせぬ。アイ、聞きますまい〳〵。なんのそれほど疑はれて、聞かいでも大事ござんせぬ。惣七さん、おさらばッ
ト惣七が脇差を取つて自害せんとする。惣七慌てゝこれを留め、脇差を取り、下の方へ捨て、抱留め、
惣七　マア〳〵、待つた。逸まるまいぞ。マア、下に居や。
ト無理に引据ゑ
忝ない。命に懸けて連れ添ふと言ひ替した二人が仲。
忝ない。サア、その譯は。
ト方々見廻し、
一國一城にかゝつたお主の難儀。
小女　エ、。
惣七　その御難儀を救はんと、心を盡しの浦に於て思はぬ難儀。この身を隱さんと乘り移つたる苫船を、惡者どもが仕業にや、船のもやひを切り離し、流れ出でたる海の面。折節雨風烈しく、命ばかりは助からんと、漂ひなが

ら飛乗る船は、情けなや海賊徒黨の集る船、大事を外へ洩さじと、手詰めの難儀に又びつくり、浪に揺られて磯端へ、打上げられしその時の嬉しさ。漸々命は助かりしが、一錢の蓄へとてもなく、上着を脱いで賣代なし、僅かの價に命を繋ぎしは、まだ佛神の控へ綱。見苦しいこのざまになつても、死ぬに死なれぬは若殿のお身の上、國の母者人、義理ある兄貴、又一つにはそなたの顔を、ま一度見たさに恥を棄て來たのぢやわいのう。斯ういふ難儀さへないならば、とうにそなたを身受けして、今頃は小松屋惣七が女房と言はさうに、いかに儘ならぬ浮世ぢやとて、する事なす事このやうに、間違ふものかと思へば、口惜しい／＼、無念なわやい／＼。

小女　尤もでござんす。道理でござんす。

ト背中をさすり介抱して、

其のやうな事とは露知らず、外に悪性な事でも出來たかと、怨んだが悪かつた。堪忍して下さんせえ。したがモウ、其のやうにくよ／＼思うて煩らうて下さんすなえ。ハテ、費は世界の湧き物、命さへある事なら、どうなりとなるわいなア。何も案じさんす事はござんせぬ。是からは又わたしがよいやうにして、お前に不自由はさせませぬ程に、氣をゆつくりと持つて此處に居て下さんせ。ほんにマア肌薄で、風でも引かしやんすな。モシ、風でも引かしやんしては悪いから、わたしが座敷でさゝなりと、一つ上つてな、氣晴らしにこれなと着て居て下さんせ。

ト裲襠を脱いで、あたりを見廻し、惣七に着せる。惣七思ひ入れして、

惣七　そなたの心ざし、忘れは置かぬ忝い。勤めする身に誠はないと、いづくの誰がいひ置きしぞ。この身になつた惣七を是れほどまでに。忘れは置かぬ、忝ないぞや。

ト小女郎、惣七□□□□□抱きつき

小女　なんぢやぞいなア他人がましい。なんの其のやうに言はいでもだんない事を。是につけても急にお前に話さねばならぬ事があるわいなア。

惣七　わしも密に、そなたに言ひたい事がある。

小女　そんならわし次第にして、部屋へござんせいなア。

惣七　誰れも見咎めはせまいかいのう。

小女　ハテ、大事ござんせぬわいなア。

惣七　そんなら一所に。

ト手を取り、小女郎、惣七が形りを見て

太鼓末社を引連れて、通はしやんした大盡さんが、いかに時世なればとて、これが小松屋惣七さんといふ、お歴歴のなりかいなア。

トどうと打伏して惣七に縋り泣く。惣七しを〳〵として、小女郎が手を取って

惣七　ハテ、又愚痴を言やるかいのう。人は七轉び八起きといふから、又起きる時節もあらう。しかしおれがなりを見や、頭は野郎、形は傾城、泣く聲大盡に似たりけり。これがほんの濡れではなくて、鵺ぢやわいのう。

ト奥にて、

皆々　小女郎さん〳〵〳〵。

ト惣七裲襠を脱いで小女郎に着せて囁く。小女郎裲襠の裾へ惣七を忍ばせ、奥へはいろ。暖簾口より、玉波、おみよ、波の戸、しげ浦、渚、おさん、傳四郎、德市、出で來る。

德市　申し〳〵、小女郎さん。お前のお頼みゆゑ、みんなを寄こすまいと思うて、いろ〳〵嘘をついたれど、お前が稽古にお立ちなさらぬと、ねつから極まらぬというて、皆さんがお迎ひにお出でなされました。サア〳〵、親仁さま。御一所に奥へお出でなされませ。

皆々　それはマア、誰に言ふのぢやぞいなア。

德市　小女郎さまには。

諸　太夫さんはどこぢやえ。

德市　そんなら此處にはお出でなされぬかえ。

さん　太夫さんは此處ではないわいなア。

傳四　成程、コリヤア合點がいかぬわいのう。小女郎さまの身の上は大事な處ぢや。味な噂でも大盡さまへ聞こえてはならない。德市、色事の座持ちなどすると見番へ斷わつて、この廓にはおれが置かぬぞよ。

德市　ア、モシ〳〵、旦那までが其のやうな事を仰しやります。私はなんにも存じませぬ。小女郎さまの親仁さまがお出でなされて、何やら御相談があるから、誰も寄こしてくれるなとお頼みなされた故、いろ〳〵嘘を申しましたれども、お聞き入れなく。シテ、小女郎さまは此處ではなし、ハテ、面妖な。

傳四　その親御といふはどのやうなお人ぢや。わしが所で小女郎さまに滅多な人は逢はされない。もし又間夫狂ひぢやないかの。

德市　ソリヤアお氣遣ひござりませぬ。丁度私のやうな盲

目でござります。男旱りはせまいし、あんなものを間夫にはなさるまい。目の見える人なら格別、お案じなされますな。

傳四　目の見えぬ人なら氣遣ひはない。したが德市、こつちの内で色事の取持ちをしてくれるなよ。

波戸　德市さんは人の取持より、手前が色事をしたがつて、目も見えぬくせに床廻りをしておやわいなア。

德市　モシ／＼、波の戸さん。お前もとんだ事を仰しやります。このうち、お前のお部屋へ參りましたは、アノ、ナニサ、渚が參りまして、お前がお癪氣かござりますからお出でと申しますから、お療治に參りましたのでござります。

渚　德市さん、嘘をつかしやんせ。いつ、わたしがそんな事をいうたえ。

德市　南無三、そこに居たか。

トもじ／＼して、

そんなら手前ぢやなし、アノ、仲居のおさんよ。

さん　德市さん。わたしもいうた覺えはないぞえ。

德市　ハア、そんなら禿の亡魂だも知れない。

皆々　ナ、、こは。

傳四　亡魂といへば、モウ、そろ／＼狂言の仕度に掛からずば、間に合ふまいぞよ。

皆々　それぢやというて、大盡さまがまだ見えぬわいなア。

傳四　ほんに。なぜ遲い事ぢややら。ちよつと出口まで見せに遣らうか。イヤ、アノ、事いはゞ目白おけと、向うから大盡さまが、

皆々　ほんになア。

ト出の唄になり、三藏、權六、木綿廣袖布子、船頭の形りにて莫蓙包みの荷をてん／＼に下駄がけにて擔いで出る。沖右衞門、梶右衞門、羽織衣裳、男達の形りにて一本差し、下駄がけで出る、跡より灘右衞門、唐織の錦の羽織衣裳、鳥の毛の頭巾、朝鮮骨の扇を持ち、下駄がけ、一本差しにて出て來る。

皆々　皆さん、やう／＼今かえ。

傳四　是は／＼大盡さま方、遲い／＼。

梶右　親方、なんと聞かしつたか。太夫さん方、遲い／＼といふ所を、大盡さまがた、遲い／＼とは氣が變つて面白いぢやアごんせぬか。

沖右　しかし、亭主めが遲い／＼と、こつちを通り者に仕

立てるも、嗜ませて、ぶら〳〵言はせまい下心さ。
權六　親方。お前のお出でをみんなが待つてゝござります。
三藏　早く錨を下して、喜ばしてやらつしやりませ。
灘右　この廓へ足を踏ん込むや否や、うぶ子、這ふ子に至るまで、おれを見ては小腰を屈めて笑ひ、滿更金の威光にて追從されるは憎うないものだ。このたゞら大盡が名弘めと出ようか。
傳四　そりやア有難うござります。われらが內の福の神さま。サア〳〵、太夫さま方、藝者衆も並んだ〳〵。
ト皆々を並みよく列ばせる。灘右衞門はじめ皆々舞臺へ來る。
灘右　ホウ、並んだわ〳〵。おちかしらつゝ込んでいくらだ〳〵。
傳四　〆て十二人でござります。まだ私の內どもは、藥師參りに參りまして歸りませぬが、この分もお願ひ申します。
灘右　權六。三藏。目錄に合せて、早く渡せ〳〵。
三藏　合點でごんす〳〵。
ト權六、三藏、莫蓙包みを切りほどき、進物の卷物いろ〳〵取り出す。

沖右　ドレ〳〵、目錄を讀み上げて遣らう。マア、名前を見て、
ト目錄を開き、
一番に波の戶、二番に玉波、三番に小鹽、四番は千しう、五番が浮船。
梶右　待て〳〵。肝心の頭の思はく。小女郎が見えぬ。
沖右　ソレ〳〵、小女郎が居ない〳〵。
皆々　小女郎さん〳〵〳〵。
德市　ア、モシ〳〵、小女郎さんは此處におやござりますまい、
皆々　シテ、どこへ行つた〳〵。
德市　先刻に親御さまが尋ねて見えました。何やら相談があるといふてござりましたが、大かた奧の小座敷でござりませう。
灘右　そりやア、人目にかゝつては外聞が惡いと思つて、小座敷へ引廻したものであらう。どうで娘を賣つて食ふ親なら、ろくな親父ぢやアあるまい。
德市　いとしや、目が不自由でござりまする。參られたこそ幸ひ、何ぞこれにもお遣りなされませ。
梶右　どうで目眼の見えぬやつなら、何をやつても同じ事

だ。やくざなものが殘つたら、のけて置いて遣つたがよい。
德市　そりやア惡いびんぎだわえ。目の見えないものにやアやくざなものとは、氣のない話だが、私などは數年の劫で、鳥渡から探るが最後、善い惡いは遣るものぢやござりませぬ。アノ紋付を探り當てる事は私が始めた事でござります。
權六　そんなら小女郎が親はめくめくか。
三藏　どうで子を賣る程の親だもの、目も潰れないでどうするものか。總體、奉公人の親といふ親に。
灘右　ヤイヤイ、なんの役にも立たぬ口を叩く奴ぢやアないか。世界のうちに子ほど可愛いものはない。それをみんなも聞いて居るに、大きな馬鹿ぢやアないか。コレ、全盛の太夫の耳に掛かる事もあるわ。ごくにも立たぬ仇口を叩くから、人並に金を使つても、いつでも憎まれるわ、それを名づけて不通とも野暮ともいふ。先づ第一おれが子方に、わがやうな奴があつては、おれが顏が汚れる。ちつと嗜めくく。
三人　いかさま。こりやア頭の言はれる通りだわえ。
三藏　そんならモウ、なんにも言ふまい。

傳四　したり、流石は大盡さま。裏の表までお心が通つて、その上にお氣がよくつて、お金もたんとあり。
德市　殊に物を遣り好きで、銘々にお土產とは、有難やまから、もんどりの體をお目に掛けませう。
ト宙返りをして腰を打ち擦る思ひ入れ。
アイタ、、、、
灘右　ハ、、、、、可哀さうに、向うに何があるか知れもせぬ所へ、體を投出して、落を取るも金が欲しさ。早く目錄を讀んで土產を遣つてくれくく。
傳四　ドレドレ、私が讀上げませう。
ト開いて見て、讀めぬ思ひ入れ。
德市　どうでござりまするなくく。なんぼ腰が痛うても、お土產の註文次第、忽ちよくなります。早う讀んでお聞かせなされませ。
傳四　なんだ。こりやア一字も讀めぬ。
灘右　ドレドレ。
ト取つて、
コリヤア、讀めない筈だ。おぬしも氣のつかぬものだ。これを庭樣で書く事もない。
沖右　ほんにこりやア、ついうつかりと書きました。よい

よい、書き損なつた過怠に、おれが讀上げよう。

ト目錄を取つて、

目錄、一ツ、猩々緋三本、波の戸太夫へ。

三權　サア〳〵、請取つた〳〵。

ト段々送り物を出す。

沖右　鼈甲二枚、玉波太夫へ。○麝香三へそ、小鹽、浮船、二人の中へ。

權六　匂ひ袋が、いつくらも出來るによ。

沖右　緞子五本、新造五人へ。○ぜんまい人形四ツ、氷砂糖五十箱、右は禿中へ。

灘右　ソレ〳〵、このまゝ返りの人形。

權六　氷砂糖をたんと食つて、食傷をしまいぞ。

德市　コリヤア、いつちよい下され物だ。したが私が此處に居るに氷砂糖とはどうでござります。時に私へはなんでござりますな。

沖右　せはしないやつだ。サア〳〵、此處だ〳〵。

德市　ヘイ〳〵。

ト耳を澄まして居る。

沖右　紫檀棹に桐の胴の三味線一挺、德市へ。

ト德市、不精々々に取つて、

德市　私へはこの三味線ばかりでござりますかえ。それでまあ、凡そ三味線の棹といへば、紫檀棹に花梨胴。折角下されながら桐の胴とは。

灘右　そりやア德市、手前の日頃の音締に合せて、わざわざ拵らへさせた。

德市　この桐の胴に紫檀棹の三味線が、私の音締に合ひますとわえ。

灘右　ハテ、それを合はして切支丹、手前の音締は伴天連伴天連。

皆々　ハヽヽヽヽ、こりやア、出來ました〳〵。

ト皆々笑ふ。

灘右　さう褒められて、乘り地を語るぢやアないが、德市への土産は、亭主、きついか〳〵。

傳四　イヤ、モウ、伴天連々々々は、有難うござります。

灘右　まだ〳〵お主にも、有難がらせる物がある。

傳四　そりやア早く、承りたうござりまする。

灘右　沖右衞門、その次を讀んで聞かしてやれ。

沖右　掛目八匁つり、珊瑚樹の玉一對、並に海老手の大人參三斤、奧田屋夫婦へ。

傳四　これは有難うござります。

沖右　蝦夷錦三本。
德市　占めたわえ。
　ト德市にじり出て聞いて居る。
沖右　青黄赤白黒の羅紗五本。
德市　ヤア。
沖右　紋天鵞絨。
德市　ヤア。
沖右　〆て十三本。
　ト舞臺へ並べる。
德市　そりやア、誰でござりますな。
沖右　小女郎太夫へ。
德市　ハア。
　ト德市力を落す。
皆々　德市、どうした〳〵。
德市　これが力が落ちないでどう致しませう。皆それ〳〵に遣はされた代物、どれも〳〵金目なもの。その中に三味線一挺とは、大盡さまが惡い藝で私にむつとさせて、口直しにしつかりとあるわえと、樂んで居りました蝦夷錦五本、小女郎さまと聞いて、がつかり致しました。
皆々　太い奴ぢやアないか。

梶右　時に小女郎への土産物は、取り片づけもせずに店晒しにして置いて、なぜ受取に出ない、但し土産物が氣に入らぬか。
沖右　そりやアともあれ、頭の心ざしを背くいけつ太い賣ためぢやアないか。此處へ引摺り出して甘酒でも嘗めさせろ。
三藏　合點だ。
　ト行かうとする。
灘右　ヤイ〳〵、よいわえ〳〵。欲しくないものだから取りに來ぬであらう。打つちやつて置け〳〵。
四人　それだというて、あんまりでござんす。
灘右　ハテ、よいわえ。〇コレ、德市。このぢう拵へた新文句は、どうだ、手がついたか。
德市　ついた段ぢやござりませぬ。お前さまがお出でなされましたら、お聞かせ申さうと存じて、太夫さん方にもこつそりと敎へて置きました。
灘右　そりやア出來した。
德市　連れ弾きをお聞かせ申しませう。
三藏　連れ弾きとは有難い。これを肴に一つ。
　トこつぷを出す。

權六　酌はおれがしよう。
　ト銚子を持つて來ろ。
灘右　われが酌では。やつぱり船の氣が離れぬ。
さん　そんなら、わたしが。
　トおさん酌をする。女方皆々三味線を彈く。直ぐに下
　座へ取り。
〽小倉沖から船漕ぎ寄せて、よその女郎衆がお茶引く見
れば。
四人　なんとした。
徳市　オヽ、辛氣。
〽辛いぞ、ういぞ、アヽ、なんとせう。
　ト徳市手拭を冠り踊る。奥より小女郎屈託の思ひ入れ
　にて出て來る。
小女　やかましい。あだ聞きともない。徳市さん。置かし
やんせいなア。
灘右　面白い。もつと唄へ〳〵。
　ト女郎皆々三味線をやめる。
なぜ、唄はない。
梶右　よいわ、そつちで唄はずば、こつちで唄ふべい。○博
多女郎衆が肝癪起す。

四人　吠え面だ。
梶右　客が欲しいか。遊んで呉れか。
四人　さうであらう〳〵。
　ト手拍子を打つ。
小女　エヽ、なんぢやぞいなア。あた嗜め過ぎた。人の心
も知らいで置いて下さんせ。
灘右　サア〳〵、おぬし達も控へぬかえ〳〵。
みよ　モウ、よいわいなア。小女郎さんの思はんす手前も
あり。わたしらが共に勸めて騷ぐやうで氣の毒ぢやわい
なア。
玉波　ソレ〳〵、人に腹立てさせるやうに惡口いはずと、
さゝ上るなら機嫌よう、上つて置かしやんせいなア。
波戸　女郎を相手に力だては可笑しいわいなア。
繁浦　力づくでも金づくでも、儘にならぬが女郎の意地立
て、情けを表にして居るものを、お前方のやうに言はん
すものを、儘になるものかいなア。
玉波　ほんに角の取れぬ。
皆々　お方ぢやなア。
玉波　小女郎さん。どうやら濟まぬ顏ぢやが、どうぞさん
したかえ。

みよ　其のやうな時には一つ上るがよいぞえ。
小女　モウ、酒機嫌でもござんせぬ。
　ト屈託の思ひ入れ、俯向いて居る。沖右衛門こらへ兼て、
沖右　コレ、小女郎さん。そんなに不精々々にして居ずと、機嫌を直して親方の側へ行きやれな。親方がよくよくに思へばこそ、毎晩々々、おや／＼馬の跳ねつけるやうに跳ねつけられても、腹をも立てずに、これ見たがよい、どうか下卑た事をいふやうだが、荒積りにしても二三百兩が物はあるによ。
　ト梶右衛門も側へ來て、
梶右　ソレ／＼、うろたへて何をいふ。夢にも見る事もならない代物だ。
　ト小女郎に見せびらかし。
マア、機嫌を直して、頭の側へ行くが當世といふものだ。
沖梶　サア／＼、行きな／＼。
　ト無理に小女郎を灘右衛門が側へ突き遣る。小女郎、灘右衛門が方へ轉げかゝつて思ひ入れ。このうち始終、灘右衛門、煙草を呑んで默つて居る。

灘右　小女郎。最前から來て居るのに、知らぬ事はあるまい。なぜ來ない。どこに今までしげつて居た。
小女　どこになりとも、わたしの居たい處に居やんした。
灘右　エヽ、うぬ。
　トむつとしたる思ひ入れ。
サア、斯う腹を立てるのも、そもじが可愛いからの事だ。
　ト顏を直して、小女郎が側へ立つて來て。
今のやうに新文句を拵へて唄はせたもの、むつとさせて呼出し、顏を早う見ようばつかりの事。サ、これ程までに思ひ込んで居るものを、來る夜も／＼つん／＼と、外の客なら愛想も盡かさうが、この灘右衛門は生得で、その張りの強い所が尚面白い。是からはおぬしもおれも氣根競べ、隨分振やれ、おれも男の意地だ。帶紐解いてしつぽりと抱いて寐るまで、毎晩々々通ひ詰めて見せう。
　ト思ひ入れして、
サア、斯ういつては、おぬしが方も意地が立つて、振る氣になるが女郎の常。おれも又振られるも見目でもない。よく／＼に思へばこそ、振られても／＼、通ひ詰めたる灘右衛門。ちつとはおれが心も推量してくれたがよ

いわえ。

ト小女郎、思ひ入れして、

小女　灘右衞門さん。ほんまにお前は眞實な男の中の男ぢやわいな。是までつひに染々とした話もせぬわたしを、憎い奴ぢやとも思はしやんせず、今のやうにいうて下さんすりや、却てわたしや悲いわいなア。今宵もお前がござんしたと聞いたゆゑ、早うお目に掛らうと思うたけれど、ちつと内證に。

灘右　その內證の客も知つて居るよ。

小女　エヽ。

灘右　ハテ、德市が話でみんな聞いたよ。

小女　ムヽ、そんなら德市さんの話で、聞かしやんしたかえ。

灘右　手前もいかい苦勞をするなア。

德市　申し〳〵、小女郎さま。先つき目錄をお讀みなされたを聞いて居りまするが、夥しいお土產でござりますぞえ。モシ、これを半分、かのお方へもお上げなされませ。

小女　そんなら、これを下さんすのかえ。

ト卷物を見て思ひ入れあるべし。

灘右　少々ながら、心ざしを受てくれるか。

小女　忝ならござんす。

德市　ヤア、いつにない太夫さまの御機嫌だ。また呑めますわえ。

灘右　太夫さへおれが手に入れば、此處に居合せた者は、毎晩々々總揚げだぞ。

傳四　ソリヤア、有難うござりますわえ。

德市　小女郎さまのお心一つで、廓の繁昌と申すものでござります。

灘右　時に小女郎。その內證の客といふは、無心でゝもあらうな。

小女　サア、それはな。

灘右　なんの隱す事はない。世間にはいくらもある事だ。大かた年を切り增してくれろといふ事であらうが、なんにも遠慮な事はない。用があるなら言つたがよい。

ト小女郎うれしきこなし。

小女　そんなら言つても大事ないかえ。

灘右　大事ないとも。おらア、とうから言はれたくつて居た。

小女　そんなら言ふぞえ。

灘右　いくらの事でも引きはせない。
小女　いくらの事やら知らぬけれど、わたしを身請して下さんせ。
灘右　ヤ。
小女　わたしや急に身請して欲しいわいなア。
沖右　モシ、親方。味に鱸を振つて來ましたわえ。
四人　イヨ、親方の色事師さまめ。
灘右　わいらがそんな事をいへば、食べつけたい事だから、どうやら小つ恥かしくなつてならねえ。
小女　今までなんのかのというて下さんしたけれど、情ないうたはちつと譯あつての事ぢやけれども、何もかも合點で居やしやんす粹なお前に隱す事はござんせぬ。ちつとこつちの内證客に難儀な事があつて、
灘右　請出されて一所に暮らして、孝行したいといふのか。
小女　そんなら一所に置いて下さんすか。
灘右　隨分易い事だ。
小女　エヽ、嬉しうござんす。
　ト拜む。
灘右　氣遣ひしやるな。この灘右衞門が呑込んで世話するからは、これ程でも不自由な目はさせぬ。
　ト仕方でして見せる。
小女　そんならそれに違ひござんせぬかえ。
灘右　おれも男だ。番つた言葉は反古にやアしないよ。
小女　そんなら、とてもの事に、わたしが内證客に逢うて下さんすまいか。
灘右　身請けをすりやアおれが爲めにも一家だ。此處へ呼出して近づきにならう。
小女　ほんにまあ、男は當つて碎けろと、きついものぢや。お前のやうな粹はないわいなア。
　ト小女郎いそ〳〵として奧へはいる。
四人　頭。うまい事になりました。
灘右　小女郎を身請の祝儀に、此處に居る四人も請出して、一所に連れて歸らう。
權六　そんなら、わしらも頭の接伴するのでござんすか。
梶三　知れた事よ。
沖右　ソリヤア、有難いわえ。
灘右　亭主。皆を早く呼びにやりやれ〳〵。
傳四　人を遣はすまでもなく、斯やうな事には、われらがすぐに膝栗毛。ハイシイドウ〳〵、勇み進んで。

ト踊つて、向うへはいる。
徳市　サア／＼、めでたいわ／＼。是からは太夫さま方の名殘のお杯に致しませう。
さん　此處はお算用で、お忙しうござりませう。太夫さま方は奥へお出で。
玉波　そんなら皆さん。
皆々　後にえ。
ト騒ぎになり、女方殘らす、徳市ついて奥へはいる。
四人　サア／＼、頭とんだ事になりましたぞえ。
灘右　必ず共に粗末にするな／＼。
ト皆々立騒ぐ。合方になり、奥より小女郎、惣七を連れて出る。
小女　サア／＼、此處へござんせ。今話した身請して下さんすお方は、ぬしおやわいなア。よう禮を云うて下さんせ。
ト灘右衛門に引合せる。惣七手を突いて頭を下げ
惣七　何かの話は小女郎に承はりました。何からお禮申してようござりませうやら、御親切の段有難うござります。
灘右　ナニサ、さう禮を言はれちやア、こつちから挨拶の仕様がない。サア／＼、手を上げさつしやい／＼。
沖右　頭が身請さつしやるからは、こなさんは舅御。
梶右　わしらも毎日々々はいりこんで世話になるもんでごんす。知つて置いて下さいませ。
灘右　イヤ、モウ、互ひに。
惣七　睦ましう。
灘右　遠慮なしに。
惣灘　心易く。
ト双方一度に頭を上げ、灘右衛門、惣七、顔見合せ思ひ入れ。小女郎合點の行かぬこなし、惣七うろ／＼して、下の四人を見てびつくりする。四人もやアと驚く。
四人　親方。コリヤア、どうでごんす。
ト灘右衛門居直り、きつと思ひ入れ。
灘右　よいわえ／＼。小女郎が内證客といふからは、年寄つた親仁だと思ひの外、内證客はこなさんの事でござんすか。
惣七　アノ、こなさんが身請せうと仰しやるお客さまか。
惣灘　ハテナア。
トきつと思ひ入れ。灘右衛門むつとして、思はず額の

上に犬といふ文字現れる。小女郎、惣七、きつと思ひ
入れ。

惣七　憤激なすとその儘に、犬といふ字の現はれしは。

ト灘右衛門思ひ入れして、ちやつと扇子にて顏を隱し、
顏色を直して、

灘右　ハテ、若い人。ハテ、こなさんは運の強い人でごん
すの。

惣七　ハテナア。

ト思ひ入れして居る。小女郎うろ〳〵と合點のいかぬ
思ひ入れにて、惣七に引添うて居る。

沖右　ばらして仕舞へ。

皆々　合點だ。

ト拔打に立懸る。小女郎慌てゝ四人を留め、後ろ向き
になつて、裲襠にて惣七を圍つて

灘右　ヤイ〳〵、ばらしてよけりやア、おれがばらす、じ
たばた騷ぐな。埃りが立つわえ。

ト扇にて煽ぐ。

惣七　ヤイ、納め過ぎた差配だて。海賊の張本。

四人　何を。

ト兩方思ひ入れ。小女郎後ろ向きに惣七を圍つて留め
る。灘右衛門側へ寄つて、

灘右　コレ、若い人。何も言はつしやるな。ハテ、言つて
仕舞やア物がない。コレ、エヽ、わいらが此處に居ちや
ア惡い。奧へ行け〳〵。

四人　それだといつてこの儘では。

ト又立ち懸らうとする。

灘右　ハテ、やかましい。口數が殖えればつひ人が聞くわ
え。

四人　でも。

灘右　例へ角の八百本生えた奴が向う面へ直らうが、ぎや
まん國の鬼王が羽織を着て來ようが、びつくりともする
灘右衛門ぢやアない。氣遣ひなしにおれに任せて、奧へ
行け〳〵。

沖右　親方があのやうに言はるゝからは。

梶右　こゝを預けて行からかい。

四人　とは言ふものゝ。

沖右　ハテ、マア來やれよ。

ト四人思ひ入れあつて、唄になり奧へはいる。小女郎
は惣七を介抱して居る。灘右衛門、惣七を睨みつけて
下の方へ來る。惣七じり〳〵刀に手を懸けて廻る。灘

右衛門きつと思ひ入れして、門口をしやんとしめ、又上の方へぢり〳〵と廻つて來る。思ひ入れあるべし。

灘右　尤もだ。腹が立たう。

ト惣七思ひ入れ。合方になる。

さうであらう〳〵。互ひの身の上を口外へ出せば、

ト刀へ思ひ入れ。

破れかぶれ。ハテ、人が聞いちやアものがない。必ず何にも言はつしやるな。尤もだ〳〵。小女郎、留めて居や。

小女　アイ〳〵。

ト懐へながら惣七を留めて居る。灘右衛門ずつと立つて、以前の銚子とこつぷを持つて來て、惣七が前に置いて、

灘右　こなさまの心ざし、この小女郎が親分になつて、改めて祝言。

ト雨人思ひ入れ。

今の今まで、ぞつこん惚れて居た小女郎が、内證客がある、身請をしてくれろと頼みかけられ、合點だと呑込んだは大きな間違ひ。親仁だと思つて呼び出した所が、思ひ懸けないこなさん故、びつくりしまい事か。おればかりぢやアない。若い衆どもゝびつくりせにやアならねえ。眼前、

ト海へ打込みし仕方をして、

不思議といはうか。どうしてマア。互ひに様子を聞かれもせず、又言はれてはものがない。ぢやによつて何にも言はず思ひ切つて、この小女郎をこなさんに仲人するのだ。わしが親分になつてやるからは、夫婦の杯、親子の杯、サア、機嫌よく飲んで下さい。

トこのせりふの内、小女郎嬉しきこなし。こつぷへ指ざしして杯しろといふこなし。惣七俯向いて居る。

小女　アレ、聞かしやんしたか、惣七さん。灘右衛門さんが夫婦にするといなア。忝なうござんす。コレ、惣七さん。灘右衛門さんは男ぢやぞえ。女房にせうとまで思うて居やんしたわたしを、さつぱりと思ひ切つて、お前に世話して添はさうといなア。

灘右　世話をするばかりぢやアない、親分になるからは聟だ。たとへほんの親達が勘當せうが、勤めの者を女房に持つたなんぞと、一家一門が見限つても、この灘右衛門が呑込んでからは、千と二千と仕送りして元手を貸してやりませう。といふのも、こなさんの運にあやかりたい

のだ。わしらが商賣は運が元手、この中のやうな場を逃れたこなさんは、ほんに命冥加なと云はうか、運の強いと云はうか。サア、機嫌よく杯をして下さい。頼みましたぞ。

ト惣七思案して居る。小女郎もどかしがつて、惣七の背中を叩き、杯しろといろ／＼勸める事あつて、とゞこつぷを取つて惣七が口につける。惣七默つて居る。灘右衛門思ひ入れして、

フム、これ程に事を分けていふのに、挨拶が無けりやア是非がない。そんなら何うでも。

ト後ろへ梶右衛門、沖右衛門、出かゝつて居る。

沖右　大事を聞かれたその上に。

梶右　得心なけりやア是非がない。

沖梶　觀念。

ト拔身を振上げる。小女郎あわてゝ、

小女　マア／＼、待つて下さんせいなア。

ト惣七を圍ふ。灘右衛門も二人を留め、

灘右　見さつしやる通りだ。不得心なら是非がない。死んで花實も咲くまいし、能くとつくりと思案して、嫌でも應でもたつた一口、返事が聞きたい。どうだ。

ト居直つてきつと思ひ入れ。小女郎、惣七を抱き締め、

小女　これいなア。アノやうに世話燒いて下さんすに、なぜ杯をして下さんせぬぞ。灘右衛門さんの商賣は、どんな事やら知らねども、駕籠に乘る人、舁く人と、品は變れど行く道は一つ。現在女房にせうとまで、思ひ詰めて居さんした、わたしが事も思ひ切つて、お前に添はして後々まで、世話して遣らうと頼もしい御詞。ちやつと杯して、夫婦になるやうにして下さんせいなア。エ、／＼／＼。

ト後ろより顏を眺め、

なぜに物を言はしやんせぬぞ。此のやうに言うても默つてゐやしやんすは、能く／＼の事ではあらうけれど、お前が嫌と言はんしたら、よもやわたしとお前を女夫にして下さんすまいし、又皆さんが、

ト後ろへ思ひ入れして、

もしもや、お前に怪我があつては、わたしやほんにどうせうぞいなア。〇コレ、拜むわいなア／＼。もしもの事があつた時には、わたしや生きては居ぬぞえ。サア、早う女夫になつて殺すなりと、返事して、大事の所ぢや、思案して下さんせいなア。

ト袖より背中へ手を入れて、
このマアお前の汗わいなア。
ト汗を拭いてやる。
沖梶　頭。是ぢやア思案せずばなりますまいぞえ。
灘右　得心すれば大事ない。仲間の運の強い人だによつて
〇どうだ、思案がきまりましたか。
小女　アイ、大方得心ぢやさうにござんす。
灘右　得心で杯せうと言はつしやりやア、まだこなさん
に見せるものがある。
ト懐中より一軸を出し見せる。惣七これを見てきつと
思ひ入れ。鳥渡寄らうとする。灘右衞門ちやつと懐中
して、
コリヤア、仲間の内ぢやア大切なものだ。いつでも譯を
知らずにやア猫に小判。杯を終つたら、とつくりと見せ
ませう。
ト惣七思案して一軸に思ひ入れして、
惣七　成程、得心致しました。この上は如何やうとも、お
指圖次第に致しませう。
小女　そんならお前は得心して、杯をして下さんすか。嬉
しいわいなア。

ト惣七へこつぷを差しつける。
灘右　そんなら杯をさつしやるか。
惣七　小女郎が事を身に引受けて、お世話なされて下さる
るお心ざし、どんな事でもお指圖は洩れますまい。
灘右　得心さつしやれば、どこもかしこも波風なしに治ま
るといふもの。よもや違變はござるまい。
惣七　何しに詐り申しませう。
灘右　しかと詞を番つたぞよ。
ト惣七が胸倉を捉へ、きつと思ひ入れ。
惣七　長崎表では物の固めに血潮を呑むとやら承はりま
した、お心晴しに腕を引きませうか。
灘右　ナニサ、それには及ばない。由ある人の果てさうな
に、男と男が刃と刃、合はせりやア何事も心づくさ。
ト胸を叩く。
惣七　然らば兎も角もお指圖次第。
ト灘右衞門こつぷを取つて、小女郎が前へ置く。
灘右　夫婦の杯。小女郎はじめや。
ト小女郎うれしさうに
小女　そんならわたしから始めるのかえ。
ト灘右衞門注いでやる。小女郎飲んで惣七へさす。

灘右　二人ながら夫婦だぞよ。
ト灘右衛門兩人の額をきつと見る。惣七飲んで小女郎へさす。また受けて飲んで前へ置く。灘右衛門取つて、
親子の杯。
ト惣七注ぐ。灘右衛門飲んで、
こなさまは子だぞよ。
ト惣七へさす。小女郎つぐ。惣七飲んで灘右衛門へさす。灘右衛門取つて、
おらあ親だぞ。
ト飲んで、
この通り、わいらも安堵であらうが。
ト奥より、三藏、權六、出て來る。
沖梶　それで落着きました。
沖右　祝ひに一つしめませう。
皆々　ヨイ〳〵〳〵。ヨイ〳〵〳〵。祝うて三度。
ト手を打つ。傳四郎走り出で、
傳四　サア〳〵、小女郎さま始め五人の太夫さま方の身請金、總〆で千八百兩でござります。
ト證文を見せる。

灘右　コリヤア、一人前四百兩につかぬぞよ。
沖右　おちかしらをつつくるんで、目切りに値をしたな。
梶右　五人で千八百兩とは、何しろ安いものだ。
沖右　土用に日和、まんがよかつた。
權六　いつそ、もちつと買込んで、鹽押しにしませうか。
皆々　ハヽヽヽヽ。
ト笑ふ。向うより町抱へ、慌しく走つて出て來る。
町抱　旦那え〳〵。お宿にかえ〳〵〳〵。
傳四　騒々しい。何だ〳〵。
町抱　なんだ所ぢやアない。亂騒ぎだ。
傳四　亂騒ぎとは。
町抱　何かお尋ね者がござります。
皆々　ヤア。
ト皆々顏を見合せ、思ひ入れ。
町抱　大方探しでござりませう。その心でお出でなされませ。
ト言ひ捨て揚幕へ駈けてはいる。
沖右　コリヤア、つきが廻つて來たのでごんすわえ。
梶右　どうぞ仕樣はごんすまいか。
權三　いつそ裏から、

ト皆々うろ／＼する。

灘右　コレサ、沖右衞門。お主は大儀ながら、元船まで行つてくりやれ。

沖右　ソリヤア、なにしに行くのでごんす。

灘右　ハテ、みんなの身請の金を。ナ。

沖右　成程、千八百兩だの。

灘右　二箱持つて來たがよい。二百兩の端たは亭主への祝ひに。

傳四　ソリヤア、有難いわえ。

沖右　そんなら鳥渡取つて來ませう。

灘右　ア、、コレ／＼。幸ひ新米を引廻してやつてくれ。

沖右　いかさま、勝手を覺える爲め、わしが連れて行つて引廻してやりませう。

灘右　サア、若いの。あれを一所に元船へ行つたがよい。

惣七　アノ、船へ又行くのでござりますかえ。

小女　わたしも一所に行かうわいなア。

灘右　オヽ、それもよからう。いつそ皆連れて元船の酒もり、氣が變つてよからう。

梶右　こいつはいゝわえ。亭主、みんなを呼べ／＼。

傳四　太夫さん方／＼。

皆々　アイ／＼。

ト玉波、おみよ、波の戸、繁浦、おさん、徳市、出て來て。

徳市　皆さまをお呼びなされましたは、先つきの御相談がきまりましたかえ。

沖右　きまつたとも／＼。五人ながら身請の相談がさらりと濟んだ。

徳市　ソリヤア、おめでたい。定めてお祝ひがござりませう。

梶右　モウ、取る工面をしやアがる。

沖右　アサ／＼、これからは手に手を取つて、行くが嬉しいか／＼。

みよ　さいなア、嬉しいは嬉しうござんすけれど、みんな馴染のおさんに別れて、遠い所へ行くと思へば。

繁浦　わたしらも名殘惜しいわいなア。

波戸　住み馴れし里の名殘を思へば、辛氣なものぢやわいなア。

ト又向うより町抱へ、走つて出て來る。

町抱　旦那々々。

傳四　なんだ。こつちへお役人さまがござるか。

町抱　サア、初手は奥田屋といふ事ゆゑ、知らせに參りましたが、大きな間違ひ。その尋ねる者は人殺しの科人で、モウ、濟みましたとさ。

ト言捨て、向うへはいる。

梶右　スリヤ、人殺しの詮議であつたか。さうとは知らず、あつたら膽を潰させた。

徳市　サア／＼、これから太夫さま方を船へ送りませう。

灘右　成程、小女郎が里の名殘に、みんな賑やかに送れ送れ。

小女　そんなら惣七さん　ござんせ。

惣七　イヤ／＼、おれはお頭と一緒に行く程に、そなたは先きへ行きやれ／＼。

灘右　コレ／＼、おれは總々の勘定、萬事さつぱりと仕舞うて後から行かにやァならぬ。こなたはみんなと先きへ行つたがよい／＼。

惣七　左樣なら、お先きへ參りまする。

小女　灘右衞門さん。わたしらは先きへいて待つて居る程に、早うござんせい。

ト惣七が手を取りいそ／＼する。

灘右　待つて居やれ／＼。

沖右　エヽ、小女郎がその嬉しさうな顏わいの。

灘右　小女郎ばかりぢやない、手前も有頂天になつて、又肝心の事を忘れまいぞ。

沖右　合點でごんす。

小女　灘右衞門さん。

皆々　早うござんせえ。

灘右　里の名殘にわつさり唄へ／＼。

ト徳市騷ぎを唄ふ。直ぐに下座へ取り、賑やかなる騷ぎになり、小女郎先きへ皆々向うへはいる。時の鐘になり、灘右衞門思ひ入れして、表の奧田屋と書きし掛行燈と隣の倉田屋と書きし掛行燈と懸け替へ、灘右衞門奧へはいる、と向うより捕手頭二人、ぶつ割き羽織、野袴。大小にて出て來る。跡より大勢の捕手、十手を持つて出て來て

捕頭　海賊どもは奧田屋の二階との事、踏ん込んで搦め取れ。

皆々　捕つた／＼。

ト懸行燈の奧田屋を目當てに、下の方の内へ踏ん込み、二階へ上ると、捕手皆々を二階より蹴落し簾上げる。龍田五郎、着流し大小にて立つて居る。

五郎　寄りやがつたら撫切りだぞ。
捕頭　手向ひひろぐと打ち据ゑい。
皆々　腕廻せ。
ト龍田五郎、きつと思ひ入れ。
五郎　是からは手向ひの段ぢやアない。無體をひろぐと死人の山をつくぞ。
捕頭　ヤア、ぬかすまい。おのれこそ海賊の張本。
五郎　ナニ、海賊とは。
ト思ひ入れ。
捕頭　なんと覺えがあらうがな。
五郎　イヤ、覺えない。人違ひであらうがな。
捕頭　その爭ひをさせまいと、繪姿を持つて御詮議。
ト懷中より繪姿を出し
ドレ。
ト捕手頭、五郎と引き競べ見る、五郎も立寄つて見る。
ハテ、心得ぬ。繪姿とはばつくんの相違。
五郎　それに又、某を見て取巻き召されたは。
捕頭　海賊は奥田屋と、確かなる注進によつて踏ん込みしが。

五郎　ナニ、海賊は奥田屋とか。
トきつと思ひ入れ。
捕頭　表の行燈に奥田屋としるしあるを目印に、踏ん込みしは、某が不調法。皆引け。
皆々　ハツ。
捕頭　御了簡下されい。
五郎　人違ひとござれば申し分はござらぬが、お役儀にも似合はぬ粗相千萬。
捕頭　面目次第もござりませぬ。さりながら海賊ども、この廓の内に忍び居るは必定。何事も隱密に賴み存ずる。
五郎　隙取らずと早うござれ。
捕頭　ハテ、面妖な。
ト皆々連れて向うへはいる、このうち灘右衛門、始終の様子伺ひ、そつと下へ降りて、
灘右　ハテ、ひやいな事であつた。
ト花道へ行かうとする。五郎二階より下りて、
五郎　待つて貰はう。
灘右　なんぞ用か。
五郎　かくまつて貰ひたい。
灘右　なんと。

五郎　様子は定めて聞かしやつたであらうが、わしは隣の客でござる。
灘右　その隣りの客が、なんで、かくまつて貰ひたいとは。
五郎　人違ひとはいひながら、すでの事に繩に掛らうとしましたその譯は、アノ奥田屋といふ行燈の間違ひで。
灘右　ヤ。
五郎　定めてアノ行燈を懸け替へて置かしやつたは、こなさまの仕事であらうが、わしが口からその奥田屋といふは隣りでござるといふが最後、すぐに繪圖に合せて、
ト灘右衛門が顔を見て、
何も言はずに役人を歸した代りに、なんと、かくまつて下さるまいか。
灘右　ハテ、味に仕込んで來たな。シテ、何故かくまつてくれろと云ふのだ。
五郎　人殺しの科で。サ、人をあやめた上は所詮助からぬは知れた事だが、逃げ隱るゝは未練なれど、ちつと身に願ひがある故、願ひの叶ふまではどうも死なれぬ。それで男と見かけて頼みまする。どうぞ、かくまつて下さい。

灘右　たとへ血刀を提げて駈込んでも、跡へは引かぬおれが生得、仲間のかせ。
五郎　サア、その仲間へ入れて貰ひたい。
灘右　人をばらして咎めもなく、人違ひで濟んだとは、運の強い人だによつて。
五郎　仲間へ入れて下さる氣か。
灘右　いかにもと云ひたいが、今日はちつと氣のせく事があれば。
五郎　氣のせくは互ひ。こつちも運よく遁れても又跡から人殺しの詮議。大勢に取卷かれぬ内に、貴樣の仲間へ入れて、かくまつて貰ひたい。
灘右　人の身の上どこぢやアない。
ト行かうとする。
五郎　海賊、待て。
灘右　なんと。
ト灘右衛門振返る途端に、五郎、エイと手裏劍を打つ。灘右衛門身をかはす。手裏劍飛石へ立つ。灘右衛門これを見て、
ハテ、心得ぬ。石に立つたるこの手裏劍は。
五郎　なんと覺えがあらうがな。

灘右　この割笄はまさしく。
五郎　ぎやまんの金。
灘右　何がなんと。
五郎　奇態の道具を所持したいはれ。
灘右　紛れもないその笄。
五郎　見知つた譯。
灘右　手に入つた譯。
五郎　いつぞや三笠纓手の松原にて、後日の證據と藏人どのより請取りし、曲者詮議の割笄。
灘右　ハテナア。
五郎　まだ日本に通用せぬぎやまんを所持したるは、正しく異國通路の海賊。凡そ知る者もなきその笄、今打ち掛けしは紛ひもなき正筆の盗賊。
灘右　なんと。
五郎　今川の重寶菅家の御正筆を盗み取りし盗賊、縄打つて引く。腕廻せ。
灘右　そんな事はおらあ知らねえ。
五郎　この場に及んで卑怯な奴の。
ト掛る。立廻り激しくあるうち、灘右衛門が懐中より以前の一軸落ちる。五郎ちやつと取つて、

この一軸こそは。
ト手ばしこく開く。
灘右　わが尋ねる一軸はそれか。
五郎　サア、コリヤア。
灘右　利口さうに押つ開いても、それが讀めるか。
五郎　ハテ、合點が行かぬ。日本にては見なれぬ二十四文字。
灘右　どうだ讀めるか。ほんの盲目の垣覗き。役に立つまい。こつちへ寄こしやアがれ。
ト引つたくる。
五郎　大切なる一軸と思ひの外、合點ゆかぬその一軸。
ト寄らんとする。灘右衛門思ひ入れあつて
灘右　素人が見て役に立たぬものだよ。
ト一軸を巻きながら、呟き〳〵懐中して行かうとする。
五郎　待て。
灘右　まだ用があるか。
五郎　その様子は。
ト切掛ける。立廻りあつて
灘右　コリヤア、何をしやアがる。

五郎　合點の行かぬその一軸。いまだ日本にては用ひぬ怪しき二十四文字。大切になすは異國通路の割符であらうかな。

灘右　それを知つたら、助けては置かれぬわえ。

ト切りつける。立廻り。兩人しやんと見得になる。と向うより捕手頭、以前の形にて出で來る。跡より捕手大勢ついて出て、五郎を見て、

捕頭　人殺しの科人、動くな。

ト五郎、びつくりして、

五郎　何がなんと。

捕頭　ソリヤ。

ト下知する。

皆々　捕つた／＼／＼。

ト大勢、五郎に掛る。これより五郎皆々を相手に烈しきたてあり、このうち灘右衛門二階へ上り隣の二階より傳はり、門の外へ下りる。この間に、五郎皆々を下座へ追込みはいる。灘右衛門悠々として花道へ掛る。向うより梶右衛門、沖右衛門、以前の形にて千兩箱をてんでに擔ぎ出て花道にて、

梶沖　頭。

灘右　コリヤ。

ト思ひ入れ。

梶沖　身請の二千兩。

ト下の方へ捕手頭出で、繪圖を引合はす。思ひ入れ。

捕頭　お尋ねの海賊、動くな。

ト捕手大勢灘右衛門に掛ると、金箱より百兩包みを出して打ちつける。皆々驚きながら金を拾ふこなし。この間に五郎、正面の二階へ上り、障子を明けて、

五郎　海賊め、動くな。

ト聲を懸ける。灘右衛門また百兩を眼潰しに打ちつける。灘右衛門、梶右衛門、沖右衛門、向うへはいる。五郎二階より飛下り、花道のつけにて尻を端折る。思ひ入れよろしくあつて、拍子、幕引くと、五郎一散に向うへはいる。直ぐにちよん／＼の繫ぎにて引返す。

本舞臺。三間の間、正面、高き草土手の上、高さ三四尺の杭垣、下の方に寄せて土橋をしつらへ、舞臺一面に繫つたる蘆間、上の柱は柳の大樹、こゝかしこに稻村を置く。幕の内よりちよん／＼打ち續け、時の鐘にて幕明く。

ト向うより、梶右衞門、沖右衞門、以前の形にて尻をからげ、頰冠りして逃げて出る。舞臺にて兩人行當り、互にびつくりして

梶右　誰かと思つてびつくりするやつよ。

沖右　おれもびつくりした。

梶右　なんとマア、早い足の奴ぢやないか。

沖右　全體、お主もおれも逃げるにやア、ゑご〳〵して惡いよ。

梶右　又知らぬ奴が鳥渡見ちやア、どんな事があつても、われもおれも逃げるやうにやア思はぬぞよ。

沖右　それよ。斯う、たつた二人逃げるとは、頭の前も濟まないぢやアないか。

梶右　所を思へばそんなものだ。この又頭はどうさしやつたの。

沖右　如才のない人だから、今頃は元船へ歸つて、おいらの噂をしてござるかも知れない。

梶右　そんならよいが、跡ぢやないかの。

沖右　アレ〳〵、月も出て來た。そろ〳〵跡へ行つて樣子を見て來ようか。

梶右　おぬしも身を知らない男だ。どうして跡へ歸られるものだ。

沖右　そんなら、ちつと此處で頭を待つて居よう。

梶右　それがいゝ〳〵。

ト花道の方を見て居る。ばた〳〵にて向うより、五郎、以前の形にて走り出で、直ぐに舞臺へ來て、

五郎　うぬらは此處に居やアがつたか。

兩人　ソリヤ、來たわ。

ト兩人逃げ出す。五郎引捕へ。

五郎　うぬらを逃がしては詮議の手懸りがない。サア、海賊の張本の名を名乘れ。

兩人　嫌だ〳〵。

五郎　さうぬかしやアうぬらを引括つて詮議せにやアならぬ。腕廻せ。

沖右　それまで何をして居るものか。三藏、合點か。

梶右　合點だ。

ト掛る。

三人　どつこい。

ト立廻り、梶右衞門、二十四文字の一軸を五郎に引出され、兩人にて引合ひ、これをかせに三人花々しきタテありて、とゞ、半分引裂いて、梶右衞門持つて逃げ

て向うへはいる。半分は五郎の手に殘る。これを五郎、沖右衛門と引合ひ、見得になると、どつさりと鐵砲の音して煙硝火ぱつと立つ。五郎、沖右衛門鐵砲に中り、うんと兩人一度に倒れると、稻村の中より灘右衛門誂への形にて種ケ島の鐵砲を持つて出る。東の歩みより荒川藏人、合羽、股引、大小にて、菅笠と小田原提灯を持ち出で來る。是にて灘右衛門は花道に伺つて居る。藏人舞臺へ來て、五郎の死骸に躓づき、提灯にて能く能く見て、

藏人　ヤア、こりやア身が家來、龍田五郎。何者の仕業。

ト疵口を改め、握りつめたる一通を見て、

コリヤコレ、鐵砲の疵。フム、無念の拳に握りつめたるこの一通は、いまだ日本には見なれぬ文字。さては海賊の仕業に極まつたわへ。

ト灘右衛門、エイと花道より鐵砲を打つ。玉外れて上の柳の木に中る。藏人思ひ入れ。兩人伺ひ寄つて間近くなると、灘右衛門、藏人に切りつける。大どろどろにて舞臺先きへ水氣登る。日覆より三日月出る。兩人きつと思ひ入れ。

藏人　暗夜に月の出でたるは。

灘右　コレ。

ト兩人思ひ入れ。

是より二番目始まり

ト打込みになり、ちよん〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ト　ひやうし幕

二番目序幕

五郎兵衛内の段
引返し麻生浦の段

役名—後五郎兵衛。五郎兵衛女房お波。五郎兵、衛母。海賊玄海灘右衛門。船頭檜垣の五郎兵衛。小松屋惣七。傾城小女郎。揚屋亭主。海賊手下權六。同梶右衛門。荒川藏人。唐人二人。

本舞臺、三間の間、世話場の道具。東の方に二階を取りつけ、これに障子を立てあり、正面、上の方へ寄せて反古張りの障子を立て、下の方に押入れ戸棚、これに人の出入あり。眞ん中に納戸口、佛壇、精靈棚、杉のませ垣、正面に疊を敷き、この下よりも人の出入りあり。門口据ゑ物、下の柱は桃の立

木、その下に石地藏立つて居る。幕の内より袈裟衣の坊主、叩き鉦を前に置き、經を續けて居る。後五郎兵衞、木綿やつし、お波、やつし、世話女房の形りにて、兩人せり合つて居る。老母、木綿やつし、これを支へて居る。この見得、てんつゝにて幕明く。

老母　是はしたり、お客もあるのに、モウよいわいのう。

後五　サア、そのお客があるによつて、尙言はにやアならねえ。コレ、お波、今改めていふ事ぢやアないが、アレ、お寺さまも聞いてござつて、ア、後五郎兵衞といふ者は、聞分のない我が儘なものだと思はつしやる手前があるによつて、尙言はにやアならないよ。コレ、よく聞けよ。全體、先の五郎兵衞は前昨年の七月出て、今日が日までも便りなしに、今年で丁度まる三年、家内の鼻の下を養つて置いたは、誰が蔭だと思ふのだ。

お波　さいなア。その大恩があればこそ、いろ／＼な事言はんすけれど。

後五　けれどなら、なぜ、おれが言ふ事を聞かないよ。

老母　これはしたり、其のやうにいうて居ては、ほんの互ひの水懸け論。いつまで言うても干ぬわいのう。こゝはわしが年役に挨拶しませう。マア、五郎兵衞どのゝ言葉を立てゝ、ちよつと祝言の盃を。

お波　エヽ、お前までが其のやうな事いうて。

老母　サア、氣に入るまいけれど、そこが浮世のよし、不肖ぢやと思うて。

お波　イヽエナア、なんぼさうぢやと言うて、ぬしの生死も知れぬ内に。

後五　ハテ、古い事を言つたものだ。三年このかた戻らぬ五郎兵衞、置き去りにしたは知れた事だ。よし又生き永らへて居てからが、ちつとも大事ないの。なぜと言やれ。丸三年が間、親女房に養ひといつちやア、ツブ三文、五郎兵衞が所からといつて持つて來た覺えはない。スリヤア、これから男を持たうが、亭主を持たうが、言分はないよ。

お波　ほんにまた、どうした事で主は戻つて下さんせぬぞ。世渡る業の船乘り商賣、もしもの事があつて、どこの沖、どこの嶋に居さんせうと、便りのならぬ事はあるまい。

後五　狀一本、言づけ一つせぬからは、死んで仕舞つたか、置き去りにしたのか。あんまり案じる事はないのさ。

お波　たとへ唐天竺へ行かしやんせうと、お袋さまや女房

の事を露程も思うて下さんすなら。
後五　ハテ、五郎兵衞も人間だ。生きてさへ居る事なら、便りも言づけもならうけれども、大かた今頃は弘誓の船の取楫おも楫、蓮の葉船の傳馬をおろし、苧柄の水棹で迎ひ火を、待つて居るも知れないよ。
お波　去年といひ、今年といひ、俗名檜垣の五郎兵衞と、經木に書く時の悲しさ。
ト泣く。後五郎兵衞、むつとして、
後五　エヽ、忌々しい。何の由縁も掛りもない、おれが老ぼれまでを立て過ごし、三年このかた食はせて置いて、嫌と言はれちやア男が立たない。モウ、身代の破れかぶれだ。親子一所に出て失しやアがれ。
お波　なんぼ我儘がいひたいとて、この內はこなさんの內ぢやござんせぬぞ。そりや餘んまりであらうぞえ。
後五　置きやがれ。あんまりとはうぬが事だ。コレ、エエ、町內名前の五郎兵衞が行衞が知れにやア身上は上り物。路頭に迷ふが笑止さに、お袋をかんがくの爲めと、お家主へも改めて、おれが名前に書き替へて置いたからは、こゝの內は立てようと、伏せようと、おれが儘だわ。のう、お袋。
老母　ア、何をいふも女子ほど、腑甲斐ない者はござらぬわいのう。
後五　サア、さつぱり祝言すりやアよし、いやとぬかすと何もかも。
ト老母と顏を見合せ、思ひ入れあつて
サア、言ふまいと思へども、斯ういふ仕打ちやア言はにやアならない。どいつもこいつも叩き出すぞ。
お波　たとへどのやうに言はんしても、滅多にこゝの內を離れる事ぢやアござんせん。氣に入らずば、こなさん出て行かしやんしたがよいわいな。
後五　さう、ぬかしやア、モウ了簡が。
ト棕櫚箒を振上げる。和尚留めて、
和尚　ア、コレ〳〵、氣短かい。マア〳〵、待たつしやい〳〵。
後五　イエ〳〵、放さつしやりませ〳〵。
和尚　サア〳〵、尤だ〳〵。其のやうに氣短かに言はぬものだ。
後五　堪忍袋の緒が切れちやア、ぶつて〳〵打ち据ゑる。放さつしやい〳〵。
ト騷ぎ廻る、和尚やう〳〵留めて、

和尚　サア、そこが男の癇癪だ。また女の方にもそこにやア、何やら斟酌といふがあつて、つい口先でいひにくいは世間にいくらもある事でごんす。既に愚僧が談法にも、丁度このやうなやつさもつさ、燃え返る修羅の焔を押し鎭めるが出家の役さ。マア〳〵、わしに任かさつしやいまし〳〵。

　トこつちへ來て、

和尚　コレ、後家御。

　トお波むつとしてあちら向く。

ハヽヽヽ、後家と言つたが愚僧が誤まりのやうなれども、モウ、三年も便りが無いけりやア、後連れを持つても大事ござらぬ。ハテ、蛇の道はへび、色事の道は坊主でなけりや知らぬ事だ。わしも出家だ。互ひの爲めに惡い事は言ひませぬ。マア、なんであらうと、後五郎兵衞どのゝ言はしやる通りに、コレ、お袋も共々勸めさつしやい〳〵。

老母　ハイ〳〵、お寺さまもアノやうに、仰やる事ぢやによつて。

和尚　マア、取敢えず愚僧が仲人。サア〳〵、杯をさせませう。

後五　それはいかい世話でござります。

和尚　色事の世話は出家の役でござる。コレ〳〵、幸ひ蓮の葉の嶋臺、桃や柿もありのみのいるがめと言つても、滿更精進でも濟むまい。

後五　幸ひ、こゝに鯖がござります。

　ト盆へ載せて出す。

和尚　しかも目出たい、夫婦中もひつついて居るやうに、是がようござる〳〵。

後五　ハテ、お寺さまも通つたものだ。

和尚　イヤモウ、當世偏屈にすると、抹香臭いと笑はれて困りますよ。サア〳〵、年役にお袋から始めさつしやい〳〵。

　ト老母、徳利と杯を盆に載せて、

老母　アノやうにいうて、お世話なさるゝ御寺さまのお言葉。何をするのも家の爲めぢや。サア、取上げて後五郎兵衞どのへ。

　ト無理に杯を渡し、注がうとする。

お波　マア、待つて下さんせ。

後五　待てか。コレ、三年過ぎたぞよ。

お波　アイ、成程三年過ぎたら、大事ない事ぢやげなけれ

ど、アレ見て下さんせ。俗名檜垣の五郎兵衞と、ぬしの名がありありとある前で、この杯しては何うも心が濟みませぬわいなア。
後五　スリヤ、どのやうに言つても。
和尚　ソリヤア、お波どの。惡い了簡でござるぞや。
お波　サア、聞分けのない者ぢやと思ふでござんせうが、せめて佛さま達を送るまで待つて下さんせ。ハテ、三年目の佛さへ歸してさへなら、お前の言葉を立てゝ。
後五　杯するか。
お波　アイ。
老母　またさう言やれば尤もでもあり、こゝの處を後五郎兵衞どの。
和尚　成程、こりやア、了簡ものでござるぞや。
後五　よいわ。一日や二日にめかりはあるまい。必ずその言葉を違へるなよ。
和尚　ハテ、そりやア、愚僧が請人でござるわな。
ト向うより、驅けて出て、
△　モシモシ、お袋。内に御座るか御座るか。
老母　ヤレヤレ、あわたゞしい。何事ぢやぞいの。
△　何事か存じませぬが、五郎兵衞が親を呼べと、御代官さまの言ひつけだ。早うござりませござりませ。
老母　ナニ、五郎兵衞が母に御用があるとは。
ト お波、顔を見合せ、
お波　モシ、氣遣ひな事ぢやあるまいかいなア。
老母　おしつけ行きませうわいなア。
△　イヤ、おしつけぢや濟みませぬ。急な事だ。早くござりませござりませ。
ト無理に老母を連れて向うへはいる。皆々思ひ入れ。
お波　ハテ、心許ない代官所の御用。もしもや、ひよつと。
後五　一大事を、
ト思ひ入れ。
お波　エ、。
トびつくりする。
後五　ハテ、心許ない
ト兩人思案をする。
和尚　イヤモウ、公儀の事はけたゝましい。わしらが方も宗門の事で、寺中が大分むづかしうござる。もし其のやうな事ぢやアないか。愚僧もお暇いたさう。
後五　ア、モシモシ、折角お出でなされたのに、せめてお

酒でも上げませう。
和尙　イヤ〱、所詮精進物では。
後五　ハテ、お世話になつたお禮だもの、蒲燒ぐらゐは奢りませう。
和尙　アノ、愚僧に。
後五　おどりこ汁もござりますぞへ。
和尙　そんならそれを肴にして。
後五　奥で一杯、お寺さま。
和尙　忝ない。
後五　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、兩人奥へはいろ、お波跡へ殘り。
お波　あわたゞしい今のやうにお袋さまを呼び迎へ、もしや惣七どのゝ、お身の上を。
ト思ひ入れ、あたりを見廻し。
底意の知れぬ後五郎兵衞に、見咎められては大事と思ひ、御不自由なる押入れ住ひ。この間に鳥渡。
ト押入れを明けんとする。奥より後五郎兵衞、膳拵へして持つて出て來る。お波方々窺ひ、後五郎兵衞を見てびつくりする。
後五　エヽ、仰山な。この女は何をして居たのだ。きりきり奥へ行きやれな。
お波　アイ、行くわいなア。
トもじ〱する。
後五　ハテ、お寺さまが呼んでござるわへ。
お波　エヽ、なんの構はいでも、大事ないわいなア。
後五　コレ、エヽ、お袋は留守なり、なんぞ茶漬でも出さうと思つて、おれ一人てん〱舞ひをするわえ。
お波　ほんにその膳は、誰に据ゑるのぢやえ。
後五　エヽ。
お波　誰に据ゑるのぢやえ。
ト後五郎兵衞こまる思ひ入れ。
後五　こりやア、ヲヽソレ〱、精靈棚へ。
お波　滅相な、腥さ物を精靈さまへ上げるといふやうな事が、どこの國にあるものかいなア。
後五　サ、そりやア。
ト困る思ひ入れ。
ハヽヽヽ、流石は女だ。發明なやうでも物を知らない。總體精靈を祭るに、生死の知れぬ人へは腥さ物を据ゑるといふ事。
お波　フム。そんならその膳は。

後五　行衛の知れぬ五郎兵衞へ菩提の爲め、南無阿彌陀佛
々々々々々々。
お波　それでも、どうか佛の前へは、勿體ないやうぢやぞ
え。
後五　ハテ、蔭の膳さへ据ゑるぢやアないか。
お波　そんならどこぞ、わきへ据ゑて置いたがよいわいな
ア、
後五　そりヤア、おれがよいやうにするから、おぬしは奥
へ早く行きやれ。
お波　サア、行くわいなア。
ト押入れの方へ思ひ入れして立ち兼ねる、
後五　ハテ、行けといふのに。
お波　エヽ、行くわいなア。
ト唄になり、お波ひんしやんとして奧へはいる。後五
郎兵衞跡を見送り、佛壇にある叩き鉦を二つ打つと、
正面の疊を上げ、百日鬘、海賊の灘右衞門、出ようと
する。
後五　ヲツト、出まいぞ〳〵。たつた今、お袋に用がある
と、代官所から呼びに來た。もしも、おぬしが詮議ぢや
ないかと心遣ひするも、まだお波が心に從はんゆゑ、う
まく行きやア心置きなく匿まふつもりだ。もうちつとだ
程に、辛抱して人に覺られやんな。なんぞ用でもある時
は、今のやうに鉦を打つから、どんな事があらうとも、
鉦の鳴るまでは滅多に出まいぞ。
お波　アイ〳〵、後五郎兵衞どの〳〵。
ト呼ぶ。後五郎兵衞びつくりして、膳を脇へ置き、疊
を元のやうにする。お波出て來る。
後五郎兵衞さん〳〵。
後五　ヲイ〳〵、なんだよ。
お波　お寺さまが呼んでぢやわいなア。ちやつとござんせ
いなア。
後五　なんだ、坊主が用がある。うつちやつて置け〳〵。
お波　それでも酒の對手が無うて、飲まれぬと言うてぢや
わいなア。
後五　飲まれないでもよいわえ。おぬしの酌ならおらあ飲
めるの。コレ、お波や。なぜか、おぬしと樂々とした話
もして見ないがの。幸ひ今はお袋も留守なり、丁度よい
間だ。
ト抱きつく。お波ふり切り。
お波　エヽ、熱苦しい。なんぢやぞいの。

後五　ハテ、ひんしやんと何の事だ。杯はしないでも、モウ、何をしても大事ないわ。

お波　大事なうても惡いわいな。

後五　おぬしもちつとは附合つてくりやれ。

ト無理に抱きつかうとする。お波逃げろ。てんつゝになり、向うより庄屋、老母を連れて出て來る。

庄屋　サア〳〵、目出たいぞ〳〵。

老母　ほんにモウ、優曇華と言はうか、思ひ懸けない事でござるわいのう。

庄屋　イヤモウ、生佛の精靈祭り。コレ、御内儀。久しぶりで嬉しからう。持ち合ひの牡丹餅で馳走さつしやれ、さつしやれ。

後五　置きやアがれ、餅どころか、飛んだところへ失しやがつた。

庄屋　いかさま。貴樣は嬉しくはあるまい。マア〳〵、内儀は大悅だ。サア〳〵、迎ひに出さつしやい〳〵。

お波　そりやマア、何事でござりますえ。

庄屋　ハテマア、何であらうと、目を驚かす事だよ。

老母　ほんにあんまり嬉うて、びつくりしました。

お波　エヽ、そんなら、アノ惣七さまがの。

老母　エヽ、コレ〳〵、つか〳〵物を言はぬものぢや。なんであらうとわが身の爲めには目出たい事ぢやわいのう。

庄屋　これはしたり、目出たがつてばかり居ずと、早く迎ひに出たがよい。

ト揚幕にて、サア〳〵ござれ〳〵と聲する。唐樂になり、百姓二人、跡より五郎兵衞、總髮を藁にて束ね、唐人のやうなる形にて、苧ざしの丸ぐけを締めて出て來る。跡より唐人二人、長煙管、煙草入れを持つて出で、花道に止まり、是より出放題に唐言葉をいふ。

兩人　さいもうるんへいす。

五郎　こんたかりんとう〳〵。

唐一　はんふくきやアまんすう。

唐二　りんたかけんきうとう。

五郎　とうはうまんきんすう。

兩人　まるにやア〳〵。

百姓　何を言はれるか、一つも合點がいかない。マアマア、内へござれ〳〵。

ト又唐樂になり、皆々舞臺へ來て、

皆々　サア〳〵、戻られたぞ〳〵。目出たい〳〵。

トお波、皆々を見てびつくりして氣味を惡がる。皆々
三人を見て膽を潰す。
五郎　しやうきんくんしへない〳〵。
兩人　じばくん〳〵。
ト五郎兵衛眞ん中へ坐る。唐人二人も坐り、煙草を呑
んで居る。
後五　お袋、目出たい〳〵と言はつしやるが、何が目出た
い。
お波　とんと合點が行かぬわいなア。
庄屋　コリヤア、お內儀。どうしたものだ。五郎兵衛どの
でござるわいのう。こなさんも又、挨拶したがようござ
るわいのう。
五郎　いかさま。こりやア庄屋どのゝ言はつしやる通り、
挨拶を致さぬは惡うごんした。コレ〳〵、かゝあ、樣子
は道々母者人に聞いたが、さぞ案じたであらうなア。
トお波びつくりして、ためつすがめつ見て、
お波　ヤア、ほんにこちの人ぢや。五郎兵衛どのぢや。テ
モマアきついやつれやう。あんまり姿が變つたゆゑ、と
んと見違へました。ようまめで歸つて下さんしたなア。
トいろ〳〵嬉しきこなし。

後五　なんだ。アノ毛唐人が五郎兵衛だと。
ト五郎兵衛を見て、
といつて近づきでなけりやア、見知らう筈はないが、ハ
テ、アノ唐人が五郎兵衛ぢやまで。
トむつとして坐る。
お波　エイ、せうびんながら、こちの人、五郎兵衛どので
ござんす。よう今まではいろ〳〵と、無理な事ばつかり
言はしやんしたなア、
老母　これのう、何も言やんな。此のやうな目出たい嬉い
事はない。ほんに先つきにも、何やかやと世話燒いて下
されたお寺さま。五郎兵衛が戻りやつた樣子を聞かせま
したら、のうお波。
お波　ほんに奧にぢや。鳥渡お知らせ申しませう。〇お寺
さま〳〵〳〵。
和尙　ヲイ〳〵、なんぢや〳〵。
トいひながら出て來る。
お波　モシ、こちの人五郎兵衛どのが、戻られましたわい
なア。
和尙　ナニ、亡者となりし五郎兵衛が戻つたとは。
ト五郎兵衛を見て、

ア、眞事や、遠國波濤にて空しくなりし者は、妻子を慕ひて再び魂魄歸り來ると聞きしが、ア、爭はれぬものでござる。これ皆心の迷ひなれば、

ト珠數を出し、

南無幽靈出離、生死頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々。

唐一　たいすらこうきちよびなん〳〵。

五郎　せいすうこうたかりんとん。

唐二　きうらいこうちう。

お波　ありやアマア、なんの事ぢやぞいなア。頓と譯が知れぬわいなア。

和尙　成程。あれは知れぬ筈でござる。唐言葉をいはつしやるのでござる。わしはもと入唐したゆゑ。唐音は知つて居ますが、御内儀には分るまい。

お波　スリヤ、お前さんには、アノ言ふ事が知れますかえ。

和尙　成程、知れまする。先づ今のはなんの事ぢやと思はつしやるぞ。あれはもう行くが、かの女に言傳をして遣らぬかといふ事さ。

お波　ほんに油斷も隙もならぬわいなア。

老母　ア、コレ、なんぼ悋氣しやつても、此處から唐までは屆かぬわいの。

唐兩　とんきんつうふう。

五郎　いんつんちやん〳〵ろけんとん。

お波　又アノやうにいうてぢやわいなア。

和尙　あれは其のやうに悋氣しても、おれが留守に間夫をしたらうといふ事でござる。

お波　なんぢやえ、わしが間夫をしたえ。

ト腹を立つ。

お前こそ、行かしやんしたゆゑ、性惡をして故鄕へ歸る事を忘れてゞあらうがな。五年七年戻らしやんせぬとて其のやうな心はござんせぬ。お前こそちよん〳〵でござんせうがの。

唐一　とんひよこきんとん〳〵。

五郎　とんりんゑんけんふう。

お波　又アノやうな事をいうてぢやわいなア。

和尙　あれは、モウ歸らうと言へば、五郎兵衞どのが、もつと逗留して猿の見せ物や文福茶釜の開帳でも見物して行けといふ事でござるわいの。

五郎　いんしんこうきい〳〵。

唐兩　なむきやらちやんのう〳〵。
　ト立つて五郎兵衛、唐人、互ひに默禮して、
まるやア〳〵。
　ト又三度默禮して、兩人花道へはいる。
庄屋　あれがほんの唐人の戯言。南無きやらちやんと合點がいきませぬ。ハヽヽヽヽ。五郎兵衛どの、目出たいついでに、どういふ譯で、三年振りで戻つた譯を、言つて聞かさつしやい〳〵。
五郎　いかさま、不思議に思はつしやるも尤も。指を折り日を數へて見れば丁度三年前の事。忘れもせぬ七月の物前、方々の荷物を積んで伊勢浦へ乘出し、七八里も行くと思ふと、俄かに日和が變つて眞黒雲のまだらでん。何が日頃大禁物の大雷鳴、膽を消して氣も魂もうはの空、楫柄持つて覺えぬ大難、流れ次第の泥海へ吹上げられたれば、渺々たる離れ島、いと物凄く吹く風に、フッと正氣がついてあたりを見れば、かこの者、炊ぎのわつぱも前後を忘れて目を廻す、船の内で眼に掛かつたは砂糖の荷物、これ幸ひと引出して、各々に含ませてあちこちするうち、やう〳〵人心地がついて、そこ此處より船を見つけて駈寄つて、何かは言へど分らばこそ、しやくわんしやくわんの唐人言葉に、いつとはなしに互に覺え、馴染むにつけて故郷の戀しさ。異國の人に世話になつて、今日といふ今日戻つて見れば、思ひ出せしなむきやらちやんのうとらやア〳〵。
　ト嬉しき思ひ入れ
庄屋　ハテナア。それで大概樣子が知れた。そんなら是から直ぐに代官所で仰せつけられた通り、この以後船乘を止めませうといふ印形をせにやアならない。サア〳〵、五郎兵衛どの後五郎兵衛どのも、一所にあゆばつしやれ〳〵。
後五　それをおれが知つた事か。おらア行くにやア及ぶまい。
庄屋　それでも、こなたは町内の名前ぢやないか。
後五　そんなら、こゝの内はおれが名前だによつて。
庄屋　行かずば世間へ濟むまいぞえ。
　ト後五郎兵衛思ひ入れあつて、硯箱を持つて出で、五郎兵衛が前に置き
後五　五郎兵衛、鳥渡書いて貰はう。
　ト五郎兵衛、後五郎兵衛が顏を見て
五郎　そりやア、何を。

後五　去り狀を。
五郎　アノ、お波を去つたといふ。
後五　いかにも。
五郎　ハテナア。
　ト思ひ入れ。
老母　ヲヽ、わが身の留守の內は、いかい世話になつた後五郎兵衞どのぢやわいの。
五郎　アノ、こなさまが後五郎兵衞どのとやら。終に逢うた事もごんせぬが、永々の留守のうち、母者人をはじめ女房どもが事まで、いかい世話であつたげにごんすの。
後五　ナニサ、ほんの心ばかりさ。
五郎　イエ〳〵、いかい世話であつたげにごんす。
五郎　サア、その世話をしたも、ほんの賴もしづく、おぬしが永々の留守のうち、お波はもとよりお袋が路頭に迷ふが氣の毒さに、ハテ、涙脆く生れたおれが因果で、よそ目にも見て居られず、いらざる事だが世話をしたも、ナア、お袋、こなさんの心にある事だ。長の年月づぶ三文便り音づれをせぬは、親も女房も飽き果て、こりやア置き去りにしたと思つて、ちつと古いが、こんな不思議が唐にもあるにもしろ、目出たいの嬉いのと小胸が惡い。何のこつた、よしにしろ。蟲唾が出るぞ。サア、是からは眞劍勝負だと、サア斯う言つちや角があつて惡いによつて、何も言はないによつて、さつぱりと去狀書いて、波風なしに濟して仕舞ふが、マア、當世上分別でありさうなものぢやアないか。
五郎　成程、殘暑もまだ强いに汗水流して言ひ合ひでない、いかにも去狀書いて遣らう、と言ひたいが、おらアまあ嫌だ。書くまいわえ。
後五　何を。
五郎　イヤサ、去狀の事はさて置き、恥かしい事だが、いろはのいの字も、右から引くか左りから引くか、つひしか筆を持つた事もないよ。
後五　アノ、おぬしが。
五郎　確かな證據は、庄屋どの、面目ないがほんの無筆だ。
後五　書かれまい。成程おぬしは書きそもないものだ。
庄屋　コレサ、五郎兵衞どの、マア內證のいざこざはいつでもなる事だ。ちつとも早く代官所の印形を仕舞ふがようござるわいの。
後五　イ、ヤ、わしやア判は押しますまい。

【庄屋】コレ、我儘も事による。ハテ、大切な代官所の。

【後五】サア、その大切な代官所の判だによつて、尙ならないといふ事よ。

【庄屋】そりやア又なぜ。

【後五】ハテ、能く聞かつしやい。この內の名前の後の五郎兵衛だといふ心で、後五郎兵衛々〱々〱々々々と呼ばれて、首代の判を押したり、二人三人立て過ごして居るは、なんの爲めだと思はつしやる。

【庄屋】サア、それは。

【後五】高でお波と夫婦になつて〇と、サア思ひのほか、前の亭主が戻つたはな。よしか、所が五郎兵衛がおとなしく、永の年月づぶ一つ養ひを寄こしませぬは。私が重々の誤まり、不調法でござりますと、去狀書いて渡しやア何も言分はごんせぬわ。そいつを、なに、合點違ひに去狀書かにやア、矢つぱり五郎兵衛が女房。よしみもない女房の世話、大事の判までおし散かして、ひよつと小みづがあつては、ほんの喩への通り、持つた棒で叩かれるやうなもの。マア〱、こんな怖い事はよしにしませう〱。

【庄屋】いかさま、さう言やア尤もなり。

ト五郎兵衛いろ〱思ひ入れして、後五郎兵衛が側へ來て、

【五郎】後五郎兵衛。

【後五】なんぞ用か。

【五郎】おれが無筆だといふ事を、嘘だと思つてゞあらうが、船玉冥利。

【後五】ほんの事か。無筆であらうが、代官所では重ねてから、船乘商賣を止めませうと、受合つて歸つた五郎兵衛が、船玉の誓言にはちつと呑み込まない。

【五郎】そんなら何うでも。

【惑五】去狀を出す事が嫌なら、おれが名前もこれぎり。家內を食はせて置いた算用から先へして貰はう。

【老母】後五郎兵衛どの。そりや又あんまりでござるわいの。

【後五】ハテお袋。言ふ氣もごんせぬが、相手の方から強く出りやア、せう事なしに言つて見るのさ。

ト皆々當惑したる思ひ入れ。

【五郎】成程、事によつたら男づく、いかにもきつと算用をも。〇といつても久し振で、戻るや否や、何のかのと、近所の手前もある。マア、相互ひになんにも言はずに、

丸三年便りをせねば、女房がといつても言分もなし、又どういふ譯で、前の男が戻つて來たといつて、木で鼻をこくつたやうにもなるまいわさ。そこが世間のよし不肖と、わしさへぢつと了簡すりやア、なんにも言分はごんせぬわいの。

後五　スリヤア、三年も便りをせにやア、女房が男を拵へても大事ないか。

五郎　知れた事さ。

後五　アノ町内はおれが名前のこの内でも。

五郎　世話ぢやアあらうが、當分こゝの内に、居候にして貰はにやアなりますまいかえ。

後五　ハテ、通り者になつたのう。

庄屋　サア／＼、去狀も絲瓜も要らない、上十五日、下十五日と按摩の書出し同前に、互ひに判を押したが能うござんす。

和尚　ソレ／＼、卽ち寺請狀も愚僧がこれで呑込むからは、マア／＼、二人ながら一所にござれ／＼。

五郎　これはお寺さまの御挨拶有難うござります。しかしこの形ではあんまり。

庄屋　いかさま。そんなら月代でも剃つて、跡から來たがようござる。マア／＼、後五郎兵衛どの歩ばつしやい歩ばつしやい。

後五　そんなら五郎兵衛、判を押すぞよ。

五郎　いかい世話でごんすのう。

後五　跡で小みづのないやうに。

和尚　そりやア愚僧が呑込んで居ますわいのう。

後五　五郎兵衛。

五郎　後五郎兵衛。

兩人　後に逢はう。

ト唄になり、後五郎兵衛、庄屋、和尚、向うへはいる。合方。三人顏見合せ、

お波　ほんに最前から、何やかやの譯を言はうにも、辛氣な事ばつかり。どうかかうかと永の年月、泣き明かした今日の今、無事な顏見て嬉しい中にも、聞かしやんす通りの譯といひ、お袋さんの案じといひ、あんまりの事で胸が迫つて、いひたい話も出ぬわいなア。

ト泣く。老母、思ひ入れあつて、

老母　イヤ／＼、それよりはわしが心の苦しさ。代官所から急のお召し、はつと思うて、心ならずいて見てあれば、五郎兵衛の戻りやつて下さつたと、悦ぶうちにも義

理の濟まぬは、
　ト押入れに思ひ入れあつて、
そなたとは義理のある仲、惣七が放埒。
五郎　ほんに忘れて居りました。惣七は無事でござります
かな。
老母　そなたの手前、言譯がないわいの。
　ト泣く、
五郎　言譯がないと仰しやるは、色事でがなござりませ
う。ハテ、若い内はある習ひでござります。
老母　サア、その色事でやつさもつさ、わが身が渡して置
きやつた金も遣ひ果して、まだその上に。
五郎　ハテ、能うござります。なんのそれを私に氣兼ねな
さる事はござりませぬ。蓄へといつても僅な金、足掛三
年といふもの便り音づれも致しませぬものを。さぞ御不
自由でござりましたらうの。
老母　一月たつても、二月待つても、便りが無いゆゑ、嫁
女やわしが着換へを一つ賣り二つ賣り、詮方盡きてアノ
後五郎兵衞の世話になつたその義理で、嫁女、勸めた詞
が今ではどうも。
　ト思ひ入れ。

五郎　ア、年寄りといふものは、只くど／＼と何の言は
いでも濟む事を、ハテ、ようござります。イヤ／＼、定
めて庄屋どのが待つてゞあらう。ドレ、身拵へでもしよ
うか。
お波　ほんにまあ、暑い時分に其のやうな着物を着て、早
う脱いで、さつぱりと月代でもさしやんせいな。
五郎　いかさま、これでも行かれまい。そんなら鳥渡奥で
行水でもせうか。
　ト唄になり、五郎兵衞、お波を連れて奥へはいる。老
母思ひ入れあつて、門口をしめ、押入れを明けると、
惣七、小女郎、出で、
惣七　何かの様子は承りましてござります。
小女　わたし等ゆゑに、お袋さまのさま／＼の御苦勞。
老母　さいのう。久し振で五郎兵衞が戻りやつても、嬉し
いにつけ、悲しいはわが身達の身の上。
惣七　ふとした事で小女郎まで、思はず日蔭の身となつて
母者人のいかい御苦勞。お波どのゝお心遣ひ、久し振に
て戻られし、兄貴にさへも逢はれぬ因果。いつそ死んで
仕舞ひたうござります。
老母　わつけもない事いやるわいのう。わしが爲めにも血

を分けた子ながら、お主のお種のこなたぢやもの。どうぞ身の言譯を立つて、好いた同士女夫にしたいばつかりで、心を置かずわしが心ざし、必ず無にして給もんなや。

惣七　サア、そのお心ざしは有難いけれど、お國には若殿さまの御難儀の上、この小女郎まで日蔭の身の上。もし見つけられては關破りの科人。

ト揚幕より揚屋の亭主、門口へ來て是を聞いて居る。

老母　ア、コレ、壁に耳あり、滅多な事を言ふまいぞ。

亭主　關破りの科人、見つけたぞ。

ト門口を明けてはいらんとする。皆々がつくりして、老母これを支へる内に、惣七、小女郎、二階へ上る。

どこへ失しやアがる。待ちやアがれ〳〵。

老母　是はしたり、何をマア聲高に言はいでも大事ござらぬわいの。

亭主　ハテ、大事ない。言ひましよ。筑前の博多から足のついた奉公人。蟲のあるのを合點で安く買つたも、當分は御所方の素人だのと、うまく一杯かかせるつもりで仕掛けた所へ、直ぐに蟲めがつき纒つて、大事の身請の邪魔をひろぐ。南無三こりやア手離すがよいと思つて、去るお客へ呼びこんで、三百兩に値がなつたを、どうぞこつちへ身請させてくれろと、手つけの百兩に欺されて、一日過ぎ二日過ぎても、金の埒が明かない。サア、催促の理詰めに會つて、挨拶なしについと駈落ち、かくまひ所は大方こゝの内と、立ち聞きするも知らないうつそり。引摺つていて金にするのだ。いけ面倒な放さつしやい〳〵。

ト行かうとする。老母縋つて留め、

老母　サア〳〵、尤もぢやけれど、マア〳〵、待つて下さりませ。

亭主　エ、面倒な。退かつしやれ。

ト老母を突き退けて、つか〳〵と二階へ上る。二階の内にて五郎兵衞、揚屋の亭主が手を捩上げる。

アイタ、、、、。うなアどいつだ。エ、。

五郎　イヤ、誰でもごんせぬ。わしアこの家の亭主だが、シテ、こなさまは誰だ。

ト言ひながら、五郎兵衞剃立ての月代、浴衣がけにて、揚屋の亭主が腕を捩上げて出る。

亭主　おらア小女郎が親方さ。

五郎　その又小女郎が親方が、何用あつて斷りなしに人の

二階へ泥脛を踏ん込んだ。

亭主　ハテ、知れた事、關破りの科人を見つけたによつて。

五郎　おぬしは所の役人か。

亭主　エ。

五郎　關破りとあるからは、詮議するのは代官所の役目、おぬしは代官所の役人か。

亭主　サア、そりやア。

五郎　狼藉ひろぐと腰骨を踏んべしよるぞ。

ト見事に取つて投げる。亭主起上つて、

亭主　ヲ、、痛い〱。コレエ、、足腰の拔ける程、うなアよく投げたな〱。腕づくならうぬを又、

ト五郎兵衛を見て、氣味の惡きこなし。

成程、コリヤ惡かつた。代官所へも屆けずに、踏ん込んだのはこつちの誤まり。さらば是から注進と出掛けべいか。

ト行かうとする。

五郎　待て。

亭主　なんぞ用か。

五郎　わりやア代官所へ何と屆ける。

亭主　知れた事だ抱への女郎を。

五郎　身請せう。

亭主　ヤ。

五郎　シテ、小女郎が身の代は。

亭主　ハテ、約束の通り三百兩。手附百兩受取るからは。

五郎　殘つた二百兩の金渡さう。

亭主　忝ない。代官沙汰にしようよりは、現金に二百兩取ればこつちも勝手。ドレ、請取らうかえ。

五郎　今はない。

亭主　エ。

五郎　待つて貰はう。

亭主　ソリヤア、いつまで。

五郎　今宵夜中の鐘を合圖に、といふもあんまり古いから、暮六ツまでに屹度渡さう。ふせうながら待つて下さい。

亭主　イ、ヤ嫌だ。暮六ツまでの事は置いて、といふも矢張り古いかえ。今度はおれも新らしく、了簡つけて待つて遣らう。

五郎　それが上分別。四の五の言はずと歸らつしやい歸らつしやい。

亭主　ハテ、待つくらゐなら歸るのさ。ア、久しいもん

だ。〇とはいふものゝ。
五郎　言分があるか。
亭主　ナニサ、お前。
ト門口へ出て一散に逃げてはいる。老母見送り、
老母　なんにも言はぬ。忝ない〳〵。
ト拜む。
五郎　ハテ、何もいふ事はごんせぬ。先つきにからの詞の端々、今ので大概推量のに、お前の爲めには實の子の惣七が事でござるもの。義理のある私に難儀を掛けるが氣の毒さにと、思召しまするは御尤なれども、ハテ、過ぎ行かれた親仁どのにも義理ある子の惣七ぢやによつて、わしが聞いちやア金輪際、世話を致さにやアなりませぬ。モウ、五郎兵衛が戻つたからは、お前に是ほどでも御苦勞は懸けませぬ。大船に乘つたと思つてマア奥へでも行つておよりませ。
老母　テモさても、頼もしいそなたの心ざし聞くにつけ、憎い奴はアノ惣七。
五郎　ハテ、指が汚ないとて切つては棄てられぬわいの、何も言はずとマア奥へ。
老母　ドレ〳〵、そんなら行きませう。思へば苦勞な世界ぢやのう。
ト唄になり、老母心を殘して奥へはいる。
五郎　いかさま思へば、久し振で親の位牌所へ戻つて來たも、則ち先祖の引合せでがなあらう。ドレ、佛壇へ行つて親仁どのに對面せうか。
ト佛壇へ向つて叩き鉦を鳴らすと、疊を上げて瀬右衛門、以前の形りにて下より顔を出す。五郎兵衛びつくりする。瀬右衛門もちやと引込む。五郎兵衛思ひ入れ。この時、奥にて、
老母　五郎兵衛どの〳〵。鳥渡來てたもいのう。五郎兵衛や五郎兵衛。
ト呼ぶ。
五郎　ハイ〳〵、只今參ります。
ト行かうとして思案して又鉦を叩き、奥へはいる。瀬右衛門またそろ〳〵と出て、あたりを窺ふ。奥にてはた〳〵と人音がする故、ちやつと押入れへ隱れる。奥より、お波、白木のへぎに供へを載せて持つて出て、佛壇へ供へ、鐘を鳴らす。この音にて瀬右衛門、押入の戸を明ける。お波、瀬右衛門を見てびつくりして飛退く。瀬右衛門もちやつと戸をしめる。この途端に花道

り船頭權六、出て來て、つつと內へはいり、行當る。
お波又びつくりして

お波　エ、、びつくりしたわいなア。
權六　わしもびつくりした。
お波　シテ、お前はどつからござんしたえ。
權六　わしやア、あつちの方からさ。
お波　あつちからとは、どつちからござんした。
權六　どつちもこつちも要らない。後五郎兵衞どのへ逢はして下さい／＼。
お波　アノ、後五郎兵衞さんにかえ。
權六　アイ。
お波　後五郎兵衞さんは、代官所へいてぢやわいなア。
權六　なんだ代官所へ行つたえ。

トびつくりする。

お波　テモ、仰山な。又びつくりするわいなア。
權六　びつくりしないで何うするものか、代官所へは何しに行きました／＼。
老母　お波や／＼。早うおぢやいの。

ト奧にて呼ぶ。

お波　アイ／＼。

ト行かうとする。

權六　コレサ、お內儀。代官所へは何しに行きましたよ。
お波　サア、それはな。
老母　お波や／＼。

ト又呼ぶ。

お波　アイ／＼。
權六　ア、コレ、樣子を聞かせて下さい／＼。
お波　サア、その樣子はな。
老母　是はしたり、なぜおぢやらぬぞいの。

ト又々呼ぶ。

お波　アイ、今參ります。

ト行かうとして、權六を見て合點の行かぬ思ひ入れあつて、押入れに心をつけ、思案して

さては。

ト思ひ入れ。權六びつくりして、

權六　まだ其處にござつたか。

ト側へ寄らうとする。お波は奧へ駈けてはいる。

これさ／＼。

トうろ／＼して居る。花道より後五郎兵衞出て來る。これにて權六下の方へ伺ひ來る。後五郎兵衞直ぐに舞

臺へ來て、内へはいり、以前の膳を取つて來て、鉦を叩く。灘右衞門出て來ぬゆゑ鉦を叩きながら方々窺ふ。門口より權六顔を出し、

權六　後五郎兵衞どの。

後五　コレ。

ト思ひ入れ。

權六　こなさんの頼ましやつた岩への手紙を、ぐわらり引つたくられて。

後五　そんなら、アノ灘右衞門をかくまつて置くといふ事を知らせてやつたアノ手紙を。

權六　ぐわらり引つたくられて仕舞ひました。

後五　イヽサ〳〵、なんぼ引つたくつても、日本の奴等にやア、一字も讀める事のならねえ二十四文字。氣遣ひはない〳〵。それはいゝが、

ト思ひ入れして囁き。

合點か。

權六　合點だ。

コレサ。

ト疊を上げ、下を覗き、思ひ入れあつて、權六椽の下へ忍ぶ。灘右衞門そつと戸棚を明けて出る。

サア〳〵、ひもじからう。マア〳〵、飯でも食つたがよい。

トこのうち始終二階の方を見て、うろ〳〵して居る。

コレサ、何も氣遣ひはない。山が崩れて來ても、びくりともしない手前が、

ト思ひ入れして、

ハヽア、博多小女郎に逢ひたいのか。

灘右　何を。

後五　この家の内に居る事は成程おれも知つて居るが、惡いぞよ〳〵。昔から名ある大將も、この道ばかりは逃れ得ず、恥辱を取つたはまゝあるならひ。と斯ういふおれも色の道だ。外の事のやうぢやアない。つひうか〳〵とアノお波に迷つて、往生づくめにこの家にはいり、口說き落さうと思つて居るが、おぬしがやうに飯も食はずに、さう又野暮に眞實心から、うか〳〵するほど迷ふといふは、あんまりだぞよ〳〵。ハテ、互に譯ある兄弟の中で、異見をするもおぬしが爲め、又それはかりぢやない、折があらば言はう〳〵と思つて居たが、廣い天下に逃げ隱れ、佇み所もない樣な身の上になつたも多からうに、人の寶を我が物と命を元手の海賊强盜、泥棒といはれて

も榮耀がしたいか。餘りといへば見下げ果てた、淺ましい根性だなア。

ト灘右衛門始終押默つて居て、ずつと立つて行かうとする。

灘右　おぬしは物も言はずとどこへ行くのだ。見下げ果てられて、一日も養ひ受けて居るでもない、とても命を元手にして、海賊強盜となるからは、兄貴緣者の身寄りがありやア、まさかの時の足手纏ひ。こつちから緣を切つて出て行くのだ。

後五　アノ、足手纏ひが面倒さに。

灘右　兄弟の緣切つて、一本立ちの灘右衛門。

後五　後五郎兵衛と血なみを切つても。

灘右　やめられぬのが、しにせた商賣。

後五　兄が意見も親の事も。

灘右　榮耀榮華にやア替へられぬ。

ト行かうとする灘右衛門を引き据ゑ、

後五　チエ、こなたはのう。〇今改めて言ふぢやない。斯うなるからは言はにやアならねえ。コレ、人間の根性があらば、耳を穿つて能く聞かつしやい。幼な心に忘れもせまい。おれが五ツの年の事、こなたの此處の親御といふは、この日本の人ぢやアない、三韓の大將李東英とて、智仁勇兼備の良將なりしが、日本を切り從へん爲め、釜山海の湊を離れ、數萬の軍船を引率し、肥前の唐津の濱に對陣なす。元より勇氣に撓みなく、年月日夜の軍法にて、いづれ疎かはなかりしかど、我が神國の威德には、攻め得る事も叶はずして、空しく月日を送るうち、陣中の疲れを厭はん爲め、忍びて通ふ遊里の場所は、おほし湊の長崎、丸山、あやはにて、この後五郎兵衛が親、みよしの萬兵衛、大和唐土替れども、替らぬ誠は李東英の、情けを身籠る傾城あやは、臨月のその折柄、李東英には重病にて、今日をも知らぬ命のうち、親萬兵衛へ細々と、頼みも果敢なきこの世の別れ。大將死すれば殘りの軍勢、足をも溜め得ず退陣して、わが本國へ立ち歸る。當座に空しくなりしかど、跡にて易々生み落す、水子は即ち灘右衛門、母御もその時空しくなりしと、親萬兵衛の物語り。この後五郎兵衛が弟ぢやと、おほし湊に暮らすうち、爭はれぬはこなたの生ひ立ち、心に怒りある時は、自然と顯はす額の文字、犬といふ字は三韓の種、恥かしき親御の素性、この日の本を傾けんと、勇氣の親御に引替へて、子は海賊の張本となつて、色香に迷ふ未練

の根性。それでもこなたは人間か、いかに知らない昔とて、餘りといへば淺ましい、忌々しい心ぢやなア。〇これを思へば下郎でも、一旦賴む賴んだと、詞をたがへぬ親萬兵衞。こなたをどうぞ名僧とも、智識とも呼ばせる氣で、六つの時から寺へ上ぼせ、手習ひ學問精出さつしやれと、言ひ死にしたも構はずに、十七年以前に寺を駈落ち、義理ある弟を失くしてはと、尋ね廻るか所々方々、廻り〳〵て三年以前、博多の浦へ行つた時、思ひも寄らぬ船の內、呼びかけられて能く〳〵見れば、互ひに忘れぬ親の形見と、一つ二つ話すうちにも、世に恐ろしい海賊の世渡り、善からぬ事と思つたが、能く〳〵思へばこのおれに、血を分けた眞實の兄だと思つてござればこそ、異國通語の隱し言葉、二十四文字の密書まで、見せさしやつた昨年の秋、わしもその時この國へ來て、ふとした事で此處の內へ入り、聟でもなし、掛り人でもなしに、この春から居候。その時いつた詞を忘れず、二月跡に尋ねてござつて、かくまつてくれとの段々の賴み、お主も同前のそなたなりやア、見捨てる筈は無けれども、根強く仕込んだ根性骨、今日は言はうか翌日は意見と、一日々々待つうち、とう〳〵今では紛ひもなき、海賊の張本玄海の灘右衞門と、斯う顯はれて來たからは、どうで親御の本意は遂げまい。云はゞ菩提も一つ道、今より心を改め、出家となつて、過ぎ行かれた親御の後世を弔ふ氣になつて見さつしやい。コレ、灘右衞門どの。人は一代、名は末代。明かしていへば種恥かしき三韓の王。

灘右　こりやア、段々の意見尤もだ。まことの兄の意見でも、親身の親の諫めでも、中々用ひぬ灘右衞門、おぬしが意見聽き入れて、

ト後五郎兵衞喜ぶこなし。

出家にならうといひたいが、嫌だ、坊主嫌ひだ。木菟入いやだ。色に迷はず、慾に耽らず、孝行の爲めの海賊だ。三韓の種なりとは、とくより能く知つて居るわえ。

五後　シテ又、どうしてその事情を。

灘右　存じた譯はこの一腰。

ト一腰を拔放すと、大どろ〳〵にて舞臺先きへ吹き水、これと一緒に、日覆より三日月現れる。

後五　これは。

ト管絃になり、灘右衞門引拔き、唐人の形りにて床几に掛り。

灘右　汝が父みよしの萬兵衞に、預けられしより十七年、

山に登つて學問なす、顯はれるともなく、衣冠正しき唐土人悄然と佇み、辰韓、馬韓・辨韓の三韓の大將、李東英なりといつて物語つて曰く、われ日本に恨みある事は、昔人皇十五代の帝、神功皇后新羅に入つて、我が本國を征伐なす、末の世までの印にとて、弓筈をもつて巖壁に、三韓の王は日本の犬なりと、書き殘されしは恥辱と、削れど、拭へど落ちざるは、無念の月日の代々重なり、我が世にあつて一揆を企て、南膽部州、大日本肥前の國へ押寄せしに、情けなや天照大神の守り、先神の御前の國なれば、打入る事も叶はずして、只徒らに海の面、船に屯ろし待つ年月、汝が母はあやはとて、遊女なりしがおことを身籠り、臨月に及んで我れ計らずも重病に冒され命を落す、冥途黃泉に赴くとも、思ひ立つたる一念の今に無念晴れやらず、父の怨みを受繼ぐ證據は、汝が額の文字を見よ、と掻消す如く夢覺め見れば父も無く、もとより修學の机の下、庭に下り立ち池水に面體を寫し見れば、額にあり〱犬の文字、さてこそ三韓大王の種なりけると、思ふにつけ、この日本の怨めしく、習ひ覺えし隱術をもつて、いつぞや內裏へ忍び入り、此處こそ夜のおとゞよと、立寄る甲斐も情けなや、日の本の神寶、三種の神器に恐れを爲し、近寄る事も叶はぬ身の上、何とぞ王位を覆へさんと、思ひ計つて、より〱集まる金銀財寶、數の寶のその內に和漢通語の麒麟の印、まつた三日月丸のこの一腰、合體なして持つ時は、我が身の爲めに三種の神寶、內裏を計る手だてにて、年頃心を掛けし所に、麒麟の印は今川家に預かり、三日月丸は肥前の守、異國の賊徒を押へる爲め、彼の地へ預かるこの一腰、易易奪ひ取つたれども、この如く拔放せば斯く怪しくも吹雪をなし、五體すくんで働かれず、帝都を守る守護の名劒ゆゑ、麒麟の印を合體せざれば、用を爲す事叶はず、都築監物に近寄り、麒麟の印を奪ひ取れば大望成就は近きにあり、先祖の恥辱、父の無念、晴さん爲めこの艱難、樣子といふは斯くの通りだわやい。

ト後五郎兵衛つく〱聞いて、

後五　ハア、天晴れ勇氣の御心底、承はつて驚き入りました。とくより左樣と存じたなら、共に諸國を驅廻り、片腕ともなるべきに、下司下郎の悲しさは、只よこしまのみ一圖に存じ、面目も無き今の御意見。

灘右　いやとよ。それも眞實の弟を惠む兄の慈悲。

後五　今改めて主從の、契約致せば主人の若君。

灘右　我が大望の幕下に屬し、共に大義を計る心か。
後五　なにがさて、斯くまで深き因みとなるも、假初めならぬ宿世の因縁。
灘右　日本六十六ヶ國を、我が掌ろに握るならば。
後五　君は國王。
灘右　汝は執柄。
後五　百官百司の共がらまで。
灘右　我が國人とかしづく活計。
後五　今潛龍の池中の住居も。
灘右　やがてぞ登る雲井の上。大望成就の折までは。
後五　必らず互ひに。
灘右　秘すべし／＼。
ト奥にて、
お波　後五郎兵衛さん／＼。
ト呼ぶ。
灘右　アノ聲は。
後五　一先づあれへ。
ト又押入れの內へ入れ、後五郎兵衛門口の外へ出る。お波、奥より出て方々見廻し、思ひ入れあつて、側にある錠を押入れへおろして居る所へ、脇より戻つたやうに、門口を明け、內へ後五郎兵衛はいる。お波は向うへ行かうとして、
お波、おぬしはどこへ行く。
お波　アイ、鳥渡用があつて、
ト行くを後五郎兵衛留めて、
後五　待て。どこへ行くのだ。
お波　オヽ仰山な。つい、來るのぢやわいなア。
トいひ捨て花道へ掛る。後五郎兵衛は煙草盆を引寄せ、煙草を呑んで居る。向うより荒川藏人、着流し大小にて出で來り、花道にてお波に行き逢ひ、
藏人　お女中。物が承はりたい。この邊りに五郎兵衛どのといふ人は。
お波　ハイ、それはあれでござります。
ト教へてお波は向うへはいる。藏人門口へ來て、
藏人　頼みませう／＼。
後五　誰だ／＼。
ト藏人、小腰を屈めて、
藏人　ちと御免なされて下さりませう。
ト內へはいる。後五郎兵衛、合點の行かぬ思ひ入れ。
後五　なんでござんす／＼。

藏人　イヤ、わたしは浪人者でござります。
後五　ハア、手の内を呉れろといふのか、手の隙がない。通つた〱。
藏人　ハイ、私は袖乞ひ物貰ひではござりませぬ。
後五　そんなら又、なんの用でごんす。
藏人　ちと御無心がござつて。
後五　ハテ、無心も合力も平つたくいへば物貰ひ。しちくどい事を言はつしやる。
藏人　イヤ、あなたの方のお仲間に入れて下さりませ。
後五　エ。
トびつくりする。
藏人　御覧の通りの浪人者、尾羽打枯らしましても手職は存ぜず、手習の師範いたさうにも手蹟は未熟、醫學いたされば醫者にもなられず、漸く習ひ覺えたる劍術やはらも多病にて、行歩心に任せねば、只徒らに乞食非人と罷りなり、のたれ死を致さんよりは、恥を捨て海賊の同類に。と申さば、サアお氣に障らうが、各々方のお仲間に。
後五　エ、、置かつしやいな。身の上の蕪から大根、言ひ並べてロクな事でも喋るかと思へば、海賊の仲間なんぞとは、そんな事はこちやア知らねえ。
藏人　イヤサ、あながち海賊の仲間と申すでもあるまいなれども。
後五　ハテ、面倒な男だ。こゝらにそんな仲間があつてつまるものか。
藏人　成程、左樣なお仲間ではあらう筈もござらねども、歷々の商人かと見れば　晝は日中にでも寛々と臥し、只夜に入れば兩眼日月の如く光り輝く、金銀の鎖で繫ぎ止めても止め難き拔け船、船乘かと思へば善き絹を着し、侍かと思へば只一腰のいか物づくり、先づこの家の渡世はな。
後五　船頭船乘でごんす。
藏人　サア、船頭の五郎兵衛兄弟。
後五　なんと。
ト思ひ入れ。藏人、序幕の手紙を出して、
藏人　この割符を持つて海賊の仲間。
後五　ナニ、割符とは。
ト見てびつくりして、
ヤア、コリヤア、仲間の密書。
藏人　一昨夜、所用あつて、勢州豐久野を通り掛りし時、どつと響きし二ツ玉、ハテ心得ずとためらふうち、血氣

の若者即死の證。能く〳〵見れば疵もなき最期の念力、手に殘りしは半ばは切れても、紛らはしきこの割符。

後五　スリヤ、海賊の仲間のこの密書が、

ト驚く。

藏人　なんと覺えがあらうがの。

後五　イヽヤ、存ぜぬ知りませぬ。

藏人　そのまゝ存ぜぬその書面を見て、仲間の密書とは。

後五　サア、そりやア。

藏人　家來、參れ。

ト向うにて、ハアと答へ、捕手大勢出てつか〳〵と內へはいる。跡より代官の一、高札を持ちついて出る。

皆々　曲者、動くな。

後五　なんと。

ト身構へする。この時花道より、同じく代官の二、高札を持ち、侍大勢つき、舞臺へ來て門口に向うて居る。

藏人　今川家の重寶菅家の御正筆、蠻國通路の船切手、紛失につき、斯く姿をやつし所々方々と詮議なす所に、かの御正筆をうばひ取りしは、船頭五郎兵衞兄弟なりとの風聞。

代一　遁れぬ所だ、腕廻せ。

後五　滅多な事をなされまするな。

藏人　尙も實否を訊さん爲め、この密書を持つて來て樣子を窺ふ所に、海賊一味の外に持ち得ぬ二十四文字を、仲間の密書なりと口走りしは、天命遁れぬ所、尋常に白狀白狀。

皆々　腕を廻せ、

後五　マア〳〵、暫くお待ち下さりませ。あなた方のお尋ねなされるは、私ぢやアござりませぬ。

代二　ヤア、所の者が確かな訴人。陳じても陳じさせぬ。腕廻せ。

後五　さればさ、所の者が訴人いたした五郎兵衞と申すは私の事ではござりませぬ。

代一　ヤア、紛らはしき言譯。現在この內の名前たる、五郎兵衞はおのれだわ。

後五　サア、私も五郎兵衞、今日唐から戻つたも五郎兵衞でござります。跡から參つたといふ心で、私は後五郎兵衞と申しまする。こゝの五郎兵衞と申しまするは、先の五郎兵衞が事でござります。

代二　樣子は聞いた。ソリヤ。

ト侍ばら〳〵と内へはいろ。

皆々　動くな。

ト後五郎兵衞びつくりして、

後五　こりやア、何故でござりまする。

代二　某は當所の代官、嶋村彈正どの、仰せを受け、菅家の御正筆を詮議する所に、その盜賊は船頭五郎兵衞が弟なりとあつて、參り合せて最前より、樣子を聞けば二人の五郎兵衞、いづれ兩人のうち一人きはまる科人、シテ、今一人の五郎兵衞はいづれに居るぞ。踏ん込んで家探し致せ。

皆々　捕つた〳〵。

ト奥へ踏ん込みはいろと、ばた〳〵にて内より皆々を投り出し、五郎兵衞つか〳〵と出て、立廻りあつてしやんと止まる。

皆々　動くな。

五郎　寄りやアがつたら蹴殺すぞ。

代二　さてこそ今日、長崎表より歸國致せし檜垣の五郎兵衞、合點の行かぬと思ひしが、海賊の張本遁れぬ所だ。腕廻せ。

五郎　ナニ、この五郎兵衞を海賊とは。

代二　只今、彼の地より着せしそくたくの趣箋。

ト高札を出し。

一つ、船頭五郎兵衞が弟小松屋惣七と申す者、御正筆の盜賊に相違無之候。見つけ次第縛ぶつて訴へ出で候はゞ、同類たりともその罪を免し、過分恩賞賜はるべき者也。なんと承知いたしたか。

彌藤　ハツ。

藏人　田川彌藤治。そのそくたくを讀み上げい。

ト高札を出し、

一つ、船頭五郎兵衞が弟、玄海灘右衞門と申す者蠻國通路の船切手を盜み取りし海賊の張本たるによつて、召捕つて出すに於ては同類たりともその罪を免し、褒美は望みたるべき者也。

藏人　なんと、五郎兵衞。

代兩　遁れはあるまいがな。

ト皆々詰め寄る。

五兩　スリヤ、五郎兵衞が。

代兩　かくまい置きし同類を出せ。

五兩　毛頭覺えはござりませぬ。

代兩　紛らはしき同時の返答。

藏人　二人の五郎兵衞。
代雨　二人の弟。
藏人　いづれなりとも繩掛けて出すに於ては。
代雨　同類なりともその罪を免れ。
藏人　過分恩賞下されんとのそくたく。
ト五郎兵衞後五郎兵衞、思ひ入れして
五雨　きつと詮議いたしませう。
藏人　スリヤ、兩人ともに。
五郎　ハテ、科人ながらその科を遁れ。
後五　過分の恩賞とあるからは。
五郎　互ひの詮議か。
後五　互ひの身ばれ。
五郎　同類を免るゝ上は。
後五　御褒美にあづかる事だもの。
五雨　コリヤ、して見ものだわえ。
ト藏人思ひ入れして。
藏人　兩人ともにこれへ來い。
五雨　私どもに。
ト思ひ入れ。舞臺先きへ出る。藏人繩捌きして、
藏人　この捕繩を兩人へ預ける。
ト兩人取つて、
五郎　この捕繩を。
後五　私どもに。
五雨　お預けなされるとは。
藏人　弟灘右衞門は海賊の張本。小松屋惣七は御正筆の盜賊。兩人ともに隨分詮議して繩打て。
五雨　スリヤ弟。
ト思ひ入れ。
藏人　同類なりとも過分の恩賞。ナ、御兩所。
代雨　上意のそくたく相違は無い。
五雨　暫らく御用捨。
藏人　なにさま、早速の返答もなるまい。暫時の用捨は致してくれん。
五雨　お情けのこの捕繩。
藏人　合點がいたか。
代雨　イザ、藏人どの。
藏人　然らば役所へ。
代雨　御同道致さう。
藏人　先づお先きへ。
ト唄になり、互ひに目禮して代官の一、同二、先きに、

跡より侍づいて向うへはいる。跡より藏人、心を殘し同じ向うへはいる。五郎兵衞兩人互ひに思ひ入れあつて

後五　五郎兵衞。おぬしはその捕繩を預つて、見事弟惣七を繩打つか。

五郎　いかにも繩掛けて渡す氣なれども、肝腎の在どころが知れぬ。おぬしは又その繩で、灘右衞門に繩掛けるか。

後五　いかにも繩掛ける氣だが、どこに居るか、在りどころが知れない。

五郎　ハテナア。

後五　どちらでも繩掛けて出しさへすりやア。

五郎　同類をのがれ。

後五　褒美を貰ふこつたによつて。

五郎　なにを言つても肝腎の、

後五　代物を捕へねば。

五郎　寶の山へ入りながら。

後五　手を空しくするは。

五郎　惜しいもんだのう。

後五　そして知れぬ時にやア、この繩のしまひはどう片をつけうと思ふのだ。

五郎　ハテマア、命限り尋ねて見て、捕へたとき繩打つのさ。

後五　ハテ、氣の長い了簡だの。

五郎　果報は寐て待てといふ喩への通り、是から奧で一眠り、さらば果報を待つべいか。

ト唄になり、五郎兵衞奧へはいる。後五郎兵衞思案する所へ、梶右衞門出て來て、

梶右　後五郎兵衞どの〳〵。

ト後五郎兵衞ちよつと見て

後五　惡い〳〵。

梶右　どうした〳〵。

後五　ずきはおもつた〳〵。サア、おれも今日はどうか晝時分から、味な鹽梅だ。それで頭に逢ふにも、今は折が惡い。

梶右　テモマア、お頭を鳥渡呼んで下さい。

後五　ハテ、呼ぶ所ぢやアない。その樣子は、〇イヤ、ここぢやア言はれない。

梶右　合點だ。

後五　サア來い。

ト唄になり、兩人奧へはいる。直ぐに合方になり、奧

老母　より老母出て來て方々見廻し、在合せたる硯箱を取り
出し、精靈棚の行燈へ書置をして、
老母　先祖の佛さま達への言譯、五郎兵衞への書置き、先
つきからの樣子を聞いて、是がマア、
ト泣きながら、剃刀を出して、
せめて言譯に南無阿彌陀佛。
ト惣七、小女郎、出掛り見て居る。老母自害せうとす
る兩人留めて、
兩人　マア〳〵、待つた〳〵。
老母　惣七か、放せ〳〵。
小女　コリヤマア、何事でござんすぞいなア。マア〳〵、
お待ちなされませ。
老母　イヤ〳〵、留めて下さんな。義理ある五郎兵衞が難
風に逢うて、戻らぬうちに眞實の子の惣七を引込み、傾
城の身請金、百兩といふもの拵らへ遣つた。甘い親ぢや
と五郎兵衞が、思やる手前もどうも立たぬ。その上、今聞
けば大それた科人、今繩掛つて行くのを見て、なんと身
も世もあられうか。生き永らへて憂き目を見ようより、
いつそ死んで苦みを助かるのぢや。嫁女、放して下さ
れ。惣七、放せ〳〵。

小女　サア、御尤もなれども、これといふもよしない私が
ついて來たばかりで、手附の金に差閊へ、後五郎兵衞さ
んに恐ろしい誓言立てなさつて此の書置き。
惣七　もとの起りは皆わしゆゑ、いつそ私から。
ト死なうとする。
小女　お前はマアわたしから。
ト死なうとする。
老母　ア、コレ〳〵、二人ながら短氣な事をせまいぞ。
わが身達の言譯に、年寄つたおれが死ねば濟むわいの
う。
惣七　勿體ないことを仰しやります。
小女　お前を殺しは致しませぬ。
老母　イヤ〳〵、放した〳〵。
惣七　イ、ヤ、なりませぬ〳〵。
トせり合ふ。奥より五郎兵衞出て來て、剃刀を引つた
くる。
惣七　ヤア、兄者人。面目次第もござりません。
ト俯向く。
五郎　人の命を捨てようと思ふは、ずつと極意分別。是よ
り上はないものなれど、又思ひ切つて見ては、なんの事

もないもの。そこが彼の一旦にして易しとやら。我が子のわしへ義理がある、立たぬというて、親が死ぬるを、現在おれがぢつと見て居て、悦びさうなものと思うて下さりますか。

老母 ヤア。

五郎 サア、おりや血を分けた分けぬといふ、親に隔てはございませぬわいの。

ト泣き落す。

老母 誤まつた、五郎兵衞、こらへてたも〱。

ト拜んで泣く。暮六つの鐘鳴る。

五郎 マア、あれはモウ暮六つ。

ト行燈を出して居ると、向うより揚屋の亭主出て來て

亭主 サア、五郎兵衞、約束の暮六つ、身請の金は出來たか。

ト藏人、亭主があとより出て來て窺ふ。

五郎 そりやア、女房どもを才覺に。

亭主 イヤ、言ふな〱。假染めならぬ二百兩、なんとして〱。手短かに代官所へいて、關破りの科人。

ト惣七を見つけ、

代官所へいて。〇ヤア、惣七か。わりやア此處に居るか。こりやアよい手都合だわえ。二人ともに連れて行く。サア來い。

ト五郎兵衞、亭主を突き退ける。

亭主 五郎兵衞、なんで邪魔をする。

五郎 サア、これは。

亭主 サア、金はあるか。

五郎 その金は。

藏人 お尋ねの科人捕つた。

ト二百兩の金を内へ投げ込む。

亭主 ヤ、こりや二百兩。

五郎 その二百兩は。

藏人 お尋ねの科人、繩掛けて出すに於ては、同類たりともその罪を免れ、過分恩賞下されんとあるそくたくの金子。

五郎 スリヤ、その金を。

藏人 受合つた男の義理、何れへなりとも立てゝ仕舞へ。

ト五郎兵衞思案して居る。亭主、金を取り上げ

亭主 ハイ〱、イヤモウ、お金さへ渡れば、この方に申分はございませぬ。小女郎が年季證文をお渡し申します。是がほんのそくたくの三年目だ。ヘイ、お暇申しま

す。
ト急いで向うへはいる。惣七。藏人が側へ行かうとする。外より藏人門口をしやんと閉める。惣七戸の側へ坐り、
惣七　申し、兄者人。
藏人　コリヤ〳〵、粗相申すな。兄とは何事ぢや。尤も親人のお手に懸りし女が、懐胎せし弟一人ありしとは聞及びしが、母の嫉妬深く、その女と共に町家へ縁付けたれば、たとへ血筋たりとも赤の他人。卽ちその町人の兄とやらが、以前はこの方の屋敷へ由緣ある者ゆゑ、身命に更へて大切に致しくるゝとは、蔭ながら聞く度毎に、安堵致して居つたる所に、その赤の他人めが、このたび科を仕出し、義理ある兄に詮議を懸けんとするは憎き奴、切り刻んでも飽足らぬと思ふ某へ、兄なぞとは狼狽者。この藏人は弟を持つた覺えはないぞ。
トこのうち、後五郎兵衞、二階へ出て聞いて居る。
惣七　御尤もでござります。是には段々。
ト言はうとして、
惣七　血筋の樣子。他人のお役人さま。サア、科人に繩掛けて下さりませ。
藏人　科人に掛ける繩はない。
惣七　エ。
藏人　この家の主、五郎兵衞に渡し置いたる緣の捕繩。いまだその返事も相知れぬ内は、科人に掛くる繩は無い。
ト惣七、五郎兵衞が側へ寄つて、
惣七　兄者人、繩掛けてお役人のお方へ渡し、手柄になされい。
ト五郎兵衞、腕を組んで俯向いて居る。
申し、このやうに申しましても、返事さつしやりませぬは、生き恥を晒さうより、死ねと仰しやる事か。そりやア私が望む所、潔ぎよく腹切つて。
ト死なうとする。小女郎、あわてゝ留め、
小女　コレ、待たしやんせ。
惣七　留めるな。
小女　イヽヤ留めはせぬ。とても死なしやんす命なら、身の明りを立て、死なしやんせ。
惣七　身の明りとは。
小女　ハテ、もとの起りは。
惣七　コリヤ。
ト口を袖にて抑へ。

何を女の小差し出た。いうてよければおれがいふ。なんにも言はずと控へて居よ。

ト突き放し、死なんとする。五郎兵衛、刀を取つて惣七の胸づくしを取り、

五郎 人は氏より育ちというて、町人は利慾に迷ひ、金銀に目がくれて、欲しい／＼の根性から、果ては海賊にまで教へ込んだかと思はるゝのが。

ト藏人が方へ懸けて。

口惜しいわえ／＼。

ト思ひ入れあつて、

忘れもせぬおれが十七の年、ほんの母者人の死なれたその跡へ、アノ母者人がわれを身籠つて居て嫁入してござつた。おれが親仁どのは、荒川主膳さまに御恩を受けた主水頭ゆゑ、どうぞ後妻にしてくれよとお頼み、心得ましたと受込んでから、そちを母者人が生み落されてから、ほんにその可愛がりやうと云ふものは、おれが事をばとんと脇へ遣つて、お國の博多へ身上あげたり引越して、呉服物の商賣も、實の親御の主膳さまへ、そちの顔を見せたいばかり、それでもおらア是ほども不足は言はぬ。せめてこの母者人はおれに養はして下されといふのは、ハテ、跡からござつた母者から、アレ見よ、本の子と中が悪るさに取つて除けて継子ひとり跡に殘してと、世間の人に言はれては、どうも人情が濟みませぬといふて、おりやア心一杯に母者人を大切にするぞよ。手前はそれに引替へて、實の親御の死なしやつたも知らず、アノ小女郎に迷うて盗人の仲間へはいり、大事のお家の寶物をどうしたのだ。定めて揚代に詰まつて形に置いたか。おのれ、いかに女郎に癡るといつて、大恩ある御主人の寶を盗んで、濟まうと思ふか。その御正筆とやらが無けにやア、若殿さまは大抵難儀を懸けて濟まうと思ふか。その寶物を取替へて、ほんの親御や、この兄の顔が立つものか。先つきの二百兩の金も請合つたおれが顔を立てさせうばつかりに、下さつたのは情けの罪科、手前に縄掛けて渡さにやアならぬわえ。エヽ、町人の所へ遣らずば、あんな者にはなり居るまいと、恨んでござらうと思へば、おらア口惜しい。御正筆の在り所さへ言やア直ぐにおれが取返して科人にはせぬ。サア有りやうに言へ。どうして此のやうな因果な事をしてくれたぞいやい。

ト大泣きに泣く。小女郎思ひ入れあつて、五郎兵衛が

側へ寄り、惣七が方を見て。
小女　惣七さん。兄さんのお詞を聞いては、なんぼお前が叱らしやんしても、どうも言はずには居られぬわいなア。堪忍して下さんせ。申し、兄さん。
ト言はんとするを惣七引据ゑ。
惣七　コリヤ、なまなか言ふな。
ト小女郎、惣七を振切り、
小女　イ、エ。惣七さんの放埒は、わたし故ぢやござんせぬ。お主の爲め。
五郎　ヤ、なんと。
小女　いつち初手は、天神さまの御正筆を盜んだは、若殿さまぢやわいな。
ト惣七いはせまいとする。五郎兵衞、惣七を捉へ、
五郎　とつくりと言や〳〵。
小女　巴之助さんが御正筆を質物に入れさんしたのぢやわいなア。
五郎　ヤア。
惣七　コリヤ。
ト立掛る。五郎兵衞留めて、
五郎　サア、その後は〳〵。

小女　その御正筆を何うぞ取り戻したいと思ふばかりに、海賊の仲間へはいらしやんしたのぢやわいなア。
五郎　ヤ、、、。
ト思ひ入れあつて、
そりやア嘘だ〳〵。
ト小女郎、懷中より文を出し、
小女　この場になつて嘘を言はうぞいなア。その證據はこれ見て下さんせ。
ト出す。惣七それを取らんとする。五郎兵衞引つたくり。
五郎　この間、用立くれられ候百兩の金子、四五日以前、城下にて負け、また〳〵百五十兩切りを打ち申し候。その金子催促に逢ひ難儀致し候故、夜前菅家の御正筆を質物に入れ申し候。一兩日中に取戻し置きたく候間、またまた金子御工面頼み入り候、以上。小松屋惣七どのへ。巴之助。〇そんなら、この文は若殿のお手か。
小女　巴之助さんは、そんなに慰みばかりがお好で、惣七さんが、何ぼう金をお上げなさんしても、なんぼといふ限りがないによつて、ぬしに見せて心遣ひさせますも要らぬものぢやと思うて、その文は惣七さんに見せずに、

隱して置いたのぢやわいなア。
五郎　大名が博奕を打つとは飛んだ事だ。そんなら其の御正筆も、これ〳〵にやらかして仕舞つたか。○お負け遊ばしたのか。
ト壺皿をあける眞似をする。
小女　アイ丁半とやらいふ事に、金が足らいで、その代りに御正筆をお遣りなされたのぢやわいなア。
五郎　そこで、その樣子を惣七が聞いて。
小女　取り返さうといふてぢやその内に、都から御正筆を差上げいとお勅使さんがお出でなさんすによつて。
五郎　手詰めになつて。
小女　是非なく、その御正筆を惣七さんが。
五郎　盜んだ分にしたのか。
小女　サア、さうせねばお家の爲めにならぬとやらで、買せ物を拵へて。
五郎　モウよい、聞えた。そんたら殿さまの科を身に引請けて、たとへ命を捨てようが、繩掛からうが恥面を晒しても、お主のお爲めぢやによつて、言ふまいと胸を定めたとこは、出來した。あつぱれ。それでこそ侍の○。イヤ、船頭の弟ぢや。出來した。よく覺悟をきめた。

ト泣きながら言ふ。皆々思ひ入れ。
惣七　この身の申譯ばかりに、勿體ない、お主の科を訴人したる申譯。
ト腹を切らんとする。五郎兵衛留める。又振放して、
申さば一國一城の大事を、女に明かせし此の身の罪。
ト死なんとする。
五郎　ハテ、その一軸を質に遣つた所さへいへば、死ぬるに及ばぬ事。
惣七　サア、その質屋が人手に掛つて相果てし、側にあつたはぎやまんの割笄、正しく海賊の仕業ならんと、わざと、その仲間へはいつて樣子を聞けば、玄海灘右衛門が仕業。おのれやれ、取返してと思ふ間もなく此の騷動。それより灘右衛門が行衛は知れず。それ故にお主の御難儀。
五郎　それでは死なずとも大事ない。
老母　ソレ〳〵、死なねばならぬは此の母ぢや。さらばでござる。
ト死なんとする。
五郎　これは又情けない。惣七が身の明りさへ立てば、死ぬるには及びませぬ。

惣七　どうでも私は生きては居られぬ。
小女　イエ〱、わたしが先きへ。
老母　イヽヤ、わたしが。
ト三人爭ふ。五郎兵衞段々留めて、わつと大泣きに泣く。藏人思ひ入れあつて、戸を明け、内へずつとはいり。
藏人　鳥の將に死なんとする時、啼く聲悲し。人の將に死なんとする時、その言葉はよろしとは惣七が身の上。切腹せんとはまだしもの覺悟なれども、大切なる科人、中中手易く切腹は叶はぬ。繩打つて御前へ引き、水責め火責の拷問に掛け、二品の在り所知るまでは、暫時も用捨叶はぬぞ。
惣七　そのお役目の申譯には。
藏人　一命を捨て、盜賊の惡名をつけたれども、未だ一軸は手に入らぬではないか。
惣七　サア、それは。
藏人　未だ一軸も取得ずして、忠義になるか。
惣七　サア、それは。
藏人　うろたへ者めが。
惣七　ハツ。
後五　その一軸とやらが出るまでは、マア、影を隱したらよからう。
ト俯向く。後五郎兵衞、二階より來て、
惣七　ヤア、こなたは。
後五　この家の名前人。何もかも樣子は聞いた。
惣七　ヤ。
後五　大事ない。氣遣ひない。ハテ、斯う寄つた所はみんな内輪だ。お侍の手前で堅く言はしつても、根は血筋の兄なり、お袋なり、小女郎は元より、他人といふは此の後五郎兵衞ばかりなれども、こゝの名前人だから、おぬし達に凶事がありやア、嫌ながらおれは懸り合ひとなる。ハテ、近く言つて見ようなら
ト佛壇より蓮の葉の船を取り出し。
コレ、丁度この蓮の葉の船のやうに、精靈へ馳走だと云つてなんとけちな細工ぢやないか。コリヤマア、おぬしが目からに何と見える。
惣七　たとへ生ある時は罪業深き身なりとも、死ねば忽ちその罪亡び、極樂淨土へ迎へ給はる弘誓の船。
後五　イヤ、さうではない。死にさへすりやア極樂へ行く時、弘誓の船に乘ると思ふが大きな間違ひ。ちつとでも

身に暗り掠みがありやア、先づいきのりが牢の地獄、それも又よい血筋があつて、たとへ、れそのない者でも、すうき次第で助かつた所が、追放か流し者。その時こんな忌々しい船に乗つて行かにやアならぬ。そこが内輪同士の義理を、おれが酌んで。

ト懐中より金子一包出し、惣七が前へ置く。

サア、これを路銀にして、早く行きやれ。

ト惣七思案して居る。

そんなら何か、つい近付きでもないおれがいふ事だによつて、何をぬかしやがると相手にならぬ心であらうが、おりやア身につまされて斯ういふのだ。その譯はおれも惡い弟がある。その弟を助けて貰ひたい。ハテ、おぬしさへ助けて遣れば、その義理で灘右衛門も見逃して、〇サア、見逃して欲しい、助けたいと爺さまがおぬしの事を、ナ、可愛がらうと思つて斯ういふのだ。今その身になつても小女郎ゆゑ、虎伏す野邊の奥までも、手に手を取つて〇サア、早く行きやれ。ハテ、うぢつかずとも行きやれ。

惣七　近づきでもないわしに段々のお心ざし、忝なうはござれども、今更この期に及んで、卑怯未練に逃げ隠れる心は、露程もござりませぬ。

後五　さればさ、逃げられまい。縄掛け、いかにもといふは皆表向き、ハテ心の底はみんな見ぬ顔。アレ〱、目を塞いでござるはな。おれと五郎兵衛と見ぬ顔さへすりやア、どちらの弟も助かる。ナ、五郎兵衛。こゝを思うて互に見ぬ顔するが、この場の頼もしづくであらうがな。

ト五郎兵衛へ呑込ませる。五郎兵衛きつと思ひ入れして、捕縄を出し縄捌きして、

五郎　小松屋惣七は科人。腕廻せ。

ト寄らうとする。小女郎留めて、

小女　今の言譯さへしたら、モウ済んであるぢやないかなア。

五郎　イヤ、済まぬ。

老母　ぢやというて。

五郎　サア、済むと思ふは後五郎兵衛が内輪了簡。心ざしは嬉しいが、今日は人の身の上といふ事がある。ノウ、母者人、小女郎、惣七を見遁しにしては又。

ト後五郎兵衛へかけて思ひ入れ。

どうも済まぬ。ずんと済まぬによつて、縄かけて渡さに

やアならぬ。

ト後五郎兵衞、五郎兵衞を見て、

後五　そりやア無分別であらうがえ。この蓮の葉の船のやうに、アノ晩のやうにとぼんとやられぬやうにな。

ト惣七が手を取つて無理に突き遣り、五郎兵衞を見て、

さりとは〳〵、無分別々々々。

ト下に居る。

藏人　まことや、廬山の惠遠法師は、自ら蓮華漏といふ漏刻を造りて、水の滿たる分量にて、二六時中を定む。その蓮の葉船は取りも直さず蓮華漏に等しく、明日、酉の刻までに御正筆の在り所が知れねば、御幼少の若殿さまは御切腹。

皆々　エヽ。

ト びつくりする。

藏人　丁度その蓮の葉船と同じ事、明日、暮れ六つまでに限る御一命、あまつさへ、お家もお國も沒收すべき、伯父都築監物どのゝ惡心。この急難を遁れんと不憫ながらも惣七を科人。

五郎　スリヤ、不憫ながらも繩掛けてと仰しやるは。

藏人　明日、暮六つに迫る蓮華漏の愁を凌がん爲め。繩掛けいと仰しやるも義理。

五郎　助けたいと思ふも義理。

藏人　世の中に義理ほど切ないものはない。

ト皆々泣く。惣七居直り、

惣七　サア〳〵、繩掛けて下さりませ。

ト手を廻す。五郎兵衞思ひ入れして、

五郎　御正筆の盜賊小松屋惣七、捕つた。

ト繩を掛ける。

藏人　ヲヽ、あつぱれ、出來した〳〵。

五郎　と仰しやる、あなたさまのお心の內。

藏人　目の前で腹切らさうよりは。

五郎　ちつとの間でも、助けたいばつかりに。

ト淚を浮かめ、

藏人　ぢつと堪へて見て居る心を。

五郎　義理と。

藏人　義理に。

五郎　からまれし此の身の科を。

小女　どうぞ助けます仕樣は。

藏人　海賊灘右衞門を召捕つたならば。

後五　エ。
ト思ひ入れ。
五郎　お約束の通りに。
ト藏人そくたくの高札を出して、
藏人　その科を免すといふ、確な證據は此のそくたく。
小女　必ずその時、この縄を。
藏人　解くも
五郎　結ぶも
藏人　生死の境は、暮六つまで。
小女　せめて、どうぞわたしもお側に。
藏人　スリヤ、夫と共に。
小女　お情けでござります。
ト拜む。藏人思ひ入れあつて、
藏人　ハテ、親切な女ぢやなア。科人の縁類なれば同道は叶はぬ。しかし見え隱れには心任せ。
小女　エヽ、有難うござります。
ト藏人、門口の桃の木の枝を折り、是へ二十四文字の密書を結びつけ、
藏人　科人に遣掛けし當座の褒美。
ト差出す。
五郎　この桃の一枝を御褒美とは。
藏人　唐土の桃園に結びし義を、その結びし義を。
ト五郎兵衞、不思議さうに取つて、
五郎　是は。
藏人　ハテ、義を結びし異國の文字。
五郎　スリヤ、この二十四文字は。
藏人　サア二十四孝は唐土の孝心、その孝心に引換へて、この不孝不忠を身に引受けし、この科人の命を助ける手懸りのその一書。
ト後五郎兵衞思ひ入れして、
五郎　取るも憂し。
藏人　取らねば人の數ならぬ、棄つべきものは弓矢なりけり。
五郎　藏人さま、必ず。
藏人　吉左右待つて居るぞよ。
ト唄になり、藏人、惣七を引立て、小女郎しを／＼として花道へはいる。直ぐに合方。
後五　ハテ、氣の毒なものだなア。婆さまも悲しからうが、さう泣いて居ても詰らぬものだ。マア／＼奥へ。
ト老母しを／＼として奥へはいる。

五郎兵衛。おぬしもさぞ心遣ひであんべい。

ト五郎兵衛が側へ寄る。五郎兵衛、後五郎兵衛が惣七に遣らうとした金を、後五郎兵衛が懐ろへ捻ち込み、

五郎　サア〱、早く行きやれ。

ト手を取つて引立てる。

五郎　永々の留守のうち、世話になつたお主の事。悪い事は言はぬ。その金を路銀にして、早く駈落しやれ。

後五　ヤ。

五郎　なぜ、おれに隠しやる。

後五　そりやア何を。

五郎　お主が弟灘右衛門を。

後五　ヤ。

五郎　海賊の張本、玄海の灘右衛門を、兄のおぬしが匿まつて置かいで、誰が知るものか。

後五　是は迷惑。今日の天道さまが證據。おれが好きの采も手に取らず、金比羅さまに蹴殺される法もあれ。

五郎　知らぬ者がこの密書は。

ト件の状を出す。後五郎兵衛びつくりして、

後五　ヤア、それは。

ト取らんとするを突き退けて、

五郎　斯ういふ確かな證據があつても、かくまはぬか。

後五　サア、それは。

五郎　海賊一味の外は、日本にては用ひぬ二十四文字。

ト後五郎兵衛思ひ入れ。

後五　イヽヤ知らぬ。得知れもせぬ者を以て、海賊の外は用ひぬ文字。サア、それはと、おれを問ひ落さうとは。ハヽヽヽ、そんな甘口な事で行く後五郎兵衛ぢやないぞ。ソレ、おぬしは以呂波のいの字も書かぬざまで、この密書はと片腹痛い。わりや見事、これを讀むか。

ト右の状を目にて教へ、

こりやア何といふ字だ、讀んで見ろ。讀めまい。

五郎　弟灘右衛門はこの方にかくまい申し候。必ず氣遣ひなされ間敷候。仲間中へ申し合はされ、随分身を隠しもし、詮議嚴しく相成り候はゞ、この方へお出でなさるべく候。

ト後五郎兵衛びつくりして、

後五　ヤア〱、わりやアそれが讀めるか。

五郎　コレ、われが尋ねたこの文字は、即ち此の方といへる文字の此といふ字だ。

後五　ヤア、無筆のわれが、二十四文字をどうして讀ん

だ。
五郎　三年以前は無筆であつたが、唐土へ吹き流され、二年半が間、何もかも習つて歸つたわやい。
後五　アノ、唐に居るうちに唐人どもに習つて歸つたか。
五郎　是からは船頭やめて、手習のお師匠さまでも食へるわやい。
後五　ハテ、器用な事だなア。
五郎　サア、われも海賊の同類だ。覺悟ひろげ。
後五　それを知られたら、ソウ。
ト切掛ける。立廻りよろしき時に、下家より拔身を出す。
五郎　さてこそ下家に灘右衞門。
ト疊を上げる。下より權六出で、
權六　大事を知つた五郎兵衞。生けちやア置かれぬ。
後五　ばらしてしまへ。
權六　合點だ。
ト切り掛ける。五郎兵衞よろしくあつて、後五郎兵衞、疊の下へはいる。續いて五郎兵衞行かうとする。權六引戻す。立廻りのうち、門口の石地藏の脇より出で向うへ行く。五郎兵衞ちよつと見て、

五郎　さては、豫ての拔穴だな。
ト追駈けて行かうとする。權六支へる。五郎兵衞、權六を切伏せ、止めを刺す。ふつと懷中より半分の手紙を見つけ、
玄海どのへ、後五郎兵衞。こりやア確にこの密書の半分。
ト兩方つぎ合せて見て、
さてこそ玄海灘右衞門は、この家に居るに極まつたわえ。
ト身拵へする所へ、向うよりお波駈戻り、
お波　こちの人。サア、十八駄の荷物で二百兩と思うたけれど、埒が明かぬゆゑ、マア百兩拵へて來たわいな。
ト財布を出す。
五郎　遲かつたわえ。モウ、惣七は○行つたわえ。
お波　サア、いま道で藏人さまが惣七を。
五郎　サア、その惣七を助けうばかりに、灘右衞門を詮議するわえ。
お波　モシ〳〵、その灘右衞門はアノ押入に。
五郎　ヤア〳〵〳〵。
お波　お前に言はうと思ふうち、後五郎兵衞は用ありしゆ

ゐ、マア取り逃がさぬやうにと思うて、錠を下して置いたわいなア。
五郎　出かした〳〵。
ト錠を叩き明け、
五郎　コリヤア、誰も居ぬぞよ。
お波　イエ〳〵、確かに。
五郎　眞暗だ。
トお波、精靈棚の燈籠を持つて出て來て、
ヤア、壁をこぼつて逃げ失せたわ。
トお波、燈籠の書置きを見つけ、
お波　ヤア、この書置は。
五郎　なんと。
お波　豫て後五郎兵衞と誓ひを立てしより、我が口からは言はれ申さず、筆にて言はせ申し候。
五郎　ドレ〳〵。○大切なる御正筆は灘右衞門より後五郎兵衞が預かり、肌身離さず居り申し候。
お波　コリヤコレ、母さまのお手。
五郎　それぢやア後五郎兵衞が。うぬを、
ト駈出す。お波ちよつと留めるを振切つて向うへはいる。お波うろ〳〵して、

お波　エヽ、氣の濟まぬはこの書置。もし母さんが、
ト老母出て來て
老母　嫁女。今までかくしたは堪忍して下されいのう。
お波　そんなら灘右衞門はお前さんが。
老母　かくまふさへあるに、すでの事にこなたまでに、女の道を捨てさせうとしたわいなア。
トこのうち、後五郎兵衞そろ〳〵向うより出て、門口の拔穴より內へはいり、佛壇の脇掛けの阿彌陀を手ばしこく取つて、くろ〳〵と卷いて行かうとする。お波見つけて、
お波　これこそ確かに御正筆。
ト取らんとする。
後五　失しやがれ。
老母　嫁女を渡しては五郎兵衞が立たぬ。遣る事はならぬわいのう。
後五　ヤイ、腐れ婆アめ。うなア能く誓言を忘れて、精靈の行燈へ能く無駄書をびろいだな。
老母　精靈の行燈へ書くまいと、誓言立てはしませぬわいのう。
後五　エヽ、口の減らない婆アめ。その代りに惣七は地獄

へ失せたわ。
お波　イエ〱、惣七さんは、御正筆さへ差上げれば命に氣遣ひない。その御正筆をこつちへ渡しや。
後五　うなア、おれが連れて行つて女房にする。こつちへ失しやれ。
お波　何を、あた嫌らしい。どこへ連れて行くのぢや。
後五　麻生の浦には仲間の元船。
お波　ヤア、そんなら麻生の浦に。
後五　十年や二十年は、遊んで居ても暮らされる。サア來い。
老母　さうはさせぬ。
ト隔てる。倒面なと抜打ちに一太刀斬る。お波寄るを後ろ手に縛り上げ、手拭にて猿轡を嵌める。このうち老母捨てぜりふ。お波縛られながら支へるを、鳥渡當てると倒れる。是れより老母をずるく殺し、止めを刺す。それよりお波に氣をつける。お波氣がつく。
お波　母さんへのう〱。
ト寄らうとする。
後五　よいさ〱。母さんは死んだ〱。
ト無理やりにおつころばし、嫌がるお波か上へ乘る。

向うよりばた〱にて　郎兵衞戻り掛る。直ぐに門口へ來て戸を叩き、
五郎　こゝを開けないか〱。
ト是れにて後五郎兵衞疊の下へはいると、抜道より向うへ悠々とはいる。お波門口を開ける。五郎兵衞内へはいり、
お波　遲かつたわいなア〱。お前の留守へ後五郎兵衞が歸つて、母さんを殺したわいなア。
五郎　ヤア〱〱〱〱。〇エ、、殘念なア。シテ、後五郎兵衞めは。
お波　麻生の浦に、豫て用意の元船があるというて。
五郎　スリヤ、麻生の浦へ。
ト駈出さうとする。
お波　ア、コレ、麻生の浦へは一里半。
五郎　それにこそ近道あり。鷺村より權現山を左りへ越えれば、半道近し。千里萬里もたつた一飛び。
お波　そんなら早う。
ト後ろより梶右衞門出て、
梶右　うぬを遣つちやア。
ト戻す。立廻り。梶右衞門を落間へ投げ込み、行かん・

とする、このうちお波行燈を持つて來て、

お波　コヽゝ

五郎　ヤゝ

　ト振返り

お波　せめて母さんの顏をも一度。

　ト老婆を抱き起す。五郎兵衞見て手を合せ、

五郎　南無阿彌陀佛。

　ト拜むをキッカケに拍子、幕引くと、五郎兵衞向うへ一散にはいる。直ぐに大雷鳴になり、ちよん〳〵の繫ぎにて引返す。

本舞臺、三間の間、一面の黑幕、正面に松の大樹、後に割れる仕掛け、これに好みあり。大臣柱、目附柱とも松の大樹。前通り所々に浪板を据ゑあり。一體麻生浦邊のかゝり。大雷鳴、大雨にて幕明く。

　ト百姓大勢、菅笠、菰、傘にて行違ひ、下座と花道へ皆々はいると、向うより五郎兵衞、一本差しにて、菅笠をかぶり出て來て、松の木のもとへ小隱れる。向うより後五郎兵衞、以前の形にて一散に走り出て來る。雨頻りに降り、稻光り夥しく、大きに雷鳴る。後五郎兵衞、雨を手に受けて吞み、息を吐き

後五　アヽ、草臥れた。たとへ追駈けて來ても、一足も動かれない。

　ト坐る。梶右衞門以前の形にて走り出て、雷に驚き、急ぐ拍子に後五郎兵衞に行き當り、

梶右　ヲヽ、痛い〳〵。どいつだ。道中に何をして居やアがる。

後五　いけゾンザイな奴ぢやアないか。いやといふほど橫つ腹を蹴飛ばして逆にぢを言やがる。目を開いて通りやがれ。

梶右　この雷鳴りに、目も鼻も明かれるものか。

後五　こいつア免せとも言はねえで、まだ顋たを叩きやアがるか。コレ、おらア足を腫らして一足も引かれない。こゝへ來て立たせてくれ〳〵。

　ト雨止んで月出る。

梶右　いろ〳〵な事を言やアがる、ドレ、引立てゝ遣らうか

　ト引つたてながら顏を見合せ、

後五　梶右衞門ぢやないか。

梶右　後五郎兵衞どのか。

後五　われも逃げて來たか。

梶右　されば、こなたの逃げた跡で、五郎兵衛をばらさうと思ひのほか、命から〲逃げて來ました。この雷鳴りの鳴りざまわえ。
後五　それさ。しかしおいらが爲めには命の親だわ。
梶右　そりやアなぜ。
後五　アノ五郎兵衛が、おいらを追駈けて失せぬも、きつい雷鳴り嫌ひだ。雷鳴りを聞くと目を廻すげなよ。
梶右　そりやアおれも同じ事だ。
後五　われも雷鳴りが嫌ひか。ヤレ〲嬉しや、空も晴れて來たわえ。
梶右　ほんに月が出ました。
後五　しかし、雷鳴りが止んだら、五郎兵衛が失せうも知れない。
梶右　そんなら早く元船まで、行かうぢやごんせぬか。
後五　油斷しちやア居られない。そんなら、おれと一所に來い。
　ト行かうとする。五郎兵衛立ちふさがり
五郎　兩人ともに待ちやアがれ。
後五　さういふ聲は五郎兵衛か、わりやァ早い足だなア。
五郎　われに逢はうと思ひのほか、先きへ廻つて大きに待つた。サア、約束の通り百兩の金子を渡さうから、一軸をこつちへ渡せ。
　ト財布を出し
サア、改めて金を受取れ。
後五　今渡すわ。待ちやアがれ。
　ト貫目を引いて見て、
成程、相違も無い百兩だ。是ぢやア利が足りない。その代りには斯うだ。
　ト抜打ちに切りつける。五郎兵衛かい潜つて立廻り、その刀を引つたくり、胸元へ差しつける。梶右衛門寄らんとする。切つ先き鳥渡見せて
五郎　サア、一軸を渡すまいか。
後五　渡す〲、逸まるまいぞ〲。
梶右　アレ、一軸を渡すとよ〲。
五郎　サア、きり〲渡しやアがれ。
後五　マア〲渡すから、こゝを緩めて呉れ〲。
　ト五郎兵衛引いて、
五郎　サア、渡せ。
後五　受取れ。
五郎　エ、有難い。この一軸さへあれば。

ト開き見てびつくりして
ヤアコリヤア、持佛の脇掛け、阿彌陀さまだ。じらすない〳〵。
ト後五郎兵衛を捕へろ。
サア、まことの御正筆を渡せ。

後五　何か知らねえが、弟から預かつたは其の一軸、外のは知らない。

五郎　知らねえと言つて、そんなら能うござりまするると言つて歸らうと思ふか。是からはうぬが隱し所を、腹内へ納めようとまゝ、出させないぢや置かないぞ。

後五　面倒な。それより外は知らねえ。
ト振切つて逃げようとするを引戻し、立廻りありて、三人一度にどつこいと見得になると、又雷鳴り雨降つて來る。これにて五郎兵衛震へる思ひ入れ。稻光りして大雨になり、とゞ、眞ん中の松の木へ仕掛けにてしやりん玉落ちる。焔硝火ぱつと立つ。これにて仕掛けの松の木裂ける。三人ともに此の音にて悶絶する。後五郎兵衛そつと起きて、
テモ、今のはひどかつた、
ト方々見廻し、
こいつはくたばつて仕舞つたわえ。
ト松の木を見て、
イヤア、こゝへ落ちさしやつた。〇ハテ、おればかり何ともない。この一軸を持つて居たによつて、おれがお臍は何ともないか、とても事に梶右衛門に戴かせて、氣をつけてくれべい。
ト一軸を出し、梶右衛門が側へ來て、
南無天滿宮々々々々々。雷鳴りの親玉さま。
ト戴かせて
氣をつけろ〳〵。
ト蹴倒す。梶右衛門心づき

梶右　桑原々々〳〵。
ト逃げ廻る。

後五　べら坊め。雷鳴りは止んだわ。
ト梶右衛門方々見廻し、
強い筈だ、今のはこゝへ落ちたわ。
ト松の木を見せる。

梶右　ヤア。
トびつくりする。

後五　雷鳴りが止んだら、斯うしちやア居られまい。

梶右　ソレ〳〵、ちつとも早くござりませ。

ト兩人行かうとして、

後五　この儘ぢやア行かれまい。ひよつと跡で氣がついて、跡から失しやがつちやア面倒だ。斯うして居るこそ幸ひ、ばらして仕舞はう。

ト倒れて居る五郎兵衞を、兩方より拜み討ちに振り上げる。五郎兵衞起き返つて兩人を捉へ立廻り、見得になる。

五郎　さう、うまくは參るまい。

後五　わりや氣がついたか。

五郎　なんぼ雷鳴り嫌ひでも、命に懸けて取戻さうと思ふ一軸。雷鳴りぐらゐで恐れて、しにせの役が勤まるものか。今のやうに悶絶して見せたは、まことの一軸見出さうばかり。一杯參つて重疊々々。

後五　面倒な。ソレ。

ト掛かる。立ち廻り。

五郎　母親を殺した親のかたき。觀念。

トこれより烈しきタテあつて、とゞ、後五郎兵衞が首を打落す。梶右衞門も斬り殺し、一軸を取り上げ、懐中して、後五郎兵衞が首を取つて

エヽ、有難いなア。是を卽ち灘右衞門が首にして、さうぢや。

ト思ひ入れ。

ちよん〳〵〳〵〳〵ト直ぐにじやぎり。

幕

千代始音頭瀬渡（終り）

猿若萬代厦

猿若萬代厦

三立目

坂本山王神社の場
小栗栖村の場
岩倉山隱家の場

役名——朝倉勘解由義景。兵雲阿闍梨。高階大膳景行。安土源五郎 實ハ小田春永末子縫之丞友春。北條五郎氏直。二條藏人清行。藏人子息愛護若。五郎妹鳰照姫。同侍女船橋。女飴賣 實ハ早苗之助妹田川。加藤虎之助正清。藏人家來矢走文藏。北條侍女 實ハ左馬次郎妹皐月。伊勢參り 實ハ左馬次郎家來時夜叉。稚兒千代若 實ハ大友宗麟、末子惡五郎義純。岩飛大太。怪き女 實ハ二條の奥方雲井御前。獵師手白の猿叉。大髭の奴小野平 實ハ武智左馬次郎。

本舞臺、正面、外廊、東の見附柱、松の木。前に本地堂、人の出入あり。下座の方に、大きなる片鳥居、山王大權現といへる額をかけ、總て坂本山王社のかゝり。爰に、朝倉勘解由義景、上下衣裳、衆徒四人、直平頭巾、着込衣にて、皆々、床几にかゝり居る。白丁の宮司、大勢居並び、宮神樂にて、幕明く。

ト直ぐに、祝詞になる。

法橋　朝倉義景さま、今日の御社參。
四人　御苦勞千萬に存じまする。
義景　當時武家の棟梁として、君四海を治め給ふ、備前の大領久吉公三韓を御征伐あらんと、先達て筑前の國博多の津までの御出陣、これに依て今日當社坂本山王の神事を行はるゝも、味方の武運長久を祈らんため。
法橋　日本勢と三韓の軍勝負の前表を試みんと、加茂の競馬になぞらへ神前に於ての競馬。
別當　黑の駒は禁廷守護の武夫二條の藏人清行どの。
鬼島　栗毛の駒は相摸國の住人北條氏直どの。
多門　神慮をすゞしめ兩馬の勝負を決する神事の結構。
義景　衆徒の何れも今日の警衞太儀に存ずる。

四人　ハツ。
義景　今日の神事に付ても殘念なるは義景が身の上、生國越前に於ては大將と呼れし某なれども、時世とは云ひながら猿冠者の久吉に從ふは心外、何れも御推量下されい。
法橋　御尤の御述懐でござる。我々が一山をも信長が下知に依て久吉が燒討ち。
別當　叡山に於てこの鬱憤なきにしもあらず。思召でもござらうなら。
鬼島　延暦寺の衆徒は殘らずお味方、武威の餘りに神社佛閣をも。
多門　蔑にする大領久吉、時節來らば我々も。
義景　コリヤ。
ト祝詞になり、花道より、兵雲阿闍梨、ちよつぺい頭巾、水干、大口、太刀を佩き、出て來る。仕丁二人付き、後とより、金太郎、伊勢詣りの形り、菅笠、柄杓を持ち、付て出る。仕丁、下れ〳〵と云ひながら、皆皆本舞臺へ來る。阿闍梨は旅の箱を持て來る。
金太　伊勢詣りに御報謝、ハイ〳〵お願申しまする。
仕丁　下れ〳〵。
兵雲　待て〳〵。見れば賤からぬ態をして伊勢詣りに御報謝とこの阿闍梨が後とに付て來たが、わりやア爰を何所だと思ふ。
金太　ハイ、御報謝をお願申しまする。
義景　コリヤア阿闍梨には。
四人　只今御社參でござるかな。
兵雲　これは朝倉義景さまにも今日神事の御警衛御苦勞に存じまする。衆徒の面々太儀にこそあれ。
鬼島　時に今承れば、阿闍梨のお後とに何か付て參つた樣子でござるが、アノわつぱめは何奴でござる。
兵雲　こいつ伊勢詣りと申してこの阿闍梨が後とに付て參つたが賤からざるつまはづれ、こいつ海道のごまのはいか似せ詣りと見えまする。丁稚め、うなア御報謝で口を過ぎる似せ詣りであんべいな。
金太　モシ〳〵、あなたは御出家にもお似合なされぬお詞でござりまする。わたしは誠の伊勢詣りに相違ござりませぬ。
多門　何だ誠の伊勢詣りだ。そしてうぬが生國は何所だ。
金太　生國は美濃の國大垣の片在所、百姓金兵衞が悴金太郎と申す者でござりまする。
別當　ムウ、わが生國は美濃の國、金兵衞と云ふ百姓の悴

金太郎と云ふ者だと云ふか。
金太　左樣でござりまする。
義景　その美濃國は齋藤道三が領地、まつた土岐播摩守が居城の跡。さすれば武智に由縁りの奴ら入り込んで居やうも知れない。うぬも大方そんな由縁かゝりのある奴だも知れない。動きやアがるな。
金太　イヤ／＼、滅多な事を仰しやりまするな。怪しい者ぢやござりませぬぞ。
法橋　怪しくない者が、久吉公武運長久を祈りの御祈願。
別當　大切なる神前へ泥鱉をきり込むと云ひ。
鬼島　事を窺ふ面魂、拙者に極はまつた。
多門　丁稚め、其所を動きやアがるな。
ト兩人、金太郎へかゝる。一寸立廻り、阿闍梨、留て、
兵雲　兩人、お待ちやれ。
鬼多　何故お留めなさるゝな。
兵雲　今日は大切なる神事の庭、些細な事に拘はる場所でござらぬ。豫て朝倉どのゝ密談もござれば、斯樣な下郎にお構ひなくとも、ナ御存知か。
四人　成程。

兵雲　コリヤ／＼、われも伊勢詣りなら伊勢詣りのやうに、二十一社を拜んだら早く歸へれ／＼。
金太　有り難うござりまする。
四人　早くうしやアがれ。
金太　皆さん、これにござりませう。
ト神樂にて、金太郎、奥へ入る。
義景　兵雲阿闍梨の御持參なされたその一ト品は。
兵雲　これこそ山崎に於て郷民のために討たれし武智光秀、愛宕山連歌興行の折から、時は今天が下知る皐月かなと云ひ出し發句を簾に書き記し、一千座の護摩を修行して出陣なし、本能寺に於て勝利を得、春永を討取しが主人を討たる天罰終にその身も亡び失せ、所持なしたるこの簾も燒捨よと嚴命なれども、愛宕の神慮も恐れあれば、當社の神前に二七日納め置き、仁王經を讀誦し、その後灰燼となさん阿闍梨が取計ひでござりまする。
義景　愛宕の神慮をすゞしめん爲の御修行。
四人　御尤に存ずる。
ト向うにて「高階大膳參詣」と呼ぶ。
義景　ナニ、高階どの。
皆々　參詣とや。

ト又「參詣」と呼ぶ。本神樂になり、花道より、高階大膳、百日、上下衣裳、後とより、安土源五郎、麻上下、半袴立にて、三寶に采をのせ、これを持ち出る。

義景　高階大膳どの。

皆々　只今御參詣でござるかな。

大膳　今日は當社坂本山王權現に於て、久吉公三韓出陣の御武運祈らんため臨時の祭禮を行ひ、競馬の勝負を決せられんとのお催し。

源五　さるに依て、その競馬の勝負を正して采を上げよと、見分をも兼ましたる采の役目は斯く申す安土源五郎も。

大膳　高階大膳召連れてござる。朝倉どのを始め何れも御苦勞。

皆々　先づ／＼お通りあられませう。

ト又本神樂にて、皆々本舞臺へ來り、大膳、上へ通ろ。

大膳　ナニ、朝倉。モシ今日競馬の役人は拙者が撰たる二條の藏人、今一人は相模の國の住人北條氏直兩人たるも、ハヤ相詰め申したかな。

兵雲　未だ兩人とも、相詰めたと申す知らせはござらぬて。

源五　然らば御兩所ともに神前へお詰めなさるゝやうに、仰渡されて御尤に存じまする。

大膳　イカサマ、双方これへと申達し召されい。

衆徒　畏まつてござりまする。

ト衆徒二人、兩花道の角へ立ち、

兩人　今日競馬のお役人。

多門　御裝束を改められ。

鬼島　北條五郎氏直どの。

多門　二條の藏人清行どの。

鬼島　御兩所ともに。

多門　神前へ。

二人　急いでお詰めあられませう。

ト東西の花道より、

義景 氏直　畏まつてござりまする。

ト大小謡への合ひ方にて、西の花道より、氏直、競馬の形りにて、黒毛の馬に乗り、鞭を持ち、家來、麻上下、高股立にて、馬の口を取り出て來る。東の花道より、清行、同じく競馬の形りにて、栗毛の馬に乗り、鞭を持ち、家來、麻上下、高股立にて、馬の口を取り出で來り、双方花道の中程に留る。

氏直　千早振る神のゆふして引かけて。
清行　今日は異なる花競馬。
Ｘ　花をかざしの葵草。
□　あふひまつりも過ぎがてに。
氏直　加茂の皐月に引替へて。
清行　今日ぞ神事の競馬の役人。
氏直　相模の國の住人たる北條五郎氏直。
清行　大内の守護たる二條の藏人清行。
□　兩馬ともにくつばみ揃へ。
Ｘ　神前の馬場先まで。
氏直　われ〳〵兩人。
清行　相詰めましてござりまする。
源五　御兩所ともに御苦勞千萬。
皆々　イザ先づこれへ。
氏直　藏人どのから。
清行　氏直どのから。
氏直　イザ先づお先きへ。
清行　然らば一所に。
兩人　イザ〳〵、お越しあられませう。
ト鳴り物にて、本舞臺へ來る。

大膳　久吉公の御武運を祈らん爲め加茂の競馬によそへし今日の勝劣、栗毛の馬は日本勢、黑の駒は三韓の賊敵、何れに勝がこむやらん、各々出精いたされて宜からう。
源五　競馬の勝負を試み、采を上げまする役はこの安土源五郎、御用意よくば、御兩所さま、御神拜あつて御尤に存じ奉りまする。
清行　安土源五郎、神妙の挨拶。今日の役にさゝれしは武門の面目、勝ちたる方は禁廷よりやいばの太刀を申給はり、直ぐさま肥前の名古屋へ立越えよとの嚴命。氏直どのにも御用捨なく。
氏直　何が扨弓馬打物を以ての立合は、武家の所作から六藝の達人と呼れるこの氏直に、一馬場も勝ち召されたら藏人の規模であんべい。隨分と負ぬやうに乘らつしやるが宜い。
清行　仰せにや及ぶべき。神慮に叶ひ某が勝ちますれば、三韓を攻討つ日本の勝軍。競馬には某が勝つてお目にかけう。
氏直　イヤ、この氏直が勝つて見せう。
清行　見事貴殿が。
氏直　アノお身さまが。

清行　勝つて見せう。
氏直　小癪な事を。
兩人　何を。
　ト馬上にて思ひ入れ。
□　コレ……、マア／＼お鎭まり下されませう。
　ト奥にて「神事の刻限」と呼ぶ。
大膳　最早神事の刻限とあれば、氏直、藏人、用意召されい。
氏直清行　心得てござる。
大膳　朝倉始め兵雲阿闍梨、衆徒の面々。
義賢　大膳どの、先づお先へ。
大膳　何れもイザ神前へ。
皆々　先づござりませう。
　ト謠への鳴り物になり、大膳始めこの人數、鳥居のうちへ皆々入る。直ぐに所作の唄にて、花道より鳥さし三人、一對の形りにて出て來り、所作一トくさりあつて留る。ト花道より、女三人、何れも廣袖さゝぎ付、着流し、後ろ帶にて、小鳥を入れし綺麗なる鳥籠を若楓の枝に付け、銘々にこれをかたげて出て來り、入り亂れの所作になり、此のうち、鳥さしは女を鳥にして差さうといふ可笑しみの所作あつて留る、つい、しまになり、花道より二條藏人の子息愛護若、廣振袖、羽織衣裳、紫の置頭巾、丹前の模樣にて出て來る。後より北條五郎の妹、鳰照姫、振袖、奴の形りにて出て來り、兩人、所作、よろしくあつて、トヾ皆々大ちらしにて、つきにけりと所作をさまる。
愛護　水を拂ふ柳花は千萬點。樓を隔る鶯舌は兩三聲。
鳰照　今日のみと春を思はぬ時だにも、立つこと安き花の影かは。
女三　春の湊へいろ／＼の霞がおくる佐保姫の、花色衣ぬしやたれ。
女一　主を慕うて遙々と、爰に貴船のそれならで、この坂本の神垣や。
鳥一　いみ竹おらぬ餌さし棹、さほの先にも振る鈴の。
鳥二　きねか鼓も拍子よく、なりよや見よや一ト振りの。
鳥三　ふつてふり込む丹前姿、色も香もある今樣の。
愛護　神事の役にさしも草。
女三　さしも知らじな燃ゆるとは。
鳰照　焦るゝ思ひを主さんに、
鳥三　これ、云はぬは云ふに勝る□□□山王の猿若勸三が

普請も成就。
鳥二 同一 芝居も繁昌。
女一 同二 萬々年も。
鳥三 替らぬ神の。
愛護 御恵みと。
皆々 ホヽ敬つて申す。
女三 オヽ、皆さん御神事の今様、よう出來ましてござんす。取分けて愛護さん、千萬御苦勞に存じまするわいなア。
愛護 あやぎぬ始め、友ふね、さざなみ、皆々も太儀であつた。これより山王權現へ神拜の手水つかはん來いよ。
女三 ソレ〳〵、旦那がお召ぢや程に、お供の奴どの、ちやつと行かしやんせいなア。
鳥三 これはしたり、何をうつかりして居る。奴とは手前の事だわ。旦那の側へ早く行きなさい〳〵。
鳰照 それでも、どうも。
女一 何の恥かしい事がござんせう。愛護さまのお召なさるは幸ひと云はうか、丁度よい首尾。
女二 それいなア。お側へつゝと行て、思ひのたけを何なりとも早う云はしやんせいなア。

鳰照 ぢやと云うても。
鳥二 これはどうしたものだ、そのやうにはにかんで、旦那に御用が聞かれるものか。
鳥一 遠慮なしに、ぐつと行きかけろ〳〵。
ト無理に鳰照を捉へて、愛護が前へ突出す。こなしあつて云ひにくさうに、
鳰照 ネイ〳〵、御用でござんすかえ。
愛護 サア、この愛護が用といふのは。
鳰照 これ御覽じて下さんせいな。
ト短册を出す。愛護とつて、
愛護 戀そめし心の色は何なれば、思ひ返すにかへらざるらん。この歌と云ひ手跡と云ひ、見覺えあるこの水莖。コリヤ日外よりこの愛護へ千束の文を送つて下さる氏直どのゝ妹御、もしや鳰照どのでは。
ト鳰照が顏を見る。恥かしきこなし
よう知つて居るわいのう。
鳰照 オヽ恥かし。
ト逃げて來る。
女三 モシ〳〵、モウお逃げなさるには及びませぬ。皆さん、化けが顯はれたわいなア。

女一　顯はれいで何んとせう。何ぼいうても、あのやうに恥かしがつてばつかりお出で遊ばすものを。

女二　いつそお姫様に仕立て、お口說申す方がようござんせう。

女三　ソレ〳〵、船橋さん、ちやつとござんせ。

ト向う幕のうちにて

船橋　アイ〳〵、心得ましてござんす。

ト出の唄になり、船橋、着流し、抱へ後ろ帶にて、廣蓋に小袖をのせて、持つて出て來る。

女一　船橋さん、早うござんしたなア。

船橋　さつきにから、わたしも何うなる事と、あれに控へて居りました。いつそお姫様で打出したも好うござんせう。

皆々　それいなア、サア〳〵、お召し遊ばしませい。

ト皆々寄つて、鳰照に裲襠を着せる。

島三　ヤア、本の物になつたら見直したわえ。

島二　これから負けず劣らずの花角力。

島一　早く喰ひ付かせるがよい。

皆々　お側へちやつと姫君様。

ト鳰照を愛護が側へ突きやる。愛護、行かうとする。

鳰照、留めて。

鳰照　待つた、お待ちなさんせい。愛護さま。日外よりお心に染まぬとは知りながら、千束に餘る文の數々、思ひ餘つて今日の今樣、皆の衆を賴んで參りましたもお顏が見たサ。一度のいなせもなされて下さんせぬは、ソリヤあんまりぢや聞えませぬわいな。聞こえませぬわいなア。

愛護　鳰照どの。そのお恨みは去りながら、身に願ひある此の愛護、殊に父母のお許しもなき妻定め、仇なる戀を結んでも、結句互ひのためならねば、この上ともにふつつりと、わしが事は思切つて下されい。鳰照どの。

鳰照　何の思切る心がござんせう。わたしや此の戀が叶はねば、長らへる心はござりませぬ。そのやうなわやく仰しやらずと、拜みまするわいなア〳〵。

愛護　どのやうに仰せあつても、この戀ばかりは何うも。

鳰照　叶へては下さんせぬか。

愛護　思ひ切つて下されい。

鳰照　そんなら、どうでも。ハア……。

女三　ほんにコリヤ氣の毒なものになつたわいなア。あのやうに心強い事を仰しやつては。

女二　モウわたしらが口先ではゆかぬわいなア。
女一　このむづかしい此の戀を、誰ぞ執持つてくれ手が。
鳥三　乾大根に若布のはり〱。
鳥一鳥二　何を云はつしやる。
女三　誰ぞ戀の執持ちが。
皆々　欲しいものぢやなア。
　ト向う幕の内にて、
田畑　戀の花咲く櫻飴、三韓飴をお召しなさんせいなア。
　トてんつゝになり、花道より、田畑、袖なし羽織、縫子張の市女笠にて、唐人の人形を置きたる飴の荷を擔ぎ出て來り、花道中程に留る。皆々見て。
女三　オヽ、好い所へ飴賣の女中さん。戀の花咲く櫻飴とは、定めて戀の執持ちもして下さんすぢやあらう。なア皆さん。
船橋　ソレ〱、可愛ゆらしい女中の飴賣さん。お土産に買ひませう程に。
女一同二　こつちへ來て下さんせいなア。
鳥三　オツト待つたり。女といふ者は生け我儘な事ばかり云ふものだ。折角飴賣が來たものを、飴の謂はれも聞かずに、こつちの事ばかり云ふとはきつい不通だわえ。

鳥二　さうだ〱。コレ〱女中、お前さんが持つてごんした。
鳥一　その飴の謂れ因縁、古事來歴が。
鳥三　ひつこけれども、モーツきかまに大根だ。
女一　サア〱、所望ぢや〱。
田畑　サア〱、買うたり、召しませ〱。飴は一流白玉か何ぞと人の、思ひ遠近皆樣御存じ三韓飴、元より飴の始まりは、昔し仙家に霜を練り、壽命を延ぶる藥とて、甘い甘露の竹の露、飴の餅ひの愛嬌も、女夫仲よき子育飴、さてまた戀の仲立は、便り緣しを烏帽子飴、どんな堅くなお方でも、練り和らぐる水飴の、水も洩さずしつぽりと、床入り蚊帳入りせうが入り、幾千代結ぶ神垣と、この山王の櫻飴、花の露吸ふ初戀に、飴の鳥ほど口利いて、押付けるもお二人りさん、相生ふ松の緣飴と、祝うてお求めなさんせいなア。
皆々　やんや〱。
鳥三　サテ〱、聞事であつた。時に飴賣先生、一寸こつちへ來なこ餅〱。
田畑　アイ〱、お買ひなされて下さんせえ。
　ト荷を擔ぎ、本舞臺へ來る。

鳥三　そもじをこつちへ呼んだは、飴も買ふし、ちつと外に頼みたい筋があるだて。
田畑　ソリヤマア、どんな事でござんすえ。
船橋　イヽエ、外でもござんせぬがな、あれで見て下さんせ。アノお二人。
田畑　ほんにお二人ともに、花の莟みの色盛り、美しいものぢやわいなア。
女三　サア、あんまり美し過ぎてあかぬわいなア。
田畑　ソリヤ、何がえ。
女一　ハテ、知れた事いなア。アノ美しいお若衆さんに、お姫樣が。
田畑　帆かけ舟ぢやな。
鳥三　帆柱を立てかけて。
女二　これはしたり、何をいふ物ぢや。そこでこなさんを。
皆々　頼むのぢやわいなア。
田畑　合點でござんす。わたしがちよつほくさい云廻しも、なるやうにするわいなア。モシ〳〵、お前さんもそのやうにしてお出なさんしては、殿御の思付きがあるものぢやござんせぬ。何であらうと惚れた殿御なら、こつちから持かけて、ずつと惜しげなうお側へ行て。

ト　つか〳〵と愛護が側へ來る。

愛護　ヤア、其方は荒木の。
田畑　モシ、サア、あられもない女子が差出がましいとも思召しませうが、戀なればこそ、日頃大殿樣にも本國方に縁が欲しいとか、何とか仰しやつた事もござりますれば、幸ひのこの首尾、お嫌でもない事なら、叶へてお上げなさんせいなア。
愛護　これ〳〵田畑。イヤ〳〵これ頼もしさうな物のいひやうなれど、大切な御祈願の神前と云ひ、猥な事があつては。
田畑　これはしたり、不粹な事を仰しやれ。色事に神前が差合になるものぢやござりませぬ。神代の昔の二タ柱、伊弉册伊弉諾、イザ立寄つてしつぽりと。

ト　無理に鴉照を連れて來て、愛護が側へ突きやる。

鴉照　それでも何うも。
田畑　ハテ、是非とも嫌と仰しやつたら、古いながらも。

ト　自害する眞似をして

鴉照　そんなら、アノ愛護さま、どのやうに申上げても。
愛護　願ひあるこの身なれば、どうぞ思切つて。

鳰照　すりや、どうあつても。
愛護　無い縁と諦めて下されい。
鳰照　ウヽ。
　ト思ひ入れ。
田畑　コレ／＼、其所ぢや／＼。
鳰照　そことはいのう。
田畑　これはしたり、今のぢや／＼／＼。
　ト又自害の眞似をする。
鳰照　オヽ、さうぢや。南無阿彌。
　ト愛護が小サ刀へ手をかける。
愛護　コレ、待つた。
田畑　自害を留るお心は。
鳰照　戀を叶へて下されまするか。
愛護　サア、それは。
田畑　嫌なら自害ぢや。
鳰照　南無阿彌。
愛護　コレ待つた。
皆々　愛護さま、お返事わえ。
愛護　サア、それは。
皆々　サア／＼／＼。

鳰照　拜みまするわいなア。
愛護　それほど思うて下さるなら、マアどうなりと。
田畑　ソリヤ、戀がなつた。
鳰照　オヽ、嬉し。
　ト抱附く。鳥さしの三、同一へ抱附くを突き飛ばす。
　囃子になり、
愛護　アレ／＼、最早競馬が始まつたと見える。父上の御勝利、おれは好いが、他所ながらこの愛護も拜見して。
　ト行かうとするを、鳰照留める。
鳥三　これはしたり、人の馬に乘る事に構はずと、こつちの乘る工面をするが好い。
船橋　ソレ／＼、一寸どこぞ、あるまいかいなア。
　ト田畑、あたりを見て
田畑　待たしやんせ、好い所があるぞえ。
皆々　あるかえ／＼。
田畑　幸ひのこの本地堂。お二人りさんを此のうちへ。
愛護　勿體ない事ばつかり。
女三　斟酌せずと、お出でなさんせ。
鳰照　ぢやと云うても、大事ないかや。
田畑　大事があつても無うても構ふ事はござんせぬ。善は

急げぢや、ちつとも早う。

ト愛護、鳰照が手を取り、皆々も後とを押して、無理に本地堂へ入れ、扉を締めて

田畑　これから皆さん氣を通して。

船橋　長居は恐れ。

女三　わたしらは別當さんへ。

鳥三　行つて一杯引つかけたい。

女二　跡はお前を頼んだぞえ。

田畑　心得ました。

船橋　サア、ござんせ。

ト神樂になり、この人數、皆々入る。田畑、殘つて。

田畑　イヤモウ、戀の執持ちと云ふものも骨の折れるものぢやわいなア。お二人ともに今頃は好い機嫌で、ホ、、ホ、。ほんにわしとした事が。さらばこれからお宮の方へ行かうか、とは云ふもの丶、今日の御神事にこの田畑がこのやうな姿になつて來たも、藏人さまは大切な競馬のお役目、伯父君、大膳さまの惡企みで、もしも藏人さまに落度あつてはお家の大事、夫に代つて他所ながら、心を付けよと雲井さまの仰せ。折惡う夫荒木左衞門は久吉公御出陣のお見送りに博多へ行かしやんす、早苗之助さんは祇園への御代參。それゆゑ、わしが來事は來ても女子の身の上。どうぞお假家へ行て見たいものぢやがなア。

ト奥より、大膳、出て來り、田畑を見て

大膳　見れば異風な女だが、わりやア何者だ。

田畑　ハイ、私は御神事を當てに參りました女子の飴賣でござりまする。

大膳　何んだ。わりやア女の飴賣だ。

田畑　ハイ、左樣で。

ト云ひながら、互ひに顔見合せ

ヤア、あなたは。

大膳　わりやア荒木の左衞門が妻のたばた。御家老の女房が味な形で爰へ來たが、わりやアマア何しに來たのだ。

田畑　御不審は御尤でござりまするが、私がこのやうな形で參じましたは、雲井さまの仰せ。藏人さまの今日のお役目、どのやうなお首尾ぢや、見て來てくれいとのお案じ。お氣遣ひなされますな、私が見て參りませうとお請合ひ申しても、武家の行儀では參られぬ今日ゆゑ、今樣の役人方の跡に付て、このやうな形りで參りましたわいなア。

大膳　すれば何んと云ふ。藏人が事を雲井御前が案じるに付て、それでわれが見舞ひぞらに來たと云ふのか。
田畑　ハイ、左樣でござりまする。
大膳　ハテなア、雲井御前は夫思ひの女だな。器量好ければ心迄と、この大膳が首つたけ惚込んだのも無理ぢやアない。
田畑　エ、、そんなら、あなたは雲井さまに。
大膳　首つたけ惚れて居る。田畑、われを見かけてこの大膳が頼みたい事がある。
田畑　これはまア改まつたお詞でござりまする。何なりとも仰しやつたが宜うござりまするわいなア。
大膳　そんなら、云つて見ようか。
田畑　お心置きなう。
大膳　先づは過分な。某が頼みと云ふは外でもない。田畑、アノ雲井御前をこの大膳に執持つてくれろ。
田畑　エ、。
大膳　何も憚りする事はない。甥の女房に伯父が惚れまいものか、美しいから惚込んだ。四の五の云はずと執持つてくれろ。
田畑　大膳さま。ソリヤアどう云ふ思召でござりまする。現在の甥の殿、藏人さまの奥方に惚れたとは、好うマアそのやうな事が云はれまするなア。夫なぞが聞かれましたら、大抵な事ぢやござりますまい。おたしなみなされませい。ほんに呆れて物が云はれぬわいなア。
大膳　インニヤ／＼、そんなに眞面目な事を云ふな。わりやア戀の執持が名人だによつて、其所で頼むのだ。
田畑　何ぢや、わたしが戀の執持が名人ぢやえ。
大膳　名人だわサ。
田畑　ソリヤ何故にえ。
大膳　ハテさて知つて居るわえ。たつた今、な、ソレ名人だわサ。
田畑　そんならアノたつた今、愛護さまと。
　ト思ひ入れ。
大膳　知つて居るわえ。明けて云つては物がない。この大膳が結ぶの神と云ふはそもじだ。コレ田畑、おれが心のたけを認めたこの色文、雲井に屆けて嬉しい返事を聞かせてくれろ。何でもわれをこぢ付け頼みだ。
　ト懷中より、封じた一通を出すうち、奥にて「大膳どの／＼」と呼ぶ。
只今、ソレ／＼。

ト云ひながら一通を田畑に突き付ける。田畑、思はずこの一通の上書を見て

田畑　手白の猿又どのへ、高階大膳。これは。

ト大膳、心付き、ちやつと懐中して思ひ入れあつて、

大膳さま、ハテ變つた名宛のお文でござんすな。

大膳　サア、コリヤア。

田畑　御家中でも聞及んだ岩倉山の獵人、手白と云へる飛道具の名人。怪しい贋の男と御懇意なさる大膳さま、その一通を。

ト か ゝ る、立廻り。

大膳　コリヤア田畑、何をする。

田畑　サア、これは、戀の執持ち。

大膳　何が何と。

田畑　あなた樣のお心のたけをお認めなされた今のお文。雲井さまへお屆け申上げませうと存じまして。

ト又かゝる。立廻り。

大膳　インニヤ、モウ止しにすべい。

田畑　ほんにマア、男の心と秋の空とはよう云うたわいなア。首つたけ惚れたの何のと云うて、モウよしにせうとは、賴みにならぬ殿御ぢやわいなア。

大膳　サア、賴みにならぬに依つて、わりやアモウ賴まない。ひよんな物を見かじつたが百年目。田畑、觀念。

ト抜討に切付ける、立廻りにて、田畑、楓の枝でしやんと請け、

田畑　コリヤ、大膳さま。何となされまする。

大膳　雲井が文を間違へ、誤つて手白へ送る一通を見たのが、うぬが絶體絶命。いぢむぢ云はずとおつくたばれ。

ト引いて又切込む。田畑。枝にてあしらひ、大膳が刀を打落す。これをとかゝるを突退け、田畑、この刀を取り上げる。大膳、差添に手をかけるうち、裾をかき、胸元へ切先を突付け、しやんと見得。

大膳　田畑、滅多な事をするな。

田畑　女子と思召したらお心當が違ひませう。大膳さま。お心を直されまするか。

大膳　誤まつたよ。早苗之助が妹ほどあつて、今の手のうち驚き入つた。これからおらア善心だ。刃物を引け。

田畑　しかとお心を直されまするか。

大膳　いいぢやないかえ。

ト田畑、こなしにて刀を引く。奥より、義景、兵雲阿闍梨、出て來る。

義景　大膳どの。これにござりまするか。

兵雲　只今競馬も相濟みましてござる。

ト此のうち、大膳、刀を寄こせと思ひ入れ。田畑、投てやる。あたりを見い〳〵、大膳、刀を納めて、

大膳　シテ、競馬の勝負はな。

ト奥にて、

家來　サア〳〵、旦那、お越しなされませい。

ト家來の肩に、氏直、かゝり出て來る、大膳、見て

大膳　コリヤア、氏直。如何召された。

氏直　拙者落馬。

ト云はうとして。

らく〳〵と競馬に勝誇りました。

ト田畑、思ひ入れ。

大膳　それは天晴のお手柄。然らば甥の藏人めは、そこ元に乘おくれて負けましたか。

氏直　サア、藏人の負けたやうでもあり、この氏直が負けたやうでもあり、そこが入我我入の乘違ひに、馬から落馬。

大膳　ナニ、落馬を召された。

氏直　面目次第もござらぬ。

義景　何所も痛みは致さぬか。

田畑　オヽ、それ聞いて落着いたわいな。藏人にらく〳〵と勝つたの何のと仰しやつたに依つて、わたしやモウほんの事かと案じて居たに、らく〳〵と落馬なされたとは、氏直さま、オヽ、ヽ、ヽ、お目出度う存じまする。

氏直　置きやアがれ。

田畑　藏人さまがお勝ちなされたと聞て、このやうな嬉しい事はない程にの。

大膳　すりやア、氏直は藏人めに乘負けせられたか。

義景　氏直どのゝお負けでござるて。

大膳　今日の競馬は三韓征伐の吉凶を見んため、黑の駒に乘召された氏直が負けとあれば、ハテ何とやら心がゝりな。

ト思ひ入れ。

田畑　御主人藏人さまのお話を聞けば、赤きは日の本、黑きは三韓、その三韓に裝ひし氏直どのがお負けとあれば日の本の勝軍、それに大膳さまの心がゝりと仰やるは。

大膳　サア、心がゝりと云つたは、

田畑　何故、お心にかゝりますえ。

兵雲　これはしたり、この女中は、ハテ悪い聞きやうの。

今大膳さまの仰られたは心がゝりではないとサ。
田畑　さうしてえ。
兵雲　心安いとサ。
田畑　何がいな。
大膳　ハテさて、日本の方角は東方、陽氣盛んの赤色にたとへし栗毛の駒、それに乘つたる藏人が勝とあれば、三韓勢は敗軍となつて、日本勢は寐覺めが好い、心安いと云ふ事よ。
田畑　ハテなア。
　ト思ひ入れ。奥より、鳥さしの一、同二、出る。
氏直　何でもこの氏直が勝てば、三韓の勝軍となるゆゑに、態と藏人に負けたは、某は久吉公へ大忠臣。負けても矢ツ張りおれが手柄だ。
家來　お旦那、氏直さま。負けても矢ツぱりお手柄とは。
氏直　ハテ、これがほんの負惜みといふものだ。
家來　何を仰やりまする。
大膳　藏人が競馬に勝つたと聞いては、田畑、わりやアさぞ嬉しからうな。
田畑　イエモウ、大抵や大かた嬉しい事ぢやござりませぬわいなア。

女二　ト奥より女方の二、出て來り、
最前の女中さんは、何所に居やしやんす知らぬ。
　ト田畑を見て
オヽ、爰にかいな。モシ〳〵、女中さん。お前に急に云はねばならぬ事がござんす。一寸來て下さんせ。
田畑　何んぢや、わたしに來てくれい。
女二　サア、急な事ぢやわいなア。
田畑　ぢやと云うても、わたしや何うも。
　ト本地堂へ心を付て思ひ入れ。
女二　それでも急用ぢやさかいに、綾絹さんが逢ひたいと云うてぢや。ちやつと來て下さんせ。
田畑　それでもアノ。
女二　マア來て下さんせいなア。
　ト神樂になり、女方の二、無理に田畑を連れて入る。
　皆々跡見送り。
皆々　アノ女めは。
大膳　藏人が家來早苗之助が妹、荒木左衞門が女房になつて、いける奴ぢやマアござらぬ。
氏直　時に大膳どの。モシ貴殿、某、心を合せ、より〳〵に味方を招き、本國相模に引籠り、匹夫より成り上りの

久吉をぶつちめようと、三韓の軍將へ內通するも、大望を成就せんため。
義景　この義景とてもその通り。北國の軍勢を狩り催し、近江路より攻付る軍法。兵雲阿闍梨も一山の衆徒を語らひ、手筈を合點か。
兵雲　いふにや及ぶ、衆徒は殘らずお味方。
大膳　三韓攻の留守を幸ひ、聚樂の御所を燒討に。
皆々　皆なぶつちめん。
大膳　コリヤ。
ト本神樂になり、大膳、連判を出して、皆々に見せる。
氏直　中國は過半の味方、
大膳　五畿內を幕下に付け。
兵雲義景　何から何まで。
皆々　大膳どの。
ト皆々あたりを窺ひながら、本地堂の扉より、女の裾の出て居るのを見付けて、
氏直　ハテ、合點の行かない。この本地堂からひらしやらと色めいた女の小袖の出て居るは。
義景　忌々しい。どいつかちよんの間をすつぱじめたな。
大膳　それこそ確かに愛護ノ照。
義景　そのうちを詮議おしやれ。
兵雲　心得てござる。
ト本地堂の扉をあける。愛護、鳰照、しどけなく出て來る。
ソリヤこそな。
愛護　ヤア、大膳さま。
鳰照　兄上樣。
大膳　不義者めら。動きやアがるな。
義景　ヤレ、不義者がある。出合へ〳〵。
ト奧より、衆徒四人、出て來る。
四人　不義者とは何奴でござるな。
兵雲　外でもない、藏人の御子息愛護どの。
氏直　今一人は某が妹ノ照姬。うぬ大それた事をおつぱじめたな。父の氏政存生の砌、小田春永の子息縫之丞友春と許婚。主ある女の身を以て愛護の若と乳くり合ひ。
兵雲　殊に以て、この本地堂は一山の衆徒、淸淨觀を行ふ大切の靈場。
氏家　それのみならず、武運祈願の競馬の庭。
義景　神前を穢した大罪人の愛護ノ照。この分ぢやア濟さ

れぬぞ。
大膳　しなしたり、愛護の若。この大膳がどのやうにくろめても、二人とも本地堂に隱れて居たが身の破滅。
氏直　小田家への云譯に、妹とて用捨はない。
兵雲　一山の處刑にせにやア掟が立たぬ。
法橋　二人ともに引つ括し。
別當　きらく越の絶頂から。
鬼島　遙の谷へさら這ひ落し。
多門　憂目を見せる不義者めら。
大膳　氏直どのも仕置を見たい。
氏直　云ふにや及ぶ。妹、來い。
義景　愛護どの、立たつしやい。
　トかゝる。立廻り。
愛護　待つた。覺えもなき我々を。
鳰照　どうあつても不義者にして。
氏直　おつ殺すが神への云譯。
大膳　面倒な、引立てさつしやい。
氏直　愛護。鳰照。
皆々　うしやアがれ。エ、。
　ト揚幕にて、

正清　待ちやアがれ、エ、。
皆々　待てとは。
正清　千里も走る勢ひは、人にも加藤虎之助正清がおつ留めた。うざい餓鬼めら、待ちやアがれエ、。
　ト大太鼓入りの賑かなる鳴り物になり、花道より、加藤正清、眞赤く塗り。かす烏帽子、着流しの上へ白張の上を引つかけ、青竹に張り子の虎と一萬度の祓ひを付け、これを兩掛に擔ぎ出て來り、愛護、鳰照を引立て、皆々花道へ來る、押戻し。兩人を圍ひ、入れ替つて、しやんと見得。
皆々　ドッコイ。
大膳　待て〳〵。今この高階大膳が下知をなして大切な神事の折から、本地堂を穢した大罪人の不義者めらを引つ立させる向う面へ。
氏直　待てと聲をかけてのめくりつん出た赭面を見れば、わりやア加藤虎之助だな。張り子の虎にお祓ひを付けて持て出たが、ソリヤア何と云ふ判じ物だ。
大膳　イヤサ、何故我々が。
皆々　邪魔をするエ、。
正清　夫れ神明の託宣に、正清は一件の依怙に嵐の花に

風、とら嘯いて揚幕から邪智佞姦の毒消しに、虎屋の解毒萬病圓、若いしにせの荒事も、眞赤な面をお土產に、虎市饅頭厚皮な、虎ふぐ、とらきす、とら猫めら、花の胡蝶を念がけて、とらやア〳〵のいざこざを、貰ひにつん出た虎之助、とらの卷舌とらまへて、この坂本の本地堂、根本中堂、虎藥師の、お初とうけるうんざいめら、虎の尾櫻の御兩所を、この正淸に渡せエ、。

皆々　ドツコイ。

氏直　おやつかな、並べたわ。しやべつたわ。虎盡しを云ふべいと、張り子の虎を持つて出たか、つらねは出來ても、二人の奴らは赦すことはならない。

正淸　ソリヤア何故。

義景　ハテ、知れた事。愛護鳰照は不義の大罪人、本地堂でちよんの間をおつぱじめ、御祈願の庭を穢した科人だわ。

兵雲　それだに依て當山の掟に行ふ。加藤でも炭消しでも、それに頓着はない、御祈願の妨げ。

氏直家來　早く何所ぞえなくならつしやい。滅多な事を云出しても、得にやアならないぞ。

正淸　インニヤ、滅多な事は云はない。何、お二人に不義の大罪はない筈だ。

鬼島　イヽヤ、あるわ。不淨を拂ふ本地堂へ、兩人共に隱れて居たが不義の證跡。

正淸　そんな事が證據になるものか。

別當　何ぼこなたが云ひ負さうとしても、一緖に居たが不審の一つ。

正淸　お二人が一つにござれば不義になるか。

多門　うそつ暗い堂のうちに、屈んで居たのは確に出合ひ。

法橋　これでも不義であるまいか。正淸どの。

正淸　コリヤアづくにう達が、何を云ふかと思へば、愛護さまと鳰照さまが、本地堂のうちに一緖にござつたから不義と云ふのか。

大膳　如何にも不義に違ひない。現在藏人が伯父のこの大膳、由緣がゝりが云譯するも後ろ暗く、おれが默つて居るで推量しやれ。兩人共に大罪人だ。

氏直　この氏直もその通り。妹ながらも用捨をせぬが政道の正しい所。わいらが知つた事ぢやアない。邪魔せずと、虎之助、何所へでもつゝ走れ。

正淸　インニヤ、行かれない。伯父君と云ひ、兄御と云

ひ、無情に花のお二人を、罪に取つて落したがるは、コリヤアある格で何か目算を開かれたと云ふやうな筋であんべい。

氏直　知れた事だわ。我々が大望の密談を。

正清　何が、どうした。

ト氏直、口を押へて思ひ入れ。

氏雲　イヤサ〳〵、密法を修す祈念の妨げ。

氏直　本地堂を穢した兩人、引立させるが誤りか。

正清　大誤りだ。お二人樣は不義ではない。

皆々　不義でないとは。

正清　今日は當社坂本山王に於て、三韓征伐の武運を祈りの神事の庭、愛護さまも、日照さまも、神事の役に指されて今樣をお勤めなされたとの事だ。すりやア、ちつとの間の休息に、本地堂は愚か、山王の內陣へでもお二人がござらないで何うするものだ。それを不義の科に陷すとは、氏直さま達が今仰しやつた大望とやら、角力とやら、その取組の密法を、この正清が詮議すべいか。

氏直　サア、そりやア。

正清　お二人ともに不義ぢやアあるまい。

大膳　インニヤ、不義だわ。

氏清　不義なら今の密法を。

氏直　サア、そりやア。

正清　サア〳〵〳〵、不義ぢやござるまいが。

ト大膳、皆々、顏を見合せ

皆々　マア、そんなものさ。

正清　お二人樣、モウ落着いてござりませ。

愛護　正清どの。我々が危き場へ。

鳰照　好うマア來ては下されたのう。

正清　お二人ともに危い事サ。

兩人　何にも云はぬ、嬉しいぞや。

ト一寸手を合せて拜むこなしあつて、

藏人　又藏參れ。

又藏　ハア。

ト奧より、二條藏人、又藏に袋に入れしやいばの太刀を持たせて出て來る。

藏人　伯父者人を始め、何れもこれにござりまするか。

氏直　コリヤア藏人どの。最前は競馬のお役、御苦勞に存ずる。

藏人　これは御挨拶でござる。取分けて貴殿には鞍あぢも辨へなく、馬藝未熟の某に乘遲れめされたは時の不肖、

何事も御用捨に預りませう。

氏直　インニヤ〳〵。そこ元の馬藝きついものでござる。この氏直なぞが及ばぬ所、天晴の御器量驚き入つてござる。

藏人　これは痛入る御挨拶。イヤ、それにお居やるは加藤正清どのではござらぬか。

正清　これは二條の藏人どの。今日の競馬に何の苦もなく御勝利の樣子、人溜りで承はり、この虎之助も大慶に存じまする。シテ、お持たせなされた一振りは。

又藏　これこそ禁廷より預け給ひたるやいばの御太刀。今日競馬の勝劣に依て、勝たる武官この御太刀を守護いたし、博多の浦へ下るべしとの綸旨。正清さま、お聞き下さりませう。主人二條の藏人、日頃出精いたされし馬術の規模が顯はれ、競馬に勝つてこの御太刀は主人が預り奉り、西國へ下向の役目を蒙られましてござりまする。

正清　ソリヤア目出度い〳〵。

氏直家來　イヤ、モシ〳〵、正清さま。人にやア義理があるものだ。あんまりお悦びなされぬが好うござりまする。主人氏直は大坪流の骨髓、馬藝に於て東國に肩を並ぶる者はござらねども、馬場に地行の惡るいゆゑ。

義景　側なる木の根にけしとんで。

氏直　思はぬ負けを致したり。競馬の勝負は知らねども木の根は正しく。

兵雲　オイ。

氏直　爰にあり。

ト江戸節に語る。

兵雲義景　何を云はつしやる。

藏人　氏直どのには、いつも〳〵濶達なる御氣象、お羨しう存ずる。伯父者人。某は綸命に任せ、博多の津へ罷り下れば、留守の間は館の掟、諸事萬端宜しうお取計ひ下されませう。

大膳　綸命もだし難く、西海下向の旅用意。この大膳が罷り在れば館の氣遣なく、急いで發向いたされて宜からう。

愛護　すりや、父上樣には西海へ御發向のお役目。綸命とは申しながら、何とやら、この愛護はお側を離れまする事が。

藏人　何と致した。

愛護　サア、悲しいやうに存じまする。

ト思ひ入れ。
藏人　たはけ者。某が西國への發向は出陣同前。家を忘れ身を忘れ妻子を忘るゝは武士の常。未練の落涙、その未熟ゆゑ今もその鳰照。〇サア似合はしき緣邊を求めるも家相續のため。正清どのゝ恩儀を忘るな。
愛護　畏まりました。
又藏　最早時刻も移りますれば、藏人さまにはイザ御出立あられませう。
藏人　如何にも、伯父者人、正清どの。
正清　隨分御無事で。
大膳　歸宅おしやれ。
藏人　何れも、おさらば。
皆々　ござりませう。
愛護　モシ、父上樣。
ト寄らうとするを、鳰照留る。立廻り。
藏人　未練な奴の。又藏、參れ。
又藏　ハツ。
ト三重になり、藏人、又藏を連れ、向うへ入る。
大膳　イザ、神前へ何れもお來やれ。
皆々　先づござりませう。

ト神樂になり、大膳、氏直、皆々付て、奥へ入る。愛護、鳰照、正清、殘る。
愛護　何とや心がゝりな父上の御下向。これに付けても鳰照どのと仇なる緣を結びし愛護。大膳さまのお咎めにあうた上は、また何のやうな憂き目を見んも計られず。生恥を曝さんより、さうぢや。
ト小サ刀にて切腹せうとする。鳰照、縋つて留め。
鳰照　コリヤ、愛護さま。何で生害なされますか。
正清　早まるまいぞ、愛護どの。
愛護　ぢやと云うて、不義の惡名うけし身の上。
鳰照　ソリヤ、この鳰照も同じ事。お前を先立て何樂しみ。わたしも共に。
ト正清が刀へ手をかける。愛護も死なうとする。正清、立廻りにて、兩人を留め
正清　マア〱待たうぞ。
ト奥にて、
源五　お二人共に申し上たき仔細あり。御生害待つた。
ト奥より、安土源五郎、采をのせたる三寶を持ち、ツカ〱と出る。合ひ方になる。
正清　コリヤア、安土源五郎。

愛護　我々に云ふべき仔細ありとは。
鳰照　合點の行かぬその樣子は。
ト源五郎、下へさがり、
源五　ハツ、その仔細と申すは、お二人樣不義ゆゑ御生害あらんとは僻事。あれにて篤と承はるに、正清さまの御一言にて、今日の不義の惡名最早消えたぢやござりませぬか。
愛護　成程、その一言は去りながら、この鳰照どのは、先達て北條氏政どのと小田春永どの駿州薩陀峠に對陣の折から、當家の和睦調ひ、その印にとて春永の子息縫之丞どのへ、この鳰照どのは許婚。
鳰照　その許婚の殿御を捨て、愛護さまを思染めたこの身の因果。あなたが御生害なさるゝに、何と長らへ居られませうぞ。
愛護　我れとても、その友春どのへ何と云譯あるべきぞ。我が身を恥ぢてのこの切腹。
正清　二人ともに尤もだとは云ひたいが、すそつはりから起つた事、コリヤ安土先生、源五郎振りに思案はないか。
源五　お二人樣、縫之丞友春さまへの義理立なら、御無用になされませい。
愛護 鳰照　ソリヤ又何故に。
源五　サア、世の盛衰は是非もなく、信長と云へば鬼の再來かと呼れ給ふ信長公も、都本能寺に於て不慮の御最期。その御子息の友春どの、いつ〳〵の戰場にもコレこの采を持て諸軍の下知をなされしに、小田家滅びて日蔭の身の上。所詮出家と志し、都近き山寺へこの采を納められ、今遁世のお身とも聞く。この安土源五郎が今日競馬の采振りに召出されしも、身の冥加とこの采配を申し請け持參なしたる折も折と、お二人樣のこの場の仕儀、たとへ枕を。
愛護　コレ。
ト思ひ入れ。
源五　サア、替はされても、小田家滅びて友春どのは御出家のお心ざし。すりや先達て約束の許婚も水の泡。
鳰照　すりや、友春さまには御出家とや。
正清　後家同前の鳰照姫、乳繰り合つても大事ない。
愛護　そんなら不義の惡名は。
源五　少しもござらぬ。苦しうない。剃髮染衣の身となれば、妻子珍寶不隨者の掟、正しき沙門の身に妻を具すべ

き事なければ、これからは世間晴れてお二人樣、妹脊の緣をお結びなされい。ちつとも大事ござらぬとサ、友春どのになり代り離緣の印に、この采をこの源五郎が姬君へお渡し申せば事は濟む。お心置きなう二世の語らひ、お二人樣、正淸さま、申し上度き仔細と申すは斯くの通りでござりまする。

正淸　したり。コリヤア源五郎が乙な事を云ひ出したわえ。世を見限つた友春どの。人を助けるは出家の役。アレアノ道理だ。モウ二人ともに死ぬ事はない。

愛護　それと云ふも源五郎の今の一言。

鳰照　樣子を聞いて忝ない。

正淸　手柄かいた源五郎と譽めはほめるものゝ、今のせりふはあんまり好くならんだが、もしやお主が縫之丞。

鳰照　友春さまとは。

源五　コレ、滅多なこと仰しやりまするな。

愛護　そんなら、こなたは。

正淸　友春さまぢやアないと云ふのか。

源五　安土源五郎と申す陪臣者。

愛護 鳰照　アノ、其方が。

源五　如何にも。

三人　ハテなア。

ト奥より、綾衣、出て來り。

綾衣　愛護さま。鳰照さま。これにお出でなされまするか。藏人さまの御出立に付き、何か田畑さんに仰せ置れた事がござりまするさうな。お目にかゝりたいと申して居られましたわいな。

愛護　成程、この愛護も未だ神拜を致さねば、これより社參するであらうわいのう。

鳰照　自らも田畑どのにいろ〳〵賴みたい事もあれば、御一緒に參りませう。

綾衣　左樣なら、お二人樣。わたしが御供いたしませう。

正淸　コリヤア綾衣。久し振りで逢つたな。奥の假家には伯父御の大膳どの、又二人を見付てどんな無理を云出さうも知れない。必ずそもじ、油斷をするなよ。

綾衣　お氣遣ひなさんすな。何ぼ伯父御の大膳さまでも、わたしが付て居るからは、滅多な事いはせまする事ぢやござんせぬわいな。

正淸　隨分ぬからないやうに、合點か。

綾衣　心得ましてござんす。サア、お二人樣、假家へお越しなされませい。

愛護　そんなら假家へ。正清どの。
鳰照　源五郎どのも、これに。
愛護　何れも後程。
綾衣　サア、お出なされませい、
ト神樂になり、綾衣、愛護と鳰照を連れて奥へ入る。
正清、源五郎、殘り。
正清　時に今日は目出度い御神事だが、一杯引つかけて話さうぢやないか。
源五　成程、酒もようございます。正清さまはお上りなされまするか。
正清　酒と來ちやア蛇のすけべいよ。
源五　私しも少々は下されまするが、何を申すも爰は日吉の鳥居先き。
正清　一杯引つかける工面がありさうなものだなア。
田畑　のう／＼、その船に便船申さうのう。
ト田畑、奥より、三寶に神酒、土器をのせ、持つて出て來る。
正清　何だ、とんだ事を云つて出たが。ヤア、わりやア早苗之助が姉の田畑ぢやアないか、この付合を乘合船と思ふか。
田畑　さいなア。互ひにお屋敷で堅い附合をさらりと止め、お前は宮仕へ、わたしは商人。源五郎さんも侍ひをやめ、今日の神事のお目出度に、わたしも一ツ食べうわいなア。
源五　成程、それゆゑ此の神酒。土器の御持參か。
田畑　知れた事いな。
正清　こいつは話せるわえ。そんならお辭儀なしに一杯やりかけべい。ア、鰯のぬたでも欲しいなア。
田畑　榮耀な事を云はしやんすな。マア／＼一ツいかしやんせ／＼。
正清　ドリヤ／＼、そんなら一ツやらかさう。サア注いでおくれ。
田畑　アイ／＼。
ト正清、土器を取上げ、田畑、注いでやる。ぐつと呑んで、
正清　こいつは呑めるわえ。よつぽど好い酒だ。サア／＼、源五郎、おさし申さう。
源五　然らばお辭儀なしに、頂きませうか。
田畑　サア／＼、一つ呑ましやんせいなア。
ト注いでやる。源五郎、この酒を呑むと胸の痛むこな

し。兩人、見て

田畑　コレ〳〵、お前はどうさしやんした。痞でも起つたかいなア。

源五　サア、今その酒を吞むや否や、斯かる五臓の惱亂は。

　ト思ひ入れ。

正清　何だ惱亂だ。惱亂とは提げ莨入れの事ぢやないか。どうした〳〵。

源五　サア、今申す如く、この神酒を吞むとひとしく。

正清　癪が起つたか。ヤレ、ソリヤア困つたものだ。田畑。何んぞ藥はないか〳〵。

田畑　わたしも藥の心は付いて居れど、嗜みの惡い、反魂丹一粒ござんせぬわいなア。

正清　女に似合ない、藥を持て歩かないと云ふ事があるものか。待て〳〵、好い事を思付いたぞ。體中をさすつてやれ〳〵。

田畑　アイ〳〵。コレ、源五郎さん氣を確かに持たしやんせ。術ないかえ〳〵。

　ト源五郎苦む。田畑介抱して居る。そのうち、正清、本地堂より、藥師の厨子を持て來り。

正清　コレ〳〵、おれが思付きはこれだ。おらア寅の年で、名も虎之助と云ふから藥師を信心するが、何でも病ひ事は藥師の受取だ。おれが聞いた事がある。昔もこの山の何とか云ふ稚兒が、難病受けて大きに煩ひ、この藥師へ願をかけたが、何の印もなかつたゆゑ、その稚兒が歌を詠んだげな。その歌はめりやすでなし、長唄でなし、アア何とか云つたわえ。

田畑　その話はわたしも聞及んで居る。確かにその稚兒の歌は。〇南無藥師、種病しつじよの願あれば。

源五　身より佛の名こそ惜けれ。

正清　オ、それだ〳〵。その歌を詠んだれば、卽座に病ひが癒つたと云ふ事だ。さう云ふ利生のあるこの藥師の尊像、大概な藥を吞むより、この藥師を守つてその病ひを癒すがよい。

田畑　コリヤほんに虎之助さん、よう心が付きましてござんす。そんなら、源五郎さん、ちつとも早う。

源五　成程、藥師佛の功力に依て、この惱みを平癒なさしめ給ひ玉へ。南無藥師、瑠璃光如來、病ひ平癒なさしめ給へ。

　トよろぼひ、藥師の像を拜まんと厨子へ手をかける。

大どろ〳〵にて、障子より燒酎火燃え上る。これにて、源五郎、大きに苦む。田畑、正清、これを見て屹度思ひ入れ。

源五　ハテ、怪しや。今この源五郎が病苦を祈らんと、この厨子へ立寄るとひとしく。

正清　佛像より炎焔々と燃え上り、始めに倍なす苦痛の體。もし尊像の佛罰なるか。

源五　心得ぬ我が身の上。山王權現の神酒を頂戴なすや否、胸廓を裂くが如く、苦痛のあまり藥師佛を祈らんと立寄る厨子より猛火燃え立ち、燃ゆるが如く命も絶ゆるこの有樣。靈像のお罰と承りしが、何にもせよ怪しき我が身のこの場の苦み。

田畑　今の悩みを見るに付け、思出せる事こそあれ。古へ平相國清盛、南都の衆徒に欝憤あつて、東大寺の盧舍那佛を燒滅す、その佛罰の報いにて、終にその身は火の病ひ、福原の内裏にて身まかり給ふ清盛公。

源五　その佛罰も辨へず、小田上總之助春永は、この叡山の法師ばら幕下に招けど一人も應ぜざるを憤り。

正清　この延暦寺を攻討つて、七堂伽藍を一陣の煙となし、衆徒も大半おつ殺す。

田畑　この御軍慮は春永公御一代のおひが事。

正清　さは云へ、小田の春永どのに由緣も血筋もないこの源五郎、同前に藥師のお罰を蒙つて。

田畑　猛火に苦痛のこの有樣。彼れを思ひこれを察せば、こなさんは。

正清　春永公に由緣ある。

田畑　モシヤ小田家の。

清五　ヤ、何と。

田畑　苦痛の體を不思議と云はうか。

正清　奇妙と云はうか。

正清田畑　怪い事を見るものぢやなア。

トどろ〳〵止む。

正清　この虎之助が推量するに、源五郎、確かにお身樣は。

田畑　小田家由緣の。

ト思ひ入れ。

源五　イヤ、これ〳〵御兩所樣。滅多な事を仰やりまするな。最早源五郎めが唯今の苦痛、藥師佛の靈驗にや、ずんと心もようござりまする。お構ひなされて下さりまするな〳〵。

正清　コレ〳〵、そんなに云紛らかすな。今の苦痛の
この場の有樣、小田家に由縁のある者に極つた。源五郎。
お身樣は本名を明かしやれよ。

源五　拙者が本名は安土源五郎。

田畑　その源五郎と云ふは、確かにこなさんの假染の名で
あらうがの。

源五　全く以て。

正清　本名を名乘るまいか。
ト刀の柄へ手をかける。

田畑　イヤ、コレ申し。
ト留る。一寸立廻り。

源五　お二人樣。今日の御用をも相勤めましたる源五郎、
最早お暇いたしませう。

正清　おいらに俗稱を尋ねられ、せう事なしのお暇か。

田畑　今の怪みある身にも、明されぬ名なればこそ。

源五　身は陪臣の源五郎。

正清　と云ふを、押して聞くのも不粹。

田畑　そんなら、この儘、こなさんは。

源五　退散いたす。お二人樣。

正清　そのうち逢はう、源五郎。

源五　御縁もあらば又重ねて。

正清　とは云へ、確かに。
トかゝる。

田畑　コレ、早うござんせ。

源五　お暇いたしませう。
ト合ひ方になり、源五郎、刀を杖にこなしあつて、花
道中程まで行く。正清、厨子を持ち、見送るを、田畑、
こなしにて、正清を連れ、奥へ入る。源五郎、これを
見送つて、本舞臺へ立戻り、
今の苦痛は、父春永の無道ゆゑ叡山守護の佛神のお罰を
蒙る今の有樣。これに付ても父が夢中に祇園の神體より
給はりし瓜の紋をゑりし鎧の金物、神力まつたき家の定
紋、奪ひ取られしは小田家滅亡の印しなるか。何卒して
その鎧の金物を詮議したいものぢやなア。
ト奥にて、

皐月　鳰照さまはどれへお出なされた。鳰照さま〳〵。
トこれを聞いて源五郎、思ひ入れ、矢張り惱みながら
奥へ入る。神樂になり、さつき、出て來る。後より、
時夜叉、あたりを窺ひながら出て來り、行當つて、互
ひに顏を見合せ、

時夜　ヤア、其方は時夜ぢやないか。

皐月　さう仰やるは左馬次郎さまのお妹御、皐月さま。シテそのお姿は。

皐月　このさつきが此の姿になつて居るは、北條家へ宮仕へして兄さんのお行方を尋ねんため。

時夜　拙者は又御兄樣、次郎さまの仰を蒙り、當社の神前に納めある、時は今の簾を盗取らんと存じ、斯く姿を替へて入込ましてござるに、思ひがけなく、あなた樣にお目にかゝり、大慶に存じまする。

皐月　そんなら其方は。

　トあたりを見て。

その簾を盗まんために。

時夜　左樣でござりまする。あなたのお行方も一遍尋ねて居りました。

皐月　わしとても主人と頼む鳰照姫の供して來たも、やいばの太刀を盗取り、兄さま次郎さまのお手にお渡し申したさ。

時夜　あなた樣も。

皐月　アノ其方も。

時夜　盗人の暇はあれども。

皐月　守り人多き二ッの宮。

兩人　どうぞ手に入るその思案は。

　ト向うにて、大勢の聲する。これを聞て、兩人、一寸小隠れする。花道より、同宿五人、鉢巻、棒を持つて出て來て。

△　アノ千代若めは稚兒に似せないイケつぶとい奴だ。おいらがめくりを引いて居りやアかすに來る。丁半をくめば引摺り込む。

□　この叡山の開基この方、あんな太い奴はあるまい。おらが師匠坊の紙入にあつた小判二兩に南鐐五ッ。

×　引つ浚つてかけ出したが、確かこつちの方へ來たと思ふが、何でもこのより棒で足腰の立たない程ぶちのめすがエ、。

○　爰へ來たかと思つたら、アレ／＼向うへ失せやアがつたい。

△　何でも揃つて、棒づくめにござれ。

　ト五人引返して、皆々裾をからげ肌を脱ぎ、棒を振り上げ、花道揚幕の際まで來る。幕を切つて、千代若、喝食稚兒の形にて、小判と南鐐を見い／＼出て來る。

皆々　ヤア、うぬア。

千代　泥坊した千代若だよ。
皆々　ヤア。
千代　盜人のお稚兒樣だよ。
皆々　ヤア。
千代　その棒の先を一寸でも當てゝ見ろ。づくにうめら。誰れだと思ふ。この叡山の三千場で熊坂若衆と仇名の付いた千代若さまだ。邪魔をするな。これから又山王の別當へ行て、四さう四六のごうでも取らにやアならぬ。退け、退きやアがれ。
皆々　エ、うなア。
千代　何を。
ト　じり／＼と本舞臺へ押戻し、皆々ぶつてかゝる。棒をひつたくり、五人をぶつ散す。これにて、皆々逃げて入る。
千代　エ、、忌々しい芋掘めら。
ト後を見送る、時夜叉、出て行かうとする。これを見て。
千代　コレ／＼、兄イ、待て／＼。
時夜　ハイ／＼、私でござりますか。私は伊勢詣りでござりまする。御報謝くださりませ。
千代　何んだ、御報謝をくれろ、野暮な事を云ふものだ。くれると云ふ事は、おらア日の暮るも嫌ひだ。わが形は乙な形だな。コレ、伊勢詣り。われにちつと無心がある。
時夜　見ますれば、お歷々のお稚兒樣。賤い私に御無心とは。
千代　インニヤ、モウそのお稚兒樣にうんじ果てた。お主、今のを見て居たか知らないが、南谷の坊で、おれが得手物をして來たから、坊主めらが追つかけて、あやふく今の奴らをおつぱしらしたが、これから衆徒の手合でも出て來ると、おらア叶はない。何とわれが伊勢詣りの形と、おれが形と取替へてくれまいか。姿を替へて逃げる工面だ。
時夜　何と仰やりまする。私が汚ないこの態と、その結構なお振袖と。
千代　この入替はどんな質屋でも合點しさうなものだ。
時夜　私もこの伊勢詣りの形で居るより、お稚兒樣の姿になつたら、神前迄も〇サア、成程、御所望なら取替て上げませうかえ。
千代　ソリヤア忝ない。そんなら人目にかゝらないうち、

首をすげ替へよう。
　ト兩人、帶を解き、互ひに、衣裳を着替て

千代　手前の稚兒振りは大分好いぞえ。

時夜　お前も好うお似合なされました。

千代　この形ぢやア又働けるわえ。
　ト皐月、木蔭より出て、

皐月　先刻から樣子は聞いた。ほんに幸ひの稚兒の形、その姿では二品ともに。

時夜　コレ。

皐月　おぢや。
　ト神樂にて、兩人、奧へ入る。

千代　何だ、あいつらは味な事を云つて。二品ともに。コレおぢや。氣が違つたさうな。
　ト奧にて、大膳、聲する。

モウ一杯喰はせべいか。
　トふんぞつて寢て居る。矢張神樂にて、大膳、侍を一人連れて出て來る。

侍ひ　旦那。御用でござりまするか。

大膳　用と云ふは外でもない。岩倉山に住む手白の猿又と云ふ獵人、音に聞えた不敵者、その上に鐵砲の名人と聞く。この大望あるこの大膳、彼奴を味方に招かんと、下部の小野平めを使にやつたが、この小野平と云ふ奴めが面魂も合點の行かない奴。汝、これより岩倉へ立越し、彼奴らが樣子を見屆け參れ。

侍ひ　委細畏まつてござります。

大膳　拔かるな行け。

侍ひ　ハツ。
　ト花道へかけて入る。大膳、奧へ行かうとする。こなしにて、千代若に躓く。

千代　オ痛イ〳〵。

大膳　こいつ、何者だ。

千代　わしやア拔け參りサ。あんまり疲れて爰に寢て居たら、横ツ腹のよじれるほど踏のめして、お侍樣、行くとは。オ痛い〳〵。

大膳　何だ、身どもがわれを踏んだと云ふか。

千代　たつた今踏んだぢやアないか。

大膳　こいつ僞りをぬかすな、身ども踏んだ覺えはないぞ。

千代　息のはずむ程踏んで置て、踏まないとは。オ、痛い痛い。

大膳　見れば年端も行かない子でつちの態で、うぬ強請りだな。騙りだな。

千代　何が騙りだ。何が強請りだ。この分ぢやア濟まない。身體が利かない。どうするのだ〳〵。

大膳　こいつ憎い奴の。身どもを誰だと思ふ。高階大膳。緩怠吐かすと手は見せぬぞ。

千代　切らつしやい。この神前で人を切つてもよかア、切て貰はう〳〵。

大膳　エヽ、うぬを。

ト思ひ入れ。

千代　そんなこけ脅しで行くのぢやアない。膏藥代に金でも貰ふべい。

ト大膳へかゝる、立廻りに、千代若、袱紗包を落す。それとかゝるなちやつと取つて懐中する。千代若、思ひ入れして行かうとする。

大膳　伊勢詣り、待て。

千代　何んでごんす。

大膳　用がある、待て。

ト合ひ方になり、千代若、立戻つて

千代　用があるとは。

大膳　眼中鋭く、不敵な根性。おれに頼まれろ。

千代　何がどうしたと。

大膳　われが其のどせう骨の太い所を見込んで、頼みたいと云ふ譯は。

千代　その譯と云ふは。

大膳　外でもない。二條家の梅丸、幼少よりこの叡山に登つて、人となつてより行方が知れない。

千代　ハテなア。

大膳　頼みと云ふは外でもない、その梅丸になつてくれろ。

千代　何と云はつしやる。行方の知れない梅丸になつてくれろ。

大膳　如何にも。

千代　わしが梅丸になりやア何うします。

大膳　うまい目算がある。

千代　そいつは耳よりだわえ。わしも只の伊勢詣りでもない、親はれつきとした西國に名譽の侍。

大膳　と云ふ事は、今の袱紗包で氣取つて置いた。シテ何人のひやうはくなるぞ。

大膳　某は大友宗麟が末子、惡五郎義統と云ふ者。父の

宗麟落命以後、菩提のために延暦寺へ登山、坊主が嫌さの今かけ落ち、身のためになる事なら、時分柄の入用に、松丸太でも梅丸でも、櫻丸には行き兼る、その外何んでもやつて見る氣サ。

大膳　頼母しい。シテ宗麟の末子と云ふには。

千代　確な證據はこの鏡。

　ト以前の袱紗包を解いて、鏡を出して見せる。

大膳　シテ、その鏡は。

千代　これこそ天竺の斑足太子、外道の法を修したる容暈鏡。この鏡の德といつぱ、蔭をたつせば姿を隱す、軍慮に用ゆべき一品。

大膳　さてはそれこそ大友家の重器、天竺の容暈鏡。その鏡を所持なすは、疑ひもなき大友惡五郎義統。思ひも寄らず。

千代　變つた所で。

大膳　面談を致すなア。

　ト奥より、氏直、うろたへ出て來る。千代若、思ひ入れ。大膳に行當る。

大膳　コリヤア、氏直どのか。

氏直　大膳どの、大難儀が出來ました。お救ひなされお救ひなされ。

大膳　大難儀とは何事でござる。

氏直　お聞きなされい。虎之助めが假家で某を捉へ、三韓征伐のお供に作病を遣つたは、一物あるに極まつたと小突き廻して、呵めまする。アレ／＼あそこへ。お頼み申す／＼。

大膳　何事かと存じたれば、虎之助が呵めるとは。慮外ひろがば切ておしまひなされ。

氏直　それが拙者が手で行く事なら頼みは致さぬ。マアマア、來て下さい。

大膳　デモ、拙者は。

氏直　それでも何うぞ。

　トうろたへながら、千代若が手を取つて引張る。これはしたりと振切る拍子に、千代若、鏡を落す。大膳、人違へだと云つても、氏直聞かずに千代若を引張る。大膳、氣の毒がる。この立廻り。氏直、うろたへる仕組にて、氏直、奥へ入る。宮神樂になり、切落しより、御高祖頭巾を冠たる後帶の女、舞臺へ上り、この鏡を取り、包のまゝ懐中する。奥より、大膳、出て來り、其所らを尋ろこなしにて、女を見付け、思ひ入れにて、

後より付て歩く。女あたりを窺ふ。大膳、惚れたるこなしにて、顔を見ようとする。見せまいとする、一寸立廻りあつて、女ついと奥へ入る。

大膳　何の事だ。今の女めは雲井御前が風俗に能く似た奴だが、面を見せぬは曲者だ。今の騷ぎに惡五郎が取落した鏡を、アノ女めが拾ひはせぬか知らぬ。何でも彼奴を詮議して。ソレ。

ト奥へ入る。本神樂になり、廻廊を切破り、時夜叉、旗を盗んで出る。跡より、岩飛大太、付て出る。時夜叉、あたりを窺ひ

時夜　この形を幸ひに、まんまと神前へ忍び入り、主人の御旗は盗した。忝ない。

ト後ろより、岩飛大太、この旗を取りにかゝる。立廻り。

貴樣は誰だ。

大太　ナニ、おれか。

時夜　どうか、見たやうな男だが、オヽそれに、阿部野街道で逢ふた八卦置どの。味な所へござつたな。

大太　われもどうか見た面だと思へば、その時逢うた三二の八やら云ふ馬方の小丁稚。わりやア味なわんぼうを引つ張つて、味な物を持つて出たが、晝鳶にしちやア盗物が氣に入らない。その旗をしよしめべいと、おれも念がけて忍んで居た。小僧、こつちへ渡せ。

時夜　ハヽヽヽヽ、人の物した物を物せうとは、膽の太い占屋さん。陰陽師身の上知らずの不敵者。欲しからうが渡す事はマアならぬ。

大太　かざつ吹いた事を云ふ素丁稚だわえ。そんな無駄を云はずにお爺に渡せ。やだアとぬかすと、そつ首がころりぽつたり、そく飛びだが、餓鬼め、それを渡すまいか。

時夜　命に替へて奪ひ取つたこの御旗。からが舍利になつても渡すやうな馬方ぢやアない。惡く駄賃を取かけて駄馬御免にない。先づ早くこの場をなくなるまいか。

大太　面倒な、渡せ。

トかゝる。

時夜　ならぬわ。

ト振切て留る。大拍子の鳴り物になり、兩人、旗をかせによろしく立廻りあつて、トゞ時夜叉、大太に當てる。たじ／＼となるうち、時夜叉、旗を持ち、一散に向うへ入る。大太、追つかけんとして

大太　ハテサテ、アノ丁稚めも手強い奴。アノ旗より肝心の阿部野に於て手に入れたる春永が鎧の金物、氏直さまにお渡し申したいものだが。

ト後ろへ氏直出かゝり居て

氏直　岩飛大太、參つたか。

大太　これは北條氏直さま。先達てより御懇望の春永が鎧の金物、祇園牛頭天王より授りし瓜の紋の金物。不思議に某が手に入つてござる。イザお請け下されませう。

ト源五郎、出かゝり居る。

氏直　出かした。日頃某が懇望なす瓜の紋の金物。これを授がりしより、春永、鬼神と呼れし勇猛は全く祇園の神力。身が手に入るは武運を開くべき瑞相。忝ない。

源五　それを。

ト取りにかゝる。立廻りにて

氏直　この氏直が所持なす大切な一品へ、ちよつかいを引つかけるは誰かと思へば安土源五郎。

大太　何故大切な一品を取りにかゝる。御しんが知れない。どうだ。

源五　サア、それは。

氏直　やう／＼手に入つた瓜の紋の金物。これを欲しがる源五郎、われも怪い者だわえ。

大太　安土と名乘る苗字もきぶさい。わりやア何故アノ一品に心をかける。

源五　サア、何か稀代の一品と存ずるゆゑ、一寸拜見いたさうと存じまして。

氏直　ならないわ。わいらが見ては猫に小判、無駄な事だ。邪魔をするな。

源五　デも、それを。

トかゝる。

氏直　左程にあれを見たがるは。

大太　われも小田家に由緣の者か。

源五　イヤ全く以て。

氏直　そんなら、何もこれを見たがる筈がない。

源五　御尤もの御不審ながら、祇園の神靈より給はりしとある物ゆゑ、是非某が。

トかゝるを、氏直、引付け

氏直　こいつは／＼、しつこい二才めだ。それ程に見たがるは小田家の殘黨に極まつたな。

大太　ふん縛つて詮議すべいか。

源五　イヤ／＼、滅多な事と仰せられるな。小田家に由緣

の者でござらぬ。
氏直　由緒かゝりのない者が、何故そのやうにこれを見たがる。
源五　サア、それは。
大太　殘黨に違ひあるまい。
氏直　ぶちのめして白狀させろ。
大太　合點だ。
　トかゝるを留めて
源五　理不盡なこと仰しやると。源五郎が刀の切味。
氏直　しやらつくさい迷言に、うぬが刀の切味よりこれを喰へ。
　ト蹴る。源五郎、悔しきこなし。
源五　コリヤ、土足を以て某を。
氏直　踏みのめされて腹が立つか。
大太　次手にこれも頂きやアがれ。
　ト源五郎が襟へ足を踏みかける。
どうだ、悔しいか。腹が立つか。大べら坊め。
氏直　何だ眼玉へ角をぶつ立て、どうせうと思ふ。コナ毛二才め。うなア〳〵。
　ト其所にある三寳でぶつ。大太も引付けて、兩人、さん〴〵に源五郎を打擲する。引拔き散し鬘になり
源五　エヽ口惜しいなア。某も武士の切れつ端し。匹夫下郎の如く打擲されても、この叡山の佛罰にて、五體の惱みに是非なくもぢつとこらへる無念サ悔しさ。思へば思へば殘念なア。
　ト思ひ入れ。
氏直　うなア吠えるか、泣くか。五體の惱みとは尙うまい。身體の動かないを幸ひに、モット踏みのめしてくれべい。
大太　好い思し召しでござる。
　ト又兩人踏のめして
氏直　これでも、うなア手は出ないか。不愍な態だ。あんまり心根が可愛いから、踏のめした替りにせめてこれを頂かせてやらう。
大太　有り難いと頭を土へほり込め。斯うなつて居ろヤイ。
　ト源五郎が襟髮を取つて下へ押付ける。氏直、金物を袱紗ともに源五郎に頂かせる。ドロ〳〵にて、源五郎、立上り、この金物を引つたくる。大太、それをとかゝるを美事に投る。氏直、拔いて切付ける。立廻りに廻

廊の忌竹を斜に切て落す。大太、これを取て突てかゝる。源五郎、左に金物を捧げ、右にてこの竹槍を留め、しやんと見得。

源五　アヽラ有り難や、木瓜の紋を頂くとひとしく、五臓の惱御平癒なし、精神堅固となつたるは、祇園牛頭天王の神力なるか。父が勇氣を受繼ぐ某、兩人ともに觀念なせ。

氏直　祇園の加護に預る二才め。

大太　そんなら、うなア小田家の餘類か。

源五　云ふにや及ぶ小田上總の大領春永が末子、縫之丞友春とは某が事だわエヽ。

兩人　さてこそなア。

源五　打擲された返報に、首と胴との生き別れだ。氏直主從、覺悟ひろげ。

氏直　いけつ口を叩かせずと、大太、合點か。

大太　友春、覺悟。

ト竹槍を振解き、突てかゝる。源五郎、この竹槍を引つたくり、立廻りにて、兩人を當てる。うんと倒れる。源五郎、竹槍をかい込んで、きつと見得。

源五　斯く清心となつたる上、傳へ聞く、この石こそ父の春永、當山を燒討の折柄、武智が砦と印の石。思へば父が仇なる武智、その光秀は小栗栖にて、郷民のために竹槍にて殺害せらる。この心に光秀が名に殘るこそ恨みなれ。われも父への孝道に、この竹槍で、光秀、觀念。

ト石を突く。仕掛けにて血汐流れ、心火燃える。ドロドロ、早めの合ひ方。源五郎きつと見得。

我が孝道を天も感通ありつるか、さも滑かなる石面より、血汐漲り迸るは父が鬱憤散ぜし本望。これも祇園の加護力なるか、アラ〳〵有り難やなア。

ト思ひ入れ。後ろへ、正清、出かゝり居て

正清　この正清が推量の通り、縫之丞友春どの、春永公への御孝心。武智が砦のその岩石、敵に裝へて竹鎗に御成敗、孝心天に通ずる所、あつぱれ感心驚き入る。時節を以て久吉公へ、よしなに推擧仕らん。

源五　さては今のあらましを見聞ありしか、加藤正清。父が敵も討ざる不孝、世を見限りし今日只今、武智が砦のこの岩石、突留しは我が寸孝。

正清　忠孝二つは人の兩翼。われもこれより九州へ立越し三韓征伐の諸軍に加り、毛唐人のいけつ首、片つ端しから先つこの通りに。

ト舳の荷にある唐人の人形を取つて二つに引裂く。

友春　あつぱれ出かされたる正清、時に取てのこの場の吉左右、三韓へ押渡り比類の働き致されなば、鬼をも欺く虎之助、鬼上官とも云ひつべし。あつぱれ無二の忠臣かな。

正清　あつぱれ稀代な孝心かな。

友春　貴殿も。

正清　拙者も。

友春　互ひに。

正清　互ひに。

兩人　感心いたした。

ト奥にて、大拍子を打つ。

正清　かへり申の神樂の調べ。この場はこの儘。

友春　又重ねて。

正清　時節を待つて。

友春　身が推擧を。

正清　承知いたした。お別れ申さう。

ト合ひ方になり、正清、こなしあつて奥へ入る、氏直、大太、心付き、行かうとする友春を立廻りにて、支へて留る。

友春　また蹉へつたか、氏直、大太。

氏直　これからうぬをぶつちめるわ。

大太　友春、觀念ひろぎやアがれ。

友春　小癪な事を。

兩人　覺悟。

トかゝる、立廻り。

友春　ドツコイ。

トこれより、大小鼓の合ひ方にて、三人タテになる。此うち、友春、裸身になり、見事なるタテあつて、氏直、叶はず逃げて向うへ入る。友春、追つかけんとする。大太、支へるを切倒し、直ぐに換る。大太、苦み死す。友春、鎧の金物を持ち

友春　忝ない。

ト早神樂にて向うへ一散に入る。奥より、義景、兵雲阿闍梨、大友義統、出て來る。股引の侍四人、付て出る。

兵雲　コレ〳〵、今大膳どのに承はれば、こなたが二條の梅丸どのとな。

義景　藏人をおつ殺せば、二條の家はこなたの物。大膳どのの詞に付て道に待伏せ。

兩人　藏人めを。
義統　コレ、大膳どのゝ敎に從ひ、道にてばらすその手筈。通る所は小栗栖村。幸ひのこの竹鎗。
ト竹槍を取上ろ。
義景　ぬかり召さるな。これを以てたつた一突き。
義統　合點だ。者ども續け。
兩人　ござりませう。
ト時の鉦にて、義統、侍を連れ、向うへ入ろ。人音するゆゑ、兵雲、義景、奥へ入ろ。皐月、出て來り
皐月　今の秘事はこの身の幸ひ、騷動の紛れにやい刃の太刀を奪ひ取り、兄さんへお渡し申さん、ソレ。
ト花道へ一散に入ろ。奥より、田畑、愛護、鳰照姫を連て出て。
田畑　サア〳〵、お二人樣。一大事が出來ましたわいな。
愛護　コレ〳〵、田畑。一大事とは。
愛護鳰照　何事ぢやぞ。
田畑　サア、奥の假家の小蔭で聞けば、伯父御樣の企みにて藏人さまを殺さんとの密談。お出での道は小栗栖村。これより直ぐにかけ付て、御先途を見屆けまする。お二人ともに御一緒に。
愛護　それこそは一大事。危き父が御身の上。
鳰照　そんなら一緒に小栗栖村へ。
田畑　ちつとも早う。
ト田畑、兩人を連れ、行かうとする。奥より、義景、兵雲、衆徒四人、出て來り、
皆々　動くな。
田畑　コリヤ、義景さま。阿闍梨さま。我々を何となされまする。
義景　何とするとは知れた事。愛護鳰照は神事の庭を汚した大罪人。
兵雲　最前は虎之助がこじつけに云負かされたが、うぬらばかりはこつちのもの。
法橋　殊更愛護の若を生け置いては。
別當　大膳どのゝ寢覺が惡い。
鬼島　今日の落度を幸ひに。
多門　鳰照ともに引つ括す。田畑、われも同罪だぞ。
田畑　すりや、お二人をも、この田畑も、無實の罪に沈めんとや。
義景　おんでもない事。

四人　覺悟なせ。
田畑　そんなら何うでも。
三人　我々を。
兵雲　面倒な、ソレ。
ト衆徒四人、愛護、鳰照へかゝる。田畑、立廻りにて、四人を引退け、しやんと留り
田畑　女ながらも早苗之助が妹、荒木が妻のこの田畑、御主人方をのめ〳〵とこなさん方に渡すやうな女子と思はんしたら當てが違ふ。邪魔せずと其所退いた。
義景　いけつ口を開くとちめ郎め。先づそいつから引つ括せ。
兵雲　扱かるな、合點か。
四人　動くな。
ト田畑にかゝる。又立廻り。後ろへ、正清、出て、皆皆を引退け、三人を圍つて見得。
田畑　オヽ、好い所へ、正清さん。
正清　爰はおれが受取つた。二人を連れて、田畑、合點か。
田畑　心得ました。イザお二人。
愛護　田畑も一緒に。
皆々　うぬらをやつちやア。
ト立かゝるを正清留め
正清　爰構はずとつゝぱしれ。
田畑　お二人さま。
愛護　田畑おぢや。
田畑　おさらば。
ト早三重にて、田畑、兩人を連れ、向うへ入る。こなたは、ほぐれて、ドツコイと留る。
兵雲　何でも彼でも、四文と出る虎之助めをぶつちめろ。
皆々　正清、覺悟。
正清　こざいずくにうめら。わるく騒ぐと片つ端し、この正清が引導で賽の河原へぼいまくる。其所おつぴらいで通すまいか。
義景　要らざる廣言、息の根をぶつとめろ。
皆々　やらぬわ。
正清　ドツコイ。
トこれより、大太鼓入りの鳴り物にて、正清、四人の衆徒を相手に大ダテあつて、皆々を追込む。義景、兵雲、切つてかゝる。立廻りあつて、正清、兩人を追て奥へ入る。神樂になり、西の方より、頭巾の女、實は

二條の奥方雲井御前出て來る。大膳付て出て、懐ろの鏡を取うとする。立廻りにて、顔見合せ。

大膳　ヤア、わりやア。

雲井　大膳さまか。

大膳　その鏡を。

　トかゝる。

雲井　りやうじせまいぞ。

　ト立廻りの後ろへ、以前の敵役殘らず出て、

皆々　怪しい女め。

　ト取巻く。女、手早く鏡の帛紗を取て我が影を映す。どろ〳〵にて、女をセリ下げる。正清、出で、

正清　怪しい女が今の振舞。

大膳　忽ち姿の見えぬと云ふは。

皆々　ハテ心得ぬ。

　トひやうし幕

どろ〳〵にて、花道へ雲井御前をセリ上げる。鏡を持つて居る。

雲井　ハテ、奇態な鏡もあるものぢやなア。ソレ。

　ト神樂になり、こなしあつて、向うへ入る。

時の鐘にて、直ぐに幕明く。一面の竹藪、小栗栖村の景色、向うより、義統、四人の侍、何れも簑笠にて竹鎗を持ち、出て來る。雨の音する。

義統　モウ藏人めがこの道へ來る時分だ、程はあるまい。其處らへ忍べ。

四人　心得ました。

　ト時の鐘にて、方々へ小隠れする。合ひ方にて、下座の方より、ハイ〳〵と聲して、侍二人、六尺乘物を舁て出る。文藏、これに付き、その外、奴三人ほど付て出る、舞臺の眞中へ駕籠をたて、戸を明て、藏人、顔を出し

藏人　矢走文藏。

文藏　ハツ。

藏人　旅の用意は伏見にて申付い。

文藏　畏まつてござりまする、御同勢は皆々伏見に控へ居る手筈でござりまする。

藏人　然らば急げ。

文藏　お乘物。

皆々　ハツ。

　ト花道へ皆々行かうとする。侍二人、竹鎗にて、突て

出る。文藏これをあしらふうち「狼藉者／＼」と一乘物を捨て、家來散亂する。義統、出で、乘物を突通す。乘物より藏人、手を負ひ拔刀にて出る。文藏、皆々を切散し、奧へ入る。藏人、あたりを切散し、思ひ入れあつて、これより忍び三重。

藏人　何奴なれば路次の狼藉。一條の藏人清行に遺恨あつてか、盜賊か。太刀の刃金の續かんだけ一人も餘すまじ。返せ戻せ。

トこなしあるべし。義統、跡より付け、突留んとするを切拂ふ。飛退く間に外の侍かゝるを切立て、花道へ入る。奧より、皐月出て、乘物に窺ひ寄つて袋に入れし太刀を取出し、

皐月　忝い。やいばの太刀の手に入る上は、片時も早う兄さんへ。

ト義統、これを聞て、

義統　あまつちよめ。それはやれない。渡せ。

皐月　邪魔せずと退きや。

ト振切る。立廻り。トゞ義統この太刀を奪ひ取り、奧へ逃げる。皐月、追つて入る。四人の竹鎗、文藏を取卷て出る。

文藏　心得ぬ、惡人めら。山賊夜盜の類なるか。斯くの狼藉奇怪千萬。主人のお側には斯く云ふ矢走の文藏、片つ端しから撫斬りだぞ。

皆々　くたばれ。

文藏　何だ。

ト文藏、四人と立廻りあつて、トゞ散々に突立られ、うんと倒れる。四人、向うにて、人音するゆゑ隱れる。花道より、ばた／＼にて、田畑、かけて出で、死骸に躓き、藏人と思ひ、

田畑　ヤア／＼、最早御最期か、藏人さま／＼。

ト呼び活ける。向うより、藏人、大童に手を負ひ、刀を杖によろぼひ出て來り、

藏人　さう云ふ聲は田畑でないか。

田畑　ヤア、我が君樣は御存命なか。

ト立寄り見る。藏人、うんとのる。

數ケ所の深手。藏人さま／＼。

藏人　エヽ、口惜しいわえ。田畑。路次にて斯かる狼藉は、正しく伯父の大膳どの、氏直なんどが所爲ならん。最早存命思ひも寄らず。二條家の綱りは汝が兄の早苗之助、夫ト荒木と心合せ、家の相續、愛護を賴むと云傳へ

よ。申し置く事こればかり。田畑。さらば。返す〴〵も愛護が事を。ウム。

ト のり返る。田畑、いろ〳〵介抱して、

田畑　藏人さま〳〵。事は切れたか。最早お息は絶果てたか。ハア。そんなら、こちらの死骸は文藏どの、御先途を見屆けんと、お主と爰に敵ない最期。今日は如何なる惡日にて、斯かる嘆きを見た事ぞ。競馬に勝ち給ふと、愛護さま諸共に悦ぶ間も無う此のお別れ。我君もこの御樣子を御覽じたら、さぞ本意なからう、御殘念に思召さう。返す〴〵も、藏人さま。ア、お痛はしいありさまぢやなア。

ト 泣落す。向うばた〳〵にて、愛護、鳰照、左衞門、左金吾、數馬、も皆々出て來り。

愛護　田畑、父上の御樣子は。

鳰照　どうぢやぞいのう。

ト 田畑、物も云はず胸をさすり、二人りの死骸を教へる。皆々かけ寄つて、

愛護　ヤア、コリヤ父上。

鳰照　藏人さま。

左衞　文藏どのも。

數馬 左金　この有りさま。

愛護　田畑、コリヤどうぢやぞい、ヤイ〳〵。

ト 田畑を捉へていろ〳〵あるべし。田畑、せぐつて泣伏す。

左衞　コレ〳〵、田畑どの〳〵。泣てばかりござつては樣子が知れぬ。何者の仕業でござる。

左金　御主人の御落命。

數馬　樣子は何と。

三人　田畑どの。

田畑　そのお嘆きを見るに付け、この田畑が悲しさ辛さ。今一足早くかけ付けなば、女子でこそあれ、やみ〳〵とこの御最期は見まいもの。殘念と申さうか口惜しいと云はうか。遲れ走せなる田畑が心根、愛護さま。鳰照さま。御推量なされて下さりませいなア。

愛護　コレ皆伯父君大膳さまのお仕業。それとも云はれぬ惡事の段々、血で血を洗ふこの有りさま。やみ〳〵と父を討たれて殘念な、口惜しいわいヤイ〳〵。

鳰照　御尤でござりまする。わたしが爲めにも舅御の藏人さま。嫁かと一ト言お詞もない内に、お別れ申すこの悲しサ。田畑どの。思ひやつて下されいのう。

左衛　御主人御落命の上からは、禁廷へ申上げ、久吉公へ伺ひ申し。愛護さまへ。

左金　御家督を。

田畑　コレ……御主人の御落命。たゞ隱密に、何事も。

ト左衛門へ囁く。左衛門、左金吾、數馬へ囁く。田畑、愛護、鳰照へ囁く。

愛護鳰照　成程。

三人　承知いたした。

ト田畑、愛護、鳰照、立寄つて、藏人が死骸を乘物へ入れる。左衛門、左金吾、數馬、文藏が死骸を東の松影へ隱す。田畑、こなしあつて、

田畑　散亂なせしお供の面々。

皆々　ハア。

ト奴、侍、六尺、大勢、出て來る。

田畑　御主人藏人さまは狼藉者にお出合なされ思はぬ事ゆゑ横のお悩み。暫く御旅行を止められ、乘物はお館へ。

左衛　お供には斯く云ふ荒川左衛門。

左金　大道寺左金吾。

數馬　同じく數馬。

三人　お供の用意いたしてござる。

田畑　何、いづれもこの場の樣子、他聞は勿論、御家中へも沙汰なきやうに必ず隱密。しかと合點か。

皆々　ハア。

田畑　最前迄も今迄も、このお姿にならうとは、今朝曉の夢にだも思はぬ事の飛鳥川、替り果たる。

ト田畑、鳰照と顔見合せ、

鳰照　涙も今は末の露。元の雫や世の中の。

田畑　遲れ先立つためしなるらん。

愛護　思へば果敢ない

田畑　コレ。殿樣のお立ち。

皆々　ハア。

ト三重になり、侍、先きに乘り物、愛護、鳰照、左衛門、左金吾、數馬、田畑、こなしあつて、奴、付き皆皆向うへ入る。やはり、時の鐘にて、奥より、義統、皐月、袋の太刀を引合ひ立て來り、立廻りにて、

義統　コレヤイ、こいつはしつこいべんなごめだ。おれが引つ掴んだ物を取るべいとは、猫の額にあるものを二十日鼠が念がけるやうなもので、及ばぬ事だ、其所退け。

皐月　イヤ／＼、命に替へてもこの一ト振り、其方へ渡し

て好いものか。邪魔せずと其所退きや。

義経　面倒な、とちあまめ。

ト振切る。

皐月　まつた。

ト立廻りのうち、後ろの稻村の蔭より奴小野平、三度笠、紙合羽、飛脚體の形りにて現はれ出て、これを見て居る。兩人、立廻りあつて、トヾ好い切つかけに、小野平、この太刀を引つたくり、こなしにて、向ふへ一散に持つて入る。兩人驚き、

義経　今の曲者、待ちやアがれ。

兩人　いづく迄も。

ト早神樂になり、義経、先きに皐月、追つて兩人向うへ入る。ちよん〳〵の切つかけにて、この道具を引いて取る。

舞臺一面の岩山。躑躅盛りの景色、青葉見合の道具見事に仕立て、眞中に東屋作りの藁家體、三方に葭簀かけある。東の見附柱、松の木、人の登る事あり。花道の中程に仕掛にて、松の木出る。枝に仕掛あり。この見得にて道具留る。

ト淨瑠璃になる。

〽人間の榮燿は因縁淺し、林下のゆふかんは氣味深し。深き山家に年月を送り狼猪猿を友に住む身の、我れかくと業も手白と名も高き。

ト切つかけにて、葭簀上る。手白の猿又、山賤の拵へ猿の皮の頭巾、猿の毛色のやうな羽織を着て、太き煙管にて煙草をのんで居る。小猿一疋、肩を叩いて居る。好き所に圍爐裏、この自在に兜の鉢をかけ、焚火してあり。こなたに鐵砲ある。

〽獵人今そかりけるが、頃しも夏の始めつ方、青葉の景色、岩つゝじ、盛りを見する風情なる。

ト木靈、時鳥の聲。

猿又　花間に友を求むれば杜鵑語らひを交へ、 洞裏に家を移せば□□隣をしむ。山賤と人は云へども時鳥、先づ一聲は我れのみぞ聞くと、坂の上の之則が詠ぜし歌も今の身の上。この岩倉に引籠つて、世の中の治亂に搆はぬ氣散じなこの暮らし。獵人のおれを猿めらが友達かと思つて馴れて仕へるしほらしさ。おれも猿仲間へ引摺り込まれた心になつて、名をも手白の猿又と呼れ、斯うして居るが、中々人間の附合ひより詔ひがなくつて面白い。飯

を炊くも猿、肩を揉んでくれるも猿、何も彼も猿任せだ
が、さるとは利巧に好く働くぞ。モウ肩を叩くことはよ
しにして、閑爐裏の火を焚いてくれろ。時にモウ一疋の
小倅めに、麓へ酒を買ひにやつたが、道で呑んで仕舞ひ
向う山へかけ落ちやアないか知らぬ。ハテモウ歸りさう
なものだがなア。

トてんつゝになり、花道より、小猿、徳利を提て出て
來る。後より、小野平、最前の形にて、付て出る。

小野　コレ〳〵、猿。

ト呼んでも構はずに行く。

コレ〳〵猿坊や。

ト猿、立留りて、こちらを向く。

小野　猿坊と云つたらこちらを向くやつサ。剝身ぢやアあ
るまいし、これ此の山に手白の猿又と云ふ獵人の居る所
を知つて居るか。

ト猿頷く。

小野　こいつは好い猿に逢つたわえ。コレ猿坊、知つて居
るなら、その猿又が所を教へてくれろ。何所だ〳〵。

ト猿、本舞臺へ指をさして教へる。

小野　ハ、ア、向ふの家が猿又が所か。そんなら一緒に行
くべい。猿、案内しろ。

ト猿、腹を立ち、拳を振上る。

小野　こいつは腹立猿だな。猿と横柄に云つて惡くば、猿
坊先生、頼むぞ〳〵。

トてんつゝになり、本舞臺へ來る。猿、内へ入る。猿
又が前へ徳利を置き、辭儀をする。小野平、こなたに
立て居る。

猿又　オ、戻つたか〳〵。よく酒を買つて來てくれた
な。おれもわれを待兼て、咽がぐび〳〵した。先づ何は
兎もあれ一杯いたさう。

ト内に居る猿、茶碗を以て來て出す。猿又、取り、徳
利の酒を注ぎにかゝると、今來た猿、猿又が袖を引張
り表を教へる。

何だ〳〵。マア一杯呑ませて置いて、用があるなら跡の
事よ。

ト又注ぎにかゝるを、無理に引張り、表へ連れて出
る。猿又、せう事なしに表へ出で、思はず小野平と顏見
合せ、

兩人　ハ、、、、。

ト互ひに笑つて、

小野　御免なされませ。

猿又　これは好うござりました。時に見れば、お飛脚のやうなお奴様だが、どれからどれへござるのだ。この岩倉の山中へござりました。木樵、山杣、獵人のほか知らぬ山道、常の人の中々通り行きのなる山道ぢやアないが、こなさんはマアどうして爰へござりました。

小野　わしかえ、わしが此の山中へ來たのは、少と尋る人があつて來ました。

猿又　尋る人があつて來たえ。

小野　アイ、この山の獵人で、鐵砲の名人と聞いた手白の猿又と云ふ人を尋て來ました。

猿又　ハア、何と云はつしやる。手白の猿又と云ふ獵人を尋ねて來たえ。

小野　左樣サ。

猿又　その猿又と云ふ獵人はわしが事だよ。

小野　アノお身樣が。

猿又　猿又とはおれが事だよ。

小野　ヤン〳〵嬉しや〳〵。この山中の道も知れない所を、矢鱈無性に尋ねて歩いた。さらば御免なさい。おれも一服のみかけやう。

ト笠合羽を脱ぎ、腰の胴亂を出して、煙草をつぎかける。猿、火繩を持て來てやる。吸付ける。

猿又　サア〳〵、こつちへ入つて、ゆるりと一服まいりませ。時に、奴樣はこの猿又を尋ねさつしやるは聞えたが、誰からのお使で、こなさまは何と云ふお奴どのだ。

小野　わしやア小野平と云ふ二合半。おらが旦那は知つてもござらう、高階大膳景行さまと云つて、禁裏守護のお大名。

猿又　成程、どうか聞いたやうな名だわえ。

小野　その大膳さまが、貴樣の事を聞及ばれての。

猿又　その大膳さまがおれが事を聞及ばれて、そしてどうだの。

小野　岩倉山の絶頂に手白の猿又と云ふ鐵砲の名人、殊に勇猛俊傑の不敵者、家來にしたい、抱へて來い、と大膳さまの仰を受て、貴樣をおらァ抱へに來た。何と花の都へ出て、うまい物の喰飽きをして、武士交りをする氣はないか。うんと云ふと、福德の三年目、おれもお使に來た規模が立つて手柄になるが、御奉公する氣はごんせぬか。

猿又　氣はないよ。

小野　ソリヤア何故。

猿又　飽くまで喰ひ身に溫う着ても、朝夕の勤めが面倒だ。この山中に住んで、猪や猿を相手にして、寐たい時は寐、起きたい時は起き、眼前の庭は生へ拔きのつゝじ山、腹這ひになつて一服のみかけた所と云ふものが、春宵價千金と云ふが、この景色は一萬兩位の物はあるだ。斯う云ふ氣散じな暮しを捨て、大膳さまとやらの家來になれば、腰楔もさゝざアなるまい。何んとか彼とか小むづかしくて嫌だ。おらア矢ッ張りこの山住みがこの身相應、人の家來になる事は嫌だ、きらひだ、と歸つたらさう云つて下さい。ほんに御太儀だの。

小野　ソリヤ手もない挨拶だ。おらが旦那があれ程迄に懇望さつしやるこなさん。おれも折角お使に來て、人の家來になるはいやだ、嫌ひだと申しまする、とお返事を云はれもしまい。又貴樣もさう云ふ氣性なら、早速うんとも云はれまい。マア〳〵お使の事を捨て、只飮んで附合はう。ドレ〳〵其の德利は酒ぢやアないか。一寸一杯行きたいの。

猿又　この奴どのは好い氣な人だ。この山中で酒を買ふ事が甘口な事で出來るものか。この小猿めらを口の酸くなる程頼んで買ひにやる酒だ。おれが爲の不老不死な振舞とは御免だ〳〵。

小野　それはどうしたものだ。貴樣も好きなれば、おれも一杯なる口だ。ハテ今度來る時、酒の一斗も持つて來ますわな。吝い事を云はずに、一杯呑んでおさし〳〵。

猿又　この人は山中に不相應な、大分洒落とやらを云ふ人だ。可愛相に、見せて置ても呑れまい。清水の舞臺から逆樣に落ちたと思つて、一杯はならない、半分振舞ふ。

　ト飮んでさす。

小野　エヽ、吝い男だ。そんなら先づ頂くべい。

猿又　手酌ぢやアうまくないものだ。おれが注いでやらう。

小野　コリヤア、おりよもじだの。

　ト茶碗を取る。猿又、注いでやる事、ちび〳〵とこなしあるべし。

猿又　オトヽヽヽ。

小野　コレサ〳〵、酌人がオトヽと云ふ事があるものか。

猿又　それでも默つて注いで居ると、何時迄も注がせて、おれに鼻を明かさうと云ふ下企み。それに乘るおれでもない。其所で半分。

小野　そんなに惡い氣を廻すものぢやない。いつそ半分で

猿又　蟲殺して居よう。
　さう云ふも不愍だ。ソレ。
　ト一杯注いでやる。小野平、一口呑んで、
小野　ア、好い酒だ。こいつは山中には珍らしいわえ。
猿又　おらア悪い酒はきつい嫌ひよ。これでも一升二百五
　十。
小野　その割でこなからか。
猿又　何サ三合。
小野　三合の酒を斯うへいられては心持が悪からう。併し
斯う引受けた所と云ふものは云へたものぢやアない。そ
れに又この山の景色、嶮岨巖壁、谷々まで一面につゝじ
の盛り。その中にも東の方に、さしも鋭き峯聳へ西より
登る一筋道、小笹を巡つて攀登るは羊の腸にさも似た
り、誠に深山幽谷のこの山中に城廓を築くものならば、
要害堅固嚴重にて、ハテ屈強の城地で。
　ト猿又が顔を見て、
　ア、好い景色な所だのう。
猿又　朝夕見て居れば、それ程に膽も潰れない。初めて見
ちやアよつぽど目を驚かせる所だて。東の方のアノ山は、
昔惟高とか何んとか云つた王様の息子どのがくり／＼坊
主になつて庵を結んで居た所だと、年の寄つた木樵衆の
話、時に何ぞ肴を欲しいものだが。
小野　この山中にも肴がござんすか。
猿又　何サ、コレ小僧ども其所らへ行て、山椒の芽か何ん
その木の芽を摘んで來い。酒もちよいとした口取りがな
けりやア呑みにくい。早く取つて來い／＼。
　ト二疋の猿、頷き、一疋の猿をおぶひ、下座の方へ入
る。始終合ひ方。
小野　ハテ、好い奉公人だ。第一給金が要らないで好い。
猿又　その代りに喰物に困るだて。ハヽヽヽ。
小野　インニヤ、モウ世の中はさま／＼だ。貴様のやうに
猿を使ふものもあれば、お使に出てもおれがやうに蛇を
遣ふ奴もあるだて。時にこの圍爐裏に乙な鍋がかけてあ
るが、山中でも又物好きだな。コリヤア何でごんす。
猿又　その自在にかけてあるのか。
小野　この事よ。
猿又　ソリヤア主殺しの武智が兜だと云つて拾つて來た
が、汚れて役に立たないから、毎日おれが足を洗ふ湯を
沸かすのよ。わが家楽の釜盥と、不斷足を洗ふ、コリヤ
ア盥サ。

ト足にかけて、この兜を自在から卸す。小野平むつと
したこなしにて。

小野 ソリヤ又慮外な。

ト猿又、小野平を屹度見て、

猿又 奴どの。何が慮外だ。

小野 サア、慮外だわサ。

猿又 何が慮外だよ。

小野 ハテ扨、今聞けばソリヤア武智どのゝ兜だげな。何
ぼ主殺しだの何のと、武智を惡く云つても、ソリヤア何
も知らない山猿の云ふ事だ。相手のない喧嘩がなるもの
ぢやアない。小田春永と云ふ馬鹿大將が、滿座の中で森
の蘭丸と云ふ子丁稚に云付け、鐵扇をもつて武士たる者
のしやつ額をぶち割つて、疵が付いたから、侍が立たな
くなつたものだ。

猿又 ハテな。

小野 その無念骨髓に通り、止む事を得ず、本能寺に於て
小田春永に詰腹を切らせた。

猿又 武智光秀に貴樣は由縁りでもあるか。

小野 エ。

ト思ひ入れ。

猿又 イヤサ、貴樣は大分武智が贔屓をするに依つて由縁
りでもあるかと云ふ事よ。

小野 何サ、飛んだ事を云つたものだ。おらア大膳さまの
奴サ。二合半の盛りつ切りサ。

猿又 その二合半の盛りつ切りも油斷はならない。

小野 ソリヤ何故。

猿又 今一天四海の主と云ふは眞柴備前の大領久吉。二合
半から武家の棟梁になる果報者。貴樣もそんなになり兼
ぬ人相だ。大名にでもなる工面をしたが好い。

小野 貴樣も侍になる工面が好からうぞえ。おれが爰に來
たを幸ひに、大膳さまへ御奉公、四の五のなしに一緒に
ござれ。

猿又 おらア嫌だよ。大膳さまは愚か、久吉でも氣に喰は
ないに依て、こんな所に山籠り、首陽山の蕨を喰つて露
命を繫ぎ、いやな事を聞ては許由が耳を洗つたやうに瀧
水の一杯酒。貴樣にも何ぞ肴をしたいものだ。この猿め
らは何をしてけつかるか知らぬ。

小野 インニヤ、何も肴は要らない。この景色が何よりの
お肴。お心遣ひは御無用でごんす。

猿又 イヤ〳〵、さうでない。肴のない酒が呑めるものぢ

やアない。ハテさて何ぞ奴どのに馳走したいものだが。

ト立上る。

小野　ハテ扨、構はずにおかつしやいな。

猿又　オヽ、それ〳〵、幸ひな物がある。お肴にこれを焚くべい。

ト誂への合ひ方になり、猿又、香包を出し、火入にてこの香を焚く。煙たち登る。小野平きくこなしあつて、

小野　ハテ、名木かな。これこそ一ト歳、小田春永が挽かせたる蘭麝待の名香、世の常ならぬ一ト焚きをこの山杣が。貴殿はどうして持つて居る。

猿又　これか。これも拾ひ物よ。

小野　山崎の合戰に、今日こそ晴の一軍と下知して、武智光秀どの、この蘭麝待を兜に焚き込み、出陣ありしに情なや、久吉がために御落命。

ト立つて山に咲いたる皐月の枝を切て來り、香をたく火入れにかざし、しざつて口のうちにて、何か唱へるこなし。

猿又　この奴どのはいろ〳〵な所置つ振りをするわえ。今を盛りに咲亂れし皐月の枝を取て來て、この火入にかざし廻つて何をさつしやる。

小野　サア、コリヤアあんまり好く咲く皐月だに依つて、花も香を呼ばうと思つてサ。

猿又　ハテ、味な物好きする人だ。ほんにこの皐月で思出した、主殺しの武智が愛宕山で連歌をいつたげな、それはアノ何サ。時は今。

小野　天が下知る皐月かな。

猿又　貴様は好く覺へて居るの。皐月かなも落花微塵に、うまい食をくつた所が、たつた三日。果敢ない奴サ、ハハヽヽ。

小野　何故笑ふよ。イヤサ山杣。何故笑ふ。猛將勇士も運の窮達は力に及ばぬ。三日でも四海の武將になる事が甘口でなるものか。うぬが心に引比べて、爰な猿まつめ。

猿又　コリヤア大分のぼせたの、それ程までに武智が贔屓、無上に光秀を譽めたがる奴どの。確にそれと聞及んだ武智が弟左馬次郎。

小野　何が何と。

猿又　サア、さほどの事にさもせいやかずと、早く歸るが増しであんべい。

小野　山杣の匹夫に似合ぬ、蘭麝待の名香をこの森蔭に所

持なして、武智を蔑みする手白の猿又。この森蔭に蘭麝待、たしかに小田の御内に於て、この名香に裝へたる森の蘭丸。

猿又　何が何と。

小野　正しくそれに極まつた。大膳どのゝ家來にならにやア三寸繩に括し上げ、その本名を白狀さゝうか。

猿又　竹火繩でぐる／＼卷き、武智が餘類と白狀さささうか。

小野　引つ括らうか。

猿又　ソリヤア誰だ。

小野　おれがよ。

猿又　アノお身樣が。

小野　如何にも。

猿又　ソリヤアどうして。

小野　斯うしてと。

トかゝる。

猿又　何を。

ト振切る。一寸立廻りあつて、互に顏見合せ、

フヽ。

小野　へゝ。

兩人　ハヽヽヽ、何んの事だ。

小野　おれとした事が、一杯引つかけた酒に醉つたさうだ。無駄な事は取置て、おれも遠い山坂を遙々と來た者だ。猿又どの。どうぞおらが旦那大膳さまへ、どうぞ御奉公しちやア下さるまいか。

猿又　最前も云ふ通り、人の家來になる事が嫌ひなおれ、テモ心に叶へば今でも行く。氣に向かにやア五年十年乃至百年二百年、蟻の這ふやうに迎ひが來ても、ドツコイソツコイ一寸も動くおれぢやアない。大膳どのへもその通り。

小野　すりや、どのやうに勸めても。

猿又　仕官の望はかつて無い。

小野　ハテなア。緣なき衆生は度し難し。その我儘を土產にして、さらばお暇いたさうか。

ト立上り、そこらを見て、

なめら三寶、役にも立たぬ長話で、ツイ日が暮れたわえ。

猿又　知らない山坂を、明りなしにも歸られまい。袖振合ふも他生の緣。

小野　一樹の蔭のこの暗がり。

猿又　提灯出してやるべい。
小野　ソリヤ忝い。
猿又　明りを持つて行きやア、狼のつく氣遣ひがない。
　ト云ひながら提灯を出し、灯して小野平に渡す。
小野　コレ〳〵、こいつを便りに千里も行くだて。
猿又　緣もありながら。
小野　又重ねて。
猿又　奴どの。
小野　猿又どの。
猿又　ドリヤ、火でも焚いて當るべいか。
　ト合ひ方、掠めて時の鐘を打つ。猿又、圍爐裏へ粗朶を燻べる。小野平は提灯を提て、そろ〳〵花道へ來り、何か心を殘すこなし。東の松の木へ序幕の大膳が忍びの者顯はれ出て、窺つて居る。花道の小野平思案をして、提灯を松の枝へかけ、懐の種が島へ手早く火を付け、圍爐裏の火を目當に狙ふ。本舞臺の猿又、花道の提灯に目を付けながら、大鐵砲へ玉を仕込み、狙ひすまして、双方一度にどんと火蓋を切る。鐵砲の音して花道の松の枝折れ、提灯消して、煙硝火立つ。本舞臺は忍びに中つて見事に落て倒れる。猿又、兜の水をちやつと圍爐裏へかける。何れもとたての仕組。兩人、一度にホツト息を吐く。ちよん〳〵と、拍子、幕
小野平、こなしあつて、向うへ入る。

五立目大詰

二條家屋形の場
同亭座敷の場

役名――高階大膳景行。二條藏人子息愛護若。二條梅丸　實ハ大友惡五郎義統。北條五郎氏直。同妹鴆照姬、韮山郡治。百姓戀塚の小兵衞。二條家臣早苗之助妹田畑。獵師手白の猿又　實ハ二條梅丸。早苗之助。二條の奥方雲井御前。奴小野平　實ハ武智光秀弟左馬次郎。

本舞臺、正面、障子の亭、前通り柴垣。東の大柱、石引綱。これに愛護を引上げ、奴四人割竹にて立ちかゝり居る。下の方に井筒あり。高階大膳、床几にかけて、煙草のみ居る。琴唄にて、幕明く。

△サア、愛護さま、やいばの太刀の在所を眞直ぐに白狀。

○　遊ばされませう。

大膳　コリヤ、ヤイ奴ども、四人に慇懃な挨拶をせずと、ぐつと括し上げて白狀させろ。

○　左樣なら此のせく內が一番に進み出で、ヤイ、愛護の若。やいばの太刀の在所をきり〳〵白狀。

皆々　しやアがれエ、。

大膳　さうだ〳〵、主あしらひをするな。今日からわいらが主は叡山から此の大膳が連歸つた二條の梅丸だぞ。そいつめは遠慮なく責めさいなめ。この大膳が合點だ。藏人が最期場へかけ付けながら、やいばの太刀を失ふ愛護めは日本一のうつそり。それでも氏直の妹鳰照と不義をして居やアがる愛護の若。藏人が甘やかし、我儘をひろいで、伊勢から櫻の若苗を取寄せ、庭へ植ゑさせて榮耀の花見。今はうぬが身を責る木の空の憂き目。好いざま〳〵。奴ども、引上げろ。責て〳〵せめ落せ。如何にしても手緩い奴らわえ。

△　エヽ、ほんにヤレ、常から可愛らしい愛護さま。殊にむつちりお臀のあたり、この割竹でなさけ所を情けなや、今日の縄目においとしや。吐かせ〳〵の白狀のと、叩かれ給ふ度々に、さぞお痛うござりませう。

○　コレ、愛護さま、なさけ所を叩かれるが痛くば、やいばの太刀の在所を直眞ぐに白狀。

皆々　ひろげヤイ。

愛護　どのやうに責苦にあふても、御太刀の行くへは知らぬわいヤイ。このやうな憂き目を見するより、殺してくれいヤイ。

大膳　エ、忌々しい迷言。モット引上げろ。

皆々　畏まりました。これでもか〳〵〳〵。

ト引上げたり、卸したりして、

皆々　きり〳〵白狀ひろげヤイ。

ト向ふにて「梅丸さまお入り」と呼ぶ、みたれの鳴物、梅丸、仰山に結構なる拵へ、駒下駄にて、鳰照が振袖を捉へ、無理に連て出て來る。後より氏直、上下の形りにて付き、韮山郡治、付き出で、

鳰照　エヽ、モウ嫌やらしい。爰お放しなされませい。兄さんも其所明けて通して下さんせいなア。

梅丸　ドッコイ〳〵、梅丸が捉へては放さぬ。花の鳰照姬、道で逢つたが憂曇華の花、願を叶へて閨の花。

氏直　抱て寢るのがほんの花嫁、嫌でも應でも、この鼻が梅丸どのへ仲人役。

郡治　さんざ口說いて床盃、梅丸さまにも、氏直公にも、先づ／＼あれへお越しあられ、一口說きが宜うござりませう。

梅丸　イカサマ、あれなる櫻の元へ、氏直、お來やれ。鳰照、來いヤイ。

トみたれの鳴り物にて、梅丸、鳰照を引立て、舞臺へ來る。奴、控へる。梅丸、上へ通る。

鳰照　ヤア、愛護さま。

愛護　ヤア、鳰照どのか。

鳰照　愛護さま。

愛護　面目ないわいのう。恥かしうござるわいのう。

梅丸　伯父樣。

大膳　何だ。

梅丸　鳰照が愛護を見てこの體、コリヤ怪うござるの。

大膳　知らないか。こいつらはばぢけ合つた色仲間。

梅丸　さう聞ては尙々愛護を責めにやアならない。奴ども、責めろ／＼。

奴　畏まりました。サアぬかせ／＼。

ト引上げる。

鳰照　邪慳な伯父御樣、大膳さま。いとしさうに愛護さまを助けて上て下さんせ。マア、あの繩を。

ト櫻の方へ寄る。

氏直　寄るな。こな阿魔めは。この兄も赦さぬ不義をした愛護めは嫉味がらみ、その辛みから木の空へ引つ括られて、斯く憂き目を見る愛護の若を、思ひきり／＼梅丸どのへ返事をひろげ。動き廻ると勘當だぞ。

鳰照　その勘當、合點でござんす。親兄弟に勘當されても、いとしいと思ふ愛護さま。一旦浮名の立つた上は、何所迄もあなたを戀慕ふこの鳰照。自らを共に縛め、ともに責め、共に死たい／＼、死にたいわいのう。

大膳　よく死にたがる奴らだ。奴ども、責めろ／＼。

梅丸　伯父樣、待たつしやい。まだ愛護の若、しみ／＼近付きになつた事がない、何と爰へ連て來て、近付きにしては下さるまいか。

大膳　コリヤ尤だ。愛護がためにや兄も同樣の梅丸。奴ども、愛護の若を爰へ引据ゑろ。

皆々　畏まりました。

ト愛護を卸し、

うしやアがれ／＼。

ト引据ゑる。

奴　引据ゑましてござりまする。
梅丸　愛護の若、面を上げろ。コレヤイ、わりやア知るまい。藏人が弟梅丸、叡山へ登つて稚兒となつたが、今度兄藏人が思はざる死去に付き、大膳どのが藏人が跡とを取てくれろと無理頼み、嫌とも云はれず、この二條のやかぼねへのたくつたのだ。わりやアおれがためには子も同前、親の戀慕ふ鴇照が立ばんを切つちやア不孝であらう。今日からは二條の跡とり、大領公へは伯父御の取計ひ、北條氏直どのもお悔の塵を取らずばなるまい。身代よしの榮華者、鯛や比良目は爼板に跳ね返り、目には青葉の庭の時鳥や、初松魚にあらで今日も醉覺め、葛水のはしだ、眞つ白なそのしやつら、念者を殺す助平若衆、しや面を見知つてくれろやイ。
愛護　聞及びし梅丸さま。我がたつそまを拔出で給ひ、いづこか指して山家のお住ひ、友となる者とては知らざるこの身をしよくじなされ、仙家のお住ひと聞きしに違ふ今の詞。梅丸さまは清貧の樂しみ給ふと思ふに、合點の行かぬ梅丸どの、正しく其方は。
梅丸　何をぬかしやアがる、小童めが。
　ト引寄せ、

藏人が弟の梅丸なれば、うぬが爲めには藏人なければ兄も同前。合點行かぬと此の梅丸を怪しむ愛護、たつた今手にかける。
鴇照　エヽ、アノ愛護さまを。
氏直　コリヤ、動くな。
　ト引据ゑる。
大膳　いつそ手短にそれも宜からう。梅丸の了簡次第、愛護はこなたに任せるぞ。
梅丸　伯父様の許しが出た。丁稚め、今が最期だ。觀念。
　ト刀に手をかける。
田畑　待つた。
梅丸　今梅丸が刀に手をかければ、待つたと聲をかけたは。
皆々　何奴だヤイ。
田畑　二條の忠臣荒木の左衞門が妻田畑が留め申しました。マア／＼お待ち下されませう。
　トよろしき出になり、田畑、物詣で歸りの形り、鳥籠に鳩の入りしを持ち出て來る。
梅丸　田畑が留めたと聲をかけて出た女。伯父様、何者でござるな。

大膳　二條の家に早苗荒木と云ふ兩家老がある。その妻の田畑、中々の才發者。留て出たのはたかへの太刀在所手掛りでもあるのか。何しろ近く來いヤイ。

田畑　左様ならば御免の蒙りまして、梅丸さまの御前へ。

ト立て梅丸が側へ行く。

梅丸さまへ初めてのお目見得。御覽に入るゝ山鳩二羽、御覽じられて下さりませう。

大膳　梅丸へ山鳩二羽。鳩雜炊と云ふ時分でもないに、時の物饗應、青鷺でも持參すれば宜いに。ア、聞えた、鳩の杖を突くまで、二條の家の跡を繼げと云ふ心か。さうか。

梅丸　コリヤ、さうであらう。叡山の山蕨、大津の町の近江けくさい坊主めらが、いとこれに何事で傳授。この役目なか、二條の家の鴫たかもり、鳩の羽もりも宜からうかえ。

ト鳩を見て、

見りやァ二羽ながら、おつくたばつたを持て來た。エ、聞えた。この鳩のやうに、愛護めも鳰照めもおつかた付ろと云ふ事か。

田畑　この山鳩は、梅丸さま御運長久と、男山へ納めました山鳩二羽。お聞きなされませ。二羽が二羽ながらおちましてござりまする。

梅丸　生きた者はおちる道理。鳩がおちりやァどうする。

田畑　凶事でござりまする。

梅丸　何と。

田畑　お身にお愼みがなけりや叶ひませぬ。

梅丸　身に愼みとは、何の事だ。

田畑　則ちこの男山でござりまする。男山へ納め奉りしに、二羽ともにおちましたゆゑ、お身のお愼みが第一ぢやと申しまするのでござりまする。

梅丸　べら坊め。父藏人が死なれて間もない二條の家、不淨を忌む神のひろまへ納めた山鳩、二羽が三羽落ちないでどうするものだ。納めたうぬが大べら坊。見るも中々穢はしい。韮山郡治、山鳩を取退けろ。

郡治　心得たりと云ふ儘に、この郡治がその鳥籠を。

ト鳥籠へ手をかけるを、田畑、突込け。

コリヤ、女何んとする。手向ひをひろぐか。

田畑　韮山どの。女呼はり慮外であらう。夫荒木の左衞門留主のうちは、女でこそあれお家の御家老、荒木左衞門でござんす。梅丸さまを御異見のため持參した山鳩、取

退けさす事なりませぬぞ。

大膳　謂はれざる女の發明。鳥籠は勿論、郡治、田畑を引つ立ろ。

郡治　田畑、立て。

田畑　お家の忠臣荒木の左衛門。滅多に爰を立つ事ぢやないぞ。

ト突退け、

郡治　デモ、伯父御樣の嚴命。

田畑　慮外しやると赦さぬぞ。

トきめられて跡へ寄る。

梅丸さまへ申上まするは。

梅丸　イヤ〳〵、聞きたくない。叡山の稚兒法師、この身を黑染となす者を、無體に伯父御の勸め、凡俗になるからしては氣に入つた鳰照心に叶へる。邪魔になる愛護の若。一類とて用捨はせぬ。田畑、留るな。其所を退け。

田畑　お留め申さにやなりませぬ。たとへ御意に入らぬことがあつて、御勘當になるとも、お手討とはあんまり非道。殊に親人さまは小栗栖にて敢へない御最期の、まだ日數さへ經ちませぬぢやござりませぬか。

梅丸　又そんな馬鹿を云ふか。凡俗に立ち返る梅丸。佛三昧棚へ上げ、邪慳に心をそめなする天下のため。今武門の世の中、わるい奴は早く片付てしまふが好い。伯父樣、さうぢやござりませぬか。

大膳　さうとも〳〵。何事も二條の家は其方のまゝ、好きにしてしまやれ。

梅丸　アレ聞け。伯父樣さへアノ通り、童めをおれに渡し、田畑、女に似合つたやうに、鳰照を執持ち、抱て寢かせ。さうしろ〳〵。

田畑　左樣いたしましたなら、お前の御勝手は宜うござりませうが、マアその事は叶ひませぬ。鳰照さまは先達て小田春永公の御子息縫之丞友春さまへお許婚遊ばされしとの事。そのれつきとした聟樣のござるに、戀慕なさるは御無體でござりまする。左樣な事のお諫め申すが荒木が役。

梅丸　その許婚の小田縫之丞は行き方知れぬおこの者。氏直どのも聟には取るまい。

氏直　今久吉公の天下、小田と縁を組まれるものか。鳰照、この兄が中立ちぢや、梅丸どのへ縁を組め。

田畑　さう思召しても、氏直さま、お前の御自由にもなりますまい。氏政さまのお組みなされた縁。それは兎もあ

れ、愛護さま、雲井さまのござなさる牡丹の御殿へお供いたします。サア、お立ち遊ばされませい。

梅丸　遣らない〳〵。何んの彼のと邪魔な女め。愛護めより先きへ、郡治、ばらしてしまへ。

郡治　その御意を待つて居りました。梅丸さまの御意が出た。田畑、觀念。

ト抜いて斬かける。その刀を取つて肩先を切り下げる。

ヤア〳〵、人殺しだ〳〵。

大膳　氏直どのもこれにござるに郡治に手を負はせたにつくい女め。奴ども、女を縛れ。

奴　動くな。

侍ひ　下れ〳〵〳〵。

トてんつゝになり、向うより、猿又、鐵砲擔いで來る。侍「下れ〳〵」と付て出る。

猿又　こな人達はやかましい。高階大膳と云ふ人に逢やア直きに歸る。通さつし。エヽうるさい人間だわえ。

侍　何だ小氣味の惡い奴だから滅多に通さない。

皆々　下れ〳〵〳〵。

猿又　聞分けの惡い、大膳に逢やア歸るのだ。おれも人間、岩倉山の獵人、手白の猿又と云ふ山男だよ。

大膳　猿又だ。

ト向うを見て

其所へ來るは岩倉山の獵人か。大膳はおれだ。

猿又　こなさまが大膳どのか。

大膳　その女めを逃すな。捉らまへてくれろ。

猿又　何を、女めだ。

ト見廻す。このうち、田畑、奴を投退け、愛護、鳰照を連れ、花道へ出る。

田畑　サア〳〵、道を明けて通しや。

猿又　この女めが事かな。

大膳　オヽ、サ、その女めよ。

田畑　其所退け。愛護さま、お早う。

ト行かうとする。猿又、田畑が胸倉を取り、

猿又　動かせる事ぢやない。あせるな〳〵。

田畑　慮外者、こゝ放せ〳〵。

猿又　コウ引つ摑んだ腕は鉄、鎹でぶつ付けたやうなもので、離れることぢやない。

田畑　エヽ、放せ〳〵。田畑にお構ひなくとも、お二人とも早う落て下さりませ。

猿又　人間達、二人の子供を逃がさつしやるな。
侍　動くな、こいつら。
　ト二人を手込めにする。
大膳　出かした〳〵。手白、早く爰へ連て來てくれろ。
猿又　譯は知らないが、逃すなと云ふに依てつかまへた。其所へ連て行きますべい。うしやアがれ。
　ト田畑を引つ摑み、舞臺へ來る。侍、愛護、鳰照を引立て來る。
梅丸　大膳さまのお話で聞及んだ手白の猿又。ハテ豪勢な面付きだな。
大膳　岩倉山の半腹に、白瀧に米をかし、常に狩を好み、世に拘はらぬ手白の猿又、鐵砲の名譽類ひなし。氏直どの、彼れは何ぞの役に立つべき者。依て大膳がこの館へ呼寄せてござる。手白、よく來たな。
猿又　度々お身さまは、おれに來い〳〵と云はつしやるが、山を歩いて家に氣儘に遊んで居るが好いから、來るが嫌だつたが、今日はちつと町へ出て見ようと、思ひのほか足が向いたから歩いて來たのだ。こなた又おらが山へ來て、猪狩りでもすべいと思つてか。
　ト田畑、手を放さうとする。

何として〳〵、放すことぢやない。連て來たこの女、おれが手を放すと逃出さうし、大膳どの、少しの腹立は了簡してやりなさい。譯は知らぬが、今度からおとなしくするが好い。おらが山には山犬がいかいことある、連て行つて喰はせるよ。おとなしくして居やアがれ。
　ト押へる。
又刃向ひやアがるか。うぬが柔でくりやア、この鐵砲で叩かれても動きまゐるか、これでもか〳〵。
　ト叩く。鐵砲に取付き、
田畑　エヽ、おのれはなア、あらくれしい怖い顔して、手白の猿又、畜生のやうなおのれには構はぬ。愛護さま連れまして、爰を退く。放せ〳〵〳〵。
猿又　ハヽア、アノ若衆めは愛護の若めか。たしか一度大膳どのと一緒に山へ猪狩りに來て、猪や猿の跳ねるのを見て、オヽ、怖いと云つて顔を隱した臆病だから、めろめろと吠面、鐵砲のせうじんがしたいか。ハヽヽ、あんまりきつく叩いたなら、ツイくたばりさうだ。
大膳　アレ見やれ。アノ位の事だ。飼て置たらそれこそ千人力であらう。
氏直　千人力の段か、コリヤ猿又、身は北條氏直と知人に

ならう。

猿又　何だ氏直。汚ない名を付けて居るの。時にこの女、何を大膳どの、こなたの氣に違つたのだ、

大膳　聞け。そいつは主人藏人最期の場へかけ付けながら、この度禁廷より申下し、大領へ渡し奉るやいばの太刀を盗まれた科人。

猿又　アノこいつが。

大膳　云はゞ御太刀の盗人だ。

猿又　ようござる。太刀の行方はこの女が知る筈と、大膳どのゝ腹立ち。その太刀の行方を、こいつにまけださせてやりませうか。

大膳　それをこそ待つて居る。白狀させてくれろ。

猿又　合點でござる。コレ阿魔め、その時どんな奴が盗んで行つた。侍の女房で居ながら、見届けないことはあるまいから、それを見たら、さうと云へサ。

田畑　默れ。其方達が知つた事か。手白の猿又とは穢らはしい名を付けた。下郎には構はぬ、お二人さまを。

ト愛護が方へ來るを、猿又、捉へようとする。突退け、井筒の方へ來る。猿又、又押へ、

猿又　何所へ逃廻りやアがる。爰へうしやアがれ。

田畑　イヤ、放せ。

猿又　うしやアがれ。

ト爭ふ拍子に、

エヽ、小じれつたい阿魔めだ。

ト田畑を鐵砲にてひどく打ち倒す。田畑、ウンと倒れる。

皆々　ヤア、この女をぶち殺した。

鳰照　エヽ、アノ田畑を殺しやつたかいのう。

愛護　ナニ、田畑を。エヽ、おのれはなア。

ト猿又を睨む。

猿又　おらア殺しやアせない。女が弱いからツイおつ倒れたのだ。それとも。

ト田畑を動して見て、

死にやアせない。息がある。奴達、氣を付けさつしやい。

奴　コレ、女やい〳〵。

ト立ちかゝる。てんつゝになり、向うより、百姓、瓶子を一ツ持ち出て來て、

百姓　ちつとお頼み申します。

奴　何所から來た。

百姓　私は百姓は致しますが、村で醫者も致します。鳥羽の里、戀塚の小兵衞と云ひます。

ト云ふを聞いて、大膳、うつかりと、

大膳　オヽ小兵衞か。

ト立ちかゝる。

猿又　お前、鳥羽村の小兵衞、近付きかえ。

大膳　エ。

猿又　戀塚の小兵衞をサ。

百姓　岩倉山の山獵師、鐵砲の名人手白の猿又、爰に居やつたか。

猿又　アノ大膳どのが呼びに寄こしたよ。

百姓　大膳どのとは勿體ない。手前の友達か何ぞのやうに。むてつぱちな男でござる。モシ大膳さま。お約束のこの瓶子、かの酒を持て參りました。

猿又　彼の酒と云ふは、これが調合する惚れ藥か。

大膳　コレサ〳〵、へ、、、、。

猿又　何をお前、笑はつしやります。

大膳　サア、それは。

猿又　戀塚の小兵衞と云つて、鳥羽のあたりの雌鯉の膽を取てくわんじ合せる藥があつて、酒に浸して人に呑ませりやア、男なら女を思ふ、女なら男を慕ふ藥の酒。それを大膳どの、何所ぞの女に呑ませるのか。

百姓　きつかけの鯉があるから、拵へてくれろと頼み、金にせうと思つて拵へて來た。

猿又　藥の酒か。大膳どの、顏に似合はない嫌味な人だわえ。貴樣の年恰好では、どうで新造や年増なぞは手に入るまいと思つて、そこで鯉を殺すのか。ハテ嫌味な人だの。

大膳　さう云つてくれるな。おれだと云つて、色をせまいものでもない。

ト梅丸、氏直を見て、

ハテ、おれとした事がこんな事を云つて見たものよ。戀塚の小兵衞とやら。大膳、知る人でないぞ。

百姓　飛んだ事を云はつしやい。態々鳥羽の戀塚の草家へ來て、聞及んだが、惚れ藥を拵へてくれろ、この藥の德には、どのやうに愼む女でも心が亂れて男を思ふ、雲井御前に呑せて思はれたいと云はつしやれたではないか。

大膳　こいつ〳〵、云はせて置けば途方もないことを云ふ奴だ。早く其所へ置て行かないか。憎い奴だ。

猿又　人違ひなら、この百姓め、憎い奴。御人體な大膳ど

のに恥をかゝせるやうなものだから、この酒はこぼして仕舞ふか。

大膳　コレ〱、ソリヤア惡からう。コリヤアおれが預らう。おれに預けろよ。

ト瓶子を取る。

猿又　アレヨ、伯父樣が女に惚れられる藥を拵へたよ。ホウヤホウ、おらア知らぬ。

ト子供のやうに手を叩く。

大膳　さう云ふな。面から汗が出るわ。コリヤ爰へ捨て置く。誤つた。默つて居てくれろ。

ト瓶子を其所へ捨て置く。

百姓　只は上げられない約束の。

大膳　何にも云ふな、コリヤ。

ト金を出し、渡す。

それを持て早く行け。

百姓　これさへ貰へばモウお暇申しませう。

ト走り入る。

猿又　コレヤイ、一緒に行かうわえ。マア待て〱、テモ早い足の奴だなア。おどけはおどけ、大膳どの、おらアモウ歸りませう。

大膳　ハテ、この男は頼みたい事があつて呼びにやつた。待てサ〱。

猿又　頼まれた所が商賣の鐵砲、猪狩りの事なら何時でも山へ來なさい。

大膳　狩くらの事でない。われが勇氣を見て、大膳が家來に抱へたいのだ。

猿又　家來にする。アノおれをや、お前何の取柄があつて、おれを家來にしたさる。

大膳　勇氣英雄世に類ひなき人間。

猿又　人間だと思ふから惡い。手白の猿又、人間並みの用は足りないによ。

大膳　何んでも見所があれば、抱へたい。

猿又　然し惚れ藥を拵へて、色をしたがる人にはむまはあはない。おらアきつい色事なぞは嫌ひだ。アノ堅いお顏で色事をなさるか。

大膳　それを云つてくれるな。拜むわえ。

猿又　拜まれるが嬉しいとて、爰に足を留るのぢやアない。おれが氣儘だ。ドリヤ歸るべい。

大膳　歸らずと、留つてくれろサ。

氏直　あれ程に大膳どの懇望。おれも懇望だ。猿又とまつ

てくりやれ。

梅丸　二條の梅丸が留る。猿又、この梅丸に仕へてくれろヤイ。

猿又　ハア、いだかい人だらうどのもおれを留るのか。いい〳〵、人ぞばゐに歸ることもない。泊つてやらう。

大膳　そんなら留つてくれるかよ。

猿又　ハテ、四つを打つても、山は路次のしまる事もなし、大屋さんがなけりやア店賃の苦勞もなし、幾日でも爰に居べいわサ。

氏直　サア〳〵、御輿が据はつたぞ。

梅丸　心憎いは愛護の若。手打にして腹を癒る。その愛護めを。

ト立ちかゝる。

猿又　待たつしやい。ソリヤアよしにしたが好い。何故と云はつしやい。やいばの太刀とやら、今詮議まつ最中、種がなくなるに依て、この愛護めは。

ト引出し、

動くな。

ト押へ、

奴達、繩を寄こさつし。

奴　ソレ、繩々。

ト繩を渡す。

猿又　この繩で、動きやアがるな。

ト愛護を縛り、

コレから阿魔め。動くな。

ト縛り、

二人ながら一ツ繩、爺さまの野ら詣り、おそめと云つたら立つたりしよ、エ、好いざまだ。業晒しめが。やれ氣が盡きて來た。一寐入りやらかしたくなつた。

大膳　山家の者と云ふ者は氣散じなものぢや。氏直どのにも奧へござつて、豫ての談事。

氏直　イカサマ、左樣仕らう。

大膳　梅丸、今夜中に取持ち、姫照を抱いて寐かすぞ。

梅丸　ソリヤア嬉しい、伯父者人。奧へ行つて酒宴にしませうか。

猿又　おらもその中へ行くのか。

大膳　オヽサ、其方が今日の稀れ人、上客ぢやわ。

氏直　たんと馳走があるぞ。

猿又　御馳走なら猪の刺身、山犬の油揚げ、熊のこくせう、ざつとこんな事が好き。好い物がある、山鳩二羽。

これが肴に宜うござる。持て行きませうか。

氏直　食する物も小氣味が好い。こんたも奥へ行て、酒が宜からう。こいつら三人は矢ッ張り爰に繫ぎ猿。

梅丸　言は猿こそは眞猿なりけりと云ふ古歌もあれば、構はずと奥へ。猿又。

猿又　一緒に行きますべい。

梅丸　伯父様。

大膳　甥のとの。

梅丸　氏直どの。

氏直　梅丸どの。

梅丸　イザ奥へ。奴ども參れ。

奴皆々　先づお入りなされませう。

ト管絃になり、梅丸、大膳、氏直、入る。猿又は、愛護、鳰照、田畑、かたけ突きやり、山鳩の鳥籠を持ち奥へ入る。奴皆々付て奥へ入る。愛護、鳰照、縛られて殘る。田畑、叩かれし形にて殘る。

愛護　鳰照どの。わしゆゑ果敢ないその戒め。さぞ苦うござらうのう。

鳰照　何の、お前ゆゑならわたしや悲しうも何ともござりませぬ。その繩を解き、どうぞ爰を免れて下さんせいなア。

愛護　其方は梅丸に從ひ、この館に留り、愛護がことは思切て下されや。

鳰照　何の〳〵、とても斯うなる上はお前の事は思切りませぬ。梅丸に從ふ事はわたしや嫌でござんすわいなア。

愛護　志は忝いが、思直して下され。マア、田畑が心元ない。

鳰照　さうでござんす。

ト二人田畑が側へ寄り、

兩人　コレ、田畑いのう。

ト呼び活け、田畑、心付く。

愛護　田畑、氣が付いたかいのう。

田畑　愛護さま、鳰照さまか。

兩人　氣を付けてたもいのう。

田畑　お二人様にお怪我はござりませぬか。サア〳〵ちつとも早う、爰をお立退きなされて下さりませ。わたしがお供を。

ト立うとして苦み下に居る。向うにて「早苗之助出仕」と呼ぶ。田畑、苦むを、愛護、鳰照、いたはつてやる。矢張り管絃にて、早苗之助、上下にて出て來る。

早苗　館の主は遠く去り給ふと云へど、新樹細まやかに青く、時を違へぬ夏の花。この庭前に先君の御存生ならばさこそ。惜きは君の御行末ぢやなア。
愛護　田畑いのう。
鳰照　氣を付けてたもいのう。
　ト云ふを聞て、早苗之助は愛護、鳰照を見て、驚き。
早苗　愛護の若さま。ハテさて痛はしい。
　トかけ寄り、
　鳰照姫もこれにてこの體。何奴が仕業。
愛護　早苗之助、運がつたわいのう。
早苗　何にも致せ、御縄目を。
　ト愛護、鳰照が縄を解く。
愛護　やいばの太刀の詮議をするとて大膳さまの云付け、この身を數の責め、その上に手白の猿又と云ふ奴を引込み、彼がこしきの咎にて田畑がこの苦みぢやわいのう。
早苗　ハテさて大膳どのゝ行跡、油断のならぬ梅丸沙汰。愛護さまにお怪我が無うて先づ滿足。田畑、心を付けい。早苗之助ぢやわい。
田畑　兄さんでござんすか。
早苗　氣は確かなか。
田畑　アイ、わたしは兎もあれお二人樣の。
早苗　御縄目は解いたぞ。
田畑　さぞお手が痛みましたらう。
　ト苦む。
早苗　エヽ、云ひ甲斐ない早苗之助が妹、何と、流石女、その身の苦痛。
　トあたりにありし以前の瓶子を見て、
　幸ひ。
　ト取つて。
　打身を癒す一瓶の酒、サア一ツ。
　ト注いで呑ませる。田畑、呑む。
　どうぢや、心が涼しうなつたか。
田畑　心がはつきりとなりました。
早苗　快くば今一ツ呑め。
　ト云ふ所へ奥にて、
大膳　家來小野平はそれに居らぬか。ヤイ、小野平〳〵。
　ト聲する。早苗之助、後ろへ愛護、鳰照を囲ひ居る。
　大膳、見て。
　小野平、居らぬか。
　ト早苗之助を見て、

コリヤ、早苗之助か。
早苗　大膳さまでござりませんか。
大膳　今日の目出度い折柄、早苗之助、去りとは遲參したな。
早苗　思はざる遲參、眞平御免下されませう。
大膳　そこに居るは愛護鳰照。早苗之助。二人の奴らを逃すなよ。
早苗　屹度拙者が預りましてござりまする。
大膳　田畑、氣が付いたか。
早苗　妹めが身の苦痛。只今呼び活けましてござりまする。田畑、精神調ひ苦痛が止んだか。
田畑　アイ、今の酒が納ると。
早苗　心が晴やかになつたか。
田畑　モウ今のやうに苦しむことぢやござんせぬ。
早苗　快くばモウ一ッ吞めサ。
田畑　アイ。
ト注いで吞む。
大膳　ヤヽヽ、アノ瓶子の酒を田畑が吞んだか。その酒はアノ兼々思ひの雲井御前に。
早苗　何と御意なされまする。

大膳　サア、雲井がの、藏人が繪像へ供へる物。その瓶子の酒、どのやうな堅い女でもそれを吞むと心が亂れる。
早苗　エ、何と仰やりまする。
大膳　サ、心もあしも亂れ髮、藏人と雲井とは好い仲であつたが、藏人は惜い生物を殘して遠くへ行つた跡、獨り淋しい雲井御前が閨の酒。ハテ惜しい事を。
早苗　何を仰せられますか。根から早苗之助、承知いたしませぬ御挨拶。
大膳　お主は承知せぬ筈。彼れより外には知らないアノ瓶子。エ、惜い事をしたなア。
田畑　わたしが爲には氣付けの酒。とてもの事に今一ッ。
大膳　コレ〳〵モウよしにしろ。
ト取て
まだあるか。
ト振つて見て
雫ほどある。モウこの酒は吞ませない。
早苗　藏人公の畵像へお供へなさる瓶子。新に盛り替へ持參いたしませう。これへ遣はされませ。
大膳　イヤ〳〵、矢ッ張りこれで好い。ハテ惜い事をした。オ、ある〳〵、ありはあるが、テモ惜しい事をし

たて。
早苗　左様に思召しますなら、ツイ新たに瓶子の酒、それをお渡しなされませ。
大膳　イヤサ、これでサ早苗之助、今にても家來小野平が參つたなら、用があると云つてくりやれ。
ト振て見て、
テも惜い事を。イヤサ早苗之助、愛護や鳰照を預けたぞよ。
ト振つて見て。
扨も〳〵惜い事を。
ト瓶子を持ち、奥へ入る。
早苗　大膳どの、アノ瓶子を持ちながら、何かとき〳〵。瓶子の酒も心元ない。コリヤ妹、心持ちはどのやうぢや。
愛護　田畑、其方氣が付いて嬉しい。この愛護ゆゑ今の難儀、わしや手を合はさぬばかり拜んで居るわいの。
田畑　憎い奴はアノ猿又め。力づくに任せて打叩き。わたしや身は厭ひませぬ。お二人ともさぞお手が痛みましてござんせう。ドレマア。
ト愛護が手を取り、

このやうな御尋常なお手を、憎い奴らでござりました、そしてお髮も亂れた。ドレ〳〵撫で付て上げませう。
愛護　わしが髮より其方の髮。ドレ直してやらう。
田畑　御勿體ない。よしになされませ。
愛護　それでもツイ。
ト云ふ手を田畑又取り、
田畑　ハテ、御勿體ならござりまする。御家來の私、お主様のお前様にどうしてそんなことが。テモマア柔らか、御尋常なこのお手ではあるぞなア。
ト愛護が手を締める。しめられて愛護思ひ入れ。鳰照、中へ入り。
鳰照　田畑さん、何ぢやの。愛護さまのお手が柔かいの、尋常なと、どうやら側で見て、居惡いやうなわいな。
田畑　ソリヤ、何仰やります。たとへ尋常でも、美しいお若衆さんでも、お主様に勿體ない、あぢやらなことが云はれるものでござりますかいな。
鳰照　アレまださう云ひながら、彼方の側へ寄るのかえ。そつちへ退いて居さんせ。
田畑　替つたことを仰しやりますの。お主様を大事〳〵と思ふわたし、お側へ寄つて居るが忠臣でござります。

鳰照　お前の忠臣で愛護さまのお側へ寄らしやんすは、どうやら氣の揉めさうな忠臣でありさうな。

田畑　あなたのお髪の亂れたをドリヤ直さうか。お前、モットそつちへお寄り遊ばせ。

鳰照　お髪の亂れ直すのは鳰照がする。構うて下さんすな。構やんないの。

田畑　構はにやアなりませぬ。お主樣の事ぢやもの。鳰照さまこそ北條さまの御息女、縫之助さまへお許婚の花嫁樣。そつちへずいと退いてお出でなされませ。

鳰照　その縫之助さまと緣は切れてあるわいの。でんと晴て愛護さまのお側に居ても大事ないわいの。

田畑　ソリヤ、なりませぬ。不義はお家の掟。二條の愛護の若、そのやうな不義があつてはなりませぬ。お世話するはわたしが役。鳰照さま、猥なことはなりませぬぞ。ドリヤお髪を直さうか。

鳰照　イヤ、自らが直して上る。其方は退きや。

田畑　お前、そつちへ退かしやんせ。

鳰照　嫌いのう。其方、退きや。

田畑　お前、退かしやんせ。エヽ、退かしやんせ。

早苗　コリヤ〳〵、妹、何を云ふのぢや。脇から見て居るとな、われが何うやら愛護さまに次第のあるやうに見えるわえ。

田畑　兄さん。わたしぢやとて木や竹ぢやあるまいし、このマア荒木の左衞門、何時歸らしやんすことぢやぞいな。許婚の嫁ぢやの、聟ぢやのと、まだ一度も杯さへせぬ荒木の左衞門さんの名代、夫の留守のうちは荒木の左衞門になり替りて、お家を守れの、何んの彼のと、堅いこと云付て、兄さん、何ぼ侍の娘ぢやとて、辛抱強いも好いが、限があるわいなア。何時嫁らせてやるのぢやえ。

早苗　異な事を聞く奴ぢや。荒木の左衞門、今でもお館へ罷り歸れば直ぐに婚姻、聟小舅。くれ〴〵も左衞門が留守のうちは夫に代つて宮仕へ申せと云付けたでないか。

田畑　ソリヤ、さうぢやけれど、その夫にまだ一度も抱かれて寐もせいで、名ばかりの夫もあんまり久しい、待遠しい。

早苗　如何に女なればとて、兄の前でそのやうな事が云はれたことか。遠慮し居れ。

田畑　遠慮も絲瓜も入りやんせぬ。愛護さまや鳰照さまの何の彼のと仰やるを聞て居て羨ましい。

早苗　ム、聞えた。常に宮仕へ申しながら、愛護さまの御容貌に迷ひ、疾くより愛護さまに。

田畑　兄さん、叱つて下さんすな。惚れましたわいな。

トうつむく。

早苗　ハテ、ひよんな事を云出したな。憎い奴。爰には置かれぬ、屋敷へ歸れ。お二人とも、アノやうなたはけにお構ひなく、雲井御前の御殿へ、イザお越し遊ばされませう。

ト早苗、愛護、鳰照を伴はんとす。

田畑　イエ〳〵〳〵。

ト立ちかゝり、

お二人とも奥へやりますことなりませぬぞ。鳰照さまは知らず、愛護さま、日頃の思ひを云はにやなりやんせぬ。兄さん、退かしやんせ。

ト愛護の方へ寄らうとする。

お待ち遊ばせ、愛護さま。恥かしい事申出します上は、お留め申さにやなりませぬ。

ト寄る。支へる早苗を押退け、愛護が振袖を捉へ、

愛護さま、お恥しうござりまする。

トその袖にて。顔を隠す。

早苗　ひよんな奴を妹にして、この兄に手に汗を握らせるかえ。退け、退かぬか、おのれ。

愛護　爰放しやの、田畑。常には左もない貞女の其方が、俄に愛護を戀慕ふ志は忝いが、荒木の左衞門と云ふ主のある其方。早苗之助が見る手前も氣の毒。爰放してたもいの。

田畑　放されませぬ。夫荒木と仰やりますが、ついぞ枕替はしたことのない名ばかりの夫。たとへ今其所へ戻つてござんしても、いやでござりまする。お前様より外に増す花はござりませぬ。不愍な奴ぢやと思召しまして、たつた一夜が二夜、三夜、七夜、八千代、萬代、いつ迄も御不愍がつて下さりませいな。

早苗　べつたりと厚かましい奴ではある。退け。放さぬかいヤイ。

ト振袖を放さうとして、

きつい一心の堅めやう。よい〳〵、放し置かぬとこれぢや。

ト刀を抜いて、

兄弟の緣も切るぞ。これでも放さぬか。

田畑　サア、切つて下さんせ。

早苗　ヤ。
田畑　所詮叶はぬお主様。戀焦れて死なうより、一思ひに切て下さんせ。殺しや〱〱。
ト爭ひ、鳰照を下へ引据ゑ、髮を捉へ突き廻す。早苗、田畑を引付け、胸打に打据ゑ、
早苗　女心の淺ましく、はや嫉妬の念の顯はし、姬君のお髮の飾り散亂させる不屆き奴。これで好いわと、早苗之助安閑と見ては居られぬ。いやとも打て捨てねばならぬわえ。お二人ともに奧御殿へ早う。
愛護　鳰照どの、ござれ。
田畑　愛護さまはなりませぬ。
ト起上る。早苗之助支へる。立廻り。井戸の側の郡治が死骸、立廻りの中へ出す。
早苗　韮山郡治がこの死骸は。
愛護　ソリヤ、田畑が手にかけて。
早苗　さては郡治を女めが。
ト當惑して、
田畑　是非に及ばぬ、覺悟せい。
ト切りかける。田畑、刀を袖にて卷きながら、
田畑　兄さん、どうでもわたしを殺すのか。殺さば殺しや。一心は死なぬ。愛護さまの影身に添ふて戀を叶へる。鳰照どの。其方安穩では添はせぬぞや。鳰照、其方を。
ト鳰照を捉へようとする。早苗之助、切りかける。郡治が死骸へ切りかける。郡治死骸ばつたりこける。井筒の元へ田畑を引付る。愛護、鳰照、奧へ行かうとする。猿又、かけ出で二人を捉へ、
猿又　二人とも動きやアがるな。
早苗　不愍ながらもこの世の暇、南無阿彌陀佛。
ト井筒へ田畑を切落すとて、郡治が死骸二ツに切り倒す。この工面よろしくあるべし。
猿又　女めを井筒の中へやらかしてしまつたのか。
早苗　女が兄の早苗之助が手にかけるに、誰が何と云はう。殊に田畑は人殺し。
大膳　好く斬つた。出かした。
ト出で
郡治を討つた女、生けては置かれまい。
ト梅丸、奴皆々、大膳、氏直、出る。
梅丸　早苗之助。二條梅丸はおれだ。初めて會つた。流石は武士。穢れた刀を淨めろヤイ。
早苗　委細畏まり奉ります。

ト管絃になり、早苗之助、刀を差出す。猿又、手桶の水をかける。早苗之助、猿又を見て。思ひ入れして、刀を鞘に納る。

猿又　猪や狼をぶつ殺しても、これ程の血は出ない。いかいこと、女だけ血の氣が多いさうだ、ハヽヽヽヽ。

早苗　さもむくつけき大のおの子。この者は何ものでござりまする。

猿又　おらアの、岩倉山の山賤、ぎやつと生れると足柄山の山姥が產湯の水を浴せると、愛宕の山の次郎坊と太郎坊が甘やかしてヤツトウも遣ひ習ひ、熊と角力を取りやア、山犬をちんころのやうに手馴づけ、注き洗濯は猿の婆ア樣、狒々にさせ、狸は皷を叩いて慰め、狐は十六七に化けて踊り子を勤る。何時の間にか小猿どもがたんと來て、友達になつてくれる。其所で猿の皮の羽織り猿の皮の頭巾、煙草入れも猿の皮、まつかいな嘘は付きませぬ。つきあつて見さつし、ずんと而構ひに似せぬ正直な男でごんすよ。

早苗　その山賤がどうして爰へ來たぞ。

梅丸　呼寄せたは大膳どの、この梅丸。

氏直　勇氣逞ましい手白だに依て、梅丸どの、抱へ召使はんとて呼寄せられたわヤイ。

早苗　山賤を取上げ、御召使ひあらんとて、岩倉山よりお招きなされたのでござりまするか。

梅丸　奉公初めに手白、愛護の若を責めろ。

猿又　畏まりました。

ト愛護を捉へ、

斯んな事はおれが得手物だ。愛護どの。やいばの太刀とやら、きんばとやらの在所、どうで白い歯を見せては云ふまい。山男のこのおつかない髭お爺が責る、成敗棒はこの鐵砲。てつぼうだと云つて嘘をつかつしやるな。どせう骨に堪へて白狀しやアがれ。

早苗　イヤ、待て男。

猿又　何故、留めさつしやる。

早苗　責所が違つた。

猿又　何故違つた。

早苗　やうはうけたか、貴公達を山賤の其方が手にはかけさせぬ。先達て申付た責道具がある。

ト花道へ向ひ、

云付た責道具を持ち召されい。

ト向うより、僧一人、三寶に剃刀と石をのせ持て出て

僧　仰付られし愛護の若の責道具、持參いたしてござる。

早苗　これへ。

　ハア。

　ト持て來る、取つて、

早苗　則ちこれが愛護の若樣の責道具でござりまする。

大膳　ドレ。

　ト見て、

剃刀と石が責道具とは。

早苗　先達て大領公へ申し上げ、愛護さまには叡山へ登せ奉り、僧となし參らせんと、某が願ひに任せ、叡山より御迎ひとしてこの僧一人向けらるゝ。愛護さまにはとく〳〵阿闍利の元へ彼の僧諸共お越しなされ、然るべう存じまする。

愛護　早苗之助が計らひにて叡山へ赴けとか。この上は藏人さまの御菩提のため、出家堅固に遂げるであらう。南無阿彌陀佛々々々々々々。

鳰照　お前が叡山へお出で遊ばすなら、自らも共々尼となし、叡山へお連なされて下さりませいなア。

早苗　叡山は女人禁制。鳰照姬には小田縫之丞友春どのへ御許婚なれば、とく〳〵氏直公、姬君のお連立ちお歸りなされたら尤もに存じまする。

梅丸　姬は歸さぬ。梅丸が閨の花。

早苗　ハヽヽ、二條の家を取り給ふ梅丸君の閨のお伽の御用なら、御家臣早苗之助、二人でも三人でもお好み次第差上げませう。鳰照姬はお歸しなされ。今日早苗之助の詮議濟み、その上、嫁君は早苗之助がお仲人仕りませう。古語に七去あるは娶らず。許婚あるこの婦人、二條家の花嫁君にはなりませぬ。

猿又　御家老樣は格別な事だ。許婚のある鳰照姬。嫁にやアならないと極められて、一句も出ないで、どなたも高慢な顏をして、人の嫁を我儘さうに、世間に女ひでりはせまいし、よしになさるが好い。おれがやうな山賤を側で使ふと思はしつても、御家老が呑込みがなけりやア叶はない。岩倉山へ歸つて木の實を喰つて、猿に飯を炊かせる方が勝手だ。ドリヤ山へ歸るべいか。

　ト立たうとする。

早苗　コリヤ〳〵、男の子、待て。

猿又　おれが事か。

早苗　抱へて遣はさう。

猿又　アノおれをか。
早苗　一旦奉公させんと御意のかゝつた其方、早苗之助が
　召抱へて遣はさう。
猿又　御家老樣の聲さへかゝれば、落付て一服いたします
　べい。
早苗　マア〳〵、控へて居れサ。
氏直　早苗之助。愛護の若はやいばの太刀、父藏人に預か
　る役。この場を遁し、叡山へやつては濟まないぞよ。
大膳　異國退治のやいばの太刀、失ふのみか、早苗之助、
　愛護を同道、藏人を警固もせず、太刀の詮議も濟まない
　で、禁廷へ云譯が立つか。
早苗　その儀は早苗之助存じよりあつての儀、氏直公には
　鳰照君を伴ひ、お館へお歸り遊ばされませう。叡山のお
　迎ひ、愛護の若樣を伴ひ召されい。
僧　承知至極いたしてござります。イザ愛護君、お立
　ち遊ばされませう。
氏直　梅丸どの。お詞なら連歸るでござらう。
　ト鳰照が手を取り、
　鳰照、氏直と一緒に來やれ。
鳰照　そんならこれで愛護さま、お別れ申しますのでござ
　りまするかいなア。
愛護　我れとても、其方の志忘れねども、叡山へ登り出
　家する上は、愛護が事は思切り、田畑が今の。
鳰照　エ。
愛護　一遍の回向を頼みまする。南無阿彌陀佛。
　ト思ひ入れ。
早苗　お迎の御僧、阿闍梨さまへ宜う頼み存じまする。
僧　氣遣ひあるな、早苗之助どの。
早苗　氏直公よりもお館へ。
氏直　罷り歸らう。
早苗　愛護さまには、イザ叡山へお立ち遊ばされませう。
　ト三重になり、愛護、先きに立ち、僧ついて花道へ行
　く。氏直、鳰照を引連れ、跡より行く。愛護、鳰照も
　思ひ入れ、向うへ入る。
猿又　跡を取るべき愛護どのは山登り、出家すべき梅丸ど
　の、二條の家の跡取りとは仕合せな人だ。コレ慾には頂
　きのないもの、慾どうしくして早苗之助どのゝ云はつし
　やる事を聞くまいなぞと我儘を云はつしやるな。どれも
　どれも我儘を云ひさうな人達だ。
早苗　正直を元とする山家の猿又。今の言葉に忠臣が顯は

れた。取上げて梅丸どのお側で召使ふ。されどもおどろに生え延びたその頭の亂れ髪を剃り落し、さつぱりとした男になれ。

猿又　何十年か剃りもせない此の頭をか。

早苗　さつぱりとした男にせにや、お側使ひは叶はぬ。幸ひこの剃刀、砥石。女ばらを呼出し、髪剃らさう。女ばらを呼出せ。

猿又　コレ申し、その女ばらがイヤだ。べたついた女中衆にこの髪が剃つて貰はれるものか。早苗之助へ野郎にして何まろをさせさつしやる。

早苗　元服させて召使ふ名も、手白の猿又は改め、猿平と云ふ奴にして使ふわヤイ。

猿又　わざ〳〵山家から呼んで、奴にして使ふのか。

早苗　但し役目が不足か。

猿又　二合半奴になりやア、山家の方がましらの猿又。

早苗　奴下郎になつて仕へるが出世の種ぢや。當時天下を知ろし召す大領久吉公は元松下氏の下人、いみ名を猿冠者と云ふ。其方が名も猿又、よつて大領の強運にあやかり奉らんため、これを以て下郎となし使ふのぢやわヤイ。

猿又　二合半から天下取り、縁起を祝つてヤツコラサ、猿又は猿冠者、猿平となれど猿若の初舞臺、こいつは面白い。そんならグツと墨を入れて青月代の奴になりませう。コレ〳〵、奴たち、なんと其所らの日當りで墨を入れて下さい。

奴　今日から奴仲間なら、嫌とも云はれまい、墨を。

皆々　入れてやるべい。

猿又　大勢揃つて入れてやるべい。こいつは有り難い。

奴　大部屋へ連て行つて、元服の祝ひ酒にすべいか。

大膳　やいばの太刀の申譯、工夫をしやれ、早苗之助。

猿又　奴たち、おれが頭の拵へを賴む。

奴　呑込んだ。サア來やれ。

皆々　サア〳〵〳〵來やれ。

ト猿又を引つ張り、花道の方へ來る、

早苗　梅丸君には奥殿へ入らせられませう。

ト管絃になり、梅丸、大膳、奥へ入る。

奴　サア、仲間だ、來やれ〳〵〳〵。

ト猿又を連れて、向うへ入る。早苗之助、獨り殘る。

早苗　いろ〳〵の事に氣鬱した。誰ぞ居らぬか。たぞ參れ。

ト云ひながら、上の方、床几へ腰をかける。下座の方より、
小野　ネイ〳〵。
　ト小野平、下郎の形りにて、莨盆持出て。
御用でござりまするか。
　ト床几の上へ莨盆を直し、
何なりと下拙めに仰せ聞けられ下されませう。
早苗　好く氣が付いた。この事を申付けようと思うて、誰ぞあるかと呼んだのぢや。用事と云ふは莨盆の事よ。
小野　大方櫻の下の床几へお腰をなされましたは、煙草の火の御用かと心付きまして、持參いたしましてござりまする。
早苗　そして、われは館には見馴ぬ下郎、何んと云ふぞ。
小野　このお館の我儘伯父御、高階大膳さまのお草履を取りまする小野平と申まする下部でござりまする。最前よりお庭のうちに居りました。早苗之助さまに少と承りたい事がござりまして、御前のお手隙を伺うて居りましてござりまする。
早苗　小野平が、某に聞合せたい事とは、どのやうな事ぢや。聞て遣はさう。

小野　ト煙草のむ。
　則ちこの狀宮でござりまする。
　ト文箱を出す。早苗之助側へ寄り、あたりを見て、
モシ、お聞きなされませ。アノ大膳さまが雲井御前さまへの付け文。大膳さま仰しやるには牡丹の庭の御殿に雲井さまがござる、密かに致し、返事を取つて來いとのお頼み。牡丹のお庭に通りまする所が、能く〳〵存じますには、イヤ〳〵一寸早苗之助さまに右の樣子を內々申上げ、その上、お文を持參いたしませうと存じまして、扣へましたのでござりまする。ついした人の付文とは違ひます。誰が文使をしたと御詮議の時には、小野平大迷惑、大事を取り念を入れ、あなた樣へ伺ひまする。
早苗　雲井御前へ伯父大膳の横戀慕、見下げ果てた。下部小野平、後日の難を思ひ、某に伺ふとは、われは白狀な者ぢやな、われがやうな正直な男が、アノ邪智深い大膳にどうして氣に入つたぞ。
小野　大抵機嫌の取り惡いわろぢやござりませぬ。一日惡い事ばつかり目論でござるゆゑ、夜には肩が張つたとて術ながるを、私が力に任せ、肩から裾までそくりき按摩

十六文が、ぶつかけ一ツにもなりませぬ。それが氣に入り、小野平々々々とこのやうな使まで心置なく頼みまするて。
早苗　わりや按摩が得手か。
小野　ちつとやらかしませうかな。
早苗　この程から、いかう肩が張つた。ちつと頼む。
ト上下の肩を取る。
小野　ハイ〳〵〳〵。
ト來り、肩へ手をかけ、
いかう張りましたの。
早苗　雲井御前へその艶書、あけたとて返事はあるまい。
小野　私を人に致しても、アノやうな怖らしい大膳どの、いやでござります。
早苗　ア、勿體ない、忘れたことがある。
ト襟より錦の帛紗物出し、そこにある手拭掛へかけて置く。
小野　お守りでござりますか。何でござりまする。
早苗　この度、大領公、博多の津へお出戰、その船へ通用の天子の御紋すわつた船印。これを船へ立てさへすれば、博多の津は云ふに及ばず、朝鮮高麗まで通用がなるわ。
小野　天子樣の御紋のすわつた船印でござりまするか。
早苗　それを襟にかけながら勿體ない、サア頼むぞ。
小野　ヘイ〳〵、それを船へ立てますと、大領さまのお船の元まで參られまするでござりまするか。ならうなら私は軍の船に乘つて、あつちの方へ乘つて見たうござりまする。モシ、早苗之助さまへ。
ト早苗之助、眠る。
藏人さま御死去より晝夜臥しならぬ御家老樣の御辛勞、とろ〳〵なるも無理ではない。モシお日をお覺しなされませ。
ト早苗之助が眠るを窺ひ、船印を取らうとする。ドロドロになり、船印置きたるあたりへ田畑顯はれる。小野平、ぎよつとする。田畑、船印を取らせまじと支へる。二人、きつとなる。
武帝李婦人を見るに彷彿として影か形ちかと怪む、それに引替へ女郎の惱める如き形を現はせしは、聞えた、小野平を化かしに失せたか。うつかりと化かされる小野平ぢやァない。早く消えろ。
田畑　狐狸妖怪とは穢はしい。同じ枝葉を木枯しに、邪慳

云ふは早苗之助どの。エヽ恨めしい。

小野　それをおれが知つた事か。恨もない小野平が目に遮らずと、念佛で浮むなら、南無阿彌陀佛。

田畑　念佛いやぢや、聞きたうない。邪魔せずと其所退け。

小野　念佛嫌ひの幽靈なら、修道は知れた事、珠數もお經も要らばこそ、我が太刀風に。

ト腰刀を拔いて切拂ふ。この刀を引寄せ、田畑、きつと見て、

田畑　世の常ならぬ刀の光、疑ふ刀よ。

小野　劍の威德立ち去れ〳〵。

ト切拂ふ。田畑、追つ詰められて鏡を出し、わが影を見ると、ドロ〳〵にて消える。

忽ち消えるも刀の德、ハテ爭はれぬ。

ト鞘に納めながら、

ものだなア。

トこの鯉口の音にて、早苗之助、目を覺し、

早苗　ホウ。

ト吐息つく。

小野　お目が覺めましたな。

早苗　小野平。それに居つたな。さても今のは夢であつたか。

小野　あなたにはお夢でも御覽じましたか。

早苗　還愛寺の鐘は枕をそばだてゝ聞くと、仇につれたる鐘の音に、あつたら夢を覺したわやイ。

小野　あつたら夢と仰しやるは、定めし面白いお夢でござりませうな。

早苗　哀れな夢ぢや。

小野　哀れな夢とは。

早苗　思はずも手にかけし妹田畑、某に恨みをなさんと。

小野　あなたのお夢に亡魂が。

早苗　たつた今。

小野　御覽じましたか。

早苗　武帝李婦人を見るに彷彿として影の如く、何と早苗之助は物知りでないか。

小野　憚りながら御賢才でござりまする。

早苗　現在の妹を手にかけるも、武士の意氣地はさりがたいもの。

小野　御尤に存じます。二合半のもつさうを喰つて居る、我々しきのヤツコラも、時に臨みましては武士道をも。

早苗　立てたいと思ふか。

小野　左樣でござりまする。

早苗　中々の奇特者ぢや。其方を奇特者と思ふに付け、はしおりかゞみの 妹 めが敢なき最期、餘所ながら一遍の回向をなして遣はしたい。幸ひのアノ櫻花を手向けて身が回向。小野平、一枝切つて參れ。

小野　拙者めにアノ櫻を。

早苗　飛花落葉も菩提のたね。

小野　田畑さまへのお手向けに。

早苗　アノ花一枝、切つて來い。

小野　ム、ネイ。

ト合ひ方になり、小野平、花道の方へ行く。早苗之助、船印を取る。小野平、尻目にかけ、側へ來る。早苗之助、きつと見る。小野平、小腰を屈め、兩人思ひ入れあつて、花の側へ來るうち、早苗之助、襟へかける。小野平、脇差の柄へ手をかけ、花を切らんとするこなしにて、心付き、花を手折つて持て來る。早苗之助、見て、

早苗　小野平。見ればその花は手折つた花。何故わが腰刀で切口見事に切ては來ぬぞ。

小野　ハ、、、御家老樣にもお似合なされぬそのお詞。御祝儀の花ならば切口見事に切つても差上げませうが、佛へ手向のこの花、殊更劍難に合ひ給ふ田畑さま。刃物を用ひますは修羅道場の苦患もやと、態と刃物を忌みまして。

早苗　それゆゑ花を手折つて來たか。アノ其方が刃物を忌んで。

ト思ひ入れ。

小野　手折りましたは、憚りながら佛の道にも緣のある素性が歌を存じまして。

早苗　素性が一首は。

小野　素性が歌は。

早苗　たしかにそれと。

小野　何と。

早苗　見てのみや。

ト小野平が腰刀を見ようとする、見せまいとする。兩人ちつと思ひ入れあつて。

人に語らん山櫻。

小野　手ごとに折りて家づとにせん。
早苗　手ごとに。折もあるならば。
ト小野平が刀へ目を付ける。
小野　この奴めも。
ト早苗之助が襟にかけたる船印に目を付る。兩人きつと思ひ入れあつて。
早苗　小野平、參れ。
小野　ネイ。
ト唄になり、早苗之助、花を持ち、小野平、文箱を持ち、兩人、こなしあつて、奥へ入る。
一面に牡丹の園になる。正面、亭の家臺。てんつゝになり、向うより、奴四人、出て來る。跡より、猿又も奴の形りにて出て來て。
四人　サア〳〵、來やれ〳〵。
猿又　コレ〳〵、そのやうに急い立てられて、何所まで行くのだ〇。
△　何所迄と云つて知れた事、雲井さまの奥御殿のお掃除もせにやアならず。
〇　まだ、その上に新參者のお主に頼みたい事がある。

猿又　何であらうと、マアお庭まで來やれ〳〵。どうで早苗之助さまの仰せで御奉公するからは、何でもせにやアなるまい。何所へでも行くべいわサ。
皆々　そんなら、サア來やれ〳〵。
ト皆々舞臺へ來て、
☒　イヤ、今アノ男がお主に頼みたい事があると云つたが、大方彼の一儀であんべいの。
□　知れた事、この德利のことよ。サア早く新參者を頼んだが宜からう。
〇　そんなら、おれが委細を云ふべい。コレ新參のお主を見立てゝ頼みたい譯と云ふは、この神酒德利だて。
猿又　その神酒德利がどうしたのだ。
〇　さればよ。この中には彼の居守酒があるだ。この酒をどうぞお主が働きで、雲井さまへ呑ませてはくれまいか。
猿又　ソリヤマア、飛んだ頼みだが、この御殿の主雲井さまへ、おいらがやうな賤い者が、どうして近寄られまいぞや。
△　イヤ〳〵、さうでない。下司近い御前樣で、しかも大の慈悲者だよ。

○　こんな役にも立たない事を云つて居ても詰らぬ。何にも理窟なしに、その酒を呑せてくれろ。首尾よくやらかせば、一ッ角の褒美があるぞ。

猿又　そいつは耳寄りな。シテ何所から褒美が出るのだ。

○　その譯は、彼の大膳さまが雲井さまに首つたけなれども、ほんの片思ひ、其所でこの居守を雲井さまへ呑せて、その跡を大膳さまが呑まつしやると、兩方からあいに相惚の盃こそ目出度い婚禮の儀式も濟むと云ふもの。そこで仕おほせると、大膳さまから褒美が出ると云ふ事よ。

猿又　成程、さう聞けば働いて見る氣もあるわいの。

四人　そんなら、どうぞ頼む〳〵。

ト この切つかけに亭のうちにて、

雲井　誰ぞあるか。障子を明けいよ。

ト 唄になり、亭の障子上ろ。うちに、雲井御前、褥に上り、煙草盆を扣へ居る。後ろに蒔繪の臺にうちしきを敷き、この上に、冠裝束飾り、これに三寶に米を大分のせ供へある。猿又、奴四人、これにて、うろ〳〵して居る。

雲井　それに居る下郞ども、ざわ〳〵とかしましい。早う次へ立つて行け。

四人　ハイ〳〵。

ト 飛退いて、

△　そんなら、コレ、おいらは次へ下る程に、ナ、合點か〳〵。

○、　うまくやつてくれ〳〵。

×　サア、來やれ〳〵。

ト 四人共に向うへ入る。猿又、獨り殘つて居る。雲井、思ひ入れして、

雲井　コリヤ、それに居る下部。其方は何故に次へ立たぬ。早う次へ立つて行きや。

猿又　ヘイ、あなた樣はどなたかは存じませぬが、滅多無上に立て〳〵と仰やりましても、外の奴と違つて、この奴めは立つ事は、ネイ罷りなりませぬ。

雲井　自らが下れと云ふに、ならぬと云ふは、ソリヤ何故に。

猿又　仰付でござりまする。

雲井　ソリヤ、誰が。

猿又　早苗之助さまの御眼がねを以て召抱へられ、鬱たうしい山賤をすつぺがしたる奴頭。このお庭の隅々までお

掃除を致せとの早苗さまの仰付け、それゆゑ、これへつん出ました、ネイ新參の奴めでござりまする。

雲井　早苗之助の申付とあらば、よい〳〵。そんなら自らも其方へ申つくる事がある。ソレ、その咲亂れた牡丹花の根分ぢや。

猿又　ハイ、畏まりましてはござりまするが、シテマア、あなた樣はどなた樣でござりまするな。

雲井　自ら事は雲井御前。

猿又　あなた樣は雲井さまとや。左樣なら申上ねばならぬ一儀、早苗さまの仰に付き持つて參つたこの德利、大切なお神酒とやら、あなたへお上げ申せとのくれ〴〵の仰付け、一ツ上つて下されませい。

雲井　新參者の其方へ持たせ越したるその神酒を、自らへ勸むるも早苗之助が所存もあらう。何は兎もあれ大切な御神酒とあらば頂戴せん。その神酒を爰へ持や。

猿又　ネイ。

ト合ひ方になり、猿又、以前の德利を持て、雲井が側へ行く。雲井は米の前にある三寳と土器を取て、前へ置く。

猿又　イザ、神酒頂戴あられませう。

ト注ぐ。雲井、土器を取て請る。一つ呑んで下へ置く。猿又、その土器を取て、こちら向き見物へ見せるやうにぐつと呑む。このうちに、雲井、衣紋繕ひ、思ひ入れして、

雲井　下部、今いひ付けた根分をしや。

猿又　畏まつてござりまする。

トこれより立て、牡丹の花を一もと引拔く。

雲井　コリヤ〳〵、そのやうな根分の仕樣があるものか。粗相千萬な。

猿又　左樣なら根分と云ふは、引拔くのではござりませぬか。これはしたり。

雲井　何ぼ下部ぢやと云うて、草でさへ花の時節を違へず咲亂れる牡丹。花を酷たらしうも、そのやうにこぎ捨んとは心なや。その一もとを爰へ持ちや。

猿又　左樣に御意なされては拙者めが大不調法。と云うて今更仕方もなし、左樣ならこの花を。

ト差出す。雲井、猿又が手をぢつと取て、思ひ入れして、

雲井　コレ、下部。

猿又　ハイ。

ト うぢ〳〵する。

雲井　其方はマア下部に似合ぬ美しい手ぢやの。

猿又　イヽエ、左樣でもござりませぬ。

雲井　つまはづれの尋常サ、腹からの下部ぢやないわいの。

猿又　何んのお前、生れ付ての不骨者、猿や猪を相手にして浮世を無我で暮しました下司下郎でござりまする。

雲井　イヤ〳〵、何ぼそのやうに云やつても、ソリヤア詐りぢや。定めて奧樣もあるであらう。

猿又　飛んだ事を云はつしやります。奧樣とは何の事。羽子板の繪を見てさへ、殿樣、かみ樣、三素さま、と云ふやうな身の上で、中々そんな勿體事は存じませず、尤も色めいた事は不調法。根つから氣野暮、薄鈍でござりまする。

雲井　そんなら持つてたも。

猿又　何を持ちますえ。

雲井　自らを。

猿又　ナニ〳〵〳〵。

雲井　奧樣に。

猿又　エヽ。

ト 惘りする。

雲井　見れば見るほど可愛らしい立派な殿御。夫の事も子の事も何にも思はぬ心の迷ひ。コレ恥かしい、面目ない、必ず笑うて給るなや。

猿又　コリヤマア飛んだ事だ。夢ぢやアないか。たとへ夢でも目出度い、夢とは云うものゝ、あなたのやうに雛樣を見るやうなお御臺樣に、ヤツコラサがどう色事がなるものだ。形りからしてが釣合ひませぬ。

雲井　イヤ〳〵、好う釣合うて居るわいの。そのお姿を引替てめさせかへすは、オヽそれよ。

ト合ひ方にて、飾つてある裝束冠を持て來て、猿又が奴の上に着せる。猿又、迷惑さうに着て、

猿又　コリヤマア、何の眞似をするだえ。

雲井　オヽ斯うした所は殿上人。爰は端近、アノ褥の上へちやつとお出でなさんせい。

猿又　これは又迷惑な。

ト これより、雲井、猿又を無理に褥の上へのせ、その身も側へ直つて、

雲井　とんとモウ云へた物ぢやないわいな。

猿又　内裏雛と見えるかの。

雲井　これでは女夫になられうかの。

猿又　イエ〳〵、これではなられませぬ。何ぼわたしもお前に首つたけ惚て居ても、こんな窮屈な目に逢つては氣がござりませぬ。わしが望みは裏家住ひ、夫婦暮しの瘦世帶、うぬよ、われよの住ひたら、どうぞお前と二世かけて夫婦になりたい心だの。

雲井　ソリヤア自らも望む所。賤い民の竈の暮しを、とうから願うて居るわいの。

猿又　そんなら極つた相談だ。先づこんな物は脫ぎ捨て。

ト裝束を脫いで、

アヽ、窮苦しくなつてエヽぞ。時に裏家の嬶アになりやア、飯を炊いたり水を汲んだりせにやァならないが、それがなるかえ。

雲井　ならいでわいな。幸ひあれに供へてある米、あれこそ初陣の時まゝに炊き、出立を祝ふ八幡の米。せめては御裝束なと供へんと、これにあるのも時の幸ひ。ドレ米かしてまゝ炊がうか。

トこれより誂らへの合ひ方にて、雲井、三寶に米を持つて來て、飾つてある臺子を卸し、上の方の手水桶にて米を洗ひ、臺子の釜へ仕掛け、うちしきを前垂にして、いろ〳〵よろしくあるべし。猿又、煙草を呑み、これを見て居て、

猿又　コレ〳〵、それぢやアどうも、つむりが濟ない。

雲井　この髮をどうすれば好いや。

猿又　この手拭を被ぶつたり。

雲井　ドレ〳〵、斯うかえ。

トふはりと被る。

猿又　それぢやア一文首の信太のやうだ。斯うサ。

ト被せる。

雲井　これで好いかえ。可笑しいものぢやの。

猿又　帶も前へぐつと廻はしたり。

雲井　斯うかや。

ト前帶になり、いろ〳〵米をかすことあるべし。

猿又　イヤ〳〵、このやうな事をして居ると、早苗さまに見つけられたら大事であらう。モウエ、加減にして次へ行きませう。

ト立つ。

雲井　アヽ、コレ待ちや。折角このやうに夫婦の約束して、この儘で逃げうとはあんまり酷い、胴慾ぢや。何ぼうでもやる事ならぬ〳〵。

猿又　何んぼお前がさう仰やつても、ひよつと知れると大
せんぜう、平に爰を放しなさい。
雲井　どうあつても放す事ならぬわいの。
猿又　イヤサお放しなさいよ。
ト振切る。
雲井　ならぬと云ふに。
ト互ひに引合ふ拍子に、猿又が袖を引切る。
コレ袖が綻びたわいの。
猿又　コリヤマア飛んだ事をなさつた。早苗之助さまに
拵らへて下さつた物を、斯んなにしては叱られやう。今
お前の云ひなさつた瘦世帶に氣があるなら、綻びも縫は
にやアならないが、何と縫はれますか。
雲井　縫はいでかいの。縫うてやらう程に、早く脫ぎやい
の。
猿又　そんならお賴み申しませうか。
トこれより帶を解き、上の布の子を脫ぐ。
雲井　ドレ縫仕事にかゝらうか。
ト縫物にかゝる。
猿又　何ぼう云つても、モウ夏の印しで裸になつても寒く
もなし、コレ嚔アや。

ト腹這ひになり、
成程、見れば見るほど美しい物だ。ぼつとりとして、美
味さうで、爰な畜生め。
ト抓る。
雲井　エ、モウ。てんごうさんすな。
猿又　中々云ひやうが寫つて來たわえ。コレそちらの方を
向いて居る事はない。こちらを向きなさい。
ト無理に振向け、
一寸御內陣を
ト膝を明ける。雲井、恟りして、
雲井　オ、こは。何さんす。
猿又　何にも致さぬ。コリヤ〳〵〳〵。
ト前へ手を入れようとする。
雲井　コレ滅相な。
ト立ち騷ぐ拍子に、猿又、側にある臺子へ蹴躓き、上
へこける。だいすの湯氣にて胸を火傷する。
猿又　オ、熱い〳〵。飯の湯氣で大きく火傷した。さまざ
まな目に合ふものだ。
雲井　ドレ〳〵。さぞ熱かつたであらう。自らが一寸禁厭
うて。

ト猿又が胸を明けて見て、恟りする。その拍子に雲井が腕を猿又も見て恟りする。互ひに思ひ入れあつて、この胸の破軍の黑は。

ト猿又、唐鞍を取りにかゝる。雲井、支へる。立廻りにて、猿又、唐鞍を片手に抱へ、雲井を下へ敷き据ゑる。雲井、これを下より支へる拍子に、猿又が胸の黑子を見付けて、

雲井　この唐鞍に手をかける猿平が、胸にあり／＼と破軍の黑子の顯はれしは。

トこれにて、雲井を引退けて、

猿又　僞りならぬ二條の血筋。

雲井　藏人さま常々の物語、我れには二タ子の弟あり。

猿又　その名も二條の。

雲井　梅丸さま。

ト誂への合ひ方になり、猿又、きつとなつて、

猿又　我は藏人とは二タ子にて、幼な名は二條の梅丸。幼少より小田家に仕へ、初陣の功とやらに蘭奢待の名香を給はり、その名も森の蘭丸とこの身の譽れ。これ春信公の御恩ならずや、一心固まる忠義の蘭丸、不忠の武智を鐵扇を以て頭べを打ちしは若氣の短慮。春信公武智がためて御落命。この蘭丸が思慮なきゆゑ、その席にも有合はさず、無念骨髓に徹り、武智を討たんと謀りしが、久吉がためにこの世を去る。しなしたの／＼、最早この世に望みなきこの蘭丸、曹夫許由に習つて岩倉山に引籠り、浮世を捨し獵人の手白の猿又、密に聞けば二條の藏人、やいばの太刀を給はり、家に傳はる天の唐鞍を持て、このたび朝鮮征伐の大將の給はる事、我も恥辱を雪ぐはこの節と、小栗栖に來り待受しに、藏人は闇討に逢ひしとや、南無三寶、せめてこの上はこの家に來り、天の唐鞍を取得て朝鮮に赴き花々しき軍せんと入込みしが、目早き汝に見咎められ、素性を明かす森の蘭丸、幼なき時はこの家に育つ二條の梅丸とはおれが事だわい。

雲井　有り難や、忝なや、このほど狙ふ夫の敵、森の蘭丸覺悟しや。

猿又　藏人とは二タ子の梅丸、それを夫の敵とは。

雲井　愚か／＼、たとへ如何ほど陳じても敵に相違なき證據は今身の上の物語、小栗栖にて藏人さまを待受しと云やつたが、それに違はず、殿樣は小栗栖にてやみ／＼御最期、話の合うたは天の知らせ、何と敵であらうがの。

猿又　至當る理の當然。去りながら我身に取て覺えはない

ぞ。

雲井　隱すまい〳〵。やいばの太刀も其方が奪ひ取りしに違ひはあるまい。愛護の若を取立て、朝鮮の討手にこひうけ、二條家を取立んと、斯くの如く藏人さまの御裝束に唐鞍を供へ、軍陣のまつる兵糧八ヶ國の初稻を飯となし、首途を祝ふ心盡しは、我が子の愛護、二條の家を再び起す藏人が妻の雲井の前、血筋なれども夫の敵蘭丸どの、やい刃の太刀を渡し尋常に勝負〳〵。

トこのうちに、小野平、出て見て居る。

猿又　イヽヤ、藏人を討つたる覺えなし、又やいばの太刀も奪ひ取りし覺えなし。入込みしは唐鞍奪はん爲めばかり、その唐鞍を渡せ。

雲井　やへばの太刀を渡しや。

猿又　鞍を渡せ。

兩人　渡せ〳〵。

ト立廻りにて、雲井、猿又が脇差を拔き切付る。猿又、鞍にて受ると、釜のうちより水氣立つ。上より星顯はれる。三人きつと見得。合ひ方になる。

小野　アヽら不思議や、今男女の爭ひに、刀を以て切付くを、唐鞍にて受留るや否や。

雲井　賤の手業も軍陣へまつる門出の洗ひ米。

小野　炊き上る釜のうち、陽氣の湯氣は立たずして。

猿又　水氣は正に立昇り、空に破軍の陰の星。

雲井　體に破軍の陽の星。

小野　爰に顯はれしは。

雲井　傳へ聞く、天の唐鞍、やいばの太刀は、神宮皇后、三韓退治の折柄、海中守護の干珠滿珠、龍宮よりも奉る。

雲井　一つをば劍となし。

小野　又一ツをば山路も守る鞍となし。

猿又　代々に傳はる。

雲井　天の唐鞍。

猿又　やいばの太刀これなり。

雲井　この二ツ合體なすその時は。

小野　天に陰氣の星を顯はし。

猿又　地には陽氣の影を寫し。

小野　今兩星天地に顯はれしは。

雲井　唐鞍にやいばの太刀。

ト雲井が持ちし太刀を見て、

猿又　それにはあらぬ二合半の亂れ燒き。

雲井　やいばの太刀のもしや爰に。
ト三人、顔を見て、
猿又　われは。
小野　岩倉山の手白の猿又。
猿又　大膳から使の小野平。
小野　替つた形りの二合半。
猿又　同じ馴染の二合半。
小野　顔は替らぬ猿又どの。
猿又　猿の最期のその一ト腰。
小野　何が何と。
猿又　からくら合體なすと云ひ。
雲井　兩星の顯はれしは。
猿又　扨は。
ト思ひ入れして。
猿又　やいばの太刀に極まつた。
ト取りにかゝる。小野平、障子を立る。兩人、囁き思ひ入れして。
猿又　來い。
ト雲井を引つ立て一散に奥へ入る。管絃になり、梅丸三寶に盃をのせて、持て出て來る。

大膳　梅丸〳〵。モウ一ツ呑ぬかヤイ。
鳰丸　數杯かたむけ、この足取り。悦びに一トさし舞ませうか。コレ伯父樣。早苗之助が何と云つても、念かけた鳰照姬、貰つて下さいよ。
大膳　伯父に如才があるものか。早苗之助を呼出し、その事も云はうし、やいばの太刀禁廷への云譯、これとても早苗が呑込みなれば呼出して。
ト奥へ何ひ。
早苗之助參れ。
早苗　ハア。
ト出で、
火急のお召し、御用心元なし、仰聞けられ下さりませう。
大膳　早苗之助、其方を呼出したは鳰照が事だ。
早苗　鳰照とはな。
大膳　他所〳〵しい、氏直が妹の事よ。
早苗　それが何と仕りました。
大膳　梅丸が執心、何の彼のと云はずと、貰つてやつてくれまいか。
ト早苗之助、默つて居る。

コレ、早苗之助、コレ。

ト默つて居る。

ハヽ。藏人死去より心を痛める早苗之助、それに心も付かず嫁の話。マア／＼輝照が事は捨置て。

梅丸　捨置ては濟むまい。

大膳　ハテマア捨て置いたが好い。伯父が胸にある。ハヽハヽ、早苗之助、機嫌を直してくりやれ。このやうな事ばかり云つて肝心の事を忘れた。やいばの太刀の云譯、大領の博多より人を越されぬ先き、早苗之助が了簡が聞きたい。

早苗　御尤の思召し。只今早苗之助が所存お目にかけませう。

ト立て三寶を取出し、短刀をのせ、持て來り、

早苗之助が所存、先づ斯くの通りでござりまする。

大膳　フウ三寶に小サ刀は、云はずと知れた腹切り刀。藏人が殺される側にあり合ず、家老の身で浮々とやいばの太刀を盗まれ、禁廷は勿論、大領公へ云譯に腹を切る了簡か。御家老は御家老だけ好い了簡の定めやう。流石は武士だ。出來した／＼。

梅丸　すりや、早苗之助が腹切り刀で。

早苗　御尋常の御覺悟を願ひまする。

梅丸　何がどうしたと。

早苗　二條の家を繼木の花、梅丸さま、御腹遊ばされませう。

梅丸　ナニ、腹を切れ。ソリヤア嫌だ。

早苗　御承知なくば、お山へ早くお戻りなされ。

梅丸　山へ戻り、世の中に山てふ山は多けれど、山とは比叡の御山をぞ云ふ。叡山へ歸り何んの益。一旦山を下山したれば、山へ歸ること思ひも寄らず。元より腹も切ること嫌だ。輝照を執持つて抱いて寢かせろ、早苗之助何故腹を切れと勸めるヤイ。

早苗　さればよ。今日天子よりお許しもなく、私に二條の家を繼ぎ給ふからは、やいばの太刀紛失の申譯、御腹召さるれば、雲井御前、愛護さま、全うたされてお家は長久。一先づ舘を穩便に濟す某が、最前所存ありと申せしはその事。疾く／＼御腹召されませ。

梅丸　伯父樣、飛んだ事を云出した早苗之助。聞く手前も恥かしいが、山に育つてツイぞ腹を切るを夢に見た事もない。腹の切りやう、追腹する我れから先きへ切つて見せろ。

大膳　物には手本と云ふ事がなけりやならない。好く氣が付いた。早苗之助、腹を一寸切つて見せやれ。それを手本に覺悟をナさせようわ。

早苗　追腹と存じ付いた上は、腹の切りやう御存じない梅丸さまへ、御傳授申上げませう。

ト合ひ方替り、早苗之助、三寶持ち、梅丸、側へ寄て、

先づ腹切の古實といつば、假りにも驚くことなく、精神を落し付け、どつかりと坐して、

ト下にどつかり居る。梅丸、恟りする。

三寶をおし頂き、扨短刀を左の手に取て、右の手に持ち直し、左の肋へぐつと、

ト云ひながら、梅丸、引寄せ肋へ突込む。

天晴れ御覺悟。出かしなされた。

梅丸　エヽ。胸苦しい。どうでもおれを殺すかえ〳〵。

ト梅丸、大きに苦む。大膳、早苗之助を引付け、三寶にて叩き、

大膳　こな主殺しめが。太刀の云譯、梅丸を殺して、おのれが身を助からうと思ふか。眼前梅丸が敵、觀念しやアがれ。

ト拔て切りかける。梅丸は苦み居る。早苗之助、その刀を取て、大膳を叩き据ゑ、

早苗　二條の家を横領せんと、梅丸を入込ませるのみならず、雲井御前へ懸ての戀慕、人面獸心とはこなたの事でござる。大膳どの、此上は御太刀の行方、藏人公を討つたる者の在所まで、眞直ぐに白状なされませ。

大膳　白状する事が何があるものか。梅丸と云ひ、この家の頭領大膳まで手にかけようと目論む、うぬにこそ詮議がある。

ト立上つて刀を取らうとする。大膳を切倒す。梅丸、逃げんとするを切下げる。早苗之助、兩人を起して立てず切伏せろ。この時、梅丸、衣裳取れて元のやつしになる。大膳、倒れて居る梅丸を引寄せ、

早苗　今の姿に引替へて、怪しき形ちの紛れ者、息あるうちに白狀いたせ。

梅丸　口惜しい。所詮斯うなるからは行きがけの駄賃、その賃錢さへ取りもせず、あの世の道へ乘出すからは、云つて聞かせる。その大膳に頼まれて、藏人をおつ殺したはおれだわヤイ。

早苗　ヤ、何と云ふ、御主人を。

梅丸　手にかけ、大膳にくみしたも、家を引起したさのあま

り。大友宗林が一類惡五郎と云ふ者だ。やみ〳〵と早苗之助が手にかゝると思へば無念殘念だわい、ヱヽ。

早苗　聞及ぶ惡五郎と云ふ似せ者であつたか。シテやいばの太刀は何とした。

梅丸　その太刀は、その折柄、又候忍ぶ曲者あつて、惡五郎が手に入らず、その曲者を見失つたわ。

早苗　ヤア、この期に及んで詐りを構へるか。サア。

　ト大膳を引起し、

大膳どの、太刀の行方を御白狀〳〵。

大膳　早苗之助、よく殺したな。うぬも冥途の道連れ。

　ト大膳、早苗之助を引付けんとする。梅丸も早苗之助にかゝる。又兩方を切伏せ〳〵、大膳、倒れ伏す。梅丸、苦む。

早苗　藏人公討つたる惡五郎を手にかけ、大膳どのを害なせば豫ての覺悟。

　ト一札を出し、口にくはへ、刀を腹へぐつと突立る。

　この時、小野平、蔭より、

小野　ヤヽ、早苗之助さま。お腹遊ばされましたか。

早苗　わりや下部の小野平。

小野　ヘイ〳〵。

早苗　よい所へ參つたな。

小野　藏人公を討つたる惡五郎、白狀なせば御切腹にも及びますまい。疵養生なされ御尤に存じます。

早苗　ヤア小野平、二條近臣早苗之助、生くべきやうに腹切らうか。小栗栖の御供せざる誤り、今まで腹の切りやうが遲かつたわヤイ。大膳どのを手にかけ、某斯くなれば、一旦御太刀の詮議を延し、重ねてお家の祟となる。コリヤこの一札、封印のまゝ博多へ□はくにあきらけき記錄所へ持參いたせ。頼むは小野平。一札受取れ。

小野　名にし負ふ二條の御家老早苗之助さまのお頼み、記錄所へ參りますでござりませう。

　ト一札を取り、

この上にも仰せ置かるゝ儀はござりませぬか。

早苗　オヽ、この身の穢れに心付かざりし。小野平〳〵。

小野　ヘイ〳〵。

早苗　襟にかけた錦の袋。

小野　ヘイ〳〵。

早苗　中には天子の御紋すわりし船印。血汐の穢れ恐ろしい。サア受取れ。これとても記錄所へ。

小野　誠に。

ト早苗之助が襟にかけし錦の袋を取り、
天子の御紋すわりし船印。
ト明けて見て、
あたりも輝く御紋の結構。これを記録所へ持参いたすで
ござりませう。
早苗　斯かる場所へ参り合すこそ、幸ひの小野平、頼む。
小野　お氣遣ひなされますな。
ト此のうち、早苗之助が腹切るを能く見て、
記録所へ持て参りませうと請合ひたいがソリヤいやだ。
早苗　何と。
小野　べらぼうめ。この二條の家、武門の身にて宮仕へ、奉
公して何んの益、公家侍の早苗之助には頼まれまい。
ト一札を投出し、
大膽を手にかけ、悪五郎を白状させ、やいばの太刀の云
譯に腹切つて死ぬ健氣な早苗之助、公卿侍にして置くは
惜しい若者。定業極つてその最期は是非もない。餘り志
が不憫さに云つて聞かせる。能く聞け。高階大膳が下部
となり、この館へ入込んだも、今度大領久吉三韓へ押渡
るとて、はや博多の津まで出船、何卒してこの時大領を
恨みんと思へども、船を停めて博多へ押渡る便りなし、
藏人やいばの太刀を持ち、彼の地に押渡る天子の紋の船
印、近寄つて奪取りたく、心をかけし甲斐あつて、念な
う手に入る船印。これ、これを取らうばつかりに、下部
小野平、この船印を。
ト早苗之助目先へ船印を振りつかせ、
取らぬばかりこの船印を、フヽハヽヽ、いかいたはけの
御家老どの。腹まで召されて御笑止千萬。
早苗　さてはおのれも時を窺ふ。
小野　時は今。
早苗　何と。
小野　天が下知るさつきかな。大望成就の船印、アラ心嬉
しやなア。
ト船印を持て、ずつと立ち、きつと思ひ入れ。
早苗　今の一句は光秀が身を祝したる皐月の一句。然らば
おことが本名は。
小野　冥途の土産に聞いて置け、主殺しの御本地、安祿山
は毛唐人、長田の庄司は日本人、それから續いておれが
兄さま、武智十兵衛光秀が弟武智左馬次郎とはおれがこ
とだわヤイ。
早苗　おのれ、武智左馬次郎。

ト思ひ入れ。

小野　左馬次郎と聞て、おのれはと逸つても最早叶はぬ。もがくな。焦るな。公家侍のおのれらに名乘る名にてはなけれども、志の不憫さに、冥途の土産聞て置け。イヤサ焦るな。假令手負にならずとも、刃向ふ時には鬼神でも取り拉ぐ左馬次郎。うぬが小腕で刃が立つものか。もがくな。騒ぐな。狼狽へるな。これが欲しいか。

ト又繪符を出し、

左馬次郎と聞て取戻さうとか。これをか。イヤさうはならない。

ト早苗之助を突き、

これをこそ手に入れたさに入込んだ。二條の家に最早用なき左馬次郎、さらばだ。

早苗　待て。

ト留め、

左馬次郎と聞ては渡されぬ繪符、この方へ渡せ。

左馬　邪魔せずと、早く冥途へ赴けヤイ。

ト退け行かうとする。ドロ／＼、田畑、顯はれ、支へる。

おやつかな恨も仇も覺えなき幽靈め。又出て邪魔をしやアがるか。

田畑　エヽ、恨めしい早苗之助どの。刃にかゝりしこの身の辛さ。今も目前劍の山。

左馬　劍の威德、立去れ、消えろ。

ト切てかゝる。田畑、以前のやうに消えずに居る。

最前消え行く亡靈の、太刀風に消えやらぬ　、劍の德を顯はさぬか。

早苗　待て左馬次郎。劍の德を顯はさぬかとは。シテその一振りの銘は。

左馬　いこくたいぢのやいばの太刀。

早苗　愚かなり、やいばの御太刀、誠の御太刀と思ふかえ。誠の御太刀は疾くに某、密かに博多の津へ差上げてしまうたわヤイ。

左馬　慮り深き早苗之助、さもあらん。さあればこの一振り、やいばの太刀ではなかつたか。

トこのうち、幕明の奴出で

奴　左馬次郎捕つた。

トかゝるを田畑、左馬次郎が持つたる刀を取り、奴が首打落し、この刀を持ち、ずいと奥へかけて入る。

早苗　女業にも手並好く、名譽の切れ物、世に類なき名劍

ぢやなア。
左馬　今の女の跡を追ひ、彼の一振りとは思へども、大事を抱へし左馬次郎、船印さへ奪取れば大望の時、目のあたり。
ト梅丸が首を手に取り、
この首の如く、大領が首手に引つ提げる吉瑞に、假りのこの梅丸が首、家つどに、ソレ。
ト梅丸が首を持ち、花道へかゝる。
猿又　武智左馬次郎待て。二條の梅丸見參。
ト障子上る。猿又、軍場の裝りにて、釆を持ち立て居る。雲井、唐鞍を持ち、上の方、田畑、刀を持ち、下の方へ出る。
左馬　幽靈めも其所に居て、奴めが梅丸と名乘る森蘭丸どの。蘭丸とかけた詞は、小野平を武智と知らんそのためか。
雲井　蘭丸と仰しやつたは、武智其方を左馬次郎と名乘らせんため。二條の藏人さまとはお双兒の梅丸さま。幼いより當山に登り給ひしなれども、天然弓矢の道を好き給ひ、岩倉山の山中に引籠りお在します。
猿又　或時大領狩に出で給ひ、山にて謁し奉る。汝天然やさしき二條の家に生るゝとも、心勇猛あれば今諸所に我れを狙ふの輩、小田武智が門葉、山中に怪きこともあらば討て取れいと、山城大和は云ふに及ばず、五畿内の山山を經巡りし梅丸。今日元服なし、梅丸を改め二條の梅人、御太刀再び出ぬる上は、大領の御座船へありし博多の津へ出船のこの出で立ち。
雲井　やいばの太刀は再び戻り。
田畑　寶の御鞍と二品揃ひ。
雲井　藏人公の敵も亡び失せぬ事も早苗之助が手柄。伯父大膳どのを手にかけ、忠臣と云ひながら好う腹を切りやつたのう。
田畑　ヤ、、兄さん。
ト太刀を取置き、かけ寄り、
お前、ほんに腹切らしやんしたかいなア。わたしが幽靈も嘘、お前もほんに腹切らぬやうに大膳の惡事糺さう、やいばの御太刀の詮議をせうと、約束が違うて何故死んで下さんした。兄さん、長らへて下さんせいなア。
早苗　小栗栖の御供せぬ申譯は、雲井さま、梅丸さま、やいばの太刀、大領公へ持參の申譯。伯父大膳どのを害せし上は、似せ腹切つて濟むべきか。タ、、たはけな繰

言。
田畑　何ぼ武士の妹ぢやとて、これが泣かずに居られうか
いなア。
左馬　合點の行かぬはこの女、最前形を晤ましたは。
雲井　田畑が姿を晤ましたは、大友家に傳はる鏡の德。
ト鏡を出し、
坂本の社にて不思議に手に入る鏡を渡せと取卷く時、そ
の鏡に我が影を映せば、忽ち我が影の人目にかゝらぬ怪
しい鏡、手に返るはこの雲井。
田畑　雲井さまから受取て、幽靈の雲隱れは、アノ鏡の德
ぢやわいの。
左馬　音に聞いたる邪鏡一面、我れ豫て望みをかける折
に、幸ひその鏡を左馬次郎に渡すまいか。
猿又　博多の津へ出船なせば、今日の大領久吉は某船印、
汝には渡されずとあつて、勇氣の左馬次郎心弱くも渡す
まで。望をかけるこの鏡、立寄つて受取れ、左馬次郎。
ト雲井より取て、猿又差付ける。

二番目序幕

浮む瀨座敷の場
闇打の場

役名　━手代權八。醫者仙庵。山崎與次兵衞。藤
屋傾城吾妻。壺坂半平。與次兵衞許嫁、お菊。藤
屋亭主喜平次。與次兵衞父山崎與左衞門。お菊父
花形數馬。

本舞臺、三間の間、浮む瀨の座敷、下座の方、揚幕
に取り、總て狂言の樂屋に拵へたる道具立。鏡臺三
つ四つ直し、衣裳葛籠、大小、臺かけてあり。幕間
二三人、大名梶原、一人は人買惣太の拵へをして、
側に割竹を置き、顏をして居る。手代權八、頭取に
て、首に拍子木をかけて、子役の顏をしてやつて居
る。大太鼓入りにて、賑かなる惣踊りの唄にて幕明
く。
權八　この禿のおりのは、どうしても若衆顏で、梅若には
切つて付けたやうだが、ことのは根つからの女で困る
ぞ。

幇△　イカサマ、幼子の時から其うだが、今おれが寶童丸立てやいと云つたれば、オヤ〳〵、でん喜さん、こは馬鹿らしいとサ。
幇○　そして臺詞は皆んな忘れて居る奴サ。
幇△　誰も彼も大笑ひ。その中でも吾妻さんがいつち能く笑ひなさるの。
權八　テモ、吾妻さんは全體俄に出つけてござるに依て、虎のめんばいはどうも云へたものぢやアない。若旦那與次兵衛さまは、それは〳〵覺えない先生。ついぞねい。河津が一子、兄一幡成長して曾我の五郎祐時と、途方もない云損ひぢやアないか。
幇○　息子は何に浮れるか。根つから浮れて埒はない。
ト云ふ所へ、上下の形の後見走り出て、
後見　コレ〳〵、梅若の出る所だ。梅若〳〵と舞臺から新七さんが臺詞をからして呼んでた。サア早く、おりのさん、出なさい。
權八　ソレ見たか。サア〳〵早く行け。あんまり急いで臺詞を忘れまいぞ。一寸いつて見たり。
りの　コリヤ、山田の三郎、其方衆二人がいかい介抱、この上ともに頼むぞよ。

權八　よし〳〵、その跡は。
仙庵　サア、梅若はどうだ〳〵。
ト醫者、出て呼ぶ。
後見　早く〳〵。
ト後見、おりのを連れて入る。
權八　アノ仙庵めも、忍びの役をよく出かせば宜いが。
幇○　常は高慢だが、舞臺へ出ると云はれないものよ。
幇△　提灯屋の息子はよつぽどするものだによ。
ト忍び神樂になる。
權八　ソリヤ、仙庵が忍び者で出る所だ。
幇△　どんな事をするか。
ト顔をして居る。奥にて、ばた〳〵打つ音する。見物の聲にて「仙庵どの、きついものだ〳〵」と云ふ。
權八　アレ、大分聲がかゝるぞ。
ト仙庵、忍びの形にて、手に狩場の繪圖を持ち、かけて出て來て。
仙庵　何と權八、嚴いものか。今の聲のかゝつたを聞いたか。
權八　きつい、おちの來よう。何をどうして、あのやうに見物がうけたのだ。

仙庵　狩場の切手を盜んで、お定りの大願成就忝いと入りしなに、この鬘を斯う落して、醫者の正體を顯はしたわいの。

權八　狩場の切手を盜ませるが狂言の山、首尾よく盜んだか。

仙庵　狂言に盜んだ狩場の繪圖。何ぞ譯ありさうに、權八、ソレ狩場の繪圖。

ト投出す、權八取つて。

權八　今日小道具に狩場の繪圖ばつかりを落して來たが、今いふ狂言の山。コリヤアこれ異國退治渡海の繪圖面だ。

ト開く。

仙庵　アノそれが渡海の繪圖面とな。

權八　ずつとその昔、三韓攻めの時、あつちの繪圖を委しく書いたこの繪圖、昔から山崎の家に質物に入れてあるを、今度大領様異國を征伐に付て、この繪圖面、柴田さまと云ふお大名が求めたいと仰やる。代金は七百兩が八百兩千兩迄にも買ふとの事。定めて向うは千兩にも請合つてあるであらうが、今日この浮瀨へ繪圖面を受取にお侍さまがござる筈。所をこの權九郎が摺替て置て、うつけ者の與次兵衞をぽんとやつてしまふと又金儲け、一時に金の千兩も儲けて江戸へ行く了簡。所詮山崎に手代奉公して居ても親仁の與左衞門が吝ん坊で、何んの役に立たない息子めは放埓者、今にも十間口へ戸を立る、その先きに身を片付ける了簡だて。

幇△　これ程大事の繪圖面を、狩場の繪圖に遣ふとは、よつぽど溫くわな與次兵衞どの。

權八　サア、そこで何喰はぬ顏で、これを與次兵衞どのゝ鏡臺の際へ置くと、狂言が濟んで繪圖面を妥へ置たと思つて、のかりんと箱へ入れて置く。吹替へはこの道中双六。斯うして置くが好い。

ト鏡臺の側へ置き、

誠の繪圖面は權八が懷ろへ納まるも、仙庵老、忍びものが大でけ〳〵。一ツ打て置け。

皆々　しやん〳〵〳〵。

ト烈しき太皷、謠ひになる。

權八　アイヤア長光と〇〇が、タテ。これで道具が替つて草摺引になる、拍子木が要る。

幇〇　おれも出る所だ。

幇△　おらも出る所だ。

仙庵　おらア草摺引に後見をせにやアならない。

權八　拍子木の入る所だ。頭取の役も忙しいものだ、ドレ

ドレ。

ト皆々奥へ入る。又花踊りの鳴り物にて、仲居二人、

花笠にて踊りの形にて、銚子盃を持ち出て、

仲居　與次兵衞さんにはモウ上げぬ〳〵。

同　ならぬぞえ〳〵。

與次　ハテ、さう云はずと、モウ一ッ呑ませてくれい〳〵。

ト云ひながら烏帽子長袴の十郎の拵らへにて出て來る。梅若も付て出る。

この梅若めも同じやうに呑むな〳〵と。酒を呑うために今日の芝居事。酒の元氣でなけりやア臺詞が云はれぬわえ。

りの　それでもお前、みんな臺詞を忘れさんしてからに。

仲居　曾我の十郎時宗ぢやの、何のと、忘れてばつかり。

同　そして吾妻さんが氣を揉んでござんすわ、アノ芝居で云つて見やうなら揚敷、こちでは座敷の二枚屏風で圍つた所に、繻子着た振袖の女中さんが、お前の顏ばつかり見て居さんすを、吾妻さんは腹立てぢやぞえ。

與次　吾妻が虎の役、あたまから悋氣をするやうな臺詞の云廻はし。あれが爰へ來ぬうち一ッ注いでくれ〳〵。

仲居　モウたつた一ッで上げぬぞえ。

與次　どうでも好いから、呑ませてくれ。

仲居　たつた一ッぢやぞえ。

ト注ぐ。

與次　ハツトある〳〵。

ト呑うとして、

イヤ、呑ぬ〳〵。

仲居　ソレ見やしやんせ、好きで居さんすに依てぢやわいな。

與次　さうではない。肴がなけりや一ッも呑ぬ、コレ何ぞ取て來い。

仲居　ドレ、そんなら何ぞ硯蓋でも取て來やんせう。

ト立て行く。

與次　ハヽヽヽ、硯蓋の九年母や慈姑では呑めぬ。何ぞぴんとした酢い物を取て來い。

仲居　そんなら、さうと仰やんすりや好いに。

ト立て行く。

與次　酸い物もいやぢや。おりの。われも爰に居るな。何ぞ取て來い。

りの　何を取て來るのぢやえ。

與次　梅若相應な、オ、梅干を取て來い。

りの　アイ〳〵。

ト かけて入る。

與次　アイ〳〵で、梅若めが禿の尻尾を出し居つた。ハ、ハ、、、わいらをまいて置て、この酒を一人で呑うと云ふ謀事ぢやわい。

ト 酒を呑む。奥にて、知らせになり鳴り物替る。

吾妻めが來ねば好いが。オ、コリヤ狩場の繪圖に違うた異國退治の渡海の繪圖面。これはお金になる代物。親仁の門を掠めて盗出したも、今日この浮瀬へ、夜に入つて柴田樣よりお侍が見える筈。今宵の五ツに行かうとの事。暮頃迄には大方狂言も仕舞ふであらう。これさへ渡せば七百兩は請取ると云ふもの。さすれば吾妻が身請も濟むし、何であらうと大事の代物。先づこれは此の箱へ入れて置ませうか。

ト 側にある蒔繪の箱のうちへ何心なく入れて置く。此うちに吾妻、虎の形にて奥より出て、

吾妻　五郎さん。其所にござんしたかいな。

與次　五郎さん〳〵と、おりや十郎ぢやわいの。

吾妻　この頃迄も山崎與五郎さんと云うたお前の名、親仁さんの與次兵衛さんを繼がしやんしたけれど、どうも云惡いに依て、矢ッ張り五郎さん〳〵と云ふのぢやわいな。

與次　おれも與五郎と云ふ名が輕うてよけれど、親仁は先祖の山崎與左衛門を繼いで、與次兵衛はわしに讓られても、讓らぬ物は金藏の鍵。名は讓らずとも金を讓つてくれゝば宜いてサ。

吾妻　ハテ、名を讓らさんしたからは、押付け山崎の身上も讓られさんせう。そして奥さんもござんせうし、目出度い事でござんせう。ハイ〳〵、お目出度うござりまする。

與次　ハテ、めじな事を云ふの。奥さんの神さんのと、そなたを退けて外にあらうかいの。

吾妻　嘘ばつかり。外にある〳〵〳〵。

與次　外にあるとは、何所にある。

吾妻　お菊さんと云ふのがあるぢやないかえ。

與次　ソリヤ、親仁の思付きで、先と相對した事。元はと云ふと、お菊と云ふ娘の親はおれが母樣の弟。それで外より貰ふより、近しい一家が氣が張らぬと云うての約束。

尤もその親達も、今では故人になられ、今はお菊が兄御花形數馬と云ふ人が兎や角う云へども、肝心のごてさまのおれが得心せねば何の役にも立たぬ事よ。

吾妻　アノマア嘘ばつかり。狂言に出て居ても見られる顔の嬉しさうな。

與次　見られる顏の嬉しさうなとは。

吾妻　左の方の立て切つた座敷に、帽子きたアノにこ〱と笑顔の好い色の白い生娘さん。あれがお菊さんぢやげな。

與次　何を、お菊が見に來るもので。アレ〱モウ十郎が出る所ぢや。ちやつと出て來うか。

ト行かうとする。

吾妻　イヤ〱〱、モウ出さぬ〱。

與次　エヽ。

吾妻　お菊さんと顏見合せて居さんすに依て、モウ舞臺へは何ぼうでも出さぬ〱。

與次　それでも出るキッカケの所ぢやもの。

吾妻　イヤ、やらぬ。放さぬわいの。何んぼうでも、五郎さん、やらぬ〱。

與次　エヽ、おのれはなア。放せと云ふに放さぬと、所は名に負ふ浮瀨から、多田の藥師の臺所へ、投て〱投込むが、爰放すまいか。

吾妻　イヽエ留た。

與次　放せ。

吾妻　留た〱、留めたぞえ。

ト草摺りの鳴り物にて、いろ〱あつて、

與次　コレサ、出が遲くなると云ふに。

吾妻　イエ〱出す事ならぬ。待たしやんせいなア。これいなア、お前を出して宜いものかいなア。

ト付て奧へ入る。矢張り大太鼓入りの拍子をかりて、向うより、半平、羽織着流しにて出る。後より奴付て出て來り、

半平　この浮瀨の繁榮、殊更與五郎が與次兵衞になつたる祝に、幇間末社どもを呼寄せ、狂言を催して芝居事をするなどゝは、町人には驕つた事ではないか。

奴　ネイ、左樣でござりまする。

半平　手代權八を呼出せ。

奴　ネイ〱。

ト奧へ向ひ。

權八どの〱。

権八　オイ〳〵、何の用だ誰だ〳〵。
ト云ひながら出て來る。
半平　イヤ、苦しうない者ぢや、壺坂半平でござる。
権八　半平さまこれは〳〵宜うお出なされました。これへお出なされませ。
半平　吾妻もこれへ來て居るかな。
権八　來て居る段ではござりませぬ、大磯の虎の役が吾妻、十郎の役はこちの若旦那、のらさんの役でござりまする。
半平　さて〳〵與次兵衛はつくす奴。吾妻をば某が弟平岡郷左衛門殊の外の執心。尤も某とは事替つて格別の立身にて、柴田どのへ身を片付け、今では金も澤山にある郷左衛門。どうぞ戀を叶へてやりたいてサ。
ト鳴り物聞える、
ヤア、何か面白さうな事、ちと半平も見て行きたいが、見ても宜からうか。
権八　御覽じませ。モウ押付け打出します。
半平　早々彼の繪圖面を請取る工面。
権八　萬事は桟敷へ。
半平　権八、來やれ。

権八　先づお出でなされませ。
ト鳴り物にて、奥へ入る。仲居二人、お菊、出て來て。
仲居　申し〳〵娘御さん、お前、面白い、タテの所を見ずに、何所へ行かしやんすえ。
同　手水場はこちらぢやわいな。
きく　わたしや、ほんの芝居でさへ、タテぢやの、又は憎い敵役の出て居る所は嫌ひぢやわいな。あんまり逆上せたによつて、其所らを歩いて來ようと思うて來やんしたが、爰は樂屋かえ。
仲居　この座敷は樂屋ぢやわいなア。
きく　ほんの芝居の樂屋もこんな物かえ。
仲居　何にも違うた事はござんせぬ。この鏡臺はな、今日の芝居の座元山崎の與次兵衛さんぢやわいナ。
きく　アノ此の鏡臺が與次兵衛さんのかいな。わしやアノやうな役者がきつい好き。
仲居　そんなら宗十郎贔屓かえ。
きく　アイ、わたしや爰に宗十郎が繪を持て居るわいな。見さんせ。よう似たぢやないかえ。
仲居　モシ、隠しなさんすな。お前は與次兵衛さんと許婚

の花形さんのお娘御、お菊さんでござんすかえ。
きく　エヽ。
　ト悔りする。
仲居　一緒に見物なさんす慇懃らしいお侍様、お前のお
兄いさんかえ。
きく　ようお前方は知つて居やしやんすのう。
仲居　吾妻さんも能う知つて與次兵衛さんを繰棄へ出すま
いと云はんしたわいな。
きく　アノ吾妻さんが知つてかえ。ソリヤ恥かしいわいな
ア。
仲居　吾妻さんに逢はぬやうにさんせえ。
きく　お前方に頼みたい。吾妻さんに隱して、與次兵衛さ
んにわたしを逢はせては下さんすまいか。
　ト云ふ内、向うより、合ひ方にて、與左衛門、道場參
りの歸りがけの形にて、肩衣をかけ出る。藤屋の亭主
　喜平次と連立ち話し仕舞うて出て來て、
與左　御亭主喜平次どの。爰が與次兵衛が遊びに來る浮瀨
なら、早く呼出して下さるまいか。
喜平　親仁樣、氣の短い。この喜平次も抱への吾妻、據所
なく今日は一日與次兵衛さまへ顏づくで貸て寄こしまし
たが、この間西國方のお侍、跡の月からとんと揚詰、今
宵もござる筈。そのござらぬ内に早う新町へ連て戻る工
面。お前もノラな與次兵衛さま、連れてお戻りなさるが
宜い。
與左　何の連れて戻りませう。見合ひ次第勘當と覺悟いた
して參つた。
喜平　ソリヤ氣の毒な。これまで吾妻を買はれて、よつぽ
どな金遣はれた息子どの。勘當と聞けば揚代の殘りも少
少この方の損毛。若い時はある習ひと眼を眠つて、マア
料簡さつしやりませ。
與左　イヤサ、目を眠られぬ、ちつとこつちに譯がござる。
マア何でも茶屋まで連れて行て下されませ。コレ、これ
は少しなれども、喜平次どの、近付きの印し。
　ト巾着より、銀を取出して、
目にかけて見さつしやれ。四匁三分あるぞや。
喜平　エヽ、親仁さま。名代の身代、何ぼ吝うされても底
の拔ける息子どの。
與左　サア、その底の大拔けに拔けぬうち、親の威光ぢや、
追出してしまひます。必ず新町へ寄せて下さるな。
喜平　これは又ひよんな事を聞きました。

ト云ひながら兩人舞臺へ來る。

きく　お前方、どうぞ逢はして下さんせ。

仲居　吾妻さんに知れぬやうに、逢はせて上げうわいな。

喜平　其所に居るは仲居のおしげ、お政ぢやないか。

兩人　喜平次さんでござんすかえ。

喜平　モウ吾妻は虎の役はしまふたか。

與左　其方はお菊ぢやないか。どうして其所に居やる。

きく　今日この浮瀨の賑はひ。町人衆の狂言を見に、兄さんと一緒に參りました。

與左　狂言を見に來た。アノ野良どのもでられたか。

きく　十郎祐成の役。とんと宗十郎が其所へ出たやうぢやわいな。

與左　エヽうとましい。これに付けても其方ためにも伯母、おれが連合、ノラめを産んだ母が云ふには、與五郎は病身な、芝居でも見せて氣の重うないやうにと、子供のうちから芝居へやり、見物させたが嵩じて、今では芝居狂言の殿樣見るやうな身持、をやまを連れてこのやうにどつぴと騷いで、あのやうな太鼓の罰當り、金の罰と親の恥は廻りが早いと知らぬ戲けのうつけ者。この浮瀨の呑續け。親の手を放れたら、それこそほんに一生浮む瀨はあるまいぞよ。ハヽヽヽ、女子供が聞いて居るに、人も問はぬ問はず語り。ア、我れながら年よつた〳〵、先きへ行んだお婆ばは極樂、おれは地獄、又迷言云出した。數馬どのもござつてなら、息子どのゝ馬鹿盡されるを、ちつとのうち見て、狂言が果てたら與次兵衞に逢うて云ふ事がある。年寄りは氣短く、道場から直ぐに來た肩衣。

ト取て懷ろへ入れ、

お菊どの一緒に行きませうか。

きく　そんなら斯うお出でなされませ。

喜平　仲居ども、親仁さまのお草履杖を取て、付き申て行け。

仲居　アイ〳〵。

與左　イヤお世話かけたなら、又二三匁のはずみ事に迷惑。杖も草履も自身にまかなひ致す。

ト草履を取て腰に挾み、杖をも腰にさし、

これで皆樣へ雜作はかけぬ。

仲居　ほんに可笑しいお方ではある。

與左　あんまり笑ひかけまい。こつちも笑うたら、どんな目に逢ふも知れぬ。浮瀨の座敷通うても、わしや喜平次

どの、たつた四匁三分で、何も出しやアしませぬぞや。
喜平　ハテ、そんな事に氣を置かずとマア一緒に。
仲居　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、皆々一緒に奥へ入る。こちらの障子を明け、與次兵衛、逃げて出る。吾妻も跡より出て。
吾妻　役場でも出さぬ〳〵。
與次　モウ何時迄もそのやうに附纏うて、出さぬ〳〵と、それでは狂言の間が缺けるわいの。
吾妻　よい〳〵。出たか出さんせ。この箱をアノ庭の泉水へ投込んで仕舞ふ。
ト與次兵衛が箱を取る。
與次　コレ〳〵、その箱をどうする〳〵。
吾妻　お前の大事にかけさんす箱ぢやに依て、泉水へ投込んで仕舞ふのぢや。
與次　これサ、これはの七百兩に替へる箱。それがずつと行くと、其方の身請、四百兩は浮きもの。大事にかけやいの。
吾妻　そしてコリヤ何でござんすえ。
與次　昔から親仁の家に質に取つてある異國退治渡海の繪圖面。今度大領様異國御出船に付て、望手があつて賣てやるのぢや。こんな薄い箱に入れてある一枚繪が、七百兩とは三年の古疵も用に立つ譬へ。今宵の五ッに爰へお侍が受取りに見える筈。それぢやに依て滅多に心がいそ〳〵するのぢや。
吾妻　さうぢやござんすまい。今宵はお菊さんと一緒に歸らしやんすが嬉しいのでござんせう。
與次　又そんな事を云つて嫌がらすのか。
ト奥にて
權八　ハイ〳〵、與次兵衛さまを呼んで参りませう。
トかけて出て。
モシ與次兵衛さま〳〵。
與次　權八、何ぢや。そのやうにせきにせいて、どうしたのぢや。
權八　さればサ、今夜の五ッにお出でなさるゝ筈のお侍様、今日見物にお出でなされし所に、只今急の御用に付てお屋敷へお歸りなさるゝとの事、それゆゑいつそ今この所で與次兵衛に逢つて、彼の繪圖面を受取たいとの事でござりまする。
與次　ソリヤ、急になつたの。
ト云ふ處へ、幇間出で、

詰間　權八どの。お侍ひ樣がお出なされた。
權八　ソリヤ、お出でなされたとサ。
與次　サア／＼、急になつて來た。與次兵衞これに居りまする。
ト慌てゝ、烏帽子、長袴を取る。
半平　與次兵衞。權八。其所にお居やるか。
ト云ひながら出で、
權八　ソレお出でなされた。與次兵衞、これに居りまする。
與次　お侍樣。初めましてお目にかゝりまする。山崎與次兵衞は私でござりまする。
半平　與次兵衞、今日は扨々面白い事であつた。久々大坂表の芝居をも拜見いたさなんだが、中々面白い事、よく仕組が出來ました。時に豫ての約束には、今晩五ツに繪圖面受取りに參る筈の所、身どもゝ打出して緩りと酒でも食べ、その上にて受取て歸らうと存じた所に、急に殿のお召しとある、これとても繪圖面の御用と存ずる。金子は七百兩、明日屹度持參いたさう。假受取を以て繪圖面、我れらへ渡し召されいサ。
與次　五ツのお出でとござりまするゆゑ、お仕度をも申し付ませなんだ。則ち繪圖面はこれにござりまする。假の受取、あなたの御判。
半平　柴田內、壺坂半平と申す名前。尤も判も据ゑて置き申した。
ト證文を出し、
繪圖面と引替に致さう。
與次　左樣なら、右の繪圖面も箱に納めてござりまする。お改め、お受取下さりませう。
ト出す。
半平　ドレ／＼。
ト取つて箱の蓋を明けて、
これが彼の三韓征伐の時、認られし異國の地理案內渡海の繪圖面とな。疎かならぬ日本の寶物ぢや。半平も謹で拜見の遂げ申さう。
ト明けて見て、
日本橋より振出し、ム、二ツ餘れば草津へ歸る上り京。コリヤ何だ。道中双六ぢやァないか。
與次　エ、、ドレ。
ト取つて、
コリヤ双六ぢや。先刻に狩場の繪圖にして出したが、誰

が双六と取替へたのぢや。

仙庵　繪圖面が渡海の圖やら、双六やら、初舞臺でこの仙庵も血眼になつて居たに依つて知らなんだ。大事の繪圖面を狩場の繪圖に遣ふ事もない。

幇間　小道具を拵へる者に云付て、繪圖を拵らへさせたがよい。それがなくつてはお侍様もお屋敷へは歸られさつしやるまい。

權八　與次兵衞さま。さりとは物覺えの悪い。家を出さつしやる時、間違ひさつしやれましたか。

與次　イヤ、最前まで恙ない渡海の繪圖面。コレ吾妻。我身どうぞしやせぬか、

吾妻　わしが繪圖面とやらを何するもので。お前があんまり屋敷のお菊さんばつかり見て居て、氣が有頂天になつて居て、忘れさんしたのであらうぞえ。

權八　兎角氣が轉倒してござるに依ての事サ。

與次　イヤサ、おれを出さうの出すまいのと云うて居るうち、其方が隱しやつたに違ひはない。サア出しや〳〵。

吾妻　好い加減な事云はんせ。隱しやせぬわいな。

與次　ハテ、出しやいの。

吾妻　隱しやせぬわいな。

與次　きり〳〵出しやいの。

ト兩人せり合ふうち、半平、與次兵衞を引寄せ、

半平　動きやァがるな。二才野郎め。

ト引据ゑて、

壺坂半平は武士だぞよ。今日とうから見物して、おのれが根性も大概は知れてある。大切な繪圖面、身どもが持歸らにやァ殿へ申譯がない。この樣な西國武士だと思つて馬鹿にして、二ツ餘れば草津へ歸る双六を渡すのか。太い野郎めだ。斯んな手で行くのぢやァない。泥坊野郎め。

ト突退ける。

與次　全く左樣の横道ではござりませぬ。その證據人は手代の權八。

權八　イヤ〳〵、證據人には立ちますまい。たとひ若旦那でも、吾妻を買つて榮耀をさつしやる金の出來るを嬉しがつて、權八までやり事にかけるのかな。

幇間　常々お目を買ふ幇間のおいらも、斯んな事ぢやァ面が汚れますぞえ。

仙庵　馬鹿げた顏をして、似せ物をお侍樣に摑ませて、七百兩せしめる氣か。

吾妻　隱しやせぬわいな。

幇間　恐ろしい人だわえ。

與次　なに企み事をしてお侍樣を騙らうぞ。そんなら奥の小道具を入れて置いた葛籠を、一寸見て來よう。

ト行かうとする。

半平　何所へ〳〵。動きやアがるな。その受取證文渡してエ、ものか。寄こしやアがれ。

ト引つたくる。

吾妻　いとしさうに、與次兵衞さん。何の强請り事をさんすもので。ソレそのやうに酷たらしう、あんまりであらうがな。

半平　何だ、この女郎めも一ツ穴の四ツ足め。コリヤいつそ斯うせうわえ。身どもが弟平岡鄕左衞門、このあたりに旅宿いたして居れば、與次兵衞をそれまで伴ひ、篤と吟味するが宜い。

吾妻　ナニ、鄕左衞門と云ふはお前の兄弟衆かえ。

半平　身が弟ぢや。

吾妻　アノ鄕左衞門どのが。

半平　兄弟衆かえとは、吾妻われもつれない者。身が弟は現を拔かして居るぞよ。おれとは違つて工面よし、請出して在國へ行かうと云へど、この與次兵衞に大礒の虎と祐成が旨い狂言、おれが見てさへ業腹だ。日の暮れぬうち鄕左衞門が方へ、與次兵衞來い。

吾妻　イヤ、さうはなりませぬ。モウ一應も繪圖面を方々と尋ね見て。

半平　そのやうに暇取つては公用が缺ける。與次兵衞うせう。

ト引つ立る。後へ、花形數馬出で、突退けて、

數馬　お侍、壺坂半平どのとやら承つたお方。少々お控へ下されい。お尋ね申したい事がござる。

半平　何だ、この半平に尋ねたい事があるとは。

數馬　拙者は花形數馬と申す者。今日の町人酒宴の芝居一見いたし、只今幕のうちこれへ參つたが、半平どのとやら、マア〳〵お控へ下されい。

與次　數馬さま。何時の間に。

數馬　狂言の見に參つたて。

與次　近頃面目次第もない。

數馬　何の畢竟が狂言綺語の戲れでも、大礒の虎と祐成の濡場も面白い事でござつた。許婚の三浦の片貝を嫌ふも理り、傾城は又格別、廓の意氣張り、登り詰めるも尤も。然れども祐成は放埒に見せても親の敵祐經を狙ふ志の

健氣サ。誠の武士と賞美せんが、侍で候と云つても騙りをしたり人に云ひおけをする穢れた侍もあり、世の中はいろ／＼さま／＼。半平どのとやら、左樣ぢやござらぬか。

半平　人間の皮を被つた畜生とはこいつが事。お聞きなされい、繪圖面の儀は代金七百兩に譲る物を、似せ物を摑ませ、人をやり事にかける大泥坊。依つて拙者が弟の旅宿へ連參る。お留なさるな。サアきり／＼立て。

數馬　サア、その儀に付てお留め申したのでござる。

半平　その事に付て留めたとは。

數馬　そこ元樣は柴田の家老ぢやと仰しやるが、受取の一札に御家老の判が据つて居るかな。

半平　エヽ。

數馬　貴公には何役をお勤かは存ぜぬが、柴田の御家老は林一角どの、喜内どの、一家中の人とは拙者殘らず存じ罷りある。猿坂半平どのと申す人は、拙者近付きでござらぬが。

半平　何故近付きでござらぬの。

數馬　何だか味な詞の端、拙者は柴田の御家中へ劍術指南仕り、大坂表に留宅いたす花形數馬と申す者でござる。

半平　アノその元が柴田の御家中へ。ひやア。

ト驚く。

數馬　ハテ、きつい膽の潰さつしやりでござるの。

半平　このやうに膽を潰しましたは。

數馬　柴田の名を騙る似せ者だに依ての事か。

半平　何と。

數馬　爰な似せ者めが。

半平　コレ侍、何んでおれが似せ者だ。

數馬　似せ者の證據は受取の書判。

半平　それは。

數馬　その驚く面體にて、似せ者は顯はれた。先達て渡海の繪圖面の事は、山崎の與左衞門持ち傳へし事、この數馬が大殿へ申上げ、七百兩にお求めなされんと契約して今日これより與左衞門方へ立越え、假りの受取に金四百兩相添へ渡す筈、即ち受取には御家老一角どのゝ判と殿の御判。宛名は山崎與左衞門へ一角判。

ト出して、

何とこれでも爭ふか。

半平　サア、それは。そんなら一寸その受取を。

ト手を添へるを押退け、刀を抜き散々にむね打にうち
据ゑる。
コレ侍、何故むね打にする。ひよつと手が廻はつたらど
うする。何故むね打に叩いたのだ。
數馬　科もなき與次兵衞を手込めにして、おのれが今叩い
たではないか。
半平　如何にもぶつた、叩きました。
數馬　それだに依つて、この仕返し。
ト又叩き据ゑ、
柴田の家中と似せ繪圖面を騙りにうせたを明らさまに云
立て、繩打て屋敷へ引かうか。
半平　サア、それは。
數馬　サア〳〵〳〵、大騙りめが。
半平　エ、忌々しい。これエおのればかりが柴田が身うち
か。こつちにも芝田町と云ふがある。あんまり叩かれて
癪が差込んで來た。これから芝の田町で反魂丹を買つて
來る。うぬら追つ付け、蟲の根を絶やす。待てけつかれ。
逃げはせぬぞ〳〵〳〵。
ト云ひながら花道へ來て
權八。おりやア逃げはせぬ、逃げはせぬが、アノ侍が面

が見とうもない。そこで爰を逃げるぢやない。逃げはせ
ぬが、一寸手水に行つて來よう。
ト早足に逃げて向ふへ入る。
吾妻　見さんせ。今の侍が逃げて行たさうなわいな。
與次　弱い奴ではある。數馬さまがござつたればこそ宜け
れ。返す〴〵も能う來合せて下さりました。
數馬　譯合は今申す通りなれど、渡海の繪圖面の失うて
は、數馬も主人へ申譯がない。ハテ、何としたものであ
らう。
ト此うちに後へ與左衞門出かゝり、
與左　悴與次兵衞、爰に居るか。
トこれにお菊も付き出る。
與次　親仁さまか。
權八　これは大旦那樣か。
與左　親仁樣か。大旦那樣か。權八われも共々馬鹿盡す
か。エ、おのれはなア。
きく　コレ申し、お靜かになされませ。
與次　思ひがけもない親仁さま。どうして爰へはお出なさ
れました。
與左　どうして來た。コリヤヤイ、思ひがけないとは、お

のれよりおれが事ぢやわヤイ。

ト與次兵衛を引寄せる。吾妻、側へ寄り、

吾妻　コレ申し。

與左　ハ、ア、こなさんは、こいつが相方吾妻どのか。アア、こなさんも恨めしい人ぢやの。大事の息子をこのやうに戯け者に仕立て下さつた。嬉しうござる。過分にござると、斯う云ふは皆んなおれが愚痴。人を蕩らすが商賣ぢやもの。蕩らさいで何とせう。こなさんに無理はない。憎い奴は與次兵衛め。たつた一人のこの親に苦勞をかけ、明けても暮れても女郎狂ひ、大酒に耽り居つてまだその上に盗み根性。腹が立つ〳〵。悔しいわえ〳〵。

きく　御尤ではござんすが、お年寄のそのやうに、氣をお揉みなされましたら、御持病に障りませう程に、モウ御堪忍なさんせいなア。

與左　オ、嫁女。よう云うて給つた。見ればこれに數馬どのもござるのに、御挨拶も申さず、眞つ暗になりました。これが、ほんの譬の通り、盗人を捕へて見ればとやら。盗人にせうとて、これまで育てはせぬわいヤイ。山崎の家を継がせ、與次兵衛と云ふ名は讓らぬわヤイ。それに引替へ今のやうに、優しい事を云うてくれるお菊とは豫ての縁組なれど、このやうなしだらでは、數馬どのも、中々聟には取らしやるまい。縁はこれ切りと思うて下され。大盗人めが。

ト與次兵衛を突飛す。お菊、側へ寄り、

きく　モシ父さん。何ぼお腹が立つと云うて、あんまりな事仰しやりまする。たとへ何のやうな事があつたと云うて、わたしや愛憎は盡きませぬ。兄さん、お前、そのやうに默つて居ずと、好いやうに云うて下さんせいなア。

ト泣く。吾妻、側へ寄つて、

吾妻　そしてマア、いとしぼさうに親父さま。盗人々々と何故そのやうに仰しやりまするぞ。

與左　云はいでわ。七百兩に數馬どのへお渡し申さうと約束なした異國渡海の繪圖面を、何時の間にか引出し、學句の果に失ふた横道者。盗人と云はうか、何とも彼とも名の付けやうのない奴。幸ひ數馬どのゝ眼の前で七生までの勘當ぢや。

與次　エ、、アノ私を。

與左　勘當した。立つて失せう。

吾妻　ソリヤ又あんまり。

權八　ハテ、要らざる世話。默つてござい。

與次　只今のお腹立ち、誤り入りまして申上まする辭もござりませぬ。
與左　何の辭があるもので。侍なら手にかけて殺してしまふのぢや。町人の悲しさは、極意の所が勘當、阿房拂ひ、おれが家の定紋付き着せて置く事モウならぬ。權八、脱がせい。
權八　畏まりました。サア、大旦那の云付けだ。きり〳〵小袖を脱がつしやい。
ト與次兵衞が小袖を脱がせ、
エ、見すぼらしい態にならしつた。ハイ、親仁樣。差詰め、この小袖は私が拜領いたしませう。又このお腰の物も、人も知つた寒菊の緣頭。常から欲しうござりました、これも我れらに。
與左　根性の腐つたその魂。われにやる、取つて置け。
權八　我れらに下さる旦那の魂、受繼ぐからは。
與左　山崎の家に置くことはならぬ。
權八　アノ私をも、ソリヤア又酷い仕樣でござらう。
與左　一ツ穴の貉め。出てうせう。
權八　片意地者がさう云出しちやア止めもせまい。日頃から憎さも憎い吝ん坊親仁に。いつそおれが斯う。
ト割竹を振上る。
與左　それでおれを何うせうと思ふ。
權八　サ、コリヤア何サ。ひつじんなされませう。
與左　いろ〳〵の戯けをぬかし居る。數馬どの、御覧の通り取る所なき者どもでござりまする。
數馬　子息の勘氣の事、先刻より詫び致さうとは存ずれども、繪圖面の失ふたは與次兵衞が誤り。受取證文の持つて參つたこの數馬。屋敷へ罷り歸つて殿へ何共申譯がない。笑止ながら詫は致さぬ。この頃の噂を聞、與次兵衞へ、意見のためと持たせて參つた一品。お菊その包み、これへ持ちや。
きく　アイ。
ト風呂敷包を出す、合ひ方。
數馬　コレ與次兵衞。この紙子は其方の母、身どもが爲めには伯母者人、與左衞門どのに先立たれ、殘し置かれし筐の紙子。これを其方へやる心は、紙で拵らへた小袖でも、物に觸らず心を付け、大事にかけて着る時は、假令何年經つとても、色も替らぬ紙子の火打。親子の縁も切れ果たなぞと、短氣な心を押し鎭め、一旦失せた繪圖面を、尋出して手に入らば、この紙子の火打も破らず、物

に觸らぬ心の用心。紙子を着て紙一枚の繪圖面の尋出し求へ渡すなら、その時こそは勘當の詫は數馬が取結ばん。兎角紙子に心を付け、必ず短氣を出すまいぞ。

與次　母樣のお目の紙子と云ひ、數馬さまのお示し、乾度忘れは致しませぬ。有り難うござりまする。

與左　百貫のかたに編笠一蓋と、おれが道場へかぶつて行た一文字の編笠、今日迄も今迄も、山崎與次兵衛〳〵と云はれ、全盛にしをつた身が、その態では世間へ顏も出されまい。顏を隱して忍ぶ笠、勘當したその悴に物を遣る親の恩、そら恐ろしいと思ひ居れ。コリヤ天道樣のお光り請にやアならぬぞよ。この笠で顏を隱して歩く事は、取りも直さず天罰ぢや。その天罰の何時か晴れるやうにしようと思つてこれ被つて早くうせ居れ。

ト投げ付け、

吾妻　物云ふはこれ切りぢや。短氣な心を起させうかと、親御さんの世を忍べとて下さんしたこの編笠、必ず御恩忘れさんすなえ。

きく　今見さんの紙子の譯、必ず破らぬやうにして下さんせえ。

と兩方から渡す。與次兵衛、取つて、

與次　親父樣の下されたこの笠、數馬樣の給はつたこの紙子、乾度守つて繪圖面を尋出して御勘氣の詫び。お菊、吾妻、滅多に惡い心出す事ぢやない程に、案じて給もるな。

ト此うち、喜平次、後ろへ出で居て、

喜平　お笑止な與次兵衛さま。吾妻も爰に長居はならぬ。爰の庭の裏道から、新町へ駕籠も取寄せて置いたから、日の暮ぬうち、サア來やれ。

ト手を取る。

吾妻　そんなら、わたしや歸るかえ。

喜平　知れた事。揚詰の其方、今日爰へ貸して寄こしたは內證づく。知れてはおれが迷惑。サア早く來やいの。

吾妻　そんなら與次兵衛さん。わたしやモウ行かにやならぬぞえ。

與左　ノラめを勘當したら心もさつ張りとした。繪圖面の事も數馬どのと相對の上は、マア云譯も濟んだと云ふもの。左すれば爰に何にも用はない。わしも家へ歸りませう。お菊どの、隨分まめでござれ。狼狽へ者の事を苦に病んで、煩ふて下さるな。數馬どの、お屋敷へは宜しう申譯頼みまする。

數馬　それは氣遣ひ召さるな。御家老の一角どのへ、右の

譯申して受取をお返し申せば事は濟むと申すもの。とは云へ、一ト通りでは相濟みますまい。マア暫く、この茶屋で休息いたし、篤と考へ、罷り歸るでござらう。

與左　左樣なら何事も宜うお頼み申上まする。私は最早歸りませう。數馬どのにはお跡から。

數馬　與左衞門どの。

與左　數馬どの。

兩人　お別れ申しませう。

ト唄になる。・

喜平　サア、きり〳〵來やれ〳〵。

ト吾妻を引立て、下座の方へ入る。數馬、おきくを連て奥の方へ入る。與左衞門、門へ出て、双方思ひ入れあつて、別れて入る。與次兵衞、權八、殘つて、

權八　世の中と云ふものは飛鳥川、昨日まで手代の權八、今日は與次兵衞と一緒に勘當、蝶兩件の如し。これサ日頃にも似合ぬそのやうに、きな〳〵思ふ事はございませぬ。酒でも呑んで氣を晴したが好うございまする。

與次　好い樣な權八。今夜から何所に寐たら好からうぞ。京の知る邊へ行かうにも路銀はなし、どうして見ても廣い世界に與次兵衞が身の置所はないわいヤイ。

權八　これは又浮世狹いお前が、路銀を拵へて京へ行つて見さつしやりませ。新町の太夫吾妻を西國侍が請出しまする。さうすればお前はどこで立ちます。これから直ぐに新町へ行つて、居續けに遊ぶが宜うござるわいの。

與次　ちやと云ふて、この形りでは。

權八　女郎買の學句は、紙子は知れた事。結句向ふの受けが好い。コレ今夜も、明日も勤めの金くらゐの事は、この手代權八が續けます。新町へござりませ。

與次　云やれば、おれも今夜のしだら。吾妻が心が替はらうかと疑はれる。

權八　揚詰が合點行かぬ。

與次　アノ姉女郎の都にも逢ひたし。

權八　さればサ、みやこが事、どうぞわしに一ト晩逢つてくれるやうに、お前、頼みます。

與次　ソリヤ呑込んで居る。新町へ行ても大事あるまいかの。

權八　大事ない段か。駕籠はとふから云付て置きました。

ト向ふへむかい。

駕籠の甚助、早く來やれ〳〵。

甚助　アイ〳〵。

ト駕籠舁き四ッ手を擔ぎ出て來る。

權八　コレ、旦那を新町まで暮前にやつてくりやれ。

甚助　急いでやりませう。

權八　サア、乘りなされ。

與次　こんな形りで、行きなさい。行ても宜からうかの。

權八　ハテ、行きなさい。

甚助　サア、乘りなさい。

ト無理に駕籠に乘せる。

親方、新町まで。

權八　早くやれサ。

與次　權八、其方も一緒に行かぬ。

權八　たつた今の、跡から行きます。

與次　早うおぢや。

甚助　早くやりかけろ。

ト此うち、權八以前の腰の物を駕籠に付けて、これで殺せと云ふ思ひ入れ。

甚助　おつとまかせ。

ト舁ぐ。

權八　早く〳〵〳〵〳〵。

ト云ひ〳〵奥へ行く。駕籠舁、駕籠を擔ぎ上る。ト直ぐに騒ぎの唄になり、駕籠を擔いで向ふの歩みへ行く。舞臺の道具引いて取ると、一面の玉椿の垣、辻行燈のある道具立。駕籠舁、東の歩みへ來て、

甚助　今夜は夕闇だの。

駕籠　道が惡い。ソレ行つた〳〵。

同　モシ旦那。一杯呑ませて下さいまし。

與次　新町へ早うやつてくれ。惡くはせぬわえ。

甚助　早くやれとよ。

ト云ひながら舞臺へ來る。

モシ幾らくんなさります。

與次　幾らと云うて、權八が來てからの事よ。

甚助　それでも極はめない事は惡うござりまする。

與次　ソレ〳〵、それマア取て置け。

ト紙を二三枚やる。

駕籠　白い紙だの。ついぞ斯んな白い紙で鼻をかんだ事がない。斯んな紙屑より、矢ッ張り正で下さりやせ。

與次　遣りたいが爰にはない。新町へ行てやらう。藤屋まででやれ〳〵。

駕籠　先へ行くと手が入り足が入り、邪魔になりやす。僅か二人が脊中へ百兩おくれなさい、

與次　ナニ、百兩くれ。
駕籠　アイ、山崎與次兵衞さま。百兩下されやせ。
與次　わいらは、道が暗い、おれ一人りと思ふてか。そのやうな駕籠にはモウ乘らぬ。爰から出て行く。卸せ〳〵。
　ト駕籠を卸させ、中より出て、かけて行かうとする。
駕籠　待ちやアがれ。薄明りに見れば、其方は今日の侍。
與次　やゝ盜人野郎とはうぬが事だ。
半平　壺坂半平、おのれゆゑに滿座の中で恥を搔いた意趣晴らし。うぬから先へとつちめて、侍が歸りを待受け、ばらしてしまふそのために、駕籠の菰助と化けたのだわヤイ。
與次　よい所で逢ふた。半平、渡海の繪圖面、われが掏替たに違ひはない。サア出せ。
半平　中々味をやり居る。うぬが方でなくなつた繪圖面、おれが知るものか。爰な大騙りめが。それとも疑はしくば、何所でも改めて見ろ。
與次　ドレ改めて見よう。
半平　ソレ見ろ。
　トこれより、いろ〳〵と方々改めて見て、
何んと、あるか。爰な盜人野郎め。
　ト引寄せ、
こいつはおれが獨りで片付ける。わりやア侍が來るか、道を見て來い。
駕籠　浮瀨からはこの道筋。ソレ。
　トかけて花道へ行く。これより、與次兵衞を叩き据ゑ、
半平　この野郎を生かして置ては、鄉左衞門が戀の妨げ。いつその事、一ト思ひに覺悟ひろげ。
　ト斬りかける。危き立廻りいろ〳〵あつて、トヾ半平に浴せる。半平、倒れる。與次兵衞驚き、刀を捨て逃げんとするを、半平、起上り、捉へて、
うぬ人殺しだ。動きやアがるな。うなア〳〵。
　ト押へて叩く。下座の方より、與左衞門、何心なく小提灯をとぼし出て、後ろよりこの體を見て、提灯を捨て、息杖にて半平が足へ引つかけ、轉ばして散々に叩き、與次兵衞を引起し突きやる。半平、起きて來るを又息杖にて叩き据ゑんとするを半平息杖を叩き落して與左衞門を捉へ押へ付ける。ト落てある刀の手に觸りしを取り、與左衞門、半平を下から突く。突かれて苦む。引返して與左衞門、上になり、トヾメの刀持ちながら、

與左　南無阿彌陀佛々々々々々々〳〵

ト云ふ聲聞いて、與次兵衞、暗さはくらし、誰かと側へ寄る。此うち、數馬、馬乘提灯をとぼし、後ろへ出かゝり、此とき、與次兵衞を捉へ、遙か花道の方へ突き遣り、思はず後ろへ隱せし提灯、與左衞門が方へ出す。互ひに顏を一寸見る。數馬、提灯吹消す。これにて、

與次兵衞、向ふへ入る。　　拍子、幕

二番目中幕

新町井筒屋の場
返し道行淨瑠璃の場

役名――番太郎　實ハ難波屋與兵衞。傾城藤屋吾妻。侍客早野彥助、按摩佐渡平。吾妻姊女郎都。お菊兄花形數馬。與次兵衞父山崎與左衞門。與次兵衞許嫁お菊。藝者おさの。同おきん。

本舞臺、新町の揚屋、井筒屋の道具。西の大柱の際に番所あり。中幕の口上出て入る。

と向ふ棧敷下より、そば賣、ぞめき、通る。番太、夜番の拵へ、拍子木を打て出て來る。この拍子木二ツ三ツ廻りに打ち、五ツを打つ。これにて、騷ぎ唄にて幕明く。舞臺上の方に、早野彥助、侍の拵へ、幇間二人、女郎〼、居る、吾妻太夫、煙草のみ、顏を反けて居る。上の方、臺の物、上に包み金。仲居二人、酌して居る。そば賣は揚幕へ入る。番太、拍子木打ちながら舞臺の方へ來る。

番太　夏へゆく程夜が短くなる。拍子木がセワしない。ドリヤ四ツまで寐てくらはさう。

ト番小屋へ入つて戸をたてる。

幇○　これ程賑かに踊つたり浮かしたりするに、吾妻さん、何故そのやうに煙草ばつかり。ちつとはこちらを向いて、につこりとお見せなされませ。

幇△　去りとはにつこり一のぴん〳〵女郎。

幇○　ソリヤ、何の事だ。

幇△　日本一の事サ。

幇○　こいつはおもい。

幇△　何おもい。

幇○　アレサ、主の氣がおもい。

幇△　おもひ思にはどうした花が。

ト唄ふ。仲居、三味線彈く。

吾妻　何ぢやの、鹽辛聲で。唄聞きとうない。こつちにちやつと氣の揉める事があるわいの。

彥助　これサ、吾妻。さつきから酒で紛らし聞て居れば、我儘な事ばつかり。われが氣に濟ぬ事があるとて、この彥助さへ面白ければ言分はないと云ふもの。吾妻。われが身で我が身でないぞ。彥助が揚詰、座敷ばかりはせめて面白くしてくれまいか。

吾妻　嫌でござんす。揚詰め〳〵と、揚詰が怖い物でもござんせぬ。ちつとこつちに氣の揉める事があるに依て、人が何ぞと云ふと腹が立つて〳〵。

ト煙草盆叩く。

幇〇　アイたしこ。

吾妻　腹が立つて。

幇〇　アイたしこ。

吾妻　どうも斯うもなる事ぢやないわいなア。

ト煙草盆叩く。

幇〇　アイタ、、コウ叩かれちやア一番合點せない。

幇△　どうしやアがるヤイ、つがもない。

ト肌を脫ぎ喧嘩する眞似して、

申し吾妻さん。仲直り一杯いきやせうか。

吾妻　わたしや、ひのもの絕ちぢやわいな。

⧖　ひのものたちで煙草をのむのかえ。

幇△　ひのものたちは觀音樣がよく利くさうだ。

幇〇　德平が、小癪ぢやアないか。

幇△　こいつはよい〳〵。

幇〇　兎角何か云ひたいの。

彥助　云ひたいは、おれが云ひたい。吾妻。わりやおれを何迄も振るか。幾らでもやれ。身請したらどうする。女房にならざアなるまい。

吾妻　身請〳〵と云はしやんすが、女郎に呑込ませず、無理に親方さんと相對で身請さんしても、何にもお前、樂みにはならぬぞえ。大概にわしが事を見切つて、外の女郎さん方揚げて遊ばしやんせいな。しら〳〵野暮なお方ではあるぞ。

彥助　皆な聞てくれ。あのやうな情れない事を云ふわえ。吾妻、能く聞けよ。初めから云ふ事を聞て逆てくれゝば、これ程まで氣は揉まない。振られては歸り〳〵、朋友の手前、彥助が武士が立たぬ。三日なりと身請して、西國

へ連て戻らねばならぬぞ。吾妻、さう思へよ。
吾妻　でん喜さん。清光さん。奥へ行かうぢやないかえ。
彦助　わりや、何所へ行く。
吾妻　騒が起りさうたに依て、奥座敷へ行きやんす。
彦助　さうはならぬ。コレ見ろ。臺の物の上にのせてある
は身請の金二百兩。先達て親方藤屋へ百兩渡して置い
た。今夜二百兩渡す。都合四百兩の身請け。今夜からお
れが女房も同じこと。おれを差置き、奥へはやらぬ。矢
ッ張り爰に居ろ。
吾妻　アレ聞かんせ。何所で風を引かしやんしたか、譫言
ばかり。サア皆、ござんせ。
彦助　イヤ、やらない。動きやアがるな。
ト引留る。
吾妻　そのやうに手に入れて貰ひやんすまい。
彦助　手に入れないでは、エヽ、氣の揉める女郎め。いつ
その事に一打ちにせうか。うぬ。
吾妻　一打ちぢや。女郎に疵付けて濟むなら、サア、切つ
て見や。
皆　コレサ、彦助さま。滅多なことをなされますな。
吾妻　切られるなら切つて見や〳〵。

仲居　お前も切つて見や〳〵と、去年の扇屋もあるも
の。危ない〳〵。
幇　コリヤ、斯うするが宜い。この口説の中へは都さん
を入れて、二人のお方の中直りをさせ申すが宜い。都さ
ん〳〵。
仲居　都さんに先つきにから近江屋へ出てぢやわいな。
幇△　早く呼んで來るが宜からう。
仲居　そんなら、わしらが行て呼びまして來やんせう。
幇雨　早く行きな。
ト仲居向ふへ入る。幇間、吾妻、彦助を宥めて居る。
彦助、せいて思ひ入れあるべし。向ふにて、
都　人に突當りや地廻りでも免さぬ。わしと一緒にこつ
ちへ來や。
佐渡　危ない〳〵。都さん。佐渡市が肩にかゝつて。
都　オツト合點ぢや。
ト聲する。女郎の出になり、都、醉つたこなし、佐渡
市の肩にかゝり、逃げようとする地廻りの襟を捉へて
出て來る。仲居付て出る。
仲居　危ない〳〵。
都　危ない事はないぞ。構はしやんすな。

佐渡　盲目に手引と云ふはあるものだが、盲目の肩にかゝつて目明きがあよぶと云ふは初めて見た。都さん。道に犬でも寐て居るか、知らせてくんなさい。

都　道に何にも邪魔はない。廓ばかりは闇の夜も月の新町、藤屋の吾妻が姉女郎と云はれる都さまのお通りには、盛砂がしてある。恐らく女郎のみなかみと來てゐる。

佐渡　それにちつとも嘘はない、惜い女郎衆が年明け前だ。

都　そんな事云ふと耳引くぞ。

佐渡　アイタゝゝ、おれが痛いで人の痛さを知れとやら。その男、放してやりないな。

都　この地廻りのことか。

地廻　アイ、わつちが事サ。

都　道なかで人の事を、アノ都と云ふ女郎は、よく酒に醉ふの、俠んぢやの、口がこわいの、とぬかし居るに依て、家まで引摺つて行て、大黒柱へ括り付け、おかんどんに云付けて小刀針ぢや。

地廻　申し、誤まりました。この上、お前のお通りに無駄は申しますまい。

佐渡　堪忍してやつたが宜いのサ。

都　イヤ〳〵、堪忍ならぬでごんす。連て行く。サアうせい。

地廻　どうでも連て行くのか。

都　知れた事。

地廻　この喰ひ倒れめが。女郎だと思つて誤まつて居れば、ふてい奴だ。何時でも醉つてけつかるから、生醉ひがと云つたが惡いか。

都　惡いから連て行く。うせい。

地廻　嫌だわ。置きやァがれ。

ト突倒す。

仲居　都さん。危ない〳〵。

佐渡　都さん。怪我があつたらどうする。野郎め。この佐渡市がきかない。

ト杖を振り上る。噪がしくなる。番小屋より、番太かけ出て、割竹持つて、

番太　斯んな事をせいとうする番太が役。うぬ、よく都さんを突き轉ばしたな。うな〳〵。

ト割竹にて叩く。地廻り逃げて向ふへ行く。番太割竹にて追て行く。

仲居　都さん。サアござんせ〳〵。

ト無理に仲居、都を連て來る。

幇○　都さん。待兼ました。

幇△　よつぽどの御機嫌だネ。

都　聞て下んせ。初の客があつて近江屋へ出て居たが、その客の來やうの遲さ。まだ見えぬうち、御亭さんを相手に野見の宿禰、當麻のくれはやく、モウ何時であらうの。

佐渡　モウ何時だと床急ぎは、都さん、どうでも手取り、われらは按摩取り、按摩は盲目、この目が明きたくつても役目なら明れない。顔見世のお目見得を盲目で出すとは、酷い目に按摩針の療治。何れも樣、お肩の張をお呼びなされませ。揉み和らげて上げませう、と隅からすみ迄づいとお目見得ぬでござります。

ト目を思ひ入れする。

彦助　佐渡市。

佐渡　佐渡市と云ふはどなたゞえ。

仲居　どなたか、當て見さんせ。

佐渡　ア、知れた。でん喜さん。

仲居　イエ〳〵。

佐渡　清光さんか。

仲居　まだ〳〵。

佐渡　よもやアノ西國侍の彦助さまぢやあるまい。アノ人の聲はいけ好かぬ聲色。ついぞ顔付きは見えねども、どうやら苦み走つて、そして物云ひの憎さ〳〵。吾妻さんの嫌ひなさるも無理はなし。

彦助　佐渡市。今呼んだのは平野彦助ぢや。

佐渡　彦助さまか。ヤア南無三、しもふたやで金持ちや。

彦助　ソリヤ、人を馬鹿にするのか。

佐渡　イエサ、都さんの今夜の客人の噂さ。

ト騷ぎ唄になり、近江屋の提灯とぼさせ、花形數馬、出て來る。

提灯　旦那。井筒屋はこれでござりまする。お卷どん。都さんのお客樣を連れまして來やした。

仲居　いつもの機嫌で、爰におやわいな。

提灯　サア、お上りなされませ。

數馬　皆な、免さつしやりませ。

ト通る。

佐渡　都さん。客人がござつたさうな。

數馬　聞及んだ藤屋の吾妻が姉女郎、都は其元でござるか。

都　オヽ、堅いわ〳〵。都は私でござりまする。以後お心安うお話しなされて下さりませ。

ト手をつかへる。

數馬　お傾城の好い機嫌。一しほ花があつて面白い。

吾妻　お前は今日お目にかゝつた數馬さま。

數馬　イヤ、身が名を數馬とは、其方の間違ひであらう。藤屋の吾妻、今日逢ふた覺えはないぞ。

吾妻　それでもアノ浮む瀨で。

數馬　見たやうなと云はれるのか。似た者は世間に幾らもある。人違でござらう。

ト知らぬ顏して居る。

都　數馬さんとは何うやら聞いたやうな名。ソレ與次兵衞さんの話の。

ト云はうとして醉つたこなし。

イヤ〳〵、お前。吾妻さん。人違であらうの。さうであらう〳〵。

彥助　何れのお侍か存ぜぬが、今宵、都が客人とござる。何と御一緒に呑み明かさうではござらぬか。

數馬　これはどなたか。あなたも。

彥助　吾妻が揚詰の客。姓名を早野彥助と申すてや。

數馬　アヽ、その元が彥助どの。御挨拶でござる。ゆるりつとお座敷へ參るでござりませう。今宵の相方、都が座敷へ一寸參つて、盃でも致した上、お座に連りまするでござりませう。

提灯　マア都さん。奧でお近付きのお盃。喜八どん、頼みます。

喜八　オイ〳〵、其所は若い者喜八が呑込み。お客樣。サアお出でなされませ。

數馬　然らば、お侍樣。

彥助　これで酒になさらいでの。

數馬　後程、お目にかゝりませう。

提灯　サア、お出でなされ。サア〳〵〳〵。

ト若い者、數馬を連れ、提灯持も奧へ入る。

都　ドリヤ、わしも行て、初の盃事と出やうかいの。

彥助　都、待て。

都　みやこ、待て。横柄な。何ぞ用か。

彥助　吾妻が兎角身請を嫌ひ、今夜も振付る。さつきから手に汗を握らせる。何と其方、吾妻が心の直るやうに、姉女郎甲斐に意見してくれまいか。

都　アノ吾妻の事頼むのか。頼むのなら手を突いて、南

無都傾城大權現さま、お頼み申しますと、云はしやんせんけりや嫌ぢや。

彦助　ソリヤ安い事。斯う兩手をついて、南無都傾城大權現樣、吾妻が事をお頼み申し上げまする。

都　さう云はしやんすりや、爰に居て吾妻さんをお前の手に入れてやるわ。嬉しいかえ。

彦助　御利生が見たうござりまする。

都　先づ斯うと。

彦助　どうだな。

都　佐渡市どの。

佐渡　アイ。

都　ちつと揉んで下んせ。

佐渡　オツト心得玉子のふはと、お前のお肩へ手をかけ香。エ、好い匂ひだ。油は百助。お客は彦助。道理で鼻がひこ／＼する。

都　彦さん。

彦助　ハア。

都　吸付けさんせ。

彦助　アイ／＼。

ト吸付け、

サア、たばこ。

都　聞かんせや。吾妻さんを手に入れやうなら、あんまりびた／＼側へ寄つたり、抱き付いたりすることを止めて。

彦助　止めませう。

都　きれいに、振られたなら、振られたなりで歸ることサ。

彦助　歸つてそして又來るのか。

都　モウ一生來ぬが宜からう。

彦助　何の事だ。ソリヤ手もない。それがさう思ひ切られぬに依て身請。

都　身請々々と云ふのが惡い。身請の沙汰を止めにして。

ト云ひながら盃を取て、

マア請けるぢや。

彦助　我れら注ぐぢや。

都　所で呑むぢや。

佐渡　振るぢや。

彦助　ソリヤ誰が。

佐渡　吾妻さんが。

彥助　うぬ迄そんな事を。
都　そのやうに早う腹を立つては手に入らぬ。
彥助　然らば立てぬ。ぐにやつとなつて、猫となつて罷り居る。
　ト べつたり下に居る。
都　身請をマァ止しにして、跡金の三百兩ぱあ〳〵と撒き散すと、座敷が賑かになつて、身請の事さへ今夜止めにさんすりや、手に入れて吾妻さん。さう綺麗に金は撒かれまい。
彥助　アノ金をや。
都　身請の金の足しまへ三百兩。何ぼ彥さんでも撒れまい。
佐渡　三百兩、梅が枝が無間の金ではあるまいし、彥さんがどうして撒れるもので。
都　どうして撒れることか。
佐渡　金は撒れまい。
都　ナニ、撒れるもので。彥さん。撒かしやんすか。
佐渡　彥さんが何として〳〵。
都　コリヤ撒れまい〳〵。
彥助　撒かう。吾妻さへ手に入るなら、三百兩位の金、たつた今撒くぞ〳〵、と云ひたいが、能く積つても見たが宜い。三百兩と云ふ金、石ころぢやアあるまいし、撒れるものか。
都　ソレ見やしやんせ。その根性で新町遊び、吝な心の彥さんづらに、妹女郎の吾妻は逢はさぬ。姉女郎の都がならぬ。さう思うて下さんせ。
彥助　これは何うだ。人に天井を見せる事はない。酒にしよう、酒が宜い。コレ都。杯をさし給へ。權現樣。
都　さすのかえ。吾妻さん。一ッ呑まんせ。
吾妻　アイ。
　ト 呑み、
　この杯、どうしようえ。
都　彥さんにさゝんせ。
吾妻　アイ、ソレ彥さん。
　ト さす。
彥助　アノおれに。コリヤ有り難い。早く注げ〳〵〳〵。
都　吾妻さんの杯、有り難いかえ。
彥助　金を撒いても宜い〳〵。撒くぞ。都。
　ト 金を取る。
都　アノこの金を撒くのか。

ト財布を取る。
彦助　吾妻さへ承知してくれゝば、撒く〳〵。
都　娼女郎が云ふ事を聞いてな。吾妻さん。彦さんの側へ寄つた。
ト吾妻を突きやる。吾妻、彦助が膝へ寄りかゝる。
彦助　エヽ、有り難い。ついぞ此のやうにちこ〳〵と側へ寄てくれぬ吾妻が、斯うなるは都權現の利益の程。
都　さう思うてなら、この金を撒うか。
彦助　撒け〳〵。
都　この金を撒くに依て、モそつと側へ寄つた。
彦助　又寄るか。
吾妻　彦さん。側へモツト寄りたけれど、皆が見てぢやに依て恥かしい。
彦助　つひに莞爾りせぬ吾妻が、にこ〳〵は道理こそ、はふき如來のお開帳がある、ハヽヽヽ。みんな、目を眠れ。
皆々　ソリヤ目をねぶつた。
ト眼をふさぐ。
吾妻　彦さん。今迄のやうに云うたのは、お前の心を引て見やうためぢやわいな。

彦助　今迄振つたは。
吾妻　堪忍して下さんせいな。
ト抱付く。
彦助　サア〳〵、コリヤ堪らない。
都　その拍子に撒くぞ。みんな目を明いて拾つた〳〵。
佐渡　アノ金をか。
若者　思へばこの金恨めしやとて、龍頭に手をかけ、突くよと見えしが、引つ擔いてぞうせにけり。
都　ソリヤ、ぐわん〳〵。
皆々　ぐわん〳〵〳〵。
ト大騷ぎにて、都に金を撒く、皆々拾ふ。
都　身請の金は、吾妻さん撒いてしまうた。
吾妻　エヽ、嬉しうござんす。
彦助　何が嬉しい。
吾妻　お前と添るが。
彦助　コリヤ、きつい都權現、利生が見えた。有り難い。三百兩一兩も殘さずぐわん〳〵。おれをぐわんと云はせたな。
吾妹　このやうな嬉しい事はござんせぬ。
都　嬉しからう。嬉しい次手にナソレ。

吾妻　嬉しい次手に、今夜も彼の主と、オ、嬉し。
ト吾妻、彦助に抱付く。
彦助　いつそ殺せ〳〵。この御機嫌のうち、サア皆〳〵來い。
皆々　抱付きをこの儘、彦さま、奧へ。
仲居　都さんござんせ。
ト手を取るを突き退け
都　わしは爰にゆつくり、身請の夢でも見よう。
ト都、寢轉ぶ。
仲居　コリヤ根つから他愛ぢや。
若者　サア、奧座敷へ。
同　サツサ、押せ〳〵〳〵。
ト吾妻、彦助、抱付いたなりにて押す。騷ぎ唄になり、一面に奧へ入る。都、獨り殘る。佐渡市、殘る。
佐渡　あれ程の小判の音、この佐渡市ばかりは一兩も手に取らぬ、盲目だけの薄鈍。都さん。お前はちつと金を貰つて下さりませ。モシ〳〵〳〵、又醉ひが出たさうな。風引かせてはならぬ。ドレ、何ぞ取て來て、お裾へかけて上げませうかい。
ト唄になり、佐渡市、奧へ入る。舞臺、靜かになる。

幇間、仲居、あたりを見て。
皆々　親方、首尾は。
ト都、起きて。
都　コレ、聲が高い。
皆々　ハヽ、こいつは宜い〳〵。
都　ハヽヽヽ、わしとした事が、芝居の泥坊見るやうに、親方と云はれて聲が高いとサ、ホヽヽ。
幇○　さつきからの仕打、きついもの。芝居で云つて見やうなら、里好がいゝ仕打。
幇△　これがホンの里好が空生醉ひ。
都　醉うた振りして身請の金。
皆々　三百兩。
都　撒かせて退けたは姉女郎の都が機轉。
仲居　吾妻さんの悅び。
同　首尾よういたぢやないかいなア。
都　首尾よういたら金よこしや。
幇△　掻集めて二百八十兩。二十兩足らぬは疊の下や緣端へ落たのか。但し彦助が三百兩に都合せぬ金か知らぬ。
幇○　親方、渡しませう。
都　二百兩取て、跡はこなさん方にはずむ。

幇〇 八十兩が拾ひ貨か、有り難い。
佐渡 様子は聞いた。捕つた。
ト出る。
都 何をとるのぢや。
佐渡 按摩をとるのサ。
都 ゆつくりと奥で揉んで貰はう。
ト金を一兩やる。
佐渡 たつた一兩か。
都 奥へ來や。
皆々 アイ〳〵。
ト騷ぎ唄になり、都、佐渡市連れ、幇間、仲居、奥へ入る。靜かな唄になり、向うより、與次兵衛、序幕の形にて出て來る。後より、番太、割竹を持ち出て來る。與次兵衛を胡散らしく見る。與次兵衛、叩かれしを惱み、歩きかれる。
番太 何だかひよんな形の奴。コレ其所へ倒れるな。この番太さまのお世話になる。脇の町へ行てくれろ。早く行けよ。
ト沒義道に云ふ。これにて顔隱し、少し跡へ行く。
さうだ〳〵、倒られると厄介だ。ドリヤちつと寐てくれやう。
ト番小屋へ入つて戸をたてる。
與次 勘當の身になれば、モウあの人さへ與次兵衛を見違へて。見違へぬと云うて、このやうな形で、どうして顔が合はされう。一寸都に逢うて、吾妻が事が賴みたい。どうぞ都に。
ト舞臺へ來る。吾妻、奥より出て、
吾妻 都さん。其所に居さんせぬか。都さん。
與次 さう云ふは吾妻ぢやないか。
吾妻 與次兵衛さんかいな。よう來て下さんしたの。
ト連て來る。
お前、マア顔色も惡し、どこぞ痛むかえ。
與次 さればいの。浮瀬からこれ迄來る道で、彥助が朋輩の壺坂半平めがの。
吾妻 半平がどうしたえ。
與次 半平は蒲鉾のやうにあつうなつて、おれを引つ摑み、新道の治郎兵衛が戸板にのせられた吹同前、今日晝の意趣晴しちやと、無體のある條、こらへかねての、半平を。
吾妻 どうさしやんしたぞいな。
與次 どうもせんが、叩かれた。

吾妻　怪我でもしやさんせぬかいな。それから跡はどうさんしたえ。
與次　それから、なにが道を逃げた程に、逃げ〳〵、漸々爰へ來たのぢや。
吾妻　そんな所は早う逃げさんすが宜い。
　ト禿出で、
禿　吾妻さん。呼んで來い〳〵と、彥さんが云うてぢやわいな。呼んで來ずば、おれが其所へ行くとて喧ましい。吾妻さん。早うござんせいな。
吾妻　サ、今行くわいの。與次兵衛さん。ちつとのうち。
　トあたりを見て、上の方、寢道具積んである長持を見付け、
幸ひぢや。この長持のうちへ入つて居さんせ。夜が更けたなら、藤屋へ一緒に。
與次　そんなら長持へ。
仲居　吾妻さん〳〵。
　ト仲居出て。
呼んで來い〳〵とむづかしい。早うござんせいな。
吾妻　今行くわいな。
　ト長持へ與次兵衛入る。

仲居　サア、ござんせいな。
吾妻　せはしない。今行くわいな。
　ト無理に仲居、禿、吾妻を連て奧へ入る。番小屋より、番太出で、
番太　今は何者かと思つたりやア與次兵衛どの。親御に勘當受けたとは氣の毒な。アノ身になつて工面は惡く、彥助に吾妻どの請出されたら、ハテひよんな事であらう。アヽ、ならうなら吾妻を請出し、與次兵衛と添はせたいものぢや。都に逢つて話もあり、あいつ又喰ひ倒れて居るか知らぬ。
　ト云ふうち、都、奧より出で、
都　ちつとの內、お前方、おたんだにえ。
　トこちらへ來て
與兵衛さん。其所にかえ。
番太　都。今夜もきつい御全盛の。
都　與兵衛さん。女郎は客のあるが習ひ。幾人客があつても空生醉、寐ることぢやない。コレ與兵衛どの。悋氣所ぢやござんすまい。
番太　悋氣も痴話も、ちつとは二人が仲の慰み。斯うした夜番の身になつたも、みんな其方の揚代に。

都　打込ましやんしたは、京でなじみ、この新町へ鞍替へしたもお前ゆゑ。いとしや、こなさんもわしゆゑ、いかい苦勞をさんす。八幡で難波屋の與兵衞さん。京でも大坂でもなん與兵衞々々と、人に顏を知られたお前。イヤほんに日外は聞かうと思うて居た深間、山崎與次兵衞さんの云はしやんすには、與兵衞とおれとは譯のある仲ぢや、明けては云はぬと主の話。お前も與次兵衞とは譯がある、大事にかけてくれと頼ましやんしたが、與次兵衞さんとお前の仲は、マア何でござんすぞいな。

與兵　おれが親難波屋の與五右衞門どのと、山崎與次兵衞が親與左衞門とは從兄同士。難波屋の身代も山崎に負けぬ暮し、二親なうなられて、べた〳〵と難波屋の家をたたみ上げた道樂はこの與兵衞。山崎の與左衞門どのは生れ付いた堅氣。家へは寄せ付けぬその子の與次兵衞ゆゑ、大事に思ふも、おれがやうに身を持ち崩させまいと思ふが、今夜今聞けば勘當されたとの事。勘當の身の上になつては、吾妻と二人ひよつとした事はあるまいかと案じられるわい。

都　案じさんすな。西國の侍、吾妻を身請の金騙して取つた二百兩。

與兵　アノ金二百兩を。

都　騙して取つたソレ二百兩。

ト出す。

お前の頼み、こなさんの男が立てさせたサ。眞實な女郎ぢやと褒めて下さんせ。必ず叱つて下さんすなえ。

與兵　何の叱らう。二百兩あつても二百兩足りぬ。昔の與兵衞なら、かけ廻つても二百兩は直きのこと。どうぞして親方を頼み、吾妻を身請させ、與次兵衞に付けて今宵中におれが京の知る邊へやりたい。

都　モウたつた二百兩。四百兩にして欲しいなア。

與次　このやうな夜番の身になつても心を痛めるは。

都　女郎の身にも替らぬ。

與兵　浮世は。

二人　ア、金ぢやなア。

ト奥にて、

數馬　都は其所に居るかや。都々々

ト云ふに依て、與兵衞、番小屋へ行く。都、醉うた振りして居る。數馬、出て來る。

都、爰に居やつたか。何故座敷へは來てくれぬ。サア手を取らうか。

ト手を取て

扱もきつい、醉ひやうの。都、傾城に誠なしと昔からの譬へ。其方の酒は空醉ひぢやの。

都　エ、何云はしやんす。嘘に酒に醉はるゝものかいた。

數馬　隱しやんな、醉ひにかこ付け、爰に居て傾城の誠を盡す間夫に逢ふのか。

都　何と云はしやんすえ。

數馬　間夫に逢つて居たわサ。今おれが爰へ來る影を見ると、直きに隱れた奴がある。何故今夜に限つて間夫をしてくれる事はない。

都　このお客さんは、初對面から間夫詮議。あゝ可笑しいわいな。

數馬　間夫詮索も其方に長く逢ひたいから。せくも矢ッ張り客の常。サア奥へ來やれ。

ト手を取る。

都　置て下んせ。

數馬　嫌か。

都　アイ。藤屋の都は遣手衆にも內方でも、ついぞ間夫の詮索された事がござんせぬ。何ぢやの、初の癖に間夫詮索。そんな無理な客には金輪際逢はぬわいな。あんまり褒められたこつちやアないが、京から爰へ鞍替して來た都。むづかしい客、仇な客、お前のやうに初手から間夫の沙汰いふ客人はついぞ初めて。置て下さんせ。

數馬　そのやうな張りの強い女郎をも、金の威光で廻はして見せるわ。

都　ホヽ可笑しい。金の威勢が怖いものかいな。

數馬　金の威光で、その張りの強い傾城の顔をはる。

都　面白い。サア張つて見や。

數馬　張つて見せよう。

都　サア、張りや。

トむつとする。

數馬　その顔を張るこの金。

ト財布より貳百兩包み、都が前に投げ出し、

ソレ。

都　何ぢや、金とは可笑しい。

ト取て見ようとして、

この包みは。

數馬　耳を揃へて山吹の二百兩。

都　二百兩ぢやえ。

數馬　二百兩都合したなら、何と顏を張られずばなるまい。山吹の花もの云はねど、通用に物を云はせる二百兩。數馬と名を知られたこの客が今夜の花。

都　數馬さまが今夜の花。すりや今の金の樣子を。

數馬　サア、知る知らぬ、何かあやなく分けて云ふ、里の諸譯は金がする。金がありや野暮も粹、金がなけりや粹も野暮。粹な都に野暮客の二百兩、何んぞの足し前にしてくりやれ。都。奧で待て居るぞよ。

　ト唄になり、數馬、奧へ入る。

都　思ひがけなう、身請の足しまひ下さんしたアノ客人。

與兵　花形數馬どのと云うて、與次兵衞が一門中、おれもご存じ。中々其方に迷うて廓へござる人でもなし。

都　さうした心でこの金を。

與兵　遣らうばかりのお志し。

都　これでお前の男も立つ。わたしが意氣も立つ。このやうな嬉しい事はござんせぬ。與次兵衞さんに悦ばせたいものぢや。

與兵　與次兵衞どのはその長持に。

都　隱れて居さんすかえ。

與兵　人の見ぬ間に早う、おれが逢うては惡からう。これから落付いて、一睡いたさうかい。

都　與次兵衞さん。ちやつと出さんせ。

　ト與次兵衞を出さんとする。向うにて

町人　サア〳〵、お出なされませ。

　ト月行事の提灯とぼし、男二人付て、與左衞門、頭巾被ぶり客の振りにて來る。

　爰が井筒屋でござります。

町人　ついぞない、月行事の提灯とぼして女郎買の供をして來るとは、味な取合せではないか。

　ト門へ來る。これにて長持の蓋をして、都、態と寢轉び空眠りして居る。

町人　仲居衆、頼みます。

仲居　アイ〳〵。

　ト仲居、出る。

番提灯とぼして、何ぞ用かえ。

町人　客人を一人連て來た。

仲居　主はお客さんかえ。

町人　マア一ッ上げまして下され。

仲居　そんなら、奧の小座敷へ連れ申して行かう。

町人　頼みますぞや。
仲居　サア、お出なされませ。
ト提灯持ついて、與左衛門、仲居連て奥へ入る。都、起きて、
都　おりのや。ことのや。
ト禿を態と呼び、醉ふた振りして長持の方へ來て、
この間にちやつと。
ト長持の蓋を明ける。與次兵衛出る。
與次　こなたは都さん。出ても宜いか。
都　早う出さんせ。悦ばせることがある。
與次　耳よりな、何の事ぢやえ。
都　聞かしやんしたなら、大抵の悦びぢやあるまい。
與次　お前の方のことは悦び、こつちは悲しいこの身。とう〳〵今日親父與左衛門どのに御勘當受け、この紙子姿。その上どうも生きては居られさうもないしだら。とつ押いつ思案たゞ中ぢやわいの。
都　思案と云うて、惡い思案出さんすなえ。これを見やしやんせ。
ト手に持たせて見せる。
與次　金ぢやないか。
都　彦助が吾妻さんを身請の金、撒き散らさせて身請はさせぬやうにして、お前に首尾よう請出させる工面。お前も知つて居やしやんす與兵衛どのな。
與次　難波屋の與兵衛どの、お前と深いと云ふこと誰知らぬ者もない。なんと與兵衛の工面したのか。
都　お前の顔を立てたいとて、アノ人もそれは〳〵氣を揉んで、わたしを頼み、それで拵へた金。與兵衛どのゝ働きぢやぞえ。零落れて居さんしても、與兵衛さんは男ぢやなア。
與次　男とも〳〵、あたまの上へふだんさしいで居ても宜いわいの。
都　與兵衛さんばかりでもないぞえ。花形數馬さまが。
與次　ヤ、數馬どのがござつたか。
都　二百兩。
與次　ナニ二百兩。
都　わたしを揚げの今宵の客。花ぢやと云うて、餘所ながら身請の金を。
與次　下されたか。エ、忝ないお志し。
都　與兵衛どのも男。都合合せて四百兩。
與次　サア〳〵〳〵四百兩。身請の金が出來た。吾妻に知

らせて悦ばせたいの。
都　奥へ行てな、吾妻さん、爰へ寄こす程に、その金見
せて悦ばせさんせ。
與次　この金わしが持て居るのかえ。
都　お前の金ぢやに依つて、爰に金の番して居さんせ。
與次　そんなら懐ろへ入れて。
ト懐ろへ入れて見て
イヤ〳〵〳〵懐ろも危ない。
トあたりを見て杯臺を取り出し
好し〳〵。
ト杯臺の上を取り、中へ入れ、元のやうにして置き、
何んと好い金箱。これからしやんとしやに構へ、屹度こ
の金の番どう仕るにて候。
都　アノマア嬉しがつてからに。
與次　このやうな嬉しいことが又あらうかいの。
都　番して居さんせ。ドリヤ吾妻さん、爰へ呼んで來よ
う。エヽ嬉しさうな顔わいなア。
ト唄になり、都、奥へ入る。與次兵衞、殘る。
與次　思ひがけないと云はうか、長持のうちのほんの寐耳
へ水、併し夢ではないか知らぬ。夢ならモウ覺めはせぬ
か。
吾妻　アイ〳〵、今行て來やんせう。
與次　ソリヤ、吾妻めが來るわ。
ト思ひ入れして居る。
吾妻　與次兵衞さん、誰も見やせんかえ。見付られぬやう
にさんせや。
與次　モウ誰が見ても大事ない。怖いことも恐ろしい事も
ない。天下晴てこの井筒屋の揚屋、何所に居ても宜い。
これから直ぐに藤屋へ御來臨、大盡さまぢやぞ。
吾妻　大分きつう出さんすの。
與次　きつい筈ぢや。親父に勘當された男ぢやて。
吾妻　酒にでも醉ひしやんしたかえ。
與次　酒の元氣をかりて、物云ふやうな與次兵衞ぢやな
い。
吾妻　オヽ、さつきの元と違うて張が強い。どうでも酒機
嫌ぢやさうな。
與次　わりや勘當された與次兵衞を見捨て、西國の侍、早
とやら、はせとやら云ふ、えらい侍の腰に喰付き、金
と云ふ釣針にかゝつての酒盛り。おりや長持へ入つた振
りで、障子の隙間から覗いて見て居たわえ。それをば知

らいで、ようつけざしを呑み居つたな。
吾妻　彦助がつけざし呑んだ覺えはないわいな。
與次　呑んだ〳〵。呑んだ□□□。まつ赤いな、其の下の帶の間へ足をぐつと、よう入れさせたの。
吾妻　ソリヤ嘘ぢや。
與次　何おれが嘘をつくものぞ。
吾妻　云はしやんすな。お前は大きな嘘つきぢや。
與次　何時嘘をついたことがある。
吾妻　わしを身請せうと騙して置て、身請はせず、今宵彦助が身請すりや何うさんすぞいな。
與次　それが嘘になるものか。嘘つかぬ證據、今夜おれが身請する。
吾妻　ホヽコリヤ可笑しい。身請の金があるかえ。
與次　金が無うて。
吾妻　それが嘘ぢや。
與次　金を見て悔りするなよ。これを見や。
ト金を出して見せる。
耳を揃へて四百兩。こればつかりは恩にかけにやアならぬ。姉女郎の都が働き。
吾妻　四百兩に都合したかいな。

與次　これと云ふも、其方をどうぞ身請したい〳〵と思ふ一心が屆いて、今夜身請するやうになつたわいの。それで勘當の事も打忘れて嬉しいわい。
吾妻　彦助が事は云うても下さんすな。これから座敷へ行く事ぢやござんせぬ。なんとマア今夜は目出度いぢやアないかえな。
與次　目出度うなうて。
吾妻　目出度いに依つて、アレあそこに寢所もあるし。
與次　オヽあそこに寢所もある。
吾妻　アノ寢所へ行かうぢやないかえ。
與次　この目出度いにか。
吾妻　わたしや晝の狂言でいこう肩が張つたに依つて、お前、揉んで上げようと思うて。
與次　其方が肩の張つたのに、おれに揉んでくれるか。
吾妻　跡でわしが肩を揉んで下さんせ。
與次　揉んだり揉まれたりするのか。成程、云やれば今夜は目出度いに依て、あそこへ行ても大事ない。けれど、これ見や、都が預けた金の番せにやならぬわいの。
吾妻　お前が番さんせいでも、枕元にありやこそりと云うても知れるわいな。まして杯臺なりや誰が氣が付くもの

で。
與次　成程、云やればそれもさうぢやが、身請すりやおれが儘、身請の濟むまで金の番せにやならぬ。
吾妻　ハテ、それでも話があるわいな。爰に居りや彦助が呼びに寄こすわいな。
與次　成程、云やればそれもさうぢや。爰に居たら仲居どもが見付て、彥助が所へ連れて行かうし。
吾妻　サ、それぢやから、マアあそこへござんせ。
與次　サ、行きたいは行きたいが、都に云付られた金の番せにやならぬ。
吾妻　枕元にありや、金に氣は付かぬわいな。猫が來てもこそりと云うても知れるわいな。
與次　成程、云やればそれもさうぢやが、イヤ／＼、どうでも番せにやアならぬ。
吾妻　ハテ、よいわいな。氣遣ひない。ござんせ。
與次　行きは行かうが、この金の番せにやならぬ。
吾妻　さうしてありや、誰も氣は付かぬわいな。
ト與次兵衛を無理に引張り、上の方、寢所取りし所へ行く。どうかした拍子に、與次兵衛、床の上へ突きやり、屛風を吾妻たてる。唄になり、佐渡市、そろ／＼出て、杯臺に探り當り、此とき、目を明いて、思ひ入れして、金と小石と入替へ、元のやうにして、花瓶を取出し、藤の花を取退け、金を中へ入れ、花を挿して目をねぶり、按摩の思ひ入れして、奧へ入る。相の山の唄になり、向うより、藝者おきん、おさの、お菊、對の相の山、振袖の形にて出て來る。
きく　廓なりやこそ夜る夜中の物貰ひ。爰へ來たもお前方のお蔭ぢやわいな。
きん　お前の頼み、吾妻さんを呼出し、心の丈けが云はせたい。
さの　爰は井筒屋。この揚屋に吾妻さん來てぢやといな。
きん　吾妻さんにお前を。
兩人　逢はせたいものぢやなア。
ト又あひの山になる。與次兵衛、屛風を明けて出で、手水を使ふことといろ／＼あつて、
與次　このマア目出度い最中、氣の滅入つたあひの山。コレ通りや。やりたうてもでたかない。そしてつがもない、夜る夜中、あひの山が來るものか。通りや／＼。
ト云ふ癖にて、お菊、與次兵衛ぢやと三人とも思ひ入れ。

通れと云ふならきり〳〵通らぬかい。あだしつこい相の山ぢや。

きく　さう仰やんすは與次兵衛さんぢやござんせぬか。

與次　其方はおきくぢやないか。

きく　アイ。

きん　おきくさんの相の山も、お前を思うておやわいな。

與次　ちつとこつちに急用があるから、ゆつくりと明日逢はう。

ト逃げんとする。

きん　待たしやんせいな。

ト留る。

與次　コレ、高い聲しやんな。ひよつと目が覺めりや悪い。

さの　わたしら二人が見付たから、與次兵衛さん、どつちへもやる事ぢやござんせぬ。

與次　藝者のおきん、おさの。このお菊、知つて居るか。

さん　知つて居る段かいな。主とは手習ひ朋輩なり、三味線も一緒に上がり、心安いに依て今日の連彈き。

さの　相の山。吾妻さんと云ふお方があつても、主に頼まれりや取持つて、今宵の首尾。なア、おきんさん。

きん　お菊さん。默つて居さんす事はござんせぬわいな。日頃の思ひ、ナ云はしやんせいな。

きく　與次兵衛さん。わたしや爰へ來たはな、お前の御勘當の詫するうち、親父樣のお心安め、ちつとのうち吾妻さんを頼み、お前とマア緣の切れた分にして、御勘當のゆりた上はと、それを頼みに斯うした形で參りましたわいな。

與次　ソリヤ宜うマアやつた。大分取込んだこともあり、マア話しは跡で。遊んで行きや。

ト逃げたがる。

きん　イヤ、跡ぢやならぬわいな。たつた今お菊さんも話がたんとござんせうし。

さの　どうぞ、しつぽりと話が。オヽ、幸ひの中二階。

きん　二階へござんせ。

與次　アノおれにか。

きん　お菊さんもござんせ。

さの　早う二階へござんせ。

兩人　サア、ござんせ。

トお菊、恥かしがる。おきん、おさの、無理に與次兵衛を二階へ押やり

きん　吾妻さんに見付られさんせぬやうに、其所で話を。
さの　ゆるりと。
両人　話さんせヱ。
さの　おきんさん。
きん　おさのさん。
さの　わしや、お前の念が屆いて。
きん　與次兵衞さんとお菊さん。
さの　二階へやつたで落付いた。
きん　仲居は宵の程。
さの　さらば座敷を。
きん　開きやんせうかいな。
さの　サテ、ござんせ。
　ト　おきん、おさの、奥へ入る。唄になり、屏風を明けて、吾妻、出て來る。二階障子へ二人の影うつる。吾妻、手水使ひながら、其所らを與次兵衞を尋ねて。
吾妻　この與次兵衞さん。何所へ行かしやんした知らぬ。
　ト二階にて
きく　ソリヤ、お前嘘ぢやござんせぬかえ。
與次　大誓文。嘘を云ふものか。
　ト云ふを、吾妻、聞き付ける。

　コレよく聞きや。吾妻は女郎、遊びもの。遊ぶほど遊ぶと新町へは足も踏込む事ぢやない。
　ト聞いて腹を立てる。
きく　そのお心なら、わたしや嬉しうござりまする。
與次　お菊。
きく　與次兵衞さん。
與次　恥かしがらずと、側へ寄りやいの。
吾妻　側へ寄れ。ヱ、何時の間にか、お菊さん引込んで、のう／＼と二階で寐ようとは厚かましい。
　ト　吾妻、二階へかけ上る。
　與次兵衞さん、お菊さん、お前方はマア。
きく　吾妻さんか。
與次　南無三、世直し／＼。
吾妻　お前方、其所には置かぬ。ござんせ。
　ト二階より下へ引卸す。おきん、おさの、出て、
きん さの　吾妻さん。尤もぢや。マアせかしやんすな。
吾妻　せくな。これがせかずに居られるもので、聞えた。お菊さんをお前方二人りして、連立て來て取持たしやんしたの。
きん　お菊さんを連まして來たは、わたしらが惡かつた。

さの　わつちとおきんさんに免じて、何にも云はずに下さんせ。
兩人　拜むわいな。
吾妻　お前方に拜まれる事はござんせぬ。お菊さんは兎もあれ、憎いは與次兵衞さんが聞えぬ。わたしや此の間から主の事で氣を揉み、今夜は心嬉しい事があつて心が落付いたに依つて、ちつと寐たうちに、お菊さんを連て二階へよう入らしやんしたの。
與次　おりや二階へ行く氣はなかつたが、その二人りのおきん、おさのが無理やりに二階へ上げたに依て。
吾妻　この帶を解かしやんしたか。この帶を解いたのかいな。
與次　この帶はたつた今、アノ屏風のうちで解いたぢやないか。その帶をまだ締めずに置いたわいの。
吾妻　見ともない、帶しめさんせ。
與次　オイ。
吾妻　早うしめさんせ。
ト高く云ふ。
與次　ハイ。
トうろたへ帶を取り、締めても〳〵解けるゆゑ。
此帶は根つからしまらぬ。吾妻、しめて給もいの。
吾妻　置かしやんせ。お菊さんに締て貰らはしやんせ。
與次　いつも朝歸りに締てくれると、家へ歸つても一日帶をしめ直さぬ、その癖が止まぬわいの。
吾妻　それ程ほどけぬ緣を、よう義理にござんしたの。モウ〳〵これ切り緣の切れ目ぢやぞえ。
與次　身請の金が出來てあるのにか。
吾妻　お菊さんと好い今の仕だらしをわしに見せ、身請の事を止めようと、今日浮瀨で親父さんの勘當も、わたしが緣を切らうための拵へ事でござんせうがの。
與次　さりとは廻り氣な。さう云ふ事ではない。
吾妻　さうぢや〳〵。さうであらう。この吾妻が顏が立たぬ。死んで顏を立てるわいな。
ト燒火箸とつて、咽喉へ突込うとする。
與次　コレ待ちや。この燒火箸、咽喉へ突込のか。
吾妻　刃物代りは火箸でも死ぬわいな。
與次　ハテ、危ない。鰻ではあるまいし、斯んな物咽喉へ突立て、外聞が惡いわいの。
吾妻　刃物があらば、サア刃物で殺して下さんせ。殺しや〳〵。

ト騒がしくなる。奥より、彦助、幇間、仲居、佐渡市者々出る。
佐渡　コリヤ〳〵、吾妻さん、短氣せまいぞ。
仲居　留て下んせ。
禿女郎　待たしやんせ〳〵〳〵。
佐渡　コリヤ、留た。
ト火箸を摑み、
アツ、、大きに火傷した。
ト火箸を捨てる。
吾妻さんはおれが留めた。與次兵衛さん。又口說か。嗜まつしやりませ。
彦助　與次兵衛と云ふは其方か。吾妻が鼓の山崎與次兵衛と云ふ奴らぬが事か。
與次　おれがことぢや。貴樣は誰ぢや。
彦助　吾妻が揚詰の客、早野彦助と云ふ大盡ぢや。
與次　アノこなたが彦助か。
彦助　彦助が與次兵衛、うぬに好い所で逢つたなア。
ト引付け、
この日頃、われに逢ひたかつたわ。エ、逢ひたかつたわエ、。

きく　コレ申し、お侍さま。何の科で與次兵衛さんをそのやうにさんすのぢや。
彦助　何の科。こいつは俗に云ふ間男だ。
きく　ソリヤ、何故でござんす。
彦助　揚詰の吾妻を盗んだに依て、宵から座敷へも來もせず、そこらあたりの空き部屋でこそと出合つて、彦助を幇間どもにも仲居どもにも笑はせる不屆き奴。それで折檻しても宜い。それにそばへるこの畜生女郎め。
ト吾妻をも引付け、
最前三百兩の金をうぬが抱付いたばつかりで、皆粉な粉なはい〳〵にしたわえ。先達て百兩の手附、今夜三百兩都合して身請けするを、よく生醉の都めと云合はせ、三百兩を撒かせたな。二人り共に并べて置て四ッにする奴だが、當座の腹癒せ。斯うするわ〳〵。
ト吾妻、與次兵衛を煙草盆にて叩く。都、かけ出て、彦助を押退け支へる。
都　都めもうせたか。うぬ、よく三百兩撒いたな。
撒け〳〵と云はしやんしたから撒いた金、まだ惜しいやうな顏をして、さもしいお侍樣ではある。コレ、彦さん。

彥助　何だ。
都　お前に間夫の詮索はさせぬ。姉女郎の都がせいたうする。せきやんすな、彥助さん。あまり惡う騷ぎして下さんすないな。
吾妻　都さん。この惡性な與次兵衞さん。身請せうと云ふも噓。
都　ハテ、よいわいな。
吾妻　コレ見よがしのお菊さんを引込んでな。
都　ハテ、よいわな。
吾妻　中二階で帶解いて。
都　ハテ、好いわいな。
吾妻　たつた二人り寐たわいなア〳〵。
彥助　都。聞いてくれろ。この惡性な女郎が、身請を脇にして、これ見よがしに、吾妻と空き部屋で帶解いて。
佐渡　ハテ、よいわいな。
彥助　たつた二人り。
佐渡　ハテ、よいわいな。
彥助　寐たわいヤイ〳〵〳〵。
佐渡　ハテ、よいわいな。
都　エヽ、置きにしや。人眞似をしていけぬすましの鰐の目の佐渡市。くど〳〵と女郎に振られさんすも無理ではない。少々あいつは間夫ぢやなと知つても知らぬ顏して、所詮この女郎、手にはのらぬと思や、恥かゝぬ前におつな拵へ、間夫に逢はせて、われは飛退いて外へ行く。皆んなはその世の中。お前のやうに間夫を見付た。間男ぢや、なぞと廓を騷がせるは大きな白痴。大そく凡夫と云ふぞえ。與次兵衞さんは吾妻の客、間夫と云ふ譯はありさうもないものぢやぞえ。
彥助　喰ひ倒れの都、馬鹿な裁きをするな。揚詰の吾妻、その横丁と出かけた與次兵衞。間夫間男でなくつて濟むか。
都　客色と云ふもの、間夫にはたゝぬ。
彥助　ソリヤ、何故。
都　名代女郎と云ふを取つて居さんすぢやないか。
彥助　何んと云ふ名代だ。
都　お菊さんは吾妻さんの名代にでさんしたらうの。
彥郎　何を生醉ひめが。お菊と云ふ女郎があるものか。女郎の名におの字を付けるものか。
都　それがコケの引つこぬき。まだ見世へ出さぬ先きは、子供の時の名を云ひ、お菊さんの、お勝さんのと幼

な名を呼ぶ。見世へ出て、都とか、吾妻とか付きや、お
の字のある時の名を匿すが女郎の習ひ。今宵は大一座、
女郎衆が足らぬに依て、內證から借りて來て、お菊さん
は與次兵衞さんの名代、名代取つて居さんすりや、馴染
の吾妻さん。一寸與次兵衞さんの所へ行かにやならぬ。
揚詰にさんしても色客の忝さは、何時でもお前はあけ
ぼし。腹立てさんすな、好い男に生れ付かぬを恨んだが
宜いわいな。

彥助　喰ひ倒れめ。吾妻與次兵衞が贔屓をしろ。何所迄も
おれが目からは間夫だ。吾妻、サア來い。

ト吾妻が手を取る。

都　吾妻さんを何所へ連て行くのぢや。

彥助　連て宿へ歸るのだ。

都　廓を離れては。

彥助　身請するに依て。

都　イヤ、身請は與次兵衞さんが先ぢや。證人は井筒屋
の旦那どの。佐七さん。ござんせ。

佐七　都さん。先つきから何かの樣子は聞て居ました。こ
の揚屋井筒屋が藤屋の親方へ云込んで、身請は跡の月か
ら與次兵衞が先でござります。

都　アレ見さんせの。今四百兩都合して、井筒屋のお前
に渡すに依つて、藤屋へ早速。

佐七　ソリヤ、直きに埒が明きます。

都　與次兵衞さん。先つきの金持てござんせ。

與次　心得た。爰でこそ彥助、鼻をあかせる四百兩。

ト杯臺持て來て、

四百兩あるぞ。四百兩ぢや〳〵。評判の四百兩ぢや。

都　早う出して、佐七さんへ渡さんせ。

與次　四百兩の開帳、近う寄て御縁のくれませう。

ト杯臺明けて、金財布出し、

井筒屋の御亭主、受取て藤屋へ頼みます。

佐七　どうでも山崎の旦那。左樣なら、お金を。ヘ、改め
て。

ト金財布明け、石になつて居る。

ヤ、、、、コリヤ根つから身請には役に立たぬ石瓦。

都　エ、石ぢや。

與次　ドレ〳〵。

ト見て、

コリヤ石瓦。コリヤ何うぢや。

都　與次兵衞さん。お前、この金どうさんしたぞいな。

與次　どうもせぬが、どうして石になつた知らぬ。
都　エヽせうどもない。何故失はしやんした。覺えはないかいな。
與次　それぢやに依て、乾度番せうと云うたに、吾妻が何の彼のと云うて、ツイあすこの屏風のうちへ入つて、金に氣を付けて居るものを、べちや／＼話を仕掛けて擧句の果にはあんな事させて、そのうちに此金が。
吾妻　利巧さうな云譯。わしよりは、いつの間にかおきくさんと二階で。
與次　そのやうに云やんな。二階へ行く氣はなかつたが、おさのや、おきんが、無理に行け／＼と云うて、二階へ上つて差向ひの喧嘩もならず、あんなことせうとは思はぬに、ツイあんな事したうちに、この金が石になつたさうな。
都　石になつた所が、盗人がなけりやならぬ。誰が盗んだ。手證を見屆けさんせぬかいな。
與次　手證を見屆ける位なら好けれど、何にも白川夜船。いろ／＼の〇〇〇〇は盗人、油斷大敵の元金がなけりや身請もならず、與次兵衛はモウ／＼世間へ顔が出されぬと思や、口惜しいわいの／＼。

ト泣く。
都　泣いて居ちやア濟まぬわいな。
吾妻　せうどのないも好い加減にしたが宜い。今になつてこの金がなけりや、都さんへも、與兵衛さんへも、奥にござんす數馬さまにも、云譯がござんすまい。エ、ひよんな事さんしたのう。ひよんな事さんしたのう。
ト泣く。彦助、莨のみながら落付いて、
彦助　寄つてたかつて、拵へ事の手前が見えてお笑止／＼、身請の金がなけりや吾妻は連て行く。亭主。金受取に一緒に來やれ。
ト立うとする。
都　待たんせ。失うた金。この井筒屋の内に取つた奴がなけりやならぬ。詮議した上で身請の埒する。吾妻さん、彦さんの自由にはさゝぬわいな。
佐渡　申し、都さんエ。盲目の何の役に立たぬ無駄な事を云ふ奴と思ひなさらうが、與次兵衛さんの預りの金四百兩、石になつたは九太夫が云ふ臺詞ぢやアないか、松浦佐保姫をやられたを知らないは、與次兵衛さんの鼻の下、兩國橋ほど長いから、四百兩も取て行く盗人、この井筒屋に隠まつて居やう筈もなし、早く吾妻さんを彦さんの

方へやるが宜からう。ハテ向うが闇となつて、盲目のおれより、め眼の見えない與次兵衞さん、長引て四百兩の代物、疵が付いたら非筒屋の迷惑。御亭主どの。爰らはお前のめかりものよ。

彥助　めかりを利かせて連て行くのだ。吾妻、來い。

都　なりませぬ。

彥助　ならざア身請の金があるか。

都　サア。

彥助　金を出すか。

都　サア。

彥助　サア〳〵〳〵、金を出すか。

吾妻　エ、與次兵衞さんの他愛のないで、詰らぬ金に詰るか。都さん。

都　吾妻さん。

吾妻　エ、聞えぬ與次兵衞さんぢやなア。

ト泣く。

佐渡　要らざる事だが、この佐渡市なぞは、彥助さま、じれつたい。早く吾妻さんを連てござりませ。

彥助　さうだ。引立てるが宜い。與次兵衞めも引つ立て、間夫の見せしめ。若い者ども。叩きのめせ。

若者　うしやアがれ〳〵。

ト若い者大勢出て、引立てる。都、邪魔をする。佐渡市、都を提へ突廻し、騷がしくなる。與兵衞、飛んで出で、佐渡市を押退け、

與兵　ちつとお邪魔になりますべいか。

都　與兵衞さん、よう來て下さんしたな。

與兵　このいけ盲目め。見えない眼玉の明くほど叩きのめしてやる。案じやるな。

彥助　待て〳〵。うなア番太の雜與兵衞と云ふ奴か。朋友壺坂半平に聞いた都が間夫、何故客の座敷へ踏込んだ。場所を知らない下司野郎め。

與兵　云はつしやるな。場所を知つて居るから爰へ出た。勸學院の雀は蒙求を囀る。色里の番太は廓の出入諸譯を知る。侍が女郎狂ひ、請出すの連て行くのと、扶持の喰上げであらう。百兩手附が渡つても、それより先へ約束は與次兵衞さま。見す〳〵四百兩の金を失くして、その行端も詮議をせぬうち、吾妻さんを引上げられては、ちつとこつちの勘定が合はない。いとしや與次兵衞さん、勘當せられて紙子姿、せうじんの番太が見世の與次郎兵衞、それを苛めるやつは横ぞつぽうを張子の○○○○○

〇〇〇だと思つて、大束な附木一把、何を云はうとまゝごとの庖丁、切れないやうに二人の仲を、おれが娘の土人形、こんな座頭の張抜きは辻まではさせる緣づけの、上から下まで十六文、たつた一文の糊の強い引つ付いた中の與次兵衞さんとこの與兵衞、この場の出入諸譯を付けて見たいから、まだ四ツにも間がある、路地の締る氣遣ひはない。裏店小店の喧嘩のやうに立騷がすと、侍さん、マア下に居て貰ひませう。

都　コレ與兵衞どの。こなさんがござつたので力が付いた。吾妻さんを渡してはならぬぞえ。失はしやんした金の戻るやうに詮議して下さんせ。

與兵　ハテ、與次兵衞どのゝ事だもの、おれに如才があるものでござんすか。

彥助　與兵衞とやら落付くな。侍は性急、旅宿へ急ぎ、身請の金三百兩調へにやならぬ。きり／＼其所を退くまいか。

與兵　イヤ退かれぬ。この四百兩の金失くなつては、番太がかゝり合ひ。吟味をせにやアならぬ。怪いはこの盲目め。其所へ出やアがれ。

佐渡　馬鹿な事を云ふ。おれが何時怪しい。金の行端をどうして知るものか。ハテ身請の金が失くなつてどうせう。全體與次兵衞が、ゝゝきんは何所や。爰やに根つから葉つから知れなんだ。

與兵　按摩も取れば太鼓も持つか。

佐渡　習ふより馴れろサ。ちつと太鼓も持ちやす。

與兵　その幇間に花をやらう。コレ／＼その花瓶を爰へ。

與次　この花瓶か。

佐渡　その花瓶。

ト驚く。

その花瓶をどうするのだ／＼。

與兵　花瓶をどうする／＼と狼狽へ騷ぐ佐渡市。ハア、コリヤ好い花のやり時だわえ。

ト佐渡市、思ひ入れ。與兵衞、花瓶へ目を付け、

爰へその花瓶、コレ／＼／＼。

佐渡　その花瓶を出しては危ない。

與兵　何が危ない。

佐渡　水が零れようと思つてサ。

與兵　眼の見えない佐渡市が、水のたんとあるを覺る感の深い。この花は何の花であらうと思ふ。當てて見ろ。

佐渡　當てろとあるに、當てないも惡い。今の花なら藤か

躑躅か杜若。

與兵　三色ながら能く當つた、今の與兵衛が講釋が出來たに依て花をやる。しかも正花でこの花瓶。

佐渡　エヽ花瓶の花なら、アイ花瓶ともに貰ひませう。

與兵　花瓶は花にはならない。總て花と云ふ物はぱつと散らしてやらにやア花やかでない。

佐渡　この花を散らされては。

ト花瓶を取らうとする。與兵衛、花瓶を引つ返す。以前の金ばら／＼と出る。

都　見やしやんせ包みの儘の四百兩。

佐渡　貰つた花だ。それぢやアおれが。

ト金を取らうとする。與兵衛、佐渡市を取て押へ、

與兵　大泥坊めが。

與次　吾妻。悦びや。四百兩戻つた。

吾妻　それがありや身請は出來るかえ。

與次　出來るとも／＼、ほや／＼の四百兩。

都　戻るといふも與兵衛さん。

都吾妻　エヽ、嬉しうござんすわいな。

與兵　身請が出來れば、三人仲よう、今の口説を水にして、お菊さまも、三人仲よう添遂げませうぞ。

彦助　エヽ／＼／＼、忌々しい。その金も元はおれが物。今更おれがのぢやとも云はれず。斯んな胸の悪いことはない。アノ嬉しがる面つきを見るに付けても腹が立つ。與次兵衛め、おのれをいつそと、拔くも叉、今更拔くにも拔かれず。アノ金はおれがとも云はれず。コリヤマアあんまり腹の立つ詮索だ。

ト云ふ所へ、提灯とぼし奴二人出で、

奴　早野彦助さま。これにお出でなされますか。

彦助　磯内。平六。慌たゞしい。何の用だ。

奴　御朋輩壺坂半平さま。この新町へ通ひの道筋、まつ赤になつてお出でなされまする。

彦助　何だ。眞つ赤になつて、半平が餌かけになつた。

奴　斬られておいでなされまする。

彦助　半平を切つたら燒豆腐。一丁や二丁の騷ぎではない、もつてたつた事だ。何者の仕業ぢや。おのれら、云分もあれど、重ねて待つて居れ。

都　彦助さま。お急ぎなされませ。

彦助　エヽ／＼、斬りたい奴なれど、打捨置かれぬ朋友のこと。急ぐ所が早野彦助。

都　サア／＼、早くお立ちなされませ。

彦助　奴ども急げ。エヽうぬら。エヽうぬら。その金はおれか。
與兵　何を。
ト睨める。彦助、その口を塞ぎ、
彦助　何事も口を閉ぢて、奴ども、急げ。
奴　お早う。
ト奴、提灯持ち、思ひ入れして、彦助、急ぎおつ取り刀にて駈けて入る。
都　とう〳〵邪魔は拂うた。身請の金、佐七さん、請取て、藤屋の親方さんへお頼むによ。
佐渡　イヤ申し、井筒屋の親方さん。その金は彦助が金を無理に攫かせて取つた盗人は都。滅多に取つて跡で難の來ないやうにさつしやりませ。
佐七　さう聞いては、この金、藤屋へ持つては行かれまい。
與兵　こな盗人めは、うぬ盗人を棚へ上げて、ふてい奴だ。
佐渡　それでも彦助が金を無理に攫かせて取つた盗人。それだから、おれがその金を取て、花瓶の中へ匿してやつたのだ。おれを誰れだと思ふ、盲目と見せかけて、女郎買や何かに紛れ、若い奴の穴を探す盲目と見せかけて、頬被りべかこのやうなこの目玉、名乗りかける似せ盲目。都は盗人だ。
佐七　どうもあれを聞いては、受取られぬこの金。
ト云ふとき。
數馬　御亭主、受取らしつても大事あるまい。
ト出る。
都　アノ聲は。
與次　數馬さま。
都　早う元の長持へ。
ト與次兵衛を長持へ入れる。
きく　父さんに逢うては。
吾妻　わたしが蔭になつて居りや、知れる事ぢやござんせぬ。
ト云ふうち、數馬出る、
數馬　御亭主はそこ元か。都も其所に居やるか。
佐七　ハイ、井筒屋佐七、私でござりまする。御用でござりまするか。
數馬　外の事でもござらぬ。その金子請取られても大事あるまいと出ましたは、これなる都、今宵揚げの一ト夜

妻、後朝までは身どもが妻も同前。盗人の悪名はありそもないものかコリヤヤイ、あの者。
佐渡　おれが事か。
數馬　われが事ぢや。都が何で盗人ぢや。
佐渡　三百兩の金掠かせて、拾はせて、分け前をやつたが證據。盗人サ。
數馬　亭主。その金をこれへ。
佐七　ハイ。
ト出す。
數馬　都が盗人か、盗人でないか。この金。
ト取つて見て、
この金は今宵の花に、都に身がやつた金ぢや。
佐渡　アノ此の金をかえ。
數馬　身がやつた金ぢやわヤイ。
佐渡　イヤ〳〵やつたと云ふ證據があるかな。
數馬　身が金の證據は、一兩〳〵に花と云ふ字の刻印を打て置いたは、氏を花形と云ふに依て、亭主、見やれ。
佐七　ハイ。
ト取て見て
花と云ふ字の刻印がござりまする。

與兵　ドレ。
ト取て見て、
一兩〳〵に花と云ふ字の刻印。
數馬　花形、この數馬が金に相違あるまいが。
佐渡　ドレおれも見ようか。
ト金に手をかける。扇にて佐渡市を叩き、
數馬　最前逢うた時は盲目、今は目の明く。おのれこそ盗人。番の者、縛れ。
與兵　畏まりました。動くな。
ト引寄せる。跳返つて金を浚ひ、逃げんとするを數馬、佐渡市を引返し、柔にて組敷き。
數馬　動くな。番の者。繩。
與兵　ハイ〳〵、差上ませう。
ト繩を渡す。佐渡市をきつと縛る。
都　人を盗人にせうと仕おつて、とう〳〵縛られをつた。吾妻さん、見さんせ。好い氣味ぢやないかいの。
吾妻　そのやうな奴は、早、會所へ連れて行たが宜いわいな。
與兵　會所へ連れて行くは夜番の役。數馬さまがお出合はされ、花と云ふ字の刻印、都さんへ花の金。與次兵衛ど

のゝ緣に連れたるこの與兵衛も、お禮の申上げやうがございませぬ。

數馬　これはどうぢや。誰問ひもせぬ獨り言。亭主。その金受取て置きやれ。請人は花形の刻印でござる。

佐七　左樣ならこの金、藤屋へ渡して吾妻さんの身請の金。與次兵衛さんの悅び。

ト云ふを數馬へかくし、與兵衛、袖を引く。佐七、呑込み。

何んに致せ、お金を受取り、萬事は奥で都さんに掛合ひ、吾妻さんも、マア奥へ。

都　ソレ〳〵、佐七さんと一緒に。ナ、奥へ〳〵。

ト吾妻、お菊を連れ、おきん、おさの、都、佐七、皆皆一面に奥へ入る。數馬、與兵衛、佐渡市を引付け殘る。

與兵　先程からじみ〴〵と御挨拶申上たう存じましてござりまする。花形數馬さま。難波屋の與兵衛めでござりまする。御覽なされませ。向う見ずの道樂、親兄弟の罰が當りこの態、お目にかゝりまするも面目ならうござりまする。

數馬　與兵衛どのと存じながら、態と詞もかけませなんだが、まだ若い身そら、時節を待つて元の親御の身上家藏取戻すやうにさつしやれい。先づ息災な顏を見て悅びまする。

佐渡　何のこつた〳〵。このやうに引つちばり、何所へ連れて行くのだ。代官所へ盜人だと突出すのか。これ程の繩引切つて、おれが方から代官所へかけ込み、アノ都めを盜人に落さなけりやアならない。この繩を。

ト繩を切らうとする。

與兵　何を〳〵、その繩が切れるものかえ。

數馬　憎い奴。泥坊めを先づ會所まで。

與兵　引立てませう、泥坊め。うせう。

ト引立てる。與左衛門出で、

與左　コレ〳〵、番の人、ちつと待つて下され。

與兵　ハイお前は。

佐渡　この繩を引つ切つて。

ト繩を切らうとする。

與兵　何を、この盜人めが。

トしたゝか叩き据ゑる。

お前さまは山崎の與左衛門さまでござりませぬか。

與左　見らるゝ通り、山崎の與左衛門。

ト頭巾を取る。

數馬　與左衞門どの。思ひがけもない、何時の間に爰へ。

與左　參つたは老の續延し。數馬どのも、今宵爰へ。

數馬　參つたのも矢ッ張り老のうさ晴し。

與左　ハテ、似たこともござるなァ。

與兵　お二人ともお心にも染まぬ遊び所へ、おいでになるも皆んなサ身寄りの與兵衞。お二人のお心根が思ひやられて。

ト泣きをかくすとて、くさめして、

鼻風を引いたさうな。

與左　テモ久しい難波屋の與兵衞どの。扨も成人、何所にどうしてござるか。ついぞ無心一ッ云ひにござらぬは、そのやうな貧しい形りになつても男ぢや。立派でござる。

數馬　ナニ、あれが立派な事がござる。見すぼらしい町人者。商人でも致すことか、見かけもない夜番の身。彼れも元は難波屋與兵衞、人も知つた身上なれど、放埓に金銀を遣ひ捨て、アノ身になつたが何立派。その一門のうちには十間々口、家屋敷をも持て倍々に利を取り、身貧な者とて用捨もなく、貪慾に耽り、與藏の金藏のと、錠前の世話ばかり、しやうじんの持ちくさり、一門一家のアノ如く漂泊するをも構はぬ人が世間に多いさうな。のう、與左衞門どの。何にも立派な事はござらぬぞや。

與左　數馬どの。ソリヤこの與左衞門へ當てゝ仰やるのかな。

數馬　異な事を耳にかけさつしやる。世間の譬へでござる。與兵衞も誰ぞ引あげ、若氣のいたり、金の入ることも內證で調へやりさうなものだ。侍と町人の志は格別違つたものと、譬へ事を申すのサ。

與左　譬へ事か存せぬが、町人と侍の志は替はるの、貪慾に耽るの何のと仰しやれば、與左衞門、代々町人の耳に障りますわいの。倍々に利を取るは貪慾ぢやない、商ひと云ふもの。コレ聞かしやれ。殿より御扶持頂戴して、その役々の勤めさへすりや濟んである、お侍と違ひ町人は、元手から稼ぎ出し、祿の重い人達の娘なぞ嫁に貰ふやうに、何の系圖のない町人がなると云ふも金のお蔭、稼いだお蔭。侍の榮耀は位でする、町人の榮耀は金かさせる。假りにも金が遣はれるものでござるか。どうやら斯う云へば、數馬さまとこの與左衞門、物云ひ募りむづかしい。所もあらうに新町の揚屋、今宵の夜番

さつしやる與兵衞どの。その盜人、何と助けてやつて下さらぬか。

與兵　この盜人をかな。

與左　今數馬さまは世間の譬へ引てのお話。おらも譬へて云つて見ようなら、丁度そいつが今の憂き目は、おらが見世で子供どもが、夜になると枡罠かける鼠同前。夜明方には枡落しにかゝり居つて、その枡から出たがつても出られぬは、おのれが身から出した事ゆゑ、枡を跳退ける力も無うなつて、見す〳〵猫に取られる。それをこの與左衞門が、コリヤ子供よ、鼠をおれにくれと云つて、取て四ッ角へ放してやると、鼠めが嬉しがつて逃げて行く。逃げて行たなら、何所ぞに俠氣な侍氣質な、匿まうてやるまい者ではない。この盜人にもおれがやうな親鼠がなけりや叶はぬ。その親鼠が子鼠を助けられたら、さぞ嬉しからう。與兵衞どの。數馬さま。聞分けて盜人を助けて下さりませ。

ト數馬、これにて思ひ入れ。與兵衞、思ひ入れ。

家に鼠と云や人が嫌やがるが、鼠ほど目出度いはない。月々十二づゝ子を產む、子を產ませたら孫鼠抱うと思ひの外、孫も抱れぬ身になつたを、夜目遠目くら闇でも知つて居をらう。鼠が暗闇のちは〳〵喰ひやうては血みどろちんがい、子鼠の喰はれるを見ては、親鼠が加勢しさうなもの、遂には子鼠のために親鼠が命を失ふわいやい。又失ふまいものでもない。夫婦は二世と云うて、許婚の嫁鼠は捨られぬぞよ。親子は一世、ツイ其所に子鼠が居ても逢はれぬ世の中に、子ゆゑの闇ほど切ない事があらうか。人の親の心を思うて、この盜人が助けたい。與兵衞どの。番の人。助けてやつて下されませ。

佐渡　ハアハア、、ア。

ト大きに泣落し。

與左衞門さま。お前は生佛樣。盜人は枡落しの鼠に裝へてのお詞で、ちうの音も出ませぬ。ふつ〳〵止めませう。どうぞ、お前、お助けなされて下さりませ。ヤレ〳〵、お前は生佛樣でござりまする。

與兵　盜人のこいつは憎けれど、與左衞門さまのお頼み。お氣遣ひなされますな。與兵衞は男、かくまひます。助けます。數馬さま。繩解いて遣はしませうかな。

數馬　盜人の見せしめ。

ト立て佐渡市の側へ行き。

今數馬が盜人の成敗。

ト刀を拔いて繩を切る。
切つてしまへばその鼠、何所へ逃げようと搆ひござらぬ。
切りました。
與左　エ。
數馬　あいやけの緣は切れました。女房鼠持つてもよい。
必ず許婚に遠慮するな。緣は切れた。
ト長持へかけて云ふ。
盜人め。どつちへなりと。
ト佐渡市をつきやり、
うせおらう。
ト向うより奴二人付き、彥助、序幕の脇差を持ち、取て返す。茶屋の若い者付て來る。
彥助　亭主、佐七は居ぬか。與次兵衞を逃がすな。
數馬　最前のお侍、慌たゞしく與次兵衞を爰へ出せとはな。
彥助　與次兵衞めこそ人殺し。
數馬　ヤ、何と。
與兵　ナニ、與次兵衞さん、人殺し。
彥助　身が朋友の壹坂半平を手にかけた、死骸に殘るこの刀。緣頭寒菊、目貫は後藤が細工の胡蝶、この刀、廓へ入る客のうち目印があるかと、これなる茶屋に聞いたれば、山崎與次兵衞が腰の物だと云ふ。與次兵衞が人殺しだぞ。
與兵　ドレ、その腰の物。
ト取て見て、
ヤ、、、コリヤ與次兵衞の差料、これがあつては。
彥助　云譯はあるまい。目印の腰の物。繩打て代官所へ引く。與次兵衞を其所へ出せ。
與左　お侍さま。その腰の物は與次兵衞のではござりませぬ。
彥助　確かな證人は廓の者。何故與次兵衞がのではないと云ふ。
與左　與次兵衞が親山崎與左衞門、僞りは申しませぬ。これへ參りまする道、田圃に落てあつた刀の鞘、拾うて見れば覺えの鞘。その側に人の死骸。コレこの人達はこの町の月行事、早速この方に覺えの腰の物、これには段々申譯あれども、與次兵衞に難のくるを存じ、人殺しはこの與左衞門。この腰の物に付ては段々申譯あり、一ト先づ人殺しをこの與左衞門になされ、代官所へ引かれいと、コレ御覽じませ、我れと我が願うて、町中よつてこの通

り。

ト肌を脱ぐ。

與兵　コノお姿は。

與左　小手を緩めし羽がひ締め、これで直ぐにお侍さま、代官所へお引なされて下さりませ。

數馬　すりや與左衞門には、先達より死骸の元に落ちありし刀の云譯濟むまで、人殺と覺悟極められたか。

與左　尤もこの腰の物、手代權八めに浮瀬にて遣はしたれば、勘當の悴が腰の物でもなし、渡海の繪圖面失うたも權八めが怪しい、彼奴を捕へ御詮議濟むまで人殺し、權八め、砂利の上で面縛させにやアなりませぬ。サア早くお引きなされて下されませ。

彦助　いいわ、聞屆けた。與次兵衞と手代の權八尋出し、おのれと三人吟味の上、人殺しは與次兵衞。その時吠え面かわくな。引つ立てる。奴ども、與左衞門を引け。

與左　人殺しとて與左衞門、〇〇〇〇〇〇今宵渡海の繪圖面、受取らんとて罷り越した數馬どのへ申譯立ちませぬ。繪圖面詮議の濟まぬうちは、安々とはお侍には渡されまい。

彦助　ソリヤ、其方が得手勝手、與左衞門を引けば自づと與次兵衞め引出して來る。天の網遁れはない。

數馬　その腰の物權八が主なれば、今宵中に詮議しだし、人殺しの惡名は、數馬が與次兵衞にも與左衞門にも負はせぬわ。

彦助　それが今夜の事にゆく事か。我れと我が手に引けと云ふ與左衞門、今夜の人殺し、代官所へ引く。

數馬　さうはならぬ。身が屋敷へ引いて渡海の繪圖面の詮議。

彦助　イヤサ、代官所へ行く。

數馬　罷りならぬ。

彦助　イヤ、引く。

數馬　イヤ、ならぬは。

ト刀に手をかける。與左衞門、制し。

與左　モシ、今宵お約束の異國渡海の繪圖面、お渡しは〇〇なれど悴が不屆き失うた。怪しいは權八め。何れあいつを尋ね出し、渡海の繪圖面をも取戻して差上げませう。マアこの儘代官所へ、數馬さま、やらしやつて下さりませ。

數馬　モシ又渡海の繪圖面、草を分けて詮議しても出ぬ時には、腹切つて相果てんと覺悟いたした。何故なれば渡海

の繪圖面紛失は輕からぬ天下に拘はること、一旦殿へ差上げようと申上げ、繪圖面は失ひましたと、數馬、年にも似合はぬ不埒なことが申上らるゝものか。嫌やとも腹を、今日晝より覺悟極はめて居る。

與左 アノ晝程より、覺悟極はめて居る。數馬どのも腹召さるゝか。

數馬 覺悟は。

與左 互ひに。

數馬 極はめて居る。

ト思ひ入れして、

與兵 彼の承はり及んだ繪圖面の事では、數馬さまお腹と覺悟のごかんしよう、與左衛門さまと云ひ、數馬さまと云ひ、ハテ思ふに任せぬことどもでござりまする。

彥助 幾ら云つても人殺は與左衛門にして代官所へ引く。

數馬 この方にも繪圖面のかゝり合ひあれば、身も一緒に代官所へ。

彥助 アノその元も。

數馬 與左衛門、身に凶事あつては掛り合ひの詮議も濟ず、依つて代官所まで。

彥助 連だちませう。人殺しめを引つ立てろ。

奴 立てやい。

與左 身に引受けて、たつた今代官所へ行きます。與兵衛どの。跡ではその盜人め、こなた頼みます。助けてやつて下され、頼みますぞや。

與兵 お氣遣ひなされますな。お前のお身に人殺しの難、おつ付け晴れませう。今仰やれた桝のうちの鼠のため、ナ、ちつとのうち御窮命なされませ。

彥助 人殺しめを引立てろ。

奴 立てヤイ。

彥助 イザ、お侍、御一緒に。

數馬 先づござりませ。

ト三重になり、與左衛門を引立て、彥助、數馬、奴二人、向うへ入る。與兵衛、殘る。佐渡市は倒れて居る。奥より、ばた〳〵と都、吾妻、お菊、かけ出で。

吾妻 始終の樣子は聞きました。氣の毒なは與左衛門さま。

きく 父さんも腹切らうと覺悟さんしたは、お二人のお心根が思ひやられて悲しいわいな。

都 マア〳〵何んであらうと、與次兵衛さんを。

吾妻 ソレ〳〵早う。

ト長持を明ける。與次兵衛、かけ出て花道の方へ走り

行く。

與兵　コレ〱、何所へ行くのだ。

與次　親父はモウ往なれたか、この惡るい、往なれるなら一緒にいなうに。アレ〱今日咲いた藤の花。

ト藤の花を取つて、

其方は藤屋のア、詰らぬ形ぢやの。縛られて行く、縛られて行くのか。腹を切る、腹を切つたら痛からう。アレ氣の短い、行くなら、おれも連て行て給もいのう。

都　常の顏色でもなし、親御さんの身にいりわけ、長持のうちで始終を聞いて氣が上り。

與兵　氣が違つたか。

吾き　エ、エ、。

吾妻きく　どうでも氣が違つた。

吾妻　氣の毒や、與次兵衞さん。本性になつて下さんせいなア。

きく　お前が心が亂れて、わたしや何うせう、何うせうぞいなア。

與次　ばア、この子は泣くか、モウ夜が明けたか。歸るぞ歸るぞ、誰も留るな。サア歸る。

都　コレ待たしやんせ。

ト留るを振退け、藤の花をかたげ、花道の角にて、

與次　何誰もさばエ。

トかけて向うへ入る。

與兵　コレ、二人ともに追つかけた。

吾妻　合點でござんす。與次兵衞さんいなア。

きく　與次兵衞さんいなア。

トおつかけて入る。

都　お前は跡から權八を。

與兵　尋ね出して。さうだ。

ト行かうとする。佐渡市、起て支へる。立身にて、佐渡市を番小屋へぶち込む。都、戸をしやんと閉て、

都　跡構はずとござんせ

與兵　合點だ。

ト尻をからげる。

幕

いゝ、ごん〱にて直ぐに幕を引返す、道行きの道具よろしく。向うより、彦助、大小かひ〱しく腕まくり、頬被りにて、薄月夕を思ひ入れして出て來る。跡より權八、旅の形にて、出で。

權八　それへござるは彥助さまではないか。
彥助　コリヤ、手代の權八か。
權八　ハイ、左樣でござりまする。御覽じませ。手代の權八も常の風とは替つて、半合羽の旅用意。これから直ぐに江戶へ行く工面。お前にお目にかゝり、路銀の金をおねだり申さうと存じまして、お跡を慕うて參りました。
彥助　馬鹿な事を。今夜思はず三百兩棒に振つた男だ。路銀の金があるものか。
權八　お前、兼々のお望み。高麗征伐渡海の繪圖面。これでも金は出さつしやりませぬか。
ト繪圖を出す。
彥助　ソリヤ、異國退治の渡海の繪圖面。
權八　欲しうござりませうの。
彥助　欲しくなくつて、今大領公には博多の津まで御出船諸大名望みをかけるその繪圖面。明朝金子を遣はさう。身に渡せサ。
權八　イエ〳〵、コリヤア金と引替に致しませう。
彥助　そんなら斯うしてくれまいか。どうで今夜、夜も更ければ、身と一緒に旅宿へ參れ。次手ながら吾妻を引つ擔ぐ加勢をしてくれろ。

權八　吾妻は廓を。
彥助　拔けて出た。
權八　與次兵衞のノラ松とか。
彥助　與次兵衞が氣がふれたを、跡を慕うて出たとのこと。先へ廻つてこの道筋、引つ擔いで行くのだわ。
權八　與次兵衞は氣がふれたか。吾妻めは何でもなく引つ擔いで、お供いたしませう。
ト向うにて、
數馬　與次兵衞やイ。
ト呼ぶ。彥助、向うを見て、
彥助　アノ聲は數馬が聲。コリヤあいつをばらしてしまふが好いわえ。
數馬　與次兵衞ヤイ。
彥助　權八來い。
ト彥助、權八、奧へ入る。向うより、數馬、提灯にて出で。
數馬　與次兵衞ヤイ。吾妻もお菊もどこをせうとに尋ねて居るか。與次兵衞には巡り合ひ、我が家へ連歸り、養生の加へてやらにやならぬ。與次兵衞ヤイ。
トこれより、淨瑠璃の口一寸あつて。

與次兵衛ヤイ〳〵。

ト奥へ入る。淨瑠璃になる。

〽文句あつて、與次兵衛藤の花かたげ出で、振りあつて

トゞころりと伏して倒れ居る。

吾妻
きく　與次兵衛さんいのう。

二人　與次兵衛さん。

〽淨瑠璃あつて、戀の習ひかや。

きく　エヽ危ない。吾妻さん、氣を揉んで、お前、癪起して下さんすなエ。

吾妻　わたしよりお菊さん。お前、惱んで下さんすな。

きく　與次兵衛さんへのう。

吾妻　與次兵衛さん。

ト舞臺へ來る。

きく　ヤヽヽ、爰に居さんした。

吾妻　申し、與次兵衛さん。吾妻ぢやわいな。

與次　ヤ、吾妻ぢや。エヽ嘘ばつかり二人とも知らぬ人ぢや、知らぬ〳〵。

吾妻　エヽ、お前は、この吾妻が顔さへ見忘れさんしたかいなア。

〽文句あつて、一緒に早うと手を取れば。

與次　アヽ吾妻と聞けば懐かしい。

吾妻　何んとエ。

〽文句あつて、腹に泣くばかりかや。

きく　お道理でござんす。

吾妻　尤もでござんす。

二人　どうぞ本性になつて下さんせいなア。

與次　盆と正月と一時に來た。サア來た〳〵、萬歳が來た。萬歳ぢや〳〵。

〽文句あつて、うつゝなや。

ト留まる。

吾妻　エヽそウずつと正氣になつて下さんせ。

きく　お心付かいでも、連ましてな、吾妻さん。

吾妻　さうでござんす。

二人　サア、ござんせ。

〽文句あつて、又狂ひ行く村雀。

ト彦助、出で。

彦助　氣違ひ　動きやアがるな。

二人　ヤア、彦助か。

彦助　氣違ひめには頓着ない。吾妻來い。

〽痴話も口説も愛しさの、殿御思ふは命にて、嫌やでな

い仲、色の仲、花紫の澤むらや、はしかれおとさらさら〳〵、あなたへ靡き、こなたへなびき、くるりくるくるりくる〳〵と丸にいの字の〇〇どし、今を盛りの戀の山、〇〇も色を染ぬらん。

ト與次兵衛、藤の花かたげ向うへ入る。彦助、二人を引付る。數馬、出で、そつと投退け。

吾妻　數馬さまか。

きく　父さん。

數馬　與次兵衛が跡、早う。

きく　心得ました。

二人　與次兵衛さんいなア。與次兵衛さんいのう。

ト二人、向うへ入る。權八、出で、數馬、後ろより

權八　數馬、動くな。

ト立廻りして、權八を投げる拍子に、渡海の繪圖を落す。數馬、取て。

數馬　これこそ異國へ渡海の繪圖面。

彥助　それ受取れ。

數馬　動くな。

トこれより、權八、彥助を斬殺し、二人よろめくを。

渡海の繪圖面手に入れば、人殺しもこの權八。二人ともに引立て、與左衛門の身の明り。さうだ。

先づ今日はこれ切り。

猿若萬代厦（終り）

高尾宮本地開帳

三立目廓の場（繪草紙より）

高尾宮本地開帳

三立目

嶋原桔梗屋の場
同奥座敷の場

役名――足利大江之助鬼貫。力士荒浪梶右衛門。奴虎助。仲居お時。三浦屋亭主德右衛門。豆腐賣與五郎 實ハ亘利三平。藝者歌野 實ハ渡邊民部妻秋篠。花賣お松。力士雷鶴之助。足利頼兼。傾城三浦屋高尾。下總の累娘お菊。庄内數馬。浮田左金吾。

本舞臺。三間の間、一面の伊豫簾掛け、軒に丸行燈五ツ、是に「桔梗屋」としるし、爰に女郎錦、同深山、相撲取り×、同八ツ山、赤前垂れの仲居お時、他一人、幇間彌七、同◎、荒浪梶右衛門、羽織衣裳大小にて、上の方の床几に腰を掛けて居る。煙草盆、杯、銚子、肴鉢、硯箱、取散し、飾と八ツ山、拳を打つて居る。梶右衛門行司の見得。踊りの三味線にて幕明く。

ト花道より足利大江之介鬼貫、角鬢、羽織、衣裳、深編笠にて出る。奴虎助ついて出る。花道にて、

鬼貫　奴、參れ。
虎助　ネイ。
鬼貫　コリヤ、あれが兄頼兼の參る桔梗屋と云ふのか。
虎助　左樣でござります。
鬼貫　いかさま。賑かな店先の樣子。見れば荒浪を始め、抱への角力取どもばかり、頼兼の見えぬぞ幸ひ。申し合せる仔細もあれば、直ぐにあれへ參らうかえ。
虎助　左樣なさるが宜しうござりまする。
鬼貫　いかにも參れ。
虎助　ネイ。

ト兩人舞臺へ來り、

荒浪　ヤア、あなたは鬼貫さま。
×八山　お入りあられましたか。
荒浪　先づ〳〵あれへ。

ト鬼貫、上の方へ行き、床几へ腰を掛け、

お時　モシ、梶右衞門さま。あのお方も賴兼さまのお内の方かいなア。
荒浪　御内どころか差詰めの弟君、足利大江之介鬼貫さまだわ。
皆々　エヽ。
トびつくり、
荒浪　コレ〳〵、仲居ども。大切のお客人、隨分〳〵大切に致せ。
皆々　ハイ〳〵、畏まりました。
荒浪　イヤモシ、鬼貫さま。申し上げたき仔細もござりますれば、マア〳〵奧で、一つ召し上がれませう。
鬼貫　それがよからう。然らば左樣致さうか。
お時　私も御一緒に、奧で一浮き浮き立ちませう。
皆々　サア、お出でなされませ。
ト騷ぎになり、皆々下座へはいる。この騷ぎを借りて、花道より、女藝者歌野、後より三浦屋德右衞門、羽織袴、女郎屋の亭主の形にて出で來る。後より藝者の供三味線箱を擔いで出る。遙か後より豆腐賣與五郎實ハ亘利三平、豆腐の荷を擔いで出る。花道にて、
與五　申し〳〵、三浦屋の旦那。大分お忙がしさうでござりまするな。
德右　是は豆腐屋の與五郎どの。この頃はあの賴兼大盡のお入りで、寐た間も羽織袴の穿き通し、忙がしうてなりませぬ。
歌野　ほんに高尾さんの親方さんとて、德右衞門さまは、賴兼公のお氣に入り、わたしもどうぞお目見得をしたうて願うて居たに、思ひ懸けない今日のお使ひ。この上ながら德右衞門さま、お賴み申しまするぞえ。
德右　イヤモシ、曲輪始まつて無い大盡さまにお氣に入るとは、この德右衞門が仕合せでござるて。
歌野　そりやモウ、結構な事でござりまする。
德右　時に歌野坊は、今日は是非々々お目見得をさせる氣で、呼寄せたからおれと一所に、桔梗屋まで來るがよい。
與五　わたしも御一緒に參りませう。
歌野　そんなら、德右衞門さま。
德右　サア、ござりませう。
トすがゝきにて、皆々舞臺へ來て、
與五　モシ、德右衞門さま。賴兼公はこの間から、直に居續けでござりまするか。

三立目廓の場（繪草紙より）

德右　さればさ。こちの太夫に殊の外御執心で、この曲輪へ入らしやればこそ、三浦屋の德右衞門づれがお目見得も叶ふと思へば、粗略な心は微塵も無い。それ故お出でなさるゝがよいかして、久々の御逗留でござる。

歌野　ほんにアノやうなお方に、思はれなさんす高尾さんは、女子冥利の叶うたと言はうか、ほんに高尾大明神さまぢやわいな。

德右　あれ程お心を盡される賴兼公、いかな張りの強い女郎でも、是非靡かにやアならぬ所を、靡かぬアノ高尾。この德右衞門がいろ〳〵口說いて見ても、合點せぬは女郎の意氣地。親方甲斐にもならぬと云ふは苦界、餘りの事で氣の毒でなりませぬ。

ト與五郎思ひ入れあつて、

與五　聞けば聞くほど情けない賴兼公のお身持ち。高尾ばかりが世の中に女ではあるまいし、お心せまい、大守のお身で左程まで、お心を痛め給ふと云ふは、天魔の魅入れか、お家の浮沈か、ハテ、是非も無き事ぢやなア。

ト思ひ入れ、

德右　與五郎どのへ。こなたはいかう賴兼さまの事を苦勞にさつしやるの。

與五　ハ、、、、わしらがやうな者が要らぬ事ながら、さぞ御殿の衆は、今の樣に言うて晝夜心を痛めるでござりませう。

歌野　高尾さんは、外に深いお方があつて、賴兼さまを嫌はしやんす。賴兼さまは又外に、女子はお嫌ひで高尾さんの事ばつかり。儘になるものなら、わたしらは高尾さんの代りになつて、賴兼さまのお側離れず居たならば、ほんに命も要らぬもの。儘になるは嫌なら思ふはならずぢやわいなア。

與五　歌野さん。お前は賴兼さまに氣があるね。

歌野　エ。

ト思ひ入れ、

與五　轉ぶ氣だね。

歌野　知らぬわいなア。

德右　歌野坊と言ひ、與五郎どのと言ひ、どうでもこりやア賴兼さまに。

兩人　エ。

德右　お目見得をさせませう。

ト唄になり、德右衞門心を殘して下座へはいる。歌野もはいる。與五郎殘りて、

與五　商ひがてら、一日づつ日を暮らすも、頼兼公御様子が聞きたいばつかり、御歸館なければお家の大事、御不興受けしこの三平、この程潜かにお供せし、御臺玉園さま。

ト思ひ入れ、

唯ならぬ御身と云ひ、せめてはどうぞと、及ばずながらお家の大事、御諫言申し上ぐる傳手を求めて、さま〴〵の心の計略。ハテ、何としたものであらうなア。去りながら一通りでは、われ〳〵が御前へ出られまい。切めて他所ながらお身の上を、守護するが御恩報じ、さうぢや。

ト豆腐の荷を擔ぎ、奥へはいる。鬼貫、虎助、梶右衞門、出であたりを伺ひ、思ひ入れあつて、

荒浪　鬼貫さま。

鬼貫　コリヤ。

荒浪　シテ、密事の御用はな。

鬼貫　豫て仁木彈正左衞門と申し合せ、兄頼兼を追ひ失ひ、鬼貫大守にならん結構、將軍義政公御病氣につき、兄頼兼を將軍の御名代たるべしと、管領細川山名よりの內意。山名どのは豫てわれ〳〵と昵懇、頼兼が身持ち放埒を言ひたて、罪に取つて落す思案。頼兼、館へ歸るべき所存はあるまいな。

荒浪　そりやア氣遣ひはござりませぬ。高尾が驕かぬその內は、いつまでも居續けするとの、上り詰めた頼兼公。

虎助　ひよつと又、驕かぬ高尾に愛想が盡きて、思ひ切つて御歸館あらば。

鬼貫　それこそは一大事。細川政元の差圖を持つて、家中の者より頼兼を迎ひの手筈。萬一高尾を思ひ切り、歸館するやうにあらば、言ひつけた通り歸りを待ち受け。

虎助　人知れずたつた一討ち。

鬼貫　コリヤ。

ト思ひ入れ、向うにて、

お松　秋毎に野邊の錦を我君に、移して薫る花競べ、千草をお召しなさんせいなア。

ト賑かなる出の唄になり、花道より花賣お松、やつし、袖無し羽織、紫の頰冠りにて、花賣の荷を擔ぎ出で來り、直ぐに本舞臺へ來り、

是は〳〵見た處が、どなたさまも御全盛なお客さま方、花の御用がござりますなら、お召しなされて下さりませ。

虎助　こいつは美しい者だわえ。
荒浪　おれが望みは草花より、物言ふ花賣り、そもじを。
お松　エヽ、モウ、何をなされますることいなア。
ト振放す拍子に、お松、懷ろより文を落す。梶右衞門取り上げ、
荒浪　高尾さま參る、浮田より。
お松　それを。
ト引つたくつて逃げようとする。梶右衞門捉へて、
荒浪　動くな。その文を持つて失せるからは、高尾と左金吾めとの仲を、さてはおのれが。
皆々　手引するな。
お松　サア、それは。
鬼貫　その女めを高尾に合せて、間夫狂ひの恥面かかせ、左金吾と緣を切らせるがよい。梶右衞門。その女めを引つ立てい。
荒浪　畏まつてござりまする。
鬼貫　この鬼貫は一間を隔て、暫らく樣子を窺ふ。皆、拔かるな。
皆々　先づお入りなされませう。
ト唄になり、鬼貫奧へはいる。

荒浪　この女めは、賴兼公のお座敷へそびいて行く。サア女め。
皆々　失しやアがれエヽ。
ト向う幕の内にて、
雷　待つた。
皆々　待てとは。
雷　いかづち鶴之介が留めた。いづれも方、マア〳〵、待つて貰はう。
ト賑かなる男伊達の鳴物になり、向うより雷鶴之介、前髪角力取の拵へにて出で來り、舞臺へ來てお松を圍ひ、しやんと見得。
雷　どこへ。
荒浪　待て〳〵。誰だと思うたら、こりやア雷鶴之介だな。なぜわれ〳〵が邪魔を。
皆々　するのだエヽ。
雷　なぜでも。
皆々　どうしたと。
雷　來て見れば、賴兼公の急御用で、桂のお館へ一走り、歸り掛つて來て見れば、味な出入りの縺れと見えたが、梶右衞門どの、こりやアマア、どう云ふ諸分でござんすな。

荒浪　知らずば言つて聞かせべい。今この女が取落した文の宛名。
八山　高尾さま參る、浮田よりと書いてあるからは、左金吾めを手引きの女に違ひはない。
×　賴兼公の御前へ引摺つて、間夫狂ひの詮議をする。
荒浪　邪魔だてすりやア、一番われ爲めになるまい。きりきりそこを退くまいか。
雷　ハヽヽヽヽ、なんの事と思つたら久しいものさ。野暮な理窟を云ふ事もない。この出入りはわしに下さいませ。
荒浪　いんにや、ならぬ。
雷　ハテ、さう言はずと。
皆々　ならねいよ。
お松　モシ、どなたかは存じませぬが、よい所へ來て下さんした。どうぞこの身を。
雷　ハテ、ようごんす〳〵。わしが來るからは如才はない。鶴之介でごんすわな。わしでごんすわな。
×　是やい〳〵、さう落着かずと、その女を渡しやがれエヽ。
雷　なんの事だ。かざつふいた鶴之介が、コウ言ひ掛つては金輪奈落、渡す事はならない。この出入りはどこまでもおれが買つた。
皆々　イヽヤ、ならないよ。
ト皆々大きな聲をする。雷すこし氣味の惡き思ひ入れ、うち〳〵する。
お松　モシ〳〵、どうぞお賴み申しますわいなア。
雷　ハテ、ようごんすわな。わしらが呑み込んで居るから、落着いて居なさい〳〵。
ト怖々强い事を言ふこなし。
虎助　ヤイ〳〵、この虎助が渡すまいと言つたら、どうしやアがる。
ト雷そつと皆々へ見えぬやうに、虎助が袖を引つ張ると、虎助合點の行かぬ思ひ入れ。雷無性に捨ぜりふにて力みながら、虎助を花道へ連れて來たり、そつと紙入れより二朱銀を出して、
雷　なんの事だ、力むことはないわえ。ナ、コレ、野暮ちやアあるまい。
トそつと言ひながら力んで見せる。虎助呑み込み、
虎助　なんぼさう言つても、おれがアノ女は渡さない。
ト言ひながら雷に掛る。見事に虎助を投げる。

雷　どうだと言つても受取つて見ないか。一寸締所がこの位なものだ。誰だと思ふ、雷だよ〳〵。

荒浪　エヽ、小ぢれつたい奴等だわえ。いつその事に某が引つ立てくれべい。

ト　お松に掛る。

雷　ハテ、ようごんすわいな。高が女だ。梶右衞門さま。わしが胸にあるわいな。コレ、女中。爰に構はずと、早く奥へござりませ。

お松　參つても宜うござんすかえ。

荒浪　ならねい〳〵。

ト　留めようとする、雷隔て、

雷　早くござりませ。

ト　お松、思ひ入れあつて下座へはいる。皆々このうち態と傍を向いて見ぬ振にて、よい加減の時分、

三人　今の女めは、どこへ行つた〳〵。

荒浪　置きアがれ。わいらがぶる〳〵して居る内、大事の玉をぐわらりつん逃がした。それと云ふのもこの雷めが。

雷　いかにもわしが逃がした。そつちに言ひ分があるなら、こつちにも言ひ分がある。梶右衞門さま。ちよつと爰へ出て貰ひませう。

荒浪　面白い。

ト　舞臺の眞ン中へ出る。このうち白囃子。

雷　大儀ながら、下に居て貰ひませう。

ト　荒浪思ひ入れあつて下に居る。

荒浪　相撲取の鶴之介。呼び出すからは、定めて言ひ分があらう。この梶右衞門は、わいらが手際にやアいかない。

ト　傍の銚子を取つてぐつと挫き、

マア、一寸した所が、この位なものだ。

ト　挫けた銚子を雷が前へ出す。

雷　ハテ、きついものだ。お前は強い。イヤ呆れたものだ。又その上に劍術柔術に達してござりやア、鬼に鐵の棒だ。曲輪の理窟ひくつは力ばかりぢやアいかないものさ。

荒浪　そのいかねい所をおれがやるのさ。

雷　そりやア、どうして。

荒浪　斯うして。

ト　力をかけ、拔かうとする。

雷　所を斯う。

トしつかと締め、

嘘だ、堪忍しねい。

トついと下座へはいる。梶右衛門呆氣に取られ、跡見送り、

荒浪　置きやアがれ。あいつに一杯喰された。それにしても今の女めを。

ト思ひ入れして、

みんな、來い。

三人　マア、ござりませ。

ト皆々奥へはいる。

向う張物、結構なる襖、床、違ひ棚、眞ン中開けてあり、一體揚屋の掛り。この鳴物にて足利頼兼、羽織衣裳にて、上の方に煙草粉を呑んで居る。眞ン中に高尾太夫、裲襠、衣裳、扱帯、傾城の形にて牛に横乘して居る。左右に禿二人、下の方に累の娘お菊、木綿模様のやつし、ねりの脚絆、田舍娘にてこの牛の手綱を引いて居る。この見得にて舞臺の眞ン中へせり上る。鳴物打ち上げる。

頼兼　紅花の春の朝、紅葉の秋の夕べ、路山の雪、煙りも消えなんとして別れを惜しむ。

高尾　實にや歌にも、世の中を厭ふまでこそ難からめ、假の宿りを惜しむ君かな。

お菊　假の契りの一夜さに、心ともなと諫めしは、江口の里の宿りの情け。

頼兼　實に都のわけ里と、同じ流れに澄む月も、嘘と誠の照り曇り。

高尾　水煙眞如の波立つて、窓の煙りの雲となり、雨と降りたる上の空。

お菊　遙々遠き東より尋ね扇のつまいとを、こがれ〳〵し舟ならで、浮世を牛の綱手繩。

頼兼　賤が伏家も樂みは、夕顔棚の下蔭に。

高尾　隔てぬ中の朝ぎぬを。

お菊　いつか染木の錦とも。

頼兼　そのみちのくの今日までも。

高尾　忘れぬお方。

お菊　戀しい夫。

頼兼　慕ふ戀路の。

高尾　情けも。

お菊　誠も。

賴兼　爰に留めし。
高尾　曲輪の景色。
お菊　どうも言はれぬ。
三人　眺めぢやなア。
　ト納まる。奥より三浦屋德右衛門、女郎△、○仲居お時、外一人、幇間⊠、◎、荒浪梶右衛門、出て來て、
皆々　ヤンヤ〳〵。太夫さま。きついものでござりますござります〳〵。
德右　江口の君の白象を、眞つ黑でたちの牛にして。
彌七　殿さまのあのお姿、裏見西行と洒落れませうか。
幇⊙　是がほんの牛に引かれて、全盛參りでござりまする。
皆々　ハヽヽヽ。
　ト笑ふ。
高尾　ほんにあられもない、わたしが形。サア、モウ、卸ろして下さんせいなア。
お菊　アイ〳〵、お危なうござりますぞえ。
　ト抱き下ろす。
高尾　いかい世話でござんしたわいなア。
　トお菊、牛を下の方へ引いて來り、高尾太夫、上のかた賴兼が側へ、身を背けて坐る。
德右　サア〳〵、是からお酒にしよう〳〵。
お時　サア〳〵、お銚子を持つて參りました。
　ト銚子を出す。お時、大杯を取つて來る。錦、深山、銚子杯を賴兼が側へ持つて來る。
錦　サア、お上りなされませ。
　ト賴兼杯を取上げる。お時注ぐ。
賴兼　こりや、德右衛門。
德右　ハツ。
賴兼　この賴兼、高尾が容色を慕うて、この曲輪へ入り込み、その方が所へ參つて、館へも歸らず長の居つゞけ、段々の心遣ひ過分々々。
德右　これは冥加に餘りました、有り難いお詞を戴きまする。何がなと存じましても、私さしたる御用も又、御馳走も申し上げませぬ。定めてお慰みも薄うござりませう。
荒浪　イヤ、德右衛門。賴兼公への御馳走は、何よりかより高尾の君、色よい返事がなとお心を盡されるに、去りとは素氣ない女郎、是と云ふも浮田と云ふ蟲がくつついて居る故。

頼兼　コリヤ、ヤイ、梶右衛門。そりや何を申すのぢや。なんとあらうとも、高尾が心に逆ふ事を申すは、この頼兼に逆らふ事も同然ぢやぞ。
荒浪　ヘイ。
頼兼　重ねて左樣な事を申すな。のう高尾、さうではないか。
高尾　アイ、どうなりとお心任せがよいわいな。それはさうと、初めて逢うた女中さん。どうやら都珍らしいさうでござんす。今日はついした遊び事で、先つきから私が介抱。忝なうござんすぞえ。
お菊　アイ、不思議な御縁で、此のやうな結構なお座敷へ參りまして、有難いお詞戴きまするわいなア。
頼兼　コリヤ、德右衛門。そちを始め皆の者も、高尾を牛に乘せて來た樣子、合點が行くまい。
德右　最前より伺ひ申さうと存じましたが、御機嫌を計り居りました。高尾太夫を牛に乘せて、庭中を御遊興は、どうも合點が參りませぬ。
頼兼　さうであらう〳〵。先つき奥二階で壬生海道の、中田圃を見て居たればこの牛が通つた。高尾が言ふには、牛にも人が乘らるゝものかと聞いた故、直ぐにその牛を呼び寄せて、乘せて見たこの趣向ぢや。高尾が云ふ事なら、なんなりとする心ぢやて。
德右　成程、それで分りました。シテ、この女中はいづ方から。
お菊　アイ、わたしは、あの牛を引いて參りましたわいなア。
高尾　お前はマア、どこのお方で、在所はどこでござんすえ。
お菊　わたしが在所は、遙か東の下總の國、羽生村と申す所から參りました。お恥かしい事ながら、わたしが母さんは累と云うて、いつぞや世上に噂のあつた、淺ましい心のお人、定めて噂さにお聞きなされませう。母さんの恥を言ふも、矢つ張り懺悔に罪を滅すとやらでござりますわいなア。
頼兼　ハテ、珍らしい女が話。スリヤ、祐天の念佛の功力にて、成佛せしと噂に聞きし、その累が娘よなア。シテ、そちが名は何と申すぞ。
お菊　アイ、菊と申しまする。
荒浪　ハテ、不思議な緣のある人に、逢ひまするものでござりまする。この都へ遙々の道中、なんぞ樣子があつて

上られたか。どうぢや〳〵。
お菊　成程、都へ上りましたは、人の行衞を尋ねに參りました。
荒浪　人の行衞を尋ねるとは、ハア、聞えた。こりやア、色事の筋だな。但し親か、夫か、兄弟か。
お菊　サア、恥かしながら、わたしが夫は小さい時から許嫁、添うて間も無う奉公稼ぎに都方へ上られました。その行衞を慕うて參りましたわいなア。
皆々　そりやアマア、心當りでもあつてかえ。
高尾　由緣かゝりでもござんすかえ。
お菊　この櫛笥の里に豆腐屋戸平と云うて、わたしが夫の眞實の兄御がござんす。それを知邊に今朝早う、櫛笥の里へ尋ねて參り。
帮◎　櫛笥の里の豆腐屋なら、のう、彌七。
彌七　ソレ〳〵、與五郎が事であらう。
お菊　ほんに能う御存じでござりまするな。その與五郎どのに早う逢ひたさ、懷かしさ。小舅の戸平さんと一所に、與五郎どのを先へ尋ねて參りまする所を、殿さまの仰せで、この牛を借せと仰つしやる故、是まで參りましたわいなア。

高尾　在所方には珍らしい、都にも及ばぬ美しい女中さん。殊に夫の後を追うて遙々とござんしたとは、ほんに嬉しいお心ざし。定めてその與五郎さんとやらも嬉しう思はんせう。誰しも夫の戀しいは同じ事、能うマア、尋ねてござんしたなア。
頼兼　あの女子が夫を思うも、高尾が深い男を思ふも、又頼兼がそなたを慕ふも同じ心、一つ思ひ、その心底を引き競べ、一度なりと我心に、從うて吳れる氣はないか。
ト高尾が顏を見る。高尾顏を背けて思ひ入れ。
高尾。太夫。是ほどまでに心を盡すを、ちつとは思うてたもらぬか。
高尾　一ト夜流れの君傾城、賤しいこの身を大守のお身で、それ程までに思召して下さるは、有難いとも冥加なとも、苦界する身の仕合せと、朝夕思うて居りますわいなア。
頼兼　その心なら、なぜに又誠の情けは懸けぬのぢや。
高尾　嫌ぢやわいなア。
頼兼　なんと。
ト思ひ入れ。

高尾　どう云ふ事やらお前さんが、嫌で／＼ならぬわいなア。
頼兼　ムウ。
　トせいたる思ひ入れ。
お時　モシ、皆さん。どうやらお座敷が沈んで來たぞえ。わつさりとしたお肴で、御酒にしようではないかいなア。
荒浪　それが宜からう／＼。
德右　幸ひ奥に歌野が來て居る。なんぞ一段語らせたら、どうであらうな。
女雨　そりや、面白からうわいなア。
荒浪　早う呼べ／＼。
皆々　歌野さん／＼／＼。
　ト奥にて、
歌野　アイ／＼。
皆々　ちやつとお出でいなア。
歌野　アイ／＼。
　ト奥より、藝者歌野、最前の形りにて出て來る。
德右　頼兼大盡さまへ申し上げまする。是へ出ましたのは歌野と申しまして、この島原の三味線の上手、お目見得を願ひ上げまする。
頼兼　成程、聞き及んだ歌野とやら。近う／＼。
德右　サア／＼、御前へ／＼。
歌野　アイ／＼。
　ト頼兼が前へ手を突き、
ハイ、不調法者でござりまする。疾からお目見得を願ふて居りましたに、有難いお言葉を戴きまするわいなア。
荒浪　サア、お座敷の浮き立つやうに、めりかけい／＼／＼。
歌野　ハイ／＼。
　ト德右衛門三味線を持つて來る。歌野調子を合せる。
德右　お時は銚子を直しながら、その女中を奥へ連れて行つて、酒でも進ぜてくれ。
お時　アイ／＼。サア、女中さん。奥へお出でなさんせ。
お菊　左樣なら、皆さん。
德右　ゆるりと休息して行かつしやりませ。
お時　サア、ござんせ。
　ト歌野面白きめりやすを唄ふ。お菊を連れ、お時、下座へはいる。一トくさりめりやす切れると、合の手になり、奥より、花車お松出で來り。

お松　高尾さん。是にお出でなさんすかいなア。
お菊　ヲヽ、お松さんかいなア。
　トお松、高尾が側へ行かうとする。
荒浪　ヤイ〳〵、われは先刻の花魁だな。頼兼公の御入りだ。慮外者めが。殊にわれにやア詮議がある。次へ立ていゝ。
徳右　ハイ〳〵、畏まりました。
　ト相間☒、◎、立ち掛る。
高尾　モシ、よいわいなア。あの女中さんはわたしが所へ用があつて見えたのぢやわいなア。
荒浪　その用が氣に食はない。シテ、わりや何の用だ。
お松　サア、それはな。
高尾　あのお方がわたしへ用とは、ヲヽ、ソレ〳〵、この間頼ましやんした短册の事でござんせうな。
お松　成程、その短册の事でござります。どうぞお認めなされて下さりませい。
　ト言ひながら、そつと皆々へ見せぬやうに、以前の文を高尾へ渡す。
高尾　今短册を書いて上げやんす程に、待つて居て下さんせや。

お松　アイ〳〵。
高尾　染山さん。鳥渡その料紙を。
深山　アイ〳〵。
　ト結構な硯箱、短册を持つて出て、
頼兼　太夫が短册を書きやるなら、ドレ、墨を磨つてやりませう。
　ト頼兼、高尾が膝へもたれて墨を磨る。歌野まだ後の一くさりを唄ふ。このうち高尾歌を書く合方。
高尾　浪花潟短かき蘆の節の間も、逢はで此の世を過してよとや。
お松　短き蘆の節の間も。
高尾　逢はで此の世を過してよとや。ナ、心に浮んだ古歌の短册。是でようごんすかえ。
　ト出す。頼兼是を取つて、
頼兼　浪花潟短かき蘆の節の間も、逢はでこの世を過してよとや。ハテ、見事。筆の運びと墨つぎの見事さ。是こそ聞き及ぶ尊円流。この流儀を書く高尾太夫。
　トきつと思ひ入れあつて、
　ハテ、奥床しい手蹟ぢやなア。
高尾　殿さま。お恥かしうござんす。

ト歌野また唄の納まりを唄ふ。このうち、お松に短册を渡す。お松これを持つて奥へはいる。

皆々 ヤンヤ〳〵

ト向うより、庄内數馬、上下、衣裳、大小にて出る。後より足輕三人、千兩箱を三つ持つて出る。花道の中にて、數馬、頼兼を見て平伏して、

數馬 我君には是にお渡りなされまするか。この程より御歸館も無く、御容態も伺ひませぬ。先づは御機嫌の體を拜し、いかばかりか恐悦至極に存じ奉ります。

頼兼 珍らしや、庄内數馬。その方は館の用事殊に繁き身にて、何用あつてこの所へ罷り越した。

數馬 庄内數馬、參上仕りましたは君のお迎ひ。

頼兼 なんと。

數馬 この度、山名細川兩管領より御内意には、將軍義政公御病氣につき、足利頼兼公を以て武將の名代たるべしと、近日御沙汰あるべき旨。君この程より曲輪におはしまし、御歸館も遊ばされず、禁廷への聞え、何卒御歸館遊ばさるゝやう、偏へに願ひ奉りまする。

頼兼 たとへ管領の内意でも、禁廷へ聞えても、高尾が廓かぬその内は、いつまでも立ち歸らぬぞ。

荒浪 聞召されたか、數馬どの。我君をお歸し申さうと、歸すまいと、高尾太夫が心次第。各々方が雀の千聲より太夫が鶴の一聲が、諫言よりは君のお爲めさ。

頼兼 數馬、諫言聞かぬぞ。早々館へ立ち歸れ。

數馬 ハッ、お言葉を返しまするは恐れながら、庄内數馬、君のお迎にこそ參上致せ、御諫言は申し上げませぬ。

頼兼 ソレ、その迎に參つたが直ぐに諫言。

數馬 イヤ、左樣ではござりませぬ。御諫言申し上げぬその證據。○家來ども。用意の品を是へ。

足輕 ハッ。

ト三人の足輕、千兩箱を舞臺先きへ並べる。

皆々 是は。

數馬 傾城高尾が身の代金。

頼兼 なんと。

數馬 左程お心に叶ひし高尾、たとへ從ひませずとも、身請け遊ばしお館へ召し連れられ、その上はどこまでも口說き落してお寐間のお伽。庄内數馬がお迎に參りし心底、お聞き下されませうならば、ありがたう存じ奉りまする。

賴兼　出來した。是ばかりは數馬めが、心に叶ふ事を申した。コリヤ、德右衞門。聞く通りなれば、高尾は愈々身請け致すぞ。
德右　左樣ならば、太夫の身請けを。
賴兼　いかにも、高尾が身の代金はなんぼなりとも。ヲヽ、ソレ〳〵、幸ひ〳〵。あの牛の寐て居る目方くらゐ遣はさう。
德右　エヽ、左樣ならばあの牛の目方ほど下し置かれまするか。エヽ、有難うございまする。
　ト皆々膽を潰す。
皆々　是がほんの牛の寐た程、金を取ると云ふのだ。
高尾　そんなら、お心に任せぬこの高尾を。
賴兼　身請致して館へ伴ひ、賴兼が思ひの儘、心の紐を解かさにやアならぬ。
　ト高尾こなしあつて、すつと立つて行かうとする。賴兼裾を控へ、
　コリヤ、どこへ行く。
高尾　聞きたうもない身請けの沙汰。たとへ親方さんが得心しても、この曲輪を出る事は嫌でござんす。金で買はるゝ高尾ぢやと思はるゝも口惜しい。耳が汚れる。重ねて言うて下さんすな。
　ト賴兼を振切り、
　子供、來や。
禿　アイ〳〵。
　トついて高尾、奧へはいる。禿二人ついてはいる。賴兼むつとして刀おつ取り、後を追うて行かうとする。歌野袖を控へて、
歌野　御尤もでございます〳〵。さぞお腹が立ちませう。
　ト賴兼堪へ兼ねたる思ひ入れ。
　サヽヽヽ、お腹が立ちませうが、その御血相でお出で遊ばしては、是までお心を盡されましたも水の泡でござりますぞえ。
　ト賴兼思ひ直して苦笑ひをしながら、奧へ行かうとする。歌野なほ留めて、
　サヽ、御了簡のならぬ所をお免しなさるも一つの手段、百夜車も錦木でも千束になれば從ふたとひ。おん心長う遊ばしませい。
　ト賴兼思ひ入れあつて
賴兼　ムヽ、山□北園に入つて、玉を採るものは險岨を愁へず、我もうしとは思はねども、又も情ない言葉には、

よしない心が迷ふはやい。
歌野　御尤もでござりまする。そのお心をお慰め申すは、ほんに愁への玉箒、一つお上り遊ばしませい。
頼兼　いかさま、酒にしよう〳〵。
德右　サア〳〵、お銚子を持て〳〵。ソレ〳〵、なんぞお肴を申しつけて。
ト德右衞門、奥へはいる。皆々取寄つて、頼兼が前へ大杯を持つて來る。頼兼取上げ、一つ受けて、ぐつと干し。
頼兼　も一つ注げ〳〵。
荒浪　ハイ〳〵。
ト又受けて飲む。數馬思ひ入れあつて、
數馬　イヤ、御前、お心晴らしとは申しながら、其のやうに召上られましては。
荒浪　ハテ、大事ない。斯う云ふ處はお酒でなけにやアいかぬ。
數馬　ぢやと申して。
頼兼　數馬が留めれば、留める程、意地にも飲まねばならぬ。
ト重ねて飲み、醉ふたるこなし。

コリヤ、數馬。この杯はその方にくれるぞ。
ト大杯を投げ出す。
數馬　アノ、私に。
頼兼　サア〳〵、一杯注げ〳〵。
數馬　その儀は眞つ平。
ト困る思ひ入れ。
頼兼　ソレ見い。そちは下戸ぢやに依つて、強ひられるは迷惑ぢやないか。この頼兼は上戸ぢやに依つて、好きな酒を側に居つて、兎やかう申せば困る。ぢやに依つてその方にも、思入れ強ひて困らせにやアならぬ。サア〳〵一つ飲め〳〵。
ト言ひながら寢たるこなしにて、染山が膝を枕に寢る。
荒浪　サア〳〵、御意だ。一つ受け召されい〳〵。
數馬　御意に任せて、丁度受けましてござりまする。
ト頼兼寢たる思ひ入れ。
染山　御前には、お休み遊ばしましたわいなア。
數馬　ほんにお枕を差上げたいものぢやが。
荒浪　仲居ども。お枕〳〵。
ト歌野、下駄を取つて來て、

歌野　お枕を上げませう。
荒浪　ヤイ〳〵。いかに物を知らねいとて、下駄と枕と取違へるうつそり。なんの事だ。早く立たぬか。
歌野　下駄と枕との差別を存じませぬ私でもござりませぬ。我君のお枕には、この下駄が相應かと存じましたる故、取敢へませず持つて參りましたわいなア。
荒浪　何がなんと。
歌野　枕に造つたる木も、下駄に造る木も元は一體。枕に造れば貴人高位にお手にも觸れらる。下駄に造れば足に踏まるゝ。こりや、お側につき添ふ細工人の心次第。
　ト荒浪を尻目に掛けて言ふ。梶右衛門思ひ入れ。
不淨を拂ふ名木も、下駄に直せば泥にまぶれる。斯かる尊き御身にて、君傾城の色香に迷ひ、揚屋の座敷を御寢所とは輕々しき御振舞。エヽ、情けない御有様ぢやなア。
　ト思ひ入れ。頼兼起き返つて歌野をきつと見て、
頼兼　ヤア、要らざる藝子の身を以て、武家の政事に批判だて。身が座敷に叶はぬ。遠ざけい〳〵。
荒浪　御前の御意だ。きり〳〵立て。
　ト引き立つる。思ひ入れ。

歌野　イヤ、藝子でござんせぬぞ。舞子でござんせぬぞ。
頼兼　なんと。
　ト歌野こなしあつて、
歌野　要らざる女の私が、頼兼が前へ手をつき、お差出がましう思召しませうが、是までお目見得を申し上げず、お見知りなきを幸ひに、曲輪へ入込み、よそながらお宮仕へを致せよ、と夫の言ひつけ、是非なくも藝子仕立ての私は、渡邊民部早友が妻の秋篠と申しまするでござりまする。
頼兼　なんと。
歌野　晝夜曲輪の御遊興、御身のくつ折れ世の誹り、折を窺ひ御意見申し上げたいと、夫の指圖お用ひあつて、君傾城をお館へ、根引きの事は薩張と、思ひ切つて下さらば、私が身の面目と、有難う存じまする。
頼兼　默れ、秋篠。身の程知らぬ慮外の諫言。聞く耳持たぬ。早々立つて失せう。
歌野　お叱り受くるはこの身の覺悟。諫めて退く毛唐人は用ゆるに及ばず。お聞き入れござるまでは、憚りながら何處がどこまでも、お諫め申さにやアなりませぬ。
頼兼　言葉を返す慮外者。身が手に懸けて。

數馬　ト刀を取つて立廻り、數馬留めて、
モシ。○彼等如きにお構ひなくとも、御歸館の御用意あつて、然るべう存じ奉りまする。
ト頼兼思ひ入れあつて、
頼兼　諫言ぬかした奴等への面當て、是非高尾を身請けなし、館へ連れ歸る。梶右衛門、その用意致せ。
荒浪　畏まりました。
歌野　そりや又あんまり。
ト寄らうとする。梶右衛門隔てる。頼兼ついと奧へはいる。荒浪これについてはいる、歌野、數馬、跡見送り合方。
數馬　秋篠どの。
歌野　數馬どの。
數馬　是非もない。
兩人　お有樣ぢやなア。
ト思ひ入れ。
數馬　それに引き換へ、高知を貪ぼる梶右衛門、阿ねり諂らひ、色々と我君さまへ御放埒をお勸め申し、若しも高尾がお館へお連れなされたその時は、悔んで歸らぬお家の大事。

歌野　奧へ參つて今一應。さうぢや。
ト行かうとする。
數馬　待つた。御不興受けし貴殿、却つてお氣に逆らふも同じ事。この上は高尾どのを、思ひ切らせる仕樣もあらう。
歌野　成程、高尾に逢うて心底たゞし、是非とも身受けを延ばすが肝心。○それでもいかぬその時は。
數馬　不憫ながらも我君の、御放埒の御病根。
歌野　スリヤ、高尾を。
數馬　コレ。
ト歌野に囁く。
歌野　わたしや奧で人目を憚り。
數馬　否やの御左右伺ひませう。
歌野　數馬どの。
數馬　秋篠どの。
歌野　待つてござんせ。
ト唄になり、數馬、歌野奧へはいる。與五郎出て、
與五　あれにて樣子を聞くに、歌野どの、段々の御意見、お聞き入れぬ我君の御放埒。こりや一思案せねばならぬ。

雷　ト與五郎こなしあつて考へる思ひ入れ。
女中。斯うござりませ。
お菊　アイ〳〵、お世話でござります。
ト合方にて、下座より、お菊、鶴之助、出て來て
ほんに爰は最前のお座敷でござんすなア。
雷　マゴつかぬやうに、能く見覺えさつしやい。
ト言ひながら、與五郎を見つけ、
與五郎どんか。
與五　鶴之助さんか。どつちへござりまする。
お菊　申し、こちの人。與五郎どの。
與五　お菊か。
トびつくりする。
お菊　逢ひたかつたわいなア〳〵。
與五　ハテ、思ひ懸けない、能く尋ねて來やつたの。
雷　コウ、この女中は與五郎どん、こなたの内儀さまか。
與五、アイ、わしが女房でござります。
お菊　戸平さんと一緒に、お前の跡を追うて來たわいなア。
與五　戸平どのと來たと言やるからは、そんなら櫛笥へ尋ねていたのか。
お菊　いつぞやお前に別れてこの年月の、戀しい床しいと思ひ餘つて國を立ち出で、遥々尋ねて昨日暮れかた大津へ着き、今朝早う櫛笥へいて、伯母さんや、戸平さんにもお目に掛りましたわいなア。
雷　そんなら、未だ草臥れも休むまいに、與五郎どの跡を追うて來るとは、ハテ、うまい仲だの。
お菊　お前は商ひに出やしやんして、戻りはいつも遲いと云ふ事も、早う逢ひたさ、顔見たさ、待ち兼て居たれば戸平さんが壬生とやらへ、豆腐の豆を買ひに行くついでに、與五郎が商ひ先へ、迎へに行くと言はしやんした故、一所に爰へ參りましたわいなア。
雷　この子が引いて來た牛を、頼兼公がお借りなされて、先つきからこのお座敷に居たが、珍らしさうに座敷中を見て居たが、揚句の果に出所にマゴつく奴よ。
與五　そんなら、とうから來て居やつたか。
お菊　さうなア、久し振りで逢うて嬉いとは思へども、聞えませぬぞえ、こちの人。わたしを振り捨て長の年月、音づれさんせぬも、尤も、此のやうな賑かな所へ入込み美しい女中さんを相手に商ひしたなら、定めし面白い事

が出來たに依つて、在家へも戻らんせぬのであらうなア。

雷　ソリヤ〳〵、味なセリフになつて來たぞえ。

與五　飛んだ事を言つたものだ。そなたの母親累どのは、おれが爲にも戶平どのゝ爲にも、眞實の伯母さま。羽生村の世がたりになられた後みなし兒のそなた、伯父金右衞門どのゝ名跡を襲がせようとて、この與五郎をば東へ下つたれども、生れついて武張つた事が好きで、下總の羽生村に埋もれて居ようよりは、大宮の身の上にならうと思つて、上方へ奉公稼ぎに漸々足利頴兼公へ足輕奉公、互利三平と名をつけて、立身したらそなたも呼び取らうと思ふに甲斐ない身の不興。また元の町人となりて、兄貴の世話になつて居れば、知らせて遣るも面目なく、便りをせぬもこの身の上。必ず怨んでくりやるな。

お菊　イエ〳〵、なんぼさう言はしやんしても、油斷のならぬわいなア。さう云ふお前の心なら、此のやうな女中さん方ばかり、大勢居さんす所へ寄りつかぬがよいわいなア。

雷　ソレ〳〵、豆熬と女の側に居ると、得て摘みたがるやつよ。

與五　これさ、鶴之助さん。お前までが同じやうに。コレ、決してそんな事はねい程に、燒餠をやきやんな。

お菊　イエ〳〵、燒かねばなりませぬ。わたしの燒餠は、母さんの讓り物ぢやわいなア。

雷　ハテ、そりや飛んだ物を讓られたの。

お菊　わたしが來たから、モウ〳〵、此のやうな所へ商ひはならぬぞえ。

與五　それだと言うて、得意場だものを、どうするものだ。

お菊　イエ〳〵、なんでもならぬわいなア。

與五　それぢやア、商賣の邪魔をするやうなものだ。

お菊　アイ、ちつとは邪魔をせにやならぬわいなア。

與五　イヤ、こいつが〳〵、おれに口を明かせぬな。

お菊　明けて置くと物騷ぢやわいなア。

雷　コウ、〇錠を卸して置けばよい。

與五　さう云ふと、女房とは言はさぬぞよ。

お菊　言うたらどうさんす。

與五　斯うするわえ。

ト立廻り、おきくも舞臺を叩き立つて言ふ。鶴之助兩方を支へて、

雷　これさ〳〵、お長屋に人も無いやうだ。マア〳〵、待たつしやい〳〵。

トいろ〳〵留めて、

與五　エヽ、退かつしやい〳〵。

ト言ひながら、いろ〳〵思ひ入れあつて、與五郎を鶴之助留めながら、三人下座へはいる。荒浪、鬼貫、相撲取八つ山、同×出て、

荒浪　鬼貫さま。高尾が様子を御覽なされましたか。

鬼貫　いかにも梶右衛門が噂に違はぬ高尾が我儘。この鬼貫もあきれ果るわえ。

八山　まだ〳〵、あんな事ぢやアござりませぬ。いろ〳〵お心を盡される。頼兼公を振りつける、いけつ太い踏ん張りでござりまする。

×　それと云ふも、浮田左金吾と云ふ蟲があるからの事さ。

鬼貫　いかさま。そんな事であらう。あれ程金ぜきにする兄貴を、袖にする片意地者。この鬼貫がいか程に思へばとて、滅多に得心は仕居るまい。エヽ、忌々しい。

荒浪　モシ、そりやアお心が狹い。仁木どのゝ思召し通りに參りますれば、鬼貫公は足利の御主、君傾城くらゐにお心を勞される事はござりませぬ。それよりは差當る高尾が身請け、頼兼公を煽てかけて、お館へさへお引き込めば、放埒者に仕立て、山名さまから權柄づくで押込んで仕舞へば、それからは鶴若どの御一人の事も、鬼貫公のお心任せ。

鬼貫　それに兄頼兼が御臺玉園御前、懷胎の身をもつて、我々始め仁木が企て、覺り知つたる曲者、竊かに奪ひ立ち退いたに違ひない。打捨て置いては我等が寐覺が惡い。何とぞ竊かにこの行衛を、詮議してくれまいか。

荒浪　そりやお氣遣ひなされますな。櫛笥の町人豆腐屋戸平と申す者、彼を頼み詮議致さば、早速玉園御前の行方は知れます。お氣遣ひなされますな。

鬼貫　待て〳〵。その御臺を殺しちやアならねい。

荒浪　そりやア、なぜでござりまするな。

鬼貫　その御臺と云ふは萩原家の息女、今の世の楊貴妃。腹な餓鬼はおつ殺して、玉園には疵つけぬやうにして連れ參り、兄頼兼を片づけて仕舞へば、玉園はおれが御臺、高尾は手かけ、二人共に膝元へくつつけて樂まにやアならない。

荒浪　ようござりまする、左樣なら隨分無疵でお手に入れ

ませう。

鬼貫　しかと頼んだぞよ。

荒浪　畏まりました。○なんと前祝ひに、奥で一つお上りなされませぬか。

鬼貫　いかにも荒浪。同道致せ。

荒浪　ハツ。

鬼貫　皆參れ。

皆々　ハツ。

ト唄になり、この人數皆々奥へはいる。直ぐに合方になり、花道より浮田左金吾、紙子仕立の羽織、衣裳、大小、深編笠にて出で來り、直ぐに舞臺へ來て、

左金　早う誰ぞに逢ひたいもの。この間ぢうから心を痛め、高尾にも頼んで置いたあの雷丸の事は、今日はせつぱの鍔際。最前細々と書取つて、お松に持たせて寄こしたが、思つて見れば頼兼公の揚詰め。首尾を見合はして呉れたか。何しろ太夫に逢ひたいものぢや。

ト奥を覗き、いろ／＼こなしあつて、奥にて

錦　アイ／＼、鳥渡いて來やんすわいなア。

ト錦出て來る、左金吾是を見て、

左金　錦々。

錦　ヤア、お前は左金吾さん。能うお出でなさんしたなア。

左金　コレ、太夫はどこに居やる。

錦　花魁は奥座敷にぢやわいなア。

左金　そりや大方頼兼どのと二人、寢て居やるであらうなア。

錦　何を、太夫さんは頼兼さんを嫌うてぢやわいなア。

左金　さうぢやあるまいがの。

錦　それに逢ひはござんせん。鳥渡お前のお出での事を。

左金　太夫には言ふには及ばぬわいなア。

ト合方。奥へ錦はいる。

おらアモウ、歸るぞ／＼。○と言ふのが矢つ張逢はしてくれろと云ふ事。高尾がおれが來た事を聞いて、直ぐに來るは知れた事。所をおれがツンとして居たものか。眞面目が可からうか。空寐入りも古いやつぢやが、ハテ、なんぞ、よい新手がありさうな者ぢやが。

ト奥にて、

錦　アイ、そこに待つてお出でなさんすわいなア。

左金　そりやこそ、モウ、來るは。

トうろたへ、ちやつと寢轉び、附枕して寢た顏をして居る。お松そつと出て來て、左金吾を見て側へ寄り搖り起す。左金吾は高尾と思ひ、鼾を掻くこなし。間違ひの模樣よろしくあつて、

お松　是はまた、怪しからぬおよりやう。モシ、松でござりまする。

ト左金吾、違つた思ひ入れ。

左金　フウ、お松か。わしは高尾かと思うて、狸寐入りをするやつよ。

お松　何を仰やりまするやら。モシ、最前高尾に逢うて、先つきのお文も渡し申し、この短册を受取り置きましてござんす。

ト最前の短册を渡す。左金吾取つて、

左金　いかさま。いつ見ても見事な手蹟。この伊勢の歌を書いて寄こした心は。ハア、コリヤ、愈々高尾を身請しらるゝ心ぢやなア。

トむつとしたる思ひ入れ

お松　イエ／＼、どうして、そんなお心ぢやない。そんなら、わたしがお呼び申して參りませうから、あの質物の金の事、お頼みなされますえ。

左金　サア、それもこれも高尾が性根が入り替つては、所詮歸參する氣もない。いつそ、あいつを手に懸け、おれも曲輪で死恥を晒して仕舞ふ。お松、去らば。

ト行かうとする。お松隔てる。このうち高尾、方々窺ひながらそつと出て、後ろに立つて聞いて居る。

お松　マア、お待ちなされませ。よもや高尾さんに限つて。

左金　ないものが爰へ來ずに居るものか。そこ退きやれ。

トお松を引き退け、行かうとする。高尾、左金吾が刀の鐺を取つてぢつと坐る。左金吾、お松と思ひ、

お松。そこ放せ。

お松　モシ、高尾さんでござりまする。

左金　ヤ。

ト高尾と顏見合せ、

高尾　何をそんなに氣を揉まんすぞいなア。マア、下にござんせいなア。

ト左金吾、拍子拔けのこなしにて、

左金　ハテ、下に居たとて、相談極まつた後の祭。モウモウ、何事も言ふ事はないのさ。

高尾　そりやマア、何が相談が極まつたぞいなア。

左金　知るまいと思つてか。ほんにマア、まざ〳〵しい顔わいの。
高尾　何がいなア。
左金　身請けしらるゝ事を。
高尾　こりや可笑しいわいなア。それで、お前は腹立てさんしたかえ。
左金　是が腹が立たないで、何とせうぞ。
高尾　コレ、お松さん。
ト囁く。お松合點して、
お松　モシ、わたしは奥へ參りまする。なんぞ御用があるならお呼びなされませえ。
ト金の事を頼めと云ふ。左金吾呑み込み、
左金　ヲヽサ、用があると呼ぶよ。
お松　ゆるりとお話なさんせえ。
ト合方になり、お松奥へはいる。高尾、左金吾を引きつけて、
高尾　エヽ、お前はな〳〵。なんぼ賤しい川竹の、うきふし繁きその中にも、お前を大事と思へばこそ、心の操を立て抜いて、頼兼さまを袖にして、どうぞ愛想を盡かされてと、思ひついたる憎體口、結句先きには意地持つて、わたしが背だけ金積んで、身請けしようとの言ひ掛り。お前に相談した上と、今まで待つた甲斐も無く、わたしが心が變つたとは、そりやあんまりぢや〳〵わいなア。
ト泣き落す。こなしあつて、
左金　おれもそんな事であらうと思つた。コレ、太夫。わしが今のやうに言ふのも、矢つ張そなたが可愛さ故。
高尾　そんなら、疑ひは晴れたかえ。
左金　ヲヽ、疑ひは晴れたわいのう。
高尾　それはさうと。最前文にも云うて寄こさんした。〇あの一腰の事はえ。
左金　さればさ。その質物を今宵の内に請戻さねば、最早人手に渡ると云ひ、その相談をしようと思つて。
高尾　さう云ふ事なら後かたまでに、金を整へて上う程に、必ず氣遣ひなさんすなえ。
左金　それなれば落着いた。
高尾　しかし、お前が爰にござんしては、どうやらわたしも氣がせかれる。
左金　さう思やるなら、おりや歸つて、内で返事を待つて居よう。

高尾　アイ、その時は何もかも、お前の心の濟むやうに委しう書いて、お松さんに屆けやんせう。
左金　そんなら首尾を賴むぞや。
高尾　アイ。
左金　ドレ、お暇申さうか。
ト花道の中程までしたく〳〵と行く、
高尾　モシ。
ト振返り、
左金　なんぞ用かや。
ト高尾、左金吾、顏見合せ、思ひ入れあつて
高尾　サア、おしつけ返事を上げる程に、必ず案じて下さんすなえ。
ト互ひにこなしあつて、左金吾、深編笠を被り、唄になり、しを〳〵と向うへはいる。
高尾　氣遣ひなさんすな。今宵九つまでには、わたしが何うなりとして、大切な一品を人手に渡さぬやうに思案する程に、必ず共に御案じなさんすなえ。○とは云ふものの、何うしたならば、今宵中に金の才覺なア。
與五歌野　高尾さま。
ト與五郞、歌野、後ろに出掛つて居る。

與五　賴兼公にその身を任せば。
歌野　その金は。
兩人　出來さうなものでござんすぞえ。
ト高尾、思ひ入れあつて、
高尾　ホウ。こりや、歌野さん。與五郞さん。變つた事を言はしやんすが、賴兼公へこの身を任す位なら、なんの苦勞をしようぞいなア。
歌野　そりや、なぜえ。
高尾　なぜにと問はしやんすは聞えませぬぞえ。全盛をはつて居る身の上でも、苦勞の絕えぬが勤めの世界、身請身請と滯上はられても、それがあんまり嬉いものでもござんせぬわいなア。
歌野　ムウ、其のやうに言はしやんすは、賴兼公に請出され、曲輪を出る氣はござんせぬかえ。
高尾　サア、そこが勤めの意氣地とやら。
與五　御尤もでござりまする。なんぼ金を遣ふ大盡さまでも、嫌だと思召すは、振つて〳〵振りつけるが女郞さん方の意氣地。襟元については色も戀もござりませぬ。眞實眞身、間夫の男へ心中立て、立派な身請けをお嫌ひなさるは、嶋原は愚か、三ヶの津一番の太夫さまぢや。イ

ヤモ驚き入つたるお心でござりまする。
高尾　其のやうに言うて下さんすな。女郎の意氣地を立てるのが、其のやうに珍らしい事でもないわいなア。
與五　イエ〳〵、さうぢやござりませぬ。襟元につくが今の世の中。そこをずつと流して身請けをされぬとは、きついものでござりまする。そんなら愈々賴兼さまに。
歌野　請出されるお心はござりませぬな。
高尾　アイなア。
歌野　聞かしやんしたか。
與五　あつぱれ、貞女。〇驚き入つた。〇トサ、むづかしい事を言ふ事もござりませぬが、必ず共に賴兼公に請け出されて。
兩人　下さりまするな。
高尾　樣子は何か知らねども、心ありげなお二人のお言葉。可愛い男へ立てる義理、嫌と思うたら金輪際、賴兼さまは愚か、誰さんにも請出される心はないわいなア。
與五　しかと左樣かな。
高尾　ヲヽ、くど。
與五　歌野さま。
歌野　與五郎どの。
與五　あのお心を聞いて。
歌野　お前も、わたしも。
兩人　落着きました。
高尾　さうおしやんすお二人は。
與五　何を隱さん、われ〳〵は。
歌野　賴兼公の身内のもの。
高尾　アノ、お二人さんが。〇ハテなア。
歌野　そのお心を聞く上は、お明し申さん、自らは渡邊民ヶ一友が、妻の秋篠と申す者。
與五　この豆腐屋は、賴兼さま御勘氣請けし、亙利三平と云ふ足輕。
歌野　賴兼公、お前の色香にほだされ給ひ、この嶋原へ晝夜の居つゞけ、御家中の歎きと云ひ、禁庭への聞え。
與五　お身持御放埒、惰弱なりと風聞あつては足利の瑕瑾。たとへ賴兼公御立腹あるとも。
歌野　大勢の歎きを思ひ遣つて、必ず共に賴兼さまに。
高尾　請出されぬと云ふ私が心は。
兩人　そのお心は。
高尾　まづこの通り。
ト櫛を取つて打ちつける。二つに割れる。

兩人　是は。
高尾　わたしが心底。
與五　フウ。
　ト思ひ入れあつて、
櫛と云ふ字は木扁に節の字。二つに割つて木扁を取れば
節。〇節義を守る女の操。
歌野　流れを立つる身ながらも、間夫に見えぬ心の誠。
與五　感心致した。
歌野　驚き入つた。
與五　そのお心の亂れぬやうに。
歌野　この上ながら高尾さん。
兩人　必ず共に。
高尾　氣遣ひさしやんすないなア。
　ト唄になり、高尾思ひ入れあつて奥へはいる。與五郎、
　歌野、跡を見送り
與五　秋篠さま。モウ、氣遣ひはござりませぬ。
歌野　さいなア。高尾どのさへ請け出されて行きさへせね
ば、たとへ佞人ばらが御放埒と言ひ立てゝも、その證據
が無ければ、禁庭への申譯立つ道理。
與五　いかさま左樣。この上はちつとも早く、御歸館をお
勸め申すが肝要でござりまする。
歌野　そりや秋篠が、幾重にもお勸め申して御歸館のお供。
それにつけても一先づ館へ立ち歸り。〇とは言へ自らが
お側に居ずば。
　ト案じるこなし。
與五　イヤ、それこそ、この與五郎が、曲輪の中はよそな
がらの宿直守り。
歌野　そんなら萬事を。
與五　心得ました。
　ト茶屋の男、箱提灯を持ち、
男　歌野さん。三文字屋から口が掛つて參りました。
歌野　コレ、〇供の用意は。
　ト茶屋の男、言葉を改め、
男　ハツ、お乘物は大門口まで。人目に掛らぬやうに、
控へさせ置きましてござりまする。
　ト與五郎、合點のいかぬ思ひ入れ
與五　シテ、あの者は。
歌野　自らが家來。只この上は御歸館を。
與五　首尾ようなされい。秋篠さま。
歌野　萬事を賴む、與五郎どの。いぞおうれ遣つた。

男　ハツ。

ト三重になり、兩人花道の中程まで行く。

與五　ア、コレ〳〵、大門口までは、矢つ張藝子の歌野さん。

歌野　兄さん。

與五　あたつきは御免だよ。

歌野　お前に似てさ。

與五　知つたか。

歌野　兄さん。

與五　歌野さん。

歌野　さばえ。

ト騷ぎになり、歌野、藝者のこなしにて、下男をついて

與五　御忠節とは云ひながら、いかい御苦勞なされるな。

ト奧にて、

雷　サア、お菊、來やれ〳〵。

お菊　アイ〳〵。

トお菊、鶴之助、出で、

雷　こりやア與五郎。爰に居たか。

與五　鶴之助さん。又ござりましたか。

雷　聞きやれ。牛を貸した代りに、お菊も御馳走になつて鱈腹、德右衞門どの丶蔭だ。初めて上方へ來たお菊、なんとよい所を見せたであらうが。

お菊　成程、おしやんす通り、此のやうな珍らしい所を見物致しましたわたしは、ほんに仕合せ者ぢやわいなア。

雷　サア〳〵、おぬしも一所に歸りやれ。

お菊　ソレ〳〵、今日はマア、早う仕舞うて、一所に戻つて下されや。

與五　おれも一所に歸りたいが、ちつと賣れ殘りが。

雷　ハテ、餘つたら爰の臺所へおつ付けて歸るがよい。今宵は久し振りの御祝言だ。

お菊　何を。

ト恥かしき思ひ入れ、

與五　そんな事を言はれては、おれも小つ恥かしい。ぬからぬつらで一所に歸らう。

お菊　さうして下さんせ。

與五　したが、おれにはちつと。

ト行き兼る思ひ入れ、

雷　サア〳〵、二人ともに來やれ。

ト歌になり、鶴之助先きに、お菊、與五郎、花道へは

いろ。奥にてわや／＼聲して、帮間彌七、德右衛門、
高尾を連れて出る、是に若い衆、お時ついて出る。
皆々　高尾さま。
松德　コレ。
ト思ひ入れ、皆々金を出し、
帮㊀　太夫さまのお賴み通り、あなたに向つて、口ほうはつたセリフを言ひ。
彌七　どうやら斯うやら、眞面目なつらで遣つ付けました。
皆々　サア／＼、お受取りなされませ。
德右　おいき／＼。皆太夫の世話になつて、見送りにあしを遣つて下さつたかい、世話でござりました。
お松　高尾さんの御念頃だけ、此のやうな事を能う賴まれて下さんした。斯う金の整ふ上は、左金吾さまのお願ひも叶ひ、大切な一品も。お悦びなされまするでござんせうわいなア。
トこのうち、德右衛門金を取出し、高尾が前に置き、
端たの金を取つて、
德右　こりやア、貴さま達へ骨折賃。
皆々　何さ、是には及びませぬ。
お松　高尾さんのお心ざしぢや。取つて置かんせ。
皆々　有難うござりまする。太夫さま。
ト高尾頷づく。德右衛門皆々に奥へ行けと言ひ、手で教へる。皆々心得、奥へはいる。德右衛門、お松、側へ寄つて、
德右　コレ、太夫。おぬしが願ひの金は出來たが、何かにつけて、そなたへお心を盡される賴兼さま、此やうな事も、道ならぬ事とは思やらうが、この金が整へば、いとしぼがりやる左金吾さまのお願ひも叶ふと云ふもの。去りながら、世の中の義理ほど辛いものはない、この金の出所とても賴兼さま。この德右衛門も眞赤な嘘を拵へて騙つた金に違ひない。斯かる御恩を償はんと、そなたは身受けをされる氣か。
高尾　アイ、なあ。
お松　イヤ、モシ、高尾さん。そりやお前は、了簡が違や致しませぬかえ。サ、よもやさうではござんすまいが、それはわたしらも知つて居る。左金吾さまと深い戀仲、二世三世と言ひ替して置きながら、賴兼どのに身を任せては、戀の意氣地は兎も角も、起請にたんと書かしやんした神々さまへ立つまいぞえ。

四立目豆腐屋の場（繪草紙より）

高尾　サア。

ト家の障子を明けて、頼兼窺ひ居る。

徳右　その神罰より佛罰より、現在この世の修羅の責苦を、助けて貰つた大金の恩。

お松　午王に掛けて言ひ替した、女夫の契りを捨てゝ。

徳右　左金吾どのへ添ふ心か。

お松　頼兼さんへ行かしやんすか。

徳右　どちらへ片をつけるのだ。

お松　高尾さんの。

兩人　その心は。

高尾　末の露、元の雫となる身の上、世を觀ずれば根なし草。所詮この身は。

トこなしあつて、思はず頼兼と顏見合せ、障子をしやんと立てる。高尾これを見て思ひ入れ。

ムウ、浮世ぢやなア。

ちよん〳〵〳〵

拍子幕

四立目

豆腐屋戸平内の場
返し中洲土橋の場

役名――大江之助鬼貫。力士八つ山。奴虎助。雷鶴之助。豆腐屋戸平。戸平母。與五郎實は亘利三平。與五郎女房お菊。道具屋太四郎、下女お園實ハ頼兼御臺玉園の前。渡邊民部。

四立目の口上濟むと、幕の外、時の鐘鳴る。

ト花道より、鬼貫、着流し、大小、頬冠りにて出て來る。後より相撲取八つ山。奴虎助、ついて出る、舞臺へ來て、あたりへ心をつけ、

兩人　鬼貫さま。

鬼貫　虎助。八ツ山。頼兼が桂の館へ通路の道はこの筋。いつもの通り雷めが、ついて失せるは必定。この暗紛れに頼兼と見るならば。

兩人　たつた一打ち。

鬼貫　コレ。

ト向ふを見て、

四立目返し土橋の場（繪草紙より）

あの提灯は確かに賴衆。ぬかるな。

ト三人、手ぐすれして待つて居る。向ふより小田原提灯をつけたる四つ手駕籠、擔いで出る。本舞臺へ來ると、鬼貫窺ひ寄つて、提灯を切り落す。駕籠の內より雷鶴之助、轉げ出る。駕籠かき、幕の內へ逃げてはいる。

八ツ山と虎助、鶴之助を透かして見る。鶴之助、兩人が足を取つて投げ退ける。鬼貫、幕の內に小隱れする。是より鶴之助、兩人を相手に立廻りあつて、切り落しへ鶴之助隱れる。八ツ山と虎助、同士討の仕組み、摑み合ひ、互ひに顏を見合せ「そんならこの道」と上の方へ逃つてはいる。鶴之助、切り落しより這ひ上り、ほつと溜息をつく、花道より駕籠を擔いで出る。

雷　お前か。

かご　左樣でござりまする。

雷　こつちへ來ては惡い〳〵。

ト道を敎へて、

道を變へて急ぎだ。

ト引返し、揚幕へはいる。雷もついてはいる。

本舞臺。三間の間、世話場の屋體。正面、簾。上の方、棚。落間の所、石臼、飛臺に乘り、これに戸平、浴衣の上ばり、前垂にて、豆腐の臼を引いて居る。本舞臺の所に、お菊、やつし、前垂、置き手拭にて、長火鉢にて豆腐を燒いて居る。上の方に老母、やつし姿の形にて、竃に掛り、油揚をあげて居る。大釜、豆腐に岡持、その外、道具よろしく飾りつけ、門口据ゑ物。この見得、てんつゝにて幕明く。

ト花道よりいろ〳〵の仕出し四五人出で來り、豆腐、油揚などそれ〳〵に買ふ。戸平、お菊、捨ぜりふにて賣つて遣る事あり。

○　時に御亭主や。爰の豆腐は無上に賣れて、きつい繁昌だの。

△　賣れる筈ぢや、爰の內にお園と云ふ、美くしい奉公人が來てから、無上に豆腐が賣れる筈だ。よい豆の寄り合ひ。

□　成程、さうでござんす。嫁御の器量もよし、奉公人の器量もよし、わしらが方では、爰の內の噂ばかりさ。

皆々　ほんに戸平どのは仕合せ者だ。

戸平　コレ、あんまり揚豆腐にして下さるな。其のやうに八杯豆腐に儲かるものでもないのさ。

○　きつい竹輪豆腐をいふ人でござるわえ。

皆々　ハヽヽヽ。

ト皆々笑ひながら花道へはいる。てんつゝになり、向ふより、道具屋太四郎、羽織衣裳、町人の形にて、風呂敷に脇差を包んで持つて來て、直ぐに舞臺へ來て、

太四　御亭主、内にか。

ト内へはいる。

老母　オヽ、こりや、太四郎さま。ござりましたか。

太四　是はお袋。精が出ますの。戸平どの。ちつと休まつしやらぬか。

戸平　この頃は商ひが立つから、朝から立ち詰めだ。ドリヤ、太四郎さまの御馳走に一服呑まうか。お菊、煙草盆上げや。

お菊　アイ〳〵。

ト煙草盆を出し。

能うお出でなされました。

太四　アイ〳〵、構はつしやりますな。時に弟御の與五郎どのは、どこへ行かれました。

老母　アイ、與五郎はお家主の葬禮に、寺町まで行きました。

太四　それは御苦勞だの。この女中は話のあつた與五郎どのゝ嫁御かえ。

戸平　アイ、それが弟の嫁さ。田舍者には似合ぬ發明者さ。

太四　いかさま、ねつから山出しとは見えない。お袋。よい嫁御を取らつしやりましたの。

老母　アイ、モウ、兄の戸平は精を出して呉れまする。弟嫁は尋ねて參りまするから、わたくしはモウ氣樂で、仕合せでござりまする。

太四　それさ、そして主はどう云ふ縁で、關東から上つて見えられました。

老母　さればさ。お聞きなされて下さりませ。全體、マア、この婆アが下總國羽生村の生れで、お伊勢さまへ參詣したついでに京大坂を見物したさ、この上方に二三年奉公する内に、縁でがな、爰の三郎兵衞どのと夫婦になり、戸平、與五郎と云ふ、二人の子供を儲けてより、故郷の事は忘れて居りますわいなア。

戸平　それさ、お袋の兄貴も下總の國羽生村で、與右衞門と云ふ相應な百姓であつたげなが、樣子あつて家も退轉する所を、樣子を知つた所の衆からお袋の所へ人が來

て、それで弟の與五郎を羽生村へいせきにやつたが、お菊はその與右衛門の娘、累とやら云ふ人の腹から出た女子でござりまする。

老母　與五郎めも草深い田舍が嫌ひかして、又この上方へ奉公稼ぎと云うて歸り居つた。跡を慕ふてこのお菊が參りました。なんと貞實な嫁ではござりませぬか。

太四　イヤ、モウ、聞けば聞く程、貞實な嫁御を取らつしやりましたの。

お菊　ほんにモウ、お初にお目に掛りました。私は與五郎が女房菊と申しまする田舍育ちの不調法者。お目懸けられて下さりませ。

太四　イエ、わたしもちよつ／＼と參つて、お世話になりまする。それはさうと。

ト風呂敷を出し解き、脇差を出して、

戸平どの。なんとよい拵へであらうが。

戸平　ほんに見事な物でござるな。なんだ、こりやア木太刀ぢや。町人の差料にはよいわえ。

太四　取つて置かつしやい／＼。

老母　イヤ、ほんにこのお園は、モウ歸りさうなものぢやがのう。

お菊　それいなア。モウ、戻られさうなものでござんす。

戸平　東寺まで、五里も六里もあるやうに、あの女は何をして居るか知らん。

太四　内のお園は、どこへ行きました。

戸平　いま東寺まで豆腐を持たせて遣つたが、いんまに歸りませぬ。

太四　ハヽ、讀めたわえ。今爰へ來しなに、東寺の門前で見掛けたが、與五郎どのと連れ立つて、煮賣屋へはいりましたが。

戸平　アノ、お園と與五郎と連立つてはいりましたか。

老母　弔ひに行きやつた與五郎が、なんのマア、そりや人違ひでござりませう。

お菊　さうでござんすとも、内の忙がしいのに、ちつとも早く歸らうとこそ思はしやんせう。ソレ、なんのマア、二人連れで。宜い加減な事仰しやりませ。

太四　是はしたり、おれが嘘をついて何にするものだ。なんでも與五郎どのと連立つて、煮賣屋へはいつたは爰のお園だよ。

お菊　そりやマア、ほんの事でござりまするか。

トむつとする思ひ入れ。

太四　ナニ、嘘をつくものだ。
お菊　アノ、マア、よもや、そんな事が。
　ト言ひながら、もしやと疑ふこなし。
老母　是はしたり、この子とした事が。どうマア、其のやうな事が。捨てゝ置きやいのう。
お菊　それでも、アノ。
　ト思ひ入れ。
戸平　與五郎めも素早い奴だから、油斷がなるものぢやない。
　ト態とお菊に、腹を立たせる思ひ入れ。
お菊　さうでござんすとも。こりや鳥渡東寺まで行つて、見て來やうわいなア。
太四　行つて見ると直きに知れる事だ。しかもこつちから左りの側だ。
お菊　アノ、ほんまにかいなア。
　ト裾を引き上げて、
老母　ヘテ、よいわいなア。今に戻るであらうわいなア。
お菊　イエ〱、見て來ねば心が濟みませぬ。つい鳥渡。あなた、是にお出でなされませ。ほんまの事なら、どう言はう知らん。
　ト合方になり、お菊、心ならず花道へ駈けてはいる。
老母　エヽ、あの子とした事が、とまづいて怪我でもせねばよいが。
戸平　あいつもきついお燒きだわえ。
太四　燒くも尤もだ。あのお園は美しいものだ。ありやアほんに、爰の奉公人に置いたのかえ。
戸平　下女分に置いたのさ。
太四　そんなら、なんとアノお園を、わしが女房に貰ひたいものだ。戸平どの。あの褄はづれと云ひ形格好、確かに鬼貫さまの尋ねさつしやる、かのナ、ソレ。
　ト思ひ入れあつて、
　どうぞ、わしが貰ひたいものだ。
　ト戸平を呑み込ます。
戸平　おれも大概感づいて居るよ。サア、ソレ、こなたが、お園に氣がある事は知つて居るよ。聟に取つても不足のない太四郎さま。お袋。相應な緣組ぢやアございませぬか。
老母　サア、相應な緣組でもあらうが、何を云ふも弟の與五郎が、お屋敷に居た時分から、大分世話になつた人のお内儀。近しい親類もないお人ゆゑ、世話になつて義

理づくで、當分世話せねばならぬに依つて、暫らく下女分にして使ふてくれいと與五郎が頼み。それぢやに依つて縁づく事は。

戸平　さう云ふ事なら、與五郎が歸つたら、お袋も共々口を利いて、太四郎どのへあのお園を世話するが宜うござる。

老母　サア、わしが世話する氣でも、與五郎が合點せねば。

太四　そこをコジつけるが當世でござるわえ。

老母　何を。

トてんつゝになり、花道より與五郎、麻上下、一本差、他に二人、同じく上下にて來り、花道の中にて、

與五　喜右衞門さま。平兵衞さま。お前方はどこまでござります。

喜右　ほんにわしらは、爰まで來ては廻りだ。

平六　つい話し／＼爰まで來ました。休まつしやい。

與五　ハイ／＼、お休みなされませ。

喜右　わしらも是から、大家の隱居どのを見るやうに、早く内へ歸つて往生しませう。

平六　それが宜うござる／＼。與五郎どの。お袋へも兄貴へも宜しく頼みます。

ト兩人跡へ戻る。與五郎門口へ來て、

與五　今歸りました。

老母　オヽ、早かつたの。

與五　母さん、鹽を下さりませ。

老母　オイ／＼。

ト鹽を取つて與五郎に振掛け、身體を清める。與五郎内へはいり。

與五　是は太四郎さま。能うお出でなされました。

太四　今日は弔ひにござつたげな。御苦勞でござる。

與五　兄貴の名代はいつでも歩に取られますで。ハヽヽヽ。

戸平　定めし、賑かな弔ひであつたらう。

與五　お家主も世間が廣いから、大勢の人でござりました。

ト言ひながら上下を取る。老母これを疊む。與五郎、木刀を見て、

是は面白い拵へな。太四郎さま。お前の御持參でござりますか。

太四　あの、兄貴へ廉くして進ぜました。

戸平　見やれ。おいらが差料にはきついものよ。マア、第

一、身がどうも言へない。拔いて見やく。
ト與五郎拔いて、
與五　こりやア木刀だね。なんだ。人切ればわれも死なねばなりませぬ、それが嫌さに木刀を差す。是は面白い狂歌だ。町人は斯うでござります。
太四　しかし、町人は埒があかないよ。牛の寐たほど金を出して、女郎を請出すは又お武家方だ。高尾もとうく賴兼さまに請け出されたげな。
與五　エ、アノ、高尾が賴兼さまに。
ト思ひ入れ。
戸平　なんだ。この男はきつい膽の潰しやうだ。高尾が請け出されたと聞いて、なぜ、其のやうにびつくりするのだ。
與五　サ、こりやア。オヽ、なにさ。アノ、太四郎さまが。牛の寐たほど金を出して、身請けしたと話さつしやるから、牛の寐た程な凄じい金であらうと思つて。
戸平　びつくりしたか。
與五　左樣さ。
ト思ひ入れ。
戸平　その大金を出して身請けするも、高尾が器量が美しいからの事だ。兎角美しい女は人が目懸けるよ。ノウ、太四郎さま。
太四　ソレく、おれも一人目懸けて置いた。留守居にあれを入れたいものだが、私が口から言ふも小つ恥かしいが、與五郎どの、爰の内のお園を。
ト言はうとする。與五郎、びつくりして、
與五　太四郎さま。お園がどう致しました。
太四　サア、小機轉の利いた女だから、おれが女房に貰ひたい。なんと、この相談は出來まいか。
戸平　いかさま。こりやア、好い緣談だわえ。
老母　先つきにからあのやうに言ふておやが、與五郎、そなたは何と思やる。
與五　成程、相應な緣組でござりまするが、太四郎さま、あの女中は亭主がござります。
戸平　コレく、與五郎。おぬしも大概な事を言やれ。あのお園を爰の内へ連れて來た時、手前、なんと言つた。亭主もなくなつて、外に緣者もない女だと言つたぢやアないか。それに今また亭主がある。
與五　亭主があるのさ。
戸平　なぜ、亭主のあるのを無いと言つたよ。

與五　そりやァお前の聞き違ひだ。屹とした亭主があると言ひました。それにマア、母者人。このお園はどこへ行きました。

老母　サア、先つき東寺まで、豆腐を持たせて遣つたわいなア。

與五　東寺まで豆腐を持せて遣つたえ。そりや、あんまり輕々しい。サア、輕はづみも大概があるものだ。お菊、お菊〳〵。

　トなにか騷々しく呼ぶ。

老母　コレ〳〵、アノお菊は、そなたの歸りが遲いと云ふて、そこらまで、そなたの迎ひに行きましたわいの。

與五　アノ、お菊が、この忙がしい内を明けて、どこへ行つた事ぢや知らん。そりや又、あいつを呼んで來ずばなるまい。エヽ、このお園は。兄貴。この木刀は買はつしやりましたか。幾らえ。こいつは面白い。人切れば我も死なねばなりませぬ、それが嫌さに。母さん、煮花でもして、太四郎さんに上げなさい。

　ト何かそこ〳〵して言ひながら、門口の方へ下駄を穿き行く。

それが嫌さに木刀を差す。能く言つたぞ。このお菊は何をして居るか。太四郎さま。お話しなさい。このマアお園は。

　ト言ひながら、門口へ出て戸を閉め、思ひ入れあつて、下駄をそつと脱いで腰へ挾み、尻をからげ、拔足して駈けて向ふへはいる。

戸平　あいつは、氣でも違ひはせぬかの。

　ト呆きれて居る。

太四　何か、一人かきたくやうに口を利いて行つたが、狐でもつきはしないかの。あの樣子ぢや、この緣談はきまらぬわえ。

戸平　ハテ、宜うごんすわな。お園が歸つたなら、三つ金輪で、こなさんの處へ、この戸平が遣りまするわいな。

太四　貴樣がさう言つてくれゝば、おれも氣が宜い。なんと前祝ひに一杯呑まう。お袋、五合もつけて下さいまし。

老母　イエ〳〵、酒は取つて置いたがござるわいの。

戸平　そりやァ有難い。肴は店の油揚に生醬油。母さん。早く燗をつけて下さいませい。

老母　オイ〳〵。ドリヤ、燗をつけて遣りませう。

　ト合方になり、老母暖簾口へはいる。兩人跡を見廻し、

太四　内のお園が愈々アノ御臺に極まれば、鬼貫さまにお出入りのこの太四郎ゆゑ、戸平に早く實否を訊せ、人目に掛つては如何と、この方より家來は遣らぬとの仰せでござる。

戸平　成程、その鬼貫さまには、このぢう嶋原で、お目に掛りました時委細のお頼み、何から何まで御臺臭い、アノお園。私が試して見るに、孕んで居るに違ひござらぬ。

太四　その孕んで居るが頼兼が種。親を助けて子を殺せと遣はされたコレこの下ろし藥。

ト紙入より藥を出し、

是を呑ませば忽ちに子は下りる。その後を鬼貫さまに差上げて、金にするのだ程に、隨分勞はるがよい。

戸平　そりやア私が合點だ。なんでも是を食らはせて、腹の餓鬼を下ろし、滿足な代物さへ渡しやア金であらうが。

太四　そりや、知れた事よ。

戸平　仕舞つて置かつしやい。やるものぢやアない。

太四　そんなら、この下ろし藥は貴樣へ。

ト藥を渡す。

戸平　呑み込んで居るよ。

ト取つて懷ろへいれる。

太四　一杯呑まうか。

戸平　サア、ござりませ。

ト唄になり、兩人暖簾口へはいる。この唄を借りて花道より、お菊、跡を見い〳〵出て來る。

お菊　どうも合點の行かぬ。門前の煮賣店を一のき〳〵に尋ねても、お園も與五郎どのも影も見えぬと云ふは、大方二人連れ立つて戻つてゞあらう。ほんにわたしとした事が、なんぞ見つけたやうに、ほんに阿房らしい。早く内へ歸りませう。

ト本舞臺へ來て内へはいる。戸平暖簾口より出て、

戸平　お菊、戻つたか。

お菊　なんぼ門前の煮賣屋を、門並みに尋ねても知れぬわいなア。

戸平　ハヽヽヽ、なんのおぬしに見つけられるやうにして居るものぢやぞ。

お菊　まだあのやうな事言はしやんす。大方二人連れで戻つてゞあらうがな。

戸平　なに歸るものだ。太四郎が言つた通り、何處へぞ二

人しつぼりと、煮賣りになつてけつかりくさるであらう。エヽ、うまい奴等だな。

お菊　エヽ。

戸平　そちや、なんとも思はぬか。

お菊　イエ〳〵、なんぼ其のやうに言はしやんしても、この道ばかりは、滅多に抜かる事ではないわいなア。

戸平　なんぼさう言つても、抜かりだらけなりやこそ、歸らぬぞよ。

お菊　サア、モウ、日暮れに間もあるまい。ドリヤ、明かしを點けませうか。

ト　お菊、火を打ち、行燈を出す。時の鐘にて向ふより駕籠を舁きて出る。跡より雷鶴之助ついて出る。是を曲者二人、窺ひ〳〵出で、一人は鶴之助に掛る。鶴之助これを花道へ追つて行き、駕籠は舞臺へ下ろす。もう一人これを窺ふ駕籠へ掛るを、駕籠の内より切倒して、賴兼、羽織、衣裳、着流しにて、抜身を提げ出る。鶴之助立ち戻り、この體を見てびつくりする。お菊、戸平、この物音を聞いて、内より門の戸を押へてそつと表を窺ふこなし。鶴之助、下駄を出し、賴兼が前へ直し、門口を開けに掛る。開かぬゆゑ戸を叩き、開けに掛る、戸平、戸を押へて居ながら鼾を掻く。

雷　ちつと賴みませう〳〵。

ト　無理に門口を開け、賴兼血刀を提げて内へはいり、戸平、お菊是を見てぎよつとして、ぶる〳〵慄へる。

賴兼　水。

雷　ハツ。モシ、御無心ながら、水をちつと下さりませ。

お菊　ハイ。

ト　怖々柄杓に水を汲み、遠くから鶴之助に渡す。鶴之助、刀へ水を掛け、手拭にて拭く。この内、お菊、戸平、慄へて居る。賴兼刀を納めて手水を使ひたきこなし。

雷　御無心ながら、お手水を上げて下さいませ。

ト　戸平、盥へ大釜の湯を汲んで、怖さうに遠くから出す。賴兼手を洗ふ。お菊、心得て手拭ひを出す。賴兼この手拭を取らうとして鶴之助に合圖する。鶴之助、心得て手拭を出す。懐中より小菊鼻紙を出す。是にて手を拭く。このうち、お菊、茶碗を清め、茶を汲んで出す。一口呑んで、

賴兼　彼れに褒美を取らせい。

雷　ハツ。

トうろ〳〵して居る。頼兼駕籠へ乗る。鶴之助、頼兼の脱ぎ捨てたる下駄を取らうとする。

頼兼　矢張その儘。

雷　ハツ。

ト是にて雷、下駄を殘し、駕籠について向ふへはいる。お菊、戸平、呆氣に取られ、向ふを見送り暫く見て居る。

戸平　關取の雷めがついて失せたから、あれが頼兼どのか知らん。

お菊　ほんにあんまり怖さに氣がつかなんだ。あれはいつぞや曲輪でお目見得した、殿樣ぢやわいなア。

ト言ひながら門口へ出ようとして、鶴之助が置いたる下駄に躓づく。

是はマア、下駄を忘れてお出でなさんした。

ト取つて門口へ出て、

モシ、お下駄がござりまするぞえ。モシ、お下駄が、

戸平　アヽ、打つ捨やつて置いたがよい。なんぼ大名だと言つて、人の內へ來て湯の水のとぬかして、碌に禮も言はずに、ついと歸り居つた。

お菊　これいなア、其のやうに言はしやんすな。どのやうに願ふたとて、あのやうなお歷々さまが、こちの內へお出なさるゝとは、冥加ない事ぢやわいなア。

戸平　なんの冥加がないか、生姜ないか知らないが、こんな下駄を。

ト取りて、

鼻緒ばかり結構だ。そこらへほかして仕舞ふがよい。

ト戸平、下駄を下の方へ投り出す拍子に、この下駄の片足、長火鉢へくばる。二人是を知らず、

そして何か氣味の惡い今の樣子。却つてこつちへ尻の來るやうな事があつては迷惑だ。

ト表の戸を閉め、

何を言つて來ようも知れぬ。その時は知らぬと言つて居るがよい。與五郎が歸るまで、お菊、奧へおぢや。

お菊　アイ。

ト戸平、お菊、暖簾口へはいる。向ふより與五郎、以前の形り、お園、やつし、前垂、襷、下女の形りにて、岡持ちを提げて二人出て來る。花道の中にて、

與五　ほんに、まだ申して置かねばならぬ事がござります。太四郎と云ふ奴は、殿さまの御家中へ入り込みまする柄卷師、今日お前を貰はうと申しまするも、てつきり

アリヤ、お前さまのお身の上を探りに來たに違ひござりませぬ。まだしもそのお腹は脊孕みとやらで、目に立たぬ仕合せな御懷胎。必ず誰がとがめましても、病ひに違ひないと仰つしやりませい。

お園　そりやモウ、隨分合點して、人目に掛らぬやうにして居れど、兎角心に任せぬは朝夕のとりなり、しつけぬ業と斯うした身なれば、そしてマア、さぞや不調法なとそなたの氣苦勞が一杯であらうと思へば、それぱつかりが氣の毒ぢやわいなア。

與五　御勿體ない。誰あらう、足利賴兼公の御臺玉園御前さま。殊に御懷姙の御身を此やうな、なされもつけぬ御苦勞をさせまするも私が不甲斐なさ。ほんに／＼、私こそ、寐た間も案じぬ暇はござりませぬ。

お園　サア、それ故にわしが思ふにも、そなたの連れ添ふあのお菊が、國から尋ねて見えたこそ幸ひ、姬御前は相互ひと云へば、此樣子を打ち明し、共々に力になつて貰ふたら、少しは心も。

與五　イエ／＼、そりや惡うござりまする。なんぼ私が女房でも、一年餘りも在所へ置き、別れて居りましたあのお菊、殊にちつと疑ひ深い生れ性、とつくりと居着くまでは、迂濶に言ふては惡うござります。それに又兄戶平もあの氣質と申し、母にさへも隱しまする一大事。なんであらうとマア私次第にして、もちつと御辛抱なされませ。時に、安產の守りも受けて參りましたが、後によい折があらば、あなたのお守りへ入りて上げませう。何は差置き、道々申し上げた事をお忘れなされまするなえ。

お園　サア、そりや吞み込んで居るわいの。

與五　左樣ならば、私がお先きへ。

ト門口へ來り。

是はなんだ、早い戶のたてやうだの。

ト戶を開けて內へはいる。奧をそつと覗き思ひ入れ、お園も內へはいる。伽羅の匂ひする思ひ入れ。與五郞こちらへ來る。

あの太四郞も、奧に聲が致します。

トお園が顏を見て居ながら、同じく伽羅の匂ひを聞く思ひ入れ。始終合方。

お園　ハテ、只ならぬ香の薰り。

與五　成程、先つきの弔ひの匂ひよりは格別だわえ。

お園　正しくこの香氣は、我君賴兼公御祕藏ありし薄曇り

と云ふ名香。それかあらぬか、ハテ、心得ぬ。

ト與五郎もあたりを匂ふ、火鉢の煙りを見つけ、下駄を取上げて能く〳〵見て、

與五　こりやコレ、賴兼公のお召しなされた伽羅の下駄。

お園　ドレ。○いかにも是こそ覺えある、御祕藏の名木。

與五　いつぞや曲輪に於て、御諫言の種となしたるこの下駄が、どうして爰へ。

お園　不思議と薰りて知れたるは。

與五　どう云ふ譯か。ハテ、合點のゆかぬ事だわえ。

ト奧にて、お菊、

お菊　そんなら行つて、私が見て來ようわいなア。

與五　アリヤ、女房お菊が聲。ソレ、今のぢやぞや。

お園　合點ぢやわいなア。

トうなづく。お菊奧より出る。與五郎下駄を隱す。

イエ〳〵、わたしや何うあつても、そんな事は嫌でござんすぞえ。

與五　ハテ、おぬしもマア、嫌と言つても、一旦約束したからは、おれが遣らねばならぬ。

お菊　ヲヽ、こちの人、戾つてかいなア。お前方を尋ねに行く所であつたわいなア。

與五　ナニ、おらア、おぬしを尋ねに行つて、一遍そこら中を探しても知れぬから、是非なく歸る道で、このお園に逢ふて、連れ立つて歸つたのさ。

お菊　エヽ、そんならお前は、アノ、お園と連れ立つて、一緒に歸らしやんしたのかえ。

お園　アイ、道でお目に掛つて、一緒に歸りましてござんす。

お菊　そりや、マア、能う一緒にお歸りなされましたなア。

トつんとして下に居る。

與五　イヤ、コレ、お菊、おぬしも聞いたかは知らぬが、今日このお園を嫁に呉れろと云ふ人があつて、丁度宜い加減の相談ぢやと思ふて、道々口の酢くなるほど勸めても、嫌のなんのと我儘な事ばかり言ひ次第。亭主が死んでから、一家一門も無い獨り身を、朋輩の好しみでおれが世話するのも、その亡くなつた亭主に恩返しだと思つて、お袋や兄貴を賴んで下女分にして斯うして置くからは、マア、畢竟おれが爲めには妹も同然の身。そのおれが約束した事を、嫌だと言つて詰まるものか。

お園　イヽエ、さうばかり言ふては、私が惡いやうなれ

ど、連添ふお人へ別れてから、今に此のやうな病身な役に立たず、人さんの所は愚か、斯うして心易うお世話になつて居ながらも、何一つ滿足には致しませんわたしぢやもの、却つて後で愛憎盡かしが出來ては氣の毒さ。それでお斷り申しまする。必ずそんな世話はよしになされて下さりませえ。

與五　アレ〳〵、ア、云ふ事を言ふわな。たとへどう云ふ事があらうとも、先づ一旦おれが世話になりやア、おれが云ふなりになるのが世上の義理と云ふものだ。その義理のある事を思はずに、恩も知らいでは、人間が役に立つものか。

お園　サア、その義理を思ふに依つて、行くまいと云ふのでござりますわいな。

お菊　成程、さうでござんせう。義理を思ふから行くまいと云ふやうに見えるぢやて。

與五　義理を思ふなら、失しやがつたがよい。片意地ばつかり吐かしやアがる。宜い〳〵、さう云ふ事なら、いつそ、どつちへも行かぬやうに、くり〳〵坊主にして吳れべい。

ト奥へ聞えるやうに言ふ。

お園　そりやモウ、お世話になつて居るわたしなれば、尼になりと坊主になりとしたがよいわいなア。

與五　おのれ、その口を忘れやアがるな。

お園　忘れたうても、嫌ぢやと思ふ事は、アイ、死んでも忘れは致しませぬ。

與五　うぬ、見せしめに、撥鬢奴にそり下げて吳れう。

ト豆腐切りを持つて振上ぐる。お菊これを留める。奥より太四郎、老母、戸平、出て兩方へ隔て、宥める。いづれも捨ぜりふ。

お菊　コレ、お前が其のやうに息せい張つて、腹立てる事はござんせぬ。お園さんの嫁入を嫌がらしやんすは、なんぞ譯があらうわいなア。

戸平　サア、そんならその譯をぬかしたがいいぢやアないか。

與五　ハテ、おぬしが知つた事ぢやアない。こつちへ退いて居やれ。ヤイ、お園。嫌だと云ふ譯をぬかしやアがれ。

お園　譯はなんにもござんせぬ。高で嫁入するのが嫌ぢやに依つて、始めからお前の世話で、斯うして居るのぢやござんせんかえ。

ト戸平、お菊にそれ見たかと顔で知らせる。
與五　それでもおれが人に頼まれたからは、嫁入りさせにやアおれが立たぬわ。
お園　お前が立たぬと云ふて、わたしが嫌な事は參りませぬ。
與五　さうぬかしやア、叩きのめしても遣らにやアならない。
お園　叩かれても、行く事は嫌ぢやわいなア。
與五　うぬ、モウ、料簡が。
ト寄らうとする與五郎を、戸平、太四郎、留める。老母はお園を宥める。お菊も共々留める。この内いづれも捨ぜりふ宜しく、與五郎はそこらにある物を、手に掛り次第、お園に中らぬやうに、舞臺中へ投げ散らす仕組宜しく、とゞ田樂串を束ねたまゝ投げ散らす。この田樂串思はずお菊が左りの目へ中る。是にてはつと目を押へ下に居る。戸平これを見て、
戸平　ヤレ、危ない。怪我はせぬか。どうした〳〵。
お菊　イエ〳〵、大事ござんせぬ。
ト手拭を出し目を押へ思ひ入れ、是にて皆々びつくりして、
皆々　どうした〳〵、怪我もせぬか。
ト皆々お菊へ立ち掛る。
戸平　今の田樂串が中つたさうな。
與五　これもみんな、おのれから起つた事だぞよ。
太四　ハテ、モウ、宜いわいのう。又了簡もござらうわさ。
與五　イエ〳〵、モウ、了簡がなりませぬ。いつそ叩き出して仕舞ひます。
太四　是はしたり、マア〳〵氣を靜めて、こつちへ出さつしやい。
ト無理に門口へ連れて出て來る。
お園　あのやうな事言ふて、皆さんの手前も、外聞が惡いわいなア。
老母　ハテ、マア、爰に居ては氣が立つて惡い。マア、奥へござれいのう。
與五　こなさまの手前も、わしが立ちませぬ。
太四　そりやア尤もだか、どうか仕樣もあらうわさ。
與五　あんまり我儘をぬかしやアがる。
太四　マア〳〵、こつちへござりませ。
ト與五郎、太四郎、捨ぜりふにて、無理に花道へ連れ

てはいる。老婆はお園を無理に奥へ連れてはいる。戸平、お菊、殘る。合方。

戸平　どうした。きつく痛むか。飛んだ事をして退けた。

お菊　イエ、モウ、宜うござんす。痛みはモウ、やみましたわいなア。

ト仕掛け物にて　お菊、左の目腫れたる思ひ入れ。

戸平　ハテ、怪我と云ふものはおつかないものだ。なんの要らざる事で、とつけもない事を仕出來したわえ。

お菊　與五郎どのは、どこへ行かれましたえ。

戸平　あの二人を側へ置いては、いつまでも果しがないから、太四郎どのが外へ連れて行かれたさうだ。

ト戸平、煙草盆を提げて出て、

イヤ、お菊や、なんのおぬしやア、マア、二人をどう思つて居やる。

お菊　どう思つて居るとはえ。

戸平　さればさ。先つきも言ふ通り、與五郎とあのお園はなんでも樣子があるに違ひはない。ハテ、なぜと言やれ、おぬしがこつちへ來ぬ内に、何處からとも知れず連れて來たあのお園。殊に腹には中分のある樣子ぢや。折折おれがお袋に尋ねて見りや、病ひだと言うて居るが、一日々々、日が經つに從がつて、カサの見えるあのお園が腹。どうも、おりや怪しいと思つて居るよ。

お菊　それでもわたしが聞いたには、あのお園さんと云ふは、ありや與五郎どんが恩になつた朋輩衆のお內儀さんで、その連合ひも死なしやんしてから、是非無う世話せにやならぬ義理で、奉公しようにもお腹の病ひがあるに依つて、それであのやうにして居やしやんすげな。

戸平　それがさうだやら、誰も知つた者はない身の上話。時に、合點の行かぬは今與五郎が落した紙入れ、一寸開けて見た所が、安產の守りがある。是を見やれ。

ト紙入れより守りを出し、お菊に見せる。お菊見て、

お菊　ほんにこりやア安產のお守り。

トむつとする思ひ入れ。

戸平　あれが紙入れにその守りがあるからは、何とこいつは可笑しいぢやないか。

トお菊いろ〳〵考へ、

お菊　そんなら、こりやこちの人の紙入れに違ひござんせんかえ。

戸平　ヲヽ、サ、今の騷動に落したを、おれがソッと拾つて置いたよ。

お菊　戸平さん。そりやマア、ほんにかいな〳〵。
ト腹立つこなし。
戸平　なんのおぬしに嘘を言ふものだ。コレ、必ず腹を立ちやんな。だが、ありやモウ屹度違ひはない。しかも、腹な子も矢つ張り與五郎が孕ませた餓鬼ぢやわいの。
お菊　エヽ、聞えませぬ、與五郎どの。なんぼ賤しい不束な私でも、女夫と云ふ名がつくからはお前の女房ぢやござんせぬか。去る者は日々に疎しとやら、便りのない身を知つて居ながら、たとへ少しのうち別れても、都の花にわたしを見替へる心になつたと云ふは、日頃に似合はぬ胴慾な、情けないお心いき。わしや何ぼうでもお前と縁切る事は嫌ぢや〳〵わいなア。いかに愛想が盡きたとて、酷たらしう此やうに生れもつかぬ片輪にして、一倍愛想を盡さうとは、あんまり邪慳な與五郎どの。そりや、お前、聞えませぬ〳〵。
戸平　道理ぢや〳〵、尤もだ。こりやア確かに女めが入れ智慧。身元の知れぬ風來者。今宵中に屹度吟味して、愈愈それに極まつたら、ぼいまくるが當座の腹癒せ。
お菊　ぢやと云うて、それぞと云ふ確な證據を見ぬ内は。
戸平　ハテ、あれほど確かな證據の懷胎。

お菊　もし又、ほんの病ひと云ふなら。
戸平　その時飲ませる藥がある。
ト最前の藥を出し、
コレ、この藥を半分程、水に廻して飲ませさへすれば、忽ち知れるこの妙藥。
お菊　シテ、この藥は。
戸平　月澱みの下ろし藥。
お菊　エヽ。
ト氣味惡きこなしにて、
アノ、これが。
戸平　ヲヽ、と言うて飲むならば、腹も病ひにきはまる。若し又嫌と言うて飲ませぬ時は、それこそ孕んだ與五郎が種。小の蟲を殺し、おぬしが胸をさつぱりと、跡腹病まぬおれが配劑。なんと良い藥であらうがや。
ト お菊、藥を見て、
お菊　スリヤ、聞き及んだ下ろし藥。
ト思ひ入れあつて、
人の命を助けるこそ藥の德と言ふべきに、現在人の命を取る、藥と知つて飲ますからは、この世からなる鬼同然。

戸平　鬼になつても、蛇になつても、夫を思ふが女の操。
お菊　せまじき事とは思へども、見替へられたが腹が立つ。
戸平　サア、そこが女の眞實。憎いと思ふあのお園め。
お菊　金輪奈落、問ひ詰めて。
戸平　腹の病ひを糺すが肝心。
お菊　愈々あれが懷胎なれば。
戸平　與五郎が子に違ひない。
お菊　もし又隱すものならば。
戸平　覿面知れる早流し。
お菊　飮むか。
戸平　飮まぬか。
お菊　生死の藥。
戸平　必ずぬかるな。
お菊　心得ました。
戸平　奧で吉左右待つて居るぞよ。
ト唄になる、戸平奧へはいる。お菊殘る。合方。藥の包みを懷中し。目の痛む思ひ入れあつて、手桶の水に顏を寫し、能く〱見て、
お菊　女子は髮形とやら、いとゞ不束者を此やうに。
ト烏渡泣き、
ほんに今日はマア、此のやうな怪我をするはしか、まだ母さんのお位牌へ御回向も申さなんだ。
ト持佛の位牌を取つて來り、
思出すさへ淺間しい。母さんの身の成行き。よしない思違ひの悋氣ゆゑ、現在の夫與右衞門どのゝ手に懸り、死なしやんしたその時の心は、マア、どのやうにあらうぞ。今のこの身に引き競べては、さぞ口惜しかつたでござんせう。悋氣嫉妬は姫御前の夫を大事と思ふから。なんの仇に思ふ氣で、どうして悋氣がしられませうぞいな。今の兄さんの言はしやんす通り、先きの女子が皆いたづら。高いも低いも、わしと云ふ女房のあるものを、男にせうと云ふやうな無理な戀路があるものかいなア。思へば口惜しいこの守り。女の念力あるならば、安產させて良からうに、見るも中々むやくしい。コウ〱〱食ひ裂いて、罰も報いも厭はゞこそ、恨みを云はにやア腹が癒ぬ。どうした因果で此のやうな、淺間しい心を受けつけて下さんした。思へば母さん、お前が恨めしい、恨めしうござんすわいなア。
ト位牌に取つき、泣きに泣き落し、矢張合方。奧に

て、

お園　イエ〳〵、たとへどなたがどう仰やつても、わたしや嫌でござんすわいなア。

　ト お園いひながら出て、

お菊さん。爰にお出でなさんしたかいなア。ほんにお前の手前もわたしや面目無うござんす。定めし先つきの事は蓮葉な者ぢやとお思ひなさんせうが、ついした事であのやうに、與五郎さんと云ひ合ひました。跡ではつと氣がついて、恥かしうてなりませぬ。必ずモシ、笑うて下さりますなえ。ホヽヽ。そしてマア、與五郎さんは、どつちへ行かしやんした事ぢややら。

　ト 花道の方を見る。

お菊　あのやうに言合つても、矢つ張與五郎殿が戀いかえ。

お園　さうではござんせぬか、先つきのはありやつい言葉の言ひ掛り、張合ひでござんしたわいなア。

お菊　それでわしに、わざと疵をつけたのでござんすかえ。

お園　ソレ〳〵、ほんに先つきは確かお前の顏へ、何か中りましたなア。

　ト 言ひながらお菊が顏を見て、びつくり

エヽ、目が其のやうになりましたかえ。是はしたり。そりやマア、怪しからぬ事が出來ましたなア。さぞ痛むでござんせう。

　ト お園、側へ寄つて介抱しようとする。

お菊　イエ〳〵、大事ござんせぬ。構うて下さんすな。

お園　そりやモウ大抵の事ぢやござんすまい。どうぞよい藥を上げましたいものぢや。

お菊　アイ、善い藥を持つて居ります。お園さん、慮外ながら、その柄杓へ水を汲んで下さんせ。

お園　アイ〳〵。

　ト お園、手桶の水を柄杓に汲んで、お菊が側へ持つて來て、

是で宜うござんすかえ。

お菊　アイ。

　ト 柄杓を前へ引き寄せて、藥をソツと入れながら

お園さん。そのお腹のは、そりや病ひかえ。

お園　アイ、お恥かしながら、こりやわたしが持病でござんすわいなア。

お菊　イヤ、さうぢやござんすまい。なんとその譯をあり

やうに言うて聞かせて下さんすまいか。

お園　お菊さんとした事が。なんのわたしが嘘を言ひませうぞ。こりや、病ひに違ひござんせんわいなア。

お菊　イエ〳〵、なしぼ隠さんしても知れてある。そりや與五郎どのとお前の仲に、儲けさんしたヤ、であらうがな。

お園　エ、。

お菊　びつくりする事はござんせぬ。隠さずと打明けて言うて仕舞うて下さんせ。

トきつと言ふ。お園思ひ入れあつて心を落着け、

お園　お菊さん、そりやお前、とつけもない事言うて下さんす。能うマア積つても見やしやんせ。私が身の上は様子あつて夫に別れ、思ひ設けぬこの持病。是非なう與五郎さんをお頼み申し、今このやうにお世話になつて居る私。どうしてマア其のやうな、不義がましい事を致しませうぞ。ほんに今日の天道さまかけて、そんな心は露程もござんせぬわいなア。

トお菊もぢつと心を靜めて、

お菊　それ程に言はしやんすからは、よもや違ひはござんすまい。

お園　モウ、なんの〳〵。誓文、微塵も詐はりはござんせぬわいなア。

お菊　さう云ふ事なら、私が願ひは聞屆けて下さんすまいか。

お園　そりや私が身に叶うた事なら、なんなりと。

お菊　外の事でもござんせぬが、この薬を飲んで下さんせ。

ト柄杓をお園の側へ押しつける。

お園　そりや、なんの薬でござんすえ。

お菊　そのお腹のが眞こと持病に違ひなければ、身にも障らず毒にもならず、もし又懐胎に極まらば、流れて仕舞ふこの薬。

お園　エ、。

お菊　是さへ飲んで下さんすりや、疑ひもない、恨みもない、嫌と言うて飲まんせねば、わたしが心が晴れませぬわいなア。

お園　アノ、この薬をわたしが飲まねば、お前の心が晴れませぬかいなア。

お菊　サア、お前に限つて、其のやうな事があるまいけれど、因果なわたしが生れ性で、ついさうぢやと思ふ事が、なんぼでも忘れられぬ。是がわたしが病ひでござんす。

どうぞこの藥を飲んで、わたしが心を晴させて下さんせ。無體な事を言ふやうなれど、片輪な心を不愍と思うて、慈悲ぢや、情けぢや、お園さん。一口なりと飲んで、わたしが胸を晴させて下さんせいなア。

ト泣きながら言ふ。お園いろ〳〵こなしあつて、

お園　成程、そりや尤もでござんすけれど、覺えのないこの身と云ひながら、世の道ならぬこの藥。私がやうな病身者が、ひよつと身體へ障つた時は。

お菊　惡いに依つて飲まれぬかえ。

お園　イヤ、サア、さうでも無けれども。

お菊　そんなら飲んで下さんすか。

お園　ぢやと云うて、この藥は。

お菊　飲まれぬかえ。

お園　サア、それはな。

お菊　飲んで下さんすか。

お園　サア。

お菊　嫌かえ。

お園　サア。

お菊　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

お菊　飲ましやんせぬは、樣子があるのか。

お園　サア。

トぶろ〳〵しながら、ウロ〳〵する。向うよりばたばたにて奴、竹の丸の紋つきの箱提灯を持つて駈けて出る。跡より渡邊民部、大小、上下、衣裳にて、同じく駈けて出る。これに侍ついて出る。門口へ來て、

民部　案内致して、與五郎を呼び出せ。

奴　ハツ。〇頼みませう。

トお園これを聞いて

お園　アレ、どなたか案内がござんすわいなア。

ト是をしほに立たうとする。お菊留めて、

お菊　どなたでござんす。

奴　イヤ、與五郎に、急にお目に掛りたい義がござつて、參つた者でござる。

トお園、このうち提灯の紋つきを見て、氣のつくこなし。

お園　ハイ。左樣ならば、與五郎さんをわたしが呼んで。

ト又行かうとする。お菊、立廻りにて留める。

お菊　イヤ、與五郎は留守でござんす。

奴　スリヤ、御他行とな。

お菊　用があるなら、あしたござんせ。今は取込みでござんす。
奴　お聞きあられましたか。
民部　ナニ、與五郎は他行とな。ハテ、なんともはや。○然らばその方に申しつくる。そちはこの邊に居て、是非與五郎に對面致して言はうには、豫てその方は御勘氣の身ながらも、賴兼公に近よる者ゆゑ、御諫言申し呉れよと賴み置いたる處、殿には御不埒增長して、今日かの傾城高尾を身受けあつて、椎のお館へ入らるゝ段、一家中は手に汗、禁庭への聞えを憚かる事、又今宵船遊山の御遊興、お留め申さんも、諸士の我々はお目通り叶はず。さるに依つてその方參つて何とぞ御意見の加へ、今宵是非お館へお入りなさるゝやうに致し呉れよ、この事を打ち捨て置かば、お家の大事に及ぶ事、只管賴むと、この通り與五郎に屹度申し聞かせ、直ぐさま彼の船へ、この提灯にて案内致せ。合點か。
奴　畏まりました。
民部　與五郎にその旨屹度申せ。
奴　ハッ。
ト奴、下の方へはいる。

民部　家來、供せい。
ト民部、思ひ入れあつて、侍を連れ、向うへ駈けてはいる。やはり合方。お園今の樣子を聞いたる思ひ入れ。
お園　今のを聞いてはお家の大事。
ト花道の方へ行かうとする。お菊裾を捉へて、
お菊　お園さん。こりやどこへ行かしやんす。
お園　大切な今のお使り。與五郎さんを呼んで來て。
お菊　イヽエ、そりやならぬ。
お園　エ。
お菊　この藥は飲んで下さんせぬその內は、こゝ一寸も動かす事はなりませぬ。
お園　スリヤ、どうあつても。
お菊　アイ、いつまでも爰は去らさぬ。疑ひ晴らし、サア、ちつとも早う飲んで下さんせ。
ト柄杓を差しつける、お園、お菊が側へ詰寄せ、
お園　そりや、お菊さん。あんまりでござんす。人にこそよれ、其のやうな道ならぬ事をするやうな、さもしい心ぢやござんせぬ。尤も戀は心の外とやら、疑はしやんすは無理ならねど、わたしが身には打明けて、言ふに言は

れぬこの持病は、何を隱さう大切な。
お菊　なんとえ。
お園　サア、大切な病ひぢやと、お醫者方の指圖。滅多な藥はどうも飲む事はなりませぬ。
お菊　それ、さう云うて下さんすのが情けない。病ひに逢ひない事なら、構ひにならぬ藥ぢやもの、それを飲まぬと言はしやんすは、どうも樣子があるに違ひない。
お園　そんなら心の晴れるやうに、與五郎さんを呼んで來て、二人一緒に言ひ譯しよう。
ト お園行かうとするを、お菊引き戻して、
お菊　さう云うて、こりや爰を逃げようでの。
お園　ぢやと云うて、わたしが身に、ちつとも曇りはない事を。
お菊　言うたが無理なら無理にして、藥の飲まれぬそのお腹を、わたしが鳥渡。
ト 懷ろへ手を入れようとする。立ち廻りのうち、向うより鶴之助、高尾丸と云ふ書つけのある、薄縁の裏を出して引被りて出て來る。夕立、雷の音。是にて駈けて舞臺へ來り、
雷　與五郎は內にか〳〵。

ト 言ひながら內へはいり、
お菊　エヽ、あたしつこい。與五郎殿は留守ぢやと云ふのに。
雷　なんだ、留守だ。與五郎が留守だ。それでは詰られいわえ。
ト このうち、お園は表へ逃げようとする。お菊は逃がすまいとせり合ふ。立ち廻り、鶴之助ついて廻り、
なんだ。柄杓を引つ張合うて、伊勢參りか順禮ぢやアあるまいし。コレサ、與五郎が居にやア詰らねえ。その譯は斯うだ。〇今日船遊山に出た所が、アノ殿さまが高尾が云ふ事を聞かねいと云つて、度々刀に手を懸けさつしやるが、アノ短氣な殿さまだから、どんな事を仕樣も知れないが、その意見をしさうな侍はひとりも無い。お側に居た女郎も仲居も、それを見るとおれと同じ事で、おつかながつて逃げて仕舞つた。それぢやア確かに高尾はやらかされる。あんな所へ踏込んで、意見するは與五郎だ。參つてくれりや宜いなア。
お菊　そんな事、聞きたうないわいなア。
ト 鶴之助を引退けお園に掛る。立廻りあつて
雷　與五郎やい〳〵〳〵。

ト向うへ駈けてはいる。
お菊　與五郎どのゝ來ぬ内に。
トお園を引き寄せ、藥を飲まさうとする。與五郎、向うより傘をさし出で來り、花道、中の處にてこれを見て、
與五　女房ども。コリヤ、何をする。
お園　お菊さんが、わたしに下ろし藥を。
與五　エ、。
ト驚き、花道に傘を捨てゝ駈けて來り、お菊を引き退ける。立ち廻り。
こゝ構はずと早う〳〵。
トお園、花道の方へ行き、與五郎が捨てたる傘を取つて、さして向うへはいる。お菊、お園が跡を慕うて行かうとする。與五郎引き戻す。立ち廻り、戸平走り出で、挽臼を取つて與五郎に投げつける。身をかはす。この石臼、お菊が足に中る。アッと思ひ入れにて足を押へる。戸平、以前の木刀を取り、
戸平　それを取つて、ぼつかけろ。
お菊　合點でござんす。
ト立ち廻り。足の痛む思ひ入れにて、跛引き〳〵一腰を差し、豆俵を冠つて、お園が跡を慕ひ、向うへはいる。始終雷鳴、雨車。舞臺は烈しき立ち廻り。よいキッカケにて　　ひやうし幕

幕の内より始終雨車、雷鳴の音にて引き返し、
向う中二階まで打抜き、中洲澪の掛り。前一面の波幕。見附柱に土橋の側に樋の口。三間の間、一面の土手。人の上る事あり。柳の立木、古井戸、見合せ。この道具にて雷鳴の音、稻光りにて幕明く。
ト本雨降る。向うよりお園、以前の形にて傘をさし、風烈しき思ひ入れにて、こけつまろびつ、耳を塞ぎ出で來り、直ぐに舞臺へ來てばつたりとこけ、耳を塞ぎながら俯向いて居る。同じく跡よりお菊、以前の形、豆俵を冠り、駈けて出で來り、土橋の方に立つて窺つて居る。少し風雨靜まりし景色。お園そつと顏を上げて空を眺め、
お園　ア、嬉しや〳〵、少しは雨も止んださうな。ほんに今の雷鳴は恐ろしい音であつた。しかしながら、なんぼう雷鳴が怖うても、先つきのお菊程は思はなんだ。

お菊　ト後ろより、
　それ程わたしが怖いかえ。
　ト俵を取つてきつと見る。お園びつくりして慄へなが
　ら、
お園　お菊さん。どうしてお前は、そこに居やしやんした
　そいなア。
お菊　知れた事だ。藥を飮ましやんせぬその內は、お前の
　側は何ぼうでも離れませぬわいなア。
お園　エ、。
お菊　サア、今爰で飮ますぞや。
　トあたりを透し見て、
　幸ひのものがあつたわいなア。
　ト榮螺の貝を拾ひ、雨水を掬ひ、藥を入れ、
　サア、是を飮んで下さんすりや、なんにも恨みはござん
　せぬ。早う飮んで下さんせ。
お園　サア、外の事なら何んな疑ひ晴らしでもせうけれど、
　是ばつかりは見遁して下さんせ。拜みますわいなア。
お菊　イエ〳〵、わたしが方から拜みますわいなア。些つ
　となりと飮んで下さんせ。
お園　それでも何うも。

お菊　無理にわたしが飮まさうか。
お園　サア。
お菊　サア。
お園　サア。
　トお菊、無理に藥を飮まさうとする。立ち廻りにて、
　この貝の藥を取つて捨てる。お菊びつくりして
お菊　エ、、大事の藥をこぼしたなア。エ、、こなたはの
　う。
　トお園が簪を取つて引付け、腹の立つこなし。
　藥はなけれど、斯うするわいのう〳〵〳〵。
　ト是より宜しく鳴物になり、兩人立ち廻りになり、中
　二階へ屋根船二三艘引き出す。是に團子提灯一づつつ
　けてあり、玉屋の船を引き出し、花火をとぼす。舞臺
　は船の鳴物にて、よいきつかけに高尾丸の船を引き出
　す。本雨降つて來る。傘のたて、宜ききつかけにお菊、
　木刀にてお園を切る。是にてお園ウンと倒れる。お菊
　見得にて息を繼ぐこなし。向うより與五郎、以前の形
　にて、一本差にて駈けて出て、船の方を見て思ひ入れ
　あつて、思はずお園に行當り、びつくりして、とつく
　りと見て、

與五　ヤア、お園さまを何者が殺した。
　トいろ〳〵呼び生ける事あつて、
南無三寶、事は切れたか。ホイ。
　ト思ひ入れ。
お菊　そりや、わたしが殺しました。
與五　ヤア、わりや女房菊か。
　ト髻を取つてぐつと引き伏せ、
ヤイ、うなア〳〵、能くあのやうな事ひろぎアがつたな。
お菊　コレ、與五郎どのえ。それ程までにあのお園さんが可愛いかいなア〳〵。
與五　やかましいわえ。妥な人非人め。あの女中を殺しては、生きても死んでも、うぬ、どうしたら腹が癒ようぞ。斯うして〳〵〳〵、弄り殺しにしてくれべい。觀念なせ。
　ト引きつけて、いろ〳〵こづく。
お菊　イヤ〳〵、なんぼうでも一人は死なぬ。こなたも冥途の道連れ。さうぢや。
　ト起き返る所を見事に投げのけ、起き返へる所を一太刀斬る。凄き合方にて宜しく立ち廻り。お菊苦しみながら、土手の上を逃げ廻ろうち、いろ〳〵あつて仕組宜しく、トゞ土橋の上にて切り倒す。止めを刺す。大雷鳴り、本雨降る。是にてお園氣づき、うんと思ひ入れ。與五郎驚き、駈け寄つていろ〳〵介抱する。
與五　ヤア、お心がつきましたか。
　ト身内を度々見て、
こりや、どこにもお疵がない。
お園　何かは知らず一刀に切られたと思うたばかり。それからは知らなんだ。
　ト思ひ入れ、
白らが身に障りがなければ、お腹なヤ、に氣遣ひはない。エ、、。
　ト嬉しき思ひ入れにて、手を合せ拜む。與五郎これにてそこらを探り、以前の木刀を見つけ、ぎよつとして
與五　扨こそ、この木刀で打つたので、お氣を失しないなされたのか。さうとは知らず、はやまつて、オ、、、、ホイ。
　ト思ひ入れ。鶴之助、土手の上より駈けて出で來り、與五郎を見て嬉しき思ひ入れ。
雷　おぬしは與五郎か。遲かつたわえ〳〵。たつた今柱

五立目毒害の場（繪草紙より）

川の澪にて、殿さまが高尾を船から下げ斬りにさつしやつたわえ。

お園　さう云ふ事が、お上へ知れては。

與五　お家の大事。

雷　與五郎。三千兩、棒に振つて仕舞つた。

與五　コリヤ鶴之助。このお方をお供して、おぬしは内まで先きへ行つてくりやれ。おれは跡から追つつかう。

雷　合點だ。

お園　そんなら與五郎。先きへ行くぞや。

與五　只今拙者もお跡から。

お園　お菊どのは、どうしやつた。

ト與五郎思ひ入れあつて

與五　ハイ、いんまの先きに歸りました。

ト殺したと云ふ事を隱す。

お園　そんなら、與五郎。早く來やれよ。

與五　あなたを屹と頼んだぞよ。

お園　與五郎。早う來てたもや。

與五　畏まりました。

ト鶴之助、お園、向うへ行かうとする。與五郎も一寸お菊に手を合せ、跡より行かうとする。大どろ／＼にて、お菊が死骸むつくと起き、後ろ髮を引く。お園、鶴之助も引返す。與五郎本舞臺へ來りいろ／＼思ひ入れ。トゞ切り拂ふ。お園、鶴之助、向うへはいろ。與五郎も力足を踏み／＼引戻ろ事あつて、ト　向うへはいろ。大どろ／＼にて

幕

五立目　足利御殿の場　同　床下の場

役名……大江之助鬼貫。醫者飛田杢山。荒波梶右衞門。仁木彈正左衞門。渡邊民部。若君鶴若丸。乳人政岡。荒獅子男之助。

本舞臺、三間の間、結構なる翠簾御殿。眞中に飛田杢山、醫師の形、藥箱を引き寄せ、毒藥を調合して居る。左右に侍二人、上上衣裳にて、種ケ島を構へ、詰め寄せて居る。上の方に鬼貫、大小、上下、衣裳にて立ち掛つて居る。下の方に荒浪梶右衞門、上下衣裳にて詰め寄せて居る。この見得、管絃にて

幕明く。

鬼貫　人目を憚る大切なる藥、篤と調合致せ。

侍一　この場の手詰めを遁れんと、一時遁れ、間に合せ藥、鬼貫公を欺くな。

侍二　見たか。我々が携へたるこの種ケ嶋で、汝が土手つ腹へ風穴だが、李山。

侍一　返答は何うだ。

李山　聊爾あるな御兩所。御覽の通り、お頼みの一藥調合致してござる。鬼貫公を始めいづれも方、御不審の晴らされ、イザ、お受取り下されませう。

ト藥の包を、疊紙に包み渡す。

荒波　出來し召された。

ト藥を取つて、

御兩所お引きなされい。

侍兩　心得てござる。

ト侍の二、種が島を引く。

鬼貫　毒を仕込むは、荒波、その方が役目。

荒波　畏まりましてござりまする。この毒藥をお料理に仕込んで、鶴若丸にお勸め申して、事を計るはたつた今。

鬼貫　必ず拔かるな。

荒波　ハア。

鬼貫　先達て鶴若丸が調伏を般若院萬海に申しつけ置いたる所、持參致せし密法の箱。澁川、是へ。

澁川　ハア。

ト澁川、白木の箱を持つて出る。鬼貫に渡す。鬼貫、箱の內より藁人形を出し、同じく白絹も出して、

鬼貫　この人形に四十四本の釘を打ち、願書は卽ちこの白絹。

李山　その白絹を願書とは。

鬼貫　豫てその方が言ひ敎へたる通りの密書の工夫。漢の張仲が禁法に、けいいしやうのすいてつの油を和し、これを持つて文字を書くに一點の形なし。是をまた人の生血を濺ぐ時は、忽ちこの白絹に文字顯はる。この願書、この人型と共に鶴若丸が居間の下を、戌亥の角に埋め置かば、鶴若が絶命は目の當り。

荒波　いかにも左樣。去りながら何事も素早い政岡。ひよつと李が顯はれた時には、きやつらに冠せようと存じて、コレ、御覽なされい。

ト懐中より一通を出し見せる。

鬼貫　それは。

荒波　これは荒波が僞筆に妙を得たるを幸ひに、政岡が反古を取つて習ひ込み、認め置きたるこの願書。なんと政岡が手蹟にその儘でござりませうが。
ト鬼貫取つて披き、
鬼貫　いかにも、驚き入つたる梶右衞門が僞筆。
杢山　ほんにこりやア、似たとこそ云へ、政岡が正銘正筆、途方も無い似やうでござる。
ト向うにて、
左馬　家來參れ。
ト管絃になり、花道より大館左馬五郎、上下、衣裳、大小にて、跡から奴ついて出る。直ぐに本舞臺へ來て、
是は〳〵鬼貫公には、これにお渡りなされまするか。○荒波。杢山。御兩所いつものお伽は御苦勞に存ずる。
鬼貫　大館左馬五郎。鶴若丸への直勤、大儀々々。
荒波　大切な御家督の若君、隨分々々心をつけて御奉公召されい。
鬼貫　最早鶴若が社參の歸りに間もあるまい。皆々、こなたへ。
皆々　先づお入りなされませう。

ト合方になり、鬼貫、左馬五郎、杢山、侍二人共ついてはいる。梶右衞門、白絹の箱を持つて來り、
荒波　是からこの調伏の箱を、戌亥の角へ。ソレ。
ト行かうとする。後ろへ左馬五郎、この箱へ手を掛ける。
荒波　こりやア誰だと思つたら、大切なこの箱へ手を懸けて何とする。
左馬　イヤ、なんともしないが、何か怪しいこの箱へ。
荒波　詮議しようとは小癪な、鬼貫公の御用箱だ。邪魔せずとそこ退け。
左馬　是非その箱を。
トこの箱を枷に兩人立ち廻りのうち、梶右衞門懷中より最前の僞せ願書を出し、箱の內へ入る事あつて、トド左馬五郎、この箱を引つたくつて逸散に奧へはいる。
荒波　ハテ、危ない事の。人型はあつちへ浚はれても、願書は一寸入れて置いたから氣遣ひはない。したが、あの白絹を捲き上げぬは殘念な事をしたわえ。
ト向うにて「渡邊民部出仕」と呼ぶ。
なんだ、渡邊民部が出仕をする。爰で逢つちやア面倒だ。

こりやア奥へ。ソレ。
トこなしあつて下座へはいろ。又「出仕」と呼ぶ。本神樂になり、花道より黑ン坊の忍び、蒔繪の箱をかい込み、拔刀にて出て來て本舞臺へ來ると、きつかけにて正面の御簾上ろ。仁木彈正左衞門、百日鬘、上下衣裳にて刀を突いて是を見て思ひ入れ。途端に揚幕より渡邊民部、上下衣裳大小にて出て來る。是も忍びを見て思ひ入れ。彈正、下りて來る。兩方より忍びを挾み立ち廻りあつて、忍びの箱を取る。民部、忍びを取つて押へ、しやんと極る。

彈正　こりや、渡邊民部どの。

民部　彈正左衞門どの。御覽なされたか、民部が出仕の先きとも構まず、忍び出でたる不敵者。動くな。
ト刀の下げ緒にて、忍びを括し上げ。

彈正　いかさま、こいつ怪しい曲者。斯くの如く箱をこそ、禁庭よりのお預けある錦の御旗。何者に賴まれた。
ト言ひながら箱を明けて、内に旗なき思ひ入れ。
こりや、大切な錦の御旗が。

民部　なんと致した。

彈正　紛失致した。

民部　エヽ。
ト驚く。忍びの者逃げようとする。きつと押へて。
そりや一大事でござる。彈正左衞門どの。

彈正　これ、まさに賴兼公をお諫め申し、御勘氣受けて逐電せし荒獅子男之助重光、きやつが仕業か、いぶかしい。

民部　イヽヤ、その男之助に限り、上へ對して野心の含む若者ならず。是こそ全く佞人の仕業。盜人め。サア、何者に賴まれた。尋常に白狀なせ。

忍び　そんなら言つて仕舞はう。彈正さまの仰せの通り、錦の御旗を盜んでくれろと、男之助に賴まれたのさ。

彈正　扨こそなア。
ト思ひ入れ。

民部　こいつ、小癪な盜人め。たとへ男之助に賴まれうが、命の的の盜人が責めに掛けぬその内に、白狀するとは新らしい。餘人は格別、この民部がその手で行く某と思ふか。まことの腸を掻き出さにやア、骨を拉いでも白狀させる。何奴に賴まれた。ぬかせ〳〵。
ト繩目の中へ刀の鐺を差込み、こじろ。忍びの者、苦しみ。

忍び　アヽ、痛い〳〵。こりやア堪らねい。斯う骨を拉が

れては。
民部　苦しくば白狀しろ。
　トこじる。
忍び　サア、その頼み人は。
　ト彈正左衞門を見る。
彈正　コリヤ。
　ト思ひ入れ。
　眞直ぐにぬかせ。
忍び　知らねえわ。
民部　吐かせ。
　ト又こじる。向うにて「鶴若君の御歸館」と呼ぶ。
彈正　ナニ、御幼君の御歸館とや。
民部　者共、參れ。
侍兩　ハツ。
　ト下座より侍二人出で、民部の前へ控へる。
民部　我君の御歸館とあれば追つての詮議。この科人めを
　獄屋へ引け。
侍兩　ハツ。立たう。
忍び　エヽ、忌々しい。
　ト又「御歸館」と呼ぶ。侍、忍びの者を引つ立て下座
へはいる。賑かなる鳴物になり、向うより子供二人、
いづれも廣振袖、絹やつしにて花笠を持ちて、綯ひ交
ぜの綱を引いて出る。是に秋草を大分入れたる花籠の
車に仕掛けあり。腰元、跡より押して出る。舞臺へ並
ぶと、花道より若君鶴若丸、壺織衣裳に小さ刀、中啓
を持つて出て來る。一色と桃井、麻上下、大小の形に
てついて出る。跡より政岡、裲襠、衣裳にてついて出
る。いづれも花道へ並みよく列ぶ。彈正左衞門、民部
出迎ふ。
彈正　鶴若君には。
民部　只今御歸館。
兩人　あられましたか。
鶴若　四海の靈山は疎かにして、雲七百里の外に治まる
　と、神慮に叶ひし今日の快晴。氏神八幡宮の祭禮に依つ
　て、足利鶴若丸が社參の歸るさ、一色、桃井、路次の警
　衞、大儀にこそあれ。
一色　ハア、有難い若君の御仰せ。今日氏神の御社參につ
　きまして、御社參のお慰みに。
桃井　申しつけましたる花車の今様、御機嫌に叶ひ恐れな
　がら恐悅至極に存じ奉りまする。

政岡　あれに仁木彈正左衞門、渡邊民部がお出迎ひでござれば、若君さまには先づ〳〵あれへお越しなされ、御尤もに存じまする。
鶴若　いかにもあれへ罷り越さん。方々、參れ。
皆々　先づ〳〵、お入りあられませう。
ト鳴物になり、鶴若丸先きに、皆々本舞臺へ通り、鶴若丸、二重舞臺へ上る。左右に、一色、桃井控へる。
彈正　我君さまには、いつも〳〵御壯健の御容體、殊更氏神への御社參と申し。
民部　誠に御家長久の基と、我々に至るまで。
兩人　恐悅至極に存じ奉りまする。
政岡　お聞き遊ばしましたか、若君さま。御當家におきまして誰ござらう、仁木渡邊の兩人、若君の御社參は御代長久のお祝しでござりまする。
腰元　そんなら、こなさんは、あの花籠を大切に。
ト子供皆々花籠を引く。腰元諸共下座へはいろ。奥より梶右衞門出て來て、
荒波　若君には、只今御歸館あらせれましたか。イヤ、仁木どの。民部どの。政事の儀につき、鬼貫公、御兩所へ御內談の筋がござるとの仰せでござる。イザ、あれへお越しなされい。
彈正　なにとお言やる。政事の儀につき、鬼貫公が我々へ、御相談がござるとな。
民部　國政の御內談とござれば、罷り越さずばなりますまい。仁木どの。
彈正　イザ、渡邊どの。
民部　政岡どの。御前宜しう。
兩人　後刻お目見得仕ります。
ト管絃になり、彈正、民部、梶右衞門ついてはいろ。
政岡　我君さま。首尾よう御社參も相濟みましてござりますれば、是からはいつもの通り、是にて手蹟のお稽古遊ばしませ。
ト桃井と一色、結構なる机を持つて來り、鶴若が前へ直す。
鶴若　いかにも是にて手蹟の稽古。桃井、墨をしたて吳れい。
桃井　畏まりました。
ト墨を磨るこなし。
政岡　サア〳〵、お稽古遊ばしませい。
ト合方になり、鶴若丸、机へ大文字に「二母」と書く。

是はマア見事、能う出來ました。器用な事でござります。去りながら、二つの母と遊ばしたるは、なんぞお心あつて遊ばしたかえ。

鶴若　ヲヽ、この鶴若が二つの母と書いたるは、過ぎ去り給ふ産みの母さま、又は今の母さま玉園さま、この程御行衛知れぬにつき、戀しいと思ひ出して二つの母と書いたわいのう。

政岡　ヲヽ、能う遊ばしました。御器用な事でござりまする。御臺玉園御前さま、賴兼公御放埒ゆゑ、萩原中將さまより御離緣なされんとのお使、諸士の方々にも御當惑の折柄、世を見限りてのお家出、またあなたの産みの母さまは、斯波家のお妹君花の方さま、戀しいと思召しまするも御尤もでござりまする。

鶴若　孤し子となりたるこの鶴若が今の母と思ふは政岡、そなたも乳の母なれば、この鶴若にはこれこの通り、三人の母があるわいのう。

ト二人の母の上に一點を引く。

政岡　是はマア、冥加ないお言葉。エヽ、有難うござりまする。その母と○○現世未來で守り奉る足利の新柱は、これこの中へ鶴若さまを。

ト筆を取つて、三母とある眞中へ一點を引く、鶴若これを見て、

鶴若　コレ、政岡。この三つの母と云ふ字に、なぜ立ての一點を引いたぞ。

政岡　足利の新柱のお前さまを、眞中へ引きました。

ト見て、ぎよつと思ひ入れあつて、

三つの母の眞中へ、立ての一點を加ふれば、こりやこれ毒と云ふ文字。時も時、折も折とて、鶴若君の御手蹟にて、今爰へ毒と云ふ字の顯はれしは、ハテ、心障りな事ぢやなア。

トきつと思ひ入れ。奥にてお膳の刻限と呼ぶ。管絃になり、梶右衛門、盤を捧げて出て來る。侍一、二の膳を持つて出る。是に侍二、つき添ひ出る。梶右衛門、政岡へかけ盤を渡し。

梶右　政岡どの。イザ、お膳を差上げ召されい。

ト政岡、鼻紙を出し口に啣へ、覆面の心にて篤と膳部を改め、きつとなり。

政岡　今日の配膳、器の內を悉く改め見るに、椀の中滯り、こうきの色を顯はせしは、こりや滅多に若君さまには差上げられぬ。お膳番衆は誰ぞ。皆、早う／＼。

侍雨　御膳番衆、々々々々、々々々々。

ト呼び立てる。鬼貫、杢山、付いて出る。

鬼貫　待て〳〵。政岡、控へい。今日の配膳、何事も怪しい事はない。

杢山　お料理の品は、この飛田杢山が立ち合ひ吟味を遂げ毒味はこの鬼貫が篤と致した。氣遣ひなしに、早う鶴若へ勸めい〳〵。

政岡　イエ〳〵、なんぼ鬼貫さまがお毒味遊ばしても、このお膳は、どうも若君さまへは差上げられぬ。

鬼貫　そりやア、なぜ〳〵。

トせいたるこなし。

政岡　危きに近寄らずと君子の誡め。斯の如くこの政岡が見る前で、とつくりとした毒味が無ければ。

皆々　差上げられませぬか。

政岡　差上げられませぬ。

鬼貫　成程、政岡が申すやう、尤もながら、膳番毒味の役人共、清め改むるに改めたこの配膳、鬼貫が吟味を遂げたこの上に、何も怪しい事はない。

ト彈正左衞門出て來り、後ろに樣子を窺つて居る。

政岡　左樣に確かに御覽屆け遊ばしたからは、この政岡が念晴らし、只今この處で、今一度、鬼貫さま、お毒味遊ばして下さりませ。

鬼貫　サア、そりやア。

ト思ひ入れ。

政岡　憚りながら。

ト膳を差つける。

鬼貫　サア、そりやア。

政岡　上がられませぬか。

鬼貫　サア、そりやア。

政岡　なんとでござりまする。

彈正　イヤ〳〵、政岡、控へ召され。鬼貫公へお毒味とは如何致した事ぢや。左樣疑はしくば誰と云はうより、屈竟の毒見がござる。

政岡　彈正どの、この場に於て屈意の毒見とは。

彈正　外でもござらぬ、局政岡。

政岡　エヽ。アノ、わたしにこの毒見を。

彈正　知れた事だ。吟味に吟味を遂げた大切なる配膳、それ程までに疑はしくば、この毒味は。

政岡　イヽヤ、この政岡お毒味は。

彈正　ならぬと云ふは、このお膳に仔細があるか。

政岡　サア、さうではなけれど。
彈正　仔細がなければ、急いで配膳。
政岡　どうござつてもこの配膳は。
彈正　然らば、その方毒味をするか。
政岡　サア、この毒味は。
彈正　ならぬと言ふか。
政岡　サア、それは。
彈正　サア。
政岡　サア。
彈正鬼貫　政岡、なんと。
政岡　ヘイ。
民部　いづれも待たれよ。そのお毒味の致し手は、渡邊民部がそれへ參つて、差圖致さう。
ト管絃になり、民部、先程忍びが持つてはいりたる白木の箱を抱へて出る。
鬼貫　こりやア、誰だと思つたら渡邊民部。
彈正　毒味致し手を差圖しようとは。
民部　いかにも大切な毒味の致してよい致し手がござる故、わざ〳〵民部が罷り出ました。
ト彈正、鬼貫、ぎよつと思ひ入れ。

彈正　そりやア何者。
民部　外でもござらぬ、お手醫者の李山老、一寸お目に掛りたい。
李山　アノ、身共に。
トウロ〳〵、氣味惡き思ひ入れ。
民部　いかにも。
ト李山、こは〳〵這ひ出る。皆々、心遣ひの思ひ入れ。
李山　シテ、御用の筋はな。
民部　その用とは此の一包み。
ト疊紙を見せる。李山、びつくりして。
李山　ヤア、それは。
ト寄らうとする。民部引き廻して押へつけ。
民部　動きやアがるな。サア、尋常に毒味をするか。但しその藥の頼み人を眞つ直に白狀するか。木菟入め、何うだ。
トひしぎつける。
李山　ア、痛い〳〵。なんぼきめつけられても、あの毒味をして堪るものか。命さへ助かる事なら、その頼み人を。
民部　何奴だ。

ト詰め寄る。後ろより彈正拔打ちに杢山が首を打落す。

皆々　是は。

民部　待つた、彈正左衞門どの。詮議の種になるべきその醫者、何故手に懸け召された。

彈正　怪しいと存ずる故。

民部　お手討かな。

彈正　いかにも、事を大業にせぬ彈正左衞門が取計ひ、こりやコレ、長たる者の心にある事さ。

ト思ひ入れ。

民部　藪醫者めが首を刎ねて、詮議の種を失うたと思うたが、まだ〳〵外によい物がござる。最前左馬五郎が手に入れし若君調伏の人型。

皆々　若君調伏とは。

ト立ち廻り、梶右衞門うなづいて思ひ入れ。

政岡　早う〳〵。

民部　サア、いづれも御覽なされい。

ト彈正と鬼貫が前に差つける。

荒波　こりやア大事だ〳〵。この箱が人形とは、飛んだ事を言ふ男だ。但し確かな證據になるべき願書でもあるか。

民部　政岡どの。たつた今この場に於て、この中の願書を讀み上げて、侫人めらが膽玉をでんぐり返してくれべい。

ト民部、箱の中より一通を出し。

伏して、、ごうどの神祇を驚かし奉る。賴兼、鶴若が命を絕つて、片桐彌十郎が一子をもつて、家督取らしめんと毒害をするに、鬼貫、仁木の忠臣あつて、この謀計空しくなり、仰ぎ願くば彼等が命を絕ち、片桐が一子を足利の主になし給へ。百拜稽首。年號月日。願主政岡。ヤ、ヤ、、是は。

皆々　イヤア。

ト大きに驚き、思ひ入れ。政岡願書を取らうとする。彈正突き退け、是を取り。

彈正　政岡の大盜人め。そこ動くな。

鬼貫　鶴若を調伏とは、面に似せない不敵な女め。

荒波　うぬばかりの仕業ぢやあるまい。

侍一　三寸繩に引つくゝして、巧みの筋を白狀させる。

侍二　遁れぬ所だ局政岡。

皆々　覺悟ひろげ。

政岡　待つた〳〵、この調伏の人型といひ、願書まで、政

岡と記しあるとも、大事の〳〵養ひ君、調伏する自らな
らず、滅多な事を言ふまいぞ。

彈正　ハヽヽヽ。その言譯暗い〳〵。何程陳じても、この願書は汝が手蹟。民部どの是を見やれ。

民部　ナニ、政岡の手蹟とや。

ト見てびつくりして。

彈正　なんと違ひはござるまい。

民部　いかにも違ひない政岡が手蹟。如何なる遺恨を挾んで、大膽極まる巧み事。

鬼貫　一句一言言葉はあるまい。主人を呪詛の大罪人。ソレ、彼奴を引つくゝせ。

ト掛る。立ち廻り。

政岡　天神地祇も御上覽あれ。覺えなき身に無實の大難。言譯せんにも自らが手蹟を似せたる願書故、この場の證據に退引きならぬ罪科に沈むか。若君さま。エヽ、口惜しうございまする。

彈正　所詮叶はぬ世迷ひ事。引つくゝらつしやい。

ト政岡に掛る。左馬五郎、梶右衛門を突き退ける。立廻り。民部始終ぢつと見て居る。

鶴若　荒波、待て。

左馬　若君の御意があるぞ。

鬼貫　この期に及んで、鶴若が言葉を聞いては掟が立たぬ。荒波、早う〳〵。

荒波　ハッ。

ト又掛らうとする。

鶴若　待て、梶右衛門。

荒波　デモ、大盗人の政岡めを。

鶴若　イヽヤ、言ふ事あり。マア〳〵、控へい。

荒波　ハア。

鶴若　政岡我に教へて曰く、白絲を墨に濺げばクロ色となる、又朱に濺げば赤うなる、心素直なる時は、なんぞ神明の咎めを受けんと教訓なす。我れ幼若と雖も、政岡が忠臣豫て能く知つたり。たとへ何のやうな事ありとも、女の身恐るゝに足るべからず。罪を免して矢張その儘その儘。

彈正　御意ではござれども、上を憚る大罪人。この儘置きましては。

鶴若　この鶴若が言葉を背くか。

彈正　サア、その儀は。

鶴若　なんと。

彈正　ハア、。
　ト平伏する。
鬼貫　イヽヤ、鶴若。さうでない。政岡に贔屓の沙汰あつては世界は暗闇。民部。なんとさうではないか。
　ト民部默つて居る。
彈正　なぜ御挨拶をおしやらぬ。默つてお居やるは、所存ばしあつての事か。
民部　最前より樣子を是にてつく〲考へ見るに、これ全く政岡の罪でござらぬ。
皆々　そりやアなぜ。
民部　さればさ。片桐が子息家督に立てんと政岡が呪詛の人型、これ佞人の仕業。ハテ、斯く迄の大望を企てながら、願書にその名を記して置かうか。殊更神社へも納むべき人型、他人の手へ渡るべき謂はれなし。スリヤ、政岡が仕業とも一概にも申されまい。願書は素より確かに僞筆。皆謀計の結構たり。驚き入りしは若君の御賢慮、太守の御器量。恐れながら感心仕つてござる。この汚名を清めんは一品、この民部がそなたへの寸志。
　ト白木の箱より白絹を取り出す。梶右衛門これを見て
荒波　ヤア、それは。
　ト寄らうとする。
民部　なんと致した。
荒波　サア、それは。
民部　この白絹を持つて工夫あらば、その身の汚名も濟まり申さん。政岡どの。イザ、請取り召されい。
　ト白絹を渡す。
政岡　有難うござりまする。スリヤこの白絹を持つて工夫致さば、自らがこの場の汚名も。
民部　サア、鬼貫公を始め、諸士の疑ひも晴れ申さん。篤と思案致されて宜からう。
鬼貫　鶴若が言葉と云ひ、民部がこの場のさゝいこさい、政岡は仕合せ者、命冥加な女めだなア。
　ト思ひ入れ。
彈正　若君にも端近うござあつては毒藥の恐れもあり、奥の殿へお供致さう。
　ト政岡心元なき思ひ入れ。民部こなしあつて。
民部　この民部めも、共に警衛仕りませう。
鬼貫　鶴若丸。
鶴若　方々。
彈正　先づお入り。

皆々　あられませう。

ト唄になり、鶴若先きに皆々思ひ入れあつて、奥へはいる。政岡一人殘り、白絹を持つて思案のこなし。

政岡　心あり氣な民部さまのお言葉。この白絹を持つて工夫せよと仰しやつたは、もしや是が佞人の工夫の願書か。總て密書をした、むるに明礬を持つて文字を書く、水に注げばその文字悉く顯はると聞きしが、もしやその明礬を持つて認めしか。ソレ。

ト合方にて、政岡この絹へ水を掛けて、いろ〳〵思ひ入れ。

ハレ、思ひ出せし事こそあれ。蜀の國へ一人のしゆごの遺物を隱さんと、ろがんほうしやの藥を持つて栴檀の板に書き殘す、懸才の人あつて、湯をかけてその所以を知ると聞く。正しくその法を行ひしものならん。さうぢやさうぢや。

ト飾りある臺子の湯を汲んで、白絹へ掛けても〳〵文字顯はれぬ故、政岡當惑する。

ヤア、この白絹へ水を掛け、湯を掛けても、一字一點見えぬと云ふは、この白絹も政岡が汚名を雪ぐ證據にならぬか。民部さまのお言葉も仇になつてはこの身の浮沈。思へば〳〵口惜しいなア。

ト思ひ入れ。奥より曲者と、梶右衞門出て來て

荒波　政岡。その白絹を渡せ。

ト取りに掛る。立ち廻り。

政岡　ヤア、こなさんは梶右衞門殿。この白絹を渡せとは。

荒波　スリヤアこつちの大事の代物。要らざる民部が捌き。是非その絹を。

政岡　イヽヤ、渡さぬ。

荒波　ソレ、踏んだくれ。

曲者　心得ました。

ト政岡に掛る。立ち廻りにて三人二重舞臺へ上り、梶右衞門支へる間に、曲者白絹を取つて下へ飛下りる。政岡それをと寄らうとする後ろより。

荒波　政岡、觀念。

ト拔討ちに切つて掛る。立ち廻りにて政岡この刀を取り、梶右衞門が腹へ突つ込む。

政岡　荒波、覺悟。

荒波　殘念やなア。

ト是をきつかけに誂への鳴物になり、この屋體を段々にせり上げる。下家の飾りつけ、黑幕切つて落す。荒

大詰御殿の場（繪草紙より）

獅子男之助、赤面、莫大なる拵へ、刀を突き、忍びを踏まへ、手に白絹を持つて居る。仕掛けにて梶右衛門が血潮この白絹へ滴たり、文字顯はれる景色にて、男之助是を見てきつと思ひ入れ。鳴物打ちかすめる。

男之　ア、ラ、怪しやなア。鶴若君を守護せんと、この下家にしやつ屈んで、宿直守りする勇力士、荒獅子男之助重光が、眼前へ落ちたる白絹、取る間もなく、流れ滴たる血潮に濡げば、自然と文字顯はれしは、ハテ、いぶかしい。漢の張仲景が禁法を、思ひ計つてこの絹を見れば、鶴若君を呪詛の願文。

政岡　そんなら今のその絹へ。

男之　變つた文字が顯はれたわえ。

曲者　それを。

ト起き返つて掛る。曲者が襟髪を捉へ、ぐつと締める。目玉飛び出る。血を吐き死ぬる。

政岡　その物音は。

男之　コレ、聲が高い。

ト死骸を投げて、しやんと見得、よいきつかけに

ひやうし幕

ちよん〳〵〳〵〳〵。

六立目

足利家奥書院の場
同別室の場

役名——乳人政岡。庄内數馬。大館左馬之助。若君鶴若丸。大江之助鬼貫。仁木彈正左衞門。管領山名宗全。同細川政元。荒獅子男之助。力士雷鶴之助。修驗者般若院萬海。力士雷鶴之助。熊田源五郎女房夕しで。浮田左金吾。傾城高尾の亡靈。足利賴兼。

本舞臺、三間の間、高足の屋體。欄間、踏込みとも極彩色。向う金襖あけたてあり。上の方、石の手水鉢。すべて賴兼の奥書院の拵り。爰に好みの花車を置き、上に政岡、裲襠、衣裳にて鶴若丸を守護して居る。下に庄内數馬、ほか大館左馬五郎、上下衣裳にて控へて居る。眞中に花車、是に白と黄と蝶群がり、花に戯れて居る景色。小太鼓、三絃の入つたる樂にて幕明く。

政岡　ハテ、面白の眼鏡の眺めよなア。その興多きその中

に、春は萬種の花あり。

數馬　夏は百尺の泉を湛へ、秋は千里の月を眺め。

左馬　冬は粉重の雪を集め、各しやうちに氣色を顯はす。

政岡　それにも勝る胡蝶の風情。花を寄りて、アレ〳〵アレ。

數馬　まことに花前に戲れるは、全然たる雪とも見え。

左馬　吉野初瀨の夕暮に、麓の里とも云ふべきか。

政岡　ハテ、しをらしい。

三人　眺めぢやなア。

政岡　ほんに最前より何かに紛れ、お膳を差上げませぬ。幸ひこの間に、ソレ〳〵。

鶴若　イヤ〳〵、未だ欲しうないわいのう。

政岡　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。心得ませぬ家中の諸士。朝夕のお膳も容易には上げられぬわいなア。

數馬　まことに左樣。佞奸の者共に滅多に油斷はありませぬ。

左馬　やゝもすれば害せんと計る工み、何かにつけて政岡どの、御辛勞でござらう。

政岡　それ故、お側に置きまする調度まで一々わたくしが心入れ。表運びの花車、内へ入れしはお膳のとゝのへ。手づから私が煮焚きして、差上げまする御食事。

ト花車をあけて、花籠より小さき蒔繪の箱を出し、政岡、袂より袱紗に包みし銀の鍵を出して、この箱をあけて内より食類を出し、鶴若丸に勸める。

此のやうに用意して、朝夕離さずお側に置くは、恐ろしい鴆毒を避けん爲め。

數馬　今に始めぬ政岡どの。發明、驚き入りました。

ト政岡、膳部を列べ鶴若へ据ゑる。後ろの襖をあけて、彈正この樣子を窺うて居る。

政岡　若殿さま。イザ、召上りませい。

ト鶴若これを食ふより毒の廻りしこなし。いろ〳〵苦しみ、

鶴若　政岡、エヽ、術ない〳〵。

ト苦み死する。皆々驚き、政岡抱き上げ、

政岡　若君さまのお有樣。

數馬　若君さまア〳〵。

三人　オヽヽヽ。

トこなし。政岡、鶴若を介抱し、

政岡　こりやマア、どう云ふ事ぢやぞいのう。淸めに淸め、吟味に吟味して、とゝのへ置きしこの調度に毒があると

はどうしたもの。エ、モウ、お息は絶え、どこもかしこも此のやうに。仕様もやうもない事かいなア。

ト いろ〳〵こなし。よいきつかけに、政岡、彈正と顔見合せ、びつくりして彈正、襖をハタとてる。政岡、鶴若が死骸を抱き上げる。向うにて「管領のお入り」と呼ぶ。

兩人　ナニ、管領のお入りとや。

政岡　時も時、折も折とて、必ずこの事を穩便に。

兩人　心得てござる。

ト 又向うにて「お入り」と呼ぶ。是にて政岡、鶴若を抱き下座へはいる。是につき左馬五郎はいる。奥より鬼貫、彈正、侍二人出迎ふ。數馬も列ぶ。太鼓地になり、山名宗全、十德、法眼袴、細川政元、上下にて、兩人出で來る。花道の中に住ふ。

宗全　是は〳〵、いづれもお迎ひ、大義々々。

政元　作略を省さぬ只今の出迎、滿足に存ずる。

鬼貫　ハア、思ひ寄らざる兩管領のお入り。豫て御内意もなきゆゑ、僅かの敗亡、前後の不束、取敢えず大江之介鬼貫。

彈正　差添ひましたる仁木彈正。

數馬　御案内の爲め、我々これまで。

皆々　罷り出でましてござりまする。

鬼貫　兩管領には先づ〳〵あれへ。

皆々　お通り下されませう。

宗全　政元どの。

政元　先づ〳〵お先きへ。

宗全　然らばお先きへ。

ト 兩人こなしあつて、謠の切にて、宗全先きに、政元舞臺へ通り、上へ通る。

鬼貫　恐れながら御兩君へ、鬼貫がお願ひ。

政元　願ひとは。

鬼貫　賴兼大病につき、帝都の守護職願ひの通り、鶴若君へ家督仰せつけられ、我々始め安堵の折柄、存じ掛けなき兩管領のお入り。

彈正　何事かはと、諸士の仰天大方ならず、何とぞお入りの趣きを。

皆々　我々どもへ、仰せつけられ下されませう。

政元　我々當お館へ發向なしたるその趣意は、御家督相濟んだ鶴若どの、續目の參内、その折柄は、當家に預かり奉る王城鎭護の錦の御旗、叡覽あらんと傳奏衆よりの

御内意、見分致し参れよと、室町どのゝ仰せを受け。

宗全　山名宗全。

政元　細川政元。

宗全　管領の我々を差越れしはお家柄ゆゑ、急ぎ御旗を。

兩人　持參おしやれ。

　ト皆々思ひ入れ。

鬼貫　その御旗の儀は。

兩人　如何でござる。

鬼貫　サア、その御旗は。

兩人　なんと致した。

　ト鬼貫、思ひ入れあつて、

鬼貫　紛失致してござりまする。

兩人　ヤ、、、、。なんと。

宗全　ハ、、、。大切なる御旗紛失致して事が濟まうと思ふか。その御旗が紛失しては足利家の滅亡こつ通り。室町どのへ言上致す。政元どの、お立ちなされい。

政元　お待ちなされい宗全どの、大切なる御旗の紛失、頼兼公御親子へ對面も致さず、この儘御前へ注進致すは、なんとやら輕々しき御計らひ。一應も二應も吟味を遂げたその上にて、又了簡もござらう程に、マア〳〵、お控へなされい。

宗全　然らば兎も角も、政元どのゝ御了簡次第さ。

政元　鬼貫どの。お聞きありしか。宗全どのにも御得心の上は、少しの用捨は致すでござらう程に、彈正左衞門始め諸士の面々、その旨とくと心得たか。

皆々　ハツ。

數馬　御親切なる政元どのゝお詞。心魂に徹しまして。

皆々　有難う存じ奉ります。

宗全　政元どのゝお詞故、少しの用捨は致してくれうが、さう便々と待つては居られぬ。御家督濟んだ鶴若どの、幼少とて用捨はない。事の實否を糺した上、頼兼へ對面申す。急ぎ鶴若どのを是へ〳〵。

政元　いかさま、鶴若どのへ對面致し、一通り樣子を承はらん。早う〳〵。

鬼貫　サア、その鶴若丸の儀は。

政元　御病氣か。

彈正　乳人政岡をお召しあつて、お尋ね下されませう。

宗全　早う是へ。

鬼貫　政岡、是へ。

政岡　ハ、ア。

ト下座より政岡出で來り、
御用でござりまするか。
鬼貫　管領の御前だぞ。
政岡　ハヽア。
ト遙か下つて平伏する。
宗全　鶴若殿めのと政岡とは、そちか。
政元　家督定まる上は、我々對面致すであらう。
兩人　急いで鶴若どのを、同道致せ。
政岡　サア、その儀は。
トはつと思ふこなし。
政元　如何致してござる。
政岡　鶴若君は病氣でござりまする。
ト鬼貫、彈正、顏見合せ思ひ入れ。
宗全　御病氣なら、御寢所へ參つてお目に掛らう。
政岡　サア、それはな。
トつかへる心遣ひの思ひ入れ。
鬼貫　コレ、政岡。鶴若君は御病氣ぢやアあるまい。
政岡　イヽエ、御病氣に違ひござりませぬ。
彈正　爭ふな、政岡。お館のうち大事小事に限らず、彈正
能つく存じて罷り在る。若君には御死去であらうがな。

政岡　エヽ。
ト驚く。
彈正　盜人猛々しい。うぬが手盛の毒藥をもつて殺したぢ
やアないか。
政岡　モシ、滅多な事を仰しやりますな。
彈正　花車の內に隱したお上り物へ毒を入れておつ殺した
を、能つくおれが見据ゑて置いた。なんとそれであらう
が。
政岡　サア、それは。
宗全　但し御寢所へ案內致すか。
政岡　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
彈正　毒害したであらうがな。
政岡　ヘイ。
ト當惑する。
政元　安からぬ毒害の工み、何ゆゑ鴆毒を與へたのぢや。
ト政岡いろ〳〵こなしあつて、
政岡　お家は佞人多く、やゝもすれば若君へ、毒害せんと
計るやからも、サア、ござりませうかと、常の御膳は皆
打ち明け、人知れずこの政岡が淸めに淸め、風味して人

目を包み、花籠の内に隠して差上げしに、今日に限つてその御膳、毒のありしは合點行かず。忍びを入れて工みしものか、佞人ばらの皆仕業。なんの〳〵誓文、私がどうして其のやうな工みを致しませうぞ。兩管領の御權威で御吟味なされて下さりませい。

政元　いかさま、容易の工みであるまい。こりや外に叛逆の佞人どもがあらうも知れぬ。

宗全　徒黨の奴等も詮議するにも、その女めを彈正左衛門、拷問なして白狀させろ。

彈正　畏まつてござりまする。〇ソレ、御兩所。

侍兩　心得てござる。

ト政岡に掛る。

政岡　たとへ何のやうに拷問に逢ふとも私が工みぢやござんせぬ。外に詮議をお願ひ申しまする。

鬼貫　中々一通りぢや白狀せまい。用捨に及ばず手酷い拷問。水食はせて白狀させろ。

數馬　そりや又あんまり。

ト思ひ入れ。

鬼貫　土壇のつけ。

奴兩　ハツ。

ト下座より奴二人、土俵を持つて出る、手桶柄杓を持つて出る。土壇を築き拷問の用意する。

侍兩　女め。立たう。

ト無理に政岡を土壇に直す。

政岡　エ、情けない、若君さま。大事〳〵と是程に盡す心が仇となつたるこの場の言分け。斯う云ふ仕宜になると云ふも、お家の浮沈か、若君さまの御果報の拙ないのか、思へば〳〵淺ましい世の有樣ぢやなア。

宗全　急いで女を拷問しろ、エ、。

ト向うにて、

男之　待てエ、。

皆々　待てとは。

男之　荒獅子男之助重光が留めた。待ちやアがれエ、。

ト大太鼓入りの鳴物になり、花道より男之助赤面、厚綿の衣裳にて、大きなる塗樽を引抱へて出て來る。花道よりきつと見得。

宗全　待て〳〵。今政岡が拷問を言ひつくる所へ、留めて出た慮外者。あれはマア何者だ。

鬼貫　彼れめは荒獅子男之助と申し、鶴若が近習役、仔細あつて、目通りを遠ざけました者でござる。

彈正　管領の御前、慮外な恐れ。そこを立て。

男之　イヽヤ、立つまい。

皆々　なんと。

男之　山名どのとやら、山の芋さまとやらに、近づきになるべいと思つて、酒を持つて逢ひに來た。それに何だ。爰を立てとか。コウ、おれがお神輿を据ゑたからは、立つ事は嫌だ。ドリヤ、そこへ行くべい。

ト本舞臺を目掛け、つか／＼來る。皆々支へるを突き退け撥ね退け、本舞臺へ來り、政岡を圍ひ、

やつとことつと、うんとこな。

鬼貫　重ね／＼の慮外者。ソレ。

皆々　動くな。

ト男之助へ掛るを、見事に投げ退け、

男之　是からは上座敷にござる山の芋どのを、引き摺り下して近づきになるべい。

ト宗全に掛らうとする。政元隔て、扇子にて男之助を打擲する。

政元　默らう。今日の山名どのは將軍義政公も同然。宗全どのへ對し慮外があれば足利の家の落度。一族とて用捨はならぬ。たはけ者めが。

男之　なんと仰しやります。あの宗全どのへ手向ひすればお家の大事となっ。

政元　汝が短氣がお家の害になると云ふ所へ、心づかぬか。、、、たはけ者めが。

宗全　サア、この宗全をどうぞして見ぬかへ。ハヽヽヽ。某に慮外を働くと、足利のお家は滅亡だ。きり／＼そこを立つて失せう。

男之　政元どのゝ、お詞故、胸の惡い事は了簡もしようが、爰を立つ事は嫌だ。コウ言ひ出すからは、この男之助が五體は金輪奈落から生えぬいたも同然。けちりんでも動きやアしないぞ。

宗全　アレ、政元どの。あんな事をぬかす。男之助を遠ざけて下さい。

政元　最前より慮外の段、宗全どのへ手向ひ致した男之助、この儘には打ち捨て置かぬ。

ト大繩を取つて掛る。

男之　政元どの。何故あつて、男之助に繩掛けられまする。

政元　今言ふ通り、その方が慮外は足利のお家に係はる故、この席上を遠ざける奴なれども、繩掛ければ爰に置き、繩

掛るを嫌だと申せば、是非に及ばす政元が、この席を遠ざけにやアならぬに依つて、政元がイザ掛ける繩目はな、鐵の鎖を切れば切る、政元が掛けたこの繩は切れまい。

ト男之助に繩を掛ける。

男之　外の奴等が掛けるなら、ひねり殺してくれべいに、政元さまの仰せを有難く思へば、命冥加な奴だなア。

政元　立て。

ト下の方の桐の木へ縛りつける。

イヤ、宗全どの。男之助はいましめ置きました。政岡が拷問も、頼兼にお目に掛りし上、二品の御上意次第、先づそれまでは奥の殿にて相待ち申さう。

宗全　いかさま、左様致さう。政岡めも取逃がさぬやう、屹と番を致せ。

數馬　畏まりました。

鬼貫彈正　我々御案内仕りませう。

宗全　然らば政元どの。

政元　宗全どの。

皆々　先づ、お入りなされませう。

ト管絃になり、宗全先きに皆々下座へはいる。男之助縛られながら跡を見送り、

男之　こりやア飛んだ目に逢つた。政元どのゝお情け籠りしこの繩目、おれを此やうに木へ縛りつけて置くとは、秋葉の猿ぢやアあるまいし、さるとは忌々しい事だ。

ト矢張り合方にて、花道より雷鶴之助、着流し一本差にて出で來り、

雷　アヽ、世の中と云ふものは變つたものだ。あれ程お氣に入りのおれが、この御殿へ忍んで來たも、頼兼公が蟄居とやらのお身の上、それにこの頃は噂に聞けば、高尾どのゝ幽靈がお側へ出ると聞いたに依つて、その幽靈にあつて地獄極樂の諸分を聞かうと思つて來たが、どうぞ、お殿さまにお目見得をしたいものだ。

ト言ひながら舞臺へ來り、

ヤア、お前は荒獅子男之助さまぢやアござりませぬか。なぜ、お前は其やうな形をしてござりまする。

男之　こりやア關取の雷か。こんな形になつて居るのは、大分謂はれ因縁のある事よ。

雷　そんな事でもござりませうか。さうして居ては詰まるまい。わしが鳥渡解いて上げませう。

ト解かうとする。

男之　アヽ、コレ〳〵、解くな。解いては惡いぞ。

雷　ハテ、お前も縛られて居たがるとは飛んだものだ。時にさうつくねんとして居ては氣が盡きよう。酒でも吞みたかアないかえ。

男之　サア、ありやうは一杯引つかけたい。

雷　そんならお臺所へ行つて、働いて參りませう。

男之　いんにや、待ちやれよ。そこらにおれが持つて來た酒がある筈だ。見てくりやれ。

ト方々見廻し、以前の樽を取つて來て、

雷　持つて來た酒があるとは面白いわえ。こいつは餘ッ程あるわえ。

ト方々見廻し、手水鉢の柄杓を取つて來て、

御馬行儀に、この柄杓で遣らかさう。

男之　こいつは面白い。早くしろ〳〵。

雷　承知々々。

ト樽の酒を柄杓に注ぎ、

ちよつと利いて見よう。

ト一口吞み、

こいつは男山だ。さうだわえ。

男之　是さ〳〵、利き酒をせずと、早く吞ませてくれろよ。

雷　オット合點々々。あんまり好い酒だ。

ト又一杯吞み、その跡にて汲んで出す。男之助がぶがぶと吞み、

かけを追はれた馬を見るやうに、がぶ〳〵吞む奴よ。

男之　置きやアがれ。もつと汲んでくれ。

雷　まだか。

ト言ひながら又汲んで來り、

落着いて吞まつしやい。

ト柄杓を下に置き、逃げてはひる。

男之　エヽ、むごい奴だ。待ちやアがれ〳〵。おれにやア些とばかり吞ましやアがつた。追駈けて行きたいにもこの縛り繩、切れたらお家のお爲めにたるまいし、切るには切られず、エヽ、こんな時、おれが雪姫なら、鼠でも出て此の繩を食ひ切つてくれべいに。鼠はないかえ、足で書きたくつても、おらア無器用なり。繩を食ひ切つてくれる鼠は出ないか、鼠が欲しいわい〳〵。是を思へば女といふ者は、お愛嬌を持つたものだなア。

トかすめたるどろ〳〵にて、爰かしこより鼠大分顯はれる。男之助、是をきつと見て思ひ入れ。

男之　ハテ、心得ぬ。いま男之助が義理ある繩目を切らせ

たく、鼠が欲しい戀しいと、たわ言つく間もアラ不思議
や、群がり集まるこの鼠、與を目掛けて行かんず景色。
こいつも何ぞの化け損ひ。ハテ、怪しき事を見るものだ
なア。
ト きつと思ひ入れ。この鼠、男之助へ飛びつくを拂ひ
退け〳〵、ト、二三疋足下へ踏まへ、
われを目掛けるそつぱめら。まつ此のやうに。
トこの鼠を踏み殺す。大どろ〳〵にて上の方の切穴よ
り、般若院萬海、毬栗、どてら、腰衣にて刺高を持ち、
凄き見得にてせり上る。男之助これを見て、

男之　木兎入めうぬは何やつだ。

萬海　愚僧が事か。

男之　いかにも

萬海　修験の高僧、般若院萬海と云ふ、尊い御出家さまだ
わ。

男之　ハテ、乙な奴が出て來たな。さては汝は鼠つかひの
木兎入めだな。この荒獅子が目に掛つては百年目だ。こ
の腰骨で踏み殺す。觀念ひろげ。

萬海　小癪な一言。大玄善神密法を以て、鼠は愚か、雨と
なり風となり、じんほう自在に體を變まんなす萬海に向
つて慮外の一言。我が法術を以て立ち處にその縛めこそ
時の幸ひ、眷族どもに言ひつけて引立てさせる。アサカ
ンキンバルタイスウ〳〵。
ト刺高を揉む。大どろ〳〵にて右の切穴より鼠色の忍
び四人顯はれ、男之助を取卷いて、

四人　觀念。

男之　ハヽヽヽ、又ふんじたな。小鼠めら一疋ばかりの木
兎入なら、刺殺すべいと思つたが、鼠算ほど殖えるなら、
八算見一むとう投げ。モウ、この繩もまつこの通り。
ト縛り繩を切る。

萬海　遣るな。

四人　遣らぬ。

男之　どつこい。
ト大太鼓の鳴物にて、男之助忍びを相手に烈しき立ち
廻りあつて、四人を一度に大繩にて引括る。萬海それ
を掛る。鐵扇にて眉間をくらはせる。この血汐流るゝ。
たぢ〳〵となり、どつかと下に居る。

男之　動きやアがるな。モウ、チウの音も上げさせない。

萬海　エヽ、口惜しいなア。變まん自在の萬海ながら、勇
猛の男之助に眉間を割られ、血汐の汚れに我が行法を挫

かれたか。エヽ、殘念なア。

男之　やかましい、失しやアがれ。

ト大太鼓の鳴物にて、男之助、萬海を蹴殺しながら、大繩を引擔いで四人を引摺り〳〵向うへはいる。管絃になり、奧より雷鶴之助出で來り、途端に下の方、井筒より忍びの者出て來る、是を見て鶴之助びつくりして窺つて居る。忍び方々窺ひ

忍び　危ない命を助つて、漸々是まで逃げて來たが、どうぞ窺ひ寄つて、賴兼親子をぶつ放して、ふけりたいものだが。

雷　ふけりたくばふかして遣らう。白つ強飯、豆粒め。

忍び　置きやがれ。黑い所を見立てたうなア、マア、誰だ。

雷　おれか。危ない命を助つて、漸々爰まで逃げて來たが、どうぞ賴兼親子をぶつ放して、ふけりたいものだが。

ト忍びの者が言つた通りを云ふ。

忍び　置きやアがれ、そんならうなア、今のを聞きやアがつたか。

雷　殘らず聞いた。

忍び　それぢやア、モウ、生けては置かれぬ。殘念

ト切りつくる。立ち廻り。鶴之助刀を打ち落し、見事に投げ退け、刀を取つて思はず、忍びの者を一太刀切る。右の手を切落す。

ヤア、うなア、おれを切つたな。

ト鶴之助、血の出たを見て、

雷　人殺し。

ト言はうとして口を押へ、思ひ入れ。

忍び　うなア飛んだ事をしやアがつたな。なんぼ右の手を切落されても、左りの手でうぬを。

ト掛る。立ち廻り。鶴之助一太刀切つては方々見廻し、とゞ忍びを切倒し、とゞめを刺す。奧にて、

タし　ハイ〳〵、左樣なら、斯う參りますかえ。

ト是にて驚き、忍びのかぶつた頭巾を取つて血汐を拭き、うろたへ廻り、死骸を下の井戸へ打ち込む。奧よりタしで出で來り、思はず鶴之助に突き當り、鶴之助びつくりして、

雷　誰だ〳〵。

トうろたへる。

タし　ハイ、わたしでござんす。

雷　おゝア、誰だと思つた。びつくりするやつよ。

ト落着いたる思ひ入れにて、ほつと溜息を吐き、切落したる腕を見つけて、びつたりとその手の上へ坐り、夕しでに見せまいとして氣味惡き思ひ入れ。

こなたは、見りやア、このお館の衆ぢやアない。誰だ。

夕し　私は政岡さまのお部屋へ參る者でござりまするが、御存じなら一寸教へて下さりませ。

雷　政岡どのゝお部屋を教へてくれろ。そりやア白露だわえ、能く時候口合せるの。

ト言ひながら懷ろへ手を入れ、股倉よりその手を引上げようとして、

ヲヽ冷たい。エヽ、氣味が惡い。

ト顏をしかめる。

夕し　何がそんなに、氣味が惡いぞいなア。

ト鶴之助心づき、

雷　サア、おれが氣味の惡いと言つたは、○ヲヽ、ソレソレ、アノ、美しいそもじが、おれに馴々しく物を言ふに依つて、どうか氣味が惡いと言つたのよ。

夕し　そんならお前は、女子はお嫌ひかえ。

雷　嫌ひぢやアないよ。

夕し　お嫌ひでなくば、鳥渡教へて下さんせ。

ト無理に鶴之助を引つ張つて連れて來る。この拍子に股倉より以前の手を落す、夕しで「それは」と見ようとする。鶴之助その上へびつたりと坐り、夕しでに抱きつく。

こりや、何をなさんすぞいなア。

雷　サア、是は。

夕し　今のは何ぢやえ。

雷　サア。

トうぢ〳〵して

そもじに惚れた。

夕し　エヽ。

トびつくりして、

何ぢやぞいなア。人を嬉しがらすやうな事ばつかり。ほんに手のあるお方ぢやわいなア。

ト鶴之助びつくりして、股倉へ挾んだ手を思ひ入れ。

そしてマア、お前さんは、何をなさるお方ぢやえ。

雷　わしかえ。わしやア相撲取りさ。

夕し　道理で、手取りぢやわいなア。

雷　エ。

ト手を見つけられたかと、ぎよつとする。
成程、わしは手取さ。角力には四十八手と云ふ手もある
が、この雷はたつた一手に限り切つて居るわな。ハヽ、
ヽヽ時にどうだ。きまつてくれる氣は中橋か〳〵。
夕し　わたしや其のやうな、浮氣らしい事なら嫌でござん
す。
雷　ナニ、浮氣な事があるものか。おれが心に從つてく
れゝば、政岡さまの部屋も、直きに拵へて遣るわな。
夕し　それ程、私が事を思うて下さんすが定なら、お前の
心中見せさんせ。
雷　なんだ。心中見せろ。
ト考へて、
髪を切らうか。
夕し　エヽ、後から生える。
雷　そんなら何をせうな。
指を切らう。
夕し　そんならアノわたしに、心中に指を切つて下さんす
か。
雷　切らいでどうするものだ。
ト以前の手を右の袖から出し、

親指でも小指でも望み次第、乃至五本でも、そつちの勝
手に切つたがよい。
ト脇差を夕しでへ渡す。
夕し　ほんまに切つて下さんすかえ。
雷　切らないぢやア、そこが男は氣で持て、海鼠は酢で
持てだ。サア、人の指なりや何とも思はぬ、切つた切つ
た。
ト夕しで怖さうに脇差を拔いて切らうとする。鶴之助
上より叩く。指切れ、夕しで、飛退き、氣味惡き思ひ
入れ。鶴之助うつかりとして心づき、痛むこなし。
雷　ヲヽ、痛い〳〵。
夕し　さう、ござんせう。堪忍して下さんせ〳〵。
ト苦々しき思ひ入れ。鶴之助飛び散つたる指を取り、
夕しでへ渡し、
雷　サア、受取つて貰はう。
夕し　エヽ、嬉しうござんす。
ト取つて指を見て、
ほんにお前は見掛けに似合ぬ、大きな指のお方ぢやな
ア。
雷　どうでも角力が商賣だから、指先きに力がはいつて

それで些とも太らはあるのさ。斯う心中見せたから、嫌應はあるまいの。
夕し　なんのいなア。
雷　そんなら女房ども。
夕し　エヽ、嬉うござんす。
ト抱きつく。後ろへ侍兩人、出掛り、
侍兩　不義者、動くな。
雷夕し　エヽ。
トびつくりする。
侍一　今日は兩管領のお入りと云ひ、館を汚す大罪人。
侍二　二人ともに縛り首だ。
雷　モシ〱、滅多な事を言はつしやりますな。
夕し　わたしらは其んな覺えはござんせぬぞ。
侍一　ぬかしやアがるな。何もかも後ろで立ち聞いた。
侍二　不義の相手はこの雷。動くな。
雷　コレ〱女中。こなたは爰に居ては何んな目に逢はうも知れぬ。おれも今に兵法の奧の手を出すから、早くつん逃げさつしやい。
夕し　アイ〱、合點でござんす。
ト押へられた手を振切つて下座へ逃げてはいる。侍の一、是を追駈けてはいる。鶴之助「それ」と跡を追つて行かうとする、侍の二、右の手を取つてねぢ据ゑ、
侍二　動きやアがるな。
雷　ヲヽ、痛い〱。さうねぢ上げられては腕がまがるやうだ。
侍二　やかましい。是からおのれを引摺つて不義の詮議をせにやアならねい。おれと一緒に失しやがアがれ。
トかたしやぎりになり、鶴之助が右の手を持ち、引摺つて花道へ掛る。宜い所へ鶴之助手をそつと放し、下座へ逃げてはいる。侍の二、是を知らず、矢張最前の手をおつ摑んで、引摺り〱向うへはいる。この鳴物にて此の道具ぶん廻す。
本舞臺。三間の間、高足の二重舞臺。蹴込み欄間、彩色の方、二間は一面の翠簾、上げ下ろし。上の方は綟子張り障子、屋體。下の方、柴垣、切戸あり。この道具に替る。本神樂。
ト下の方の柴垣を切り破り、左金吾、着流し、頰冠りにて出で來り、方々窺ひ、脇差の目釘をしめし、切戸の内へはいらうとする。下座より夕しで、つか〱と

出で來り、切戸の内よりこの體を窺ひ支へる。立ち廻
り宜しく、左金吾が脇差の鐺を控へ、兩人顔見合せ、

夕し　ヤア、あなたは。

左金　そなたは。

夕し　左金吾さまぢやござりませぬか。

左金　絶えて久しき夕しでか。

夕し　思ひも寄らぬこの場の様子。

左金　合點の行かぬ、そなたの身の上。

夕し　不思議なお姿。

左金　變つたなりで。

夕し　お目に掛つた。

兩人　事ぢやなア。

左金　過ぎし嘉吉の戰ひに、軍令を背きし落度に依つて家
國を沒收せられ、世を蟄したる浮田左金吾、その後は逢
ひもせず、音信とても聞かざりしが、先づは無事にて悦
び入る。シテ、そなたは何故このお館へおちやつたのぢ
や。

夕し　御不審に思召すはことわり、私が親須磨の庄司、浮
田家の沒落の後、本國に引籠り身まかりまして、孤し子
となりました此の夕しで、今では頼兼公御領國の代官
熊田源五郎方へ緣付きましてござりまする。この程に頼
兼さまの御放埒、お家の様子心元なく、それと源五郎の
言ひつけにて、今宵始めてこのお館へ參りましてござり
ます。

左金　スリヤ、そなたも館の様子を伺ふ者。

夕し　シテ、お前さまは、どう云ふ譯でお忍びになりまし
たぞいなア。

左金　仔細語るも恥かしながら、浪々の身につれ〴〵に憂
きを慰む嶋原通ひ、馴染重ねし三浦の高尾。

夕し　そんなら噂に聞きました、頼兼さまのお心を掛け給
ひしアノ高尾。

左金　互ひに深く語らひしに依り、頼兼無理に身請けし
て、彼れが心に從はぬを憤り、桂川の三叉にて下げ斬に
せし修羅の妄執晴らさんものと今宵の仕宜。

夕し　スリヤ、人知れず入り込み、頼兼公をお怨みなされ
るお心かえ。

左金　昔は昔、今は今、源五郎が妻の夕しで、見咎められ
しはこの身の浮沈。所詮埋れ木のこの左金吾、せめて高
尾が冥途の契り。

ト　こなしあつて、

半座を臺へ。さらぢや。
ト自害せうとする。夕しで、あわて
夕し　待つた。
左金　イヤ、放せ。
ト立ち退り。
夕し　マア〳〵、お待ちなされて下さりませい。
ト宜しく留めて、
わたくしが口からこの場の様子を、洩れやうかとのお疑ひに、御尤もでござりまする。去りながら、夫はどうであらうとも、私が爲めには譜代のお主。
左金　なんと。
夕し　今の夫へ義理あれば、手引きこそなるまいけれど、なんの人に洩らしませうぞ。
左金　ムウ、尤も。その心底を聞く上は、今死する命を永らへて、今宵の内に類兼を。
夕し　サア、それもその場に居合しては。
左金　そなたが邪魔して討たさぬか。
夕し　夫へ立つるこの場の義理。
左金　隱すは故主の左金吾へ。
夕し　御恩を送るわたしが寸志。
左金　忠と義理とを身一つに。
夕し　二つに別けて。
左金　貞清美譜胎。
夕し　必ず疑ひ遊ばすなえ。
左金　驚き入つたるそなたの心底、その操を見るにつけ、一夜流れの身をもつて、この左金吾へ誠を盡し、心の義理を立て通し、敢へなくなりし高尾が事、思ひ出せば懐かしい。末の固めと取交し、高尾が所持の香包み。
ト香包みを取出し、
銘は浮舟、憂き思ひ。
夕し　忘れぬものを世の中に、忘れ形見のその一焚き。
左金　せめて手向けに。
ト夕しで、切戸の内より煙草盆の火入を取つて來て、
夕し　逆縁ながら、わたしも共に。
ト左金吾、香を焚き、
俗名三浦屋高尾さん。
左金　南無傳譽妙榮信女
夕し　南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト本舞の入りたる三味線の合方になり、左金吾愁ひのこなし。上の紙子張り障子を明けて、高尾、浅黄のし

ごき、亂れ髮にて出る。左金吾と顔見合せ、

左金　ヤア、そなたは高尾。

高尾　エ、。

ト驚く。左金吾寄らうとする。夕しで留めて、

兩人　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト思ひ入れ。高尾こなしあつて、

高尾　左金吾さん。

左金　ヤ。

高尾　お懐しうござんす。仇なる人に隔てられ、戀慕の思ひに沈みしこの身の上。今は形見の一筆きに、引かれて爰へ來やんしたわいなア。

左金　我とても同じ事。姿は假りの幻なりと、せめて積る思ひのたけを、サア、爰へ來て話さしやいのう。

高尾　イエ〳〵、それがなる事なら、なんの斯うして居やんせう。とは云へ隔てゝ物言へば、戀し床しい心の切なさ。わたしや闇路に迷ふわいなア。

ト左金吾、切戸の内へ行かうとする。夕しで留める。

夕し　お側へいては、苦しみに倚ほ苦しみを重ぬる道理。暫くなりとアノ姿に、言葉交すを思ひ出に、とは云ふもの、お心根を、思ひやられて悲しいわいなア。

トちつとこなし。高尾立てゝある琴を取つて、

高尾　せめて戀しい言葉を語るは、手馴れしこのつま琴。

左金　ヤ、、。

ト切戸の方へ寄つて聞くこなし。

高尾　妻と云ふ字の名に引かれて。

左金　その爪音を他所ながら。

夕し　聞くも果敢ない暫しの契り。

左金　思へば〳〵。

ト寄らうとする。夕しで切戸を閉める。左金吾こなしあるべし、高尾琴を彈く。

唄　〽怨めしや我が緣。唄 今は沈みし戀の淵。高尾 引別けられて片時の、稀な逢瀨も變り行く。

左金　互ひに深う言ひ替し、末の契りを樂みに、無體の戀路に賴兼の、身請がこの世の憂き別れ。

〽義理の堰み堰き留めて、名をば芥の散り紅葉、口で露けき誰が袖。〽恨めしながら歲月をおくら野〽邊の花芒、引手數多も一ト本の、主故に身は捨て小舟、焦れて渡る秋の暮。

高尾　只戀しいは左金吾さん。恨めしいは賴兼どの。

ト思ひ入れ。簾の内にて、

頼兼　儕を立ち去らでやは增鏡。戀しき影を朝夕に見る。
左金　あの聲は。
夕し　コレ。
ト思ひ入れ。下の方の簾上る。頼兼、羽織、衣裳、褥を敷き、机にもたれて居る。
頼兼　今暫らくの睡眠に、夢驚かす琴の音は。
トあたりへ思ひ入れあつて、高尾を見つけ、
ムウ、高尾が怨みの姿よな。曲輪にありしその内は、情れなかりしに引替へて、この程より幻に片時も側を離れず、怨まば怨め寐覺めの側。蓬萊宮に貴妃を尋ね、反魂香に李夫人を慕ひし例しもあるものを。ハヽヽヽ。面白い糸の調べぢやなア。
左金　さう云ふは足利頼兼よな。
ト夕しでを振切り、戸の内へはいる。
夕し　コレ、待つた。
左金　イヤ、退け。
ト立ち廻り、高尾琴を控へながら寄らうとする。頼兼是をちやつと支へ
頼兼　待て。この頼兼が言葉を聞き、氣色ばうて駈け入る曲者。わりやマア、何者ぢや。

左金　某こそ細川政元が手に屬し、過ぎし嘉吉の始め、赤松攻の合戰に、蟄居なしたる浮田左金吾時世なるわ。
頼兼　その浮田左金吾こそ、合戰の砌り軍令を背き、抜け掛けせし落度に依つて、改易となりし身を以て、何故頼兼が館へ入り込んだのぢや。
左金　何故とは覺えがあらう、その幻の傾城高尾、桂川の船中より下げ斬りにせし、妻の怨みを晴らさん爲め忍び入つた。斯く名乘りし上は用捨はない。夕しで、邪魔せずとそこ退け。
ト留めて、
夕し　イヤ〳〵、なんぼうでも爰は放さぬ。御二方ともにお主なり、この場に私が居合しては、お邪魔致さにやアなりませぬ。最前もあれほど言葉を盡した私が操、棄てさせる心か。モシ、聞分けて下さりませ。
頼兼　スリヤ、曲輪で言ひ替せし高尾が敵と、この頼兼を怨むぢやまで。
左金　言ふにや及ぶ。
ト思ひ入れ。
夕し　コレ、申し。
〽仇は情けの裏表。〽肌を合せの寢屋の戸に、音づれて

吹く秋の風。ほんに僅かな契りぢやものを。露も人には洩らさまじ。

頼兼　落花枝に返らず、破鏡再び照さず。歸らぬ高尾が怨みを含み、由なき其の身を捨てんより、再び浮田の家を起す所存はないか。○戀の道にも賢くて、武の道にはハテ、愚かなものぢやなア。

左金　ヤア、その嘲りも悔むに及ばず。所詮この身は埋れ木の、花咲く事もなき身なれば、猶豫するほど高尾が手前、エヽ、面倒な。

ト夕しでを振切り、頼兼へ掛る。夕しで支へる。左金吾引つけて膝に敷き、頼兼へ詰寄せ、高尾寄らうとする。

頼兼　ヤア、要らざる幽靈の支へ立て。消えぬか。馬鹿幽靈めが。

高尾　ハア。

ト思ひ入れ。緞張り障子をはつたと閉める。

左金　頼兼觀念。

ト切つける。立ち廻り。頼兼その白刃を打ち落し、左金吾を取つて押へる。夕しでもその手に縋る。

頼兼　動くな。

ト思ひ入れ。九つの時計鳴る。奥にて、

政元　細川修理之亮政元、申し上げたき仔細あり。

兩人　それへ參るでござらう。

と是にて頼兼思ひ入れあつて、左金吾を突き放す。

左金　こりや、この場にては。

ト奥にて、

皆々　管領の御入り。

ト管絃になり、是にて左金吾、夕しで、下の方へ小隱れする。奥より宗全、政元、鬼貫、彈正、數馬、左馬之助、侍二人出る。段々並みよく列ぶ。

頼兼　山名細川兩管領の御入り、先達つて承はつた。頼兼蟄居の館、無禮の段は御用捨下されい。イザ、一通り承はらう。

宗全　その仔細は餘の儀でござらぬ。其許身持放埒につき下館へ蟄居あつて、御子息鶴若どのへ御家督御相續致したく、御同苗大江之助鬼貫どの。執事仁木彈正左衞門を始め、一家中諸士の願ひ。

政元　則ち、鶴若どのへ家督仰せつけらるゝ上は、豫て禁廷より當館へ預け置かれたる、王城鎭護の錦の御旗、並びに足利家の系圖の一卷、叡覽に供へよと、傳奏の公卿

實相寺宰相卿を以つての感狀、依つて勝元參るべき所、折柄の所勞につき、斯く申す細川政元。

宗全　山名宗全發向致した。急ぎ二品とも、只今內見致すでござらう。

賴兼　ハツ。

ト俯向く。

宗全　御返言ござらぬは、仔細ばしござるか。

兩人　なんと。

賴兼　サア、その儀は。

ト差俯向く。彈正、賴兼が側へ寄り、

彈正　憚りながら我君。先達つてから數度御諫言申すは爰の事。今日只今に至つて申譯なき時は、鶴若どの家督の妨げ。君には如何思召しまする。

鬼貫　兄者人、賴兼公。

ト賴兼默つ　、差俯向いて居る。

數馬　御前さま。御返答仰ぎ願ひ奉りまする。

宗政　イザ、御返答承はらう。

賴兼　いかにも返答、致すでござらう。

ト合方になり、賴兼、羽織、衣裳を脫ぐ。白無垢無紋の上下になる。

皆々　是は。

宗全　扨て預かり奉る、錦の御旗紛失ゆゑ。

政元　御申譯の御生害でござるか。

賴兼　いかにも錦の御旗、家の系圖、二品ともに紛失致した。申し譯は斯くの通り。御兩所、篤と御覽下されい。

彈正　お出來しなされた我君。それでこそ御幼君鶴若君へ御家督。遖れ賢慮、御尤もに存じ奉りまする。

宗全　賴兼公。急ぎ御生害あつて、御身の仰せ分けられをなされい。

賴兼　ヲヽ、言ふにや及ぶべき。彈正左衞門、用意。

彈正　ハツ。

ト三寶へ腹切り刀を載せ、持つて出る。侍兩人、疊を持つて來て、裏返して敷き、その上へ白布を敷き、切腹の用意をする。賴兼こなしあつて此の上へ乘る。彈正三寶を直す。

數馬　スリヤ、どうござつても御生害。ホイ。

ト思ひ入れ。

彈正　お心からとは申しながら、淺ましい御有樣。仰せ置かるゝ事もござらば、彈正左衞門へ御遺言遊ばされませう。

頼兼　この期に及んで中置く儀もない。死生命あり、放埒惰弱に身を持ちし頼兼と笑はゞ笑へ、生涯□に終るこの身の本望。とは云へ残念なは領地の家來、片桐彌十郎に對面せず、生害なすが残念なわヤイ。

ト思ひ入れ。

鬼貫　兄弟のよしみ、この鬼貫が介錯してくれべい。

ト掛る。數馬支へる。立ち廻り。鬼貫、彈正にソレと目配せする。彈正、頼兼に掛る。頼兼居たまゝ突き廻す。この時、彈正懐中より一卷を落す。頼兼ちやつと是を取る。彈正は知らずに居る、侍の一、これを支へてしやんと留める。

宗全　頼兼、急いで。

皆々　御生害。

頼兼　イヤ、生害致すまい。

皆々　なんと。

宗全　生害せまいとは血迷うたか。

頼兼　イヤ、血迷ひもせぬ、亂心もせぬ。斯くあらんと思ひし故、覺悟と見せし死裝束、案に違はぬ彈正、鬼貫が、この頼兼を殺したがる不義不忠の振舞。宗全どのゝ目通りと云ひ、先づ切腹は止めに致さう。

彈正　コハ、心得ぬ御一言。御生害を勸むるは、鶴若君家督御相續させんため。

鬼貫　御旗紛失言ひ譯なけりやア、當家の斷絶。それにこの鬼貫、彈正左衛門を不義不忠とは。

頼兼　錦の御旗は紛失せぬぞ。

皆々　ヤ、なんと。

頼兼　國に盗人、家に鼠、國家に心をつける奴等、巧みの隙を探らん爲め、錦の御旗は豫てより頼兼深く籠め置いたわ。

ト懐中より錦の旗を出す。

彈正　それを。

ト寄る。頼兼振拂ひ。

頼兼　ハヽヽヽ、日月相應の錦の御旗。陪臣づれの手に觸れうや。たわけ者めが。

鬼貫　シテ、先達紛失したは。

頼兼　眞赤な僞せ物。

皆々　イヤア。

頼兼　高氏公より連綿たる足利の家の系圖、二品ともに僞物をとうから入れ替へ置くとも知らず、紛失させて頼兼にこの生害をさせうとは、能くもフカ〲と乘つたな

ア。
鬼貫　扨はこの系圖も僞物か。
　ト懷中より出し。
エヽ、忌々しい。
　ト一卷を捨てる。頼兼取り上げ。
頼兼　是こそ、誠の家の系圖。
鬼貫　ナニ、それが。
頼兼　古い奴だが、又乘つたな。
宗全　左程潔白な頼兼公、なぜ御放埒にお身を持崩され
た。
頼兼　心々の家中の心底、その善惡を計らん爲め。
鬼貫　ヤア、さうは言はさぬ。それにまた傾城高尾を身請
けなして、科なき者をなぜ殺した。
頼兼　曲輪へ入り込み見る處に、高尾が容貌世の常ならず、
正しく由ある人のものならんと、心を盡くし見る所に、
彼こそ赤松の一族。證據は彼が手蹟の流義。今傳圓流を
傳へしは赤松の一族、もし守立てんとする者あらんかと、
色に事寄せ請け出し、潜かに手に懸けしは國家の爲め。
政元　驚き入りたる頼兼公の御賢智。その秀才を持ちなが
ら、義政公の御病氣の砌、その賢命をもだしたる御所存
は。
頼兼　もとよりこの頼兼、足利の家に生れながら、閏月日
蝕の生れなれば、國家を知るべき棟梁ならず。天下の政
事を辭したるは、私ならぬ心の明白。猶も巧みは佞人ば
ら、一々詮議はこの連判。
　ト宗全、寄らうとする。政元さゝへ。
政元　お騒ぎあるな。宗全どの。
頼兼　騒ぎ廻るな仁木鬼貫。この連判が手に入るからは、
百萬年も生きる頼兼。東山の一番目に、この頼兼が生害
して堪るものか。
政元　その連判こそ天下の賜物。姓名一々詮議なさば、家
中の外にもこの內へ加はつた輩もあらうも。〇ナア、宗
全どの。身不肖なれども政元が名代に參るからは、勝元
が代りに、拙者、預かるでござらう。
宗全　イヤ、その連判は身共が預かる。
政元　然らば今日相役たる、政元が立ち合ひのこの所に於
て、姓名一々披見致さうか。
　ト宗全うろ〳〵する。
然れば、政元預かるでござらう。
鬼貫　彈正。是まで仕終せたと思つたら、こりやア、マア

どうしようなｏ

彈正　ハテ、宜うござる。頼兼公には御蟄居なり、御家督あるべき鶴若君には御死去なり、差詰め、ナ、ソレ。

ト思ひ入れ。

頼兼　ナニ、鶴若が如何致した。

鬼貫　ソレ〳〵、乳人政岡と男之助と言ひ合せ、毒を與へ殺して仕舞つた。

皆々　ヤ、、、。

彈正　今までは穏便にして居たが、モウ、破れかぶれだ。家督に立つる子がなけりやア、足利の家は差詰め鬼貫公。

鬼貫彈正　但し、断絶させる氣か。

頼兼　鬼貫はじめ彈正、其やうに苦勞に致すな。足利の家の世繼はまだ随分堅固で居るは。

彈正　アノ、扼殺に當りし鶴若君が。

頼兼　いかにも。疑はしくば政岡、鶴若を是へ。

ト奥にて。

政岡　ハツ。

ト早下り幕になり、鶴若、烏帽子、裝束つけ、太刀にて出る。政岡、裲襠、衣裳にて出る。子役二人、ついて出る。

皆々　こりやア、どうだ。

ト皆々呆れる。

鶴若　再び蘇生の鶴若、なんと伯父さま膽が潰れませう。

鬼貫彈正　エ、、忌々しい。

政元　心ならざる家中の心底。頼兼公の御胸の中、察し奉つてござる。

宗全　コリヤ、彈正左衛門。モウ、巧みの顯れし上、この催しは思ひ切り、〇思ひ切つて仕舞へ。

ト頼兼思ひ入れ。

頼兼　この上は鶴若丸が[illegible]日の參内。日月の御旗、家の系圖を相添へ、近日良辰の選み、伺ひまするござらう。宜しく執奏頼み存ずる。

政元　委細承知仕つてござります。

宗全　イザ〳〵、我々も罷歸りませう。

頼兼　鬼貫。見送り〳〵。

鬼貫　イザ、お立ちなされませう。

兩人　頼兼公。

頼兼　御兩所、御苦勞。

ト三重になり、宗全、政元、向うへはいる。跡より鬼

貫、ついて花道へはいる。鶴若先きに政岡、皆々、彈正、數馬、左馬之助、殘らず奧へはいる。賴兼公一人殘る。下の方より左金吾窺ひ出で。

左金　賴兼、觀念。

賴兼　ヤレ、逸まるまいぞ。

左金　逸るなとは、おくれたか。

賴兼　イヤ、臆れはせぬ。いふ事あり。

左金　何がなんと。

賴兼　傾城高尾は赤松が餘類、敵の根を絶ち葉を枯らすは天下の爲め、手に掛けしは私ならず。去りながら、それほど慕ふ心に愛でて、高尾が死骸、汝にくれう。

左金　ヤ。

ト賴兼、下座に向ひ。

賴兼　兩人參れ。

雷
夕し　畏まりましてござりまする。

ト下座より鶴之助、鎧櫃を持つて出る。夕しで、墨付を載せて出る。

雷　仰せに從ひ、持參。

兩人　致しましてござりまする。

賴兼　その内にこそ高尾が死骸。

左金　ナニ、この内に。

ト思ひ入れ。鶴之助、鎧櫃の蓋を開ける。高尾、中より顏を出し。

高尾　左金吾さん。

左金　そなたは高尾。

高尾　逢ひたかつたわいな〳〵。

左金　そんなら此の世に居やつたか。

ト鶴之助、蓋を閉め。

雷　コレ、高尾さまの幽靈が物を言つて詰まるものか。

賴兼　魂殘るその死骸。敵の餘類手に掛けし高尾は政事の表向き。

雷　桂川の三叉で、下げ斬になつた高尾さんに仲居のお時。

夕し　是こそ高尾さんの御戒名。

ト左金吾へ渡し。

左金　ドレ、ヤ、、、、こりや〳〵、浮田の家を再興の墨付。

賴兼　傳譽妙榮信女と云ふ、傳譽は譽れを傳へたる文字。

夕し　あまねく榮える御門出。

左金　何から何まで賴兼公のお志ざし。エ、忝ない。

頼兼　道の送りは鶴之助。兩家へ縁ある夕しで諸共。

雷　當座の施主なり。

夕し　仲人なり。

左金　そんなら直ぐ樣、頼兼公。

頼兼　急げ左金吾。

兩人　我君さま。

ト後ろへ彈正出掛かり。

彈正　頼兼、觀念。

ト切りつける。立ち廻り。頼兼、彈正を捩ぢ上げる。

三人　それは。

頼兼　構はずと行け。

三人　お去らば。

ト早三重になり、三人向うへはいる。舞臺は彈正振放し、頼兼と立ち廻り。しやんと見得にて。

頼兼　先づ、今日は是ぎり。

ちよん／＼／＼／＼。

幕

高尾宮本地開帳（終）

解説

傾城片岡山

伊原青々園

安永二年五月、江戸の湯嶋天神社地で聖德太子の開帳があつた。それを當込んで、江戸の三座とも七月狂言に太子の傳記を芝居に仕組んだ。中村座がこの「片岡山」で作者は中村重助である。市村座が「四天王寺曠供養」で作者は金井三笑、森田座は「宮柱巖舞臺」で作者は壕越菜陽である。このうちで第一の當りが森田座、第二が中村座、第三が市村座であつた。

この時に中村重助のワキ作者は櫻田治助であつたから、何の幕かを治助も書いたに違ひないが、ハッキリ分からない。聖德太子の傳記に富士淺間を書き込み、二番目は大阪を背景にした世話になつて、物部守屋の娘が岩井風呂のおことなり兄殺しをする筋になつて居る。本文は鈴木白藤舊藏の寫本に據つたが、その底本は九册のうちが四册しか無いので全部を傳へる事が出來ないのを遺憾とする。その缺けて居る所は、一番目の大詰の前の二幕目即ち四立目、これが片岡山の場であらうと思ふ。それと、二番目の序幕の次ぎである。尤も序幕の末に「まづ今日はこれぎり」としてあるから、あれで完結したやうに見えるけれど、事實はさうでない。此の狂言の初日が七月十五日であつたが、八月九日から更に二番目を出し、同月二十日から又その跡幕が出た。其の跡幕までを加へて九册つゞきになるのであらう。

主なる役割を擧げると

聖德太子（市川門之助）物部の守屋、奴伊達平 實ハ物部の小坂（中嶋三甫右衛門）蟲賣 實ハ乳守の傾城梅ヶ枝（小佐川常世）淺間次郎照時（市川雷藏）跡見の赤擣（坂東又太郎）富士左京之進行俊、女衛舍利ほつの傳八（大谷友右衛門）檢非違使勝船 後に大野林右衛門（市川純右衛門）菅の郡領娘みそぎ、後に仲居おさの 實ハ左り甚五郎妹小女郎（佐野川市松）岩井風呂のかしく 實ハ守屋娘しらゆふ（岩井半四郎）富士左京之助行家（市川八百藏、淺間左衛門照政、提婆の仁兵衛 實ハ菅の郡領の子次郎豐勝（松本幸四郎）淺間左衛門女房みのり（芳澤崎之助）曾我の馬子大臣（中村少長）左り甚五郎（市川海老藏）

助六曲輪名取草

天明二年の春狂言「七種粧曾我」の二番目大詰として、五月五日から演ぜられたもので、作者は櫻田治助である。現に今日も舞臺に演ぜられる「助六」の芝居は、多少省略されては居るが、この脚本をつかつて居る。二代目團十郎がはじめて助六に扮してから、いろ〳〵の作はあるけれど此れに至つて全く大成されたといつて宜い。當時初演の役割は

三浦屋の揚卷（中村里好）同白玉（澤村歌川）遣手お辰（中島傳五郎）三浦屋息子長吉（市川升藏）朝顏千平（中嶋三甫藏）曾我滿江（松本小次郎）くわんぺら門兵衛（尾上松助）白酒賣七兵衛 實ハ曾我十郎祐成（澤村宗十郎）髭の意休 實ハ伊賀の平内左衛門（中村仲藏）花川戸の助六 實ハ曾我五郎時政（五世市川團十郎）この時は淨瑠璃は江戸半太夫連中であつた。

千代始音頭瀨渡

近松が淨瑠璃に書いた毛剃九右衛門を歌舞伎の舞臺へ移したは、安永二年七月、大阪の角の芝居で演じた並木十輔の作「和訓水滸傳」が始めである。その時に毛剃九右衛門と兄後平次を淺尾爲十郎、小松屋惣七を小川吉太郎、島の小平次を中山文七、小女郎を山科甚吉がつとめた。それから九年過ぎて、天明五年七月、江戸の桐座で、瀨川如皐と寶田壽來との書いた此の作が演ぜられた。つまり江戸に於ける毛剃の狂言の最初で、毛剃は玄海灘右衛門といふ名前に變へて、元祖中村仲藏が扮した。元船で惣七を海へ投込む所と、博多の女郎屋とは殆ど原作そつくりであるが、その前に今川家の御家騷動をくつゝけたり、毛剃にあたる灘右衛門の本名を三韓の王にしたり、異國へ漂流した船頭檜垣五郎兵衛の世話場を加へたりしたのは、一種の創作といつて宜い。尤も其等の繼ぎ足しは、大阪で演じた脚本が參考にもなり、また粉本になつたに違ひないと思ふ。大阪の分に嶋の小平次と後平次の役があるやうに、こつちにも檜垣の五郎兵衛と後五郎兵衛とがあるのを見ると、或ひは同じ筋であつたかも知れない。

主なる役割は

船頭檜垣の五郎兵衛（大谷廣次）今川巳之助、勅使一學 實ハ笹野才藏（市川高麗藏）小松屋惣七（市川門之助）都築監物、後五郎兵衛（坂田半五郎）奴文字助（瀨川吉次）荒川藏人（中村十藏）五郎兵衛母　山科四郎十郎）五郎兵衛女房お波（小佐川常世）傾城玉波（中

山富三郎）才藏女房松が枝（吾妻藤藏）傾城小女郎（瀨川菊之丞）海賊玄海灘右衛門 實ハ三韓王李榮仲（中村仲藏）

これも鈴木白藤舊藏の寫本に據つたが、原本に四立目（第二幕）の口がそつくりと、及び二番目の第二幕以下が缺げて居るので、殘念ながら其の儘にした。

それから白藤本には書入れがあつて、當時見物した感想がしるしてある。それを茲に抄錄すると、高麗藏の笹野才藏が似せ勅使から替つて、古小袖のなりで乘物の戶から出る所に、

「此時、高麗藏初て百日かつらを著る、顏色うつり甚だよしとて直に顏見世、男山振袖源氏に末武（卜部）にて百日なり、それより折々百日かつらなりしが、終に敵役と成る。今は幸四郎（五代目）なり。」

としてある。さすれば此れが五代目幸四郎の出世藝と言つても宜いのであらう。

元船で、仲藏の灘右衛門が門之助の惣七から、博多の廓噺を聞かされる處に、

「この門之助が仕形話をするを、仲藏面白さうに聞くこと妙々。」

終に相手の女郎は小女郎だと聞いて「やかましいわい」と急に灘右衛門が怒號する所に、

「仲藏顏色變る所甚妙。」

とある。此の場は灘右衛門がよつぽど、うまかつたと思はれる。

博多の女郎屋になつて、灘右衛門が小女郎に惣七を引合はさして、二人が互ひに顏を見合せて思入する所に、

「仲藏甚妙。」

それから、灘右衛門が大勢の手下を奧へやつて、惣七と上み下もに附け廻る所に、

「この時、門之助一向不出來。舞臺は秀鶴（仲藏）一人ばかりの樣なり。この役惣七に八百藏か宗十郎ならば、かやうには落ちまじくといふ評判なり、去る巳の顏見世、關の戶も、門之助（宗貞の役）影もなかりしが、此時も同じ。近來惣七を團藏、九右衛門を白猿（七代目團十郎）小女郎を大太夫（五代目半四郎）なりし時には、白猿一向に見られず。只西國言葉ばかりはよく寫せしといふ評判なり。」

とある。門之助の小松屋惣七はよつぽど不出來であつたらしい。

尙ほ七代目團十郎が團藏と半四郎とで毛剃をつとめたは天保八年で、それが當人には三度目である。最初が文化十一年七月の市村座であつたが、その時はやはり玄海灘右衛門といふ役名である。二度目の天保五年から以後は原作の

通り毛剃九右衛門で演じた。しかし右の書入れが正しいとすると、仲藏のを見た眼には大分劣つて見えたらしい。

猿若萬代厦（さるわかはんぜいぶたい）

天明六年三月十五日から、江戸の中村座で演じた脚本で、作者は中村重助である。同年正月の曾我狂言を開演してから七日目に類燒したので、これは新築の舞臺開きの興行である。「萬代厦」といふのは其れを祝した意を寓したのであらう。主なる割役は、

奴小野平實は武智左馬五郎、山崎與左衛門（大谷廣次）高階大膳（大谷廣右衛門）加藤虎之助正淸（坂東又太郎）北條五郎氏直（坂東三八）座頭佐渡市（嵐音八）傾城藤屋吾妻（佐野川市松）藏人子息愛護の若、與次兵衛女房お菊（中山富三郎）鳰照姫（山下かるも）女飴賣、荒木左衛門妻田畑（小佐川常世）二條奥方雲井御前、傾城藤屋みやこ（三桝德次郎）二條家臣早苗之助、南與兵衛（市川八百藏）山崎與次兵衛（澤村宗十郎）獵師手白の猿又實ハ二條の梅丸（中山小十郎）

この中山小十郎といふのは、中村仲藏が丁度前年十一月に改めた名前で、それが座頭である。一番目は愛護若を中心にした二條家のお家騷動で、小十郎の手白の猿又と廣次の小野平とが對立した主役である、二番目は「双蝶々」の世界であるが近松の「壽の門松」の桝落しが書込んである。宗十郎の山崎與次兵衛に市松の吾妻が一對、小十郎の花形數馬と廣次の山崎與左衛門とが、丁度「壽の門松」の山崎淨閑と橋本治部右衛門の穴を行つて居る。創作の才は認められないが、舊い物を新しく書直した手際は相應に働いて居る。しかし當時、此の狂言は評判がわるくて、不入だつたさうである。

大詰の與次兵衛狂亂の淨瑠璃は富本豐前太夫の出演で、その淨瑠璃名題は「道行色のいの字」といつた。本書には其の詞章の全文が載せてない。「いの字」といふは、與次兵衛をつとめた宗十郎の紋所をきかしたのであらう。

高雄宮本地開帳（たかをのみやほんぢかいちやう）

天明八年九月九日から江戸の桐座で演じた作である。作者は瀨川如皐である。

高尾宮といふのは隅田川の岸にあつた祠で、仙臺侯に三つ叉で斬られた遊女高尾を祀つたといふ俗說がある。中村座も桐座も、同時に此の宮を名題にうたつて伊達の狂言を演じたのは、この時に何かの理由で立派な御祭でもあつた爲かと思はれる。主なる役割は

足利鶴若丸（市川海老藏）浮田左金吾、渡邊民部（坂東三津五郎）關取いかづち鶴之助（大谷德次）足利大江之助鬼貫（市川升五郎）藝者歌野 實ハ民部妹秋篠（吾妻藤藏）熊田源五郎女房夕しで（佐野川萬菊）豆腐屋戸平、山名宗全（嵐龍藏）修驗者磐若院萬海（松本鐵五郎）戸平弟與五郎、細川政元（市川高麗藏）仁木彈正左衞門（大谷廣右衞門）羽生村の累が娘お菊、政岡の局（岩井半四郎）傾城高尾、豆腐屋下女お園 實ハ賴兼眞方玉園御前（瀨川菊之丞）足利賴兼、荒獅子男之助（市川團十郎）

こゝに收めたのは四幕で終つて居るが、更に九月九日から演じた此の二番目が碑文谷仁王の場と常磐津の淨瑠璃と二幕ある。役割だけを玆に記して參考に供へる。

いかづち鶴之助（大谷德次）馬士喜藏（岩井眼平）百姓松藏（市川仙藏）岩淵平馬（宮崎十四郎）大江之助鬼貫（市川升五郎）いかづち女房おいち（吾妻藤藏）豆腐屋戸平（嵐龍藏）羽生村の與五郎（市川高麗藏）玉園御前（瀨川菊之丞）はなし鳥賣雀の忠兵衞（市川團十郎）

淨瑠璃「秋色姿菊蝶」常磐津文字太夫連中（龍藏、高麗藏、菊之丞）

尙ほ本書の挿繪は初演の繪草紙から採つたのであるが、脚本の本文と役名の違つて居る所がある。例へば土橋の場の菊之丞の役が本文にはお園で繪には菊の井となつて居る。また豆腐屋戸平の母が女房になり、熊田の女房の秋篠が文字摺になつて居る。いづれが正しいか編者も取捨に迷ふ。

本文は鈴木白藤舊藏の寫本に據る。

本卷挿入の圖版は守隨憲治、秋葉芳美兩氏編の「歌舞伎圖說」、吉田暎二氏の「歌舞伎役者繪畫集」、井上和雄氏の「歌舞伎畫集」より其の資料を獲たものが多い。尙ほ秋葉氏はその他にも所藏のものを提供してくれられた。こゝに記して謝意を表する。